AC
145
G856
1923
v.14
pt.1

Zoku Gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

續群書類從

第拾四輯上

東京
續群書類從完成會

LIBRARY
AUG 21 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

AC
145
G856
1923
v.14
pt.1

續群書類從第拾四輯上目次

和歌部

卷第三百六十六
金葉和歌集奏覽本……一
卷第三百六十七
金葉和歌集初度本……四三
卷第三百六十八
月詣和歌集……八八
卷第三百六十九
東撰六帖……一五〇
卷第三百七十
拾遺風躰和歌集……一六八
卷第三百七十一
安撰和歌集……一九六
卷第三百七十二
菊葉和歌集……二二八
卷第三百七十三
飛月集……三〇三
卷第三百七十四
二八要抄自古今至續後拾遺……三一四
卷第三百七十五
中古六歌仙……三六二
秀歌大略……三七四
自讃歌……三七九
新百人一首……三八五
卷第三百七十六
爲相卿千首……三九一
卷第三百七十七
雅縁卿千首　欠
卷第三百七十八
耕雲千首……四二一
卷第三百七十九
榮雅千首……四七〇

續群書類從卷第三百六十六

總檢校保己一集

男　源忠寶　校

和歌部一

金葉和謌集第一 奏覽本 春九十七首

はつ春のこゝろをよめる　源重之

よしの山峯の白雪いつ消てけさは霞の立かはるらん

堀河院御時百首の歌めしけるに元日のこゝろをつかうまつれる　修理大夫顯季

打なひき春は來にけり山川の岩間の氷けふやとくらん

天德四年內裏の歌合によめる　中納言朝忠

くらはしの山のかひより春霞年をつみてや立渡るらん

平兼盛

ふる里は春めきにけりみ吉野のみかきの原も霞こめたり

少將公敎母

あさ綠かすめる空のけしきにや常盤の山は春をしるらん

藤原顯輔朝臣

年とにかはらぬものは春霞たつたの山のけしきなりけり

正月一日に雪のふりはへりけるをよみてつかはしける　修理大夫顯季

あら玉の年のはしめに降しけは初雪とこそいふへかりけれ

返し　春宮大夫公實

あさと明て春の梢の雪みれは初花ともやいふへかるらん

春の雪をよめる　曾根好忠

雪消はゑくのわかなも摘へきに春さへ晴れぬみやまへの里

天德四年內裏の歌合によめる　源順

こほりたにとまらぬ春の谷風にまた打とけぬ鶯の聲

平兼盛

わかやとに鶯いたくなくなるは庭もはたらに花や散らん

初鶯と云ことをよめる　春宮大夫公實

けふよりや梅の立枝に鶯の聲里なるゝはしめ成らん
百首の歌のなかに鶯のこゝろをよめる　修理大夫顯季
鶯の鳴につけてやまかれふくきひのなか山春を知らん
む月の十日ころに春たちけるにうくひすのなく
を聞てよめる　藤原顯輔朝臣
(ヤイ)けふはさは雪打とけて鶯のみやこへいつる初音なるらん
天德四年内裏の歌合によめる　中納言朝忠
我宿の梅か枝になく鶯は風のたよりに香をやとめこし
平兼盛
しろ妙の雪ふりやまぬ梅か枝に今そ鶯はるとなくなる
家の柳にうくひすのなくをきゝてよめる
大納言道綱母
我やとの柳のいとはほそくともくる鶯のたえすもあらなん
しのひて物へまかりけるに左大弁經頼か家の梅さ
かりに咲たりけれはかとにひれもすに立やすらひ
くらして夕方さふらひのたちいてゝいかなる人そ
とおやしけにおもひてたつねけれは主に申せとお
ほしけにていひかけゝる歌　良暹法師
梅の花匂ふあたりはよきてこそいそく道をは行へかりけれ
梅花夜薫といへるとをよめる　前太宰大貳長房
うめかえに風や吹らむ春の夜はをらぬ袖さへ匂ひぬる哉
朱雀院に人々まかりて閑庭梅花といへるこゝろをよ
める　大納言經信
けふこゝに見にこさりせは梅の花ひとりや春の風に散まし
梅花をよめる　源忠季
かきり有てちりはゝつとも梅の花風は(かをは(流布本))梢にのこせとそ思ふ
道雅卿家歌合に梅花をよめる　藤原兼房朝臣
散かゝる影はみゆれと梅の花水にはかこそうつらさりけれ
鷹司殿の賀の屏風に子日したるかたかけるところ
をよめる　赤染衛門
萬代のためしに君かひかるれは子の日の松もうらやみやせん
六條内裏にて子日せさせ給けるによめる
大納言經信
九重のみかきか原の小松原千代をはほかのものとやはみる
子日のこゝろをよめる　大中臣公長朝臣
春日野の子日の松はひかてこそ神さひ行むかけにかくれめ
百首の歌のなかに子日の心をよめる　大藏卿匡房
春霞たちかくせとも姫小松ひくまの野へに我は來にけり
子日のこゝろをよめる　源道濟
姫小松おほかる野へに子日して千代を心にまかせつる哉
柳糸隨風といへる事をよませ給ひける

風ふけは柳の糸のかたよりになひくにつけて過るはるかな

百首の歌のなかに柳をよめる　春宮大夫公實

朝またき吹來る風にまかすれはかたよりしける靑柳のいと

池岸の柳といへることをよめる　源雅兼朝臣

風吹は浪のあや織池水にいとひきそふるきしの靑柳

天德四年内裏の歌合によめる　平兼盛

棹姫のいとそめかくる靑柳を吹なみたりそ春の山かせ

故鄕殘柳をよめる　源道濟

古里のみかきの柳はるゝとたか染かけし淺みとりそも

呼子鳥をよめる　前齋院尾張

いとか山くる人もなき夕暮に心ほそくもよふこ鳥かな

歸雁をよめる　藤原經通

今はとてこしちに歸る雁かねはゝねもたゆくや行かへるらん

雲裏歸雁といへることをよめる　藤原成通朝臣

こゑせすはいかてしらまし春霞へたつる空にかへる雁かね

花薫風といへることをよめる　攝政左大臣

よしの山峯の櫻や咲ぬらんふもとのさとに匂ふ春風

白河の花見御幸によませ給へる　新院御製

尋れつるわれをや花も待つらむ今そさやかに匂ひましける

太政大臣

白河のなかれひさしき宿なれは花の匂ひものとけかりけり

人にかはりてよめる　太宰大貳長實

ふく風も花のあたりは心せよけふをは常の春とやは見る

源雅兼朝臣

年ことに咲そふ宿の櫻花猶行末のはるそゆかしき

宇治前太政大臣の京極の家の御幸によませたまへる　院御製

春霞たちかへるへきそらそなき花の匂ひに心とまりて

遠山櫻といへることをよめる　春宮大夫公實

しら雲と遠の高根にみえつるは心まとはす櫻成けり

南殿の櫻をよませ給へる　花山院御製

わかやとの櫻なれとも散時は心にえこそまかせさりけれ

内大臣白河のはなみになんまかるといはせてはへりけれはつかはしける　小式部内侍

春のこぬところはなきを白河のわたりにのみや花は咲らん

宇治前太政大臣の家の歌合によめる　源俊頼朝臣

山櫻さきそめしより久方の雲井にみゆる瀧の白いと

新院御方にて花契遐年といへることをよめる　待賢門院中納言

白雲にまかふ櫻の梢にてちとせの春をそらにしるかな

人々にさくらの歌十首よませはへりけるによめる　修理大夫顯季

さくら花咲ぬるときはよしの山たちものほらぬ峯の白雲
山花留人といへるをよめる　大中臣公長朝臣
なのゝえはこの木にてや朽なまし春をかきらぬ櫻なりせは
修行にいてさせたまひけるとき花のもとにてよませたまへる（とイ）　花山院御製
この木をすみかにすれはおのつから花みる人に成ぬへき哉
遙見山花といへるをよめる　大藏卿匡房
はつせ山雲ゐに花の咲ぬれは天の河波立とこそみれ
堀河院御時女御の御かたの女房あまたくして花みありきけるによめる　前齋宮筑前乳母
春をにおかぬ匂ひな櫻はないかなる風のをしまさるらむ
人にかはりてよめる　僧正行尊
よそにてはをしみにきつる山櫻折らては（らさりしイ）えこそ歸るましけれ
後冷泉院の御とき皇后宮歌合櫻をよめる　堀河右大臣
春雨にぬれてたつれん山櫻雲のかへしのあらしもそふく
月前花をみるといふ心をよめる　大藏卿匡房
月かけに花みるよはの浮雲は風のつらさにおとらさりけり
水上落花をよめる　源雅兼朝臣
花さそふあらしや峯を渡るらんさくらなみよる谷川の水
山花をたつれにまかりてかへさに人々手ことにを
りてかへるを　藤原登平
やま櫻手ことに折てかへるなは春の行とや人はみるらん
奈良の八重櫻を内にもてまゐりたるを[illegible]へ御覽して歌とおほせとありけれはつかふまつれる　伊勢大輔
いにしへのならのみやこの八重櫻けふ九重に匂ひぬる哉
落花滿庭といへるをよめる　左兵衛督實能
けさみれは夜はのあらしに散はてゝ庭こそ花の盛なりけれ
顯仲朝臣の八條にて人々十首の歌よみけるに花の心をよめる　源俊賴朝臣
おのれかつちるを雪とや思ふらんみのしろ衣花もきてけり
落花の心をよめる　長實卿母
春をにおなし櫻の花なれはをしむこゝろもかはらさり鬼
水上落花といへるをよめる　大納言經信
水上にはなや散らむ山河のゐくひにいとゝかゝろしらなみ
落花散衣といへるをよめる　藤原永實
散かゝるけしきは雪の心地して花には袖のぬれぬなりけり
堀河院御時花の散たるをはきあつめておはきなるものゝふたに山のかたちをつませたまひて中宮御方にたてまつらせたまひたりけるをみや御覽して歌よめとおほせとありけれはよみはへりける

櫻はな雲かゝるまてかきつめてよしのゝ山とけふはみる哉　御匣殿

花の庭にちりつもりたるをみてよめる　郁芳門院安藝

庭のはなもとの梢にふきかへせちらすのみやは心なるへき

天德四年内裏の歌合によめる　大中臣能宣朝臣

櫻はなかせにしちらぬ物ならは思ふことなき春にそあらまし

白河のはなみにまかりたりけるに散をみてよめる　源俊頼朝臣

身にかへて惜むにとまる花ならはけふや我世の限ならまし

夜思落花といふをよめる　隆源法師

衣手にひろはちりつむ櫻花よるは心にかゝるなりけり

春ものへまかりけるに山田つくるをみてよめる　高階經成朝臣

櫻さく山田をつくるしつのをはかへすがへすや花をみる覧

花のちるを見てよめる　藤原隆頼

さくら花またみんことも定なきこよひそ風も心してふけ

後冷泉院の御時月のあかゝりける夜女房たちをく
して南殿にわたらせ給ひたりけるに庭の花かつち
りておもしろかりけるを御覽してこれを見しりた
らん人にみせはやとおほせを有て中宮の御方にし
もつけやあらんとめしにつかはしたりければまゐ
りたりけるをあのはな折てまゐれとおほせことあ
りければをりてもてまゐりけるをたゝにてはいか
にと宣旨ありければよみ侍りける　下野

なかきよの月の光のなかりせは雲井の花をいかてをらまし

新院の北面にて殘花薰風といへることをよめる　權中納言雅定

散はてぬ花のあたりをしらすれは厭ひし風そけふは嬉しき

百首歌中に杜若をよめる　修理大夫顯季

東ちのかほやかぬまのかきつはた春をこめても咲にける哉

三月三日桃花を見てよめる　經信卿母

山かつの園生にたてる桃の花すけりなこれを植てみけるも

春田をよめる　大納言經信

あら小田に細谷川をまかすれはひくしめ繩にもりつゝそ行

苗代をよめる　津守國光

鴫のゐる野澤の小田を打かへし種蒔てけりしめはへてみゆ

後冷泉院御時弘徽殿女御歌合によめる　藤原隆資

山さとのそとものの小田の苗代に岩まの水をせかぬ日そなき

寛和二年花山院歌合によめる　藤原長能

ひとへたにあかぬ心をいとゝしく八重かさなれる山吹の花

蛙なくゐてのわたりに駒なへて行てにもみむ山ふきの花　藤原惟成

水邊欵冬をよめる　攝政左大臣

かきり有てちるたにをしき山吹をいたくな折そ井出の河波

天德四年麗景殿女御歌合によめる　讀人不知

八重咲るかひこそなけれ山吹の散は一重もあらしと思へは

宇治入道前太政大臣のもとよりかゝる八重やまふきはみたりやとかゝれたりけるをみてつかはしける　大納言道綱母

たれかこの數はさためし我はたゝとへとそ思ふ山吹の花

晩見躑躅といへることをよめる　攝政家參河

入日さすゆふくれなゐの色みえて山下てらす岩つゝし哉

屏風の繪に人の家に藤花咲たるところをみてよめる　大納言公任

紫の雲とそ見ゆる藤の花いかなるやとのしるし成らむ

院北面にて橋上藤花といへることをよめる　大夫典侍

色かへぬ松によそへてあつまちの常盤の橋にかゝる藤波

坊の藤の盛なるをみてよめる　律師增覺

くる人もなきわかやとの藤の花誰を待とて咲かゝるらむ

紫藤隱松といへることを　良暹法師

松風の音せさりせは藤なみをなにゝかゝれる花としらまし

二條關白家にて池邊藤花といへることを　大納言經信

池にひつ松のはひえに紫のなみおりかくる藤咲にけり

百首の歌のなかに藤花をよめる　修理大夫顯季

住吉の松にかゝれる藤の花風のたよりになみやおるらん

雨中藤花といへることをよめる　神祇伯顯仲

ぬるゝさへ嬉しかりけり春雨に色ます藤のしつくと思へは

三月盡の心をよめる　僧都證觀

春の行みちにきむかへ郭公かたらふ聲にたちやとまると

源雅兼朝臣

のこりなく暮ぬる春をゝしむまに心をさへもつくしつる哉

三月盡に戀のこゝろをよせてよめる　内大臣

春はをし人は今宵とたのむれは思ひわつらふけふの暮哉

三月盡の心をよめる　藤原定成朝臣

幾かへりけふに我身のあひぬらん惜むは春の過るのみかは

天德四年内裏歌合に暮春のこゝろをよめる　中納言朝忠

花たにも散て別るゝ春ならはいとかくけふを惜まさらまし

攝政左大臣の家にて三月盡のこゝろをよみはへりける　源俊頼朝臣

歸る春卯月のいみにさしこめて暫しみあれの程たにもみん

金葉和歌集第二　夏五十首

天德四年内裏歌合に夏のはしめをよめる　中務

夏衣たちきるけふは花櫻かたみの色をぬきやかふらん

更衣の心をよめる　源師賢朝臣

我のみそいそきたゝれぬ夏衣ひとへに春をゝしむ身なれは

二條關白家にて人々餘花のこゝろをよみはへりける　藤原盛房

夏山の靑葉ましりの遲櫻はつはなよりもめつらしきかな

應德三年四月内裏にて庭樹結葉といふ事をよませ給へる　院御製

おしなへて梢靑葉に成ぬれは松のみとりもわかれさりけり

大納言經信

たまかしは庭もはひろに成ぬれはこやゆふしてゝ神祭る頃

四月神祭のこゝろをよめる　永成法師

やかつ神祭れる宿のしるしにはならの廣葉のやひらてそ散る

鳥羽院殿にて人々卯花の歌よみけるに　春宮大夫公實

雪の色をうはひて咲る卯花に小野の里人冬こもりする

卯花連垣といへる事を　大藏卿匡房

いつれをかわきてとはまし山里のかきねつゝきに咲る卯花

題不知　源相方朝臣

年を經てかよひなれにし山里の門とふはかり咲る卯花

江侍從

雪としもまかひもはてし卯花はくるれは月の影かともみゆ

攝政左大臣

うの花のさかぬ垣れはなけれともなになかれたる玉川の里

卯花たかゝきれそといへる事をよめる　權中納言實行

神山のふもとに咲るうの花はたかしめゆひし垣れ成らん

題不知　大納言經信

賤のめかあしひたくやも卯花の咲しかゝれはやつれさり見

郭公をよめる　修理大夫顯季

みやまいてゝまた里なれぬ郭公たひの空なるねをや鳴らん

ほとゝきすをたつぬといへる事をよめる　藤原節信

けふもまた尋れくらしつ郭公いかて聞へき初音なるらん

郭公の歌十首人々によませはへりけるついてに　攝政左大臣

郭公すかたは水にやとれとも聲はうつらぬ物にそありける

權中納言實行卿の家の歌合に郭公をよめる　左京大夫經忠
年ときくとはすれと郭公聲はふりせぬ物にそありける
ほとゝきすをよめる　藤原顯輔朝臣
郭公心もそらにあくかれて夜かれかちなるみ山へのさと
承暦二年内裏歌合に郭公をよめる　藤原孝善
郭公あかて過ぬる聲により跡なき空をなかめつるかな
郭公をよめる　權僧正永縁
聞たひにめつらしけれは郭公いつも初れの心地こそすれ
天德四年内裏歌合にほとゝきすをよめる　坂上望城
ほのかにも鳴渡るなる郭公み山をいつる夜半のはつ聲
待郭公といへるをよませ給へる　院御製
郭公まつにかゝりてあかすかな藤の花とや人はみるらん
俊忠卿家歌合に郭公を　中納言女王
郭公ほのめく聲をいつかたと聞まとはしつ明ほのゝ空
郭公をよめる　前齋院六條
宿近くしはし語らへほとゝきす待夜の數のつもるしるしに
長實卿の白河にて人々歌よみけるに郭公をよめる　源俊頼朝臣
おとせぬはまつ人からか郭公誰をしへけむ數ならぬ身と

宇治前太政大臣家歌合に郭公をよめる　康資王母
山近くうらこくふれは郭公なくわたりこそとまり成けれ
郭公をよめる　皇后宮式部
ほとゝきす雲のたえまにもる月の影ほのかにもなき渡る哉
曉郭公をよめる　源定信
わきもこにあふさか山の郭公あくれはかへるそらに啼なり
雨中郭公をよめる　大納言經信
郭公雲路にまよふ聲すなりをやみたにせよ五月雨の空
題不知　花山院御製
宿近くはなたち花はほりうゑし昔をこふるつまと成けり
永承四年殿上歌合にあやめをよめる　大納言經信
萬代にかはらぬものは五月雨のしつくに薫るあやめ成けり
郁芳門院根合によめる　藤原孝善
あやめ草ひくてもたゆく長きねのいかて淺かの沼に生らん
みやつかへしけるむすめの許に五月五日くす玉つかはすとて　權僧正永縁母
あやめ草我身のうきを引かへてなへてならぬに思ひ（生イ）も出なん
あやめのねなきを宇治入道太政大臣のもとより遣したりけるをみてよめる　高松上
長しともしらすやねのみなかれつゝ心の中に生るあやめは

五月五日家にあやめふくをみてよめる

右近府生秦兼文

同しくは調へてふけあやめ草五月雨たらはもりもこそすれ

五月雨のこゝろをよめる　藤原定通

さみたれはひかすへにけり東やのかやか軒はの下朽るまて

承暦二年内裏歌合に五月雨をよめる

源道時朝臣にかはりて　大納言經信

さみたれに玉江の水やまさるらんあしの下葉のかくれ行哉

俊忠卿家歌合にさみたれをよめる　藤原顯仲朝臣

五月雨に水増るらしさはた河まきのつきはし浮ぬはかりに

題不知　三宮

五月雨に入江の橋の浮ぬれはおろすいかたの心ちこそすれ

攝政左大臣家にて夏月をよめる　神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしく白雪は月のいるこそきゆる成けれ

俊忠卿家歌合に水鷄をよめる　藤原顯綱朝臣

里とにたゝく水鷄の音すなり心のとまるやとやなからん

攝政左大臣家にて水鷄をよめる　源雅光

よもすからはかなく叩く水鷄哉させるともなき柴の假やを

實行卿家歌合に野風をよめる　修理大夫顯季

夏衣すそ野のくさを吹風におもひもあへす鹿や鳴らん

照射をよめる　橘俊綱朝臣

灯してはこれの山に明にけりふたよりみよりあふとせしまに

源仲正

澤水にほくしの影のうつれるをふたともしとや鹿はみるらん

天徳四年内裏歌合によめる　壬生忠見

夏草のなかを露けみかきわけてかる人なしに茂るのへ哉

夏夜月をよめる　源親房

玉くしけふたかみ山の雲間よりいつれはあくる夏の夜の月

納涼のこゝろをよめる　曾根好忠

杣河のいかたのとこのうき枕夏はすゝしきふしとなりけり

二條關白家にて雨後草花といへることを　源俊頼朝臣

此里も夕立しけり淺ちふに露のすからぬ草の葉もなし

六月廿日ころに立秋の日人のもとにつかはしける　攝政左大臣

水無月のてるひの影はさしなから風のみ秋の氣色成かな

六月秡の心をよめる　源有政

御秡する河せに立るゐ杭さへすかぬきかけてみゆるけふ哉

金葉和謌集第三　秋百十一首

大江爲基攝津の任はてゝのほりけるのち初秋の日

つかはしける　僧都清胤

君すまはとはまし物を津の國のいく田の森の秋の初風

百首歌の中に立秋のこゝろをよめる　春宮大夫公實

とことはに吹ゆふ暮の風なれと秋立日こそすゝしかりけれ

野草帶露といへるとをよめる　太宰大貳長實

まくてはふあたの大野の白露を吹なみたりそ秋の初風

後冷泉院御時皇后宮春秋歌合に七夕のこゝろをよ
める　土佐内侍

萬代に君そみるへきたなはたのゆきあひの空を雲の上にて

七夕の心をよめる　能因法師

七夕の苔の衣をいとはすは人なみ〳〵にとひもしてまし

七月七日父の服にてはへりけるとしよめる　橘元任

藤衣いみもやするとたなはたにかさぬにつけてぬるゝ袖哉

七夕の心をよめる　前齋宮河内

こひ〳〵て今宵はかりやたなはたの枕に塵のつもらさる覽

三宮

天の河わかれに胸のこかるれはかへさの舟は揖もとられす

權中納言國信

七夕にかせる衣のつゆけさにあかぬけしきを空にしる哉

題不知　小大君

七夕にかしつと思ひしあふとをその夜なき名の立にける哉

皇后宮權大夫師時

七夕のあかぬわかれの涙にや花のかつらも露けかるらん

内大臣家越後

天の河かへさの舟に波かけよ乘わつらはゝほともふはかり

宇治へまかりけるにみちにたこの水ひきけるをみ
てかくなんと申ければ入道前太政大臣みにまかり
たりけるに水も見えさりければいかにとたつねけ
るに七月七日にあたりければよめる　菅野爲言

ひく水もけふ七夕にかしてけり天の河瀬にふなゐすなとて

七夕をよめる　宇治入道前太政大臣

ちきりけん程はしられと七夕のたえせぬけふの天の河風

八日のこゝろをよめる　高階俊平

稀にあふわれ七夕の身なりせはけふの別をいきてせましや

草花告秋といへるとをよめる　源緣法師

咲にけりくちなし色の女郎花いはねとしるし秋のけしきは

師賢朝臣の梅津に人々まかりて歌よみけるに田家
秋風といへるとをよめる　大納言經信

夕されはかとたの稲はおとつれて芦のまろやに秋風そ吹

長恨歌の心をよめる　源道濟

思ひかねわかれし野へをきてみればあさちか原に秋風そ吹

ゆふつくよをよめる　大江公實朝臣

山のはにあかす入ぬるゆふ月夜いつ有明にならんとすらん

遍照寺にて秋晩のこゝろをよめる　藤原範永朝臣

住人もなき山里の秋の夜は月の光もさひしかりけり

寛和二年内裏歌合に月をよませたまへる　花山院御製

秋の夜の月に心はあくかれて雲井に物を思ふころかな

題不知　中原長國

月にこそむかしのことはおほえけれ我を忘るゝ人にみせはや

閑見月といへることをよめる　顯仲卿女

諸共に草はの露のおきゐすはひとりやみまし秋の夜の月

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて翫池上月といへる
ことをよませ給へる　院御製

池水にこよひの月をうつしもて心のまゝにわかものと見る

大納言經信

照月のいはまの水にやとらすは玉井の數をいかてしらまし

八月十五夜をよめる　高階俊平

秋はまたすきぬるはかりあるものを月はこよひを君(とこ)もみる哉

翫明月といへることをよめる　民部卿忠教

いつくにもこよひの月を見る人の心やおなし空にすむらん

後冷泉院御時皇后宮歌合に駒迎をよめる　藤原隆經朝臣

ひく駒のかすより外にみえつるは關の清水の蔭にそ有りける

屏風の繪にあふさかのせきかける所をよめる　小式部内侍

人もこす(え新後拾遺)駒もとまらぬ逢坂の關は清水のもる名なり鳬

駒迎の心をよめる　源仲正

東路をはるかにいつるもち月の駒にこよひや逢坂のせき

八月十五夜の心をよめる　源親房

さやけきは思ひなしかと月影を今宵としらぬ人にとはゝや

百首の歌中に月をよめる　源俊頼朝臣

木からしの雲吹はらふ高根よりさえても月のすみのほる哉

閏九月あるとしの八月十五日に俊頼朝臣のもとに
つかはしける　春宮大夫公實

秋は猶のこりおほかる年なれとこよひの月の名こそ惜けれ

禁中月をみてよめる　大江爲政

九重のうちさへてらす月かけにあれたる宿を思ひこそやれ

清涼殿にて月を御らんしてよませたまへる　花山院御製

心みに外の月をもみてしかなわか宿からのあはれなるかと

水上月をよめる　前齋院六條

雲の波かゝらぬさ夜の月かけを清瀧川にやとしてそ見る

月をよめる　皇后宮肥後

月をみて思ふ心のまゝならは行衛もしらすあくかれなまし

人のもとにまかりて物語しけるほとに月のいるを
みてよめる　源師俊朝臣

いかにして柵かけむ天の河なかるゝ月やしはしよとむと

大納言經長卿のかつらの山里にて人々月をよみけ
るによめる　大納言經信

こよひわかかつらの里の月をみて思ひのこせることのなき哉

承暦二年内裏歌合によめる　春宮大夫公實

くもりなき影をとゝめは山河に入とも月ををしまさらまし

宇治前太政大臣の家の歌合に月をよめる

皇后宮攝津

てる月のひかりさえ行宿なれは秋の水にもつらゝゐにけり

源俊頼朝臣

山のはに雲の衣をぬきすてゝひとりも月のたちのほるかな

水上月をよめる　攝政左大臣

蘆ねはふかつみもしけき沼水にわりなくやとる夜半の月哉

宇治前太政大臣家歌合によめる　一宮紀伊

鏡山みねより出る月なれはくもる夜もなき影をこそみれ

秋なにはのかたへまかりてよめる　參議師頼

いにしへの難波のことを思ひ出てたかつの宮に月のすむらん

題不知　源行宗朝臣

なこりなく夜半の嵐に雲はれて衣のまゝにすめる月かな

八月十五夜に人々歌よみ侍りけるによめる

平師季

三笠山ひかりをさして出しよりくもらてあけぬ秋のよの月

宇治入道前太政大臣の三十講の次に歌合し侍ける
によめる　赤染

やとからそ月の光りしまさりけるよの曇りなくすめはなりけり

太皇大后宮扇合によめる　大納言經信

みかさ山峯より出る月影はさほの川瀬のこほりなりけり

山月をよめる　權律師濟慶

思ひいてもなくてや我身やみなまし姥捨山の月みさりせは

顯季卿家にて九月十三夜の心をよめる

太宰大貳長實

くまもなき鏡とみゆる月かけに心うつらぬ人はあらしな

源俊頼朝臣

むらくもや月のくまをは拂ふらんはれ行たひに照まさる哉

月照古橋といへることをよませたまへる

三宮

とたえして人も通はぬ棚橋に月はかりこそすみわたりけれ

水上月をよめる　藤原實光朝臣

月影のさすにまかせて行舟はあかしの浦やとまりなるらん

一條院うせさせおはしましてのち物にこもりて月
をみてよめる　承香殿女御
おほかたにさやけからぬか月影は涙くもらぬ人にとはゝや
大炊殿におはしましけるころ殿上のをのことも御
前にて歌つかうまつりけるに　太宰大貮長實
さらぬたに玉にまかひて置露をいとゝみかける秋の夜の月
九月十三夜に閑見月といへることをよめる
源俊頼朝臣
すみのほる心や空をはらふらん雲のちりゐぬ秋の夜の月
永承四年殿上歌合によめる　藤原家經朝臣
夜とゝもにくもらぬ雲の上なれは思ふことなく月をみる哉
月夜にまかりたりける人々のおそくいてけれはか
へりけるつとめてつかはしける　中務宮
怨めしくかへりける哉月夜にはこぬ人をたに待とこそきけ
行路暁月といへることをよめる　權僧正永縁
もろともにいつとはなしに有明の月のみおくる山路をそ行
對山待月といへることをよめる　土御門右大臣
有明の月まつほとのうたゝねは山のはのみそ夢にみえける
ありあけの月をみてよめる　和泉式部
有明の月みすさひにおきてゆく人のなこりをなかめし物を
山家暁月といへることをよめる　權中納言顯隆
山里のかとたの稻のほの〳〵とあくるもしらす月をみる哉
宇治前太政大臣白河家にて關路暁月といへることを
よめる　藤原範永朝臣
有あけの月も清水にやとりけりこよひはこえし逢坂の關
月のあかゝりける夜あかしにまかりて月をみての
ほるにみやこの月はいかゝなとたつねけれはよめ
る　平忠盛朝臣
有あけの月もあかしの浦風に波はかりこそよるとみえしか
八月廿日ころにむしのこゑをきゝて　赤染
有明の月はたもとになかれつゝ悲しきころの虫の聲哉
きり〳〵すをよめる　前齋院六條
露しけき野へにならひてきり〳〵す我手枕のしたに啼なり
はたおりをよめる　顯仲卿女
さゝかにの糸ひきかくる草むらにはたおる虫の聲聞ゆなり
むしをよめる　藤原長能
おほつかないつく成らん虫のねを尋れは花の露やこほれん
題讀人不知
玉章はかけてきつれと鴈かねのうはの空にもみえわたる哉
春宮大夫公實
いもせ山みねの嵐やさむからん衣かりかね空になくなり
鹿をよめる　三宮大進

妻こふる鹿そ鳴なるひとりねのとこの山風身にやしむらん

恵慶法師

高砂の尾上にたてる鹿のねにことのほかにもぬるゝ袖かな

暁聞鹿といへることをよめる　皇后宮右衛門佐

思ふ事有あけかたの月影にあはれをそふるさをしかの聲

夜聞鹿聲といへることをよめる　内大臣越後

夜はに啼こゑに心そあくかるゝ我みは鹿の妻とならねと

攝政左大臣家にて旅宿鹿といへることをよめる

源雅光

さもこそは都こひしき旅ならめ鹿のねにさへぬるゝ袖かな

旅宿鹿といへることをよめる　藤原伊家

秋はきを草の枕にむすふ夜はちかくも鹿の聲をきくかな

野亭聞鹿といへることをよめる　源俊頼朝臣

さをしかのなくねは野へに聞ゆれと涙は床の物にそありける

鹿をよめる　藤原顕仲朝臣

世の中をあきはてぬとやさを鹿の今はあらしの山に啼らん

はきをよめる　太宰大貳長實

しらすけのま野の萩原露なからをりくる袖そ人なとかめそ

顕隆卿家歌合によめる　權中納言俊忠

白露(ゆふイの)を手枕(たまかつらイ)にしてをみなへし野原の風にをれやふす(しぬイ)らん

女郎花をよめる　藤原顕仲朝臣

心ゆゑ心おくらんをみなへしいろめく野へに人かよふとて

攝政左大臣の家にて蘭をよめる　源忠季

さほ川のみきはにさける藤袴浪のおり(よる)てやかけむとすらん

蘭をよめる　右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとや藤袴秋の野ことに鹿のたつらん

神祇伯顕仲

さゝかにの糸のとちめや仇ならんほころひわたる藤袴哉

堀河院御時御前にて草花を採て人々歌つかうまつりけるにすゝきをとりてつかうまつれる　源俊頼朝臣

うつら鳴ま野のいり江のはま風にをはな浪よる秋の夕くれ

鳥羽殿にて前栽合によめる　春宮大夫公實

あたしのゝ露ふきみたる秋風になひきもあらぬ女郎花哉

房のまへに女郎花をうゑたりけるを見て院源座主ひしりの房のまへにをみなへしをうゑたりけるそとたはふれけれはよめる　明圓聖人

何ならんと思ふ〳〵そほり植し女郎花とはけふそしりぬる

雨中思花といへることを　藤原長能

ぬれ〳〵もおけはまつみん宮城野のもとあらのこ萩萎しぬ覧

はきをよめる　馬内侍

うつろふは下葉はかりとみし程にやかて秋にも成にける哉

屛風の繪に霧たちわたりたるところに馬はなれたるかたかけるところを　藤原長能
とりつなけみつのゝ原の放駒よとの河霧秋はゝれせし
河霧をよめる　藤原基光
うち川のかはせもみえぬ夕霧にまきの島人ふねよはふなり
藤原行家朝臣
河霧のたちこめつれは高せ舟わけ行さをのおとのみそする
郁芳門院根合に菊をよめる　權中納言通俊
盛なるまかきの菊をけさみれはまた空さえぬ雪そつもれる
鳥羽殿前栽合によめる　修理大夫顯季
千歲まて君かつむへき菊なれは露もあたにはおかしとそ思ふ
攝政左大臣家にて紅葉隔墻といへるこゝろをよめる　藤原仲實朝臣
もすのゐるはしのたちえの薄紅葉たれ我宿の物とみるらん
宇治前太政大臣の白河にて見行客といへることをよめる　堀河右大臣
關越る人にとはゝや陸奥のあたちのまゆみもみちしにきや
甲斐國にまかりけるみちにて二村山のもみちをみてよめる　橘能元
いくらともみえぬもみちの錦哉たれ二村の山といひけん
深山紅葉といへることをよめる　大納言經信
山守よをのゝおと高く聞ゆなり岑の紅葉はよきてきらせよ
題不知　權大僧都觀教
みつうみに秋の山へをうつしてはゝたはり廣き錦とやみん
ものへまかりけるみちにもみちのちりかゝりければよめる　江侍從
もみちはを尋るたひにあられとも錦をのみもみちきたる哉
深山落葉といへることをよめる　藤原伊家
谷川にしからみかけよたつたひめみねの紅葉に嵐ふくなり
院御時大井逍遙に水上落葉といへることをよめる
柞ちる岩まをかつくかも鳥はおのかあをはも紅葉しにけり
公實卿中將にてはへりける時人々くして小野のわたりにもみちみありきけるにおくりはへりける　前皇后宮美作
山里の秋のけしきもみぬ人にきてたにかたれ露もおとさす
物へまかりけるみちにてもみちをみてよめる　藤原長能
いつくにかこゝをとゝめん紅葉はの色なるものは心なりけり
宇治前太政大臣大井にまかれりけるともにまかりてよめる　大納言經信
大井河いはなみ高しいかたしよ岸の紅葉にあからめなせそ
落花(葉イ)埋橋といへることをよめる　修理大夫顯季

をくら山峰のあらしの吹からに谷のかけはし紅葉しにけり

大皇大后宮歌合にもみちをよめる　源俊頼朝臣

おとは山紅葉ちるらしあふさかの關の小川に錦おりかく

九月盡のこゝろをよめる　中原經則

あすよりはよもの山邊に秋霧の面影にのみたたむとすらむ

源師俊朝臣

草のはにはかなくきゆる露宿をかたみにおきて秋の行らん

雨中秋盡といへる事をよめる　大納言公任

いつかたに秋の行らむ我宿にこよひはかりの雨やとりせよ

金葉和謌集第四　冬五十四首

承暦二年御前にて殿上のをのこともくさり題して（題をさくりて(流布本)）歌つかうまつりけるに時雨をとりて　源師賢朝臣

神な月しくるゝまゝにくらふ山したてるはかり紅葉しにけり

從二位藤原親子家のさうしあはせにしくれを　修理大夫顯季

しくれつゝかつ散山のもみちはをいかに吹夜の嵐なるらん

百首歌中にもみちをよめる　源俊頼朝臣

龍田河しからみかけて神なひのみ室の山のもみちをそみる

時雨をよめる　攝政家參河

神な月しくれのふるからにいろ〳〵になるすゝか山哉

百寺をかみけるにしくれのしけれはよめる　左京權大夫道雅

諸共に山めくりする時雨哉ふるにかひなき身とはしらすや

題不知　大江嘉言

山深み落てつもれるもみちはのかはける上に時雨ふるなり

日暮しに山ちの昨日時雨しは不二の高ねの雪にそ有ける

後朱雀院御時御前にて霧籠紅葉といへる事を　中納言資仲

紅葉ちるやとは秋霧はれせねは龍田の河のなかれをそみる

竹風似雨といへる事をよめる　中納言基長

なよ竹の音にそ袖をかつきつる濡ぬにこそは風としりぬれ

百首歌中にあしろをよめる　皇后宮肥後

ひをのよる川瀬にたてるあしろきは立白浪の打にやあるらん

月照網代といへる事をよめる　大納言經信

月夜よみせゝの網代によるひをは玉もにさゆる氷なりけり

百首歌中に冬のはしめの心をよめる　源重之

寒からはよるはきてれよみやまとり今はこのはも嵐吹なり

關路千鳥といへる事を　藤原兼昌

あはしまかよふ千鳥の啼こゑに幾夜ねさめのすまの關守

千鳥をよめる　藤原長能

河霧はみきはをこめて立にけりいつくなるらん千鳥啼聲
氷をよめる　藤原隆經朝臣
高せ舟さをの音にそしられぬるあしまの氷ひとへしにけり
内大臣
谷川のよとみにむすふ氷こそみる人はなきかゝみなりけれ
曾根好忠
水鳥は氷のせきにとちられて玉ものやとをかれやしぬらん
百首歌中にこほりをよめる　藤原仲實朝臣
しなか鳥ゐなのふし原風さえてこやの池水こほりしにけり
題不知　三宮
つなかれとなかれもやらす高せ舟結ふ氷のとけぬかきりは
氷滿池水といへることをよめる　大納言經信
水鳥のつらゝの枕ひまもなしうへしみけらしとふのすかこも
冬月をよめる　神祇伯顯仲
冬寒み空にこほれる月影はやとにもることそとくるなりけれ
初雪をよめる　藤原義忠朝臣
年をへて吉野の山にみなれたるめにもふりせぬけさの初雪
宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　源頼綱朝臣
ころもてによこの浦風さえ／＼てこたかみ山に雪降にけり
橋上雪といへることをよめる　前齋院尾張
白浪のたちわたるかとみゆる哉はまなの橋にふれる白雪
百首歌中に雪をよめる　大藏卿匡房
いかにせむ末の松山なみこさは峯の初雪きえもこそすれ
初雪をよめる　大納言經信
初雪は松のはしろくふりにけりこやをの山の冬のさひしさ
庭雪をよめる　和泉式部
待人のいまもきたらはいかゝせんふまゝくをしき庭の雪哉
宇治前太政大臣家歌合によめる　皇后宮攝津
ふる雪に杉の青葉もうつもれてしるしもみえすみはの山本
中納言女王
いはしろのむすへる松に降雪は春もとけすや有んとすらん
修行しありきけるに淡路のいはやにてよめる　增基法師
はま風にわかこけ衣ほころひて身にふりつもる夜はの雪哉
大嘗會主基方備中國彌高山をよめる　藤原行盛
雪ふれはいや高山のこすゑにはまた冬なから花さきにけり
雪の御幸におそくまゐりけれはしきりにおそきよ
しの御使たまはりてつかうまつれる　六條右大臣顯房
朝とのかゝみのかけにおもなれて雪みにとしも急かれぬ哉
題不知　皇后宮權大夫師時
すみかまにたつ煙さへをの山は雪けの雲とみゆるなりけり

百首中に冬の歌とて　　曾禰好忠

み山木を朝な夕なにこりつみてさむさをこふるをのゝ炭やき

屏風の繪に田のほとりにかりしたるかたかけると
ころを　　中　務

袖ひちて植し苗よりまもる田を誰にしられて狩にたつらん

雪中鷹狩をよめる　　源　道　濟

ぬれ〳〵も猶狩ゆかむはし鷹のうはらの雪をうち拂ひつゝ

藤原長能

あられふるかた野のみのゝ狩衣ぬれぬ宿かす人しなければ

み狩する末野に立るひとつ松とかへる鷹のこひにかもせむ

内大臣家越後

理りやかたのゝをのに鳴きゝすさこそはかりの人はつらけれ

鷹狩のこゝろをよめる　　源俊賴朝臣

はし鷹をとりかふさはにかけみれは我身も共にとや返りけり(セイ)

神樂をよめる　　皇后宮權大夫師時

神祭るみむろの山にしもふれはゆふしてかけぬ榊はそなき

家經朝臣のかづらの山里の障子の繪に神樂したる
かたかけるところをよめる　　康資王母

榊はやたちまふ袖のおひ風になひかぬ神もあらしとそ思ふ

旅宿冬夜といへることをよめる　　大納言經信

旅ねする夜とこさえつゝ明ぬらしとかたそかれの聲聞ゆ也

水鳥をよめる　　前齋院六條

中々に霜のうはきをかされてやをしの毛衣さえまさるらん

修理大夫顯季

さ莚に思ひこそやれ笹のはにさゆる霜夜のをしのひとりね

曾禰好忠

ふちふ野に柴刈民のてもたゆみつかれもあらす冬の寒きに

依花待春　　内　大　臣

なにとなく年のくるゝは惜けれは花のゆかりに春を待かな

年のくれをよめる　　藤原成通朝臣

人しれすとしのくるゝを惜むまに春いとふ名の立ぬへき哉

攝政左大臣家にて冬題ともを探てよませ侍りける
に年のくれの心をよめる　　藤原永實

かそふるに殘すくなき身にしあれはせめても惜き年の暮哉

月のうちに身まかりにけるとそ。

としのくれの心をよませたまひける　　三　宮

いかにせん暮行年をしるへにて身を尋ねつゝ老はきにけり

おなし心を　　中原長國

年暮ぬとはかりをこそきかましか我身の上に積らさりせは

中納言國信(經イ)

なに事を待とはなしに明くれてことしもけふに成にける哉

金葉和謌集第五 賀廿七首

長治二年三月五日內裏にて竹不改色といへるとを
よませたまへる　堀河院御製

年ふれと面變りせぬくれ竹はなかれてのよのためしなりけり

前一條院の京極の家に行幸せさせ給たりけるに　宇治前太政大臣賴通

君か代にあふくま河の底清みよゝを重ねてすまんとそ思ふ

堀河院御時中宮堀河院つくりてはしめてわたらせ
たまひて松契遐年といへるとをつかうまつれる　權中納言俊實

水の面に松のしつ枝のひちぬれは千とせは池の心なりけり

法成寺太政大臣家歌合に水邊松をよめる　大江嘉言

君か代のためしにたてる松影に幾たひ水のすまんとすらん

河原院歌合に松臨池といへるとを　惠慶法師

たれにかといけの心も思ふらん底にやとれる松のちとせを

禁中にて翫花といへるとを　權中納言實行

九重にひさしくにほへやへ櫻のとけき春のかせとしらすや

橘俊綱家歌合によめる　藤原國行

自から我身さへこそ祝はるれ誰(君(流布本))かちよにもあはまほしさに

題不知　大納言經信

君かよのほとをはしらて住吉の松をひさしと思ひけるかな

堀河院行幸ふたゝひありけるによめる　曾禰好忠

みなかみに定めてけれは君か代にふたゝひすめる堀河の水

後朱雀院御時弘徽殿歌合によめる　永成法師

君か代は末の松山はるはるとこすしらなみの數もしられす

嘉承二年三月鳥羽殿行幸に池上花といへるとをよ
ませたまへる　堀河院御製

池水の底さへにほふ花さくらみるともあかしちよの春まて

大嘗會主基方辰日參音聲鞍山をよめる　藤原行盛

音高きつゝみの山のうちはへて樂しきみよとなるそ嬉しき

同大嘗會悠紀方朝日郷をよめる　藤原敦光朝臣

曇なきとよのあかりにあふみなる朝日の里の光さしそふ

巳日樂の破に雄琴郷をよみはへりける

松風のをとの里にかよふにそをこまれるよの聲は聞ゆる

後冷泉院御時大嘗會主基方備中國二萬郷をよめる　藤原家經朝臣

みつき物はこふよほろをかそふれはにまの里人數そひにけり

おなしくにのいなゐといふ所を人にかはりて

高階明頼
苗代の水はいなゐにまかせたり民やすけなる君かみよかな

花契遐年といへるとをよみ侍ける　太宰大貳長實
花も皆君かちとせをまつなれはいつれの春か色もかはらん

攝政左大臣中將にてはへりける時かすかのまつりのつかひにてくたりはへりけるに周防の内侍女使にてはへりけるか為隆卿行事弁にて侍けるかもとへつかはしける　周防内侍
いかはかり神もあはれとみ笠山二葉の松の千代のけしきを

いはひの心をよめる
〔此間一枚闕〕
雪つもる年のしるしにいとゝしく千歳の松の花さへそみる

返し　六條右大臣
つもるへし雪つもるへし君か代は松の花さへ千度みるまて

天喜四年皇后宮歌合によませたまへる
後冷泉院御製
長濱のまさこの數もなにならすつきせすみゆる君かみよ哉

松上雪をよめる　源頼家朝臣
萬代のためしとみゆる松の上に雪さへつもる年にもある哉

金葉和歌集第六　別離廿五首

兼房朝臣丹後守になりてくたりけるにつかはしける　大納言經信
きみうしや花のみやこのはなを見て苗代水にいそくこゝろを

返し　藤原兼房
よそにみしなはしろ水にあはれ我おり立名をも流しつるかな

陸奥守信時みやこへかへりのほる時わさつのつかはすとて　源重之
此頃は宮城野にこそましりくれ君をゝしかのつのもとむとて

道貞朝臣陸奥へくたるとき　和泉式部
もろともにたゝまし物をみちのくの衣のせきをよそに聞かな

わつらふころ參河入道唐へまかるときゝてつかはしける　小大君
なかきよのやみにまよへる我をおきて雲かくれぬる空の月哉

帥重尹卿くたりはへりける時人々餞し侍けるによめる　堀河左大臣
かへるへきたひのわかれとなくさむる心にたくふ涙なりけり

物へまかりける人のかり扇をつかはすとて　能宣ィ
わかれちをへたつる雲のうへにこそ扇の風はやらまほしけれ

參河入道もろこしへまかるへしときこえけるか又とまりにけりときこえけれは人のたつねたりける

返事につかはしける　入道寂昭

止まらん止まらし共おもほえすいつくもつひの住かなられは

陸奥守則光朝臣くたりけるに人々餞し侍けるによめる　菅原資忠

とまりゐて待へき身こそ老にけれあはれ別れは人の爲かは

經輔卿太宰帥にてくたりはへりける時にみちより上東門院に侍ける人のもとへつかはしける　前太宰大貳長房

かたしきの袖にひとりはあかせとも落る涙そ夜を重ねける

これを御覽してかたはらにかきつけさせ給ける　上東門院

別路をけにいかはかり思ふらんきく人さへそ袖はぬれける

源公定大隅守にてくたりける時月のあかゝりけるころ別をゝしみて　源爲成

はるかなる旅の空にもおくれねはうらやましきは秋の夜の月

資業伊豫へくたりける時よめる　民部内侍

都にておほつかなさをならはすは旅寢をいかに思ひやらまし

保昌にわすれられてのち兼房かとふらひ侍けれは　和泉式部

人しれす物思ふことはならひにき花にわかれぬ春しなけれは

一條院の皇后宮にはへりける人の日向國へまかりけるにつかはしける　皇后宮

あかれさすひに向ひても思いてよ都はしのふなかめすらんと

大隅守小槻あきみちかくたりけるときつかはしける　友（共イ）政（致イ）朝臣妻

沖津島雲井の岸をゆきかへりふみかよはさんまほろしもかな

源俊賴朝臣伊勢へまかる事ありていてたちけるとき人々餞し侍けるによめる　參議師賴

伊勢の海のをのゝふるえに朽はてゝ都の方へかへれとそ思ふ

源行宗朝臣

まちつけむ我みなりせは歸るへきほとを幾度君にとはまし

百首歌中にわかれのこゝろを　權中納言國信

けふはさは立別るとも便あらはありやなしやのなさけ忘るな

實方朝臣みちのくにへまかりけるにしたくらつかはすとてよめる　大納言公任

東ちのこのしたくらくなりゆかは都の月をこひさらめやは

爲仲朝臣陸奥守にてくたりけるとき人々餞し侍けるによめる　藤原實綱朝臣

人はいさ我身は末になりぬれはまたあふ坂もいかゝまつへき

藤原有良

こひしさはその人數にあらすとも都をしのふ數にいれなん

經平大貳にてくたる時くしてまかりける日公實の

もとへつかはしける　　權中納言通俊

さしのほる朝日に昔の思いてゝかたふく月にわれなわするな

陸奥へまかりけるときあふさかの關よりみやこへ

つかはしける　　橘則光朝臣

我ひとりいそくと思ひしあつまちにかきねの梅はさき立に鬼

あひかたらひける人のみちのくにへまかりけれは

つかはしける　　能宣イ

いかてなを我身にかへてたけくまのまつともならん行末の爲

金葉和歌集第七 戀六十七首

五月五日はしめて女のもとへつかはしける　　小一條院

しらさりつ袖のみぬれてあやめ草かゝる戀ちにおひん物とは

天德四年内裏歌合によめる　　中務

君こふる心はそらにあまのはらかひなくてゆく月日なりけり

女のかりつかはしける　　大江公資朝臣

しの薄上葉にすかくさゝかにのいかさまにせは人なひきなん

曉戀の心をよめる　　神祇伯顯仲

さりともと思かきりは忍はれて鳥とゝもにそねはなかれける

顯季卿家にて寄七夕戀のこゝろをよめる　　少將公教母

七夕はまたこん秋もたのむらん逢夜ゝしらぬ身をいかにせん

七月七日人にかはりて女のもとへつかはしける

大納言道綱母イ

七夕にけさひく糸の露おもみたわむけしきをみてやゝみなん

女のかりつかはしける　　藤原道信朝臣

嬉しさはいかはかりかは思らんうきは身にしむ物にそ有ける

つれなくはへりける女のもとへつかはしける　　春宮大夫公實

これにしくおもひはなきを草枕旅にかへすはいなむしろとや

國信卿家歌合によるの戀といふことをよめる　　俊頼朝臣

夜とゝもに玉ちるとこのすか枕見せはや人に夜はのけしきを

顯季卿家にて人々に戀歌よませはへりける　　藤原顯輔朝臣

逢とみてうつゝのかひはなけれともはかなき夢そ命なりける

女のかりつかはしける　　源雅光

逢までは思もよらす夏ひきのいとほしとたにいふと聞はや

從二位藤原親子家のさうしあはせに　　太宰大貳長實

思ひやれすまのうらみてねたる夜はまたしく袖にかゝる涙を

寛源法師

今はたゝねられぬいをそ友とする戀しき人のゆかりと思へは

人をうらみてよめる　　相模
夕暮はまたれしものを今はたゝゆくらんかたを思ひこそやれ
題不知　　讀人不知
こひすてふ名をたになかせ涙川つれなき人もきゝやわたると
なにせんに思かけゝむ唐衣こひすることのみさをならねと
はしめたる人のもとにつかはしける　　藤原實方朝臣
いかてかは思ありとはしらすへきむろのやしまの煙ならては
あるみやはらにはへりける人の宮をいてゝあやし
の小家にて物申て二日はかりありてつかはしける
春宮大夫公實
思いつやありし其夜のくれたけはあさましかりしふし所哉
題不知　　權中納言顯隆
しら雲のかゝる山ちをふみゝてそいとゝ心はそらに成ける
寄水鳥戀といふとを　　源師俊朝臣
水鳥のは風にさわくさゝ浪のあやしきまてもぬるゝ袖かな
たのめてあはぬ戀といへるとを　　源顯國朝臣
逢みんとたのむれはこそくれは鳥あやしやいかゝ立歸へき
天德四年内裏歌合によめる　　本院侍從
人しれすあふをまつまに戀しなは何にかへつる命とかいはん
しのふる戀の心をよめる　　權中納言實行
谷川のうへはこのはにうつもれてしたに流るを君みるらめや

月前戀といへるとをよめる　　藤原基光
なかむれは戀しき人のこひしきにくもらはくもれ秋夜の月
題不知　　讀人不知
つらしとも愚なるにそいはれけるいかに恨むと人にしられん
物申ける人の前中宮にまゐりにければなこりをこ
ひて月のあかゝりける夜いひつかはしける
藤原知房朝臣
おもかけは數ならぬ身にこひられて雲井の月を誰とみるらん
片野にはへりける女のもとに道貞朝臣かよひける
をたえてのちかひけるうまのはなれて片野にまか
りたりければかへしつかはすとて　　交野女
あふとの今はかた野にはむ駒はわすれ草にそなつかさりける
女に物申てまたの日うつりかのしければつかはし
ける　　源兼澄
わきもこか袖ふりかけし移りかのけさは身にしむ物を社思へ
ふみはかりおこせていひたえにける人のもとにつ
かはしける　　内大臣家小大進
ふみそめて思歸りしくれなゐの筆のすさみをいかてみせけん
實行卿家歌合によめる　　長實卿母
しろらめやよとのつき橋夜とゝもにつれなき人を戀渡るとは
藤原道經

戀わひておさふる袖やなかれいつる涙の川のゐせきなるらん

少將公教母

流れての名にそたちぬる涙川ひとめつゝみをせきしあられは

題不知　皇后宮右衞門佐

涙川そてのゐせきもくちはてゝよとむかたなき戀もするかな

戀の歌とてよめる　源俊頼朝臣

忘草しけれるやとをきてみれはおもひのきより生るなりけり

初戀のこゝろを　源顯國朝臣

かくとたにまたいはしろの結ひ松むすほゝれたる我心かな

女のかりつかはしける　平祐擧

むれは不二袖は淸見か關なれやけふりも涙もたゝぬ日そなき

後朝のこゝろを　源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとそうたかはれける

戀の歌とてよめる　藤原顯輔朝臣

年ふれと人もすさめぬわか戀やくちきのそまのたにの埋木

あるまじき人を思ひかけてつかはしける　讀人不知

いかにせん數ならぬ身にしたかはてつゝむ袖よりおつる涙を

野わきのしたりけるにいかゝなむとおとつれて侍ける人の又そのゝちおともせさりけれはつかはしける　相模

あらかりし風の後より絶にしはくもてにすかく糸にやある覽

月のあかゝりける夜人をまちかれてつかはしける　橘爲義朝臣

君まつと山のはいてゝ山のはにいるまて月をなかめつるかな

かたらひける人のつれなくはへりけれはさすかにいひもはなたさりけるにつかはしける　源頼光朝臣

なか〳〵にいひも離たて信濃なるきそちの橋に掛たるやなそ

五月五日わりなくてもりいてたる所にこもといふ物をしきたりしもわすれかたきにいひつかはしける　相模

あやめにもあらぬまこもを引掛しかりのよとのゝ忘られぬ哉

閏五月はへりけるとし人をかたらひけるに後五月をすくしてと申けるによめる　橘季通

なそもかく戀ちにたちてあやめ草あまり長ひく五月なるらん

人のかりつかはしける　神祇伯顯仲

おのつから夜かるゝほとのさ莚は涙のうきになるとしらすや

人をうらみてつかはしける　藤原惟規

池にすむ我名をゝしのとりかへす物にもかなや人をうらみん

人のもとにまかりけるにこよひはかへりれといはせて侍りけるのちひと夜はいかに有しなと申たり

けれはいひつかはしける　藤原正家朝臣
秋風にふきかへされて葛のはのいかにうらみし物とかはしる
遇不遇戀といへるをよめる　左京大夫經忠
一夜とはいつか契りしかは竹の流れてとこそ思そめしか
俊忠卿家にて戀十首人々によませ侍けるにちかひ
てあはすといへることを　皇后宮式部
逢見ての後つらからはよゝをへてこれより增る戀にまとはん
三條院宮のみことましける時ひさしくとはせたま
はさりければ申さすとおほしめして女房のもとへ
つかはしける　安法々師女（母イ）
よのつれの秋風ならは荻の葉にそよとはかりの音はしてまし
戀の歌とてよめる　源道濟
しのふれは涙そしるきくれなゐに物おもふ袖はそむへかりけり
かたらひける人のかれ〳〵になりてうらめしかり
けれはつかはしける　白河女御越中
待しよのふけしなたにゝなけきけん思ひ絶ても過しける身を
戀のこゝろを人々よみけるに　律師賀源
命をしかけて契りしなかなれはたゆるはしぬる心地こそすれ
堀河院御時艶書合によめる　皇后宮肥後
思ひやれとはて日をふるさみたれにひとりやともる袖の雫を
題不知　三宮大進

なそもかく身にかふはかり思ふらん逢みんことも人の爲かは
つれなかりける人にあふよしのゆめをみてつかは
しける　藤原公教
うたゝれにあふとみつるを現にてつらきを夢と思はましかは
女をうらみてつかはしける　春宮大夫公實
あしれはふ水の上とそ思ひしをうきは我身にありけるものを
ものおもひはへりける時よめる　出羽弁
しのふるもくるしかりけり數ならぬ人は涙のなからましかは
題不知　皇后宮別當
たのめおくことのはたにもなき物をなにゝかゝれる露の命そ
かたらひける人のかれ〳〵になりてのちほかへつ
かはしけるふみをとりたかへてもてまてきたりけ
れはうつにかきつけてつかはしける　讀人不知
煩はしほかに渡せる文みれはこゝやとたえにならんとすらん

金葉和謌集第八　戀下八十四首

初戀のこゝろをよめる　良暹法師
かすめては思こゝろをしるやとて春の空にもまかせつるかな
題不知　清少納言
よしさらはつらさは我に習ひけりたのめてこぬは誰か敎へし（ゆイ）
公任卿家にてもみちあまのはしたて戀と三題を人

々によませ侍りけるにおそくまかりて人々みなか
きける程なりければ三題を歌一首によめる　藤原範永朝臣
戀わたる人にみせはや松のはもしたもみちする天のはしたて
後朝のこゝろをよめる　源師俊朝臣
しのゝめの明ゆくそらもかへるには涙にくるゝ物にそ有ける
天德四年内裏歌合によめる　中務
うは玉のよるの夢たにまさしくは我思ふことを人にみせはや
戀の歌とてよめる　藤原顯輔朝臣
戀わひてねぬよ積ればしきたえの枕さへこそうとくなりけれ
鳥羽殿の北面にて歌合によめる　藤原仲實朝臣
夜とゝもに袖のかはかぬ我戀はとしまか磯によするしら浪
十月はかりにわかれける女のもとへつかはしける
藤原則長
あふことをなにゝいのらん神な月をりわひしくもわかれぬる哉
ひさしくおとつれさりける人のなにとかなと申た
りければつかはしける　高階成忠女
ゆめとのみ思なりにし世の中をなに今さらにおとろかすらん
題不知　公誠
あふことやなみたの玉のをならんしはしたゆれは落て亂るゝ
藏人家時かれ〳〵になりにけるをうらみてつかは
しける　前齋宮越後
人心あさゝは水のれ岸こそころはかりにもつまゝほしけれ
女のもとへつかはしける　増基法師
我思ふとのしけさにくらふれはしのたのもりのちえは物かは
われをはかれ〳〵になりてと人のかりまかるとき
ゝてつかはしける　讀人不知
とはりや思くらふの山さくらにほひまされるはなをめつるも
郁芳門院根合に　周防内侍
戀わひてなかむる空のうき雲や我したもえのけふりなるらん
題不知　相模
住吉の細江にさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらしな
人をうらみて五月五日つかはしける　前齋宮河内
あふとのひさしにふけるあやめ草たゝかりそめの妻と社見れ
匡衡のこゝろあくかれて女のもとへまかりけるこ
ろいひつかはしける　赤染右衛門
我宿の松はしるしもなかりけり杉むらならはたつねきなまし
題不知　前中宮上総
さきのよの契りをしらてはかなくも人をつらしと思ひける哉
逢不逢戀の心を　右兵衛督實能
思ひきやあひみし夜はの嬉しさに後のつらさの増るへしとは
ふみつかはす人のと人にあひぬときゝて七月七日

つかはしける　　源雅光

よと〻もに戀はすれとも天の河あふせは雲のよそにこそ見れ

女のかりつかはしける　　藤原永實

する墨のおつる涙にあらはれて戀しとだにもえこそかゝれね

家の歌合によめる　　中納言國信

色みえぬ心はかりはしつむれとなみたはえこそ忍はさりけれ

題讀人不知

あふとは夢はかりにてやみにしをさこそみしかと人に語るな

戀の歌とてよめる　　藤原忠隆

おさふれとあまるなみたはもる山のなけきにおつる雫也けり

雪のあしたに人のまてきてかくならひてこすはいかゝおもふへきと申けれは　　馬内侍

忘れなは越路の雪のあと絶てきゆるためしになりぬはかりそ

物申ける人のひさしくおともせさりけれはつかはしける　　前齋院肥前

萱ふきのこやわすらるゝ妻ならん久しく人のおとつれもせぬ

もろともにほとゝきすまちける人の事ありていりにけるのち又たらいてゝなきつやなとたつねけれはきゝてよめる　　春宮大夫公實

ほとゝきす雲ゐのよそになりしかは我そ名殘の空になかれし

冬戀のこゝろを　　藤原成通朝臣

水の面にふる白雪のかたもなくきえやしなまし人のつらさに

人々戀の歌よませ侍けるに　　攝政左大臣

あやしくもわかみやまきのもゆる哉思ひは人につけてし物を

雨にぬれてかへりけるをとこのもとへいひつかはしける　　江侍從

かつきけむ袂は雨にいかゝせしぬるゝはさても思ひしれかし

人をうらみてよめる　　藤原盛經母

さのみやは我身のうさになし果て人のつらさを恨みさるへき

うらめしき人のあるにつけてもむかしおもひいてられてよめる　　前齋宮甲斐

いま人の心をみわの山みてそすきにしかたは思しらるゝ

題不知　　弁乳母

戀しさはつらさにかへてやみにしを何の名殘にかくは悲しき

忍戀といへるをよめる　　源親房

物をこそ忍へはいはれいはしろのもりにのみもる我なみた哉

伊賀少將かもとへつかはしける　　中納言資仲

よもの海の浦々ことにあされともあやしくみえぬいける貝哉

返し　　伊賀少將

たまさかに浪のたちよる浦々は何のみるめのかひかあるへき

物おもひはへりけるころ月のあかゝりける夜おもかけつねよりもたえかたくてよめる　　橘俊宗母

つれ〴〵とおもひそ出るみし人をあはて幾月なかめしつらん

題不知　　上總侍從

あさましくなみたにうかふ我身かな心かろくは思はさりしを

ものへまかりけるみちにはしたものゝあひたりけるをとはせはへりけれは上東門院にはへるすまひこそとなん申といひけるをきゝてよめる

源緣法師

名きくよりかれてもうつる心哉いかにしてかはあふへかる覽

戀の心をよめる　　民部卿忠敎

戀わひてたえぬ思のけふりもやむなしきそらの雲となるらん

題不知　　（三字イモ）大中臣能宣

さりともと思こゝろにけかされてしなれぬものは命なりけり

堀河院御時艷書合によめる　　中納言俊忠

人しれす思ありその濱風になみのよるこそいはまほしけれ

返し　　一宮紀伊

音にきくたかしの浦のあた波はかけしや袖のぬれもこそすれ

くれにはかならすとたのめたりける人のはつかの月のたかくなるまてみえさりけれはよめる

攝政家堀河

契りおきし人も梢のこのまよりたのめし月の影そもりくる

江侍從

めのまへにかはる心をなみた川流れてもやとたのみけるかな

雪のあしたに出羽弁かもとよりかへりけるにこれよりおくりてはへりける　　出羽弁

おくりてはかへれと思し玉しひの行さすらひてけさはなき哉

返事　　大納言經信

冬の夜の雪けの空にいてしかはかけより外におくりやはせし

よにあらんかきりはわすれしとちきりける人のおともせさりけれはよめる　　讀人不知

人はいさありもやすらん忘られてとはれぬ身社なき心地すれ

年ころ物申ける人のたえておとつれさりけれはつかはしける

はやくよりあさき心とみてしかはおもひたえにきやま河の水

題不知

もらさはや細谷川のわすれ水かけたに見えぬ戀にしつむと

すみところをしらせぬ戀といへる事をよめる　　前齋院六條

行衞なくかきこもるにそひきまゆのいとふ心の程はしらるゝ

實行卿家歌合に戀のこゝろをよめる　　源俊賴朝臣

いつとなく戀にこかるゝ我身よりたつやあさまの煙なるらん

をとこのかたゝかへになん物へまかるといはせてはへりけれはつかはしける　　讀人不知

君こそは一夜めぐりの神ときけなにあふことの方たがふらん

新藏人にてはべりけるころ内をわりなくいでゝ女のもとにまかりてよめる　藤原永實

みか月のおぼろげならぬ戀しさにわれてぞいづる雲の上より

周防内侍したしくなりてのちゆめ／＼この事もらすなと申ければ　源信宗朝臣

あはぬ夜はまどろむほどのあらばこそ夢にもみきと人に語らめ

題不知　左京大夫經忠

人しれずなき名はたてどから衣かさねぬ袖は猶ぞ露けき

人をうらみてよめる　大中臣輔弘女

あぢきなく過る月日ぞ恨しきあひみし程をへだつと思へば

顯季卿家にて戀のこゝろを　源經兼朝臣

いかにしてなびくけしきもなき人に心ゆるぎの杜をしらせん

三井寺にて人々戀の歌よみけるによめる　僧都公圓

つらしとも思はん人は思ひなむ我なればこそ身をばうらむれ

かたらひける女のもとにまからんとちぎりたりけれどさはることありてまからざりければさみたれのころおくりてはべりける　讀人不知

五月雨の空だのめのみ隙なくて忘らるゝ名ぞよにふりぬべき

返し　左兵衞督實能

忘られん名はよにふらじ五月雨もいかでか暫をやまざるべき

寄石戀といへる事を　前齋院六條

あふことをとふいしがみのつれなさに我こゝろのみ動きぬる哉

攝政左大臣家にて戀のこゝろを　源雅光

數ならぬ身をうぢ河のはし／＼といはれながらも戀わたる哉

戀の歌十首人々によませはべりけるついでにくれどもとゞまらずといへることを　修理大夫顯季

玉つしま岸うつ浪のたちかへりせないでましぬなごり戀しも

顯仲卿女

心からつきなき戀をせざりせばあはで闇にはまどはましやは

題不知　内大臣家小大進

かくばかり戀の病はおもけれどめにかけさげてあはぬ君かな

攝政左大臣家にて時々あふといへることを　源顯國朝臣

我戀はしづのしけ糸すぢ弱みたえまは多くくるはすくなし

題讀人不知

あま雲のかへしの風のおとせぬはおもはれじとの心なりけり

足曳の山のまに／＼倒れたるからきはひとりふせるなりけり

つの國のまろやは人をあくた河君こそつらきせゞはみせしか

近江てふ名は高島に聞ゆれどいづらはこゝにくるもとの里

笠とりの山のよをふる身にしあればすみやきもをる我心哉

み熊野に駒のつまつく靑つゝら君こそまろかほくしなりけれ
こりつめる歎きをいかにせよとてか君にあふこの一筋もなき
はかるめるとのよきのみ多かれはそら歎をはこるにや有らん
あふとのいまはかたみのめを荒みもりて流れん名こそ惜けれ
逢とは片ねふりなるいそひたひひれりふすともかひやなか覧
あふとのかた野に今はなりぬれは思かりのみゆくにや有らん
あふみにかありといふなるかれひ山君は越けり人とれくさし
かしかまし山の下行さゝれ水あなかま（君か）我もおもふこゝろあり
ぬす人といふもをわりさ夜中に人のこゝろをとりにきたれは
はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらくろの君か心や

金葉和謌集第九 雜上九十八首

むかし道方卿にくしてつくしにまかりて安樂寺に（いゐりて脱歟）まゐりて見侍しにみきはの梅のわか任にみわはきのすかたおなしさまにて花のおい木になりてところ〳〵さきたるをみて　大納言經信

神かきにむかし我みし梅の花ともにおいきになりにけるかな

山家の鶯を　攝政左大臣

やま里もうきよの中をはなれれは谷の鶯れをのみそ鳴

圓窓寺のはなを御覧して後三條院の御事なんとおほしいてゝよませ給へる　三宮

うゑおきし君もなきよに年へたる花は我身の心地こそすれ

公任卿白河にこもりゐぬるときゝてありかさりけれはつかはしける　宇治入道前太政大臣

谷のとをとちやはてつる鶯のまつにおとせて春のくれぬる

思と侍りけるころあめのふるを見て　大納言道綱母

ふる雨のあしともおつる涙かなこまかに物をおもひくたけは

花見御幸をみていもうとの内侍のもとへつかはしける　權僧正永縁

行末のためしとけふをおもふとも今いくとせか人にかたらん

返し　内侍

幾ちよも君そ語らんつもりゐておもしろかりし花のみゆきを

大峰におもひもかけすさくらのさきたりけるを見て　僧正行尊

もろともにあはれとおもへ山櫻花よりほかにしる人もなし

堀河院の御時殿上の人々あまたくして花みありきける仁（にイ）和寺に行宗朝臣ありときゝてたんしやあるとたつれ　侍りけれはつかはすうへにかきつけはへりける　源行宗朝臣

いくとせに我なりぬらん諸人の花みる春をよそにきゝつゝ

山家に人々まかりて花の歌よみけるに　源定信朝臣

みな人は吉野のやまの櫻はなをりしらぬ身やたにの埋木

宇治入道前太政大臣兵衛佐にて侍けるころ一條左大臣の家にまかりそめてかゝる事なむあるとはしりたりやといひおこせてはへりけるかへりことにつかはしける　　馬内侍

おもふことなくてやみましよさのうみのあまの橋立都なりせは

蔵人おりて臨時祭陪従し侍けるに右中弁伊家かもとにつかはしける　　藤原惟信朝臣

身ふきもおなしかさしの花なれと雲井の櫻猶そこひしき

後三條院かくれおはしましてのち又のとしのはるさかりなる花をみてよめる　　左近将曹秦兼方

こそみしに色もかはらてさきにけり花こそ物は思はさりけれ

つかさめしのころよろつうらやましきのみきこえけれはよめる　　藤原顕仲朝臣

年ふれと人にしられぬ埋木は花のみやこにすむかひそなき

前齋院に侍ける人のいまの齋院にまゐりぬるときゝてつかはしける　　讀人不知

みそきするかもの川浪立かへりはやくみとせに袖はぬれすや

おもふことありていつもへまかるとてよめる　　大江正言

ふる郷の花のみやこに住わひてやくもたつてふいつもへそ行

信濃守にてくたりけるときみかさにてよめる　　藤原家経朝臣

かさこしの峯の上にてみるときは雲はふもとの物にそ有ける

隆家卿太宰帥にふたゝひなりてのちのたひかしひの御社にまゐりけるに神主とのもとゝ杉のはをとりて帥のかうふりにさすとてよめる　　神主大膳武忠

千早振かしひのみやの杉のはをふたゝひかさす君そわか君

源心座主々々になりてはしめて山にのほりけるにやすみける所にて歌よめとせめけれはよめる　　良暹法師

年をへて通ふ山ちはかはらねとけふはさかゆく心地こそすれ

宇治前太政大臣の時の歌よみともに月の歌よませけるにはへりもれにけれは公實卿のもとへおくりてはへりける　　源雅光

かすか山みねつゝきてる月かけにしられぬ谷のまつも有けり

天王寺にまゐりてかめ井の水をみてよませたまへる　　上東門院

にこりなきかめ井の水をむすひあけて心の塵をすゝきつる哉

僧都頼基光明山にこもりぬときゝて月のあかゝりし夜つかはしける　　橘能元

うらやまし浮世をいてゝいかはかり限なき峯の月を見るらん

返し　僧都賴基

もろともにゝしへや行と月影の隈なき峯をたつねてそこし

ふるさとをうらむることありてわかれけるとき河尻のほとにてよめる　大江正言

思いてもなきふる里の山なれとかくれ行はたあはれ也けり

いかなる女のもとにかありけんつかはしける　藤原兼房朝臣

まことにや人の國にはたえにけむいく野の里のなつひきの糸

河原院の松をみてよめる　源道濟

行末のしるしはかりにのこるへき松さへいたくおいにける哉

皇后宮に人々まゐりて歌つかうまつりけるに松色不改といへる事を　太宰大貳長實

すみよしの松のしつ枝をむかしよりいくしほそめつ沖つ白浪

一品宮天王寺にまゐらせたまひて日ころ御念佛せさせ給ひけるに御共の人々すみよしにまゐりて歌よみけるに　源俊頼朝臣

いくかへり花さきぬらん住よしの松も神よのものとこそきけ

郁芳門院齋宮にて伊勢におはしましけるときあからさまにくたりけるにすゝか河をわたるとて　六條右大臣北方

はやくよりたのみわたりしすゝか河おもふことなる音そ聞ゆる

源仲正かむすめはしめて皇后宮にまゐりたりけるにことひくときかせたまひてすゝめさせ給ひけれはつゝましなからひきならしけるをきゝてくちすさみの様にてなにとなくいひかけゝる　攝津

琴のねや松ふく風にかよふらんちよのためしにひきつへき哉

返し　美濃

うれしくも秋のみやまの松風にうひことのねのかよひぬる哉

月のあかゝりける夜人の琴ひくをきゝてよめる(家イ)　内大臣越後

琴のねは月のかけにも通へはや空にしらへのすみのほるらん

伊勢のふた見の浦にてよめる　大中臣輔弘

玉くしけふたみの浦のかひしけみまきゑにみゆる松のむら立

宇治前太政大臣布引瀧みにまかりけるともにまかりて　大納言經信

白雲とよそにみつれはあし曳の山もとゝろきおつる瀧つせ

おなしたきにまかりてよめる　讀人不知

あまのかはこれやなかれの末ならんそらよりおつる布引の瀧

選子内親王いつきにおはしましけるとき人に物申さむとてしのひてまゐりたりけるにさふらひともいかなる人そなとあわて申けるにとはせはへりけ

れはたゝうかみにかきつけておかせ侍ける
藤原惟規
神垣は木のまろ殿にあられともなのりをせねは人とかめけり
郁芳門院伊勢におはしましける時まゐりたりける
にかれのかすかにきこえけれはよめる
六條右大臣北方
神かきのあたりとおもふにゆふたすき思ひもかけぬ鐘の聲哉
前齋宮伊勢におはしましけるころ寮頭保俊か御ま
つりのころきぬをかりて程すきてかへしおくると
てわすれていまゝてかへさゝりけるかなと申たり
けるかへり事に申つかはしける　前齋宮イ 内侍
かへさしとかれてしりにきから衣戀しかるへき我身ならねは
和泉式部保昌にくして丹後に侍けるころみやこに
歌合ありけるに小式部内侍歌よみにとられて侍け
るに定頼卿のつほねのまへにまうてきて歌はいか
ゝせさせたまふ丹後へ人はつかはしけむやつかひ
またまうてこすやなとたはふれてたてりけるをひ
かへてよめる
小式部内侍
おほえ山いく野のみちの遠けれはまたふみもみすあまの橋立
この集えりける時歌たつれられて集やるとて
藤原顯輔朝臣
家の風ふかぬものゆゑはつかしの杜の木のはをちらしつる哉
堀河院御時御前にて殿上のをのこども題をさくり
て歌つかうまつりけるにしほかまのうらをとりて
よめる
源俊頼朝臣
すまの浦にしほやくかまのけふりこそ春にしらぬ霞なりけれ
和泉式部石山にまゐりて大津にとまりて夜ふけて
きゝけれは人のけはひあまたしてのゝしりけるを
たつねけれはあやしのやまかつのよねしらけはへ
るなと申けるをきゝて
式部
さきのゐる松原いかにさわく覧しらけはうたて里とよみけり
公實卿のもとにまかりたりけるに侍さりけれは出
居におきたりける小弓をとりてさふらひにふれて
いてにけりかの卿かへりて弓をたつねけれは時房
おろして　かりぬと申をきゝておとろきて院の御
弓そとくおこせよといひつかはしたりけれは御弓
にむすひつけたる歌
藤原時房
梓弓さこそはそりのたかゝらめはる程もなく歸るへしやは
をとこかれ〳〵になりて程へてたかひにわすれて
のち人にしたしくなりにけりなと申すときゝてな
けきけるにかはりてよめる
春宮大夫公實
なき名にそ人のつらさはしられける忘られしには身をそ恨し

大貳資通しのひて物申けるを程もなくさそなと人の申ければよめる　相模

いかにせん山たにかこふかき柴の暫しのまたに隱れなきよを

肥後內侍をとこにわすられてなけくを御覽してよませたまへる　堀河院御製

忘られてなけく袂をみるからにさもあらぬ袖のそほちぬる哉

水車をみてよめる　僧正行尊

はやきせにたえぬはかりそ水車我もうきよにめくるとをしれ

例ならぬとありてわつらひけるころ上東門院にかうしたてまつるとて人にかゝせてたてまつりける　堀河右大臣

つかへつるこの身の程をかそふれはあはれ梢になりにける哉

御返し　上東門院

過きつる月日の程もしられつゝこの身をみるもあはれなる哉

僧正行尊まうてきてよるとまりてつとめてかへるとてとこをわすれたりけるを返しつかはすとてよめる　大納言宗通

草枕さこそはかりのとこならめけさしもおきて歸るへしやは

をとこ心かはりてまうてこすなりてのちおきたりけるゑふくろをとりにおこせたりけれはかきつけてつかはしける　櫻井尼

のきはうつま白の鷹のゑふくろにをきゑをおきて返しつる哉

後朱雀院御時近江國より白鳥をたてまつりたりけるをかくしておかせたまひたりけるを女房達ゆかしかり申ければおの〳〵歌よみてたてまつれさてよからん人に見せんとおほせことありければつかうまつりける　少將內侍

類ひなくよにおもしろき鳥なれはゆかしからすと誰か思はん

甲斐國よりのほりてかはなりける人の許にありけるかはかなき事によりてなありそとおひいたしければ　讀人不知

鳥のこのまたかひ乍あらませはをはと云物はおひ出さらまし

百首歌中に山田をよめる　修理大夫顯季

ひくらしの聲はかりする柴のとは入日のさすに任せてそみる

題不知　藤原仲實朝臣

年ふれは我いたゝきにおく霜を草のうへともおもひけるかな

殿上おりたりけるころ人の殿上しけるをみてよめる　源行宗朝臣

うらやまし雲のかけ橋立かへりふたゝひのほる道をしらはや

殿上申けるにせさりけれはよめる　平忠盛朝臣

おもひきや雲井の月をよそにみて心のやみにまとふへしとは

かたらひ侍ける人のかれ〳〵になりけれはと人に

つきてつくしへまかりなむとしけれはきゝてをと
このもとよりまかるよしを申たりけれはいひつか
はしける　　内大臣家小大進
身のうさもとふ一もしにせかれつゝ心つくしの道はとまりぬ
をとこのなかりける程と人をつほねにいれたるに
もとのをとこまうてきあひたりけれはかたはらの
つほねのかへのくつれよりくゝりてにかしやりて
またの日そのにかしたるつほねのぬしのかりかへ
こそうれしかりしかと申たりけれはいひつかはし
たりける　　讀人不知
れぬる夜の壁さわかしく有しかとわかちかふれはとなかり鬼
源頼家か物申ける人の五節にいてゝはへりけるを
きゝてまことにやあまたかされしをみころもとよ
のあかりのかくれなきよにとてつかはしたりける
かへしによめる　　源光綱
ひかけにはなきな立見なみ衣きてみよとこそいふへかりけれ
經信卿にくしてつくしにまかりたりけるに肥後守
盛房の大刀のあるみせんと申ておともせさりけれ
はいかにとおとろかしたりけれはいひつかはしけ
る　　源俊頼朝臣
なきかけに懸けるたちも有物をさやつかのまに忘るへしやは

大峰に神仙といへるところにひさしく侍けれは同
行ともみなかきりありてまかりにけれはこゝろほ
そさによめる　　僧正行尊
みし人はひとり我身にそはれともおくれぬものは涙なりけり
たゝならぬ人のもてかくしてありけるに子をうみ
てけるかもとよりうみたるうめをおこせたりけれ
はよめる　　讀人不知
は隱れてつはるとみえし程もなくこ(依流布本)はうみうめに成にける哉
堀河院御時中宮女房達を(亮仲實か)紀伊守にてつ
かへけるときわかのうらみせんとてさそひけれは
あまたまかりけるにまからてつかはしける
前中宮甲斐
人なみに心はかりはたちそひて誘はぬわかのうらみをそする
保實卿はかにうつりてのちもとのところにつれに
見はへりけるかゝみをとらせ侍けるかくらきよし
を申けるをきゝてよめる　　藤原實信母
とはりやくもれはこそはます鏡うつりし影もみえすなるらめ
月のいるをみてよめる　　源師賢朝臣
にしへ行心はわれもあるものをひとりないりそ秋の夜の月
爲仲朝臣陸奥守にてはへりけるとき延任しつとき
ゝてつかはしける　　藤原隆資

まつ我はあはれやそちになりぬるをあふ隈河の遠さかりぬる

したしき人の春日にまゐりてしかのありつるよし
なと申けるをきゝてよめる　藤原實光朝臣

みかさ山神のしるしのいちしるくしかありけりと聞そ嬉しき

屏風の繪にしかすかのわたりする人たちわつらひ
たるかたかけるところをよめる　藤原家經朝臣

行人も立そわつらふしかすかのわたりやたひのとまり成らん

題讀人不知

身のうさをおもひしとけは冬の夜もとゝこほらぬは涙也けり

上陽人苦最多少苦老苦といへるをよめる
源雅光

むかしにもあらぬ姿になりゆけと歎きのみこそ面かはりせれ

靑黛畫眉々細長といへる事をよめる　源俊頼朝臣

さりともとかく眉すみのいたつらに心細くもなりにけるかな

年ひさしく苦行しありきて熊野に驗くらへしける
を祐家卿まゐりあひてみけるにとのほかにやせお
とろへてすかたもあやしけにやつしたりけれはみ
わすれてかたはらなる僧にいかなる人そとゝのほ
かにしるしありけなる人かなゝとたつねけるをき
ゝてよめる　僧正行尊

心こそよをはすてしかまほろしのすかたも人に忘られにけり

大中臣輔弘祭主もあかさりけるころ祭主になさせ
たまへなと太神宮に申てねいりたりける夜のゆめ
にまくらかみにしらぬ人のたちてよみかけゝる歌

草のはのなひくもしらす露の身のおき所なくなけく比かな

六條右大臣六條の家つくりて泉なとほりてとくわ
たりてみになと申たりけれはよめる　顯雅卿母

ちとせまてすまむ泉の底によもかけならへんと思ひしもせし

宇治平等院寺主になりて宇治にすみつきてひえの
山の方をなかめやりてよめる　忠快法師

うち川のそこのみくつとなりなから猶雲かゝる山そこひしき

家を人にはなちてたつとてはしらにかきつけゝる
周防内侍

住わひてわれさへのきのしのふ草しのふかた／＼しけき宿哉

賀茂成助はしめて物申けるついてにかはらけとり
てよめる　津守國基

きゝわたるみたらしかはの水清みそこの心をけふそみるへき

皇后宮弘徽殿におはしましけるころとしよりにし
おもてのほそとのにてたちなから人に物申けるに
夜のふけゆくまゝにくるしかりけれはつちにゐた
りけるをみてたゝみをしかせはやと女の申けれは
たゝみはいしたゝみしかれて侍めりと申をきゝて

よめる　　　皇后宮大貳
いしたゝみありけるにはなきみに又しく物なしと思ひける哉
大原行蓮聖人かもとへ小袖をつかはすとてよめる
天台座主仁覺
あはれまむと思ふ心は廣けれとはくゝむ袖のせはくもある哉
百首歌中に述懐のこゝろをよめる　源俊頼朝臣
よの中はうき身にそはる影なれや思すつれとはなれさりけり
をことにつきて越前國にまかりたりけるになとこ
の心かはりてつれにはしたなく見えけれはみやこ
なるおやのもとへつかはしける　讀人不知
うちたのむ人の心はあらちやまこしちくやしき旅にも有かな
返し　　お　や
思やる心さへこそくるしけれあらちの山の冬のけしきは
おもふこと侍けるころよめる　参議師賴
いたつらに過る月日をかそふれは昔をしのふねそなかれける
かゝみを見るにかけのかはりゆくを見てよめる
源師賢朝臣
かはり行鏡のかけを見るからにおいそのもりの歎きをそする
前太政大臣の家に侍ける女を中将忠宗朝臣と少將
顯國朝臣とゝもにかたらひ侍けるに忠宗朝臣にあ
ひたりけりそのゝち程なくわすられにけりときゝ
て女のかりつかはしける　源顯國朝臣
こゆるきの急きて逢ひしかひもなく浪立こすときくはまとか
藏人親隆かゝうふりたまはりてまたの日つかはし
ける　藤原公教
雲の上になれにしものをあし鶴のあふとかたにおりゐぬる哉
堀河院御時源俊重式部丞申ける申文にそへて中納
言重資藏人頭にて侍けるときつかはしたりける歌
源俊頼朝臣
日のひかりあまねき空のけしきにも我身一つは雲かくれつゝ
これを奏しけれは内侍周防をめして返しせよとお
ほせをありけれはつかうまつれる　周防内侍
なにかおもふ春の嵐に雲はれてさやけきかけは君のみそみん

金葉和謌集第十 雑下四十六首

公實卿かくれ侍てのち宇治の家にまかりたりける
に梅の花の盛にさきたるをみてえたにむすひつけ侍
りける歌　藤原基俊
むかしみしあるしかほにて梅か枝の花たに我に物かたりせよ
返し　中納言實行
れにかへる花の姿の戀しくはたゝこのもとをかたみとも見よ
人々あまたくして花見ありきてのち風おこりてふ

したりけるに人のもとよりなに事かとたつれて侍
けれはいひつかはしける　平基綱
櫻ゆゑいとひし風の身にしみて花よりさきにちりぬへき哉
後三條院かくれおはしましてのち五月五日一品の
宮の御帳に昌蒲ふかせ侍けるにさくらのつくり花
のさゝれたるをみてよめる　藤原有佐朝臣
あやめ草ねをのみかくる世の中にをりたかへたるさくら花哉
北方うせ侍てのち天王寺にまゐり侍けるにみちに
てよめる　六條右大臣
なにはえの蘆のわかれのしけゝれは心もゆかぬ船出をそする
郁芳門院かくれおはしましてのまたのとしの秋知
信かりつかはしける　康資王母
うかりしに秋はつきぬと思しをことしも虫の音こそ流るれ
下﨟にこえられ侍てなけきけるころよめる
源俊頼朝臣
せきもあらぬ涙の河はゝやけれと身のうき草は流れさりけり
律師實源かもとに女房の佛供養せんとてよはせ侍
けれはまかりたるに手箱を布施にしたりけるをか
へりてみれはかきていれたりける歌　讀人不知
玉匣かけこに塵もすゑさりしふた親なからなきみとをしれ
返し　律師實源
けさこそはあけてもみつれ玉くしけふたよりみより涙流して
おほちに子をすてゝ侍けるおしくゝみにかきつけ
て侍ける
身にまさる物なかりけり緑兒はやらん方なくかなしけれとも
あはの守知綱におくれてはへりけるころなかれけ
る人のゆるされてかへりたりけるをきゝてよめる
藤原知綱母
なかれてもあふせありけり涙川消にしあわをなにゝたとへん
心ちれいならぬころ人のもとよりいかゝなと申け
れはよめる　讀人不知
くれ竹のふし沈みぬる露の身もとふことのはにおきそゐらるゝ
範永朝臣出家したりときゝて能登守にて侍けるこ
ろ國よりいひつかはしける　藤原通宗朝臣
よそなから世をそむきぬと聞からに越路の空は打しくれつゝ
律師長濟身まかりてのちそのあつかひをしてあり
ける夜のゆめにみえける歌
たらちめのなけきをつみてわれかゝく思の下になるそ悲しき
源仲綱の女におくれてなけき侍けるころほとへて
とひにつかはすとてよめる　大藏卿匡房
その夢をとはゝ嘆きやまさるとておとろかさても過にける哉
従三位藤原賢子れいならぬとありてよろつ心ほそ

くおほえけるに人のもとよりいかゝなといひて侍
ける返ことにいひつかはしける　藤原賢子

いにしへは月をのみこそなかめしか今は日をまつ我身也けり

まかりてひさしくなりにける母をゆめに見てよめ
る　權僧正永縁

ゆめにのみむかしの人をあひみれはさむる程こそ別なりけれ

人のむすめのはゝの物へまかりたるけるころおも
きやまひをしてかくれなんとしけるときかきおき
てまかりける歌　讀人不知

露の身のきえも果すは夏草のはゝいかにしてあらんとすらん

小式部内侍うせてのち上東門院よりとしころたま
はりけるきぬをなきあとにもつかはしたりけるに
小式部内侍とかきつけられたるをみてよめる　和泉式部

諸共にこけの下にはくちすしてうつもれぬ名を聞そかなしき

したしき人におくれてわさのをはてゝかへり侍け
るによめる　平忠盛朝臣

今そしる思の果は世の中のうき雲にのみましるものとは

陽明門院かくれおはしましてのち御わさの事はて
ゝまたの日雲のたなひきたるをみてよめる　藤原定信（實イ）

さためなき世をうき雲そ哀なるたのみし君かけふりと思へは

白河女御かくれおはしましてのちかの家の南おも
ての藤の花さかりにさけるを見てよめる　僧正行尊

草木まてなけきけりとも見ゆるかなまつさへ藤の衣きて皃

兼房朝臣重服になりてこもりゐて侍けるに出羽弁
かもとよりとふらひたりけるをかへしせよと申け
れはよめる　橘元任

かなしさのその夕暮のまゝならは有へて人にとはれましやは

範國朝臣にくして伊豫國にまかりたりけるに正月
より三月まていかにもあれ雨のふらさりけれは
なはしろもえせてさわきけれはよろつにいのりけ
れとかなはてたえかたかりけれはかみ能因を歌よ
みて一宮にまゐらせていのれと申けれはまゐりて
よめる　能因法師

天の河なはしろ水にせきくたせあまくたります神ならは神

神感ありて大雨ふりて。三日三夜をやまさるよし家
集にみえたり。

心經供養して人々にそのこゝろをよませ侍けるつ
いてに　堀河左大臣

色もかもむなしとゝける法なれは祈るしるしはありと社きけ

法文のありけるをさとなる女房の宮に申さすとも
しのびてとりておこせよと申たりけるをきゝてよ
ませたまへる　　　　　　　　　　　三　　宮

みし儀に我は悟をえてしかはしらせてとるとしらさらめやは
月のあかゝりけるに瞻西聖人のかりつかはしける
　　　　　　　　　　　　　　　　僧正行尊

いさきよき空のけしきをたのむかな我まとはする秋の夜の月
實範聖人山寺にこもりゐぬときゝてつかはしける
　　　　　　　　　　　　　　　　静厳法師

心にはいとひはてつと思らんあはれいつくもおなしうき世を
八月はかりに月のあかゝりける夜阿彌陀佛のひし
りのとほりけるによはせさせたまひてさとなりけ
る女房のもとへいひつかはしける
　　　　　　　　　　　　　　　　選子内親王

あみたふとゝなふる聲にゆめさめて西へなかるゝ月を社見れ
法花經の心をよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　皇后宮肥後

をしへおきて入にし月のなかりせはいかて心を西にかけまし
清海聖人後生をおそり思ひてねふりいりたるにま
くらかみに僧のたちてよみかけゝる歌

かくはかりこちてふ風のふくを見てちりの疑おこさすも哉
普賢十願文に願我臨欲命終時を
　　　　　　　　　　　　　　　　覺樹法師

命をも罪をも露にたとへけりきえはともにやきえんとすらん
弟子品のこゝろをよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　僧正静圓

ふきかへすわしの山風なかりせは衣のうらの玉を見ましや
提婆品のこゝろをよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　瞻西聖人

のりの爲になふ薪にをよせてやかてこのよをこりそ果ぬる
　　　　　　　　　　　　　　　　皇后宮權大夫師時

けふそしるわしのたかねにてる月を谷川くみし人のかけとは
不輕品のこゝろをよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　登雅法師イ　權僧正永縁

あひかたき法をひろめしひしり社打みし人もみちひかれけれ
　　　　　　　　　　　　　　　　權僧正永縁イ
涌出品のこゝろをよめる

たらちねは黒髪なからいかなれはこのまゆしろき糸と成けん
藥王品のこゝろをよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　懷尋法師

うきよをしわたすときけはあまを舟法に心をかけぬ日そなき
人のもとに經供養しけるに五百弟子品の心をとき
けるに無價寶珠のたとひときけるを聞てたふとか
りけるよしの歌よみてかつけものゝうらにむすひ
つけてはへりけるをみてかへしによめる
　　　　　　　　　　　　　　　　權僧正永縁

いかにして衣のたまをしりぬ覽思もかけぬ人もあるよに
依他の八のたとひを人々よみ侍にこの身かけろふ
のとしといへるとをよめる
　　　　　　　　　　　　　　　　懷尋法師

いつをいつと思たゆみて陽炎のかけろふほとのよをすくす覽

常住心月輪といへるとをよめる　　證成法師

夜とゝもに心のうちにすむ月をありとしる社はるかなりけれ

醍醐の釋迦會に花の散るをみてよめる　　珍海法師

けふも猶おしみやせまし法の爲散らす花そと思なさすは

地獄繪につるきのえたに人のつらぬかれたるをみてよめる　　和泉式部

あさましや劒のえたのたわむまていかなる罪のなれるなる覽

やまひしてかきりになりてまとひけれはしとみのもとにいれておほちにおきたるに草の露あしにさはりける程にほとゝきすのなきけれはいきのしたによめる　　田口重如

草の葉にかとてはしたり郭公しての山路もかくや露けき

つひにおちいりにける程によめる

たゆみなく心をかくる彌陀佛ひとやりならぬちかひたかふな

屏風の繪に天王寺の中門にてみれは僧の船にのりてにしさまにこきはなれてゆくかたをかけるをみてよめる

阿彌陀佛とゝなふる聲を檝にてやくるしき海をこきはなる覽

連謌十一首

ゐたりけるところのきたのかたにこゑなまりたる人のものいひけるをきゝて　　永成法師

あつまうとのこゑこそきたにきこゆなれ

みちのくによりこしにやあるらん　　律師慶範

もゝそのゝ花をみて　　頼慶法師

もゝそのゝもゝの花こそさきにけれ

うめつのうめはちりやしぬ覽　　公資朝臣

賀茂のみやしろにて物つくおとのしけるをきゝて

しめのうちにきれの音こそきこゆなれ　　成助

いかなる神のつくにかあるらん　　行重

宇治にて田中においたるをとこのふしたりけるをみて

はるの田にすきいりぬへきおきなかな　　僧正深覺

かのみなくちに水をいれはや　　宇治入道太政大臣

日のいるをみて

ひのいるはくれなゐにこそにたりけれ　　觀暹法師

あかねさすとも思ひける哉　　平為成

田中に馬のたてるをみて

田にはむこまはくろにさりける　　永源法師

なはしろの水にはかけとみえつれと　　永成法師

かはらやをみて

かはらやのいたふきにてもみゆる哉　讀人不知
つちくれしてやつくりそめけん　助俊

つくしのしかの島をみて
つれなくたてるしかの島哉　爲助
ゆみはりの月のいるにもおとろかて　國忠

宇治へまかりけるみちにて日比雨ふりければ水のいてゝかもかはを男のはかまぬきて手にさけてわたるを見て
かもかはをつるはきにてもわたる哉　賴綱朝臣
かりはかまをはをしとおもひて　行綱

あゆを見て
なにゝあゆるをあゆといふらむ　讀人不知
うふねにはとりいれしものをおぼつかな　匡房

和泉式部か賀茂にまゐりたりけるにわらうつにあしをくはれてかみをまきたりけるを
ちはやふるかみをはあしにまくものか　神主忠頼
これをそしものやしろとはいふ　和泉式部

抑此集者　白河院御讓位之末俊賴朝臣奉院宣撰之。大治元年奉　勅。大治元二三日奏之。此集本不定也。奏覽之處兩度返給之。初度進覽本一番三宮御歌也。

としの中にはる立くればひとゝせにふたゝびまたるうくひすのこゑ

第二度進覽本一番顯季卿歌也。

うちなびきはるはきにけりやまかはのいはまのこほりけふやとくらむ

此本等世間流布也。以上二ヶ度被返下了。第三度奏覽本一番歌源重之歌也

よしの山峯のしらゆきいつきえてけさはかすみのたちかはるらん

今度奏覽本無左右被納了。以撰者之自筆書造紙云々。件本者拾遺集玄々集歌等多以入之。當本即是也。可指南歟。

續群書類從卷第三百六十七

和歌部二

金葉和謌集第一 初度本

春部

堀河院御時百首歌めしけるにはるたつこゝろをよめる　修理大夫顯季

うちなひき春はきにけり山川の岩間の氷今やとくらん

源俊頼朝臣

庭もせに引つらなれるもろ人の立ゐるけふや千代の初春

春宮大夫公實

春立て梢にきえぬ白雪はまたきにさける花かとそ見る

皇后宮肥後

つらゝゐしほそ谷川のとけゆくは水上よりや春は立らん

春從東來といへることをよめる　覺雅法師

みちのくの衣の關をけさ立ていつのまにかは春のきつらん

初春の心をよめる　太宰大貳長實

いつしかと春のしるへに立物はあしたの原の霞なりけり

百首の歌の中にはつ春の心を人にかはりてよめる

前齋宮内侍

春のくる夜の間の風のいかなれはけさ吹にしも氷とくらん

むつ月のついたちに雪ふりけるをみてつかはしける　修理大夫顯季

あら玉の年のはしめにふりしけは初雪とこそいふへかりけれ

返し　春宮大夫公實

朝戸あけて春の梢の雪みれは初花ともやいふへかるらん

春のはしめの心をよめる　藤原顯仲朝臣

いつしかとあけゆく空のかすめるは天の戸よりや春は立らん

實行卿家歌合にかすみをよめる　少將公教母

あさ緑かすめる空のけしきにや常盤の山も春をしる覽　藤原顯輔朝臣
とし毎にかはらぬ物は春かすみ立田の山のけしきなりけり
かすみの心をよめる　太宰大貳長實
あつさ弓春のけしきになりにけりいるさの山に霞たなびく　源俊頼朝臣
いつしかと木の松山かすみあひて風とゝもにや春はこゆらん
百首の歌の中に鶯の心をよめる　修理大夫顯季
鶯のなくにつけてやまかれふくきひの中山春をしるらん
はしめて鶯をきくといへることをよめる　春宮大夫公實
けふよりや梅の立枝に鶯の聲里なるゝ初めなるらん
む月のやうかの日春のたちけるに鶯の鳴けるをきゝてよめる　藤原顯輔朝臣
けふやさけ雪うちとけて鶯の都にいつる初音なるらん
曉聞鶯といへることをよめる　源雅兼朝臣
鶯の木つたふさまもゆかしきに今一聲は明はてゝなけ
皇后宮にて人々歌つかうまつりけるに雨中鶯といへることをよめる　源俊頼朝臣
春雨はふりしむれとも鶯の聲はしほれぬ物にそありける
おなし心を　藤原爲眞

鶯の梅の花かさちりぬれはふる春雨にそほちてそなく　藤原顯頼朝臣
關路聞鶯といへることを
あふ坂にけふもとまらぬ鶯のなく一聲や春の關守
良暹法師しのひて物へまかりけるに左大辨經頼か家の梅さかりにさきたりけれは門に終日たちくらしてゆふかたいひいれ侍りける　良暹法師
梅の花にほふあたりはよきてこそいそく道をは行へかりけれ
梅花夜薰といへることをよめる　前太宰大貳長房
梅か枝に風や吹らん春の夜はをらぬ袖さへにほひぬる哉
朱雀院に人々まゐりて閑夜梅といへることをよめる　大納言經信
けふこゝに見にこさりせは梅の花ひとりや春の風にちらまし
梅花散水といへる事をよめる　源俊頼朝臣
散花は水の岩間によとむともかはなかれてやせにとまるらん
道雅卿家歌合に梅花をよめる　藤原兼房朝臣
散かゝるかけはみゆれと梅の花水には香こそうつらさりけれ
梅花をよめる　源忠季
限ありてちりはゝつとも梅の花かをは袖にのこせとそ思ふ
子の日の心をよめる　大中臣公長
春日野のれの日の松はひかてこそ神さひゆかん影にかくれめ
百首の歌中に子日の心をよめる　源俊頼朝臣

春日野の雪をわかなに摘そへてけふさへ袖のしほれぬる哉

子の日の心をよめる　大藏卿匡房

春霞立かくせとも姫小松ひくまのゝへに我は來にけり

柳糸隨風といふ心を　院御製

風ふけは柳の糸のかたよりになひくにつけて過る春哉

百首歌中に柳を　春宮大夫公實

朝またき吹來る風にまかすれはかたよりしけり青柳の糸

池岸柳をよめる　源雅兼朝臣

風ふけは浪のあやをる池水に糸ひきそふる岸の青柳

忠能卿家歌合柳の心を　よみ人しらす

谷風の吹あけにたてる玉柳枝のいとまも見えぬ春哉

長實卿家歌合によめる　源季遠

いかなれは氷はとくる春風にむすほゝるらむ青柳の糸

百首歌中に柳をよめる　源俊頼朝臣

もかり舟ほくらしめなは心せよ河そひ柳風に浪よる

喚子鳥をよめる　前齋院尾張

いとか山くる人もなき夕暮に心ほそくもよふこ鳥かな

靜念法師

山ひこのこたへさりせはよふこ鳥むなしきねをや鳴て過まし

霞中歸鴈をよめる　藤原成通朝臣

こゑせすはいかてしらまし春霞へたつる空にかへる鴈かね

歸鴈をよめる　藤原經通

今はとてこしちにかへる鴈かねはゝねもたゆくや行かへる(かゝるイ)覽

雅家卿歌合に歸鴈をよめる　意尊法師

玉つさをかけしおりにや鴈かねに春かへりこと契そめけん

かへる鴈をよめる　源忠季

なか〳〵に散を見しとや思ふらん花の盛にかへる鴈かね

雪のふる日歸雁をきゝてよめる　慶經法師

雪かゝる雲ちは春もさえけれは霞の衣きてかへるなり

花薫風といふことを　攝政左大臣

よしの山みねの櫻やさきぬらんふもとの里に匂ふ春風

新院御製(鳥羽院)

尋つる我をや花も待つらん今そさかりに匂ましける

太政大臣(雅)

白河のなかれ久しき宿なれは花の匂ものとけかりけり

人にかはりて　太宰大貳長實

吹風も花のあたりは心せよけふを初音の春とやは見る

待賢門院兵衛

萬世のためしとみゆる花の色をうつしとゝめよ白河の水

源雅兼朝臣

年ことにさきそふ宿の櫻花なをゆくすゑの春そゆかしき

宇治前太政大臣京極の家御幸日　院御製

春霞立かへるへき空そなき花のにほひに心とまりて

遠山櫻といへることを　春宮大夫公實

白雲とをちの高ねに見えつるは心まとはす櫻なりけり

松間櫻といふことを　内大臣

春ことに松の緑にうつもれて風にしられぬ花櫻かな

左兵衛督實能

此春はのとかにゝほへ櫻花枝さしかはす松のしるしに

山家花遲といへることをよめる　左京大夫經忠

山櫻こすゑの風のさむけれは花の盛になりそわつらふ

花為春友といふことをよめる　内大臣

ちらぬまは花を友にて過ぬへし春よりのちのしる人もかな

新院御かたにて花契遲年といへることをよめる　待賢門院中納言

白雲にまかふ櫻の梢まて千とせの春をそらにしるかな

藤原顯輔朝臣

萬世に見るへき花の色なれとけふのにほひはいつか忘れん

終日翫花と云ことを　源貞亮朝臣

白雲にまかふ櫻をたつぬとてかゝらぬ山のなかりつるかな

堀河院御時女房たちを花山の花みせにつかはしたりけるにかへりまいりて御前にて歌つかうまつりけるに女房にかはりてよませ給ける

よそにては岩こす瀧と見ゆる哉峯の櫻やさかりなるらむ　堀河院御製

けふ暮れぬあすも來て見ん櫻花心してふけ春の山風　源師俊朝臣

翫山花といへることを　太宰大貳長實

鏡山うつろふ花を見てしよりおもかけにのみたゝぬ日そなき

深山花を　攝政左大臣

峯つゝきにほふ櫻をしるへにてしらぬ山ちにかゝりけるかな

人々に櫻の歌十首よませ給けるによめる　修理大夫顯季

櫻花さきぬる時はよしの山たちものほらぬみねの白雲

山花留人　大中臣公長

なのゝえはこのもとにてや朽なまし春をかきらぬ櫻なりせは

鞍馬大門の花盛なりとてくたりてよめる　永縁法師

山櫻みねは霞のこめつれはふもとの花を折てこそ見れ

宇治前太政大臣家の歌合によめる　皇后宮攝津

ちりつもる庭をそ見まし櫻花風よりさきに尋さりせは

源俊頼朝臣

山さくらさきそめしより久方の雲ゐに見ゆる瀧の白糸

遙見山花といへることをよめる　藤原忠隆

よし野山みねにたなひく白雲と見ゆるは花のこすゑなりけり
大藏卿匡房

はつせ山雲ゐに花のさきぬれは天の河なみ立かとそ見る

醍醐にまかりたりけるにきよたきに花の散かゝりたりけるか岸には雪の樣につもりて水にはつもらさりけるを見てよめる
瞻西聖人

散花のなかるゝ水につもらぬもそれうへ雪の心地こそすれ

堀河院御時女御殿の女房たちあまたくして花見ありきけるによめる
前齋宮筑前乳母

春ことにあかぬ匂を櫻花いかなる風のをしまさるらむ

人にかはりてよめる
僧正行尊

よそにては惜にきつる花なれとをらてはえこそ歸らさりけれ

後冷泉院御時皇后宮歌合に櫻をよめる
堀川左大臣

春雨にぬれてたつねん山櫻雲のかへしの嵐もそふく

月前見花といへることをよめる
大藏卿匡房

月かけに花見る夜半のうき雲は風のつらさにおとらさらまし

圓融院にあまたまかりて翫花といへることをよめる
顯隆

ちれは雪ちられは雲と見えつるはさかりにゝほふ櫻なりけり
太宰大貳長實

春の日のゝとけき空にふる雪は風にみたるゝ花にそありける

水上落花をよめる
源雅兼朝臣

花さそふ嵐や峯をわたるらん櫻なみよる谷川の水

落花滿庭といへることをよめる
左兵衛督實能

けさ見れは夜半の嵐に散はてゝ庭こそ花の盛なりけれ

堀河院御時中宮御かたにて風靜花香といへることをよめる
源俊頼朝臣

梢には吹とも見えて櫻花かほるそ風のしるしなりける

落花の心をよめる
長實卿母

春ことにおなし櫻の花なれはをしむ心もかはらさりけり
覺樹法師

峯にちる櫻は谷の埋木に又さく花と成にけるかな

落花隨風といへることをよめる
右兵衛督伊通

うらやましいかにふけはか春風の花を心にまかせそめけん

水上落花といふ心をよめる
大納言經信

水上に花やちるらん山川のゐくひにいとゝかゝるしらなみ
藤原成通朝臣

水の面にちりつむ花を見る時そはしめて風は嬉しかりける

落花散衣といへることをよめる

ちりかゝるけしきは雪の心地して花には袖のぬれぬなりけり

堀河院御時花のちりたるをかきあつめて大なる物

のふたに山のかたにつませ給て中宮の御方にたて
まつらせ給へりけるを宮御覽して歌よめとおほせ
ことありけれはつかうまつる　　御匣殿
櫻花雲かくるまてかきつめてよし野の山とけふみつるかな
白川の花盛りなりときゝてくしてまかりたりける
に盛り過てちりけるをみてよめる
源俊頼朝臣
身にかへてをしむにとまる花ならはけふや我身の限ならまし
花の庭に散つもるを見てよめる　　郁芳門院安藝
庭の花もとの梢に吹かへせちらすのみやはこゝろなるへき
夜思落花といふことを　　隆源法師
衣手にひるはちりつる櫻花よるは心にかゝるなりけり
春ものへまかりけるに山田つくりけるを見てよめ
る　　高階經成朝臣
櫻咲く山田をつくるしつのをはかへす〳〵や花を見るらん
後冷泉院御時月あかゝりける夜女房たちをくして
南殿にわたらせ給けるに庭の花かつちりておもし
ろかりけるを御覽してこれをみしりたらん人に見
せはやとおほせことありて中宮の御方に下野あら
んとてめしにつかはしたりけれはまいりたるを御
覽してあの花なりてまいれとおほせことありけれ
はつかまつれるうた　　下野
なかきよの月の光のなかりせは雲井の花をいかておらまし
落花の心をよめる　　源俊頼朝臣
山あらしのみねこす風にちる花を空行浪と思ひけるかな
新院の北面にて殘花薫風といへることをよめる
中納言雅定
散はてぬ花のありかをしらすれはいとひし風そけふは嬉しき
前齋院にて水上落花といへることをよめる
平忠盛朝臣
水の面にちりみちにける櫻花なにをか池のしるしには見ん
奈良にて人々百首歌よみけるに早蕨をよめる
權僧正永縁
山里はのへのさ蕨もえいつるをりにのみこそ人はとひけれ
春駒の心をよめる　　藤原盛經
とりつなく人もなきのゝ春駒は霞にのみやたなひかるらん
百首の歌の中にかきつはたをよめる　　修理大夫顯季
東路のかほやか沼のかきつはた春をこめてもさきにける哉
春田をよめる　　大納言經信
あら小田に細谷川をまかすれは引しめなはにもりつゝそ行く
苗代をよめる　　津守國基
鴫のゐる野澤の小田をうち返し種まきてけりしめはへて見ゆ

後冷泉院御時弘徽殿女御の歌合になはしろの心を
よめる　藤原隆資
山里のそとものを小田の苗代に岩間の水をせかぬ日そなき
家の山吹を人々あまたまうてゝあそひけるついて
にをりけるをみて　中納言雅定
我宿にまたこむ人も見るはかりをりなやつしそ山吹の花
水邊款冬を　攝政左大臣
限りありてちるたに惜しき山吹をいたくなをりそゐての川波
おなし心を　太宰大貳長實
春ふかみ神なひ河にかけ見えてうつろひにけり山吹の花
後冷泉院御時歌合に山吹の心をよめる
前太宰大貳長房
山吹にふきくる風も心あらは八重なからをはちらさゝらなん
曉見躑躅といへることをよめる　攝政家三河
入日さすゆふ紅の色はえて山下てらすいはつゝしかな
院北面にて橋上藤といへることをよめる大夫典侍
色かへぬ松によそへて東路の常盤の橋にかゝる藤波
藤花をよめる　藤原顯輔朝臣
紫の色のゆかりに藤花かゝれる松もむつましきかな
坊の藤盛なるを見て　律師増覺
くる人もなき我宿の藤の花たれをまつとてさきかゝる覽
紫藤籠松といふことを　頁暹法師
松風の音せさりせは藤浪をなにゝかゝれる花としらまし
二條關白家にて池邊藤花といへることをよめる
大納言經信
池にひつ松のはひえに紫の浪おりかくるふちさきにけり
百首歌中に藤花を　修理大夫顯季
住吉の松にかゝれる藤の花風の便に浪やおるらん
雨中藤花といふことを　神祇伯顯仲
ぬるゝさへうれしかりけり春雨に色さす藤のしつくと思へは
隣家藤花といへることをよめる　内大臣家越後
あしかきのほかとはみれと藤花匂ひは我をへたてさりけり
三月盡の心をよめる　大僧都證觀
春の行みちにきむかへ時鳥かたらふこゑに立やとまると
内大臣
春はおし人はこよひとたのむれは思わつらふけふの暮哉
中納言雅定
のこりなく暮行春ををしむとて心をさへもつくしつる哉
攝政左大臣家にて人々に三月盡のこゝろをよませ
けるによめる　源俊頼朝臣
かへる春卯月のいみにさしこめて暫しみあれの比までもみん
重服に侍けるとし三月盡の心をよめる

思ひやれめくりあふへき春たにもたちわかるゝは悲しき（かりけりイ）物を
藤原顯輔朝臣

金葉和謌集第二

夏部

う月の一日のころもかへの心をよめる　源師賢朝臣
我のみそいそきたゝれぬ夏衣ひとへに春を惜しむ身なれは

二條關白家にて人々餘花の心をよませ侍によめる　藤原盛房
夏山の青葉ましりの遅櫻初花よりもめつらしき哉

おなし心をよめる　皇后宮肥後
春はいかに契おきてか過ぬるとおくれてにほふ花にとはゝや

應徳元年四月三條内裏にて庭樹結葉といへること
をよませ給へる　院御製
おしなへて梢みとりに成ぬれは松の千とせもわかれさりけり

大納言經信
玉柏庭もはひろに成りにけりこやゆふしてゝ神まつるころ

鳥羽殿にて人々歌つかうまつりけるに卯花の心を
よめる　春宮大夫公實
雪の色をうはひてさけるうの花にをのゝ里人冬こもりする

卯花遠墻といふ心を　大藏卿匡房
いつれをかわきてならまし山里のかきねつゝきに咲るうの花

江侍從
雪としもまかひも果てすうの花はくるれは月の影かとも見ゆ

攝政左大臣
卯花のさかぬ垣ねはなけれとも名になかれたる玉川の里

卯花誰墻といふ心を　中納言實行
神山のふもとにさけるうの花はたかしめゆひしかきねなる覽

卯花をよめる　大納言經信
賤のめかあしひたく屋も卯花の咲しかゝれはやつれさりけり

源盛清
うの花をおとなし川の浪かとてねたくもをらて過にける哉

大中臣實長
卯花の青葉も見えすさきぬれは雪には名のみかはるなりけり

鳥羽殿歌合に卯花をよめる　藤原季通
見る人のたちしとまれはうの花のさける垣根は白川の關

鳥羽殿歌合に郭公をよめる　修理大夫顯季
み山いてゝまた里なれぬ時鳥たひの空なるねをやなくらん

尋郭公といへることをよめる　藤原節信
けふもまた尋くらしつ時鳥いかてきくへき初音なるらん

郭公歌十首人々よませ侍ける次に　攝政左大臣

時鳥すかたは水にやとれともこゑはうつらぬ物にそありける
源雅光
時鳥なきつとかたる人つてのことのはさへそうれしかりける
源俊頼朝臣
ほとゝきす聲待つけて聞ほとや人に我身のうらやまるらん
藤原重基
住吉のまつとしもせは時鳥うらみぬさきにおとはしてまし
郭公を尋ける日はきかて二日はかりありてなきけるを聞てよめる
橘成元
時鳥音羽の山のふもとまてたつねしこゑをこよひきく哉
長實卿家歌合に
左京大夫經忠
としことに聞と聞すれと時鳥こゑはふりせぬ物にそありける
待郭公
内大臣
戀すてふなきなやたゝん時鳥待つにねぬよのかすしつもれは
ほとゝきすをよめる
藤原顯輔朝臣
時鳥心も空にあくかれてよかれかほなるみ山への里
承暦二年内裏の歌合に人にかはりてよめる
藤原孝善
時鳥あかて過ぬる聲によりあとなき空をなかめつる哉
郭公をよめる
權僧正永縁
聞たひにめつらしけれは郭公いつもはつれの心地こそすれ

待わひて尋さりせは時鳥たれとか山のかひになかまし
源俊頼朝臣
稲荷山たつねやみまし時鳥待にしるしのなきかと思へは
大中臣公長
雲外時鳥といふ心をよめる
空になる心のきかは郭公雲のよそには思はさらまし
清原祐隆
郭公といふことをよめる
みわの山すきかてになけ時鳥たつぬるけふのしるしと思はん
中納言實行
時鳥驚夢といへることをよめる
おとろかす聲なかりせは郭公また現にはきかすやあらまし
源俊頼朝臣
待郭公といへる心を
院御製
またすてふ我名はたてし時鳥なきをこしつと人にかたるな
時鳥まつにかゝりてあかすかな藤の花とや人はみるらん
二條關白家筑前
俊忠卿家歌合に
まつ人の宿をはしらて郭公なちの山へをなきてすくなり
中納言女王
時鳥ほのめく聲をいつかたときゝまとはしつ明ほのゝ空
前齋院六條
郭公をよめる
宿ちかくしはしかたらへ郭公待よのかすのつもるしるしに
中納言雅定

時鳥まれになく夜は山ひこのこたふるさへそ嬉しかりける　源　忠季

玉さかにとふひのもりの梢よりなのりてすくる時鳥かな　源俊頼朝臣

ほとゝきす待夜の数はかさなれと聲はつもらぬ物にそ有ける

宇治前太政大臣家の歌合に郭公をよめる　康資王母

山ちかく浦こく舟は時鳥なくわたりこそとまりなりけれ

匡房卿美作守にてくたりける時みちにて時鳥の鳴を聞てよめる　中原高眞

きゝもあかすこきそわかるゝ時鳥我心なるふなてならねは

時鳥をよめる　藤原成通朝臣

時鳥一聲鳴て明ぬれはあやなく夜半のうらめしき哉

月前郭公を　皇后宮式部

時鳥雲のたえまにもる月のかけほのかにもなきわたる哉

曉聞時鳥を　源　定信

わきもこにあふ坂山の時鳥あくれはかへる空になくなり

尋時鳥といへることを　よみ人しらす

時鳥たつぬるたにもある物をまつ人いかて聲をきくらん

雨中時鳥を　大納言經信

郭公雲ちにまとふこゑすなりをやみたにせぬ五月雨の空

獨聞郭公　藤原爲忠

ねさめするほともしあらは時鳥これはさくやとゝはまし物を　源俊頼朝臣

なきつとも誰にかいはん時鳥かけより外に人しなけれは

五月五日實能卿のもとにくす玉つかはしける　内大臣

あやめくされたくも君かとはぬ哉けふは心にかゝれと思に

永承四年殿上根合にあやめ草をよめる　大納言經信

萬代にかはらぬものは五月雨のしつくにかほるあやめなり鳧

郁芳門院根合にあやめをよめる　藤原孝善

菖蒲草ひくてもたゆくなかきねはいかてあさかの沼に生けん

承暦二年内裏歌合にあやめ草をよめる　春宮大夫公實

玉江にやけふのあやめは引つらむみかける宿の妻と見ゆるは

宮つかへしける娘のもとに五月五日くすたまつかはすとて　權僧正永縁母

あやめ草我身のうきを引かへてなへてならぬにおひも出なん

百首歌中にあやめを　春宮大夫公實

あやめ草よとのにおふる物なれはねなから人は引にや有らん

五月五日家にあやめふくをみてよめる

右近府生秦兼久

おなしくはとゝのへてふけ菖蒲草五月雨たらはもりも社すれ

昔中の院にすまはせ給ひけるほとには見えさりけるあやめを人の中の院のなと申けるをきゝてよませ給ける　三　宮

あさましや見し故里のあやめ草我しらぬまにおひにける哉

五月雨をよめる　參議師賴

さみたれに岩かき沼の水こえてまこもかるへき方もしられす

五月雨の心をよめる　藤原定通

五月雨は日かすへにけりあつまやのかやか軒はの下くつる迄

承暦二年内裏歌合によめる　源道時朝臣

五月雨に玉江の水やまさるらんあしの下葉のかくれ行哉

俊忠卿家歌合に五月雨の心をよめる　藤原顯仲朝臣

五月雨に水まさるらしさはた川まきのつき橋うきぬはかりに

右兵衛督實能

五月雨は小田のみなくちてもかけて水の心にまかせてそ見る

三　宮

五月雨は入江の橋のうきぬれはおろす筏の心地こそすれ

源俊賴朝臣

さみたれは軒のしつくのつく〳〵とふりつむ物は日數なり鳬

夏月如秋といへることをよめる　清原祐隆

五月雨のはれまの月のさやけきは秋の空にもおとらさりけり

攝政左大臣家にて夏月如秋を　神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしく白雪は月のいるこそきゆるなりけれ

俊忠卿家歌合にくゐなの心をよめる　藤原顯綱朝臣

さとことにたゝく水鷄の音すなり心のとまる宿やなからん

攝政左大臣家にて水鷄の心をよめる　源雅光

よもすからはかなく叩く水鷄哉させる戸もなき柴のかりやを

實行卿家歌合に夏風の心をよめる　修理大夫顯季

夏衣すそのゝ草を吹風に思もあへす鹿やなくらん

水風曉涼といへることをよめる　源俊賴朝臣

風ふけははすのうきはに玉すへて涼しく成ぬ日くらしの聲

ともしの心を　源仲正

澤水にほくしのかけのうつれるをふたともしとや鹿は見る覽

神祇伯顯仲

鹿たゝぬは山のすそにともしゝて幾夜かひなき夜をあかす覽

藤原忠季

ともしすと山は雫にそほちつゝおのへに夜をもあかしつる哉

家歌合に花橘を　中納言俊忠

さ月やみ花橘のありかをは風のつてにそ空にしりける

百首歌中に橘の心をよめる　春宮大夫公實

やとことに花橘そにほふなる一木か末に風はふけとも

二條關白家にて雨後野草といふことをよめる　　源俊頼朝臣

この里に夕立しけりあさちふや露のすからぬ草の葉そなき

實行卿歌合に鵜川をよめる　　中納言雅定

大井川いくせを舟の過ぬらんほのかになりぬ篝火のかけ

綠樹藏月といへることを

月かけの靑葉か下にもりこれは木枯ふかむ秋をこそまて

夏月を　　源親房

玉くしけふたかみ山の木のまよりいつれはあくる夏の夜の月

六月廿日ころに秋の節になる日人のもとにつかはしける　　攝政左大臣

みな月のてる日のかけはさしなから風のみ秋のけしきなる哉

公實卿家にて對水待月といへることをよめる　　源俊頼朝臣

山のはを玉えの水にうつしもて月をは涙の下に待かな

藤原基俊

〔以下闕〕

後冷泉院御時皇后宮歌合に七夕の心を　　土佐內侍

萬世に君そ見るへき七夕のゆきあひの空を雲の上にて

中納言實行

心をもかす物ならは七夕のあふをはよそに思はさらまし

七夕の心を　　能因法師

七夕の苔の衣をいとはすは人なみ／＼にかしもしてまし

宗延法師

天川君わたりなはかさゝきの橋うちみたる涙もたゝなん

攝政左大臣家にて七夕の心をよめる　　藤原時昌

ひこ星のうきつのなみに舟出する心のうちを思こそやれ

七月七日父の服にて侍けるとしよめる　　橘元任

ふち衣いみもやすると七夕にかさぬにつけてぬるゝ袖かな

七夕心をよめる　　前齋宮河內

こひ／＼てこよひはかりや七夕の枕にちりもつもらさるらん

勝赴法師三宮イ

天の川別れにむねのこかるれはかへさの舟はかちもとられす

中納言國信

七夕にかせる衣の露けさにあかぬけしきを空にしるかな

一宮小辨

七夕の天の戸わたるかちの葉に思ふことこそかけとつきせれ

七夕後朝の心を　　內大臣

限りありてわかるゝ時は七夕の涙の色はかはらさりけり
皇后宮權大夫師時
織女のあかぬ別のなみたにや花のかつらも露けかるらむ
内大臣家越後
天の川かへさの舟に涙かけてのりわつらはゝ程もふはかり
草花告秋といふことをよめる
源雅兼朝臣
咲初るあしたの原の女郎花秋をしらするつまにそ有ける
おなし心をよめる
源縁法師
咲にけりくちなしそめの女郎花いはれとしるし秋のけしきは
はしめの秋ふしみにて山里秋來といへることをよめる
大納言經信
をのつから秋はきにけり山里の葛はひかゝるまきのふせやに
田家早秋といへることをよめる
右兵衞督伊通
稲葉ふく風の音せぬ宿ならは何につけてか秋をしらまし
〔題闕〕
僞に成そしぬへき月影をこのみる許り人にかたらん〔口歌〕
鳥羽殿にて旅宿月といへることをよめる
春宮大夫公實
我こそはあかしの浦に旅ねせめおなし水にも宿る月哉
寛治八年八月十五夜鳥羽殿翫池上月といへることをよませ給ひける
院御製
池水に今宵の月をうつしもて心のまゝに我ものと見ん
大納言經信
てる月の岩間の水に宿らすは玉ゐるかすをいかてしらまし
民部卿忠教
翫明月といふことを
いつくにも今宵の月を見る人の心やおなし空にすむらん
後冷泉院御時皇后宮歌合に駒迎の心をよめる
藤原隆信
引駒のかすより外に見えつるは關の清水の影にそ有ける
駒迎の心をよめる
源仲正
東路をはるかにいつる望月の駒に今宵や逢坂の關
藤原朝隆
引駒の影をならへて逢坂の關路を月もこゆる成けり
八月十五夜の心を
源親房
さやけさは思ひなしかと月影をこよひとしらぬ人にとはゝや
閏九月あるとしの八月十五夜の心をよめる
春宮大夫公實
秋は猶のこりおほかる年なれとこよひの月の名こそおしけれ
水上月をよめる
前齋院六條
雲の浪かゝらぬさとの月影を清瀧川にうつしてそ見る
依月厭雲といふことを
源明實朝臣
さやかなる月をかくせる雲なれは心なき名も立にやあるらん

八月十五夜月を　藤原爲忠
いつとなくおなし空行雲なれと今宵はけれと思なるへし
九月十三夜閑見月といふことをよめる
すみのほる心や空を拂らん雲のちりゐぬ秋の夜の月　源俊賴朝臣
月をよめる　皇后宮肥後
月を見て思ふ心のまゝならは行衛もしらすあくかれなまし
人のもとにまかりて物申ける程に月の入にけれは
よめる　源師賢朝臣
いかにして綱かけん天の川なかるゝ月やしはしとまると
長經のかつらの山庄にて閑見月といへることを
大納言經信
【歌闕】
秋月如霜といふことをよめる　藤原隆經
菊の上に霜なかりせはいかにして今宵の月をよるとしらまし
翫明月といへることを　源行宗朝臣
名殘なく夜半の嵐に雲晴れて心のまゝにすめる月哉
八月十五夜人々歌よみけるによめる　平師季
みかさ山光をさして出しよりくもらてあけぬ秋の夜の月
攝政左大臣家にて山月といへることをよめる
藤原親隆

みわの山杉もゝりくる影見れは月こそ秋のしるしなりけれ
澳明無雲といへることを　瞻西上人
天の河雲の梯かきたえて谷より月のすみわたるらん
宇治入道前太政大臣家にて卅講の歌合によめる
よみ人しらす
宿からそ月の光もまさりける世のくもりなくすめはなりけり
月をよめる　藤原忠隆
なかむれはふけ行まゝに雲はれて空ものとかにすめる月哉
皇后宮にて江上月を　藤原重基
秋の夜はふけ行空に雲はれて入江におつる山のはの月
月浮山水といふことを　藤原忠兼
秋山の清水はくましにこりなはやとれる月の影もそする
顯季卿家にて九月十三夜月のうたよみけるによめ
る　大宰大貳長實
くまもなき鏡とみゆる月影に心うつらぬ人はあらしな
源俊賴朝臣
むら雲や月のくまをはのこふらむ晴行まゝに照まさる哉
攝政左大臣家にて野徑月をよめる　源定信
ひるとのみいはれのゝへの月かけは露計こそよると見えけれ
奈良花林院歌合によめる　權僧正永緣
いかなれは秋は光のまさるらんおなしみかさの山のはの月

山階寺の涅槃會にまいりての夜勝喜法師にあひてよもすから月を見て　琳賀法師

なからへは思出にせむおもひ出よ君とみかさの山のはの月

詠月歌　藤原顯輔朝臣

みかさ山もりくる月の清けれは神の心もすみやしぬらむ

太皇太后宮扇合に月の心をよめる　大納言經信

春日山みねよりいつる月影はさほの川瀬の氷なりけり

後冷泉院御時殿上人あまたくして月みありきけるを見てよめる　よみ人しらず

うらやまし雲の上人うちむれてをのか物とや月を見るらん

攝政左大臣家にて山月といへることをよめる　藤原時昌（衍歟）

神のすむみかさの山の月なれは假初にたにゐる雲たにもなし

月の心をよめる　藤原家綱

今よりは心ゆるさし月かけの行衛もしらす人さそひけり

月照古橋といへることを　三　宮

とたえして人もかよはぬ棚橋は月はかりこそすみわたりけれ

水上月といふことを　藤原實光

月影のさすにまかせて行舟はあかしのうらやとまりなるらん

題しらす　太宰大貳長實

さらぬたに玉にまかへておく露をいとゝみかける秋のよの月

一〻永承四年殿上歌合によめる　藤原家經朝臣

よとゝもにくもらぬ雲の上なれは思ふことなく月を見るかな

月前旅宿といふことを　修理大夫顯季

松かれに衣かたしきよもすからなかむる月をいもみゆらんや（かイ）

獨見月といへることを　藤原有教母

なかむれはおほえぬこともなかりけり月や昔のかたみなる覽

行路曉月といふことを　權僧正永緣

諸共にいつとはなしに在明の月のみをくる山ちをそ行く

對山待月といへることを　土御門右大臣

秋の夜の月待程のうたゝねに山のはのみそ夢に見えける

山家曉月をよめる　中納言顯隆

山のはの門田の稻のほの〳〵とあくるもしらす月をみる哉

月のあかゝけるころあかしにまかりて月見てのほりけるに月はいかゝなと尋けるをきゝてよめる　平忠盛朝臣

有明の月もあかしの浦風に涙はかりこそよるとみえしか

月前落葉を　源俊頼朝臣

あらしをやはもりの神もたゝるらん月に紅葉の手向しつれは

むしをよめる　前斎院六條

露しけき野邊にならひて蛬我手枕の下になくなり

はたおりといふ虫を　顯仲卿母

さゝかにの糸ひきかくる草むらにはたおる虫の聲きこゆなり

題しらす　よみ人しらす

玉つさはかけてきつれと鴈かねはうはの空にも聞ゆなるかな

春宮大夫公實

いもせ山みねのあらしや寒からん衣かりかれ空になくなり

鹿をよめる　三條大進

つまこふる鹿そなくなるひとりねの床の山風身にや染むらん

おなし心をよめる　藤原季孝

（秋歟）
朝ことに聲もかはらす鳴鹿はおなし妻をや戀わたるらん

曉聞鹿といふことを　皇后宮右衛門佐

思ふことあり明の野の月影にあはれをそふるさをしかの聲（かたの（流布本））

内大臣家越後

夜半になく聲に心そあくかるゝ我身は鹿の妻ならねとも

田家鹿をよめる　藤原宗國

山田もるしつの庵のあたりには鹿より外にくる人もなし

攝政左大臣家にて旅宿鹿といへることをよめる　源雅光

さもこそはみやこ戀しき旅ならめ鹿のねにさへぬるゝ袖哉

しかの歌とてよめる　藤原顯仲

世中をあきはてぬとやさをしかの今は嵐の山になくらん

野草帶露といふことを　皇后宮肥後

白露と人はいへとものへ見ればおく花毎に色そかはれる

藤原行家

秋ならて妻よふ鹿を聞しかな鳴から聲そ身にはしむかと

太皇太后宮の扇合に人にかはりてはきの心をよめる　僧正行尊

小萩原にほふさかりは白露も色々にこそ見え渡りけれ

太宰大貳長實

しらすけのまのゝ萩はら露なからおりつる袖そ人なとかめそ

女郎花をよめる　隆縁法師

女郎花さけるのへにそやとりぬる花のなたてに成やしぬらん

顯隆卿家歌合に女郎花をよめる　中納言俊忠

夕露の玉かつらして女郎花のはらの風にをれやふすらん

女郎花をよめる　藤原顯輔朝臣

白露や心をくらん女郎花色めく野へに人かよふなり

攝政左大臣

女郎花夜のまの風にをれふしてけさしも露に心おかるな

攝政左大臣家にて蘭を　源忠季

さほ川の汀にさける蘭なみのよりてやかけんとすらん

蘭をよめる　右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとや蘭秋の野毎に鹿の立らん

神祇伯顯仲

さゝかにの糸のとちめやあたならんほころひわたる蘭哉
源俊頼朝臣
さゝかにの糸にかゝれる露たれをぬしとて人のかるらん
鳥羽殿前栽合にをみなへしをよめる　春宮大夫公實
あたしのゝ露吹みたる秋風になひきもあへぬ女郎花哉
野草留人といへることを　平忠盛朝臣
行人もまれくか野への花薄今宵もこゝに旅ねせよとや
堀河院御時御前にてすゝきをよめる　源俊頼朝臣
鶉なくまのゝ入江の濱風にをはな浪よる秋の夕暮
河霧をよめる　紀宗兼
淀河のをちかた見えぬ秋霧にともろならして舟くたるなり
藤原基光
宇治川の河瀨も見えぬかは霧にまきの島人舟よはふなり
藤原行家朝臣
河霧の立こめつれはたかせ舟分行さほの音のみそする
郁芳門院根合に菊をよめる　中納言通俊
さかりなるまかきの菊をけさみれはまた空さえぬ雪そ積れる
鳥羽院前栽合によめる　修理大夫顯季
千年まて君かみるへき菊なれは露もあたにはおかしとそ思ふ
攝政左大臣家にて紅葉隔垣といへることをよめる
藤原仲實朝臣

もすのゐるはしの立枝のうす紅葉たれ我園の物と見るらん
源師賢朝臣
承暦二年内裏歌合に
はゝきゝの梢やいとゝおほつかなみなそのはらも紅葉しに見
宇治前太政大臣大井川にまかりけるに水邊紅葉と
いふことをよめる　大納言經信
大井川岩浪たかし筏士よ岸の紅葉にあからめなせそ
春宮大夫公實
惜めとも四方の紅葉は散はてゝとなせそ秋のとまりなりける
太皇太后宮扇合に人にかはりて紅葉をよめる
源俊頼朝臣
音羽山紅葉ちるらし逢坂の關の小川に錦おりかく
武藏の國にまかりて二村山のもみちを見てよめる
橘能元
いくらとも見えぬ紅葉のにしき哉たれ二村の山といふらん
大井河御幸につかうまつれる　修理大夫顯季
大井河ゐせきの音のなかりせは紅葉をしける渡とやせん
深山紅葉といふことを　大納言經信
山守よをのゝ音たかくひゝくなり峯の紅葉はよきてきらせよ
紅葉をよめる　神祇伯顯仲
よそに見る峯の紅葉や散りくるとふもとの里に嵐をそまつ
大井川の逍遙に水上落葉といへることをよめる

藤原伊家

柞ちる岩間をかつく鴨鳥はをのか毛はもゝみちしにけり

落葉埋橋といへることを　　修理大夫顯季

をくら山峯のあらしの吹からに谷の梯もみちしにけり

落葉藏水いへることを　　大中臣公長朝臣

大井河ちる紅葉はにうつもれてとなせの瀧は音のみそする

落葉隨風といふことを　　長實卿母

色ふかきみ山かくれの紅葉はを嵐の風の便にそ見る

九月盡の心をよめる　　中原經則

あすよりは四方の山へに秋霧の面影にのみたゝむとすらん

源　涼　國

おしめとも野への草木のかれぬれは露たに秋はとまらさり息

源師俊朝臣

草の葉にはかなくきゆる露しもをかたみにをきて秋の行らん

金葉和謌集第四

冬部

承曆元年御前にて殿上のをのことも探題にて歌つかうまつりけるにしくれをとりてつかうまつりける　　源師賢朝臣

神無月時雨まゝにくらふ山下てるはかり紅葉しにけり

從二位藤原親子家の造紙(歌イ)合にあらし(時雨イ)を　　修理大夫顯季

時雨つゝかつちる山の紅葉はをいかに吹夜の嵐なるらん

奈良の人々百首歌よみけるに時雨をよめる　　權僧正永緣

山河の水はまさりて時雨には紅葉の色そふかく成りける

時雨を　　源　定　信

をとにさへ袂をぬらす時雨かなまきの板屋のよはのねさめに

攝政家三河

神な月時雨の雨のふるたひにいろ〳〵になるすゝか山かな

後朱雀院御時御前にて霧籠紅葉といへることをよめる　　中納言資仲

紅葉する山は秋霧はれせれは立田の川のなかれをそ見る

大井河にまかりて落葉をよめる　　平　致　親

大井河紅葉を分る筏士もさほに錦をかけてこそ見れ

落葉をよめる　　大納言經信

みむろ山紅葉散るらし旅人のすけのを笠に錦たりかく

竹風似雨と云ことを　　中納言基長

なよ竹のおとにそ袖をかつきつるぬれぬにこそは風と知ぬれ

時雨をよめる　　覺雅法師

秋はてゝとふ人もなき山里に時雨のみこそ音はともなへ

十月十日比に鹿の鳴けるを聞てよめる　法印光清 八幡別當
なにことをあきはてなからさを鹿の思かへして妻を戀ふらん
百首歌中に紅葉を　源俊頼朝臣
立田川しからみかけて神なひのみ室の山の紅葉をそ見る
同百首に網代を　皇后宮肥後
ひをのよる川瀨に見ゆる網代木はたつ白浪の上にやあるらん
月照網代といへることを　大納言經信
月清くせゝの網代によるひをは玉もにさゆるこほりなりけり
旅宿冬夜といふことをよめる
たひねするよ床さえつゝ明ぬらしとかたそかれの聲聞ゆなる
關路千鳥といふことを　源兼昌
あはち島かよふ千鳥の鳴聲に幾夜ね覺ぬすまの關守
千鳥をよめる　神祇伯顯仲
風さむみと島かさき（いそイ）を漕ゆけは夕なみ千鳥立ゐなくなり
百首歌中に霜を　源俊頼朝臣
住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜置まとふ冬は來にけり
氷をよめる　藤原隆經朝臣
たかせ舟さをの音にそしられけるあしまの氷ひとへしにけり
叅眞勝菩提院に人々氷の歌よみ侍けるに
山河も氷りにけりな岩間よりとゝろき落る音たゆるまて
谷水結氷といふことを　内大臣
谷川のよとみにむすふ氷こそみる人もなき鏡なりけれ
百首歌中に氷を　藤原仲實
しなかとりゐなのふしはら風さえてこやの池水氷しにけり
冬月をよめる　神祇伯顯仲
冬さむみ空にこほれる月影は宿にもるこそとくる成けれ
水滿池上といふことを　大納言經信
水鳥のつらゝの枕ひまもなしむへさえけらしとふのすかこも
深山霰をよめる　大藏卿匡房
はし鷹のしらふに色やまかふらんとかへる山にあられふる也
水鳥をよめる　源家時
嵐ふく夜半の河波たかけれはうきねのをしも夢覺にけり
水邊寒草をよめる　大中臣公長朝臣
高根には雪ふりぬらしま柴河ふきのかけくさたるひすかれり
宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　源頼綱朝臣
衣手によこのうら風さえ〳〵てこたかみ山に雪ふりにけり
橋上初雪といへることをよめる　前齋院尾張
白浪の立わたるかと見ゆる哉濱名の橋にふれる白雪
初雪をよめる　大納言經信
初雪はまきの葉白くふりにけりこやをの山の冬のさひしさ
雪中鷹狩をよめる　源道濟朝臣

ぬれ／＼もなをかりゆかんはし鷹の上羽の雪をうち拂ひつゝ

源俊頼朝臣

雪ふれは谷の梯うつもれて梢そ冬の山ちなりける

内大臣家越後

をはりや交野の野邊に鳴きゝすさこそはかりの人はつらけれ

大藏卿匡房

百首歌中に雪の心を

いかにせん末の松山浪こさはみねの初雪きえもこそすれ

皇后宮攝津

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる

ふる雪に杉の青葉もうつもれてしるしも見えすみわの山本

源俊頼朝臣

箸鷹をとりかふ澤にかけみれは我身もともにとやかへりせり

中納言女王

岩代のむすへる松に雪ふれは春もとけすやあらんとすらん

六嘗會主基方備中國獮高山をよめる　藤原行盛

雪ふれはいやたか山の梢にはまた冬なから花さきにけり

雪の歌とてよめる　源俊頼朝臣

衣手のさえ行まゝにしもとゆふかつらき山に雪はふりつゝ

雪の御幸にをそくまゐりて侍けれはしきりにをそ

きよしの御つかひたまはりてつかまつれる　六條右大臣

朝ことの鏡のかけに面なれて雪見にとしもいそかれぬ哉

すみかまをよめる　皇后宮權大夫師時

炭かまに立煙さへをの山は雪けの雲と見ゆるなりけり

百首歌中に雪を　隆源法師

都たに雪ふりぬれはしからきのまきの杣山あとたえにけり

皇后宮肥後

みちもなくつもれる雪にあとたえて故郷いかにさひしかる覽

選子内親王いつきにおはしましける時雪ふりたる

に月あかゝりける夜まゐりけれは女房たちれたり

けるにや月もみさりけれは殿上のすみにむすひつ

けゝるうた　藤原兼房朝臣

かきくらし雨ふる夜はやゝいかならん月と雪とはかひなかり覽

冬月宿水といへることをよめる　平實重

谷川にむすふ氷の下にさへ心ふかくもやとる月かな

冬月をよめる　源雅光

あらち山雪ふりつもる高根よりさえてもいつるよはの月哉

神樂の心をよめる　藤原致時

あさくらの聲こそ空にきこえけれ天の岩戸を今やあくらん

家經朝臣桂の山里障子繪に神樂したる所をよめる

康資王母

柳はやたちまふ袖のをひ風になひかぬ神はあらしとそ思ふ

神樂をよめる　　皇后宮權大夫師時
神かきのみ室の山にしもふれはゆふしてかけぬ榊はそなき
氷をよませ玉ひける　　三　宮
つなかれとなかれもゆかす高せ舟むすふ氷のとけぬ限りは
水鳥の心をよめる　　前齋院六條
なか〳〵に霜のうはきをかされてやをしの毛衣さえまさる覧
池水をよめる　　前齋院内侍
浪枕いかにうきねをさたむらんこほりますたの池のをし鳥
修理大夫顯季
さ莚に思ひこそやれさゝのはにさゆる霜夜のをしのひとりね
十二月廿日ころに山家曉といへることをよめる　　春宮大夫公實
山里の竹のすかきしあらけれは内外もわかす有明の月
依花待春　　内大臣
何となくとしのくるゝはおしけれと花のゆかりに春をまつ哉
歳暮の心をよめる　　藤原成通
人しれす暮行年をおしむまに春いとふ名の立ぬへき哉
攝政左大臣家にて冬題ともを探てよみけるに歳暮
をとりてよめる　　藤原永實
かそふるに殘すくなき身にしあれはせめてもおしき年の暮哉
この歌よみてとしの中にまかりけるとそ。

歳暮の心をよみ玉ひける　　三　宮
いかにせん暮行としをしるへにて身を尋つゝ老はきにけり
おなし心を　　中原長國
年暮れぬとはかりこそはきかましを我身の上に積らさりせは
中納言國信
なにことを待とはなしに明くれてことしもけふに成にける哉

金葉和謌集第五

賀部

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへること
をよませ給へる　　堀河院御製
ちよふれと面かはりせぬ河竹はなかれての代のためしなり皃
郁芳門院歌合に　　六條右大臣
萬代はまかせたるへし岩淸水なかきなかれを君によそへて
堀河院御時中宮還御の時松契遐年といへることを
よめる　　大納言俊實
水の面に松のしつえのひちぬれはちとせは池の心なりけり
於禁中翫花といふ心を　　中納言實行
九重にひさしく匂へ櫻花のとけき春のかせとしらすや
花契遐年といふことを　　源師俊朝臣
萬代とさしてもいはし櫻花かさゝん春の限りなけれは

橘俊綱朝臣家にて歌合によめる　藤原國行
自から我身さへこそ祝はるれたれ君(流布本)か千代にもあははイまほしさに
百首歌中に祝の心を　源俊頼朝臣
君か代は松のうはゝにおく露のつもりて四方の海となるまて　大納言經信
祝の心をよめる
君か世のほとをはしらて住吉の松をひさしと思ひける哉　永成法師
後冷泉院御時弘徽殿女御歌合に祝の心をよめる
君か世は末の松山はる〳〵とこすしらなみのかすもしられす
嘉承二年三月鳥羽殿行幸に池上花をよませ給ひける　堀河院御製
池水の底さへにほふ櫻花見るともあかし千代の春まて
大嘗會主基方辰日參音聲鼓山をよめる　藤原行盛
をとたかき鼓の山のうちはへてたのしき御代となるそ嬉しき
悠紀方の朝日郷をよめる　藤原敦光朝臣
曇なきとよのあかりにあふみなる朝日の郷は光さしそふ
巳日樂破に雄琴郷をよめる
松かせのをことの里にかよふにそ治まれるよのこゑは聞ゆる
後冷泉院御時大嘗會主基方に備中國二萬里郷イをよめる
る　藤原家經

みつき物はこふよほろをかそふれはにまの里人かすそひに鳬
おなしくにいなゐといふことを人にかはりてよめる　高階明頼
苗代の水はゐなゐにまかせたり民やすけなる君か御代哉　皇后宮肥後
祝の心をよめる
いつとなく風吹空にたつちりのかけもしられぬ君か御代哉　太宰大貳長實
花契遐年といふ心を
花もみな君か千年をまつなれはいつれの春か色はかはらん
攝政左大臣中將にて侍ける比春日のつかひに侍りけるに周防内侍女使にてくたりけるに爲隆卿行事辨にて侍けるにつかはしける歌　周防内侍
いかはかり神もあはれとみかさ山二葉の松の千代のけしきを
題しらす　藤原道經
君か代は幾萬代かゝさぬへきいとぬき河のつるの毛衣
宇治前太政大臣家にて歌合に祝の心をよめる　中納言通俊
きみか代は天のこやねの尊よりいはひそめし久しかれとは　源俊頼朝臣
おちたきつ八十うち河の早き瀬に岩こす浪は千世のかすかも
新院北面にて藤花懸松といへることを　大夫典侍

藤浪は君か千とせの松にこそかけて久しくみるへかりけれ

祝の心をよめる　源忠季

君か代はとみの小川の水すみて千年をふとも絶えしとそ思ふ

實行卿家歌合に祝心をよめる　藤原爲忠

みか月の（みつ垣の（流布本））ひさしかるへき君か代を天てる神や空にしるらん

前中宮はしめてうちへまいらせ給ひけるよ雪のふりて侍けれは六條右大臣のもとへつかはしける　宇治前太政大臣

雪つもる年のしるしにいとゝしくちとせの松の花さくそ見る

返し　六條右大臣

つもるへし雪つもるへし君か代は松の花さく千度みるまて

天喜四年皇后宮歌合に祝の心をよませ給へる　後冷泉院御製

長濱のまさこのいろ（かす（流布本））もなにならすつきせす見ゆる君か御代哉

松上雪をよめる　源頼家（朝臣イ）

萬代のためしと見ゆる松の上に雪さへつもるとしにも有哉

前齋院いせにおはしましける比いしなとりの石あはせといへることをせさせ給ひけるに祝の心をよめる　源俊頼朝臣

くもりなくとよさかのほる朝日には君そつかへん萬代まてに

金葉和謌集第六

別離部

兼房朝臣丹後守になりて下りける日つかはしける　大納言經長

君うしな花の宮この花を見て苗代水にいそく心は

返し　藤原兼房朝臣

よそにきく苗代水にあはれわかおり立名をもなかしつる哉

重尹帥下向し侍けるころ人々餞し侍ける時よめる　堀河右大臣

歸るへき旅のわかれとなくさむる心にたかふ涙なりけり

題しらす　讀人不知

をくれゐて我こひなれは白雲のたなひく山をけふやこゆらん

經輔卿のつくしへわたりけるにくしてまかりける時道より上東門院に侍ける人のかりつかはしける　前太宰大貳長房

かたしきの袖にひとりはあかせともおつる涙そよを重ねける

これを御覽してかたはらにかきつけさせ給ひける　上東門院

別れちをけにいかはかり歎くらんきく人さへそ袖はぬれける

源公定の大隅のかみにて下ける時月あかき夜別を惜てよめる　源爲成

はろかなる旅の空にもをくれねはうらやましきは秋の夜の月

對馬守小槻のあきみちか下けるにつかはしける

爲政朝臣妻

奥津島雲井の岸を行かへりふみかよはさむまほろしも哉

俊頼朝臣伊勢國へまかることありていてたちける
時人々餞し侍ける時よめる　參議師頼

いせの海をのゝふるえに朽はてゝ都のかたへかへれとそ思ふ

源行宗朝臣

待つけん我身なりせは歸へきほとをいくたひ君にとはまし

百首中に別の心を　中納言國信

けふはさは立わかるとも便あらはありやなしやの情忘るな

藤原基俊

秋霧の立わかれぬる君によりはれぬ思にまとひぬる哉

橘爲仲朝臣みちのくにへまかりけるに人々餞し侍
りけるによめる　藤原實綱朝臣

人はいさ我身は末に成ぬれは又あふ坂もいかゝまつへき

藤原有貞

戀しさはその人かすにあらすとも都をしのふうちにいれなん

經平卿のつくしへまかりけるにくしてまかりける
日公實卿のもとへつかはしける　中納言通俊

さしのほる朝日に君を思いてんかたふく月にわれをわするな

返し　春宮大夫公實

朝日とも月ともわかすつかのまも君をわするゝ時しなければ

みちのくにへまかりくたりける時あふさかの關よ
りみやこへつかはしける　橘則光朝臣

我ひとりいそくと思ひし東路にかきれの梅はさきも立けり

金葉和歌集第七

戀部

五月五日はしめて女のかりつかはしける

小一條院

しらさりつ袖のみぬれてあやめ草かゝる戀ちにおひむ物とは

大江公資朝臣

しの薄うはらにすかくさゝかにのいかさまにせは人臣きけん(なイ)

曉戀をよめる　神祇伯顯仲

さりともと思ふ限はしのはれて鳥とゝもにそれはなかれける

つれなかりける女のもとへつかはしける

春宮大夫公實

これにしく思はなきを草枕たひにかへすはいなむしろとや

顯季卿家にて人々戀の歌よみけるによめる

藤原顯輔

あふと見て現のかひはなけれともはかなき夢そ命なりける

女のもとへつかはしける　藤原雅光（源イ）
あふまては思ひもよらす夏引のいとをしとたにいふと聞はや
従二位藤原親子家の造哥合に戀の心をよめる
宜源法師
今はたゝねられぬいほそ友とする戀しき人のゆかりと思へは
太宰大貳長實
思ひやれすまのうらみてねたる夜のかたしく袖にかゝる涙を
物申ける人のかみをかいこして見えけるを見てよ
める　津守國基
朝ねかみたか手枕にたはつけてけさは形見とふりこして見る
題しらす　よみ人も
戀すてふ名をたになかせ涙川つれなき人もきゝやわたると
なにせむに思ひかけゝむから衣戀する事はみさほならぬに
中納言雅定
逢ふ事をいつとなきさの濱千鳥涙の立ゐにねをのみそ鳴（ヒイ）
ある宮はらに侍ける人のしのふるにみやこをいて（ひてイ）
ゝあやしのこ家に物申て又の日つかはしける
春宮大夫公實
思いつやありしその夜の呉竹はあさましかりしふし所かな
顯季卿家にて寄織女戀の心をよめる　少將公教母
七夕は又こん秋をたのむらんあふよもしらぬ身をいかにせん

寄水鳥戀といふことを　源師俊朝臣
水鳥のはかせにさはくさゝ浪のあやしきまてにぬるゝ袖哉
寄夢戀と云心を　右兵衛督實能
夢にたにあふとは見えよさもこそはうつゝにつらき心也とも
題しらす　中納言顯隆
白雲のかゝる山ちをふみ見てそいとゝ心は空になりける
たのめてあはぬ戀の心を　源顯國朝臣
逢見んとたのむれはこそくれは鳥あやしやいとゝ立歸るへき
しのふ戀の心を　中納言實行
谷川のうへはこのはにうつもれて下になかると人しるらめや
月前に人をこふることを　藤原基光
なかむれは戀しき人の戀しきにくもらはくもれ秋の夜の月
題しらす　よみ人しらす
つらしとも愚なるにそいはれけるいかに恨むる人にしらせん
物申ける人の前中宮にまいりにければ名殘をこひ
て男のあかゝりける夜いひつかはしける
藤原知房朝臣
面影はかすならぬ身にこひられて雲ゐの月をたれと見るらん
さはることありて久しくなとつれさりける女の許より
いひつかはして侍ける　よみ人不知
あさましやなとかき絶るもしほ草さこそは蜑のすさみなり共

ふみはかりおこせていひたえにける人のもとへつ
かはしける　内大臣家小大進
ふみそめて思ひかへりし紅の筆のすさひをいかて見せけん
實行卿家歌合に戀の心をよめる　長實卿母
しらめやよといつき橋よとゝもにつれなき人を戀渡るとは
藤原道經
戀わひておさふる袖やなかれいつる涙の河のゐせきなるらん
少將公敎母
なかれての名こそ立ぬる涙川ひとめつゝみをせきしあへねは
題しらす　皇后宮右衛門佐
涙川そてのゐせきも朽はてゝよとむ方なき戀をする哉
源顯國朝臣
かくとたにまたいはしろのむすひ松むすほゝれたる我心哉
女のかりつかはしける　藤原顯輔朝臣
戀すてふもしの關守いくたひか我かきつらん心つくしに
左兵衛督實能
命たにはかなからすは年ふともあひみんことをまたまし物を
後朝の心を　源行宗朝臣
つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとそうたかはれける
堀河院御時艶書合に　春宮大夫公實
思ひあまりいかてもらさむおく山の岩かきこむる谷の下水

戀の心をよめる　藤原顯輔朝臣
としふれと人もすさめぬ我戀や朽木の杣の谷の埋木
あるましき人を思ひかけてよめる　よみ人不知
いかにせん數ならぬ身にしたかはてつゝむ袖よりおつる涙を
院のくまのへまいらせおはしける時御むかへにま
いりてたひのとこ露けかりけれはよめる
太宰大貳長實
よもすから草の枕にをく露はふるさとこふる涙なりけり
野分したりけるにいかゝなとをとつれたりける人
のそのゝち又なと（ち隠カ）せさりけれはつかはしける
相模
あらかりし風の後より絶ぬれはくもてにすかく糸にやある覽
國信卿家歌合に夜戀の心をよめる　源俊頼朝臣
よとゝもに玉ちる床のすか枕見せはや人によはのけしきを
五月五日わりなくてもりいてたる所にこもといふ
物を引たりしもわすれかたさにつかはしける
相模
菖蒲にもあらぬまこもを引かけしかりのよとのゝ忘られぬ哉
閏五月侍けるとし人をかたらひけるに後五月すき
てなと申けれは　橘季通
なそもかく戀路にたちてあやめ草あまりなかひくさ月なる覽

人のかりつかはしける　　神祇伯顯仲

ねのつからよかるゝほとのさ蘆は涙のうきになるとしらすや

人をうらみてつかはしける　　藤原惟規

池にすむ我なをゝしのとりかへす物にもかなや人をうらみし（んイ）

女のもとにまかりける後ひとよはいかゝ思ひしな
と申たりければいひつかはしける　　藤原正家朝臣

秋風に吹かへされてくすのはのいかにうらみし物とかはしる（んイ）

かたらひ侍ける人のあなかちに申さすることあり
ければいひつかはしける　　藤原有教母

したかへは身をは捨てゝむ心にも叶はてとまる名こそ惜けれ

長實卿家歌合に戀の心をよめる　　藤原忠隆

つゝめとも涙の雨のしるければ戀する名をもふらしつる哉

人をうらみてつかはしける　　藤原惟規

島風にしはたつなみの立かへりうらみても猶たのまるゝ哉

なき名たちける人のかりつかはしける　　前齋院內侍

あさましや逢せもしらぬ名取川またきに岩まもらすへしやは

あひてあはぬ戀を　　右（左イ）京大夫經忠

一よとはいつか契しかは竹のなかれてとこそ思ひそめしか

俊忠卿家にて戀歌合十首よみけるに響ひてあはぬ
といへることをよめる　　皇后宮式部

逢みての後つらからはよゝをへてこれより增る戀にまとはん

實行卿家歌合に戀の心を　　源俊頼朝臣

いつとなく戀にこかるゝ我身より戀やあさまの烟なるらん

戀の歌とてよめる　　藤原成通朝臣

後世と契し人もなき物をしなはやとのみいふそはかなき

攝政左大臣

いはぬまは下はふ蘆のねをしけみひまなき戀を人しるらめや

かたらひける人のかれ〴〵になりてうらめしかり
ければ申つかはしける　　白川女御越中

まちしよのふけしをなにゝ嘆きけん思たえても過しける身を

戀の心を人々よみけるによめる　　律師實源

命をしかけて契りし中なればたゆるはしぬる心地こそすれ

皇后宮美濃

かきたえて程もへぬるをさゝかにの今は心にかゝらすもかな

旅宿戀の心を　　攝政左大臣

見せはやな君思ひねの草枕玉ぬきかくる旅のけしきを

堀河院御時艶書合につかうまつりける　　皇后宮肥後

思ひやれとはてほとふる五月雨にひとり宿もる袖のしつくを

皇后宮にて文を返さるゝ戀といへることをよめる
皇后宮美濃

こふれとも人の心のとけぬにはむすはれなからかへる玉章

人々に戀の歌よませ侍ける日に人にかはりて　攝政左大臣

心さしあさちか末にをく露の玉さかにとふ人はたのまし

忍戀をよめる　よみ人しらす

しのふれとかひも渚のあま小舟なみのかけても今はうらみし

雲居寺歌合に人にかはりてよめる　三宮大進

なそもかく身にかふはかり思ふらんあひみんとも人の爲かは

寄花戀の心をよめる　攝政左大臣

あたなりし人の心にくらふれは花もときはの物にそありける

百首歌中に忍戀の心をよめる　修理大夫顯季

我戀はからすはにかくとの葉のうつさぬにはとはしろ人もなし

源雅光

あやにくにこかるゝむねも有物をいかにかはかぬ袂なるらむ

大中臣公長朝臣

戀わひて思ひいるさの山のはにいつる月日のつもりぬる哉

つれなかりける人にあふよしをゆめにみてつかは
しける　藤原公教

うたゝねにあふとみつるは現にてつらきを夢と思はましかは

俊忠卿家にて戀の歌十首人々よみけるにくれとと
ゝまらすといふことを　源俊頼朝臣

思草葉末に結ふ白露のたま〳〵きてはてにもたまらす

女をうらみてつかはしける　春宮大夫公實

蔭れはふ水の上とそ思ひしにうきは我身にありけるものを

重服になりたる人のたちなからまうてこんと申た
りけれはつかはしける　橘俊宗女

立なからきたりとあはし藤衣ぬきすてられん身そと思へは

戀の心を人にかはりてよめる　前中宮上總

石はしろ瀧の水上はやくよりをとにきゝつゝ戀わたる哉

題しらす　皇后宮別當

たのめおくとのはたにもなきものをなにゝかゝれる露の命そ

金葉和謌集第八

戀部下

はしめたる戀の心をよめる　良暹法師

かすめては思ふ心をしるやとて春の空にもまかせたる哉

公任卿家にて紅葉海橋立戀といふ三の題を人々に
よませけるにおそくまかりて人々みなかきたるほ
とになりけれは三の題をひとつによめる　藤原範永

こひわたる人に見せはや松の葉も下もみちする天の橋立

後朝戀をよめる　源師俊朝臣

しのゝめの明行空もかへるには涙にくもる物にそ有ける

月増戀といふことを　内大臣

いとゝしく面影にたつこよひかな月を見よともちきさりした(ロイ)

戀の心をよめる　藤原顯輔朝臣

戀わひてねぬよつもれる敷妙の枕さへこそうとく成けれ

鳥羽殿歌合に戀の心を　藤原仲實朝臣

よとゝもに袖のかはかぬ我戀やとしまか磯にかゝる白なみ

〔われをはかれ〳〵になりてと人のかりまかると〕(依流布本補)

聞てつかはしける　よみ人しらす

ことはりや思くらふの山櫻にほひまされる花をめつるも

郁芳門院根合に戀の心をよめる　周防内侍

戀わひてなかむる空の浮雲や我下もえの煙なるらん

人をうらみて五月五日につかはしける

前齋院河内

逢事のひさしにふけるあやめ草たゝかりそめの妻とこそ見れ

戀の心をよめる　太宰大貳長實

つらきをも思ひもしらぬ身の程に戀しさいかて忘れさるらん

題しらす　前中宮上總

さきの世の契をしらてはかなくも人をつらしと思けるかな

戀歌よみける所にてよめる　源俊頼朝臣

忘草しけれる宿をきて見れは思ひのきよりおふる成けり

人を恨みてよめる　よみ人しらす

今よりは思もいてし怨めしといふもは(こイ)たのみか(のイ)ゝるかきりそ(ロイ)(いよ〳〵たのみの(流布本))

逢不會戀の心をよめる　左兵衛督實能

思きやあひみしよはのうれしさに後のつらさの勝るへしとは

人をうらみける比れいならすおほえける人のかり

つかはしける　よみ人しらす

あはすともなからむ世には思出よ我ゆへ命たえし人そと

女のかりつかはしける　藤原永實

する墨もおつる涙にあらはれて戀しきたにもえこそかゝれね

家の歌合に戀の心をよめる　中納言國信

色見えぬ心はかりはしつむれと涙はえこそしのはさりけり(孔聚)

題しらす　よみ人しらす

逢事は夢はかりにてやみにしをさこそ見しかと人にかたるな

題しらす　大納言經信

あしかきにひまなくかゝる蜘のゐの物むつかしくしける我戀

藤原忠隆

おさふれとあまる涙はもる山のなけきにおつる雫なりけり

人を恨みてなけき侍ける比月を見てよめる

橘俊宗女

いかにせんなけきの杜はしけゝれと木の間の月の隠なき世を

物申ける人のひさしくをともせさりけれはつかは

しける　前齋院肥前
かやふきのこやわすらるゝ月ならん久しく人の音信もせす
戀の心をよめる　左兵衛督實能
我戀の思ふはかりも色にいてはいはても人に見せ(えイ)ましものを
もろともに時鳥を待けるにさはることありて入に
けるのちなきつやなと尋けるをきゝてよめる　春宮大夫公實
郭公雲井のよそになりしかは我そなかめの空になかれし
冬の戀といへることをよめる　藤原成通朝臣
水の面にふる白雪のかたもなく消やしなまし人のつらさに
多聞といふわらはをよひにつかはしたりけるに見
えさりけれは月のあかゝりける夜よみ侍　權僧正永縁
待人のおほ空わたる月ならはぬるゝ袂にかけは見てまし
寄水鳥戀を(なきさにあまる(流布本))　攝政左大臣
あふこともなこえにあまる蘆鴨のうきれを鳴と人はしらすや
人をうらみてよめる　源盛經母
さのみやは我身のうきに爲果てゝ人のつらさを恨みさるへき
攝政左大臣家にて戀の心を　源雅光
名にたてるあはての浦の蜑たにもみるめはかつく物と社きけ
恨めしき人のあるにつけてもむかし思出らるゝこ
とありてよめる　前齋院甲斐
いま人の心をみわの山にてそすきにしかたは思しらるゝ
わすれたる人の思いてゝをとつれたるに　橘俊宗女
めつらしや岩間によとむ忘水いく世を過て思いつらん
山の歌合に戀の心をよめる　よみ人しらす
たまさかにあふよは夢の心地して戀しもなとかうつゝなる覧
いかてもと思人のさもあらぬさまにてなそなと人
の申けれは　中原章經
戀わふる君にあふ(へ歟)てふことのはゝ僞さへそうれしかりける
伊賀少將かもとよりつかはしける　前帥資仲
四方の海の浦々ことにあされ共あやしく見えぬいけるかひ哉
返し　伊賀少將
たまさかに涙の立よる浦々はなにのみる目のかひかあるへき
題しらす　上總侍從
あさましや涙にうかふ我身かな心かろくはおもはさりしを
物へまかりけるみちにはしたものゝあひたるをと
はせ侍けれは上東門院に侍けるすまひこそと申すとい
ひけるを聞てよめる　源縁法師
名きくよりかれてもうつる心哉いかにしてかはあふへかる覧
戀の心を　民部卿忠教

戀わひてたえぬ思の煙もやむなしき空の雲となるらむ
女のもとへつかはしける　大納言經信
あふことはいつともなくてあはれ我しらぬ命にとしをふる哉
ある所にて女のなかきかみを打いたして見せけれ
はよめる　藤原顯綱朝臣
人しれす思ふ心をかなへなんかみあらはれて見えぬとならは
堀河院御時艷書合によめる　中納言俊忠
人しれす思ひありその浦風になみのよるこそいはまほしけれ
返し　一宮紀伊
音にきくたかしの濱のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ
くれには必すとたのめたりける人のはつかの月の
出るまて見えさりけれは　攝政家堀河
契をきし人もこすゑのこのまよりたのめぬ月の影そもりくる
心かはりたる人のもとへつかはしける　江侍從
めのまへにかはる心をなみた川なかれてもやと思ひける哉
國信卿家歌合にはしめたる戀の心をよめる　源兼昌
けふこそはいはての杜の下紅葉色にいつれはちりもしぬらん
雪の朝にいてにの辨か許よりかへり侍けるにかれ
よりをくりかへりて侍ける　出羽辨
をくりては歸れと思ひし玉しゐの行さすらひてけさはなき哉
返し　大納言經信
冬の夜の雪けの空にいてしかと影よりほかにをくりやはせし
すみかをしらぬ戀といへることをよめる　前齋院六條
行ゑなくかきこもるにそひき繭のいとふ心のほとはしらるゝ
よにあらん限りはわすれしと契ける人の久しくを
とつれなけれはよめる　よみ人しらす
人はいさ有もやすらん忘られてとはれぬ身こそなき心地すれ
としころ物申ける人のたえてをとつれさりけれは
つかはしける
はやくよりあさき心と見てしかな思たえにき山川の水
題しらす
もちさはやほそ谷川の埋水影たに見えぬ戀にしつむと
人のもとより袖のぬるゝさまを見せはやなと申た
りけれはよめる　皇后宮少將
うらむとも見るめもあらし物ゆへになにかは蜑の袖ぬらす覽
旅宿戀といふことを　修理大夫顯季
戀しさをいもしるらめや旅ねして山のしつくに袖ぬらすとは
人のゆふかたまうてこんと申たりけれはよめる　一宮紀伊

うらむなよ影見えかたき夕月夜おほろけならぬ雲間まつ身を
藏人にて侍ける比うちをわりなくいてゝ女のもとにまかりてよめる　藤原長實
みか月のおほろけならぬ戀しさにわれてそいつる雲の上より
周防内侍したしくなりてのちゆめ〳〵このこともらすなと申ければよめる　源信宗朝臣
あはぬよはまとろむ程のあらはこそ夢にもみきと人に語らめ
なき名立といふことを　左京大夫經忠
人しれすなき名はたてとから衣かさねぬ袖は猶そ露けき
人をうらみて　大中臣輔弘女
あちきなくすくる月日そ恨めしき逢見しほとを隔つと思へは
三井寺にて人々戀の歌よみけるによめる　僧都公圓
つらしとも思はむ人は思ひなんわれなれはこそ身をは恨むれ
かたらひける女のもとにまからんと申けれとさはることありてまからさりけれは五月雨のころをくりて侍ける　よみ人しらす
五月雨の空たのめのみ隙なくて忘らるゝ名そ世にふりぬへき
返し　左兵衛督實能
忘られん名は世にふらし五月雨もいかてか晳をやまさるへき
題しらす　よみ人しらす
あま雲のかへしのかせの音せぬはおもはれしとの心なるへし
あし引の山のまに〳〵たふれたるからきは獨ふせるなりけり
み熊野に駒のつまつく青つゝら君こそまろのほたしなりけれ
つの國のまろやは人をあくた川君こそつらきせゝは見えしか
あふみてふ名は高島に聞ゆれといつかはこゝにくるもとの里
笠とりの山に世をふる身にしあらはすみやきもをる我心かな
こりつもる嘆をいかにせよとてか君にあふこの一すちもなき
逢こなき身とはしる〳〵何にかはなけきを山とこりはつむ覽
うとましや木の下かけの忘水いくらの人のかけを見るらん
はるかなるとのよきのみ多かれはそら嘆をはこるにや有らん
逢事の今はかたみのめをあらみもりて流れん名こそをしけれ
逢事はかたれふりなる磯ひたひひねりふす共かひやなからん
逢事のかたのに今はなりぬれは思ふかりのみ行にやあるらん
近江にそありといふなるかれぬ山君はこえけり人とれくさし
逢事はなからふるやのいたしとみさすかにかけて年のへぬ覽
かしかまし山の下行さゝれ水あなかま我も思ふこゝろあり
ぬす人といふもことはりさよ中に君か心をとりにきたれは
はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらくろの君か心や
寄石戀といふ心をよめる　前齋院六條
逢ふ事をとふ石かみのつれなさに我心のみうこきぬる哉
攝政左大臣家にて戀の心をよめる　源雅光

數ならぬ身をうち川のはしはしといはれなからも戀渡る哉

戀の歌十首人々よみけるによめる　修理大夫顯季

玉つしまきしうつなみの立かへりせないてましぬ名殘戀しも

戀歌とてよめる　春宮大夫公實

あふことは舟人よはみ漕舟のみをさかのほる心地こそすれ

顯仲卿女

心からつきなき戀をせさりせはあはて闇にはまとはさらまし

内大臣小大進

かく計戀の病はおもけれと目にかけさけてあはぬ君かな

攝政左大臣家にて時々あへりといへることをよめる。　源顯國朝臣

我戀はしつのしけいとすちよはみたえてはおほくくるは少し

戀歌人々よみけるに　源俊賴朝臣

あさましやこは何事のさまそとは戀せよとても生れさりしに

金葉和謌集第九

雜部

むかし道方卿にくしてつくしにまかりて安樂寺にまゐりて侍ける砌の梅のわか任にまいりて見れは木のすかたはおなしさまにて花の老木になりてところところさきたるを見てよめる　大納言經信

神かきに昔我見し梅の花ともに老木と成にけるかな

山家鶯といふことを　攝政左大臣

山里もうき世の中をはなれねは谷の鶯ねをのみそ鳴く

圓宗寺の花を御覽して後三條院の御ことなとおほしいてゝよませ給ふ　三宮

植置し君もなき世に年へたる花は我身の心地こそすれ

花見御幸を見ていもうとの内侍のもとへつかはしける　權僧正永緣

行末のためしとけふを思へとも今いくとせか人にかたらん

返し　内侍

幾千代(とせイ)も君に(ぞイ)かたらんつもりゐておもしろかりし花の御幸を

大みねにて思ひかけす櫻の花の咲るを見てよめる　僧正行尊

諸共にあはれと思へ山櫻花よりほかに知る人もなし

堀河院御時殿上の人々あまたくして花見ありきけるに仁和寺に行宗朝臣ありときゝて檀紙やあるとたつれて侍けれはつかはすとてうへにかきつけゝる　源行宗朝臣

いくとせに我成ぬらむ諸人の花見る春をよそにきゝつゝ

山里に人々まかりて花見て歌よみけるによめる　源定俊(信イ)

みな人はよしのゝ山の櫻花おりしらぬ身や谷のむもれ木
後三條院かくれおはしまして又のとしの春盛なる
花を見て　右近將曹秦兼方
こそ見しに色もかはらてさきにけり花こそ物は思はさりけれ
つかさめしの比うらやましきことのみきこえけれ
はよめる　藤原顯仲朝臣
としふれと春にしられぬ埋木は花の色々にすむかひそなき
藏人おりて臨時祭陪從し侍けるに右中辨伊家かも
とへつかはしける　藤原惟信
山吹もおなしかさしの花なれと雲井の櫻猶そ戀しき
隆家卿大宰帥に二度なりて後のたひ香椎御社にま
いりて侍けるに神主をのもとゝすきのはを折て帥
の冠にさすとてよめる　神主大膳武忠
ちはやふる香椎の宮の杉の葉を二度かさす我君そ君
源心座主になりてはしめて山にのほりけるにやす
みける所にて歌よめと申けるによめる　良暹法師
年を經てかよふ山路はかはられと今日はさか行心地こそすれ
藤原基清か藏人にてかうふりたまはりておりにけ
れは父の日つかはしける　藤原家經
思ひかねけさは空をやなかむらん雲の通路霞へたてゝ

一品宮天王寺にまいらせ給ひて日ころの御念佛を
せさせ給ひけるに御ともの人々住吉にまいりて歌
よみけるによめる　源俊頼朝臣
幾かへり花さきぬらん住よしの松も神代の友とこそきけ
田家老翁といふことを　中納言基長
ますらをは山田の庵に老にけり今いく秋にあはんとすらん
仁和寺にすませ給ひける比いつまてさていると都
より人の尋申たりけれはよませ給ふ　三宮
かくてしもえそ住よしき山里のほそ谷川の心ほそさに
大峯（清府本）笙の岩屋にてよめる　僧正行尊
草の庵をなに露けしと思けんもらぬ岩屋も袖はぬれけり
良暹法師をうらむることありける比む月のついた
ちにまうてきてひさしく見えさりけれはつかはし
ける　律師慶範
春のこしその日つらゝはとけにしを又なにことにとゝこほる覽
對山待月といへることを　藤原正季
此世には山のはいつる月をのみまつことにてもやみぬへき哉
山家にて有明の月を見てよめる　僧正行尊
木の間もるかたわれ月のほのかにもたれか我身を思出へき
宇治前太政大臣ときの歌よみともをめして月歌よ
ませ侍けるにもれにけれは公實卿のもとへつかは

しける　源師光
かすか山嶺つゝきてる月かけにしられぬ谷の松もありけり
僧都頼基光明山にこもりぬときゝてつかはしける　橘能元
うらやましうき世をいてゝいかはかり雲なき峯の月をみる覽
返し　僧正頼基
諸共に西へや行と月かけのくまなき峯を尋れてそこし
郁芳門院伊勢におはしける比あからさまに下りけるにすゝか川を渡りけるときよめる　六條右大臣北方
はやくよりたのみわたりし鈴鹿川思ふことなる音そきこゆる
源仲正かむすめ皇后宮にはしめてまゐりたりけるにことひくときかせ給ひてひかせさせ給ひければつゝましなからひきならしけるをきゝてくちすさひのやうにいひかけゝる　攝津
ことの音や松吹風にかよふらむ千世のためしにひきつへき哉
返し　美濃
うれしくも秋のみ山の松風にうひことのねのかよひける哉
内大臣家越後
琴の音は月の影にもかよへはや空にしらへのすみのほるらん
伊勢國二見浦にてよめる　大中臣輔弘
玉匣二見の浦のかひしけみまきゑに見ゆる松のむら立

宇治前太政大臣布曳瀧見にまかりたりけるともにまかりてよめる　大納言經信
白雲とよそにみつれは足曳の山もとゝろきおつる瀧つ瀬
よみ人しらす
天の河これや流の末ならん空よりおつる布引の瀧
選子内親王いつきにおはしましけるとき女房に物申さんとて忍ひてまいりけるにさふらひともいかなる人そとあらく申してとはせ侍ければたゝうかみにかきてさふらひにをかせ侍ける　藤原惟規
神垣は木の丸とのにあられとも名のりをせねは人とかめけり
郁芳門院伊勢におはしける時六條右大臣の北方あからさまにくたりて侍りけるとき思かけすかれのこゑのほのかにきこえければ　六條右大臣北方
神かきのあたりと思ふにゆふたすき思ひもかけぬ鐘の音哉
前齋宮いせにおはしましける時寮頭やすとしみまつりのほとの殿ゐものゝれうにきぬかりてほとへて返さゝりけることなと申たりける返しことにいひつかはしける　前齋宮内侍
かへさしとかねて知にきから衣戀しかるへき我身ならねは
和泉式部かやすまさにくして丹後國に侍ける比宮こに歌合侍けるに小式部の内侍歌よみにとられて

侍けるを定頼卿〔何歟〕つほねのかたにまうてきて歌いか
ゝせさせ給ふに丹後へは人はつかはしてけんやつ
かひいまたまうてこすやいかに心もとなくおほす
らんなとたはふれて立けるをひきとゝめてよめる
小式部内侍
おほえ山いくのゝ道の遠けれはまたふみも見す天の橋立
しほゆあみに西のうみのかたへまかりけるにみる
といふものをみつからとりて郡にあるむすめの許
へつかはしける　平康貞女
磯なつむ入江の浪の立かへり君みる迄の命ともかな
返し　むすめ
なかゐするあまのしわさと見るからに袖のうらにもみつ涙哉
百首歌の中に夢の心をよめる　修理大夫顕季
うたゝねの夢なかりせは別れにし昔の人を又みましやは
旅宿心をよめる　参議師頼
さよ中に思へはかなしみちのくのあさかの沼に旅ねしてけり
この集撰しける時歌こはれてをくるとて　藤原顕輔
家の風ふかぬものからはつかしの杜の言のはちらしはてつる
和泉式部石山にまゐりけるに大津にとまりて夜ふ
けてきけは人のけはひあまたしてのゝしりけるを
尋けれはしも人のよねしらけ侍なりと申けるをき
ゝてよめる　和泉式部
さきのゐる松原いかにさはくらんしらけはうたて里とよみ見
公實卿のもとにまかりたりけれは出居にをきたり
ける小弓をとりてさふらひにこれはおろしつとふ
れていてにけりかの卿かへりて弓を尋けれは時房
おろしてまゐりぬと申をきゝておとろきて院の御
弓をとくかへせといひつかはしたりけれは御弓に
むすひつけたりける歌　藤原時房
梓弓さこそはそりのたかゝらめはる程もなくかへるへしやは
おとこかれ〳〵になりて程へてたかひに忘れて後
人にしたしくなりにけるなと申すときゝて歎ける
人にかはりてよめる　春宮大夫公實
無名にそ人のつらさはしられける忘られにしは身をそ恨みし
ある所にて大貳資通忍て物申けるをほとなくさそ
なと人申けれはよめる　さかみ
いかにせん山田にかこふかき柴のしはしのまたに隠なき身を
肥後内侍をとこに忘られてなけくを御覧してよま
せ給ひける　堀河院御製
わすられて歎く袂を見るからにさもあらぬ袖のしほれぬる哉
水車を見てよめる　僧正行尊

早き瀬にたゝぬ許そ水車我もうき世にめくるとをしれ
れいならぬことありてわつらひける比上東門院に
柑子たてまつるとて人にかゝせてたてまつりける
堀河右大臣
つかへつるこの身のほとをかそふれはあはれ梢に成にける哉
御返し
上東門院
消にける月日の数もしられつゝこの身をみるもあはれなる哉
大納言資通まうてきてよるとまりてつとめてかへる
とてはき(とくく)をわすれたりけるを返しつかはすとてよ
める
大納言宗通
草枕さこそは旅の床ならめけさしもおきてかへるへしやは
おとこのひさしくまうてこすなりにける後にをき
たりけるゑふくろをとりにおこせたりけれはかき
つけてつかはしける
櫻井尼
のきはうつましろの鷹の餌袋にをきゑをさしてかへしつる哉
後冷泉院御時近江国より白鳥をたてまつりたりけ
るをかくして人に見せさせたまはさりけれは女房
たちゆかしかり申けれはかの／＼野にすゑてすてま
つれきてよく／＼いふむに見せん／とおほせありけ
れはつかまつりける
少将内侍
類なくよにおもしろき鳥ならは(たき)ゆかしからせて誰か思はん

甲斐國よりのほりてをはなる人のもとにありける
かはかなきことにてそのおはかなありそとてをひ
いたしけれはよめる
よみ人しらず
鳥の子のまたかひ午あらませはをはといふ物おい出さらまし
百首歌中に山里を
修理大夫顕季
日くらしの聲はかりする柴の戸は入日のさすに任せてそ見る
題しらす
藤原仲實朝臣
年ふれは我いたゝきにをく霜をくさのうへとも思けるかな
殿上をりたりける比人の殿上しけるを見てよめる
源行宗朝臣
うらやまし雲のかけはし立かへり二たひのほる道をしらはや
殿上申けるにせさりけれはよめる
平忠盛朝臣
思きや雲井の月をよそに見て心のやみにまよふへしとは
かたらひける人のかれ／＼になりけれはこと人に
つきてつくしのかたへまかりなんとしけるをきゝ
て男の許よりまかるましき由を申たりけれはいひ
つかはしける
前斎宮小大進
身のうきもとふ一もしにせかれつゝ心つくしの道はとまりぬ
おとこのなかりける夜ことえをつほねにつれたり
けるにもとの男まうてきあひたりけれはさはきて
かたはらのつほねのおへのくつれよりくゝりてに

かしやりて又の日そのにかしたるつほねのぬしの
かりよへのかへこそうれしかりしかなといひつか
はしたりけれはよめる　　よみ人しらす
れぬるよの曉騷かしく見えしかとわかちかふれはをなかり鬼
源頼家かもの申ける人の五節にいてゝ侍けるをき
ゝてまことにやあまたかさねしをみ衣とよのあか
りにかくれなきよにとよみてつかはしたりける返
かくよめる　　源光綱母
日かけにはなき名立けりをみ衣きてみよと社いふへかりけれ
經信卿にくしてつくしにまかりたりけるに肥後守
盛房野紛のあるみせむと申てたともせさりけれは
いかにもおとろかしたりけれはわすれたるやうに
なりけれはよめる　　源俊頼朝臣
なきかけに懸けるたちもある物をさやつかのまに忘はてけん
大みねの神仙といふ所にひさしく侍けれは同行と
もみなかきりありてまかりけれは心ほそさによめ
る　　僧正行尊
見し人はひとり我身にそはねともをくれぬものは淚なりけり
たゝならぬ人のもてかくしてありけるにこをうみ
てけるかもとよりうみたるうめをおこせたりけれ
はよめる　　よみ人しらす
はかくれにつはると見えし程もなくこはうみ梅に成にける哉
堀河院御時中宮女房たち亮仲實か紀伊守にて侍け
る時わかのうらみせんとてさそひけれはあまたま
かりけるにまからてつかはしける　　前中宮甲斐
人なみに心はかりは立そひてさそはぬわかのうらみをそする
保實卿ほかにうつりて後かのもとの所につれに見
侍けるかゝみをゝかせ侍けるかくらきよしを申け
るをきゝてよめる　　藤原實信母
をはりやくもれはこそはます鏡うつりし影も見えすなるらめ
月のいろをみてよめる　　源師賢朝臣
にしへ行心はわれもある物をひとりないりそ秋の夜の月
師俊朝臣みちのくにのかみにて侍ける時延任しつゝ
とさゝてつかはしける　　藤原[illegible]
まつ我はあはれやそちに成ぬるをあふくま川の遠さかりぬる
したしき人のかすかにまいりてしかのありつるよ
しなと申けるを聞てよめる　　藤原實光朝臣
三笠山神のしるしのいちしるくしかありけりと聞そ嬉しき
屛風のゑにしかすかのわたりゆく人たちわつらふ
かたかける所をよめる　　藤原家經朝臣
行人も立そわつらふしかすかのわたりやたひのとまり成らん
題しらす　　よみ人も

身のうさを思しとけは冬のよもとゝこほらぬは涙なりけり
上陽人苦最多少苦老亦といふことをよめる
源雅光
昔にもあらぬ姿になりゆけはなけきのみこそ面かはりせね
源俊頼朝臣
さりともとかくまゆすみのいたつらに心ほそくも老にける哉
としひさしく修行しありきてくまのにて験くらへしけるを話案卿まいりあひて見けるにことの外やせおとろへてすかたもあやしけにやつれたりけれは見わすれてかたはらなる僧にいかなる人そとこそのほかにしろしありける人かなと申けるをきゝてよめる
僧正行尊
心こそ世をはすてしかまほろしの姿も人にわすられにけり
大中臣輔弘祭主もあかさけける比祭主になさせ給へなと太神宮に申てねたりける夜の夢に枕かみにしらぬ人のたちてよみける歌
草の葉のなひくもしらす露の身のをき所なくなけく比哉（て歟）
六條右大臣六條の家つくりいつみなとほりてとくわたりていつみなと見よと申けれはよめる
顯雅卿母
らとせまてすまんいつみの底によも影を並へんと思しもせし
宇治平等院寺主になりてうちに住つきてひえの山のかたをなかめやりてよめる
忠快法師
宇治川のそこのみくつと成なからなほ雲かゝる山そ戀しき
家を人にはなちてたつとてはしらにかきつけ侍ける
周防内侍
住わひて我さへのきの忍ふ草しのふかた〳〵しけき宿かな
賀茂成助にはしめてあひて物申けるついてにつかはしけるとてよめる
津守國基
きゝわたるみたらし川の水清みそこの心をけふそ見るへき
皇后宮弘徽殿におはしましけるに比俊頼にしおもてのほそとのにて人に物申けるに夜のふけ行まゝにくるしかりけれはつゝらにいたりけるを見てたゝみをしかせはやと女の申けれはたゝみはいしたゝみしかれて侍と申をきゝてよめる
皇后宮大貳
いしたゝみありける物を君にまたしく物なしと思ひける哉
大原行蓮聖人かもとへ小袖つかはすとてよめる
天台座主仁覺
あはれまむと思心はひろけれとはくゝむ袖のせはくもある哉
百首歌中に述懐の心を
源俊頼朝臣
世中はうき身にそへるかけなれや思ひすつれとはなれさり鬼

男につきて越前へまかりたりけるに男心かはりて
常にはしたなかりけれは都なるおやの許へつかは
しける　よみ人しらす
うちたのむ人の心はあらち山　しちくやしきたひの空哉
返し　おや
思ひやる心さへこそかなしけれあらちの山の冬のけしきは
おもふこと侍けるころよめる　参議師頼
いたつらに過る月日をかそふれは昔をしのふれそなかれける
かゝみを見るにかけのかはりゆくを見てよめる　源師賢朝臣
かはり行鏡のかけをみるからにおいその森のなけきをそ見る
前太政大臣家に侍けるなま中将忠宗朝臣と少将
顕國とゝもにかたらひ侍けるに忠宗朝臣にあひに
けるそのゝち程もなくわすられにけりときゝて女
のかりいひつかはしける　源顕國朝臣
こゆろきのいそきて逢しかひもなく涙よりこすときくは誠か
藏人親隆かうふりたまはりて又の日つかはしける　藤原公教
雲の上になれにしものをあまたつの逢事かたにおりたぬる哉
堀河院御時源俊重か式部丞申ける申文にそへて頭重
資かもとにつかはしける　源俊頼朝臣
日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれつゝ
これを奏しけれは内侍周防をめしてこれ返しせよ
とおほせことありけれはつかはしける　周防内侍
なにか思ふ春のあらしに雲はれてさやけき影は君のみそ見ん

金葉和歌集第十

雜部下

公實卿かくれ侍て後かの家にまかりたりけるに梅
の花のさかりにさけりけるを見て枝にむすひつけ
て侍ける　藤原兼房
昔みしあるしかほにてむめか枝の花たに我に物かたりせよ
返し　中納言實行
れにかへる花の姿の戀しくはたゝこのもとをかたみとは見よ
人々あまたくして花みありきてかへりて後かせを
こりてふしたりけるに人のもとよりなに計かある
とたつれて侍けれはいひつかはしける　平基綱
櫻ゆへいとひし風の身にしみて花よりさきにちりぬへき哉
後三條院かくれさせおはしまして後五月五日一品
宮の御帳に昌蒲ふかせ侍りけるに櫻の造花さし

たるを見てよめる　　藤原有佐朝臣
あやめ草ねをのみかくる世中におりたかへたる花櫻哉
　北方うせ侍て天王寺にまいりて侍けるに道にてよ
　める　　六條右大臣
なにはえのあしの若根のしけゝれと心もつかぬ舟出をそする
　郁芳門院かくれおはしましてのち又のとしの秋知
　信よりつかはしける　　康資王母
うかりしに秋はつきぬと思ひしをことしも虫のねこそ流るれ
　下らうにこえられてよめる　　源俊頼朝臣
せきもあへぬ涙の河はゝやけれと身のうき草は流れさりけり
　律師實源かもとにしらぬ女房の佛くきやうせんと
　てよはせ侍ければまかりて見ればこともかなはす
　けに見えければかたのことくいそき供養してたち
　けるにすたれのうちより女房の手つからきぬひと
　〔上略歟〕つまきゑの手箱とをゝしいたしたりければ従僧し
　てとらせてかへりて見ればしろかねのはこの中に
　おきて入たりける歌　　よみ人しらす
玉匣かけこに塵もすへさりしふたおやなからなき身とをしれ
　おほらに子をすてゝ侍けるをしくゝみにかきて侍
　ける歌
身にまさる物なかりけり緑兒はやらん方なくかなしけれとも

あはのかみともつなにをくれて侍ける比なかさ
れたりける人のゆるされてかへりたりけるをきゝ
てよめる　　藤原知信母
流れてもあふせ有けり涙河きえにしあはを何にたとへん
　心ちれいならす侍ける比人のもとよりいかゝなと
　申たりければ　　よみ人しらす
呉竹のふしゝつみぬる露の身のとふとの葉におきそゐらるゝ
　範永朝臣出家してけりときゝて能登守にて侍ける
　比くによりいひつかはしける　　藤原通宗朝臣
よそなから世をそむきぬと聞からにこしちの空は打時雨つゝ
　律師長暹かくれて後はゝそのあつかひをしてまと
　ろみたる夢に見ける歌
たらちめのなけきをつみて我はかく思ひの下になるそ悲しき
　顯仲卿むすめにをくれてなけき侍ける比ほとへて
　とひにつかはすとて　　大藏卿匡房
その夢をとはゝなけきや増るとておとろかさても過にける哉
　従三位藤原賢子れいならぬことありてよろつ心ほ
　そく覺けるに人のもとよりいかゝなとゝひて侍け
　れはよめる　　藤原賢子
いにしへは月をのみこそなかめしか今は日を待我身なりけり
　身まかりて後ひさしくなりにける母をゆめに見て

よめる　　権僧正永縁

夢にのみ昔の人をあひみればさむる程こそわかれ成けれ

人のむすめにゝのとをき所へまかりたりけるほとにおもき病をしてかくれなむとしける時にかきをきてまかりける歌　　よみ人しらす

露の身の消もはてなは夏草のはゝいかにしてあらんとすらん

小式部内侍うせてのち上東門院よりとしころ給はりけるきぬをなきあとにもつかはしたりけるに小式部内侍とかきつけられたるを見てよめる

和泉式部

諸共に苔の下にはくちすしてうつもれぬ名を見るそかなしき

したしき人にをくれてわさのことはてゝかへりにけるによめる　　平忠盛

今そしる思ひのはては世中のうき雲にのみまじる物とは

陽明門院かくれおはしまして後おほむわさのことはてゝ又の日雲のたなひきけるを見て

藤原資信

さためなき世を浮雲そあはれなるたのみし君か煙と思へは

白河の女御かくれ給ひて後かの家の南面の藤花さかりにさけるを見てよめる　　僧正行尊

草木まで思ひけるとも見ゆる哉松さへ藤の衣きてけり

兼房朝臣重服になりてこもりゐて侍けるに出羽辨かもとよりとふらひたりけるをこれに返しせよと申ければよめる　　橘元任

悲しさのその夕暮のまゝならはありへて人にとはれましやは

れいならぬことありて日ころいかゝなとおもひつゝけて心ほそきによめる　　源行宗朝臣

いかにせんうき世の中にすみかまのはては煙と成ぬへき身を

範國朝臣にくして伊豫のくにゝまかりたりけるに正月より三月まて雨のふらさりければ苗代なともえせてよろつに祈けれとかなはて能因に歌よみて一宮にまいらせて祈れと申ければまいりていのり申ける歌　　能因法師

天河苗代水にせきくたせあまくたります神ならはかみ

神感ありて三日三夜大雨ふりてやますと家集に見えたり

心経供養してその心を人々によませ侍けるに

攝政左大臣

色も香もむなしとゝける法なれと祈るしるしはありと社きけ

ほうもんのありけるをさとなる女房のもとよりみやに申さすとも忍てとりてをこせよと申たりけるをほのきゝてよませ給ふ　　三宮

見し儘に我は悟を得てしかはしらせてとるとしらさらめつは

月のあかゝりけるにせんさい聖人のもとにいひつかはしける　　僧正行尊

いさきよき空のけしきをたのむ哉われまとはする秋の夜の月

實範聖人山寺にこもりぬときゝてつかはしける　　静嚴法師

心にはいとひはてつと思ふらんあはれいつくも同しうき世を

八月はかりに月のあかゝりけるよあみたのひしりのとほりけるをよはせ給ひてさとなる女房のもとへいひつかはしける　　選子内親王

あみたふとゝなふる聲に夢さめて西へなかるゝ月をこそ見れ

ほけ經の心をよめる　　皇后宮ひこ

なしへたきに入にし月のなかりせはいかて心を西にかけまし

清海聖人後生をなをおそり思ひてれふりいりたるに枕かみに僧のたちていひかけゝるうた

かくはかりこち吹風の吹を見て千里（チリ）のうたかひおもはさら南（をこさすもかなイ）

普賢十願の文に願我臨欲命終時といへる文をよめる　　覺樹法師

命をもつみをも露にたとへけりさらは共にやきえんとすらん

衆罪如霜露といへる事をよめる　　覺譽法師

つみは霜露ものこらす消ぬらんなかき夜すから悔ゆる思に

弟子品心を　　僧正靜圓

吹かへすわしの山風なかりせは衣のうらの玉をみましや

提婆品の心を　　瞻西聖人

法の爲になふ薪にことよせてやかてうき世をこりそはてぬる

皇后宮權大夫師時

けふそしるわしの高峯に住月を谷川くみし人のかけとは

龍女成佛をよめる　　勝超法師

わたつ海の底のみくつと見しものをいかてか空に月と見る覽

涌出品の心を　　權僧正永縁

たらちねの黑髪なからいかなれはこのまゆしろき糸と成らん

不輕品の心を

あひかたき法をひろめしひしりにそうらみし人も導かれける

藥王品の心を　　懷尋法師

うき身をし渡すときけはあま小舟のりに心をかけぬ（ヨイ）まそなき

人のもとにて經供養しけるに五百弟子品の心をときけるに解法珠のたとへとかれけるをきゝてたうとかりつる由の歌をよみてかつけものに結ひつけて侍けるを見て返しにつかはしける　　權僧正永縁

いかにして衣の玉としりぬらん思ひもかけぬ人もある世に

依他の人のたとへを人々よみけるにこの身かけろふのことしといへる事をよめる　　懷尋法師

いつたびつと思たゆみて陽炎のかけろふ程の世をすくすらん　澄成法師

常住心月輪といへる心をよめる

世とゝもに心のうちにすむ月をあると知こそはるゝなりけれ　珍海法師母

けふもなをおしみやせまし法のためちらす花ぞと思なさずは

ちごくゑにつるきの枝に人のつらぬかれたるを見てよめる　和泉式部

あさましや劔の枝のたはむまでこはなにの身のなれる成らん

人のもとに侍けるにとほかにたえ人てうせなんとしければしとみのもとにかきいれておはちになきたりけるにつゆのあしにさはりけるおりはとゝきすのなきければきゝていきの下に　田口重如

草の葉にかゝてはしたり郭公しての山ちもかくや露けき

かくてつゐにおもいりぬとてよめる

たゆみなくおもかくるみた佛人やりならぬらかひたおふな

攝國の前に天王寺にてそうの舟にのりて西さまにこぎはなれてゆくかたかけるところを見てよめる　としより

あみたふととなふる聲かぢにてやくるしき海をこきはなる覽

連歌

ゐたりける所の北のかたに聲なまりたる人の物いひけるをきゝて

あつまびとの聲こそ北にきこゆなれ　永成法師

みちのくによりこしにやあるらん　律師慶範

もゝそのゝもゝの花を見て

もゝそのゝもゝの花こそさきにけれ　頼慶法師（資イ）

むめずの梅はちりやしぬらん　公資朝臣

かものやしろにて物つくをとしければ

しめのうちにきねの音こそ聞ゆなれ　神主成助

いかなる神のつくにかあるらん　重行

うちにておいたる男の田の中にふせりけるをみて

はるの田にすきいりぬべきおきな哉　[illegible]　宇治入道前太政大臣

かのみなくちに水をいれはや

日のいるをみて

日のいるはくれなゐにこそにたりけれ　觀暹法師

あかねさすともおもひけるかな　平爲成

たの中に馬のふせりけるをみて

たにはむこまはくろにやあるらん　永源法師

なはしろの水にはかけと見えつれと　永成法師

かはらやを見て

かはらやのいたふきにても見ゆる哉　よみ人しらす

つちくれしてやつくりそめけん　助俊

　つくしのしかのしまを見て

つれなくたてるしかのしまかな　爲助

弓はりの月のいるにもおとろかて　國忠

　宇治へまかりけるみちにて日ころ雨のふりければ
　水のいて〻かも川を男のはかまをぬきてさ〻げて
　わたるを見て

かも河をつるはきにてもわたるかな　賴綱

かりはかまをはおしとおもひて　信綱

　あゆを見て

なに〻あゆるをあゆといふらん　よみ人しらす

うふれにはとりいれしものを(能因歟)おほつかな　匡房卿妹

　いつみしきふかものへまかりけるにわらうつにあ
　しをくはれてかみまきたるを見て

ちはやふるかみをはあしにまくものか　神主忠賴

これをそしものやしろとはいふ　和泉式部

　源のよりみつかたちまのかみにて侍けるときたち
　のまへにたけかはといふ川より舟のくたりけるを
　とはせければたてと申物をつみてまかるといふを
　き〻てくちすさみいひける

たてかる舟のすくる成りけり　源賴光朝臣

　これを連歌にき〻なして　相撲のは〻

あさまたきからろ(ろ歟)の音の聞ゆるは

はなくき(せ歟)はちりてふとそなかりける　よみ人しらす

かけのまに〳〵うてはなりけり　前太政大臣家ゆふして

　すまひくさといふ草のおほかりけるをひきすてさ
　せけるを見て

ひくにはつよきすまひ草かな　よみ人しらす

とるてにはゝかなくうつるはなゝれと　よみ人しらす

　とりをのきにさしたるかよこ雨にぬれけるを

雨ふれはきしもしとゝになりにけり　よみ人しらす

かさゝきならはかゝらましやは　あるものゝ

七十にみちぬるしほのはまひさし久しく世々にむもれぬる哉

前左京大夫源朝臣俊頼依白川法皇御宣旨撰之。密奏之
後背御氣色。三ヶ度撰改。有議細兩之本云々。
天治元年奏之。大治元二之間撰聞之。

此和歌集者中御門宣胤卿息黄門宣秀手跡也。奥書等珍重
本也。歌數聊多世流布本。可秘函底而已。
慶長十四年季秋上澣　光廣花押

續群書類從巻第三百六十八

和歌部三

月詣和歌集

出雲八重かきの宮はしらたてはしめしこゝろたくみは。よにある人のおもひをのふることわさとそなりにける。しかれはすゑのよまてもそのみちにこゝろをかけ。なさけあるともからは。神の御心もなごみてそのあはれみふかゝるへし。こゝに賀茂わけいかつちのやしろの神主重保。そのかみより三十一字をこゝろにかけて四十餘年の月日をおくれり。しかのみならす成助かなかれをくみて。かたしけなくみたらし川のすゑをうけたり。たゝあさゆふにあふくところは。

我たのむ人いたつらになしはては又雲分てのほるはかりそ

とのたへなる御ことをおもふに。神の御こゝろをうごかさんこと。やまと歌にはすくへからす。これによりて三十番の歌合をこうせしかは。しめのうちにあやしくたへなるにほひみてりき。あめをいのりこひて和歌をよみあくれは。たちまちに天河水をせきくたさる。まことにむかしも今も神明の御心をなごむることはあらたかなるものをや。しかれはいそのかみふりにしあとをまなひ。三十六人の百首をあつめて。神の御たからにそなふ。十二月の宮まつりの歌をつらねて。よみ人の二世のねかひをみてんとおもふこゝろふかし。これによりてとしころともとする祐盛法師をかたらひて。われも人もなゝそちのよはひにおよふまて。春秋につけて花もみちにこゝろをそめて。眉のしもかしらの雪のきえなんことのはかなさもしらす。後のかたみとゝめおかさらんもほいなかるへしとて。おなしくこゝろをあはせて。たのみをかけあゆみをはこひたてまつる人々。そのほかのことの葉をあつめて月詣集となつく。千二百首を十二巻にわかちて。我すへら御神のみつかきのうち

になさめたてまつりて。あそひたはふれのえんむなしからすなすへきなり。抑萬葉集よりこのかた代々にみかきおき給へろこかれ玉のひかりはそらの月あきらかなり。そのほかにむかしよりいまにいたるまて。家々につけて心をつくされたろはやしの木のは。野へのかつらの中にいりては。そのみちくらくしていまた見およはされはさりかたくなん。しかれは人のあさけりをもかへりみす。あすか川のふち瀬の流もしらす。聞わたるにしたかひてかきあつむるなるへし。ねかはくは大明神このたひそのことのはをもてあそひたまひて。あらはれてはあめのしたやすらけくまもりたまへ。かくれてはこの道むなしからす。わたつみのそこのもくつかきあつめて。はまのまさこのかすしらさを。ひろき御めくみをたれたまへとなり。

月詣倭歌集卷第一

正月附賀

立春のこゝろをよめる　皇后宮大夫俊成
としのうちに春立ぬとやよしの山霞かゝれる峯のしら雪

百首歌中に立春のこゝろを　右大臣
けさみれは霞の衣おりかけてしつはた山に春はきにけり

中院入道右大臣家にて立春の心をよめる　俊惠法師
けさみれはこやの池水うちとけて氷そ春のへたてなりける

たつはるの心を　内大臣
あつまには春過ぬとやおもふらん都はけふそはしめなれとも

大納言實國卿家歌合に立春の心をよめる　賀茂重保
けさよりやすはのとわたる春風に氷の橋もとたえしぬらん

右大臣家百首歌に立春の心をよめる　源仲綱
春やきて雪の下水さそふらんふしのなるさはおと増るなり

題しらす　藤原定家
春日山ふもとのさとに雪きえて春をしらする峯の松かせ

大納言實國
去年といへは久しくなれる心ちして思へはよはの闇なりけり

子日　參河内侍
しるしらぬのへの小松をひく人は千年のともになりぬへき哉

霞をよめる　平資盛朝臣
梓弓はるのしるしやこれならん霞たなひくたかまとのやま

參議經盛
あとたえて今はなからの橋なれと春の霞は立わたりけり

皇太后宮大進
よとゝもにあらふ波にはつれなくて霞に消るおきつしまやま

神主重保賀茂寶前にて歌合侍けるにかすみをよめ

る

山高み霞のうちにきてみれはいてし都を又こめてけり　藤原隆信朝臣

朝またきをちの河瀬を見わたせは霞の底にうつもれにけり　刑部卿頼輔

神かきや榊にかゝるしめをきたいかにたなひく霞なるらん　大納言隆季

袖くたし霞たな引春くれはゆきけの水もこゑあはすなり　皇后宮大夫俊成

はる霞わけゆくまゝに尾上なる松のみとりそ色まさりぬる　讃岐

しめはへて暁のあらまく小山田のはるのかこひは霞なりけり　俊恵法師

遠山霞といへるこゝろをよめる　藤原隆房朝臣

見わたせはそことしるしの杉もなし霞のうちやみわの山もと

大納言公通卿家にて十首歌人々によませ侍けるに

夕霞をよめる　俊恵法師

夕なきにゆらのとわたるあま小舟霞のうちにこきそ入ぬる　内大臣

なこの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふ沖つしら浪

法性寺入道前関白太政大臣家にて十首歌人々よみ

侍りけるに霞をよめる　源俊頼朝臣

けふりかとむろのやしまをみしほとにやかても空の霞ぬる哉

重保か賀茂歌合に霞をよめる　中納言実守

きのふまて雪ふりつみしみよしのゝ春しり顔にけさそ霞める

経盛卿歌合にかすみをよめる　顕昭法師

白雲の上より見えしふしのねを立へたつるは霞なりけり

湖上霞といふことをよめる　左近衛中将重衡

さゝ浪のおとはへたてす八重霞しかのからさき立こむれとも

霞隔古寺といふことをよめる　藤原敦仲

なかめやる霞のうちにむかし見し野寺のかねの聲ひゝくなり

霞隔郷といへるこゝろをよめる　覚綱法師

そのほとゝ心あてにそ思ひやるふし見の里は霞こめつゝ

百首の歌の中にうくひすを　右大臣

梅花にほはぬほとそまたれける香をとめてくる鶯のこゑ

山家のうくひすといふことをよめる　法眼長真

さひしさをとふは嬉しき柴の庵にひとく〳〵といとふなる哉

従三位頼輔母

うくひすのなくに涙のおつる哉又やはゝるにあはんと思へは

兵衛

何事を春のしるしに出つらん雪消やらぬ谷のうくひす

平資盛朝臣

谷ふかみ人もかよはぬ山さとはうくひすのみや春をつくらん

梅の花をゝりて女につかはすとて（よめるイ）
梅の花君か爲にとたをれともにほひは袖にのこりぬる哉　従三位平通盛

紅梅白梅にほひことならすといふことをよめる　賀茂成助
梅の花色と／＼に見ゆれともにほひはわかぬ物にそ有ける

梅花をよみ侍ける　平經正朝臣
香をとめて人もとひけり梅の花鶯をこそさそふと思ふに　賀茂重信
はる風の吹こさりせは梅のはなにほふ垣ねはたれかつけまし

題しらす　藤原（へイ）定家
雪のうちにいかてをらまし鶯の聲こそ梅のしるし成けれ

梅花夜薫といふ心をよめる　参議經盛
ちることもわすられにけり梅の花嵐はようそ嬉しかりける

松間梅花といふ事をよめる　覺延法師
枝かはす梅の初はな咲にけり松風にほふはるのあけほの

題しらす　平忠盛朝臣
ぬしゝらぬ香こそ袂に移りぬれ垣ねの梅に春風（風やふくらん干）そ（やイ）ふく

つれなくてやみける女の家に梅のはなさかりなりけるに申いれ侍りける　賀茂重政
つらかりし人のやとさへ梅の花にほふさかりはなつかしき哉

殘雪未盡　仁和寺二品法親王
根にかへる花かと見れはまたさかぬ櫻か下の雪のむらきえ

殘雪をよめる　平行盛
ちる花によそへて見れは消殘る雪さへをしき椅なりけり

わかなを　中納言長方
見わたせは若なつむへく成にけりくるすのをのゝ荻のやけ原

賀部

堀川院御時立春の日けふの心をつかうまつるへきよし仰ことありけれは御前にて奏し侍ける　源俊頼朝臣
君か爲みたらし川（御歟）を若水にむすふや千世のはしめなるらん

六條院の位の御ときさとにまかてたりける女房の卯杖まゐらせたりけるをこれにさへきことといひやれとおほせこと有けれは御前にてつかうまつりける　筑前
位山はるかにてらす朝日には卯杖つきせぬかけそ見えける

上西門院うまれさせおはしましたりけるつるうちにまゐりて侍りけるにみすのうちよりしろきうすやうに御すゝりをくしてさしいたされたりけるによみてかきつけ侍りける　平忠盛
あさひさす春日の山の姫小松けふや千とせのふつかなるらん

今上うまれさせ給ひたりける御よろこひにそうせ
よとおほしくて女房のなかに申はへりける
賀茂重保
雲の上のゝとけき御代と祈らすは春の日影のさすをみましや
かへしせよとおほせことありけれは　参議通親
千代ふへき春の日影は神山のみねよりいつるとめしみとそ見る
七十の賀し侍りけるに人々の歌おくりて侍りけれ
はよめる
[illegible]
諸人のいはふとのはみるたりそ老木に花のさくこゝちする
俊恵法師に七十の賀をしてとらせ侍るとてよめる
賀茂重保
君かよはひいのりかされて行末も猶なゝそちの春をまたせん
顕昭法師
なゝそちに積ぬる年を待つけて千歳つむへきふなよそひせり
成全法師
幾ちとせ君かこすゑをかそふれはおひそふ松の数もしられす
衆人慶賀といふことをよめる
分部実忠
位山袖をつられてのほるかな身のうれしさをいひかはしつゝ
藤原範盛
諸人はのとけき御代の春にあひて思ひ〳〵に花さきにけり
大江維順朝臣女
よのうち松皆名をかふる春なれはあしたの空を誰かなかめん
法印静賢か六十賀を澄憲僧都かしてたびけるによ
める
法印静賢
諸人の喜ひきますむそちをはゝこやのみよのなかはとそきく
法橋實雲
おなし賀に申つかはしける
六十をは何よろこひと思ふらんちよふかさぬへき君とこそ見れ
花園左大臣
白河院の花見の御幸に
かけきよき花のかゝみとみゆるかなのとかにすめる白川の水
後徳大寺左大臣
萬代の花のためしやけふならん昔もかゝるにほひなけれは
保元四年三月内裏の御會に花によろこひの色あり
といふことを
左大臣
千代ふへきはしめの春といふ顔にけしきことなる花さくら哉
近衛院の御時いはひの歌よみてまゐらせよとおほ
せことありけれはよみてたてまつりける
皇后宮備前
君か代はゝるかなるとの浦風にたつしら波の数もしられす
祝の心を
大宮太政大臣
君か代はあまのかこ山出る日のてらん限はつきしとそ思ふ
仁安元年大嘗會悠紀方歌よみてたてまつりける時
風俗の歌のうちに稻舂歌坂田郡をよめる

皇后宮大夫俊成
近江のや坂田の稲たかけつみて道ある御世のはしめにそつく
今上御時壽永元年大嘗會悠紀方御屛風にたまのゝは
らにこまおほくはなてるこゝちをよみたりける
藤原季經朝臣
數しらぬ玉のゝはらのはなれ駒とりもつなかす治まれる世は
同主基方神樂のうたに大藏山をよみ侍ける
藤原兼光朝臣
昔よりおほくら山といひそめて久しきみよの數をつむらむ
百首の歌中にいはひのこゝろを
右大臣
行末を我とは何をいのるへきはるけき御代にあへるみなれは
法皇の御時やそしまめくりにすみよしにてよめる
中納言長方
神垣やいそへの松にことはんけふをは代々のためしとや見る
徳大寺左大臣の大將のよろこひ申つかはすとてよ
める
待賢門院堀川
嬉しさにつゝみもあへす池水のいひ出かたきみくつなれとも
日吉禰宜祝部成仲八十賀し侍りけるによみてつか
はしける
參議經盛
やそちをも何か久しと思ふへき神のいまさんとくとこそ見れ
平經正朝臣
君そ見ん八十の春を過しきてなほもなからの山のさくらを
右大臣家百首歌中にいはひの心をよめる
皇后宮大夫俊成
もゝちたひ浦島の子は歸るともはこやの山はときはなるへし
二條太皇太后賀茂のいつきと申ける時本院にて松
枝映水といふことを
京極前太政大臣
千早振いつきの宮のありす川松とゝもにそかけはすむへき
崇徳院御時法金剛院行幸ありて菊契多秋といふこ
ゝろを
法性寺入道前太政大臣
君か代を長月にしもしら菊の咲やちとせのしるしなるらん
花園左大臣
やへ菊のにほふもしるし君か代は千年の秋をかさぬへしとは
俊綱朝臣ふし見の家にうゑんとてかつらをこひて
侍けれはつかはすとてよみて侍ける
賀茂成助
みつ垣のかつらをうつす宿なれは月見んことそ久しかるへき

月詣倭歌集卷第二

二月附別部

春駒
仁和寺二品法親王
もえ出る荻のやけはら春めけは駒のけしきもひきかへてけり
前大僧正覺忠

とりつなく人にはあるゝ駒なれとなつきにけりな薦の若葉に

賀茂俊平

むれてはむ遠さとをのゝ春駒のをくろにまかふ荻のやけ原

藤原公衡朝臣

まこも生るよとのさはへ（野かはにあるゝ（はなつこ）イ）の春駒はおのか影とそ草をあらそふ

故郷春駒といふことをよめる　[illegible]

ふるさとの籬のみかは春くれは駒のけしきもあれまさりけり

わらひをよめる　[illegible]臣

さ蕨を手ことにをりてかへる袂[illegible]かれてのゝはやさしか

權中納言俊忠卿家歌合に[illegible]といふことを
よめる　顯仲[illegible]

あたらしや賤の柴垣かさつくるたよりにたてる[illegible]やなき

水邊柳といふことをよめる　覺延法師

風ふけは池のかゝみにかけうつる柳のまゆそまつみたれける

題しらす　靜縁法師

あたりなる花にはいとふ春風のくるしからぬやあをやきの糸

[illegible]花に柳風靜といへることをよめる

藤原伊綱

たま柳枝もうこかぬ君か代になひくや風のしるしなるらん

雨中柳といふことをよめる

玄珍法師

あめふれは柳の糸のすちことにすゑもむすはぬ玉そつらぬく

題しらす

圓位法師

ますけ生るあらたに水をまかすれは嬉しかほにもなく蛙哉

閑（居イ）中待花といふことをよめる

覺（玄イ）盛法師

つれ〳〵の身にもそふへき心さへ花待ほとはあくかれにけり

内大臣

けふも又花まつほとのなくさめになかめ暮しつみねのしら雲

越山尋花といへる心をよめる

藤原顯家朝臣

花見んとはやましけ山わくるまに心をさへそ（も歟）しをりつるかな

對山待花といふことをよめる

法眼長眞

このめはる峯の梢をまつほとは花なしとてもあからめやする

[illegible]俊法師

いつとなきよしのゝ山のしら雲も花まつ春そめにはかゝれる

[illegible]圓法師

さき初る花かと見れはさもあらていく度きえぬ峯の白雲

尋深山花といふことをよめる　賀茂重保

花におかぬ心にみを（いへイ）しまかせすは吉のゝ山のおくも見ましや

尋山花といふことをよめる　惟宗廣言

花かとてたつねきたれは白雲のたつたの山のこすゑなりけり

花をたつねて日くれぬといふことをよめる

源俊頼朝臣

暮はてぬかへさは遠れ山さくらたか爲にきてまとふとかしる

皇太后宮大進

くれぬともいかゝかへらん山櫻よのまにゝほふ花もこそあれ

藏長朝（家長）歌合に尋山花といふことをよめる　顯昭法師

はなみにとかそく山らにいさゝしく心さわかす峯のしら雲

待花といへることをよめる　覺網法師

さくら花まつに心をつくしては春を惜まぬ身とやしろへき

霞のうちに花にほふといふことをよめる　藤原家隆

山さくら霞にもるゝにほひこそ咲ぬとつくるつかひなりけれ

尋花會友といふ事をよめる　淨念法師（靜イ）

山櫻けふはたをらてかへりなん見せはやといふ（思ふ數）人もきにけり

遲不知　參議經盛

夕かすみ六わけ山にふかけれはたつとも見えすはなのしら雲

霞隔花といふことをよめる　覺延法師

花ちらす風（隔か欤）のつらさにおとらぬはこすゑをこむる霞なりけり

樵夫尋花といふ心をよめる　源師光

つま木をは花の陰にやゝすめけるさらはいへこと我に敎へよ

小侍從

とへとこのしつをはすさぬ我身にもおはぬ櫻の花はいさとて

始見山花といへる心をよめる　賀茂重房

山櫻さきにけらしなきのふまてたつれかれつゝ過しこすゑに

十首歌よみ侍けるに花を　皇后宮大夫俊成

みよしのゝ花のさかりをけふ見れはこしのたかね（しらね千）に春風そ吹

神主重保か賀茂歌合に　藤原公衡朝臣

みにしめしその神山の櫻はなゆきふりぬれとかはら（四季欤）さりけり

花さかりよその山へ（もそ）にあくかれて春はこゝろのみにそはぬ哉

百首歌中に花を（をイ）　右大臣

さかぬまは誰かはとひし我やとの花こそ人のなさけなりけれ

ときは木にたえ〳〵かゝる白雲や青葉ましりの櫻なるらん　藤原資隆朝臣

あかなくにちりなん花はいかゝせん命そをしきのちの春まて

櫻をよめる　源有房朝臣

花ゆゑにしらぬ山路のあらはこそいろさかへさの栞をもせめ

賀茂宣平

をしからぬ枝しなけれは山櫻いへつとにたにをりそわつらふ

大輔

よしの山をのへの花や（のイ）咲ぬらんまつをはおきてかゝる白雲

登蓮法師

としをにそむる心のしるしあらはいかなる色に花のさかまし

平經正朝臣

春そうき思へは風もつらからす花をわきてもふかは社あらめ
源師光
吉野山さわかぬ雲にしろき哉をのへのさくら花さかりとは
源仲政
こほれいてゝにほふものかは白雲にそらかくれする山櫻哉
藤原伊綱
ひとゝせはちらて櫻のにほひつゝ花咲ぬまのなぬかなりせは
源季廣
をしむにはとまらぬ花のしたかへはうらやましきは春の山風
平忠度朝臣
木のもとをやかてすみかとなさしとて思ひ顔にや花のちる覧
俊恵法師
かつらきやたかまの櫻さきしより春はゝれせぬみねのしら雲
平業盛
花にそむ心はかりをしるへにていく木のもとに旅ねしつらん
圓位法師
かくはかりつほむと花を思ふよりそよきし風のものになる覧
藤原季經朝臣
いつれともえこそ見わかね山さくら立のほるをや雲と知へき
待得花一枝といへる心をよめる　法眼長眞
まかへては嬉しき花のひと枝やちるなけきをもさきに立へき

白河の花を見てよめる　道因法師
花のちる庭なはらひそおのつから梢にかへすかせもこそあれ
重保か賀茂歌合に花を　大納言時忠
ひとゝせをさなから春になしはてゝたえす櫻を見るよしも哉
宮内卿永範
心ありてはなにはうつれ鶯のはふりにちるもをしき匂ひを
大納言實房
櫻花ちりなん後のすかたをはかはりて見せよ峯のしら雲
參議經盛
よし野山みねにたなひく白雲のたえまやおそき櫻なるらん
藤原成家
家の歌合に花を　右大臣
花さかりかもの水かきけふみれは吉のゝ山もなにこそ有けれ
みな人の我ものかはにをしむ哉花こそぬしはさためさりけれ
太宰大貳重家卿歌合に花をよめる　西行法師
さゝなみやなからの山の峯つゝき見せはや人に花のさかりを
内大臣
かりにたにいとふ心やなからましちらぬ花さく此世なりせは
白河の花をみてよめる　圓位法師
花にそむ心のいかてのこりけんすてはてゝきとおもふ我身に
入隣家見花といふことをよめる　藤原親盛

我宿をとなりになしてなかむれは花のあるしと人やいふらん

右大臣家百首歌中に花をよめる　俊惠法師

なかむへきのこりの春をかそふれは花とゝもにもらる涙かな

崇徳院御時百首歌たてまつりけるに花をよめる　皇后宮大夫俊成

山さくらさくより空にあくかるゝ人の心やみねのしら雲

山さとの花見侍けるに人のいへつとはをらぬかとまうしければ　平忠度朝臣

家つともまた（にイ）折しらぬ山さくらちらす（てイ）かへりし春しなけれは

暮天歸雁といふことをよめる　参議通親

鳥はみなねくらさためつ歸る雁いつくをさして雲路行らん

歸雁をよめる　藤原隆信朝臣

かりかねの歸する方をなかむれは霞のうちにほのかなるなり

賀茂重仲

しら雲をわけてかへると見ゆる哉峯の櫻を過るかりかね

刑部卿頼輔

心こそおなしつらにもなかりけれ思ひ〳〵にかへるかりかね

兵衛

をならは花のさかりをみて歸れこしち（てゝふイ）もおなし雁のやとりを

重保か家にてかれこれ雨中歸雁といふことをよみ侍けるに　藤原能盛

花をたにみすてゝ歸る雁かねのまして雨にはさはりしもせし

顕輔卿家歌合に歸雁をよめる　皇后宮大夫俊成

きく人そなみたはおつるかへる雁なきてゆくなる明ほのゝ空

別部

道因法師つくしにまかりけるに歌林苑にて人々餞しはへるとて　讃岐

行人をゝしむ袂もかわかぬにまたおきそふる秋の夕露　参河内侍

今そしる心つくしは君かためをしむあまりの名にこそ有けれ

賀茂重保か越中國へくたりけるをおなしこゝろにて人々餞し侍けるによめる　藤原定長

秋のうちにかへる山とは契れともゆきふるとやあらんとす覧

藤原敦仲

かへる山ありとたのまぬ道ならはなくさめもなき別ならまし

とほく修行にいてけるに人々わかれのこゝろをよみ侍けるに　圓位法師

程ふれは同し都のうちたにもおほつかなきはとはまほしきを

別の心をよめる　藤原定家

わかれても心へたつなたひ衣いくへかさなる山ちなりとも

題しらす　祝部成仲

わかれち（にしイ）にしたふ心のおくれねはひとり行とも思はさらなん

中納言の時おほやけの御かしこまりにて土佐國へ下向のみぎり式部丞源惟盛（守保元）かはりまゝておくりてかへりけるにとしころことをならひ侍けれは青海波秘曲のことかきて給ひけるに　前太政大臣

數へおくかたみをふかく（とイ）しのはなん身は青海の波になかれぬ（しづみイ）（としつむと保）

おなしやうなる事にてはらからともあつまのかたへまかり（か歟）けるときさかみの國おほいそといふところよりおの／＼に／＼へわかれけるによめる　法師静賢

おもひきや年到いそ涙に袖ひちて別のなかのわかれせんとは

月詣倭歌集巻第三

三月附羇旅

壽永元年三月三日賀茂重保曲水宴しはへりけるによめる　前大僧都澄憲

杯をとるとはみせてたふさにはなかるゝ花をせきそとゝむる　顯圓法師

さかつきを天の川にもなかせはや空さへけふは花にゑふらん　右大臣

花莚

花さかりあをれかみれに旅ねしで幾夜あかしつ苔のむしろに　俊恵法師

とことはにいつともわかぬ風なれと春は花故ふくかとそ思ふ　大炊御門右大臣家佐

ふく風をうらみもはてしちる花のうつろふ色は心とそみる　源師光

人しれぬ心のゆきてみる花はのころ山へもあらしとそおもふ　藤原爲業

みよしのゝはなのさかりに成ぬれはたゝぬ時なき峯のしら雲　從三位頼政

風ふかはかへりかくれよ櫻花さかぬまもさそ枝にこもりし　源仲頼

はなをしむ心はさらはつきはてねまたこん春はものも思はし　讃岐

咲そめてわかよにちらぬ花ならはあかぬ心のほとはみてまし　藤原敦仲

風たにもふかて長閑き春ならは折るてにのみや花はちらまし　藤原朝仲

かはりゐんはやのちりこそ山櫻花ちらぬまのあるしなるらめ　中原俊宗

數ならぬ身にさへ花のをしけれはゝろの心はのとけくもなし　祝部成仲

をしみかれはなのあたりに旅ねしつよはの嵐よ心して吹け

はなのさかりに菩提樹院の家にてよみ侍ける　藤原公衡朝臣
住なるゝわか宿なれとけさみれはおほぬくほとに花咲にけり
賀茂歌合に花をよめる　民部卿成範
をしめともかひなかりけり櫻花風にのみこそさそはれてゆけ
藤原公時朝臣
としをへておなし櫻の花の色を染ますものは心なるらん
花忘恋といふことをよめる　藤原師綱朝臣
花たにも常にかはらぬものならは秋の心やわすれはてまし
寄櫻惜花といへる心をよめる　大輔
時しまれいたくなちりそ櫻花うきあるしのみをしむけふかは
山花不散風といふことを　法印元性
なか〳〵にをしむ人なきみ山への花をは風もさそはさりけり
水邊花といふ心をよめる　覺延法師
櫻花池のみきはにかけみれはちらねとれにはかへるなりけり
雨後花といふ心をよめる　大納言隆季
けさみれはやつれてれにそかへりける雨にうたれし花の姿は
遙見山花といふこゝろをよめる　信親法師
けふもまた雲とそみまし山櫻にほひをおくる風なかりせは
賀茂重保人々いさなひて白河のはな見に侍りけるによめる　俊恵法師
後のはるありとたのみし昔たに花をゝしまぬ年はなかりき　大江維順朝臣女
おのつから風のさそはぬこすゑこそまつ咲花を見し心地すれ
古京花といふことをよめる　平忠度朝臣
さゝ浪やしかのみやこはあれにしを昔なからのやまさくら哉
家櫻勝他花といへるこゝろをよめる　行忠法師
たくひなき宿の櫻に春のうちはちらぬ心をかけてこそ見れ
右大臣家歌合にはなをよめる　皇后宮大夫俊成
春くれは猶このよこそ忍はるれいつかはかゝる花を見るへき
落花をよめる　中納言長方
よしの山梢に花のちるまゝにたえ〳〵になる峯のしら雲
兵衛
櫻はな木のもとことに吹ためておのか物とや風のみるらん
圓位法師
有とてもいてやさこそはあらめとて花そうき世を思ひ知ける
源仲頼
惜む名は花に代りてとまれとも梢にさそと見えはこそあらめ
藤原爲業
またもこん春もみるへき花なれとちるは限りの心地こそすれ
法橋兼覺
春風をいとひもはてし櫻花ちらすは袖のものと見ましや

何ぜんに風をつらしと思ひけんふかぬけふとてちらぬ花かは　藤原爲廣

なかめつる梢の花の散ぬれはをしむこゝろもねにかへりけり　權律師忠快

こすゑには心のみこそとまりけれ惜みにきつる花はのこらて　高松宮

散るは雪ちらぬは雲にまかひつゝこゝろそらなる山さくら哉　勝命法師

またさかんはるに心のかゝらすはちり行花にみをやかへまし　法性寺入道太政大臣家辨

つれならぬよこそつらけれ櫻花はかなくちるも風のとかゝは　覺延法師

太宰大貳重家家（卿歟）歌合によめる

櫻さくみねを嵐やわたるらんふもとのさとにつもるしら雪　參議經家

白河にて人々風後見花といへる心をよめる

きてみれは花のした風吹にけり木のもとことの雪のむらきえ　參議通親

大納言爲通（公イ）卿家に十首歌人々よみ侍りけるに

さくら花よはの嵐に散にけり朝日にきえぬ庭のしら雪　刑部卿賴輔

つひにまた梢にかへる物ならはちるをや花のさかりとは見ん　祐盛法師

水上落花と云ふをよめる

ちる花の水にしきゆる物ならは春の雪とやおもひはてまし　民部卿成範

梅邊（のへのさくらにイ）落花といへるこゝろをよめる

高砂の尾上のさくら風ふけはゝな咲わたる浦（せ、イ）のしらなみ　從三位季能

浦ちかく梢をはらふ春風に花のとまふくあけのそほふれ　法眼長眞

花下忘歸といふことを

おほかたはこのもとこそは住かなれ花ちりぬとも何（てイ）か歸らん　法印元性

右大臣家後番歌合に花をよめる

さくをまちちるをゝしむに春くれて花に心をつくしはてつる　俊惠法師

題しらす

世の中をつれなき物と思はすはいかてか花の散るにたへまし　寂然法師

花さそふ風そ恩へはつらからぬ誰もさこそはちらまほしけれ　仁和寺二品法親王

雨後落花といふことをよめる

山さくら雲のかへしの風ふけは雨は雪にそふりかはりける　安心法師

澗邊落花といふことをよめる

梢には今はなからの山さくらはなちりてけりしかの浦なみ　惠圓法師

花澗水にみつといふことを

山風に散りつむ花しなかれずはいかてしらまし谷のした（かはの千）みつ　花園左大臣

前太政大臣宇治にてかすみたにの花をかくすとい
ふことを人々よみ侍りけるに女の歌有へしとはへ
りけれはよめる　皇后宮肥後
立かくすかすみそつらき山櫻風たに殘す花のかたみを
家の花ちりかたになりけるを皇后宮中宮と申ける
時御臺盤所よりめされけれはをりてたてまつると
てそへて侍りける　參議通親
散のこるあをはか中の櫻はな風よりさきに尋ねましかは
かへし　兵衛内侍
をしむらん心もふかき花なれは風にしられぬ枝やあるとて
殘花留人といふ事をよめる　左衛門督實家
はかくれにひとえたのこる花みては心もちらぬ物にそ有ける
遙尋殘花といふことをよめる　中納言長方
ちり殘る花もや有と春かすみへたつる山をいくへこえきぬ
苗代をよめる　平忠度朝臣
苗代にせきやとむらん垣ねなるいさゝ小川のおとよわるなり
參河内侍
苗代の水はかりをや山賤のはるはこゝろにまかせたるらん
藤原季經朝臣
賤のをか耕しもやらぬ小山田にさのみはいかゝ種をかすへき
菫菜をよめる　皇后宮大夫俊成
むらさきのねはふよこのゝつほ菫ま袖につまん色もむつまし
大納言季成卿女
野へにおふるうす紫のつほすみれたれなつかしき色に染けん
荒砌菫といふ心をよめる　參議通親
よもきふの庭のけしきはさひしきに心すみれの花のみそさく
堀川院百首によふこ鳥をよめる　源俊頼朝臣
あつまちのなこその關の呼子鳥なにゝつくへき我身なるらん
呼子鳥をよみ侍りける　賀茂重保
山ひこをなれか友とや思ふらんこたふれは又よふ子鳥かな
藤原親佐
おほつかなたれをかくのみ呼子鳥人數ならはこたへしてまし
款冬をよめる　平經正朝臣
立田川きしの山ふき咲ぬれはかけより波そをりはしめける
つゝしをよめる　賴圓法師
何事をしのふの岡の岩つゝしいはておもひの色に出てぬらん
水のほとりのつゝしといふことをよめる　賀茂實保
岩つゝしうつれるかけは大井川紅葉をよせし波かとそ見る
藤爲松衣といへるこゝろをよめる　顯昭法師
色に出る藤のゆかりにむらさきのねすりの衣まつもきてけり
兼思三月盡といふこゝろをよめる　覺綱法師

日をへつゝをしむ心もゆく春もともにそふかく（ふるイ）なり增りける

暮春の心をよめる　藤原爲業

ゆく春は風にしられぬ山かけの花のもとにやたちとまるらん

土御門内大臣

入日さす山のはさへそうらめしき暮すは春のかへらましやは

讃岐

みひとつのなけきならねは暮て行春の別をとふ人そなき

三月盡の日俊成卿のもとへ申つかはしける　法印靜賢

花はみなよもの嵐にさそはれてひとりや春のけふは行らん

山家三月盡といふことをよめる　寛玄法師

花も散り春もくれぬる山さとは心さへこそとまらさりけれ

藤原伊綱

こぬまても道（花ゆゑ舊古）行人のまたれつゝ（る歟）春も暮ぬるみ山へのさと

海路三月盡と云ことをよめる　藤原公衡朝臣

へたてつるやへのしほちのうす霞さ（さイ）ゆるやゝかて春の暮ぬ（たイ）る

閏三月晦日よめる　權少僧都範玄

花の春重なるかひそなかりけるちらぬ日數のそはゝ社あらめ

羇旅部

曉路霞といへる心をよめる　參議經盛

よをこめてたつ霞たになかりせはひとりこゆらん（やてえんイ）さやの中山

羇中歸雁といふことをよめる　敎眞法師

日數へてとふ雁かねもわかことや歸るこしらはくるしかる覽

羇中郭公といへる心をよめる　勝命法師

さらぬたに都こひしきしのゝめに涙もよほすほとゝきすかな

羽衣

都には待かれたりしほとゝきすけふあふ坂の關になくなり

賀茂重保

待しより心つくしのほとゝきすしはしとゝめよもしの關守

旅宿五月雨といふ心をよめる　源仲政（正イ）

五月雨は苫のしつくに袖ぬれておなしほたれの波のうきねや

朝海法師

さみたれにみかさまされは衣河たゝてそ旅の日數へにける

右大臣家歌合に旅のこゝろをよめる　顯昭法師

とほさかるまゝに都のしのはれてかさなる山のうらめしき哉

あめのふりけるに都なる人のもとへつかはしける　散位源光行

君こふるなみたの雨のひまなくて心はれせぬ旅の空かな

心の外なることにてひとのくにゝまかり（ほへりイ）けるによめる　平康賴

かくはかりうき身のほともわすら（はへイ）れて猶戀しきは都なりけり

みちのくにへくたりまかりけるになこそのせきに

てよめる　源護家朝臣
ふく風をなこその關とおもへともみちもせにちる山櫻かな
おほやけの御かしこまりにてあつまのかたへまか
りけるにゆくすゑはるかにおほえはへる（にへりてイ）によめる
參議修範
日をへつゝ行にはろけき道なれとすゑを都と思はましかは
高野へまゐりたまひける道にて　高野法親王
定めなきうきよの中としりぬれはいつくも旅の心地こそすれ（せねイ）
旅の心を　右大臣
故里におもふ入なきたひち（たイ）にも草のまくらは露けからすや
皇后宮大夫俊成
あはれなるのしまかさきのいほり哉露おく袖に波もかけゝり（をるる　新後拾）
淸見かたなみちさやけき月を見てやかて心やせきとなるらん
藤原隆信朝臣
玉つしまいその濱やのとまやかた夢たに見えぬ波のおと哉
藤原顯家朝臣
あつまちはゆきそやられぬ入日さす山を都のかたとなかめて
從三位通盛
風ふけはうかはにともすかゝり火のあかしかねたるかち枕哉
賀茂重保
東路のしほすり衣なれにけりいくあさ露にそほちきぬらん

内大臣
草まくら結ふ夢路は都にてさむれは旅の空そ悲しき
藤原頁清
旅ころもなたのしほやにかたしきてあまの袖とも成にける哉
藤原範光（綱イ）
東路へ（にイ）ゆくこのくれはおのつから月をむかふる心地こそすれ
藤原季經（綱イ）朝臣
草まくら君とむすへる旅ならは露はかりにや袖はぬれまし
藤原隆房朝臣
くさ枕かりねの夢にいく度かなれし都へ（にイ）ゆきかへるらん
海邊旅宿といふことをよめる　定伊法師
たひねする人も枕に結へとや磯の草根を波あらふらん
旅宿虫といふことをよめる　藤原公衡朝臣
ふるさとのかへにおと（やイ）せしきりぎりす草の枕も擘そかはらぬ
月前旅宿といへるこゝろをよめる　藤原基俊
あたら夜をいせのはま荻折しきていもこひしらにみつる月哉
藤原親盛
やとかさぬ人のつらさそ忘れぬる月すむのへに旅ねせし（するイ）よは
平康賴
たひ衣かたしく袖も露おき（けくイ）て月さへやとる秋の夕暮
圓位法師

わたの原はるかに波をへたてきて都にいてし月をみるかな
旅宿冬月といふこゝろをよめる　藤原敦經朝臣
かたしけは涙もこほる袖のうへに月をやとして旅れをそする
羇中落葉といふ心をよめる　賀茂重保
木のはちる立田の山のからにしき行かふ人のうはきなりけり
つくしへまかりけるにみちよりみやこへいひつかはしける　登蓮法師
ふるさとをこふる涙のなかりせは何をか旅の身にはかけまし
おほやけの御かしこまりにてあつまのかたへまかりける道にて霞をよめる　民部卿成範
日をへつゝ都はとほくなりゆけとたちもおくれぬ春霞かな
藤原敦頼住吉にて歌合し侍りけるに旅宿時雨といふことをよめる　小侍從
草枕おなし旅れの袖に又よはのしくれもやとはかりけり
源仲綱
たまもかるいはやか下にもる時雨旅れの袖もしほたれよとや
皇后宮大夫俊成
あはれにもよはにすくなる時雨哉なれもや旅の空に出つる
左衛門督實家
旅れする磯のとまやのむら時雨あはれを波のうちそへてけり
旅泊時雨をよめる　覺昭法師
みなと川時雨せさりしうきねには波のみさすか袖はぬれしか
大納言定房
風のおとにわきそかれまし松かれの枕にもらぬ時雨なりせは
旅宿時雨といふをよめる　民部卿成範
霜かれの草引むすふたひやかた時雨もろよはふしそわつらふ
勝命法師
はつ時雨わかふるさとや過きつるくさの枕にものかたりせよ
海邊時雨といふことをよめる　平行盛
かくまては哀ならしなしくるとも磯の松かれ枕ならすは
旅行霰といへるこゝろをよめる　刑部卿賴輔
雨かとてくもれはいそく道芝にまつたはしるは霰なりけり
藤原朝仲
雪ふれは道しらすけのさゝはらに駒にまかするひなの旅人
藤原盛雅
ふりかゝるすけのをかさを打はらひ行わつらへる野路の旅人
旅宿歳暮といへる心をよめる　源師光
かりそめの草の枕と思ひしにこよひあけなはふたとせやつむ
羇旅述懐　仁和寺二品法親王
よしさらは磯のとまやに旅れせん波かけすとて濡ぬ袖かは

月詣倭歌集卷第四

四月附戀上

更衣をよめる　皇后宮大夫俊成

いつしかゝかへつる花の袂哉ときにうつろはならひなれとも

藤原顯家朝臣

ひきかへていつしかきつる白かされ夏のたちける衣なりけり

藤原定家

惜むにもこゝろなるへき袂さへ花のなこりはとまらさるらん

あかさりし花の袂はけふぬきぬ（つイ）うき身そかふる時なかりける

昌俊法師

いつしかと春の思ひをたつものは風をいとはぬせみの羽衣

俊成卿家に人々十首歌よみ侍けるに更衣をよめる

藤原敦仲

みになれし花のたもとをゝしとてもぬかて（へイ）はつへき衣更かは

更衣の日女のもとにつかはしける　従三位季能

誰にたに（たにもイ）あふ嬉しさをつゝまはやくちし袂はけふそかへつる

四月一日によめる　平行盛

けふも猶風をはまたしおのつからおくれて匂ふ花もこそあれ

やよひのつこもりにもの申たりける女に四月一日につかはしける　藤原公衡朝臣

春の色を惜むにそへてけふは猶かされしそてそ衣かへうき

賀茂重保の家にて故郷卯花といふことを人々よみはへりけるに　大輔

あれ残る垣ねまはらの卯のはなは　　　色も淋しき

紀康宗

ふる郷はへたても見えす卯の花の咲るところや垣ねなるらん

暮見卯花といふことをよめる　賀茂重保（寶イ）

卯花のさける垣ねは夕づくよ入ぬるあとに影そとまれる

垣（隣イ）卯花といへるこゝろをよめる　藤原經家朝臣

神まつるうつきになれは卯花の垣ねもをみの衣きてけり

題しらす　左衛門督實家

眞柴かるしつないそきそ卯花に夕やみもなしをのゝほそ道

樵路卯花といふことをよめる　藤原定佐

うの花をかさしのしはにさしそへて家ちにかへるをのゝ山人

卯花所々といふことをよめる　中原有安

たえ〳〵にさける垣ねの卯花やおとなし川のせゝのしらなみ

歌林苑にて人々引友尋郭公といへるをよめる　大江廣親

思ふとち尋ね行にも時鳥まつさきにこそきかまほしけれ

衆人待郭公といふ事をよめる　源師光

時鳥まつ夕くれのまとひこそこゝろ〳〵のひとり（つイ）なるらめ

小侍従

時鳥まてときなかすいさゝらは思ひ〳〵にゆきてたつねん

郭公　　仁和寺二品法親王

尋ね見てうらみにゝてん時鳥いつくもかくやよかれしつらん

題しらす　　灌覺法師

あけぬとてまとろみもせす時鳥初音はよるにかきるものかは

民部卿成範

よもすから待をはしらて郭公いかなる山の峯になくらん

頼圓法師

待人にわきてきかせは時鳥一こゑなりとうれしからまし

大納言公通卿家に十首歌人によませ侍けるに郭公を

内大臣

人しれす我身のうへにまつことの心をわくるほとゝきす哉

藤原定長

うきみとて待にはあらす時鳥花たちはなをたゝにおれとや

證蓮法師

いかて我思ひしらせん郭公まつよなからにつもるうらみを

歌林苑にて時鳥郭公といふことを人々よみ侍けるに

覺綱法師

思ひねのゆめにきなくは時鳥人つてよりも嬉しかりけり

紀康宗

ほとゝきすこゑまちつけて聞人ら思ふことをや猶殘すらん

百首歌中に時鳥を　　右大臣

ほとゝきす思ひもあへぬ初聲はねぬ人さへそおとろかれける

俊惠法師

かれてよりたゝ一聲としらませはきゝはまとはしやま郭公

始聞時鳥といふことをよめる　　藤原親佐

けふこそは里なれそむれ時鳥一こゑなけと誰かをしへし

顯昭法師

聞そめて後もまたる　時鳥こはまた誰にしのふなるらん

ねさめのほとゝきすといふことをよめる　　參議通親

ねさめするたよりにきけは時鳥つらき人さへ嬉しかりけり

海邊郭公といふことをよめる　　中原清重

すみ吉のまつときゝてや時鳥つもりのうらにはつね鳴らん

春宮大夫公實卿家にて時鳥をよめる　　頼輔卿母

時鳥又もや鳴とまたれつゝきくよりもこそねられさりけれ

重保家にて人々社頭郭公といふことをよみ侍りけるに　　源宗光女

あはれとや神も聞らんほとゝきすさかきの枝にゆふかけて鳴

時鳥をよめる　　昌俊法師

待たひにきなくと思はゝ時鳥ねぬよつもるも嬉しからまし

藤原盛方朝臣

行ちかふたそかれ時の雲路にてかたみになのるほとゝきす哉

源仲頼
まつほとはちゝに心をつくさせて一聲なのるほとゝきす哉

賀茂重仲
いつかたそ心まとはす時鳥いまひとこゑにゆくへしらせよ

夢聞郭公といふことをよめる　藤原定佐
ほとゝきす夢にきゝつる一聲はおとろくはかり嬉しかりけり

遠聞時鳥といふことをよめる　權少僧都範玄
時鳥をちにかたらふ聲すなり山ひこたにもちかくこたへよ

題しらす　平行盛
ひと聲とまちつることは時鳥またきかぬまの心なりけり

勝命法師
我はかりまたぬ人もやほとゝきすあけ行空の聲をきくらん

經盛朝臣家歌合に郭公を　刑部卿頼輔
をしめともとまらてすきぬ時鳥心の闇はかひなかりけり

瞻西上人の雲居寺にこれかれまかりていまた時鳥
にあかすといへることをよみ侍りける　源俊頼朝臣
なとてかく思ひそめけん時鳥ゆきのみやまのいりのこゑかは

左衛門の陣に侍りけるにほとゝきすを聞てよめる　源季貞
みかきもりまてかふほとは郭公しはし雲ゐになのりしてゆく

右大臣家歌合に郭公を　皇后宮大夫俊成
すきぬなりよはのねさめの時鳥こゑはまくらにいる心地して

夏神樂をよめる　賀茂重保
ゆふしてゝひとつのみそやかけつらん豐のや島に柏そよめく

戀上

人につかはしける　三宮
いかにせん思ひを人にそめなから色にいてしとしのふ心を

その人ともしらて見侍りける女のもとにおしあて
につかはしける　德大寺左大臣
ひとめみし人はたれともしら雲のうはの空なる戀もする哉

題しらす　內大臣
人しれぬ木のはの下のうもれ水思ふこゝろをかきなかさはや

祝部成仲
おもふへき人はわれともしら露のしらすや君か心地おくらん

源季貞
戀しさはたゝ一すちに成そ行うしつらしとはことにこそいへ

藤原清輔朝臣
なにはめかすくもたくひの下煙うへはつれなき我身なりけり

左衛門督實家
身にかへてつらきと何に思ふ覽いけらはなひく人もこそあれ

藤原隆房朝臣

さのみやは心はかりをつくしなるいきの松原しらてとし經る

刑部卿賴輔

から衣おもひたつよりぬるゝ哉なみたそ戀のはしめなりける

花園左大臣

はかなくも人に心をつくす哉身のためにこそ思ひそめしか

寂然法師

かくはかり人の心をくたきけんむくい思ふもうらめしのみや

藤原爲業

今そしる秋の色のくれなゐはつれなき人のそむるなりけり

待賢門院堀川

あら礒の岩にくたくる波なれやつれなき人にかくるこゝろは

藤原伊綱

つれなくそ夢にも見ゆるさよ衣うらみんとては返しやはせし

成全法師

ますかゝみ戀にやつるゝかけみれは我さへ我と見えぬなる哉

從三位季能

つれなきはいはて絕なんと思ふこそ逢みぬさきの別なりけれ

法眼實快

よそ人にとはれぬる哉君にこそ見せはやと思ふ袖のしつくを

藤原爲業

思へとも忍ふる戀のわりなきはつらきもえこそ恨みさりけれ

賀茂重政

おもはしと思ひかへすにかへらぬは淚の河のなかれなりけり

源光行

我ゆゑの淚と君かしりませはくつとも袖の嬉しからまし

覺昭法師

おのつからあはて恩むかたやあると戀に馴たる人にとはゝや

平經正朝臣

つらさをは思ふあまりに忘られて戀しきをのなくさめもかな

民部卿成範

きえかへり數く心をしらせはやさてもや露のなさけおかぬと

登蓮法師

いつまてとつれなき日數かそへてか身を碎きつゝ年を經ぬ覽

新少將

思ひきや淚の色はもみちしてあはぬときはのなけきせんとは

源有房朝臣

戀はたゝふたもしなれと玉つさにかきもつくさぬ心こそすれ

賀茂季仲

戀侘ぬしなはやとのみ思へともいくらはかなき世にしある覽

藤原行家

今見てんかくいひ〱て戀しなは身にかふ許思ひけりとは

刑部卿賴輔

つらく共つひの頼みは有なまし逢ぬためしのなき世なりせは
大江泰友
君故におつるなみたの露をこそ戀しきかすにおくへかりけれ
惠圓法師
あふをはうつゝにそへる面影とはかなきよはの夢となりけり
藤原親盛
いのちさへわか心にはしたかはて戀死ぬとたに聞れぬそうき
源師光
後の世と契らは身をはすてはてん(も家集)をしむ命もたれかゆゑなる(そは家集)
藤原敦仲
あはれてふなさけをかけてわか袖に涙をよその物となさはや
覺盛法師
それゆゑに涙の色もふかけれはつらきにそむる袂なりけり
賀茂重保
曉戀をよめる
さりともと猶待ものをいまはとて心よわくそ鳥はなくなる
藤原定長
夜思のこゝろをよめる
思ひねの夢たに見えて明ゆけは(ぬれはイ)あはても鳥のねこそつらけれ
性寂法師
見手跡戀といふことをよめる
しきろなる筆のすさひをみるからに心のうちのかきみたる哉
高松宮
見衣戀を
しらせはやこすにはつるゝ袖のうちに入ぬる玉の主は誰そと

題しらす
戀せしとみよの佛にいのりせん神(しイ)のみそきはうけすなりにき
藤原季定
住吉のちきのかたそきこれのみや逢ぬためしに年へぬるもの
藤原隆房朝臣
いかにせん暫しはさこそ厭はめと思ひし程にやかてつれなき
平忠度朝臣
いかにせんおさふる袖も朽はてゝかゝるかたなくおつる涙を(はイ)
成全法師
せきもあへすはなれておつる涙哉わかそはたつるたき枕より
從三位賴政
もゆれともかひなき戀のけふりゆゑ雲と成なんをそかなしき
法橋宗圓
色見えぬ心のほとをしらするはたもとをそむる涙なりけり
祐盛法師
歌林苑歌合に戀のこゝろをよめる
なきなかす(もイ)涙にうつる影ならは(れイ)何かうき身のたくひならまし
右大辨親宗
題しらす
くれなゐの戀の涙のいかなれはゝてはくちはに袖をなすらん
覺盛法師
憂身にはつれなき人そなかりける逢みんまては思ひよられは
中務卿宮民部卿

淺からぬ契りにいつ（やすくイ）かはる世に涙そたえぬなかとなりぬる

湛（暹イ）覺法師

命こそあはぬ歎きのなかりけれたえなはものを思はましやは

覺延法師

それをたに誰か心にかなふやと我もわか身をいとふあはれさ

藤原師綱朝臣女

あはぬまの袖になかるゝ涙こそ我身のうきといふへかりけれ

長盛朝臣

今はたゝけふまてつらき人よりも戀にたへたる身をそ恨むる

左衛門督實家

かくはかりくるしと思ふ戀ち（にしイ）にもやすまぬものは心なりけり

定伊法師

嬉しきもうきもゆかりを尋ぬれは戀しきにこそ果はなりけれ

顯昭法師

うき人のゆかりに身をは惜まれと戀はゝかなきすさひ成けり

三河内侍

にこり行（江[illegible]イ）心地こそすれひとりぬる枕のちりにつもるなみたは

寂然法師

君ゆゑにおつる涙のをしけれはかたしく袖をしほらてそぬる

右大臣家歌合に戀のこゝろを

俊惠法師

我戀は今はかきりとゆふまくれ荻ふく風のおとつれてゆく

經盛卿歌合に戀を

刑部卿賴輔

戀しなん命はなほもをしき哉おなし世にあるかひはなけれと

百首の歌の中に戀のこゝろをよめる

圓位法師

たのめぬに君くやと待宵のまのふけ〳〵（ゆかてイ）てたゝ明なましかは

右大臣家百首中に戀のこゝろを

内大臣

さきにたつ涙とならは人しれす戀ちにまとふ道しるへせよ

鬪詞怨戀といふことをよめる

中原清重

露はかりなさけもかけぬことのはを思ひしらぬは涙なりけり

藤原季定

情なくふみ（すきイ）なへさるゝ小山田に猶しも（こひ草イ）戀の種をまく哉

待返事戀といふことを

大納言隆季

玉章をたよりにかくる雁かねのかへらぬ空はかくやまたれし

たま〳〵返事をみる戀といへることをよめる

權僧正道勝

まち〳〵て心つくしの文見れはゆるさぬもしの關てゐにける

見返事無字戀といへる心をよめる

勝命法師

つの國のあして（よしイ）にもなき浦を見てなにはのことにおつる涙そ

不返事戀といふことをよめる

平經正朝臣

心なき風たにこそはわかの浦によせくる波をかへすとはきけ

いやしきをいとはるゝ戀といふことを

羽衣

いかにせんそまやま川のくれことに思ひくたしてあはぬ心を

被厭老戀といふことをよめる　賀茂俊平

思ひしろ事もありなん命あらは誰もさかりはしはしはかりそ

平行盛

いとはるゝ年は姿にしろけれはいひかくすへきかたもなき哉

隨日増戀といふ事をよめる　法皇御製

戀わふるけふの袂にくらふれはきのふの袖はぬれしかすかは

月詣倭歌集巻第五

五月附戀中

題しらす　右大臣

五月雨にぬれ〳〵ひかんあやめ草ぬまの岩かき浪もこそこせ

土御門内大臣の久我山荘にて旅宿菖蒲といふとを

人々よみ侍りけるに　祐盛法師

妹かすむ都なりせはあやめ草まくらはふたつゆはましものを

菖蒲をよめる　藤原定佐

年をにひく手もたゆしあやめ草けふより軒にねさせとそ思ふ

平忠度朝臣

あやめ草尋ぬる人のこゝろにそまつなかきれはかゝり初ける

藤原資隆朝臣

五月雨によとのゝ菖蒲み隠れて蕭らさりせはいかてひかまし

定伊法師

あやめ草おのか沼へをあくかれて軒のしのふに宿かりてけり

草の庵のゝきにあやめを　紀康宗

やとことにかはらすみゆるあやめ草さのみや同し沼に引らん

深夜時鳥といふことをよめる　勝覺法師

時鳥われそよふかく待えたる聲をねさめの人にきかすな

藤原季經朝臣

ふけて鳴ならひなりせは時鳥こよひはしはしまとろみなまし

時鳥をよめる　祝部成仲

ほとゝきす雲ゐに鳴て過ぬれと聲はこゝろにとまるなりけり

藤原定長

立花やをりやつまゝし時鳥なく〳〵までもうらむはかりに

泰覺法師

尋ねつる山のかひにはほとゝきす人つてならて初音をそ聞く

公卿殿上人あまた右近馬場にて時鳥きゝ侍りける

にいさなはれてよみ侍りける　祐盛法師

けふこゝにこゑをはつくせ時鳥おのか五月ものこりやはある

題しらす　平忠度朝臣

なつかしきはな立花の匂ひかな誰うつりかと思ひなさまし

皇后宮大夫俊成

たれか又花たちはなに思ひいてん我もむかしの人となりなは

右大辨親宗
わか宿の花立はなにふく風をたか里よりと（かチ）たれう（なかチ）らむらん
平經正朝臣
軒ちかきはな橘にふく風は枝にふきても（れイ）香（そイ）はさそひける
花橘遠くにほふといふことをよめる　惟宗廣實（言イ）
たかさとの花橘をさそひきて我物かほに風かほるらん
かやり火をよめる　小侍從
夏くれはむろのやしまのさと人も猶かやり火や思ひたつらん
參議經盛
もしほやく煙とのみも見ゆる哉蜑のとまやにたつるかやりひ
右大臣家百首に五月雨を　刑部卿賴輔
もしほやく思ひを（やイ）蜑の絶ぬらんいつはるへしとみえぬ五月雨
藤原季經朝臣
苗代にたえ〳〵ひきしわすれ水あせこえにけり五月雨の頃
藤原隆信朝臣
五月雨はしかま（の家集）のあまのとまもりて（ねやくちて家集）こやしほたるゝ袂成らん
五月雨を　大納言實國
五月雨に暁（口家集）のしのやのたか（しの家集）すかきふしところまて水はきに鳧
左衛門督實家
五月雨のいさらを川をひきかけて（たよりにて玉）（わイ）外面の小田を水と（みを同）なしつる（と同）
平資盛朝臣
五月雨のはれま待えて暁のめか（をイ）門田のさなへ今やとるらん
兵衛
五月雨のなやまぬころそかつまたの池も昔のけしきなりける
海邊五月雨といふことをよめる　大江公景
五月雨にあまの苫やゝ朽はてゝかつきせぬにも（ヨイ）袖やかわかぬ
五月雨遠行といふことをよめる　源宗光女
五月雨にさゝめのみのも朽はてゝぬれ〳〵そゆく野原しの原
連日五月雨といふことを　賀茂實平
五月雨のはれま待えては（なまイ）旅衣ほさてもやかて朽ぬへき哉
さなへをよめる　兵衛
とり〳〵に山田のさなへいそくめりほに出る秋もしらぬ命に
雨後早苗といふことをよめる　藤原範綱
さみたれのなこりにおける白露の玉ぬきなからとる早苗かな
水鷄をよみ侍りける　平經正朝臣
我宿はしたまつ人もなき物をなにあらましにたゝく水鷄そ
藤原有家
われ故とたゝくゝひなや思ふらんあくれはあくる槇の板戸を
上西門院兵衛
あけなから槇の板戸をこゝろみんよはの水鷄は猶やたゝくと
賀茂重政
よもすから叩く水鷄のあまのとをあくるをりしも（しらてイ）いつち行覽

山家水鶏を　藤原定範

柴の戸をさすとも更にさゝぬともいかにせよとて叩く水鶏そ

両方水鶏といふことを　藤原親盛

一かたはさりとも人のたゝくらんあくれはこれも水鶏成けり

暁水鶏といふことを　法橋繼覺

忍ひつまおきつる後はさゝぬとをたゝくにしりぬ水鶏成けり

なつかりのこゝろをよめる　賀茂保久

あさふする夏のゝ草のふかけれは鹿にこゝろをかけている哉

照射をよめる　賀茂重保

ともしする火串をまつと思へはやおいこみて鹿の目をはかふ覽

夏夜暁月といふことを　道圓法師

月は猪山のはとほく殘れともほとなくあくる夜こそをしけれ

夏月をよめる　覺網法師

夏草の露にやとれる月影はあたにむすへるつらゝなりけり

寛玄法師

久方の月もこよひやすゝむらんいはもる水に影やとしけり

賀茂資保

月こよひ秋にかはらす同しくはほとなくあけぬ山のはもかな

山中夏月といへることをよめる　藤原親佐

夏山のならの青葉をふく風にかけさたまらぬ夕つくよ哉

水上夏月といふことをよめる　賀茂重保

夏のよはいはかきしみつ月さえてむすへはとくる氷なりけり

左衛門督實家

夏の夜はやとれる月のけしきにておなしし水も涼しかりけり

山中螢火といふことをよめる　覺延法師

こよひこそをくらの山もなかりけれこの下闇に螢みたれて

螢火照船といふことをよめる　賀茂資仲

とまやかたてらす螢はひこ星の妻むかへ船こくかとそ見る

蒲草花簡螢といふことをよめる　荒木田成實

五月雨にをかやの軒のくちぬれはやかて螢そ宿にとひかふ

湖上螢火といふことをよめる　藤原範季朝臣

夏むしのかけみたるめりさゝ浪やしかのからさき風や吹らん

戀中

見れともあはぬこひといふことを　花園左大臣

人しれぬ戀にわか身はしつめともみるめにうくは涙なりけり

ゆかりをむつふるこひといふことをよめる　賀茂重久

なてしこを我戀草のゆかりとてなつさふ露に袖そしほるゝ

心さし侍りける童のふみとりにつかはしたりけれは　天台座主忠尋

ふみわけてかくなはかりになりにけり物思ふ人のやとの庭草

寄苗代戀といふことを人々重保か家にてよみ侍り

けるに　　藤原能盛

苗代の水はこゝろにまかすれとこひのなみたをせきあへぬ哉

契夏戀といふことをよめる　　賀茂惟基

たのむるにかれてそなけく短夜をねぬに明ぬと聞過しかは

寄更衣戀といふ心をよめる　　覺禰法師

けふよりや涙の川をせきかねんひとへになりぬ袖のしからみ

祐盛法師

夏ころもおなし涙の色なれは朽ぬやかはるしるしなるらん

前齋院右衛門佐

いはひつゝ立そかへつる夏ころもあかぬ名殘の涙かゝれと

遠き人をこふといふことをよめる　　源宗光女

便りあらはむやのはまくりふみみせよ遙なるとの浦に住とも

海路戀といふことをよめる　　賀茂實保

いかなれは身はうき舟にのりなから涙の底にしつむなるらん

戀催無常といふことをよめる　　智經法師

後の世の煙としらてこれをさは戀にこかるとなけくへきかは

依戀入菸といふこゝろをよめる　　源仲頼

しるらめやつらしとかきし墨の色を衣にそめて思ひたつとも

法印慈圓

戀故に世をそむきぬとしらすなよ遥んといはゝさめも社すれ

戀妨菸といふこゝろをよめる　　勝眞法師

下もえの戀のけふりも立そひてこゝろの月はいつかはるへき

賀茂卅講五卷日重保か家にて戀妨道心といふこと
を人々よみ侍りけるに　　前大僧都澄憲

さりとてもとたてしにしきゝこりはてゝけふ大原に墨染の身そ

皇太后宮大進

待かれて戀なくさめに見る月のやかて心をにしへいさなふ

題しらす　　八條院六條

あひ思ふ人たにそはぬ後の世に戀やかはらぬ友となるへき

祈神増戀といふことをよめる　　俊惠法師

此世には契りなしとてなか／＼に戀しれとする神のしるしか

示現をたのむ戀といふことをよめる　　皇太后宮大進

おもひれのしるし見えぬる夢なれはあはするとも神に任せん

身のほとをおもひていひいたさゝる戀といふこと
をよめる　　小侍從

さるさはの池になひきし玉もこそかゝる歎きのはてと聞しか

大納言實房

思ひ餘りいはんに人のつれなくていとゝ憂身の程やしられん

女につかはしける　　藤原隆房朝臣

おなしくはかされてしほれ濡衣さてもほすへき思ひならぬに

返し　　よみ人しらす

流れてもすゝきやすると濡衣ひとはきすとて身にはならさし

百首歌中に

あさてほすあつまをとめのかや莚しき忍ひてもすこす比哉　源俊頼朝臣

艶女逢他人といふ心を人々よみ侍りしに

大納言實國（實宗）

とけかたき心と見しはひむろ山たゝ我からのつらさなりけり

土御門内大臣女のもとにいかてそのかけに我身を
なしてあさゆふはなれしといひつかはしたりけれ
はかへしによめる　よみ人しらす

あちきなく人さへありて佗ぬへき物思ふみのかけになりなは（とイ）

百首歌中に　參議親隆

絞りつる袖はかりとそ思ひしに名をさへ戀にくたすへしやは

右大臣家歌合に戀の心をよめる　顯昭法師

よそにのみ人はかくともいとはぬを（しイ）憂身は戀にあらはれに鳬（にイ）

寄草花戀といへることをよめる（心イ）　藤原範俊

あたしのゝ露になれふす女郎花つれなき人のかゝらましかは

晩風催戀といふことをよめる　藤原顯家朝臣

よとゝもにつれなき人をこひ草の露こほれます秋の夕風

鹿聲增戀といふことをよめる　藤原伊經

さをしかのなくねに袖そぬれ増るおのか涙におちぬものから

すみかまによする戀といふことをよめる　覺綱法師

わきもこにあはぬ嘆きをこりつみていく炭竈にやかは盡なん（てイ）

寄歳暮戀といふことをよめる　皇大后宮大進

けふまては思ひしをれぬあけは猶身をうくひすの初音鳴とや

院因幡

かくてさは年も暮ぬと思ふにも人のつらさの數そそひぬる

寄枕戀といふことをよめる　土御門内大臣

つゝめとも枕は戀を知りぬらん涙かゝらぬよはしなければ

左衞門督實家

我戀は枕はかりもしらしかしよすからおきてあかすと思へは

寄占戀といへることをよめる　皇嘉門院武藏

なほさりのてすさみにする戀占もあふにしあふは嬉しかり鳬

歌によりてこひまさるといふことをよめる　讃岐

うしと思ふ人の心をたれとすることのはをしも見るそ悲しき

ものかたりの名によする戀といふことをよめる　藤原伊綱

ぬれきぬとゝふ人あらはいふへきに（をイ）色にそしろき忍ひねの袖

關をへたつる戀といへる心を　高松宮

戀にわて（か歟）戀ちにまよふ關の名はいはれと知るきなこそ成らん

隔河戀といふことをよめる　平忠度朝臣

まれにたにあふよもあらは天河へたつる星のたくひならまし

山しろのみつのの里に妹をおきていく度よとに舟よはふらん　從三位賴政

戀下女といふことをよめる

なれか〻むいたゐの水の雫にもおとらぬものをこふる涙は　藤原懷綱

依戀赴遠路といふことをよめる

隔れゆく心つくしのはてに又あひみぬうきやあらんとすらん　紀康宗

題しらす

つらかりし人のなこりとなりにけりおのか物から落る涙は　藤原隆親

晝も思ひよるも歎きの絕ぬ哉とくあけぬるとくれもやらぬと　藤原重保（国イ）

月詣倭歌集卷第六

六月附戀下

古宅泉といふことをよめる

見し人もなき古里のましみづにいつよりゐたるみくさなるらん　法眼長眞

對泉翫月といふことを

あはれ□人も□とを□

しつくにもにたらば（とイ）月□いたゐのし水むすはてそみる

夜對泉といふことをよめる

す〻むとも泉の水はむすひあけし宿れる月のさわきもそする　左衞門督實家

氷室を

あたりさへ凉しかりけりひむろ山まかせし水の氷るのみかは　大炊御門右大臣

蓮をよめる

おろかにも露の命を惜しむ哉はちすのうへにゐるを見なから　大納言資賢

蓮葉の花におき（とゐよるイ）ゐる露のみはつとめてやとるもと〻こそきけ　淸圓法師

夏月照蓮といへるこ〻ろを　琳□

池水ははすのうき□つゆにそやとるなつ□

雨中瞿麥といふ□

とこなつの花ににたに□ひとつ色にはふらぬ□

夏草をよめる

あさとにきて見つる哉藤はかまなりたかへたる花やさくとて　從三位通盛

大納言公通家に十首人々によませ侍りけるに夏草をよめる

いたつらにおいにけらし（るかイ）なあはれ我ともとはみすや杜の下草　大輔

あつまちはわけ行さ〻のひをへつ〻夏と〻もにも深くなる哉　太宰大貳重家

庭の面をよもきかそまとなしはて〻虫のね聞ん秋をこそまて　藤原隆信朝臣

尋ねくる人なきやとの八重葎秋よりさきもさひしかりけり　藤原家長

納涼を

ひくらしのこゑする山の松風にいはまをくゝる水の凉しさ　内大臣

樹陰納凉といふことを　鴨長明

夏くれはすきうかりけりいそのかみふるからをのゝ楢の下蔭

（社頭イ）杜納凉といふことをよめる　祝部成仲

風ふけはゆるきの杜の凉しさにあふきをよその物となしつる

竹間納凉といへるこゝろを　左衛門督實家

夏の日もかけにわするゝ吳竹はまたきに秋のよやこもるらん

大宮太政大臣家にて夏月如秋といふ心をよめる　藤原敎仲

こはき原またさかぬ（はなさかぬ平イ同）にも宮きのゝ鹿やこよひの月に鳴らん

野草秋（近衆）といふこゝろをよめる　源師光

あたらしやなはなこもれ（かイ）るしの薄たかみまくきに刈蕪すらん

院御供花の會に秋風如秋といふことを　藤原隆信朝臣

ゆふまくれまたきに秋をさそひきて秋にやとすまのゝ浦風

夏中立秋といふことを　參議□□

かそふれは夏のひかすは殘れとも風のおとにそ秋をしらする

暮日六月秋といふことをよめる　大納言定房（實イ）

みそきする河瀨に夏はつきぬめり山の高根にいろひのみかは

戀下

忍戀の心をよめる　法眼定快（賢イ）

たか爲に後のうき名を忍ふ覽身にかへてこそあはまほしきを

藤原隆信朝臣

あはれともたれか心をなくさめん身より外にはしろ人もなし

皇后宮大夫俊成

みのうきの涙になれぬ袖ならはいかにいひてか戀をつゝまん

惟宗廣言

秋もきぬいまはに出しゝの薄しのはてたにも露にぬれはや

智性法師

しらせはや心ひとつをとにかくに思ひ亂るゝ忍ふもちすり

夢中忍戀といふことをよめる　能円法師

夢にさへなに忍ひれをつゝみけんさめなは外の人もしらしを

源光行

夢路にもあはて歸るは身のうきをさめて後こそ思ひあはすれ

むつましくならてわすられにける人につかはしけ

る　大江維順朝臣女

わすらるゝうき名はさても立にけり心のうちに思ひつけとも

ちきりけることのたかひにける女につかはしける　參議爲通

契りしもいろともにこそ契りしか忘れは我もわすれましかは

寄藤花戀といふことをよめる　祝部成仲

藤波のよるとたのむることのはなまつにかゝりて日を暮す哉

逢不來戀といふことをよめる　平貞能朝臣

中々にたのめさりせはさよ衣かへすしるしは見えもしなまし　小侍従

たのむれは待よの閨のあけ方にをやむしもこそつらく聞ゆれ

契經年戀といふことをよめる　賀茂經隆

たのめすは何に命のかゝらましけにこそ戀はいのちなりけれ

百首歌中戀のこゝろをよませたまへる　崇徳院御製

歎くまに鏡のかけもおとろへぬ契りし事のかはる（へるイ）のみかは

建春門院殿上歌合に當夜違約戀といふ心をよめる　左衛門督實家

侘つゝはいつはりにたにたのめよと思ひしとを今宵こりぬる　皇后宮大夫俊成

思ひきやしらのはしかきかきつめて百夜も同し旅ねせんとは

會無實戀といへる心をよめる　大江維順朝臣女

なにとこはとありかほにさよ衣移りかはかりみにとまるらん

月夜なちきる戀といふ事をよめる　高階業重

あひみては心のやみもはれぬへき月すむよはと猶たのむらん

初遇戀の心をよめる　中納言長方

思ひかれしなはやといひしとのはそ先逢みては悔しかりける

うらみんと思ひしそはさよ衣かされぬほとのこゝろなりけり　權少僧都全眞

こよひさへ猶やすからぬ我身哉あふ嬉しさのこゝろさわきに　藤原季經朝臣

ふちとのみ涙のかはゝ成にしをいかてあふせに尋れきぬらん　俊盛法師

なひきても猶そ亂るゝ朝ね髮いかなるすちにならんと思へは　院因幡

こよひこそつゝみかねてははらひつれ戀の涙にぬれし枕も　定伊法師

夜渇戀といふこゝろ（ことイ）をよめる　平行盛

まちかねて更行ほとのあふをは空たのめせぬなさけはかりか　皇后宮尾張

宵のまはまつにほとへて過ぬれはあふは夢ちの心地こそすれ

夢中會戀といふことをよめる　平忠度朝臣

夢さめてなこりにたへす成ゆくはあふとみつるにかへん命か　内大臣

さめて後夢なりけりと思ふにもあふは名殘の惜くやはあらぬ

顯輔卿家にて月前遇女といふことをこれかれよみ侍りけるに　賀茂重保

思ふ事ありてや月をなかめましこよひも人のつれなかりせは

女をしのひてかたらひ侍りけるか風聞したりけれ
はつかはしける　藤原隆房朝臣
いつくより吹くる風のちらしけんたれも忍ふの杜のとの葉
右大臣家百首歌中（にイ）後朝のこゝろをよめる
俊惠法師
思へたゝ夢にたにこそ人を見てあしたの床はおきうかりけれ
會後逢懐といふこゝろをよめる　皇太后宮大進
みとせまて恨みて過しむくいとてあすよりつらき心あるなよ
後朝戀のこゝろをよめる　惟宗廣言
かたみとて袖にしめつるうつりかを洗ふはけさの涙なりけり
覺綱法師
なか〳〵に逢にはかへぬ玉のをのけさ絶ぬへき物をこそ思へ
藤原頁清
我はかり思ふ心はありきやとかへりそめけん人にとはゝや
平　實盛
鳥のねはさてもやうきと曉にかへらてとまる人にとはゝや
高倉院御製
けさよりはいとゝ思ひをたきまして歎きこりつむあふ坂の山
賀茂重保の家にて後朝戀のこゝろを人々よみはへ
りけるに　顯昭法師
あひそめて後そあやしさ戀衣かへるにいろのまさるへしやは

左大臣家歌合に遇不逢戀の心をよめる
刑部卿頼輔
思きや山したかけの忘れ水たえまに袖をぬらすへしとは
遇不逢戀のこゝろをよめる　法印靜賢
身のうき（さイ）を思ひしらてややみなまし逢みぬ時のつらさくせは
賀茂幸平
箸鷹のさかはのわかのかき（れイ）なほし有しかされになす由もかな
大江泰友
手枕になれにし袖をかたみとて惜むさへこそはてはくちぬれ
高松院右衞門佐〔上𨨞〕
あふことのたえは命のたえなんと思ひしかともあられける身を
俊惠法師
曉の鳥そおもへははつかしきひとよはかりになにいとひけむ
左衞門督實家
あふことのまれになるみの浦風になみたかゝらぬ時のまそなき
皇太后宮民部卿内侍
あさからぬ契りはやすくかはるよに涙そ絶ぬなかと成ける
二條院御製
しのひて人々につかはし給ける
なとやかくさもくれかたき大空そわか待とはありとしらすや
大納言隆季
寄鸞戀の心を
忍ひつまきまさぬ物をうくひすのひとく〳〵と何か語らふ

寄夢述戀といふことをよめる　平貢盛朝臣

心にもあらぬ別れの悲しさは見はてぬ夢のこゝちこそすれ

過門不入戀といふことよめる　小侍従

過ぬなりちとこし道を宮の前はあゆみとゝまる駒をはやめて　大輔

忘れにしいもか門をは過きぬと□誰にかたりて今管れぬらん

仁和寺に侍りけるわらはにもの申けるかかれ〳〵になりたりけるにふかゝらぬ君か心とみえなくにつひにたえぬる山かはの水と申たりけるによみてつかはしける　法眼定快

山河のしたにこゝろは通へとも岩にせかるゝたえまとをしれ

右大臣家後番歌合に經年戀といふことをよめる　藤原經家朝臣

いかなれは人のつらさも身のうさも我身ひとつに積る成らん

思出昔戀といふことをよめる　俊恵法師

おもかけは昔なからに身にそひて我のみとしのおいにける哉

題しらす　藤原隆信朝臣

いかにまた心ひとつのかよひちも末はなこその關と成らむ　藤原爲忠朝臣

今さらにいひないたしそかつまたの池のつゝみは昔されにき　大輔

うきにのみ習ひにけれは面影のきてはとまらぬけしきなる哉　二條院御製

いかて我人をわすれん忘れ行人こそかくはこひしかりけれ　皇嘉門院武藏

逢とはまはらにあめるたかす垣絶まかちなるなかれなりけり　慈辨法師

もろともに心みしかきみなりせは忘るゝ人をうらみましやは　皇后宮大夫俊成

露むすふまのゝこすけのすか枕かはしてもなそ袖ぬらすらん　右大臣家備前

うき人をうらみんこともけふ計あすをまつへき我身ならねは　參議通親

ふすひまもなしとなけきし夏のよは逢みし時の心なりけり

絶後戀といふことをよめる　藤原親盛

我ならぬ心や君を忘れけん戀はむかしにかはりやはする

物申ける女の兵衞なりける人にかたらひつきぬときゝてつかはしける　參議通親

柏木のはもりのかみのたゝらはやみかさの山をさしはなる覧　待賢門院堀川

うき人を忍ふへしとも思ひきや我こゝろさへなとかはるらん

虫聲増戀といふことをよめる　皇太后宮大夫

わすられてもとこし駒らかよはぬを心まとはすくつわ虫かな

八月はかりこゝろかはりたる人のもとへ申つかはしけるに人にかはりてよめる　法眼定快

戀草のしけみかなかのくつのはゝこの秋よりそ恨そめけん

久しくおとせさりける人のもとへつかはしける　皇太后宮御匣

忘らるゝみには心のかはれかしかゝる歎もよそになきやと（すイ）

ありところ（をイ）わするゝ戀といふことをよめる　紀康宗

きゝたしや（おきしイ）宿をたとりてなく涙わすれ水とやなかれ行らん

在所さたまらぬ戀といふことをよめる　中納言雅頼

あふとのありしところしかはらすは（ねイ）心をたにもやらまし物を

たかひにうらむるこひといふことをよめる　藤原家隆（宗イ）

君と我おなし心になることのうれしからぬはうらみなりけり

賀茂重保か家にて男は右（左歟）女は左（右歟）にて歌合し侍りけるにうたかひをなす戀といふことをよめる　皇太后宮御匣

いつかたへしたに通ひて水底（わすれ水イ）にかけ見えなから絶んとすらん

寄殘菊戀といへる心をよめる　大輔

うらやましうつろひ殘る白菊を見せはや人にかひはなけれと

月詣和歌集卷第七

七月附雜上

立秋のこゝろをよめる　俊惠法師

花故にいとひし風のあはれにもけふ秋きぬとつけて（定長イ）過ぬる

藤原爲業

秋はきぬとしは（も千）なかはに成ぬ（過千）とや秋ふく風の驚かすらん

平忠度朝臣

秋きぬとしらて聞とも大かたはあやしかるへき風の音かな

題しらす　八條院六條

くすのはのうらめつらしく吹風や秋立けふのしるし成へき

七夕をよめる　刑部卿頼輔

天川わたるこよひや棚はたのなか〳〵袖をぬらさゝるらん

仁和寺二品法親王

さよふけてしのふけしきのしるき哉霧立かくす星あひの空

藤原顯家朝臣

あふとをまれに契りて棚はたのわか心からみをこかすらん

賀茂重保

星あひの空にはれ行うき雲やきぬ〳〵になる天の羽ころも

藤原清輔朝臣

おもひやる心もすゝしひこ星のつまゝつよひのあまの河風
藤原資隆朝臣
年をへて何を織らん棚機のあはぬなけきをたてぬきにして
法眼定快
天河たなひく雲やひこ星のとわたるふねのつなて成らん
俊恵法師
あふよこそまれにもならめ年の内にふみたにかよへ鵲の橋
大江公景
程もなくあけんなけきや棚機のまつむつことの始なるらん
源季貞
棚機のまれにあふ夜のむつことは天川波かすもしらしな
源俊頼朝臣
棚機の天の川せの岩まくらかはしもはてすあけぬこのよは
道因法師
たなはたの雲の衣をかさねきて嬉しきにさへ袖やぬるらん
法眼長真
海辺七夕といふことをよめる
うきねするふしまか磯の波の上にうつしてそみる星合の空
藤原季経朝臣
旅宿七夕をよめる
たなはたに草の枕をかしつれは別れぬさきも露ふかゝらん
定珍法師
雨中七夕をよめる
ふる雨にぬれやしぬらん棚機のけふはかりこそかはく秋を
賀茂重保
七夕のあかつきのおもひをよめる
きのふまて思ひくらして棚機のもとのなけきに又返るらん
藤原有定
閏七月七日よめる
としことのけふにならひて天河わたしやすらん鵲のはし
大江公景
墻花をよめる
風ふけはかゝる籬もたしろきていとゝあたなる朝かほの花
大江家尚
朝かほの花にやとかる白露ははかなきことをいひやあはする
藤原隆盛
田家暮風といふことをよめる
夕まくれやとの門田におとすなりこれや身にしむ秋の初風
藤原資隆朝臣
草花秋をつくといふ心をよめる
とふ人もなきわかやとの夕まくれ誰にこたふる荻のは風そ
法印静賢
庭花纔綻といふことをよめる
秋きぬと風もつけてし山さとに尚ほのめかすはなすゝき哉
智経法師
我やとにけふ咲そむる女郎花秋をしらするつまにさりける
大納言実房
草花纔開といへることを
女郎花この一枝をゝりつれはまた花さかぬ野辺とこそみれ
右大臣
百首歌中に萩花を
よそなからみやきか原を見わたせは心にうつる萩の花すり
風吹はなさきのをかの花すゝきなひくや波のよする成らん

俊恵法師

荻のはに風うちそよく夕暮は音せぬよりもさひしかりけり

題しらす　藤原盛雅

秋の野にはきのしたえにおく露は錦に玉をつゝむなりけり

池邊草花といふことをよめる　卜部元忠

遠近のみきはにまれく（なひイ）花すゝきいつちかい（らイ）けの波は寄らん

草花をよめる　藤原隆親

風吹は露こほれ（り歟）けるこはき原花のちるのみをしきのへかは

讃岐

秋萩にこほるゝ露のをし（しは家）けれは折ふす枝をなほさて（あくまて家）そみる

平實盛朝臣

つれよりもけさつゆけきは女郎花誰かおきけるあかぬ別そ

中納言長方

さらすとてたゝにはすきし花薄まねかて人の心をも見よ

刑部卿頼輔

いろ〳〵の秋のゝへをは花薄まねかすとてもたゝや過へき

藤原敦仲

あはれなはわか身にとめて荻のはを吹過て行風の音哉

中原定邦

こはききくの（よイ）へを分ゆくかり衣揩（摺てイ）こそきつれ（るイ）花にまかせて

參議經盛

何となくふき過てゆく秋風にいつしかなるゝをみなへし哉

古籬苅萱といふことをよめる　參河内侍

としふれは籬もあれてかる（かイ）かやのよを秋風に思ひ亂るゝ

朝見草花といふことをよめる　藤原親佐

をはなふくまのゝあさけの浦風にわか衣手になひ（はイ）きぬ（も歟）る哉

野徑草花といふことをよめる　藤原雅隆朝臣

さらぬたに過もやられぬ秋の野にたはれもかゝる女郎花哉

右大臣家百首に草花を　藤原季經朝臣

ふく風のたよりならては花すゝき心と人をまねかさりけり

重保が家にて男女左右に分ちて歌合し侍りけるに

いへに野の花をうつすといふことをよめる　大輔

花すゝきさひしき宿にうつろひて招きし野への人や戀しき

勝命法師

朝なく見れはしをれて女郎花なれにしのへを忍ひかほなる

源師光

小萩原宿にさなから移し植て鹿のたちとやまはらなるらん

紀康宗

虫のねもおとせす野へや成ぬらんはなは殘らす移しつる哉

藤原信輔朝臣女

移しうゑて花は野へにもかはられと朝たつ鹿の聲そ聞えぬ

題しらす　　　　大江通景

秋の野の千種の花のいろ〳〵を露はかりしていかゝ染むらん

　　　　定珍法師

さま〳〵のあはれおろ哉山さとにわきて聞ゆる荻のうは風

　　　　法眼長眞

今はとておきたつ野への女郞花すゝめ顔なる露そこほるゝ

　すゝき風にしたかふといふことをよめる　　　　讃　岐

吹ぬまはたれかぬにこそ花すゝき風にしたかふ心とは見れ

　月前草花　　　　平忠度朝臣

萩か花たをれはぬるゝ袖にさへ露をしたひてやとる月影

　水邊草花といふことをよめる　　　　藤原能盛

ふく風にこはきか露のちるまゝにいてそひにける谷の細水

　法輪寺（ヘイ）まゐりけるに嵯峨野の花をみてよめる　　　　覺昭法師

わけ行はおきのゝ袖にうつりけりころもきらはぬ萩の（カイ）花すり

　依萩巡（遐イ）路といふことを　　　　内大臣

散さしと駒をかへせはまはき原しからお鹿もありけるものを

　故郷秋風といふことをよめる　　　　源有房朝臣

秋風はむくらの門をたゝくとも荻のはならてたれかこたへん

雜上

　舊年立春のこゝろをよめる　　　　刑部卿賴輔

かきくもりまたしら雪のふる年に春とも見えて春はきにけり

　　　　丹波重長女

年のうちに春はきぬるを何を又送り迎ふといそくなるらん

　　　　賀茂重保

年のうちに春はたちきぬいつかたに殘る日數を思ひわかまし

　内大臣家にて人々百首歌よみ侍りけるに山家立春

　といへることを　　　　小侍從

とけぬなるかけひの水のおとつれに春しりそむるみ山への里

　春池浪靜といふこゝろをよめる　　　　中原有安

霜かれの蘆まのつらゝうちとけてのとかにすめるこやの池水

　春のはしめのうたとてよみ侍りける　　　　覺延法師

何となく春たつけふのうれしきは思へは花のゆかりなりけり

　子日をよめる　　　　顯緣法師

其をとてわきては曳し小松原いつれ八千代のためしならすや

　む月七日雪のふりけるに三河内侍かもとへつかは

　しける　　　　參議經盛

よもすからふる白雪そ（ヒイ）つみてける詩（リイ）か爲にと思ふわかなを

　　　　參河内侍

春きてもまたふる雪のした草はとけぬ心のたくひなりけり

　霞をよめる　　　　中原定安

春くれはとやまの霞立こめてけふりたえ行をのゝすみかま
中原定邦
うきをたへたつときかはいかはかり霞める空の嬉しからまし
伊全法師
關路霞といふことをよめる
みちのくの衣の關をきてみれは春は霞そ立へたてける
正月に雪のふりける日申つかはしける
法眼定快
かゝる世にふるはうけれとけさやなほ心も春の雪をなかむる
返し
藤原重頼
よの中にふるかひもなき我身にはむかしのはるの雪そ戀しき
勝命法師
草葉にはまた雪消すあはつのゝすくろのすゝきなのみ成けり
大宮に紅梅をまゐらせてはへりけるかづきのとし
のはる花の咲たりけるをこれをみよとてたまはせ
たりけるにゆひつけられたりける
うつし植し色にもしろき梅の花君にそわきて見すへかりける
かへし
參議經盛
うつしうゑし宿の梅とも見えぬ哉あるしからにそ花も咲ける
題しらす
隆寛法師
人とにたもとにしめてかへれともつきぬは梅の匂ひなりけり
高倉院かくれさせ給ひけるとしのはる梅のはなに
つけてつかはしける
中納言實守
梅のはな色はむかしにかはられと涙のかゝる春はなかりき
かへし
大納言實房
いかにかくうき世ならして梅の花ことしもおなし色に咲らん
家のうめのさかりにはへりけるころ友たちのすき
けるかおとつれさりけれはよみてつかはしける
高階業重
すきてゆく君故にこそしられぬれ梅の立枝もあるしからとは
水邊梅花といふことをよめる
賀茂重仲
はる風にみきはの梅のちりぬれは波のはなとそ又咲にける
山家梅花といふことをよめる
賀茂實平
梅の花匂ふさかりは思はすにみやこの人にとはれぬるかな
高倉皇后宮の兵衛内侍としころすみける家をたつ
とてそこに侍りける梅をおくりてはるの花を捨て
たちぬるよし申たりけれはいひつかはしける
皇后宮備前
鶯も花のあるしのかはりなはいかなるねにかなかんとすらん
む月のしもつやみにものへまかりける道に梅のに
ほひはへりけれはよめる
平康頼
春のよのやみは道こそ行やられそこともしらぬ梅の匂ひに
柳をよめる
中原定邦

わか宿のそよもにたてる青柳のいとこそ春のくるしるしなれ

春雨　　藤原在實

春雨に水は増りて難波江のあしの若葉そもえ出にける

水鳥（帰イ）をよめる　　賀茂資保

こしかたの山も霞みて見えなくに心あてにや歸るかりかれ

上西門院兵衛かもとより女房ともいさなひて白河

の花をなんかつ（見つるイ）かと申たりけれは　　[illegible]

いにしへのみゆき（かりにイ）のあとを尋れは花と君とそかたみなりける

かへし　　兵衛

君のみそみぬよの花を忍つゝふりぬるみをはかたみとは思ふ（いイ）

故郷花をよめる　　[illegible]

故郷をなにゝつけてか思ひ出ん花もにほひのかはらましかは

法勝寺のはな見はへりけるに祖父敦季か樹はうゑ

けりときゝてよめる　　中原俊定

おやのおやこのこのもとをうゑたれは散歎まても惜き花哉（おほきイ）

近衛院殿上人にてはへりけるかもゝしきの花を見（二條院御時りんし祭の舞人にて南殿にイ）

てよみ侍りける　　藤原隆信朝臣

わするなよなれし雲ゐの櫻花うき身ははるのよそに成るとも

十月はかりにゆきふりたりけるに人々あまたまと

ゐしてあそひあかしては（ヒイ）へりけるところへつきの

としのはるはなのさかりに申つかはしける

右大臣家備前

あつさ弓春の花にそ思ひいつるおもしろかりし雪のまとゐは

北方おもひ（〔三字イ无〕）に侍りけるころ法金剛院（宮イ）の花を見てむ

すひつけはへりける　　内大臣（新古）

花見てはいとゝ家路そいそかれぬ待らんと思ふ人もなけれは（とイ）

ならの八重さくらを家のはなにつかんとてこひて

侍りけれはよみてつかはしける　　權少僧都範玄

散りたらは（こたにイ）をしき匂ひを八重櫻九重に又いかゝ移さむ

かへし　　參議經盛

八重櫻なにをしむらん九重にさかせて君に見せんとおもふを

殘花隔河といへるこゝろをよめる　　高階業重

わたるへき淺瀬もあらは散りのこる梢の花をよそに見ましや

題しらす　　西住法師

うき世にはとゝめおかしと春風の散らすは花をゝしむなりけり

藤原定佐

白雲におらぬ心も花ゆゑに吉野の山にかゝりぬるかな

民部卿成範

今はとて尋ねさりせは山櫻しつえに殘る花を見ましや

題しらす　　藤原顯家朝臣

よし野山峯にたなひく白雲ははるをかきらぬさくらなりけり

雨中苗代といへることをよめる　　勝命法師

雨ふれはをたのますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて

清輔朝臣の尚齒會をおこなひ侍りける七叟にてよ
める　宮内卿永範

いとひこし老こそけふは嬉しけれいつかはかゝる春に逢へき

養和二年三月に賀茂重保尚齒會おこなひ侍ける七
叟にてよめる　祝部成仲

むかしにもかはらぬものを花の色は老の姿のかゝらましかは

垣下にてよめる（の歌）　賀茂重政

しめの内ためしにひかん老樂の花ちりかゝるまとゐありきと

皇大后宮大進

立よりてみたらし河をけさ見れはおいのなみにも花は咲けり

月前花といふことをよめる　源季廣

はるのよの月にいとはぬ白雲はよしのゝ山のさくらなりけり

世をのかれてのち白川の花を見てよめる
圓位法師

ちるを見てかへる心や櫻はなむかしにかはるしるしなるらん

題しらす　綽因法師

まかふとていとひし雲は吉野山花散りてこそかたみなりけれ

十月に重服になりてつきのとしのはる侍官とも加
階つかうまつりけるときに　中納言長方

もろ人の花さく春をよそに見て猶しくるゝはしひしはの袖

世をそむきて又のとしはなを見てよみ侍りける
寂然法師

此春そ思ひはかへすさくら花むなしき色に染しこゝろを

經正朝臣賀茂臨時の祭の舞人にてはへりけるに清
輔朝臣は陪從（テイ）にて侍まゐれりけるをいかにとたつ
ねたりけれは大田にまゐりておもふこゝろのへ中
つるなりとてよみてつかはしける（たりイ）　藤原清輔朝臣

かくれぬ（これ可家集）に沈むかはつは山吹の花のをり（ヒ家集）こそれ（れイ）はなかりけれ（る家集）

かへし　平經正朝臣

としことの春にそあはんかくれぬにしつむ蛙と何なけくらん

やよひのつこもり比春日社に行幸はへり（たりイ）けるにし
とみやのまへにはなのちりのこりけるを見てよみ
侍りける　參議通親

めつらしきけふのみゆきをまつとてや花も稍に殘るなるらん

歎冬をよめる　中原定安

山川のいはまの水ははやけれときしの山吹かけそなかれぬ

法勝寺へ御かたゝかへの行幸侍りける時春殘二日
といふことを人々つかうまつりけるによませたま
へる　二條院御製

我もさけ（ヨセ于）春とゝもにや歸らましあすはかりをはこゝに暮して

友たちのひさしくとひはへらさりけれはやよひの

つこもりにつかはしける　法印靜賢
見し人も今はとひこぬ山さとをはるきへすて丶いつち行らん

三月盡をよめる　藤原顯家朝臣
なこりなく花ちりはて丶行春か何のゆかりにをしむなるらん

まつりのかへさの日いつき殿にまゐりたりけれはなかしけなるはしたものをこれ見よとていたされて侍りけれはかへりてあふひにかきて女につかはしける　賀茂成助
いと丶しく神をそ頼むあふひ草思ひかけつるしるしあらせよ

物申ける女の山さとにはへりけるところにたつねてまかりたりけれはきたるはうれしけれともけふはあふましきなるかきねのうのはなを見てなくさめてかへりねと申いたしたりけれはよめる　法橋實雲
いとはる丶身をうの花の露けさやあはぬ歎きの涙なるらん

上西門院仁和寺にておはしましけるころ左大將のもとより山ちかきすみかにはほと丶きす人よりさきにき丶つらんなといひつかはしたりけれはよめる　兵衞
あけかたにはつれはき丶つ時鳥まつとしもなき老のねさめに

題しらす　源季貞
初聲をわれにきかせよ時鳥まつかひありと人にいはせん

もの思ひはへるころほと丶きすをき丶てよめる　大江公朝
よの中をう月の空にほと丶きす過にし方を忍ひれそなく

夏草をよめる　中原久盛
夏草はしけりにけりなみかりの丶野守の鏡かけもみぬまて

五月雨をよめる　良一法師
五月雨にいりえのみかさ増りつ丶からぬに見えぬまこも草哉

夏月をよめる　賀茂重房
さやけさをなかむる空は夏のよもなにたつ秋の月にかはらす

藤原有實
夕立のはれぬとすれはいたまあらみ漏りかはりぬる月の影哉

藏人にてはへりけるにあまこひのつかひにて雨ふらして大內にまゐりけれは定長大膳亮藏人にてくれなゐの御衣をとりてかつけてはへりたりけるかたにかけていつとてよみ侍りける　平廣盛
みとりなる衣の色はそれなからあけの袂をかさぬへしやは

〔已下卷第八闕〕

月詣倭歌集卷第九

九月附雜下

題しらず　賀茂重保

夕まくれすかるなく野の風の音にことそともなく物そ悲しき

虫をよめる　中納言長方

鈴虫をみかりのたかの音かとて野へのきゝすや（のイ）草かくるらん

大炊御門右大臣家佐

たれもさそ荻ふく風は身にしむに聲にたてつるきり〳〵す哉　兵衛

きり〳〵すかへのなかにそ聲はする蓬かそまに風やさやけき（む新續）

中原有安

秋風や夜さむなるらん野へをにはたおるむしの聲いそくなり

旅宿聞虫といふことをよめる　賀茂宣平

都には尋ねてきゝし虫のねのなきあかしつる草枕哉

月前聞虫といふことをよめる　賴圓法師

てる月のかけさえぬれはあさちはら霜のしたにも虫は鳴けり

藤原親盛院の北面にこれかれをすゝめて歌合し侍けるに河邊の虫といふことをよめる　源仲頼

淵殘すふとのゝ草にきり〳〵すおのか住家をあれぬとやなく

虫聲惜秋といふことをよめる　源宗光女

ゆく秋を惜みかれたるむしの音に我さへ袖を濡しつる哉

題しらす　荒木田成實

きり〳〵すさこそは秋のくれゆかめ心ほそくもなきよわる哉

籬菊如雪といふことを　大僧正行慶

雪ならはまかきにのみはつもらしと思ひとく（そイ）にて白菊の花

藤原資隆朝臣

ことわりやはれぬる秋の十日あまり見むとおもへる月の影哉

九月十三夜に月くもりて侍ければ　高松宮

天津風雲ふきはらへなほ（名をとゝむイ）年にふたよの月は今宵許そ

祐盛法師か坊に菊をうゑて侍りける花のさかりなりけるにむすひつけはへりける　法橋實雲

身にかへて惜むと菊の花なれは露もあたにそ（あかイ）をられさりける

九月十三夜をよめる　左衛門督實家

まてしはしいそきなふけ（いりイ）そ秋の月たくひのよはも一夜過にき

殘菊ねやに薫といふをよめる　平康頼

ふきくなりかれたる菊のあたりよりねやなつかしき木枯の風

大納言公通卿家十首歌中に殘菊をよめる　從三位頼政

しら菊の又さけるかとおとろけは霜のしたにそ色はありける

祐盛法師

しら菊と見せつる霜のきえゆけはふたゝひ咲て又そ移ふ

のこりの菊人をとゝむ　隆因幡

花にこそかへらんことは忘れしを宿のまかきの菊もありけり

閏九月九日よみはへりける　藤原家長

我宿のまかきにうゑし白菊をふたゝひつむやことしなるらん

擣衣を　參議通親

わか袖の霜はらふまをから衣うちたゆむとや人のきくらん

勝命法師

から衣してうつゝちのとく〳〵と山ひこさへもいそくなる哉

重保か家にて海邊擣衣といふことを人々よみ侍りけるに　覺綱法師

橋たての松ふく風におとろきてゝれのあま人ころもうつなり

題しらす　前大僧正覺忠

ときはなる青葉の山も秋くれは色こそかへれさひしかりけり

歌林苑にて對山待紅葉といふことをよめる

靜暹法師

見るたひに色つきなまし山のはにかゝる衣（心イ）のしくれなりけり（せは歟）

右大臣家百首歌中にもみちを　內大臣

山姫の戀のなみたや染つらんくれなゐふかき衣手のもり

皇后宮大夫俊成

こゝろとやもみちはすらん立田山松はしくれに濡ぬものかは

同家歌合に紅葉をよめる　俊惠法師

日をへつゝしくるゝまゝに立田山まつのみひとり殘りゆく哉

松紅葉をへたつといふことを　小侍從

（松はわれとや家集）

なりつれはわれとや松の思ふらんひまに紅葉の色を見んとそ（とて家集）

松邊紅葉といふことをよめる　慈辨法師

枝かけすはゝその紅葉なかりせは松はいかてか秋をしらまし

社頭紅葉といへることをよめる　鑒俊法師

春日山もみちの秋になりぬれは木末にみゆるあけの玉かき

中納言長方

初しくれふるの社のもみちはゝむかしの色にかはらさりけり

題しらす　覺盛法師

長月の時雨のあめはもみち葉をそめての後に（もイ）あらふ成けり

百首歌中に紅葉を　右大臣

色見えぬ秋をしらする（あらはすイ）紅葉はのちるは暮ぬるこゝちこそすれ

關路紅葉をいへることを　大納言實國

音羽山ぬさとちりかふ（ちるからイ）紅葉をせきもる神やわか物と見る

海邊曉霧といへることをよめる　蓮覺法師

明やらぬ蜑の苫やのひまにてはよをさへ霧のこむるとはしる（おイ）

霧隔山路といへることをよめる　藤原賴房

霧ふかき檜原のそまはみや木引く音こそ道のしるへなりけれ

海邊霧深といふことをよめる　賀茂幸平

難波かたしほちも見えぬ夕霧にたなゝし小舟こきもやられす

夕霧を　仁和寺二品法親王

花も見ていかゝは宿にかへるへきしはしははれよのへの夕霧

暮秋聞蛬といへることをよめる　覺延法師

秋深きかへの中なるきり／＼すいつまで草のねをやなくらん

暮秋の心をよめる　藤原親盛

くれてゆく秋の心はつらけれとうらなくまねく花すゝきかな

法眼實快

暮て行秋のみそらをなかむれはなこりかほなる在明の月

藤原定長

ふく風にをはなかすゑをむすはせて暮行秋や旅ねしつらん

大輔

虫のねはよわりはてたる庭の面に荻のかれはのおとそ殘れる

顯昭法師

長月もなのみなりけり春夏のおなし日數にあきのくれぬる

大納言實國

暮ぬるををしむにつくす心こそ秋のこよひのたくひなりけれ

法印慈圓

をしめともとまらぬ秋にわかれなん後の涙やしくれなるへき

參議親宗

暮て行秋のとまりをたつぬれはをしむ心のうちにそ有ける

法印靜賢

憂き世をはわか身もこそはあきはつれ理なくもをしきけふ哉

閏九月盡をよめる〔ロ、ヌ無〕　藤原經家朝臣

長月のくはゝる秋のくれも猶けふのをしさはかはらさりけり

雑下

俊成卿のもとへ集おくりつかはすとて詠てそへ侍りける　賀茂重保

そのかみの流をくまは賀茂川のみくつなりともかきな洩しそ

經盛卿歌合しはへりけるとき法性寺殿へみつから歌をこひてはへりけれはつかはすとてかきつけてはへりける

散はてゝ時雨ふりにしことのはゝめつらしからしはつかしの森

かへし　參議經盛

はつかしの森とやいひつことのはゝまたあき果ぬ心地こそすれ

賀茂重保かたうの障子に歌よみのかたをかきておの／＼よみたるを色紙かたに書けるをかきてたへと申たりければ時の歌よみともを書なれは我身も入たるらんなと侍りけれは位高き御すかたはひんなけれははゝかりてかゝぬよし申たりけれは色紙かたにかきてたまはすとて　内大臣

わかの浦の波の數にはもれにけりかくかひもなきもしほ草哉

かへし　賀茂重保

わかの浦のなみ／＼ならぬ藻鹽草かき集むるにいかゝ洩さん

かくて後かのすかたもかきそへ侍りけるとなん。

わかの浦をよめる　祝部成仲

ゆく年は波とともにやかへるらんおもかはりせぬわかの浦哉
すみよしを
住よしときくに心はとゝまるをいかなる波のたちかへるらん
修行しはへりけるに大みねのちこのとまりにてあかの水とりに谷へくたりけるに清水に月のやとれるを見てよみはへりける　賴圓法師
高根よりいてぬとみつるほともなく谷の清水にやとる月かな
龍門にてよめる　藤原清輔朝臣
山人のむかしのあとをきてみれはむなしきゆかをはらふ谷風
重保か家にてこれかれあつまりてよみたるうたをこひて見はべりてかへすとてよみてつかはしける　土佐内侍
ひらことに光さすめるとのはゝ玉のこゑせしたくひとそ見る
かへし　皇太后宮大進
うつもれぬなにや流れん光さす玉にたとへてみるゝゝかは
玉晴雲の心をよめる　惟宗廣言
心から玉ものくつとかくれにき何かゑしまのうらみしもせん　平經正朝臣
わきてこし野への露ともきえすして思はぬ里の月を見る哉　藤原親盛
ゑにかきてむかしの人はやつれぬる其姿をやかれてしりけん

李夫人をよめる　中納言長方
なか〳〵にちりなん後の鶯とてかしをれし花の顏もはちける
文集折臂翁をよめる　藤原敦仲
臂をわか心とをらぬ物ならはかひななからもいけらましやは
題しらす　藤原定長
淋しさをうきよにかへてしのはすはひとり聞へき松の風かは
山里より人のもとへ遣しける　仁和寺二品法親王
心から馴し都をはなれきて人もすさめぬねをのみそなく
葎はふ賤のふせやの夕けふりはれぬ思ひによそへてそ見る
友たちに馬をたはんと申たりけるをやかてこよひ見んと申けるをよめる　藤原盛雅
望月のかけにもあらぬ駒なれはよはにはいかゝひき渡すへき
鳥羽院に賴行かことを申はへりけるにほとへけれは奏者のもとにつかはしける　源仲政
いかて猶このうちになくあし鶴のよるの思ひを空にしらせん
學問所申けるにたまはらさりけれはよめる　大江匡範
きえぬへしとよにあまれる燈火をかゝけぬほとの心ほそさに
三品申とて奏者のもとへつかはしける　祝部盛仲

よつの品みつの位に上りなはなゝますかみのしろしと思はん

検非違使をのそみ申けるに人のなりにけれは申あけはへりける　藤原範明朝臣

思ひきや花咲春をよそに見て身をうくひすの音をなかんとは

御返し　鳥羽院御製

降雨の(にイ)あまねくうるふ春なれは花さかぬには(日瀬干)あらしとそ思ふ

大将のよろこひにつかはしける　皇后宮大夫俊成

み笠山さしのほりぬる嬉しさをあはれむかしの人に見せはや

かへし　内大臣

なきかけるいかに嬉しと思ふらんふきつたへつるみよの春風

民部卿成範中將の時はりまのかみにて侍りけるにつかはしける　清和院辨中納言

みかさ山峯よりいてゝくまもなき(く歟)あかしのうらをてらす月影

成全阿闍梨の房に祐盛法師まかりてよもすから物語してつとめてかへりはへりけるにけさをわすれたりけれはよみてつかはしける　成全法師

たのましなよのまのほとにひきかへてけさは忘るゝ人の心を

二條院御時僧のふえふくときこしめして大内にめされてつかうまつりけるによみて侍りける　安心法師

僧のればみをふくはかりなけれとも名は聞えたり雲の上まて

法皇みこにおはしけるとき侍のをさにてはへりけるか今は北面にさふらひなから人かすならぬ事をおもひてよめる　菅原是忠

ひく人もなくてすてたる(つ千)あつさ弓心つよさも(きイ)かひなかりけり

こゝろの外なることにてこもりゐて侍りけるをりよめる　大江公朝

あさひ山おとろかしたにきえ殘る雪やわか身の命なるらん

なき名たつ事をなけきけるに人のもとよりおもひやる袖もつゆけしと申たりけれは　建禮門院右京大夫

何か思ふ(とイ)つゆけかるらんたもとにてわか濡衣のほとはしる覧

弟子なりける童子のいとまこひて人のもとへまかりけるかさりぬへからすおもひ(て歟)又もまてこんと申けれはよめる　惠圓法師

かへりこんほとはかたゝにおく網のめにたまらぬは涙成けり

藤原爲業かときはに堂供養し侍けるにさまかへたるしたしき人あまたまてきあへりときゝてつかはしける　圓位法師

いにしへに變らぬ君か姿こそけふはときはのかたみなるらめ

返し　藤原爲業

色かへて獨殘れるときは木はいつをまつとか人の見るらん

からさきの御はらへよりかへらせたまひけるつき

の日きうりんしの宮よりきのふの御ことゝもい
かゝなと申させ給ひたりけれは　前々齋院
みたらしや影たえはつる心地してしかの波ちに袖そひち（ぬれイ千）にし

住吉の國基かはしめてあはんとてまかてきてかと
にたちてかくと申いれたりけれはいひ出して侍り
ける　賀茂成助
そさのをのみそらしくさりする人は出雲ちよりや過てきつ覽

源仲義か六位檢非違使にて侍りけるをりかよひけ
るかたえていち五位の尉にとまりぬときゝてつか
しける　小大進
しのゝめに出しをこそ戀しけれあけにとまると聞につけても

通親卿少將にはへりける時五月四日右近のまゆみ
のあらてつかひにつきて侍りけるにたれともしら
れぬふみをすゐしんにたひたりけるをとりて見け
れは
その駒もすさめぬ菖蒲みかくれて引人もなきれこそたえせれ（めイ）

野の宮わたりにてもの申ける女のてに見なしてよ
みてつかはしける　參議通親
いかてかは駒もあさらん菖蒲草いつくにおふと知ぬれなれは

人のもとにはへりけるわらはのかしらおろしける
につかはしける　法眼長眞
思ひをも（出イ）なへ（くイ）てやみぬる報こそおろす髮にはとはまほしけれ

栗田のさぬきのかみ兼房りきといふ遊女をおもひ
侍りけるかいさかひていへてしたりけるをわれと
よひにつかはさんかさすかにおほえけれは伏見修
理大夫俊綱かもとにまかりてこれらひてたへと申
けれはすなはちよひにつかひをつかはしてけるつ
きの日申つかはしける　藤原兼房朝臣
難波かたたのめしをの有しかは君にさへこそあはまほしけれ

なけくこと侍りていりこもりけるによめる　中原俊宗
いとほしと思しこそしれひき眉のかきこもる身は苦しかりける

成範卿おはやけの御たしこまりにて遠くまかりけ
るにことなほりて都にかへりけるにもとのすみか
もあれうせて侍りけれはそれへつかはしける　藤原清輔朝臣
鳥の子の有しにもあらぬ古巣には歸るにつか（けイ）てれをや鳴らん

かへし　民部卿成範
かたく／＼になきて別れしむら鳥は古巣にたにも歸りやはする

以下井辻御監の校本をもつて補ふ　圓位法師
花ちらす月はくもらぬ世なりせは物をおもはぬ我身ならまし

寄花述懐といふことを　　藤原親佐

折しれる人のみ花を見ましかは何なうき身のなくさみにせん

右大臣家歌合に述懐をよめる　　源師光

今はたゝいけらぬ物に身をなして生れぬ後の世にもふるかな

述懐をよめる　　皇后宮大夫俊成

春日野のおとろの道の埋水末たに神のしるしあらはせ

小侍従

身にとまる齢はかりをしるしにて花をはよその物とこそみれ

賀茂宣平

わか心よはのに覚のまゝならは今まて世をはいとはさらめや

平行盛

身をつみて誰か哀と思ふへき我はかりうき人しなけれは

平忠度朝臣

存命へはさりともと思ふ心こそ時につけつゝよはりはてぬれ

藤原師綱朝臣

紅葉せぬときはの山の時雨こそふるにかひなき我身なりけれ

源季廣

位山親ものほりし道なれはあとふむはかりなとなかるらん

藤原季定

歎きつゝあまり山にもレイ入は身のうさも(祈歟)先さき立て我を待らん

大輔

ありありと今はの時や我も身の世の人数にいらんとすらん

大江公景

花さかて身のあさましくなることは我なけきにて有ける物を

鴨長明

住侘ぬいさゝはこえん死出の山さてたに親のあとをふむやと

藤原定家

位山ふもとの雪にうつもれて花の光をまつそ久しき

藤原經家朝臣

雲上にみ代まて星をいたゝけは天照神の(哀歟)衾かくらむ

俊惠法師

思ひたつことたになくはとにかくにをしかるへくもなき命哉

藤原良清

心をはあらましことになくさめてけにうき年の幾よへぬらん。

藤原資隆朝臣

朝ことに哀をいとゝます鏡しらぬ翁をいつまてかみむ

賀茂歌合に述懐をよめる　　平忠度朝臣

ひたすらに祈るにあらす思かねそむきはつへき世ともし(祝歟)せよ

中納言實守

位山花をまつこと久しけれ春の都に年をへしかと

藤原定長

世間のうさはいまこそ嬉しけれ思ひしらすはいとはましやは

山あひの袖ふる數は重りはいつかうれしきことをつゝまん　藤原成家

住吉歌合に述懐の心を　左衛門督實家

位山みれの椿を手折もつ人は物をや猶おもふらん

月前述懐をよめる　湛覺法師

待えては猶かはなる涙かな物思へとていつる月かは

法印靜賢

あかなくに又もこのよにめくりこは面かはりすな有明の月

賴圓法師

前のよに月はいかなる契有て詠ればまつなみだおつらん

惟方卿世をのかれて大原に住侍りけるにこれかれ山家述懐といふことをよみ侍けるに　顯照法師

うき身をはとひくる人そなかりけるぬしゆへ深き山路也けり

除夜述懐といふことをよめる　惟宗廣言

數ならぬ身にはつもらぬ年ならはけふの暮をも歎かさらまし

横河常行堂にて老僧共述懐心よみ侍りけるに　經因法師

はかなしなうき身なからも住（脱歟）むへき此よをさへも忍ひ兼ぬる

遇友懐舊といふことをよめる　圓位法師

今よりは昔かたりに心せんあやしきまてに袖しほれけり

僧都範玄歌合に逢友懐舊といふことをよめる

なれきにし君やしろへと成ぬらんむかしにかへる我こゝろ哉　藤原季經朝臣

題しらす　法性寺入道前太政大臣家辨

いたつらに過る月日のおなしくは在し昔に立かへれかし

高野へまゐらせ給ひし道にて　仁和寺二品法親王

跡たえて世をのかるへき道なれや岩さへ苔の衣きてけり

高野奥院入道靜遍かすみかにまかりたりけるに哀けなりけれは立かへりてつかはし侍ける

大納言實國

たれもみな露の身そかしと思ふにも心とまりし草の庵哉

高階通憲か出家して侍けるにいひつかはしける　德大寺左大臣

をしむへき花の袂をすみ染にうらやましくも代てける哉

かへし　高階通憲朝臣

ぬきかふる衣の色は名のみして心をそめぬことをしそ思ふ

世をのかれて後都の外にまかりけるをしはしと人のとゝめけれはよめる　三木成賴

暫しとて立やすらはしいつくにも跡止むへき身にしあらねは

出家して修行しありきける時泉川といふ所にて　勝命法師

故郷をたれにかとはん泉川都鳥たに見えぬわたりは

大納言成通卿かしらおろし侍りたりけるにつかは
しける　西住法師
いとふへきかりの宿りは出にけり今はまことの道を尋ねよ
かへし　大納言成通
同しくは道ひきつけよかりの宿たれにひかれて出しとかしる
源成雅朝臣
いかはかりはかなく人の思ふらん家をは出て道をしられねは
さまかへんと思し立たりける比月のあかゝりける
に圓位法師まうて來て終夜物語し歸りて後よみ
てつかはしける　中院右大臣
終夜月をなかめて契置しそのむつことに闇ははれにき
二條院御諱高松院中宮と申けるにさまかへさせお
はしましたりける次の年八月はかりに昔思ひ出さ
れてよみ侍ける　高松院右衛門佐
雲ゐには今宵の月ものとけきに秋はむかしの色そかはれる
題しらす　法印元性
よもすから枕に落る聲聞は心をあらふやま川のみつ
皇嘉門院
何とかやかへる生なる草の名よそれにもたかふ我身なるかな
太皇太后宮
はかなくて野への露とは消ぬとも淺ちか原を誰か尋ねん

うつまさに行ひ侍けるたちひしりを見て
賀茂宣平
さもこそは假の宿りといひなから暫したにゐて過しへしやは
夢の心をよめる　法印實快
はかなしとあたに思ひし夢にこそ行末までのことも見えけれ
無常の心を　中納言長方
よの中を思ひしとけはあたしのゝ風待ほとのかろかやのつゆ
中原定邦
世中を夢と見てのみ過き行くと驚かぬ身そはかなかりける
圓位法師
かた〳〵に哀なるへき此世かな在を忍ふもなきを忍ふも
經圓法師〔し既歟〕
きゆれともさすかにつもる淡雪は人の世にふるためなりけり
法印靜賢
夕暮をまつそかなしき哀を己下缺
限りに侍りける時源重之かもとへ遣しける
登蓮法師
おくりおかん野邊までたにも眞心にそふへき人もなき我身哉
歳暮述懐といふことをよめる
まよひ來る浮世中の暮はてゝけふを限りと思はましかは
以上井辻伺監校本をもつて補ふ

月詣倭歌集卷第十

十月附哀傷

十月一日時雨し侍りけれはよめる　皇后宮大夫俊成

いつしかとふりそふけふの時雨哉袖もまたひぬ秋のなこりに

刑部卿頼輔

初時雨おとろかさすは誰なこめて冬きに見といかてしらまし

海邊初冬といふことをよめる　登蓮法師

神無月思ひなしにやすみよしの松ふく風もけさはさひしき（ライ）

賀茂重保

しなかとりむこの邊（あたり）にうらさひてゐなのは山に冬はきにけり（と）

題しらす　經因法師

惜むとてあきやあはれにとゝ（止歟）むらんけふも悲しき夕まくれ哉

讃岐

難波かたみきはのあしは霜かれてなたの捨舟あらはれにけり

時雨を　中納言長方

音もせぬ苔のよろやの村時雨くもるのみこそしるしなりけれ

勝命法師

このはちるあらしの山のしくるれはかつく袂も紅葉しにけり

藤原資隆朝臣

ほともなく吹くるかたのくもる哉風や時雨のしるへなるらん

俊恵法師

かきくらし片岡山は時雨るれとをちのさとは入日さしけり

藤原宗隆（家隆一）

まきのやになり〳〵散し檜のはの積らぬけさそ時雨とはしる（賀イ）

野徑時雨といふことをよめる　賀茂重保

たひ衣すそのゝ露にしほるゝなかされてぬらすむらしくれ哉

時雨遠近といふことをよめる

我やとに暫のしつくをとゝめなさて又山めくる初時雨かな

曉時雨といふこゝ（ことイ）ろをよめる　紀康宗

曉のねさめにすくる時雨こそもゝ（ちてもイ）ちの人のそてぬらしけれ

月前時雨といふことをよめる　平經正朝臣

はるゝかと見れは程なく時雨つゝかけさたまらぬよはの月哉

山家冬といへるこゝろをよめる　藤原敦經朝臣

山さとは檜のおちはに跡たえて時雨のほかのおとつれもなし

内大臣

入日さし又かきくもりさためなく時雨てめくるみ山邊のさと

落葉をよめる　民部卿成範

吹風の色のやしほに見えつるは空に亂るゝ紅葉なりけり

藤原定長

よもすから絶す音する木の葉こそ山めくりせぬ時雨なりけれ

平經正朝臣

あらしふくおなし尾上のしひ柴にひきたかへても散る紅葉哉

まきのいたはよはの嵐にうつもれて木のはをわくる朝煙哉　覺延法師

散かゝる谷の小川の色つくは木のはや水のしくれなるらん　右大臣

時雨るゝも音は變らぬ板間より木のはゝ月のもるにそ有ける　藤原定家

山めくり染おく色と見しほとにはてはこの葉も時雨とそふる　寂然法師

散りつもる木の葉も風にさそはれて庭にも秋のくれにける哉　慈辯法師

一むらの時雨はすきぬ槙のやになり／＼ふるや木葉なるらん　藤原隆親

落葉埋橋といふこゝろをよめる　藤原範綱

散りしける木のはを道に踏ほとは下にこたふるとゝろきの橋

海上落葉といふことをよめる

浦ちかき高ねの風のわたらすは波にもみちのをられましやは

落葉水にうかふといふことをよめる　三條内大臣

暮てゆく秋をは水やさそふらん紅葉なかれぬ山川そなき

山中落葉といふことをよめる　大炊御門右大臣家佐

ふれに散りちれはふるかと聞ゆれは木葉ともなふ時雨之けり

故郷落葉といふことをよめる

過にけんぬしや嵐にいひおきしあれなは闇に木のはふけとは　藤原隆信朝臣

音にこそ時雨もきゝし我宿のこの葉もるまてあれにける哉

古砌落葉といへるこゝろをよめる　法眼長眞

こけの上に木のはちりつむ庭のおもを昔の人の朝きよめせん

閑庭落葉といへる心をよめる　參議親宗

年ふれと人もはらはぬ庭の面にいくへ木のはの散つもるらん

寒草帶霜といふ心をよめる　中納言長方

冬深みをふの浦風さえ／＼て霜かれにけりいせのはま荻

題しらす　藤原定家

冬きてはひとよふた夜を玉篠の葉わけの霜の所せきまて

霜埋落葉といへる心をよめる　藤原家隆

梢にも庭にも見えぬ紅葉は霜のしたこそうたかはれぬれ

霜をよみ侍りける　藤原顯家朝臣

散りつもるこの葉かうへに霜おけは朝きよめする庭のおも哉

草の葉にすかりし露はけさよりや朝おく霜におきかはるらん　權律師忠快

以下井辻伺監校本をもつて補ふ

題しらす　寂然法師

霜さゆる芦のしのやにね覺してひまやしらむと待ぬよそなき

霰をよめる　藤原定家

あしふきの宿にも音そ聞ゆなる木のはの上に霰降らし

源光行

板まあらみ霰もりくるしつの屋はすかきの床に玉そしきける

賀茂重信

うちそよくのちのしのやの笹かこひ吹くる風はあられ成けり

平資盛朝臣

冬くれは賤のふせやの板庇霰たはしるおとそさひしき

藤原隆信朝臣

おのかちる音に哀をしらせ置て木のはに今そ霰ふるなる

崇徳院百首歌中にあられをよめる　皇后宮大夫俊成

月さゆる氷の上に霰ふり心くたくる玉川のさと

雪埋殘菊といへる心をよめる　民部卿成範

秋はてゝ霜にはかるゝ菊なれは雪ふりてこそさかり成けれ

曉雪をよめる　大納言實方

降る雪にねくらの竹やをれぬらんよをこめてなく村雀かな

行路雪といふことをよめる　右大辨親宗〔みちの殿〕

ふる雪にひましらみぬと急き出て明こそやられのみちしの原

中納言長方

道すからふるとはすれと行駒のつめもかくれすけさの初雪

野徑雪を　仁和寺二品法親王

まれかれと猶過まうき氣色哉野へのを花の雪の下折

百首歌中に雪を　右大臣

雪白き吉野の山を見渡せは雲にまかふはさくらのみかは

俊惠法師

出て見よ板まの風は吹さえてひまこそしらめ雪や降める

刑部卿頼輔

立のほる煙はかりそ埋もれぬ雪の下なる民のかまとは

海邊雪といへる心をよめる　皇嘉門院尾張

いせ島やをふの浦なみ雪ふれは春は散にし花そまた咲

遍照寺にて池邊雪を　二品法親王

浪かけはみなはの雪も消なまし心ありてもこほるいそかな

題しらす　藤原仁長

山深みしをりも見えす降雪のところや道のしるへなるらん

藤原長清

關路雪をよめる　證西法師

雪降れはもる人もなし逢坂は氷そゐたるせきのし水に

俊成卿家の十首歌に雪をよめる　源仲綱

槇の屋に雪のうはふきかさぬらし軒のいたすへ風もたゝかす

雪埋寒草といへる心をよめる　顯昭法師

今朝見れは鶉のねやもあけにけり雪深草の野へのかや原

雪中客來といへる心をよめる　惟宗廣言

降りつもる雪ふみ分てくる人は心さしさへふかきなりけり

閑中雪といふことをよめる　皇后宮大夫俊成

降り初て友まつ雪は待つけつ宿こそいとゝ跡たえにけれ

山家に侍りけるに雪のふりたりける日都より人文をつかはしければよめる　從三位季能

夜の雪は跡つけかたく思へともふみみて後そ嬉しかりける

右大臣家歌合に雪をよめる　俊惠法師

打はろふ衣手さえぬきさかたやしらつき山の雪の明ほの

山家の雪といへる心をよめる　惠圓法師

山里の雪ふみわけてくる人は物のあはれやしるへなるらむ

賓還法師

降雪も哀もともにつもる哉冬深くなるみ山邊のさと

冬月をよめる　右大辨親家（宗家）

いつくにか月は光をとゝむらんやとりし水は氷ゐにけり

玄珍法師

むさしのゝ露をは霜に置かへて秋にかはらすすめる月かな

藤原盛雅

山里はかけひのつらゝひまなきにわれても宿る夕月夜かな

靜緣法師

大かたの梢にはれて澄月のまきのはしける軒のいふせき

哀傷

安元二年三月に法皇五十御賀せさせ給ひてやかてそのとし七月に建春門院かくれさせ給ひにければ十月のころほひよみ侍りける　兵衛

袖ふりし春の庭にも見えぬかな涙しくるゝ秋の夕くれ

わらはにて花園の左大臣のもとに侍りけるに笛をしへ給とてたまはらせたりける笛をかの御ためにほとけしやうしけるに澄憲僧都導師にて笛を誦經物にしてそへて侍りける　法印靜濟

思ひきやけふ打ならすかれのおとに傳し笛のねをそへんとは

高倉院隱れさせ給てつきのと　正月十四日に頭中將隆房朝臣に申侍し　藤原公衡朝臣

別にしこのよの空のけしきよりうきはけふまて思ひしりにき

返し　藤原隆房朝臣

何かいふこそはうかりし今日なれは過れば其も惜からぬかは

西住法師身まかりにけるをはりよかりけりと聞て同行の圓位法師につかはしける　寂然法師

亂れすとをはりきくこそ嬉しけれさても別はなくさまれとも

返し　圓位法師

この世にて又逢ましきかなしさにすゝめし人そこゝろ亂れし

二條院かくれさせ給ひて南殿の花を見てよめる　參河內侍

思ひ出やなれし雲ゐの櫻花みし人かすに我をありきと

中攝政隱れ給てつきのとし高倉とのに白河とのわたらせ給ひたりけるにまゐりてよめる

藤原季經朝臣

むかしにもかはらすすめる池水にかけたに見えぬ君そ悲しき

故仁和寺法親王わつらひ給けるをよるひるつき奉てなけき侍りけるかつひに隱れ給けれはよの中思ひす〔て、歟〕ゝて高野へ參りけるにあか月さたりける衣の色をみてよみ侍りける

覺忠法印

くれなゐの涙にくちし我袖の墨染にさへはてはなりぬる

行玄座主入滅の後なにしくひきかへてなけかしく思ひ侍りけるに又の年の春山にのほりて花のおもしろく咲たりけるをみてよめる

權僧正全玄

けふ見れはみ山の花は咲にけり歎そ春もかはらさりける

二條院かくれさせ給ひて御はふりの夜よみ侍りける

前大僧正隆憲

つれに見し君かみゆきをけふとへはかへらぬ旅と聞そ悲しき

六波羅入道太政大臣かくれ給て後のわさの夜雨のふり侍りけれはよめる

源季貞

春雨もおつる涙もひまなくてとにもかくにもぬるゝ袖かな

櫻をうゑて侍りけるとし父のみまかりたりけるにつきのとしその木のかれて侍りければよめる

賀茂重保

別にし歎に花のさかぬかな鶴の林もかゝりしそかし

皇后宮備前かおやにおくれて侍りけるに申遣しける

法橋實玄

問はやしおもひたつより藤衣我袖をこそしほりかれつれ

高倉院の御ことを思ひ出て今上御時內裏にさふらひける女房のもとへ申遣しける

左近衞中將重衡

すみかはる月を見つゝそ思ひ出るおほ原の山のいにしへの空

ちゝのおもひに侍りけるに人のもとよりよの中は夢なるなと申たりけれはよめる

祝部成仲

夢とこそ思ひなしつゝすこしつれおとろかすにそ現とはしる

父の身まかりて侍りけるに五十日はてゝおのおのちりけるに良清かひとり本所にとゝまりて侍りければよめる

藤原盛雅

とまりゐる浮田の森のすもり子は立村鳥を見てや鳴らん

母の身まかりたりけるに服きはなくらんとてよめる

藤原行家

染かふる衣のみかは別にはなみたもあらぬ色になりけり

ひとつはらから四人侍りける中に女なるおとゝなりけるものゝ身まかりにければよめる

顯昭法師
思ひきやひとつはゝその枝にしもわきて末はのちらん物とは

中院の入道右大臣隠れ給ひて七月一日やかていみのうちに土御門内大臣のもとへ申送り侍りける　俊恵法師
秋風はけふ吹ぬらん荻の葉に別し君はおとつれもなし

返し　土御門内大臣
をきのはにおとつれもせて秋たてはいとゝ露けし淺ちふの宿

徳大寺左大臣みまかりて九月盡日内大臣のもとへ申遣し侍りける　中納言長方
またもこん程をまつへき秋雨にも別るゝけふは悲しきものを

年ころくして侍りけるをんな身まかりて後山里へまかりける道にむしの鳴けれはよめる　中原有安
道芝の虫は聲々すたくなり友なきねをは我のみそなく

母のふくにて侍りけるに又やしなひたる母身まかりにけれはよめる　藤原貞憲朝臣
限りありてふたへはきれと藤衣なみたはかりを重ねつる哉

高倉院隠させおはしましける時善知識にて長樂寺ひしりまいりて侍りけるかをはらせおはしけれとも猶しはしさふらひけるを戒師にて近くめしつかひける女房あまたさまかへ侍りけるに我心もさらぬたにあはれつきせさりけるに流轉三界中とゝなへてかれの聲聞えけるにつけてもかなしくおもひけれはよめる　參議通親
しほたるゝそのあま人と聞からにかつかぬ袖もぬれ増りけり

徳大寺の左大臣隠れさせ給てその年の中に北の方もうせ給にけれは大炊御門右大臣の許へ申送り侍りける　圓位法師
かさねきる藤の衣をたよりにて心の色をそめよとそ思ふ

返し　大炊御門右大臣
藤衣かさぬる色は深けれとあさき心のしまぬはかなさ

待賢門院隠れさせおはしまして御忌はてゝかた〳〵かへらせ給ける日よませ給ひける　崇徳院御製
かきり有て人はかた〳〵別るとも涙をたにもとゝめてしかな

御かへし　兵衛
ちり〳〵に別るゝ今日の悲しさに涙しもこそとまらさりけれ

母の身まかりて後月のあかく侍りけるによめる　中原定安
なかめこし人はふりにし宿なれと月は昔にかはらさりけり

父のふくにて侍りける折また女なくなりにけれはよめる　平康頼

今さらに又や染まし藤衣かされてもきろならひなりせは

頼實僧都身まかりて後またのとしの春

僧正等範

やともやと花も昔ににほへとも主なき色はさひしかりけり

素覺法師ならにすむへき便りありて秋の比をは新少将を具してくたり申かへりてあけん年の春はいつしかくたりて佛なともをかまんと申かたらひて心もとなく思ひける程にその年のうちに新少将身まかりにけり歎きなからあくる年の春ひとりくたりけるに道に歸鴈の鳴けるを聞てよみ侍りける

素覺法師

北へいく鴈はしらしな数たらて南へかへる人もありとは

川上并注同上の經本たもつて給ふ

かくてならに下りつきて次の日素覺も又うせはへりにけれはかの[雁イ]うたかきつけて侍りけるあふきのかたはらにかきつけける

藤原伊綱

かくはかりはかなく見ゆる假の世に殘るつらさも思ひける哉

平貞能あつまのかたしつめにまかれりける入道お[ごイ]ほいまうちきみのかくれたまひけることをしらてさまくの事いひあけて侍りけるによめる

源季貞

東路にゆきてすまんといひ置し人もかくこそかなしかりけれ[めイ]

仁和寺法親王かくれ給ひて御忌に月あかゝりけるに

法師元性

こそ見しにかはらぬ月のいかなれは曇らぬ空におほろ成らん

高倉院女房さまかへてのちいくほともなくて院もかくれさせ給ひけれはいひつかはしける

大納言實國

てる月を見捨て出しことわりは空かくれぬる今こそはしれ

月詣倭歌集巻第十一

十一月附神祇

月前千鳥といふこゝろをよめる

皇后宮大夫俊成

月さよみ千鳥なくなりおきつ風ふけひの浦の明かたのそら

俊恵法師

月きよみ礒のかるもをかきおけはまたきにあさるとも千鳥哉

平資盛朝臣

□見のおきのしらすにしほ□落にきなく群千鳥哉

覺延法師

月さえてかものうはけにおく霜をひとへはらふは夜半の浮雲

藤原經家朝臣

月かけのすみたかはらによもすから千鳥の聲もさえ渡りけり

旅泊千鳥といふこゝろをよめる　法眼長眞
まてしはし浦わたりする友千鳥われもたつへき磯の旅ねそ
顯昭法師
古さとをこふるねさめのかなしさに千鳥鳴なりちかの鹽かま（ことイ）
夕千鳥といへるこゝろをよめる　祐盛法師
あまをふねよるへも見えぬ夕霧になきさしらする千鳥鳴なり
千鳥驚波といふ心をよめる　賢辰法師
なるみかた岩ねによする波の音に見なれなからもたつ千鳥哉
小夜千鳥といふこゝろをよめる　鴨長明
ねさめするなみの枕になく千鳥おのかねにさへ袖ぬらせとや
千鳥　仁和寺二品法親王
むれこゐるおのか羽風に波たてゝ心とさわく浦千鳥かな
潮しらす　法眼實快
むら千鳥立ゐる音のちかけれはみちくる汐のほとそしらるゝ
氷をよめる　賀茂重政
逢坂の關のあらしに夜はさえてこほりそしかの浦つたひする
氷留山水といふことをよめる　圓位法師
岩ませく木のはわけこえ山水のつゆもらさぬは氷なりけり
谷水といふことをよめる　小侍從
山ふかみ人もくみみぬ谷水はつらゝのみこそむすはれにけれ
鳥羽院とはの北殿におはしましゝころ氷留水聲といふこゝろを殿上の人々つかうまつりけるに　皇后宮大夫俊成
冬くれはこほりと水の名をかへて岩もる聲をなとし（微イ）のふらん
水鳥をよめる　源仲綱
よを寒み立ゐるをしのあとに又ほとなくゐるはつらゝなり鳧　大納言實房

［已下闕］

月詣倭歌集卷第十二

十二月附釋敎

すみかまをよみ侍りける　祐盛法師
雪のうちにたえぬ烟はおほ原やをしほの山のまきのすみかま
藤原敦仲
よそなからたつ煙にそしられける大原山のまきのすみ（宿イ）かま
大納言季成卿女
をの山にやく炭（水家集）かまの烟こそみねにたえせぬくも（ロイ）となりけり
寒蘆隔氷といふをよめる　鴨長明
雪（羽イ）はらふ羽音にのみそにほ鳥のあしまのとこは人にしらるゝ
鷹狩をよまる　賀茂有忠
はしたかのしたをやきゝすくろこ（九歌）ひにたまらぬすゝ（くゝるらん水居イ）のを（音イ）と哉　大納言季成卿女

草ふかみあさろきゝすや立ぬらん鈴のおとこそ空に聞ゆれ　大納言實國

雪中鷹狩といふことを

朝またきかりはのをのに雪降はしらふにならぬはし鷹そなき　藤原有家

山家送年といふことをよめる

あとたえて人もとひこぬ山さとは年をのみこそ送りむかふれ　藤原實清朝臣

歳暮の心を

暮てゆく年の姿は見えねとも身につもりてそあらはれにける　藤原親佐

はかなくて暮行としの跡あらは雪のあしたは尋ねみてまし　祝部成仲

暮ゆくを惜む心のふかければわか身にとしはとまるなりけり　民部卿成範

あけはては又かへるへき年なれとくれゆくけふは猶そ悲しき　大納言隆季

あたらしき年や我身をめくるらんひまゆく駒の道にまかせて　勝命法師

なけかしな我身に年はつもるとも惜みし春のとなりと思へは

百首歌の中に歳暮のこゝろを　右大臣

たれもみななれにし年の過行をおくらぬ人はあらしとそ思ふ　刑部卿頼輔

皆人の身にのみとまる年なれはくれても外へゆかしとそ思ふ

内大臣家百首歌中にとしのくれ水よりもはやしと

いふことをよめる　藤原隆信朝臣

瀧つせもこほれはよとむなにかこの暮行年のたくひなるへき

除夜の心をよめる　登覺法師

春風はさらに吹くともおすからはよる年なみはたちも歸らし　藤原親盛

何となくすくる月日に年暮てかすとろものはわかみなりけり　昌俊法師

ゆく年の宿はいつくと尋ねと身よりほかにはとまらさりけり　藤原範光

惜めともけふ暮はつるふる年の明れはなとて身にかへるらん　中原宗邦

いつよりもけふの暮こそ悲しけれかくても年の積ると思へは　内大臣

何となくつもれは老となる年の暮をはいそくならひなるらん

俊成卿家に人々十首歌よみ侍りけるに歳暮のこゝ

ろをよめる　俊惠法師

歎きつゝことしも暮ぬ露の命いけるはかりをおもひてにして

釋教

華嚴經日照高山のこゝろをよめる　新中將

さしのほる朝日のかけも位山高き峯をそまつてらしける

大品經常啼菩薩のこゝろをよめる　寂然法師
朽はつる袖にはいかゝつゝまゝし空しとゝける御法ならすは

無量義經のこゝろをよめる　藤原重行
いかなれはたゝ一もとの蓮のはになにはのをのこもろ成らん

智俊法師
ひよりまつうきよの岸の渡守今そみのりの舟よそひする

法華經序品の心をよめる　藤原伊綱
春ことになけきし物をのりの庭ちるはうれしき花もありけり

圓位法師
ちりまかふ花のにほひをさきたててひかりを法の莚にそしく

經圓法師
鷲の山あやしく見えし花山はさとりをひらくしろしなるらん

神主重保か堂のうしろとの障子に法門の心をかき
そのこゝろを人々によませ侍けるに乃至童子戯の
こゝろをよめる
みとりこのいさこ集むるたはふれはまとの道をつくるへけり

舍利弗華光如來記別をよめる　皇后宮大夫俊成
ゆく末の花のひかりのなをきくにかれてそ春にあふ心地する

譬喩品の心をよめる　藤原季定
この世をはうしと心にかけつれはみつの車に道ひかれなん

祝部成仲
いかなれは親の教にしたかひてこの古さとをいてかてにする

賀茂重保和歌の草案のほくをわかのも入のをもと
りあつめて五部大乘のれうしにすきて經しやにし
侍りけるにその心の歌よませ侍りけるに譬喩品の
心をよめる　泰覺法師
のりえてそおもひの外に出にけるこゝちにかけし車ならねと

をとこのみまかりけるに一品經すゝめてしやくし
けるに譬喩品のこゝろをよめる　賀茂重保母
すゝめ出すみつの車のわつかにも導かれぬときくよしもかな

信解品年已朽邁の心をよめる　快玄法師
花咲くをよそに思ひし朽木にもつひにこのみけなりける物を

五百弟子品の心をよめる　平經正朝臣
ころも手にありとしりぬる嬉しさに涙の玉をかけそかへつる

賀茂重保雨のいのりに人々をよひて御社の寶前に
て歌を誦しけるにしはしありて雨のふりて侍りけ
る悦に一品經しやうして法樂したてまつりけるに
提婆品の心をよめる　皇大后宮大進
わたつ海の玉もかりあくろかひ有て沈むみくつも浮ひぬる哉

殺所一品經しやくに提婆品の心をよめる
顯昭法師
谷水をむすへはうつる影のみやちとせをおくる友となりけむ

賀茂重保か堂のうしろとに法門の歌を人々によませてゑにかき侍りけるに提婆品の心をよめる　成全法師

たくひなき玉に心のみかゝかれてくもらぬ空にすめる月かけ

賀茂卅講五卷日人々重保か家にて提婆品の心をよみ侍りけるに　賀茂重保

ちとせまて結ひしのりの谷水をけふみたらしにときなかす哉

勸持品のこゝろをよめる　寨覺法師

朽果てゝ危く見えしたえ〳〵は(の歟)いたゝの橋も今わたすなり

壽量品(の誤占)のこゝろをよめる　皇后宮大夫俊成

かりそめに夜半のけふりとのほりしや鷲の高ねにかへる白雲(同)

　題昭法師

わしの山いかゝ(同)すみける月なれはいりての後もよを照らす覽

常在靈鷲山のこゝろをよめる　寂然法師

ときはなるつるの林をはかなく(あやイ)もたきゝつきぬと思ひける哉

觀普品の心をよめる　平忠度朝臣

おりたちてたのむとなれは飛鳥川淵も瀨に(と歟)なる物とこそきけ

隨喜品の心をよめる　藤原雅家朝臣

またしらぬまことの道に入ぬれはこのをしへこそ嬉しかりけれ

　院因幡

人の親のまよふと聞し道なれとこのしるへするかたも有けり

二條院のみかとかくれさせおはしまして後その御れうに治部卿入をすゝめて一品經しやし(ゆイ)侍りけるに勸發品滿三七日のこゝろをよめる　[illegible]

まちいてゝいかに嬉しと思ふらんはつかあまりの山のはの月

普賢經の心をよめる　大輔

心より結ひおきけるもなれは思ひとくひに(は寶物)(そイ)のこらさりけり(るイ)

心懷戀慕の心をよめる　法橋性憲

思ひねの夢にもなとか見えさらんあかていりにし山のはの月

炎經の心をよめる

かくれぬとなけきし月を尋ぬれは心のうちにすむにそ有ける

賀茂重保か歌の草案の反古色紙の五部大乘經しや(ゆイ)しの導師にて炎經のこゝろをよめる　前大僧都澄憲

有明の月のかくれしはやしこそ長きわかれのもとゝなりけれ

舍利の心をよめる　天台座主明雲

常ならぬためしはふ(ほイ)その煙にてきえぬなこりを見るそ悲しき

心蓮華のこゝろをよめる　實仙法師

いさきよく心のしみつすみぬれは蓮はよその花とやは見る

月輪觀をよめる　權律師道勝

うつもるゝ心のうちにすむ月のかけさやかなる我身ともかな

　賀茂重保

山のはにいるとなしみし月かけは心の水にすみけるものを

以下井辻尚監の校本をもつて補

觀音のちかひをよめる　大納言時忠

たのもしきちかひは春にあられともかれにし枝も花そ咲ける

聖衆來迎樂の心をよめる　藤原實隆朝臣

草の庵の露きえぬとや人はみる蓮の花にやとりぬる身を

往生講作りて教化の歌とてよみ侍りける　前律師永觀

昔人をわたさんと思ふ心こそ極樂へ行しるへなりけり

かひをひろひて侍りけるをさま〳〵の花に作りて佛に奉りけるに卯の花に作りたりけるをよめる　賀茂季（重イ）保母

いかてかく心なきさのうつせ貝身をうの花と思ひよりけん

觀音のしるしある寺卅三所をおかみめくりてみのゝ國たにくみにて油のいつるを見て　前大僧正覺延

世をてらす佛のしるし有ければまた燈火も消えぬなりけり

菩提を願ふ心をよめる　定伊法師

うこきなきもとの都のしるへせよさそひ出しも心ならすや

雪中佛名といふことをよめる　前齋院右衛門佐

みよまての佛のみなをとなふれは空より雪の花とちる哉

是稱倫要撰定之無私。又近代以來家々諷吟往々露布。求以收拾之。抄以錯入之。總任耳目之適及。更察遺漏之甚多。非遑訪（求賊）□可撣獨専。而倫祐盛久爲鼓道之知己、倶其贊汽以（指イ）指陳、既有明心。蓋免□□之譏、唯充備忘。無願外聞之咱。（拾イ）編倒甫成。類聚云記　號月詣集、勒爲十二卷、蓋乃配部而分。取其法於律數。以實而錄　題其名於卷端。　于時壽永元年壬寅十一月。

文化十四年六月以季鷹新生本校合畢

同七月以同本不足補之　源尚監

〔右月詣和歌集以狩谷棭齋校本並版本校合〕

續群書類從卷第三百六十九

和歌部四

東撰和歌六帖題目錄

春

立春　早春　霞　鶯　子日
若菜　餘寒　殘雪　梅　春月
春曙　歸鴈　春雨　柳　早蕨
春駒　雲雀　櫻　桃　喚子鳥
雉　菫菜　苗代　杜若　款冬
蛙　躑躅　藤　暮春　三月盡

夏

更衣　神樂　卯花　葵　郭公
盧橘　早苗　菖蒲　五月雨　照射
鵜　蚊遣火　夏草　瞿麥　夏月
夕立　螢　氷室　納涼　夏祓

秋

立秋　初秋　七夕　萩(荻歟)　萩
女郎花　薄　苅萱　淺茅　蘭
鴨頭草　槿　秋夕　露　虫
鹿　鴈　月　駒迎　野分
擣衣　霧　稻妻　秋田　鴫
鶉　草　紅葉　暮秋　九月盡

冬

初冬　時雨　落葉　霜　枯野
寒芦　冬月　千鳥　水鳥　氷
網代　霰　霙　鷹狩　雪
神樂　炭竈　埋火　佛名　歳暮

戀

初戀　忍戀　聞戀　見戀　尋戀
祈戀　不遇戀　契戀　賴戀　待戀
遇戀　後朝戀　增戀　切戀　顯戀
旅戀　遠戀　近戀　片戀　戀戀
稀戀　別戀　怨戀　絕戀　舊戀
曉戀　朝戀　書戀　夕戀　夜戀

雜

天　日　月　星　風
雲　雨　火　煙　山
袖　思　野　原　杜
水　澤　池　瀧　河
湖　海　湊　江　都
村　里　故鄉　山家　田家
路　關　橋　草　木
竹　鳥　獸　魚　樵夫
海人　祝　別離　旅　眺望
述懷　懷舊　夢　無常　玉
鏡　錦　糸　衣　布
枕　莚　笛　琴　墨
筆　釵　弓　舟　筏
物名　社　神祇　寺　釋教

東撰和歌六帖第一

立春　早春　霞　鶯　子日
若菜　餘寒　殘雪　梅　春月
春曙　歸鴈　春雨　柳　早蕨
春駒　雲雀　櫻　桃　喚子鳥
雉　菫菜　苗代　杜若　款冬
蛙　躑躅　藤　暮春　三月盡

立春

鎌倉右大臣
冬くもりはる立くらしみ雪降吉野のたけに霞たなびく

三品ゝゝ
雪の中に春しるものは鶯の聲とやいはん霞とやいはん

平泰時朝臣
鶯のふる巢にいかてつけやらんまた冬なから春は立ぬと

藤原基綱
雪の中にふる巢立出てゝ飛鳥のあすかの宮に春は來にけり

蓮生法師

早春

いつしかと霞もあへぬ山のはの朝日よりこそ春は見えけれ

三品ゝゝ
吾妻よりせきこえてくる春とてやあふさかやまのまつ霞らむ

平重時朝臣

いとはやくかすみそむる鏡山きのふの空もおもかはりして
平政村朝臣

晴やらぬ雪けの山の横雲やかすめる空のはしめなるらん
權律師公朝

雪はらし遠きやまの末方より霞はしめて春にきにけり
信生法師

あつさ弓春きにけらし高圓の尾上のみやに霞たなひく
行念法師

鶯のなくを限りにまたれつる人傳ならぬ春もきにけり
淨意法師

氷ゐし谷の小川のわすれ水岩間をとめて春はきにけり
圓智法師

霞

吉野川岩間の氷きえもあへす波より早く立霞哉
二條三位教定

江山の霞むけしきにしるき浪風しつかなる御代の春とは
三品丶丶

あしかきのまちかき山の朝霞春はきぬとやたちへたつらん
蓮生法師

雪きえぬ高根も春の空なから麓はかりに立霞哉

ひとしほの色とはいはしをしほ山霞立そふ松の緑を
藤原雅有

立こむる春の霞のひとへ山うすくそ松の色も見えける
平時直

立そむる霞の衣は乙女子か袖振山の霞なりけり
藤原時朝

けふり立つ室の八島のちかけれは我住かたの霞そむらん
三品丶丶

いつもたつあまのとまやの夕煙ふかきや春の霞なるらん
藤原重教

もしほやく浦のしるへもなかりけり霞にあまる煙ならねは
平貞泰

なはの浦に立や霞のおくの島うかひにたにも見えぬ春哉
法印良全

そめわたす野にも山にも佐保姫の袂ゆたかに立霞哉
藤原基政

鶯

あくる夜の鳥はそられに成にけり霞にとつる逢坂の山
鎌倉右大臣

かきくらしなをふる雪のさむけれは春ともしらぬ谷の鶯
素暹法師

雪きえぬ谷にも春はよそならてまつ鶯の初音をそきく
寂身法師

谷の戸を雪のうちよりいてそめてかすむとすれと鶯のなく

鎌倉右大臣

谷ふかみ入しもゆきてつけなくに鶯いかて春をしるらん

入道大納言家弁

相坂の關の外山の明ほのに聲立のほる谷のうくひす

眞觀法師

たかまとのみやの鶯いにしへにかはらぬ音をや今もなくらん

光西法師

千とせまて君そきくへき初春の初音のけふの鶯の聲

權少僧都孝源

雪のころちえの聲やさむからんしのたの森の鶯の聲

藤原基綱

朝日さす軒端のたるひ露おちて咲あへぬ花に鶯そなく

平重時朝臣

尋きて軒端の梅に鶯の花ちるまてと宿やかるらん

藤原基政

梅の花かさに縫ふてふ青柳のいとおの山に鶯そなく

高階家仲

鶯はなほ谷の戸にのみらし（本マヽ）のなかなく聲の花にすくなき

行念法師

梅ちらす風のたよりの鶯はさそはれいつる聲もうらめし

藤原頼俊

誰もれにたてぬはかりそ鶯のなきてうらむる花の下風

平長時

惜むとてたえすなくなる鶯の淚にもろく花や散らん

六條二位顯氏

子日

朝霞たなひく野邊の小松原けふたれの日と空にしるらし

三品ゝゝ

梓弓春立野邊の小松原千代のためしにいまやひかまし

平長時

子日して君をそ祝ふ人かたのひとり長閑き春の日暮し

有驗法師

いく春の子の日の松を引うへて君か千年の數をしるらん

二簿隆?

初春の子の日の小松引つれて大宮人はいまかへるらし

若菜

淨意法師

立てそめしくにすの若菜はふりても年を積へき物としりきや

鎌倉右大臣

若菜摘むいさ入まれに春日野の雪の下道ふみならしてん

花山院宰相中將長雅

春日野の雪間の若菜いくたひか君か千年の春を摘へき（𛀁歟）

藤原基師朝臣

若菜つむ野邊の霞の衣手にけふさへあやな雪そふりつゝ

高階家仲
春雨のふる野の若菜[illegible]かためしゐてやつまん袖はぬるとも
餘寒　三善康義
春きても吹やあらしのなほさえて小川の水に淺氷せり
順眞法師
立ちそむる春い[illegible]うす衣また山風は袖にさえつゝ
權律師隆榮
春風やなほ寒からし山姫の袖もまとなに立霞哉
善念法師
殘雪
山の端は春しりかほにかすめともまた谷寒く殘る白雪
良心法師
あら玉の年や外よりこえつらんまた雪きえぬ逢坂の山
藤原時家
あし曳の山の春風猶さえてかすみの下に殘る白雪
二條三位教定
かすめともまたしたとけぬ水くきの岡のかやれに氷る白雪
平重時朝臣
初草は下にもゆれとかた岡のなとろか上の雪はけなくに
三品、、
ときしらぬ山風さえて春もなほ富士のすそ野に殘る白雪
權律師公朝

もえ出る草葉につもるあは雪の哀れいつまできえかてにせん
順眞法師
もえいてゝまたうらわかき初草のあさ野の原の雪のむらきえ
藤原宗國
若菜摘野原にもゆるかけろふのあるかなきかに殘る白雪
藤原基隆
高根には猶ふる雪の中空にきえてや春の雨となるらん
權律師公朝
鶯はやなか〔き歟〕にしなそともなる竹のはやまに雪はふりつゝ
權律師寛學
梅
紅のこそめの梅もしろたへにふりまかへたるはるのあはゆき
鎌倉右大臣
けふゆきていさおりとらん鶯やあすかの里の梅の初花
藤原基綱
わするなよ又もきてみん春日野にいつら三室の梅の初花
光西法師
みてもなほあかすそありけるみつのみの吉野の宮の梅の初花
三品ヽヽ
里はあれぬ春はむかしの春なれやかはらす匂ふ軒の梅か枝
高階家仲
梅の花咲やなにはつみやこにて大宮人のいつかさしけん

鎌倉右大臣
梅が枝にこほれる霜や解ぬらんほしあへぬ露の花にこほるゝ
寂身法師
春といへはまつ咲花のかひもなし雪の色なる野邊の梅か枝
平　實泰
ふる里のかきほの梅の匂ふより我身にしむる春風そふく
鎌倉右大臣
ふる里に誰しのへとか梅の花むかしわすれぬ香に匂ふらん
願眞法師
ことし咲若木の梅の初花にならはぬ人のまたれそめぬる
圓々法師
こぬ人を恨むるまてはなかりけりさかりまたしき宿の梅か枝
入道大納言家兵衛督
待侘てたのめぬ人や恨みまし梅咲宿のかにとはかりに
鎌倉右大臣
梅の花それかあらぬか春雨のふりにし人の袖の香そする
藤原時家
霞たつとをちの里の梅の花色こそみえれ匂ふ春風
法師尊家（印融）
香をとめて梅咲やとに立よれはあかぬ色こそ猶まさりけれ
平政村朝臣

梅さかぬ宿のかきねも匂ふまてうつりにけりな春の夕風
權律師尊季
かく許り身にしむものと梅か香をいつの春より思ひそめけん
平政村朝臣
さらてたにねられぬ比の梅か香にうたて木間の月そもりそふ
藤原長直
花とみておられぬ月の影たにも匂そふかき夜半の梅か枝
素遷法師
心とはちらすもあらなん春風のさそふたにうき宿の梅か枝
寂身法師

春月

あし曳の山のあなたも春なれはかすみていつる夜半の月影
藤原基綱
くまのちやしのたの森の木間よりちえにかすめる月を見る哉
平　俊職
雲はみなあまつあらしにさそはれてはるゝも霞む春の夜の月
眞昭法師
月影のかすみにくもるこの頃を春とはいかていひはしめけん
良心法師
かすめたゝ春ならぬ夜の月とても心のはれてみる時はなし
尼　淨眞
思ひやれさてたに霞む月影の涙にくもるころの詠めを

此歌はなけく中侍〔中務〕けるとしの春とふらへりける人の返しによみける。

むは玉のやみには春の色もなし月そ霞のしるへなりける　眞眼法師

三品ゝゝ

かすむとも いかてしらまし難波かた入江の月の影なかりせは　鎌倉右大臣

春の夜のあけかたちかき雲まより山のはみえて残る月影　權律師公朝

春やあらぬ月はみしよの雲なからなれし昔の影そ戀しき　藤原能清朝臣

うき事はもとの身にして月みれはたり〔れ歟〕や昔の思ひいてそなき　源親行

誰しるをすれにかたらん故郷の軒端にかすむ春の夜の月　權律師隆榮

問ゆかは匂ひや袖に殘るへき花の影もる春の夜の月　鎌倉右大臣

くもれたゝ花おりやつれ山人のかへる詠もあたら夜の月　三品

〔曙歟朧歟〕

櫻花ちりかひ霞む春の夜の朧月夜のかちの川風

いくさとも同し詠やかすむらん山の端遠き春の曙　信生法師

またさかぬ花の梢の色までも霞にこもる春の曙　權律師圓覺

吉野山花はよのまに散りにけり木の下しろき春の曙　行念法師

誰かたによるとちきりてかへるらんたのむのかりの春の曙　鎌倉右大臣

歸雁

春の夜の暁かけのしのゝめにほのかに鴈のなきて行なる　勝圓法師

何ゆへかなきてはかへるきぬ／＼の別もしらぬ春のかりかね　平重時朝臣

かりかねの歸るをのか心にてなくそあやしき曙の空　幸嚴

かりかねのかへる雲井のわかれまてうきはならひの曙の空　二條三位敎定

曉のなきよなりともかへるかりをのか別はたらんものかは　寂身法師

うかりけりさしもあたなる花よりもまつ別行春のかりかね　源親行

わけまよふ雲の八重山あともなしをしへて歸れ春のかりかね　辨行邪

故郷のしるべもみえず白雲のあとなき空に歸るかりかね
平政村朝臣
須田の原かすむ朝けの波の上にこし方遠く歸るかりかね
入道大納言家左衛門佐
すゑつゝく雲と波とを限にてとこよにかへる春のかりかね

春雨

法印尊家
冬かれのおきのやけはら今はまたみとりにそむる春雨そふる
宮道忠員
やたのゝにもえ出る草のうらわかみ露をもけなる春雨そ降る
高階重氏
恵みある御代のはしめの春雨に四方の草木のおりにあひつゝ
行圓法師
ときは山松の色こそよそなれとたゝ一しほの春雨の空
行念法師
野も山もひとつにそむる春雨にぬれてつれなき谷の埋木
房圓法師
なしなへて山はみとりに成にけり（下缺）
藤原忠直
水たまりある川瀬さらにまた影みるまての春雨そふる
鎌倉右大臣
青柳の糸よりつたふ白露をたまとみるまて春雨そふる

山櫻花にこほるゝ春雨はきえあえぬ雪のしつく成けり
平實泰
もる山のしつくも匂ふ春雨にぬるともゆかん花の下道
二條三位敎定
伊勢の海やつりする海士のとまやかた軒もしけき春雨そ降る
藤原時朝

柳

道のへのふるきの柳もえ出て影ふむほとになりにける哉
平重時朝臣
春雨はきのふもけふも古里にまた色あさき青柳の糸（同集）
平政時朝臣
佐保姬の霞の袖にかゝる哉うちたれかみの玉の青柳
三品ゝゝ
朝霞たつたのきしの春風にみたれにけらし青柳の糸
平重時朝臣
春風にこほれておつる白露の玉ぬきかぬる青柳の糸
平泰時朝臣
瀧津せの玉ちるきしの玉柳ぬれていくせの春かへぬらん
平實泰
青柳のみとりの糸に風吹けはなみのあやなる春の池水
平長時

早蕨

野邊みれはなほ降雪の下わらひ物うき色にもえや出らん

權少僧都孝源

きえ残る雪間の草のはつかにも折ゝ物うき野邊の早蕨

春駒

平長時

朝日影かすむけしきはのとけきになのれそあるゝ野邊の春駒

眞昭法師

ふみわたる野への春駒つめひちてあさゝは水は氷とくめり

六條二位顯氏

おさまれるみ代のしるしとみゆるかな花の山邊にはなつ春駒

淨意法師

（續雲葉風集）

雲雀あかる春のみそらや寒からしあら田におつるなくも聲しきりけり

平泰時朝臣

こしかたも猶ゆく末も霞つゝひはりそあかる武藏野の原

平實泰

朝日さすすかのあら野に立ひはり霞みてあかる程そしられぬ

櫻

舜意法師

さくまてのいのちはしらす山櫻花にまたれし春はきにけり

眞昭法師

咲そめてほかにはまたき花の香をあまたにやかて春風そ吹

さかぬまは花に心をつくしきてとふへき人はいまもまたるゝ

平時石

今よりは人をそまたん我宿の軒端に櫻花咲にけり

法眼定承

すかのれの永き春日と思ひしは花まつほとの心なりけり

閑勇法師

瀧の上をこす白波とみゆるまてみふれの山に花咲にけり

藤原時朝

たちわたる霞の衣春きてそ花のひもとくみよし野の山

西圓法師

みさかにはゆきもけなくにしなのなる木曾路の櫻早咲にけり

二條三位教定

つらしとも思ひもしらて年毎に風をしろへの花をみる哉

源親行

白雲のあとなき峰の霞より風をたよりの花の香そする

藤原時家

み吉野は空もひとつに成にけり花よりつゝく峰の白雲

高階家仲

白雲の空よりつゝく吉野山いつれか花のさかひなるらん

素暹法師

白雲のたえてしなくはあし曳の山の櫻をなにゝまかへん

平清時

吉野山花にかはらぬ色なれはへたつる雲をなにかいとはん

平重時朝臣

横雲は花よりをちになりにけりあつるもしらぬ春の山風
平重法名覺然

山風のいかにわけてか匂ふらん花と雲とのゆきあひのそら
藤原基輔朝臣

山たかみあらしになびく白雲の殘る梢や櫻なるらん
善眞法師

このほとはところもさらすみ吉野の花の盛の峰の白雲
入道大納言家弁

花の色はあまりにけりな筑波ねのこのもかのもにかゝる白雲
藤原定員

春はまたほかゆく雲の色もなし花にあまらぬみ吉野の山
源親行

久方の空には雲もなかりけり花の盛りのかつらきの山
藤原能清朝臣

山櫻よしみん人は雲とみよわれこそゆきておらはおりてめ
三品、、

こえゆかはあすや花とも手折みん瀧のあなたの峰の白雲

まかひつる雲をふもとに分すてゝけさはたかねの花を見る哉

たちまかふ雲を櫻と思ひしは花なき峰のよそめ成けり

よそにては花かと見えてたつねつる雲をあなたに櫻なりける

こえきつる外山の峰の白雲を花かと猶も立歸る哉
藤原能清朝臣

世をすてゝたつねいらんと思ひしに花ゆへみつるみ吉野の奥
三品、、

世をそむくみちにはあらて吉野山花にふかくそ尋入ぬる
寂還法師

これまては花をしるへに尋きぬかへさはいかにみ吉野の山
圓勇法師

み吉野の山の櫻をみぬひとはいかなる花に心とむらん
平俊職

部人花みる比はみ吉野の山のあなたのかくれかもなし
光西法師

尋いる春の日數をかされても花そはてなれみ吉野の山
藤原忠直

みても猶花に心のゆきやらて山路の末にけふもくらしつ
藤原宗國

花盛いくかもあらし木のもとのゆきゝはゆるせしかの山もり
憲實法師

峰こえて猶山ふかく尋ねすはこの谷かけの花を見ましや
印誓法師

いさゝらは猶こえゆかんしのふ山これより奥の花もみるへく

かへるさのみちやまとはん櫻花なほ山ふかく尋いりなは

行圓法師
たつねきてみれともあかすあし曳の山のかひある山櫻哉
神行邦
尋きて今こそみつれはつせ山檜原の奥は櫻なりけり
房圓法師
いつれにかかさしはおらん三輪山のひはらにましる初櫻花
平時直
花をのみかさしにおれはこの頃の三輪の檜原は人もすさめす
慈信法師
さほ姫のかさしなるらし吉野山霞の袖そ花にかゝれる
光西法師
苔むしてちはやふるきの櫻花いくひさしとも神そしるらん
高階家仲
花さかはなを尋みん敷島や大和のほかの吉野へとも
法印尊宗（家集）
花咲かは猶とひゆかんみ吉野やこれよりふかき奥の山里
權律師高季
とかむへき主なき山の花なれと後みんためにおりはつくさし
光西法師
またしらぬ人もあるらし山櫻われも此世をのかれてそ見る
平政村朝臣
花の色にそめし心もあくかれて行かたしらぬ春の山風
權律師仙覺
おもかけのうつらぬ時もなかりけり心や花のかゝみなるらん
源光行
山櫻としに匂ひやまさるらんそめし心のふかくなりゆく
平重時朝臣
我のみそ心にかけてなかめつる人も木末の花のしらゆふ
二條三位教定
くれぬとも人のとかめぬ宿ならは一夜はねなん花の下陰
權僧正隆弁
人しれぬみやまかくれの松の戸にこれみよとてか花の咲らん
此歌は法印に成て侍ける時。よろこひ申たりける人の返事によめりける。
權大僧都家信
とふ人は思ひたえたる山里にたかためとてか花の咲らん
藤原基頼
故里の老木の櫻きてみれは花にむかしの春そ殘れる
權律師謙忠
春はなをとふ人たえぬ古里の花やむかしもあるしなりけん
信生法師
さゝ波や志賀の故里立歸りむかしに匂ふ花を見る哉

藤原基氏
さゝ浪や志賀の大津に船とめてなからの山の花を見る哉

三善康義
吹風の匂はぬ里もなかりけり四方の櫻の花の盛は

平重時朝臣
四方の花なかめのこさしと思ひしに一木にとまる我心哉

源光行
春ことにいく里人の心をかこすえに花のやとしきぬらん

蓮生法師
白雲の心にかゝる宿ならは花のあるしなきてそとはまし
是はにし山の草庵の櫻さくほとみすてゝ。京へいて
たる人のもとより。軒ちかく侍しさくらやさきぬら
んそなたの空にかゝる白雲と。いひをこせて侍ける
返事によめるとなん。

紀基兼
大かたの春によそなる宿なれは花のころたに問ふ人はなし

寂高法師
とはれぬは我身はかりと思ひしに花さへ人に忘られにける

平重時朝臣
この春はくろ人もなし糸櫻思ひよりてはわれのみそする
尼浄眞

これも又つもれは老となりやせん花をもめてしみ吉野の山

權律師尊季
春にあふあまたの年のつもりては花みるをも老となりけり
かりの色にそむる心をすてはてゝ花みぬほとに世をは厭はゝや

權律師公朝
かすならぬ身のなくさめと聞をきてみれとも花にしつ心なき

蓮生法師
とゝめくる心の色は山櫻花にみたれて見えすやあるらん
是はさかに侍ける人のもとに。花の盛と聞て。西山の
たよりにまかりてかへり侍りけるに。かのあたしの
もとより。見る人の心もとめぬ故郷に咲てかひなき
山櫻かなと。申をこせて侍ける返事によめりける。

入道大納言家兵衛督
秋よりも身にしむものかわきもこかとかむはかりの花の夕風

行念法師
うらむへきよそのあらしや匂ふらん花なき里の春の夕暮

藤原忠直
山ふかみ人のとひこぬほとはかり風にも花の知られさりせは

房圓法師
けふこそは行てもとはめ飛鳥のあすかの櫻ちらまくもおし
平時隆

さゝ波やなからの山の櫻花いく代の春の風にちるらん

あた人のをの葉なれや櫻花風をもまたてちらとすらん

鎌倉右大臣〈ん脱歟〉

平實泰

吹風にさけはかつちる山櫻盛もしらて春やすくらん

藤原基泰

咲は散咲れはまたる山櫻人のなけきの花にそありける

素暹法師

咲ぬまは思ひもわかぬ春風のうきもつらきも花にそありける

源光行

散るとてもあらしは色をうつむかは花につらきは霞なりけり

圓勇法師

山姫の霞の袖を吹風に春のかさしとちる櫻哉

權律師珍瑜

山風を思ひやりてもいとふかな散るとは花のみえぬものから

權律師公朝

身の爲のうき世とはかり思ひしに花にもあれや春の山風

藤原時家

玉ほこの道もさりあへす散る花にまとふ心はゆく方もなし

澄蓮法師

分わひぬ花の白雪降しきてあとたにおしき志賀の山越

素暹法師

つくはれの木のもとをに散る花のなへてかなしき春風そ吹

三品〻〻

散る花のかたみとも見ん吉野山雲なはらひそ峰の春風

かつら木やたかまの櫻吹風はよそになりゆく花の白雲

權僧正隆弁

ちりまかふくめちの櫻とたえして春風わたる雲のかけはし

圓勇法師

ときわかぬひはらにましる山櫻うつろふ色にいつならひけん

宮道忠員

うつろはてときはなりとも山櫻花にめかるゝ春やなからん

行定法師

我宿をとへかし人のとはかりにめかれぬ花もうつろひにけり

鎌倉右大臣

行てみん思ひしほとにちりにけりあやなの花や風たゝぬまに

西圓法師

おしむとや命を花の思ふらん身にかへやらて年のへぬれは

觀證法師

身にかへて惜むならひの有ときかは花の木陰に名をや殘さん

藤原朝氏

身にかへておしむ心をあはれとも思ひもしらすちる櫻哉

藤原定員
人にもうき日はみえし櫻花ひと盛ありてちりなましかは
圓勇法師
花ゆへにうき身も今そしられけり咲てとくちる思ひありとは
藤原意家
惜まれぬ我たにたへて過すよになにをうしとか花のちるらん
平政村朝臣
おしむかひなきになりけり櫻花あたにちりぬる年の經ぬれは
平重時朝臣
またさかはちるてふをもうかるへし花の枝おれ春の山風
蓮生法師
散をのみうらみなれにし山櫻人をもおしむ春の空哉
都にはまたこん年をたのめしにおなし春なる山さくらかな
圓勇法師
この春につゐにとはれぬ山里のあるしとならてちる櫻哉
權律師厳雅
散りぬれは花こそやとのあるしともたのむかけなき春の山里
法印定清
待えては花もうれしと思ふらんけふまてなくは誰かとはまし
此歌はやよひのつこもり比まて。庭のさくら散りのこりて侍けるを。これかれ尋きてきたりけるによめりける。
圓勇法師
をのつから外のちりなん後そともいはぬに殘るをそ櫻哉
平泰時朝臣
春風やしらてすきなん奥山の青葉にましる花の一枝
これはふかき山をすきけるに、花の一枝ちり殘りて侍けるによみける。
素暹法師
今はさはをくれて咲る花にたになさけをのこせ春の山風
平時直
風さそふ庭にたまらぬ花なれはきえかてにする雪をたにみす
源親行
吉野川河淀さらす立波のしらゆふ花に春風そふく
證定法師
み吉野の瀧の白糸いくかへり花こきちらす春なへぬらん
二條三位教定
きのふけふ風も吹きあへすよしの川峯よりおつる花の瀧つ瀬
浄意法師
吉野川落そふ瀧のみなかみは峯の櫻に春風そ吹く
眞眼法師
吉野山咲くとみしまに散花のあた波よする春の河風

行念法師
散る花のあらしにまさる涙川なみよりほかの水そ少なき
藤原能清朝臣
ちりつもる花にせかるゝ飛鳥川あさ瀬もけふや淵となるらん
藤原定家
山櫻ちりにけらしな吉野川流るゝ水にかゝる白雲
法印珍譽
散る花の流てはやき吉野川いつくか春のとまり成らん

桃

淨意法師
山里の春もやよひに成ぬとや垣根のもゝの花咲にけり

喚子鳥

眞眼法師
霞たつ春の山邊のよふこ鳥心のやみはさそまよふらん
權律師尊季
夕つく夜かすめる山の喚子鳥あはれはまたもたくひやはある

雉

鎌倉右大臣
なのか妻こひわひにけり春の野にあさるきゝすの朝な〳〵鳴
信生法師
あし曳のかた山きゝすうちはふき妻こひすなり春の曙
藤原時家
妻こひにあさるきゝすのみへぬまてやけふの原は草立にけり

菫菜

權律師尊季
（日脱）つかなにはつみ殘したる山かつの垣根のすみれ花咲にけり
藤原基綱
紫のねはふよこのゝつほすみれその色にこそ花も咲けれ
藤原基政
わかせこかしめのゝ原のつほ菫あなかま人につませすも哉
性命法師
打むれていさゝはつまんつほ菫矢田の廣野はしめさらすとも

苗代

平政村朝臣
山もとのあら田の小田の苗代に今更引や雲の下水
せきとめて苗代水にまかすれは細谷川のおとそ殘れる
藤原直慈
せきわけてたか苗代にまかすらん小川の水の末そすくなき
藤原長直
いつかまた室の早苗におひいてんけふ種なろす小田の苗代

杜若

法印高家
咲にけりあさゝはなのゝ杜若春は霞のへたてのみかは
行念法師
住吉のあさゝはなのゝ杜若にほへるいもか衣にそする
藤原基綱
八橋のふるきわたりの杜若なれもむかしのつまにやあらぬ
平長時

春の色はふかくなりぬと紫のこそめにさける杜若哉
源 親行

欵冬

山吹のこしまかさきに舟とめてやそうち人もかさしなるらし
三品、、

くちなしにいかゝ匂はんもゝつてのいはれの池の山吹の花
平重時朝臣

さゝ波のかさねてよする池水に八重山吹の色そうつろふ
大江匡光

ときわかぬ水の心も山吹の花にうつろふゐての玉川
良暁法師

白妙に櫻なかれし谷川の波そめかふるきしの山吹
鎌倉右大臣

蛙なく井手の山吹うたかたも咲ちる花をあはれとそみる

蛙

春ふかみ花ちりかゝる山の井のふるきしみつに蛙なくなり
行念法師

咲匂ふ山吹のせの春風に其色しらすなくかはつ哉
謙基法師

山川のきしの山吹風すきてうつろふ波に蛙なくなり
平重時朝臣

山吹の花のちるをやおしむらん井手の蛙の聲〱になく
藤原基綱

躑躅

岩つゝし咲にけらしなみちせぬと常盤の山も色かはるまて
入道大納言家左衛門佐

舟よせてかさしにおらんみつゝてのいそ山つゝし今盛なり
房圓法師

つゝし咲く山下ひかけくれやらていはれの水に色そうつろふ
源 光行

なかめやる空に煙はたなひかて野邊を燒火やつゝしなるらん
鎌倉右大臣

藤

さやまなる高はふ松に咲藤の花のなみ〱こん人も哉
三品、、

むらさきの藤咲やまの松の葉にいりひもかゝる春の夕暮
信生法師

咲にけり誰にみせまし奥山のいはかきぬまのきしの藤波
素暹法師

こきかへり見てこそゆかめひめ島の小松かうれにかゝる藤波
源 光行

瀧つ瀬のをとをかりてや水上の岩根の藤も波とこゆらん
眞眼法師

吉野川花のかゝみはあとふりてまた影うつす岸の藤波
幸 松丸

くれかゝるやよひの末の藤の花うつろふ色に春ぞ少なき
西圓法師

暮春

あらしふくやよひの空の花の香も殘り少き有明の月
藤原時朝

散りのこる梢の花をなかむれは春の日數もすくなかりけり
素暹法師

あはれとや鳥のなくらん花もみな散りぬる宿の春の梢に
藤原忠直

花誘ふうちの川波いほこえて行衞しらすも暮る春哉
眞觀法師

ありてなき心ちこそすれ櫻花ちりにし後の春の日かすは
素暹法師

はかなさは花よりけなる命とてなを又春の暮そのひぬる
隆心法師

おしむへき梢の花は跡もなし春の日數はなを殘れとも
藤原頼業

花もちり春も暮れゆく山の端に霞はかりぞ立殘りける
眞觀法師

散る花にとまらぬ色はみしものをこりすもおしき春の暮哉
藤原頼俊

身につもる月日の數を思ふにもおしかるましき春の暮かは
二條三位敎定

空にのみ思ふおもひも晴やらて霞の中に春ぞ暮ぬる
行念法師

三月盡

行水にかへらぬ花やみなと川暮ぬる春のあとのしら波
鎌倉右大臣

春の行とまりやいつこみなと川花とのみこそ波は立らん
藤原基輔朝臣

いかにせん霞の袖の花の香もけふはかりなる春の名殘を
順眞法師

こゝろからふるすたつぬる鶯のかへる別のれをやなくらん
蓮生法師

花もまた人の名殘やおしみけんけふこそれには歸はてぬれ
これは花見にまてきたりける人のかへりて後につか
はしけるとなん。
源親行

ちる花にそへし心のいつくより歸りて春を猶おしむらん
能海法師

かくとたにいはて過ぬる春なれはよしや名殘のかた思ひせし
藤原定員

わすれなてとしも春そしたはるゝよそならさりし心習ひに
藤原重敎

年とにおなし別をなけく歎くれては春のけふになりつゝ

巻第三百六十九　東撰六帖

續群書類從卷第三百七十

和歌部五

拾遺風躰和歌集卷第一

春歌

立春　順德院御製

あらたまの年の明ゆく山かつらかすみをかけて春は來にけり

後京極攝政家名所十首の中に　二條院讃岐

こほりゐてとをさかりゆく志賀の浦浪を誘ひて春は來にけり

嶺霞　藤原爲通朝臣

よこ雲のはれゆくあとも霞にて明ほのうすき峯の松はら

山霞　藤原爲相朝臣

をとさえし嵐もよはる山のはの雪けをかへす朝かすみかな

野外霞　參議雅經

春日野の雪また（のイ）草のすり衣かすみのみたれ春風そふく

水鄕春望　中納言定家

みやきもりなきさの霞たなひきてむかしもとをき志賀の花園

遠島朝霞　鴨長明

明わたるおきつ浪まにわをたてゝ霞にやとるうき島の松

若菜　僧正公朝

茜さすこの日はくれぬしめの雪むらさきの野に若葉つむとて

藤原朝臣光俊すゝめたる百首の歌に　基氏卿

春來てもさむけき山の峯かけに日影しられてのこるしら雪

百首歌の中に　式子内親王

なかむれは見ぬいにしへの春まても面影かほる宿の梅かえ

古郷梅　一條前攝政家大夫

なかめわひぬ春やむかしの月かけに梅かゝかすむ故鄕の雪

月前梅　中務卿宗親王

梅か香の身にしむ床は夢たえてねぬ夜かすめる月を見る哉

百首の歌たてまつりけるに　常盤井入道大政大臣

道のへの一もと柳ふしてなひきおきてみたるゝ春風そふく

朝春草　藤原隆祐朝臣

あさまたきまたうらわかき草の原思へは秋の露もほともなし

大僧正ヽ恵千首の歌よみけるに若菜を　爲相

きえそむる雪まに見ゆる春の色もあさ澤をのゝ草の下もえ

題しらす　皇大后宮大夫俊成卿

峰ふかみ霞いさよふ月かけにのこるともなきあり明の空

月前歸雁　藤原爲顯

かへるへきほとは雲井の月かけにめくりあふへき秋や待らん

百首の歌中に　隆恵法師女

めくりあはむ秋とやたのむ春のよの月にわかれて歸る雁かね

歸雁　平時村朝臣

かすめとも月にや雁の歸るらん秋こし空におもひならひて

僧正公朝

月かけの霞める空のさひしさをあまたにやらて歸るかりかね

名所百首の歌に　定家

春ふかしこし路に雁の歸る山名こそかすみにかくれさりけれ

題しらす　平宣直

花になとわかれ初けん入やりの道とはきかぬ春の雁かね

後京極攝政左大將に侍ける時歌合に　寂蓮法師

子を思ふすたちのをのを過ゆけはあかりもやらぬひはり鳴之

雲雀　爲氏

霞たつ雲ゐのひはりこゑはしてそこともしらぬ野邊の草ふし

藤原光俊朝臣百首の歌中に　隆祐朝臣

大はらやをしほの山の櫻かり雲こそ花のとたち成けれ

千五百番歌合に　二條院讃岐

思ひねの花を夢ちにたつね來て嵐にかへるうたゝねの床

千首の歌の中に　從二位家隆

くれなゐのうす花櫻ほの〳〵とあさ日いさよふをはつせの山

題不知　法眼慶融

花の色尾上の雲にうつろひてかすみにのこる松のむらたち

夕月日花の木すゑは暮やらてかねほのかなるをはつせの山

曙の花

あけ初る高ねの櫻ほの〳〵とよこ雲にほふ春の山かせ

古郷花　盛遍法師

ふる郷と成にし後はみよし野の花やかへりて人を待らん

百首の歌の中に花をよめる　寂俊法師

身にかへて花をはおしむ世なれともなからむ跡の春そ悲しき

花の歌の中に　家隆卿

春風にさそはれてゆくしら雲の櫻ならすは山もうらめし

散にけり何をさくらの思ひ出に後しのへともなき嵐かな　常盤井入道大政大臣

弘安百首歌中に　西谷關白左大臣

花はみな風のまゝなる山のはにさそはれのこるあり明の月

河落花　平泰時朝臣

春たけて紀の川しろくなかるめりよし野の奥は花やちるらん

三百六十首歌よみ侍けるに　曾禰好忠

野へみれは草引はかり成にけり我なはしろも生やしぬらん

菫　定家卿

すみれつむ花すり衣露おもみかへりてうつる月草のいろ

三百首歌中に　公朝

むらさきのねはふよこ野のつほ菫あらぬたねよりさける色哉

杜若　西行上人

溜水にしけるまこもゝわかれぬにへたてゝ咲るかきつはた哉

欵冬　鎌倉右大臣

春雨の露のやとりを吹風にこほれてにほふ山吹の花

古郷款冬　定家卿

山吹のこたへぬ色に春暮て里のむかしはとふかひもなし

すみよし（の江イ）にまうてゝ歌合に藤を　前大納言爲家

すみよしの岸におふてふ草はあれと春を忘れすかゝる藤なみ

暮春曉月　爲氏

つれなくてのこるならひをくれてゆく春になをしへよ有明の月

三月盡　高階基政朝臣

いかにせむあひみん事は命ともたのまれぬ世の春の別を

拾遺風躰和歌集巻第二

夏歌

千五百番歌合に　後京極攝政大政大臣

花の色をとゝめかたみの夏衣たつ日のけふにあひにける哉

二百首歌合の中に殘花の心を　順徳院御製

蟬のはのうすくれなゐのをそ櫻おるとはすれと花もたまらす

夕卯花　藤原隆祐朝臣

夕月ようつろひまかふかひもなし袖にかけみぬ庭の卯の花

百首の歌中に　慈鎭和尚

このころはさくらかえたに雲はれて卯花かきに月を見る哉

里卯花　藤原光俊

うの花のしろくさけるに事とはんそもそのそこか玉川の里

葵　平長時

葵草かさす二葉はもろ人のけふをかさぬるみあれなりけり

時鳥　爲相

をのか音もひはらかおくにこもりえの初瀨をいつる時鳥哉

待郭公　平宣時

雨

とはちきらぬ物を時鳥くもるゆふへはなにとまつらん　源兼氏朝臣

まちわふる山時鳥よろさへや雲のかよひちつれなかるらん　西圓法師

きゝつとて人もこそぬれ時鳥またれよ月のあたら夜の空　藤原行俊朝臣

つれなさも幾夜になりぬほとゝきす有明までの月にまたれて　平宣時

待郭公

時鳥一聲とこそ思ひしにまちえてかはる我こゝろかな　家定〔定家歟〕卿

杜鵑歌中に

たちはなに風ふきかほりくもる夜をすまひになのる時鳥哉　法印定[illegible]（[illegible]イ）

なきすつる夕の雲の外までも心をさそふほとゝきす哉

月前時鳥

なきぬなり在明かたの時鳥つれなき名をは月にのこして　平時治

三善貞宗

しのゝめの月は明ゆく雲のあとになを聲のころほとゝきす哉

千五百番歌合に　寂蓮法師

昔とも思ひなすへき身のほとを花たちはなにとふ人もかな

夏の歌の中に　衣笠内大臣

あやめ草ふきかやとの夕風ににほふ凉しき軒のたちはな

千五百番歌合に　俊成卿

たちはなにあやめのまくらかほる夜は昔を忍かきり成けり

五月雨　從二位行家

五月雨に水まさりけるほと見えてもくつのかゝる川柳哉

瀧五月雨　法橋道信

みよし野の瀧やあまたに成ぬらん水わけ山のさみたれのころ

弘長元年百首の歌に五月雨を　爲家卿

大井川音まさるなる雲のをくらの山のさみたれのころ

橋五月雨　二條院讃岐

さみたれに下ゆく水やまさるらん浪に近つくふるの高はし

江五月雨　藤原信實朝臣

山もとの入江の礒に瀧おちてしほのまさるかさみたれの比

法印定圓

五月雨はふる江のむらのとまやかた軒までかゝる田子の浦浪

連夜照射　民部卿成範

を鹿ふす太山のすその木隠れにともしの影のみえぬ夜そなき

鵜川　家隆卿

むはたまの闇のうつゝの鵜かひ舟月のさかりや夢も見るらん

島螢　寂恵法師

ゆくほたるむろのやしまにこかれても煙はそはぬ思ひ成けり

夏の歌よませたまひけるに　土御門院御製

むら雨の雲夜のほたるかす見えて吹風すさむ庭の夏草

月前送涼　　源俊頼朝臣

しはつ山楢のひろはにもる月のかけみゆるまて夜は更にけり

後京極攝政家六百番の歌合に　　定家卿

くれ初て草の葉なひく風のまにかきれすゝしき夕かほの花

舟中納涼　　信實

むろの海やせゝのはや舟波たてゝかたほにかへる風の涼しき

題しらす　　前參議雅有

影うかふ軒の筧火かすかにて水の音のみたかく聞ゆる

扇　　同

夏ころも袖け（にイ）ゆふへの露かけてならす扇にいそく秋かせ

建長六年百首歌合に　　順徳院御製

みそきする夏の川瀬の水はやみかけもとまらぬ水無月の空

正治百首歌めしけるに　　後鳥羽院御製

御祓する川瀬に風のすゝしきは今夜をこめて秋や立らん

拾遺風躰和歌集巻第三

秋歌

初秋九條前内大臣家百首歌　　隆祐朝臣

ふく風もけふたち初てはつせめの夕花かくろ天の川なみ

秋の歌に　　院少將内侍

何となく物思ひ初るはしめ哉あわれ秋たつ空のけしきは

七夕橋　　長雅卿

かさゝきのわたせる橋や七夕のはれをならふろちきり成らん

夕荻　　藤原長清

をく露は袖にこほれて夕暮の荻の上葉にのこる秋風

荻　　爲家卿

秋風におきふしわたる荻の葉や老のねさめの心なるらん

藤原隆祐

中々にとふにつらさの有身ともしらてや過る荻の上風

題しらす　　安嘉門院四條

鵙のゐるお花かほすゑ打なひきかた山つたひ秋かせこ吹

月前鹿　　雅有卿

尾上こす松のこなたの秋かせに月影をくろさをしかのこゑ

平時高

明わたるやまの尾上にかたふきて鹿のねちかく殘る月影

鹿　　平時朝

よこ雲はおのへの松にあけ初てふもとの霧にのこる鹿の音

さかにてよめる　　安嘉門院四條

年をへて鹿の音きかぬ夜半もなし此山里の秋のねさめは

弘長元年百首の歌に　　九條内大臣

山もとの雲の下帶なかきよに幾むすひして鴈の來る（つイ）らん

秋の歌とてよめる　中務卿宗親王
下葉ちる柳の木すゑうちなひき秋風たかし初鴈のこゑ
建保一年秋五十首歌に虫を　順德院御製
秋の野の尾花吹しくかせの上にありか定めぬむしの聲哉
夜虫　文屋重久
露さむき庭のあさちの雨の夜によはらぬ虫も聲（のイ）そすくなき
藤原景綱
なきあかす野もせのむしの思ひ草尾花か本や夜寒成らん
前中納言定家卿にて湖邊秋夕といふことを題にて
よみ侍る　知家卿
萩の露荻の上風みるめなきうらはの秋もたゝならぬ哉
題しらす　僧正實伊
いつかたへやらは心のなくさまんなへてうき世の秋の夕暮
藤原行貞（直イ）
うき世にもなほうき時はありけりと思ひ知らるゝ秋の夕暮
實鑒法師
なかむればうきは憂世の習ひとも思とられぬ秋の夕くれ
道經法師
おなしくは心ありてもなかめはやおもへはおしき秋の夕暮
建長三年鳥羽殿十首の歌合に　皇大后宮大夫俊成女
むくらはふま柴の庵に音信て荻の葉過る夜半の秋かせ

百首の歌の中に秋風をよみける　九條内大臣
舟とむる入えのまほの音すみて蘆まの月に秋かせそふく
秋歌中に　寂蓮法師
露ふかきよもきかれやのひまとめてふるき枕に秋風そふく
川霧　法眼慶融
山もとの柴つむ小舟ほの見えて朝霧のこるうちのかはふね
河邊霧　藤原爲顯
月のこるいそ山もとは明やらて浪よりしらむうちのあさ霧
題不知　藤原景綱
まきの葉のしつくにおつる朝霧の暮ゆく山の峯の秋かせ
夕霧　爲顯
うらと　さなみに入日はおちはれて夕霧かゝる磯（擧イ）のまつ原
百首の歌中に　紀奉久
山もとの杉の下みちかつ見えてきり吹なかす三輪の川かせ
晩寺秋望　大納言爲世
霧こむる野寺の鐘のをとはかりよそに聞えて暮る山もと
田家秋　雅有卿
をしねほす庵のかきしは風たちて田のもしくるゝ秋の山本
田家　大僧正道慶
をしねほす三わの山田に鴈なきて夕日しくるゝ杉のむらたち
未出月　爲家卿

白たへに光そにほふかれてより月をまつちの山のはの雲

山家月　僧正公朝

木の間よりこけの軒もる秋の月宿からすむや心なるらむ

入道中務卿宗尊親王家の歌合に　參議能清卿

秋のよの月のこほりの名とり川なき名あらはす涙の音哉

湖月　爲家卿

さゝなみや月のこほりのとたえして一すちわたすせたの長橋

海邊月　平泰房

きよみかた岩うつ浪もあら磯の月にくたくる秋のしほ風

源經義

いせ島や鹽くむ袖の月かけを涙にのこしてかへるあま人

題しらす　平公時

秋の夜の月にはまけよ鹽かまのうらの名にたつけふり成とも

藤原爲相

かけやとすかきほの荻の葉すゑより月のしつくと落る白露

九條内大臣

河上に里あれのころみなと山見し物とては月そすむ覽

雅有卿

さらぬたに身にしむ月の更る夜に荻のはそよくまとの秋かせ

西圓法師

なかむれはあはれひとつに成にけり千々の思ひも月に忘て

中院權大納言

思ひ出ん後のあはれもそふはかり今夜の月はつねよりも見む

海邊月　平時高

あしの葉にくたけて落るしら露の玉えの月に秋風そふく

江月　藤原爲通朝臣

うら風に蘆の葉ならす音すみて入江しつかに月そふけぬる

月　中院御製

まとしらむ軒はのかけは明すきてまくらの上にきゆる月かけ

里擣衣　後鳥羽院御製

夜やさむき里は雲ゐの木からしにこゑさへうすくうつ衣哉

光臺院入道二品親王家の十五首歌に　爲家卿

やゝさむくなるおの里の松風になみかけ衣うたぬ夜もなし

海邊擣衣　慈遍法師

あしふきの八重のしほ風夜やさむきこやにひまなくうつ衣哉

題しらす　平重時朝臣

澤水にぬれてなく／＼たつ鳴のこゑ吹なかす秋の山風

紅葉　源重方

秋ふかきみ山の奥のうすもみち思ひしほとはしくれさりけり

秋山　藤原爲通朝臣

をくら山そむるこすゑの初時雨今いくかありて色に出なん

題不知　藤原爲相

しくれゆくこすゑにこもる初瀬山入あひの鐘の聲そ色つく

權中納言爲兼

色まさるまさ木のかつらくり返し外山しくるゝ秋の暮哉

源親行

もみち葉のしたてる水のかけみれは河ゆく浪は時雨さりけり

旅泊紅葉　隆祐朝臣

紅葉ゝのうきねのなみにかけ見えて夕日にとまる秋の山もと

藤原光俊

ましてかの龍田のいか（よイ）に時雨らむ見とみる山の紅葉ぬはなし

智信法師

たつたひめ時雨の雨に染をきしくれなゐおろす峰の秋かせ

菊　法印定圓

今朝みれは又初花に成にけりうつろふきくに霜やおく覧

暮秋　一條前攝政家大夫

なか月ときかすはさても中々に人たのめなる秋の暮かな

同題　權大納言長雅

わかれちの（にイ）たえぬ涙の露分てたか袖よりか秋はゆく覧

定家卿

たゝいまの野原をおのか物と見て心つよくもかへる秋哉

閏九月盡　藤原兼綱朝臣

なか月の日かすまされる年なれとあらぬは秋の別成けり

拾遺風躰和歌集巻第四

冬歌

初冬時雨　藤原隆祐朝臣

なか月もしくれなれにし空なれは日かすそ冬のはしめ成ける

山時雨　法親王覺助

夜もすからなにをしくれの染ぬらんひはらの山の峯のしゐ柴

冬歌の中に　前中納言定家

まとろまぬすまの關もり明ぬとてたゆむ枕もうち時雨つゝ

題不知　藤原爲相朝臣

山人のかへさの道や時雨けんおろす爪木にこほる夕つゆ

落葉　小侍從女

雲おくる嵐や峯にかへるらん時雨のあとに木葉ふる之

快豪法師

淋しさはおなし時雨の音なれは木の葉ちるにも袖はぬれけり

鴨長明

山颪にちる紅葉ゝやつもるらん谷のかけひのをとよはるなり

藤原爲通

あさな／＼木葉すくなく吹すてゝ我とあらしの聲よはるなり

曉落葉　藤原爲相朝臣

ちりくもる峰のこの葉の風のうへに月はしくれぬあり明の山

從二位家隆

神無月有明の月の山嵐に霜おきなからちる木の葉哉

春日社歌合に　宜秋門院丹後

もみち葉は一えたのこせ立田山いかなる神の手向成とも

元弘元年百首歌たてまつりけるに　從一位良教

もみち葉を吹すてゝゆく嵐哉をのかためとはさそはさりけり

落葉　平業基

ふかき夜の窓うつ音のさひしさも雨にまさりてふる木の葉哉

僧正公朝

夕されは木の葉吹まく山風のしつかならぬにすむこゝろかな

五十首歌合に　全心法師

時雨つるなこりと聞もさひしきは落葉にかゝる軒の玉水

平盛時

木からしに雲もりの神やゆるすらん枝に殘らぬ杜のかしは木

川邊落葉　平宗泰

大井川くたすいかたのあと見えて木葉かたよる水のしら浪

寒草　清原持章（幸イ）

秋たにもさひしく見えしかた岡の一むらすゝき霜かれにけり

藤原教綱

霜かるゝ軒はの荻（萩イ）の一むらにやとる嵐のこゑそすくなき

寶治百首の歌に　衣笠内大臣

うつらふすをのゝ茅原霜枯れてをれはかたより風そよくなり

題不知　二條院讃岐

なにはかた汀の蘆は霜かれてなたの捨舟あらはれにけり

氷　寂蓮法師

はやきせはむすひもやらぬ山川のさゝれつたひに氷しにけり

家隆卿

山川のをとはこのほとたえはてゝこほりにのこる峰の松風

親行

こほりゆく汀は（もイ）とをく風寒く（さえてイ）尾花にのこるまのゝうらかせ

湖邊千鳥　平景幸

しかのうらや夕なみ千鳥こかれ來てこほるかた田の沖に鳴之

海邊千鳥　定家卿

はまゝつのねられぬ波の（やイ）とまやかたなを驚そふるさ夜千鳥哉

關路千鳥　平業時朝臣

清見かた關の戸たゝくうら風に明かたかけて千とりなくなり

雨後冬月　同

むら時雨すきぬるやとの庭のうへに名殘の露つ月を待らん

冬月　家隆卿

都人契し月も時雨つゝすみえぬころの山のおくかな

聞冬月　津守國助（助イ）

ちりつもる木葉かくれに成にけりねやのいたやの冬の夜の月

題しらす　光俊

名もしらぬ鳥の音さむく日は暮て霰おちゝる山のさひしさ

題しらす　　平實泰

山風にあられおちゝる玉しまのこの河上にみ雪ふるらし

鷹狩　　知家卿

みかりする かた野のま柴風さえてうす雪しろし野ちの篠原

網代　　爲家卿

舟ちかきいさよふ波の音はしてまた夜はふかしうちの網代木

遠山雪　　平實時朝臣

ありとたに思ひもとめぬ足引の遠山みゆるけさの初雪

雪　　法眼弁算

ふるまゝにこすゑやおもく成ぬらん嵐をまたぬ松の雪をれ

藤原家好

雪をれの松か浦島おとたえてほかにもとめぬあまのもしほ木

湖邊雪　　高階家仲

からさきやあらしもなみもこゑそなき汀のこほり松のしら雪

積雪　　寂蓮法師

なひくかとしはし見えつる冬かれの荻のふるえも雪の下をれ

海邊朝雪　　九條内大臣

あさなきにいそこきわくる舟みえてむかひの島をつたふ白浪

曉更聞鶯　　平貞時朝臣

ふくろ夜の雲のかよひち月さえて霜をかさぬる山あひの袖

炭竈　　藤原頼基朝臣

たちのほろけふり吹しく山風にやくとも見えぬをのゝ炭かま

爐火　　安嘉門院四條

夢むすふ霜のまくらにきえやらてね覺待ける夜半の埋火

雪中歳暮　　法印圓曾

人ならは跡も見えましふる雪にそこはかとなくくるゝ年哉

弘長百首歌に　　衣笠内大臣

しはしこそよそに過ぬと思ひしか身に積りける年のゆきゝを

拾遺風躰和歌集卷第五

賀歌

建長二年百首歌奉けるに　　定家卿

さゝれ石も岩をと成てあすか川ふちせのこゑをきかぬ御代哉

月契遐年　　中院御製

いく千代もかくこそはみめすむ月のかけもかはらぬ（東イ）秋の行末

寄天祝　　寂蓮法師

ほしの光雲の色にも君か代の空にかなへるこゝろをそしる

題しらす　　兵部卿成家

よろつ世と君をいのれはかすか山峯にもおなし聲そ聞ゆる

松延齡友　　土御門内大臣

君か代は木たかき松をたくひにてむれゐるたつやけふの諸人

花契遐年　土御門入道
さきそむるかめのお山のさくら花かれて千年の春そ知らるゝ
後京極攝政家六百番の歌合に　藤原隆信朝臣
君かへん代をなか月のかさしとてけふおりえたるしら菊の花
寄鶴祝　藤原重綱
よろつ世にをのか千年をかされきて君に伴ふ鶴のけころも
寄和琴祝　中原光俊
君のみそ千代も引へきむくのはのあつまの琴の春のしらへは
喜安院二品親王家五十首歌に　俊成卿女
君か代はたかのゝ山の岩の空あけむ朝の法にあふまて
題しらす　寂蓮法師
浪の上に薬もとめし人しあれはこやの山にみち知へせよ
文應元年大嘗會主基方備中國稲舂歌　行家卿
むかしきく神のさゝ田のたれなれは二葉の稲は八十倉そつむ
法性寺入道前關白宇治にて歌よみけるに　光雅卿
君か代はけふを千とせのはしめにて幾たひすまんうちの川水
續古今竟宴歌　同
數しまのみちの光とまき／＼の中にみかける玉を見るかな
御屏風歌　前參議俊憲
霰ふる玉野の原にみかりしてあまの日つきのにへたてまつる

拾遺風躰和歌集巻第六

哀傷歌

後一條院かくれさせ給て後月明なる夜　五節
さやかなる月もなみたに曇つゝむかし見しよの心やはする
おなしころ人々おほく世をのかれけるに　中將内侍
今まても世にありへんと思はぬをそむく數にもをくれぬる哉
高倉院かくれ給て後新中納言のもとに梅をつかはすとて　二條院入道左大臣
いかてかくうきよをしらて梅の花ことしもおなし色にさく覽
藻壁門院かくれさせ給ひて後典侍に　光明峰寺入道
いたつらにすきゆく年はめくりきて我身一の秋そかなしき
前左大将頼基卿墓所にまうてゝ　鴨長明
草も木もなひきし秋の霜きえてあとなきこけをはらふ山風
後鳥羽院御時服着ける時　六條院親王
夢の世をよそになしてはおとろけと心のさむる曉もなし
おなし御時御ふくはしめける時　同
身をうしと思ひ初にしふちころもなを色ふかき新にもある哉
九條攝政かくれて後　法印惠炎
夢はなをさむるならひもあるものをうきはうつゝの別成けり

前大納言爲家卿身まかりて後　　爲相朝臣

むかしにもなさしと思ふたらちねのなこりをしらて行月日哉

少將内侍身まかりける時にさまかへて後藤原信實にをくれる　　弁内侍

呉竹のうき一ふしに身はすてつ又いかさまに世をそむかまし

母のはか所うつしけるに　　前大納言伊頼卿母

をくりおきし苔の下たに悲しきに又いつかたに遠さかるらん

平義家（宗イ）かはゝのはか所にて雪ふりけるに　　了一法師

ふみ分てとふへき道もなきあとの苔さへ雪にうつもれにけり

後嵯峨院大納言典侍身まかりけるころ　　爲家卿

いまは我まとろむ人にあつらへて夢にたにこそ聞まほしけれ

前中納言定家卿月次の和歌の會につらなりけるあま身まかりたりければ人々すゝめてけちゑんきやうくやうし侍ける中にあつまより一品をくりける返しにそへて　　定家卿

きゝたゝはまとの道を誰もとへともなひ來つるわかのうら人

無常　　菩提院法親王

いつまてか末のしつくを命にてすゑはにきゆる露をしのはん

拾遺風躰和歌集巻第七

離別

あつまへくたりけるにつかはしける　　隆持卿

たひころもよそにたつ日はつゝくとも契し中に心へたつな

わかれの歌とてよませ給ひける　　中務卿宗親王

かへりこむ月日へたつな立わかれいなはの山の峰のしら雲

難波のかたにくたりけるにみやことりの鳴をきゝて　　後德大寺左大臣

わきもこかうへかたらはん都鳥さこそむかしの人もとひけめ

遠國にうつりけるに別をおしみて　　爲家卿

いく月日幾山川をへたつともわすられぬへき雲のうへかは

入道中務卿宗の御子みやこへのほりたまひて後に奉ける（をイ）　　僧正公朝

ある世にと思ふ計のなくさめやいけるわかれのたのみ成らん

藤原光俊朝臣みやこへのほりける時つかはしける　　中務卿宗親王

み年まてなれしさへこそ悲しけれせめて別のおしきあまりに

題不知　　定家卿

あすもこんまてゝふ道も人の世の長き別にならぬものかは

別の歌とてよめる　　俊成卿

あすしらぬ命をたのむ別ちは秋ともまたしくすのうら風

なけく事侍てこしのかたへまかりけるに古郷をおもひやりてよめる　平政遠
立別となくこしちのはま千鳥あとにいかなるねをか鳴らん
題しらす　藤原隆祐朝臣
思ひとけはとまるは行を慕ふこそ慕なきよりも慕なかりけれ　藤原信實朝臣
行をおしみとまるをさそふ心こそともに別はかなしかりけれ
崇德院とをき御すまひのころ女房ともに申つかはしける　西行上人
水莖のかきなかすへきかたそなき心のうちはくみてしるらん
御返事　崇德院御製
ほとゝきみかよふ心の行はかりなをかきなかせ水くきのあと
わかれの心をよめる　九條前内大臣
いさや又めくりあふへき別れともたのまぬ中にのこる月かけ
藤原爲顯にともなひてあつまにくたりてひとりかへりのほるとて　藤原爲守朝臣
このたひは都におくる泪もなしなみたとなるなあり明の月
百首歌中に　九條前内大臣
白たへのころもの關の秋の月さこそわかれの袖ぬらす覽
中務卿親王都へのほり給てのちよみける　僧正公朝
今はたゝ月と花とに音をそなくあはれしれかし人を戀つゝ
權大納言資經卿とありてあつまへくたりけるに　よみ人しらす
神ませは今かへりこむさかき葉やゆふつけ鳥のひなの別路
大納言爲氏卿みやこへかへりのほりけるに　僧正公朝
なかゐするあまもあれかしこゆるきの急く道とてかへる浪哉
平時治みちのくへくたりなんとし侍りけるに　法印圓雷
鹽かまのうらの詠はとをくともよもきか島にこゝろゆるすな
承久二年をかはりて後女房のもとに申つかはしける歌の中に　家隆卿
都にてきかぬをきゝてかなしきはあら磯なみのあかつきの聲
題しらす　土御門院御製
うつりゆくむかしもとをき思ひ雲の上よりなみのほかまて
別の意を　常盤井入道前大政大臣
あふ坂のゆふつけ鳥もこゑたてつをちこち人のしらぬ別に

拾遺風躰和歌集卷第八

羇旅歌

秋のたひ　前大納言爲氏

行くらすさとのしろへはほろかにて夕日にいそく秋の旅人

里とをき山ちの雲は時雨つゝゆふ日をいそく秋の旅人

前大僧正源恵泉の障子の繪を　雅有卿

くれぬとて入あひの鐘に里とへは關ちの月にさそふ秋かせ

五十首の歌の中に　爲氏

關の戸の鳥のそらねは明やらて夜ふかき月に出るたひ人

良暁法師

鳥のねを里にのこしてあり明の月に越ゆくさ夜の中山

あつまよりかへるとてうつの山にて　法印定圓

露ふかきつたの下みち分過てをかへにかゝろうつの山こえ

都へかへりのほり給ひけるに同所にて　中務親王宗尊

都へといそくは夢かうつゝの山うつゝともなき世にまよひつゝ

あしからの關屋にかき侍る　慈遍法師

明わたる雲の八重山いたつらに月にとまらぬあしからの關

秋のころ大みねにてよめる　法親王覺助

一むらのこすゑを宿の知へにて尾花分ゆくみちのはるけさ

羇中秋　知家卿

ふる郷はとを山すりのかり衣すそ野の露にけふもかはかす

都にすみわひてあつまへくたるとて篠原にて　從一位良教卿女

分てゆく野ちのしの原うきふしてあはれしけきは我身成けり

題しらす　鴨長明

遠からぬつゐの住かをいつくとて野へに一夜をあかしかぬ覽

中務卿親王

たひ人のともし捨たる松の火のけふりさひしき野ちの明ほの

慈光法師

うつりゆくいく夕暮に聞かへてなれぬ嵐にやとをとふらん

後九條内大臣

峯の松汀のなみを聞かへて嵐をみちといくかきぬらん

羇中松風　參議雅經

けふは又野中の松にともなへとなくろあらしそ遠さかりゆく

旅の歌中に　權中納言爲兼

とまるへき宿をは月にあくかれてあすのみち行夜はの旅人

藤原基政

あふ坂のゆふつけ鳥は今そなく都の空は夜ふかかりけり

能因法師

月草にころもは染て都（つイ）人いもをし戀てはつかへる（歸なんイ）なり

那智三十首歌に　寂惠法師

ひとりゆく千さとのはまに日は暮て秋風おくる岩代の松

修行せさせたまひけるにみちにて　法親王[illegible]

しら浪のたかしの濱の磯まくらゆふしほさしてねん方もなし

千首の歌合に　家隆卿

おりしかむひまこそなけれおきつ風夕たつ浪のあらきはま荻

安部經範

しほかなふあさかの浦のおひ風にかちとりあへすいつる舟人

文屋重久

舟とむるみなとやちかく成ぬらん入海見えてむかふ松原

後鳥羽院千首御歌合に　基良卿

舟とむるおきつしほあひの夕なきに遠山うかふ秋のうら浪

題しらす　從三位顯名

故郷のおもかけうかふいもか島月のかたみのうらつたひつゝ

旅泊月　藤原秀遠

松かけの入江の浪に舟とめて木間の月をうきねにそ見る

百首の歌の中に　後京極攝政太政大臣

なみさわくむしあけのせとのかち枕都にきかぬ濱風そふく

寄海朝　後鳥羽院御製

とまりする一夜の契こきわかれをのかさま〱いつる舟人

題しらす　左兵衛督教長

よせかれて沖にほとふる（宿イ）こゑすなり引しほむかふ夜の舟人

三十首歌中に名所を　九條内大臣

ねさめには袖のみなとやさはく覧夜な〱ちかきすまの浦浪

里もなきうらとしりてや旅人のあしまの舟にけふりたつらん

拾遺風躰和歌集巻第九

戀歌

はしめの戀の心を　中務卿宗親王

しられしなまた涙なれぬあま人の鹽くみそむる袖とはかりも

西圓法師

物や思ふ怪しと人にとはるれは知らるへきにはしられさり覧

忍戀　橘範家

かくて我袖のけしきをいつまてかしのふの浦にも汐たるへき

寄煙戀　平政村朝臣

思ひかれ煙を（ヒイ）たにもたつへきにさすかしのふの浦の名もうし（おイ）

忍戀　爲家卿

きえねたゝ蜑のすくも火下もえて煙やそれと人もこそとへ

同　雅經卿

ほには出し蘆のふしはの下みたれ入えの涙にくちははつとも

寄枕戀　爲家卿

かれねたゝ初ほのすゝき手枕にむすはゝ露のちりもこそせめ（方イ）

寄露戀　源雅有卿

あたにのみそのとの葉のちらは又いかゝいはたの森の下露

忍戀　平隆貞

なかれゆく涙のかけをもらさしと月まきかへす袖のしら浪

同題　源景輔

いかにせんなか〳〵人にとはれ覺恐につけてしろきけしきは

欲言出戀　平時成

忍ひつ丶やみなんよりはとはかりに心よはくそ思ひなりぬる

題しらす　藤原通經

しらせはや見せはやとのみ思哉心の内も袖のけしきも

寄涙戀　大江茂重

思ひあまる心の程もあらはれていつはりなきはなみた成けり

初言出戀　平景平

わすれても人にかたるな君にこそ思かれたるいろは見えつれ

題しらす　家隆卿

たか思ひそなたの風にそなれ松さてもかひなくかゝろうら（しイ）涙

基良卿

うきにぬれつらきにしほる袖よ又いかなる色にはては朽なん

不逢戀　寂蓮法師

しぬはかり思ふといへとめに見えぬ心なれはや人のためぬ

同　權中納言公雅

おなし世と思ふはかりのなくさめは哀はかなき身のたのみ哉

思二世戀　鴨長明

我はたゝこん世の闇はさもあらはあれ君たに同し道に迷はゝ

戀爲後世妨　橘範方

後の世のさはりと成らんつらさまて思へはいと丶ぬる丶袖哉

題しらす　俊成卿

戀せすは人は心もなからまし物のあわれもこれよりそしる

寄夢戀　順眞法師

いて人ははかなしといふ夢なれと戀しきことに見えはたのまん

同　爲相朝臣

かよへかしひとりふしみのさ夜枕里の名たのむ夢ちはかりも

津守國助

思ひれの心からなるたのみたにまくら定めてみる夢そなき

良心法師

あふと見ておとろく夢の枕にも人のなみたはかゝらさりけり

中院御製

うつゝにも思ひあはせん折はいつそその夜の夢に見えし面影

弘安百首歌に　後嵯峨院中納言典侍

つらからん心の奥は見てもうしよしやしのふの山のかよひ路

寄川戀　定家卿

なとり川わたれはつらしくちはつる袖のためしの瀨々の埋木

寄木戀　家隆卿

よし野川岩戸かしはのをのれのみつれなき色も浪にかけけり

平義保

なみたせく身はむもれ木のなとり川人のうきせに朽や果なん　藻壁門院但馬

もかみ川いなとこたへていな舟のしはしかほとは心をも見ん　平義村

戀

みるめなきかた田の沖にさすさほの知へもつらきあまの釣舟　平雅藤（雅平イ）

いかにせん[illegible]重たれてわれからぬるゝ袖の浦波　伊豆守盛繼

題しらす

しらせはや波に浮たつうたかたのあはての浦に消かへるとも

老後につれなかりける女につかはしける　為氏卿

くやしくも人の心のあら磯に思ひかけゝる老の波かな

戀の歌とてよみ侍ける　後鳥羽院御製

いたつらに袖や朽なんあふ事のなくさのはまのなみの下草

題しらす　衣笠内大臣

うかりける三島の浦の藻塩火の燃つこかれつ身をつくせとも（やイ）　俊成卿

恨みても猶頼む哉みはつくしふかき江にあるしるしと思へは

寄鳥戀　素暹法師

みかり野やま柴かくれにすむ鳥の音をたにやすくたてぬ戀哉

久戀　源親長朝臣

つれなさを歎かんための命とはなからへてこそ思ひしりぬれ

寄涙戀　橘公久

戀しなん後も涙の身にそはゝいかなるこけの下に（朽イ）なかれん

戀の歌の中に　寂蓮法師

戀しなはあはれとなとかいはさらん定なき世の習ひはかりも

寄月戀　平時治

つらからぬ月にもうとく成にけりくもる涙のせめてうきみは

祈戀　良心法師

今はたゝわか命をや祈らましあらはあふせを神にまかせて

初待戀　平宗泰

僞にいつならひてかまち初るくれさへものゝ悲しかるらむ

祈戀　平時定

時雨るともつれなき色をみせよとは祈らぬものをみわの神杉

月前待戀十五夜　爲通朝臣

さそひこん月にはまけよいたつらにとはて過へき今夜成とも

戀歌とて　九條内大臣

別路につれなきかけはしられともまつ夜もつらき有明の月

和泉式部

なかめすてん限もしらすうきに我たへけるまゝの夕くれの空

寄草戀　平時治

うつゝにて思へはいはん方もなし今夜のことを夢になせとや（さロイ）

夏草の深くは人の契れともしらす心のすゑの秋かせ

別戀　宗親王

又いつかと計をたにいひかれて涙におほふきぬ〳〵の袖

僧正公朝

かへるさをゝくる月たにあるものを別をいそく鳥の聲哉

後朝戀　鴨長明

こえかれし相坂山にあはれけさかへるをとむる關守もかな

あつまへくたるとてみちより都の人のもとにつかはしける　頼基朝臣

忘れすはおなしなかめやかよふとてうはの空なる月な見る哉

寄月戀　今出川兵衛

くもるへき我なみたとも知らてこそ月をかたみと契おきけめ

寄玉戀　爲家卿

誰ゆへに思ふとかしるはつせめのてにまく玉のをのれ亂て

寄帶戀　光俊

下帶のなかくも人をたのむ哉むすふほとくるならひはかりに

題しらす　隆專法師

うきにこそつゐに[illegible]のねをもなけ涙に沈む身をいかにせん

逢不逢戀　慈圓僧正

わすれめや袖引とめて在明に又よといひし人のおもかけ

忍待戀　爲氏

あちきなき心のうちのしるへ哉人にはいはすもすの草くき

尋失戀　定家卿

思ひかねうらの初しまきてとへは人もなきさのあとのうき浪

題しらす　家隆卿

すか原やふしみの里のあれまくらゆふかひもなき草のしも哉

わかれなはいけるへしともいはさりき僞になる我いのちかな

節會夜出させ給御ともにまいり給をのこ公卿にて侍ける人に申つかはしける　新中納言

せめてうき中の契やをみ衣かさす日影をよそにたに見ぬ

寄髮戀　平秀綱

玉かつらいかなるすちになひきてか我をはよそにかけ離る覽

寄糸絕戀　爲家卿

暖はたのあさのうみ糸よるとてもたえにし後はおはん物かは

歎戀　信實朝臣

つらかりしたゝ其まゝの別より又もいとはぬあかつきの鐘

題しらす　和泉式部

身はひとつ心はちゝにくたくれはさま〳〵物のなけかしき哉

遇不逢戀　藤原教綱

さりともと待こしくれはむかしにていのちかくへき僞もなし

絕戀　爲相朝臣

たか契りたかうらみにかゝはる覽身はあらぬ夜のふかき夕暮

恨戀
はかなくてたえにし人のうきよりも物忘れせぬ身をそ恨むる　齋宮肥後

寄忘戀　寂蓮法師
わすらるゝ身をは思はすたつた山心にかゝるおきつしら浪

絕戀　良心法師
これなくは忘れやすると返してしかたみそ今はそへて戀しき

寄風戀　平時治
あともなき人の契りのあさちふにかよふ物とは秋風そふく

恨戀　僧正公朝
あたし野の人の心の秋風にわすれてくすのうらみかほなる

光源氏の物かたりを題にて歌よみけるに柏木右衞門督を　平親清朝臣
かゝるおりもとはれし物をとはかりに聞あかす夜の雨風の音

戀歌　師景
むくひあらは誰かは人につらからん我思ひこそ數ならすとも

戀催道心　道因法師
戀せしと思ひ返してのちの世をなけくにもなをぬるゝ袖哉

拾遺風躰和歌集卷第十

雜歌

題しらす　慈寛法師
さえかへり雪けの雲に吹こめてかすみをうつむ春の山風

朝霞　慈鎭和尚
朝かすみ物おもふ人の袖の色にたへてすむへき春の山かは

月前梅　慈寛法師
袖にしむ梅のにほひにかけとめてなみたもかほる春のよの月

歸鴈　中務卿宗親王
こしかたにかへるはかたき世中にいかにならひて鴈の行らん

花の本にて述懷の歌よみけるに　權律師定顯
そむくへき世のうき時はつれなくて花にそいそくみ吉野の山

述懷歌　法橋恭誓
身にとまるうき世の夢の思ひ出は花と月との春の明ほの

寄夢述懷　慈寛法師
けふこすはあすともいかゝ定へきうきよの夢の夜はの春風

題しらす　惟宗經氏
花よりもあたにおもひし老か身のいのちの内にちるさくら哉

述懷　平宣時
あれはこそ今年も見つれ花よりもおしかるへきは命成けり

花の後よめる　光俊
これそこのかねて思ひしさひしさよ櫻もちりぬとふ人もなし

宗尊親王家三河
何もみなむくゐにきけは先の世の花や我ゆへ物思ひけけん

暮春藤　　　行　俊
田子のうらに咲ちる藤の花かつら夕なみかけて春そ暮れゆく

更衣　　　中務卿親王
かすならぬうき身をとへはなつ衣心やすくや思ひたえまし

卯花　　　小侍従
いたつらに咲てやちらん山かつの身のうの花は折もしられは

五十首歌めされし時ほとゝきす　　　高階基政朝臣
うき身には思ひもよらす時鳥たれにかたらふ初音成らん

藤原基俊女妹
きぬ〳〵の時にきくとも時鳥つらかるましき鳥の聲かな

題しらす　　　六條親王
けふしてもあやめはからす我は只あらぬ音をのみ袖に懸つゝ

性恵法師
霜にたにつれなく見えしあしかもの青葉は夏に落かはりけり

御祓　　　良教卿
みそきするかもの川なみすゝしきは神も秋にや心よすらん

初秋　　　為家卿
時わかぬ老のなみたをおきなから露をは露と秋は来にけり

山家月　　　寂蓮法師
いつまてかふかくてもひとり山里の松のあらしの月をふくよに

題しらす　　　宗親王
あらましの庵のと山の秋の月思ふよりまつすむ心かな

寄月述懐　　　隆専法師
思ひ出る事たになくは秋のよの月みるとても袖はしほらし

無常を　　　尊性法師
雲と成雨と成にしいにしへの人さへつらき秋のよの月

月前述懐　　　藤原為顕
月をなを身のうき時のなくさめと見しよの秋もむかし成けり

擣衣　　　寂恵法師
かくはかり夜をなか月のから衣人やかはりてうちあかすらん

秋歌　　　西圓法師
なか月のなかきわかれはいつならんゆく秋ことになかめ〳〵て

社頭九月盡　　　僧正公朝
みむろ山いかきにはへる葛の葉のかへる秋をは神もとゝめす

十月一日に　　　和泉式部
けふは猶陰こそなけれかき曇り時雨こゝらにいつもせしかと

時雨　　　藤原為守
聞たひにさそはれやすき涙哉我心をもとめぬ時雨に

平義村
山かつのかやふく軒のむら時雨をとせぬまつそ淋しかりける

都へのほりたまふとて　　　宗親王
わかとや友なし千鳥むかしにもあらすなるみの方になく聲

島千鳥　良教卿

とたえかみむかしのあとた尋ても身をうき島になく千鳥哉

百首歌の中に　法印親恵（觀イ）

れのみなく身たうき島の濱千鳥いかなる方にあとたとめまし

題しらす　家隆卿

こすゑゆくふゆのたかれの夕月よさすかに白き霜のかけはし

雪　平政遠

とはれてもならふ身なくはいかはかり雪の農に人はまたれん

歳暮述懐　順（信イ）心法師

いそくへきかすにもあらぬうき身さへなをとしけき年の暮哉

述懐　親ゝ法師

うき身にも變らす積るならひこそよしなき年のなさけ成けれ

家隆卿

老か身の（世イ）うき身は春にすてられて又あら玉の年もいそかす

曉述懐　六條親王

夢の世をよそになしてはおとろけと心のさむる曉もなし

曉　式部大輔廣範卿

あはれけに夜ふかゝりけるれさめ哉今こそ鳥の聲は聞ゆれ

五十首歌中に　法眼道譽

何かさて命まつまの思出と老のねさめの心にそとふ

題しらす　寂恵法師

うき身をはなかむる人のかすにたに空にや月の思すつらん

名所述懐　隆祐朝臣

難波かたあしまにやとる月はなをしつむと見るも光ありけり

保元の亂に崇德院御くしおろさせ給ひて仁和寺に

おはしけるころ月のあかき比夜るまいりて兼賢法

師にあひてよめる　西行

かゝる世に影もかはらてすむ月を見る我さへにうらめしき哉

熊野三十首　信正公朝

いにしへは明ゆく空の月にいみかたふく影をなけきてそ見し

月の歌おほくよみけるに　覺蓮法師

何となくあけぬとつくる鳥のねもうらめしきまてすめる月哉

百首歌中に　安嘉門院四條

心なき身にも涙のこほるゝや岩木の山のしつく成らん

九條内大臣家五十首歌中に　隆祐朝臣

世の中の人にしらるゝ山なれはよし野の奥も身をやいとはん

名所瀧　爲通朝臣

山たかみよこきる雲のたえ〳〵につゝかてさらす布引の瀧

景昌法師

みな月のてる日にいくかさらすみんほそく成行布引のたき

五十首歌中に　林勝法師

鴫とりのうきねを忍ふもかつまたのいけらん程と思ふ計そ

題しらす　道因法師
玉のえのあしかくれなるむもれ橋ふめはと絕のあらはれに見
隆祐朝臣
なかれこし昔や遠きわすれ水うつすはかりのかけもたえつゝ
寄水述懷　源仲正
いかにせん世をうみきはの磯し水鹽滿ぬれはかゝるすみかを
日吉社百首歌に　隆祐朝臣
ふく風にちらぬ木の葉もうかひけり水のくたせるうらの柴舟
百首歌中に　同
大井川むれゐる鷺のたつあとをあさせと知てわたるたひ人
西行上人ゆかりなるものかしこまりをかうふりて
けるをめし給へと申けるに　崇德院御製
もかみ川つなて引ともいな舟のしはしの程はいかりおろさん
題しらす　藤原秀能
袖ぬらすをしまの蜑のかり枕(ちイ)かくてはいかゝすみはしめけん
眺望　爲家
はるかなるみなとの沖のはなれすに鹽風かけてとまるしら浪
六帖の題中に　同
入うみのせとの島なる高岩にうは浪よせてあるゝしほ風
十首歌中に　平貞房
松かれの下岩かくれよる浪のかへるそみゆる磯の山みち

法印定圓
いかにせん難波の事も物うくてあし火たくやのすゝまれぬ微
弘長百首歌に　爲氏
よしあしもわかぬなにはの澪標よの人かすにあるかいそなき
三百首歌に　隆專(守イ)法師女(充イ)
數ならぬみほの浦はのいさり火をさこそは人の思ひけつらめ
後鳥羽院より親のあとあるよし仰たりける次に　隆祐朝臣
閑たひに老のなみたもさそはれてみち吹たえぬわかのうら風
弘安百首歌に　藤原爲賴朝臣
わかの浦やしつみはてにし捨舟の今人なみに世にひかれぬる
寄浦述懷　西圓法師
跡方もいつとは見ゆるわかの浦にいるへき汐や引たかへけん
東にくたりける比僧正公朝百首題をさくりてよみ
けるに寄舟述懷といふ題にてよみ侍ける　爲世卿
このたひは我もうかれてあま小舟風のたよりを待そくるしき
題しらす　爲繼朝臣
後世のさはりまてこそかなしけれあし分小舟さても朽なは
鶴　大江賴重
玉もかるしほひのかたにたつなきて夕日かすめるわかの松原

海邊松　藤原倚保
しほみてはつゝかぬ磯のはなれ松ねはふ岩さへ涙そこえゆく

松閑居友　二品親王
むかひゐていくとせ過ぬこの山のあるしもひとり（よイ）松も一もと

閑居松風　法印三智
さのみなとさひしかれとはしほるらん老のねさめの峯の松風

檜原　藤原光盛
雲のゐるあなしの山はみれはれてひはらかすゑそ空に殘れる

題しらす　長有朝臣
つたへおくその葉にこそかゝりけれ親のなしへし道芝の露

述懐歌に　後嵯峨院御製
みちあれとなにはの事をおもへともあし分小舟末そとならぬ

寄鏡述懐　僧正公朝
昔をも今をもかけててらすこそくもらぬ御代のかゝみ成けれ

王昭君を　定家卿
うつすとも曇あらしとたのみてし鏡のかけのまつつらき哉

續拾遺によみ入しらすと入ける歌の名をあらはさてよめる　智圓法師
あらはれて今はくちせぬなとり川身をむもれ木となに思けん

題しらす　俊賴朝臣
なにも〳〵いひてもいはんけふもけふ思ふ思ひの積る積りを

前大納言忠良卿
憂身には人のつらさそなかりけるとはりとのみ思ひしられて

明教法師
うかれたゝなからへはてぬ世中に心のとまる人もこそあれ

述懐　藤原秀實朝臣
心からなになけくらんよそに見はおしかるへくもなき我身哉

同　爲家卿
うき事もよし歎かしとなくさむる心につけてあはれこそゝへ

無常　[illegible]按察使
されはして苔の下ともたのまれすうき名を埋む習ひならねは

平時高
うきなから有にまかする世中をたのめはこそは人やみるらん

左近中將經通卿
行末をいかなるへしとしらぬこそ中々人のだのみなりけれ

三善宗倚
いにしへは今をもさこそ思ひしか又行末となにたのむらん

寄涙述懐　衣笠内大臣
思ひこし我あらましのゆくすゑは袖に涙のかゝりける身を

前參議雅有卿
思ふ事たれにかたらんなけきある人こそひとの思ひをはしれ

述懐　法眼隆曉

なさけなき人もや袖をしほらまし身のうき事を語りつくさは
法印覺寬

わひつゝも過にし方たいかゝせんこれより後の思ひ出もかな
宗尊王

報ある身をかへりみてまくすはらたゝさきの世に秋風そふく
兼頼朝臣

人とかくむまれたる身のうれしさをいたつらになす我心哉
行家卿

述懐

今まてはなにゝ心のとまるそとよそにみるらん人もはつかし
平政行

述懐

うき時は厭ふへき世といひなから身をいたつらになす心哉
雅有卿

まつ事のある身成とも今ははやそむくへき世を出かてにして
素暹

ひとすちにいとふそかたき世中のうきをはりは思ひしれとも
敬（西イ）心法師

行末をたのむ心はなけれともさすかうき世のいとはれぬ哉
西行

鳥羽院に出家のいとま申とて

惜むとも惜まれぬへきこの世かは身を捨てこそ身をは助けめ
鴨長明

あれは厭ふそむけは慕ふかすならぬ身と心との中そゆかしき
有家卿

秋述懐

人とはゝ柴のあみ戸をさしあけていつるみ山の秋とこたへむ
法眼深（源イ）承

とにかくにかすにもあらぬ露の身はすてゝの後もおき所なき
慈覚法師

背きなはやすかるへしと思ひしに捨てそいとゝうき世成ける
公雅卿

寄筏述懐

いかたしも我にをとへ水上のうかりし瀬々はいかゝ過しと
寂恵法師

題しらす

ともすれはものわすれする老の身の心にあるはむかし成けり
九條内大臣

懐舊

大方のむかしの事のいはれにて我見し世こそ先戀しけれ
爲家卿

何事もきけはむかしのしのはれて思あはする今そかなしき
全心法師

うき身にはしのはれしとや思ひ出もなくて昔の遠さかるらん
爲守卿

題しらす

思ひ出のあらはましてとおほゆるはかくてもしのふ昔成けり
基[illegible]

思ひてのありて昔をしのふかととはれは人にいかゝこたへむ
西行

何事もむかしときけはなさけありて故あるよしに忍はるゝ哉
　　　　　　　　　　　　　津守國助
何としてくらすともなき月日哉積るはかりを身にかそへつゝ
題しらす　　　　　　　　　大僧正大寶
老か身にうき世の事のなくさむは今いくほとゝおもふ計そ（時イ）
　　　　　　　　　　　　　藤原行俊
老をさへなけくもくるし数ならぬうき身のあたは命成けり
　　　　　　　　　　　　　寂俊法師
よそならは哀といかに思はまし我か身の老は知られさりけり
　　　　　　　　　　　　　光俊朝臣
五十まてうつゝに見つる夢の世はかれて思ふにあふ事そなき
山家嵐　　　　　　　　　　中務卿宗親王
山里は松の嵐の音こそあれ都には（イ无）にすしつか（閑イ）なりけり
文集の歌に草堂深鎖白雲といふ事をあそはしける
　　　　　　　　　　　　　土御門院御製
谷ふかき草の庵のさひしきは雲のとさしの明かたの空
山家　　　　　　　　　　　西　行
とふ人も忍ひたえたる山里のさひしさなくはすみうからまし
　　　　　　　　　　　　　眞照法師
ふりにける軒はのかけひかたふきてまかせぬ方をつたふ山水
樵夫　　　　　　　　　　　宗親王
見わたせは爪木の道の松かけに柴よせかけてやすむ山人
樵路夕嵐　　　　　　　　　爲家卿
はるかなる爪木のみちの夕暮に嵐をおひてかへる山人
　　　　　　　　　　　　　知　家
鴈の來る峯のしら雲分すてゝをのか一（つイ）むらかへる山人
　　　　　　　　　　　　　法眼顯照（明イ）
おとろかすほとこそ秋の小山田は人なきよりも淋しかりけれ

神祇歌

八幡宮にこもりて　　　　　僧正公朝
白たへの鶴かをかへにうつり來てむかしのあとの袖の月かけ
同社にて雨を祈てふりけれは　藤原基綱
めつらしき軒にしつくの音すゝ君か手向を神やうけゝむ
四國の方へ修行すとてかもの社にまいりて　西　行
かしこまるしてに涙のかゝる哉又いつかはと思ふあはれに
夜な〳〵かもへ百日まいりて侍けるころ千とりの　雅　經
なくをきゝて
人しれす思ふ心の友千とりなきこそわたれかものかはらに
　　　　　　　　　　　　　式部大輔廣範卿女
くり返したのむ心をあはれとも神にみかきのもりのしめ縄
大原野社　　　　　　　　　兵衛督藤原教定

をしほ山しらぬ神代は遠けれと松吹風にむかしをそきく

法皇住吉社に御幸侍るに　西谷關白

めつらしき御幸にゆつれすみよしの神のまゝなる松の千年を

後法性寺入道前關白大政大臣時百首の歌に　俊成卿

しきなみにたのみをかけしすみよしの松をや今は思すつらん

平政長

あとたるゝ神となりても式島の道やあはれとみそなはすらん

爲氏

仰きこしをひえの山のかひありて杉のしるしを我身にそしる

鳥羽院御時無實を女にいひ付られて小野にこもりてよめる　仁俊法師

あはれとは神々ならは思ふらん人こそひとをなきになすとも

性女法師

わすれすよ川音たかき岩かれの苔路の末の神藏の宮

寂蓮法師

何方をわきてそれともいのられは心やすくや神はみるらん

美濃南宮にたてまつりける　能因法師

乙女子かとる神かきの榊はゝ八千世つはきにいつれまゝらん

釋教歌

弘法大師

さとりとはさとらて覺るさとりこさとる覺りは夢の覺りか

花嚴經　中務卿宗親王

いつくにも春はきぬれと朝日さす高ねよりこそ雪はきえけれ

阿含經　寂雲法師

秋草のふかきみちとも聞えぬや鹿なく野邊のをしへ成らん

方等經　俊成卿

聞そめし鹿のそのにはとかへて色〳〵になる四方の紅葉は

三聖往生　壽法師

みよし野の水分山のたきつ瀬も末はひとつのなかれ成けり

聞名得益　光俊朝臣

山川の岩うつ浪の音ならて又は心のすむ水もなし

一遍上人

西へ行山の岩ねをふみなれは皆こそ道のさはり成けれ

水火三川の喩をよめる　僧正公朝

西へ行道は一すち有物を煙も波もかけはかけなん

教外別傳不立文字　遁世法師

そこそとも敎もをかぬ道なれはふみしる人のさそ迷ふらん

圓覺經始知衆生本來成佛　忠遠上人

月の行うき世の外を尋ぬるは物をおもひし心なりけり

慧可禪師の傳をみて　後一條入道前關白家

身をすてゝ雪のうちにも尋すは心つたふる道やたえまし

按察使隆衡卿法の事をとはるゝ返し　心海上人

まよはぬをまよふと思ふ心よりほかに御法はなしとこそ聞
朝譽法師
物ことにそれとまかせて過行は心はつれに靜成けり
一遍上人
跡もなき雲にあらそふ心こそ中々月のさはり成けれ
不應取法不應取非法　光俊朝臣
いたつらに月をのせてそかへりける浦風さむき夜はの釣舟
色即是空　淨意法師
水底にやとれる月を有とみてとらはやとらむ猿澤の池
せんさい上人
くまもなき月をうつしてすむ水の色も空にそかはらさりける
法花序品　久我内大臣
法のためのへし太山の苔むしろ先色々の花そ散しく
方便品唯有一乘法　寂然法師
二木とも三木とも誰かいひをきし一御法のたけくまの松
譬喩品　僧正道瑜
小車のみのかさま〳〵出しかとひとつ道にそめくりあひぬる
信解品　式部大輔廣範卿
けふそみる五十あまりの春をへて別しまゝの故郷の花
化城品　光俊朝臣
行えしといひてそつゐに歸らましひなの長路に宿なかりせは

授記品　平時國
行末はつゐに佛のくらゐ山かひある名をやけふは聞らん
人記品　平久時
木間より出てすむへき月影を松にきかする秋風の聲
寶塔品　大江定秀
月もさそ照まさりけん鷲の山三度きよめし跡の光は
提婆品　法印上智
苔深き山ちの霜をふみ分て氷をむすふ袖そさむけき
勸持品　後鳥羽院下野
うらみつゝ波にしほるゝあま小舟つゐにかひある道は迷はす
涌出品　宗親王家小督
もえ出る野へはさなから緣にてそのゆかりともしらぬ若草
分別功德品　平宗泰
かきなかす山の岩ねの忘水いつまて苔の下にすみなん
不輕品　後嵯峨院御製
哀なりうきもつらきもきゝなからたへ忍ひける人の心は
藥王品　寂蓮法師
今そおもふかたをかやまのすて人も身をつくしける裳の袖
普門品　平宣時
あしかれと人をもいはし難波かた我身のとかにかへる浦波
陀羅尼品　法印圓會

行かへる雲のかよひち遠くとも乙女の姿身をはなれし

莊嚴王品　　爲通朝臣

深山にて光はれけるいにしへの月やなれにし人さそふらん

普賢品　　宗親王家三河

くもりなき法の光のさしも草露のうかひもちえやのこさむ

不說普現顯如來意蜜　　圓空上人

ことに出ていはぬ計そ山吹の花のひもとく色はみえけり

藤原業淸

高野山なをやみ深き木間より曉いそく有明の月

不動一時秘密咒生々而加護　　法印圓會

むまれてはおかぬすかたにかはるとも一度憑む我を忘るな

打もねすよひ〳〵とに尋みてまとの道は關守もなし

【右拾遺風躰和歌集以祕閣本校合】

續群書類從卷第三百七十一

和歌部六

安撰和歌集卷第十

戀

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　阿闍梨寛杲
思ひ知る人にしあらはつゝみかれ顯れぬるもなけかさらまし

人のもとへつかはし侍ける　　　　　　　　　　延壽まろ
もらさすはせめて賴もありなましかくといひても厭るゝ身は

咲そめにける紅の梅を人のもとへつかはすとて　法印親瑜
香こそはいはまほしきに梅の花さきたちてこそ色に出けれ

五月五日に菖蒲を人の許へ遣はして　　　　　權少僧都仲寛
いかてかは袖(袂カ)にかくろなかきれをいふさへ君かとはて過さん

かへし　　　　　　　　　　　　　　　　　　　彌若まろ
菖蒲草あやめも知すいかてかは時にかけたるれをはとかめん

寄菖蒲戀といふ心を　　　　　　　　　　　　前僧正光譽
人めにはあさかの沼のあやめ草

〔題闕〕　　　　　　　　　　　　　　　　　　御々仁麻呂(古名隆範)
思ひやれ人めしのはぬ中たにも戀はくるしきならひならすや

同し心を　　　　　　　　　　　　　　　　　　幸若まろ
もらさしとしのふもくるし今はたゝあらはれぬまの命とも哉

戀しなん後こそせめて思ふともいはて過ける身そとしられめ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　權律師幸範
おのつから戀すと聞と人とはゝなき名といひて忍ひこそせめ

寄枕戀と云心を　　　　　　　　　　　　　　　法印成嚴
我たにもゝらさぬならは知るとても枕は物をいふならひかは

戀の歌の中に　　　　　　　　　　　　　　　　法印隆雅
いはぬまはつらさもなくて人しれす戀しきにのみぬるゝ袖哉

しのふこそ中々戀のたのみなれあらはれはもし思ひしるやと

忍經年戀といへる心を　前大僧正成惠

戀わひて年經ぬる身とかこつともいはてすくせは疑ひやせん

人のもとへ忍ひてつかはし侍ける　かゝまろ

いかにせんよその人めを忍ふとて君にもかくといはて過ぬる

題不知　前大僧正成惠

やとからや軒はにしけるしのふ草くさもあるしの心しりけり

法印成厳

今そしるつれなき人を忍草戀のたねよりおふるものとは

當寺鎭守宮十五首歌合に忍戀を　松壽まろ

いかにせん其名をたのむかひもなし忍ふの草も露そこほるゝ

同し心を　權少僧都有譽

なみた川しのふ隱れに行水のおとにはたてしせきかへすとも

春菊まろ

泪をもさのみおさへし行水もせきとむるにそ淵となりぬる

法印隆雅

吾戀は深山の谷のうもれ水人こそしられしたむせひつゝ

歌合の時寄舟戀を

おひしける芦間を分て行船のよそには見えぬ身はこかれつゝ

寄草戀といふ心を　阿闍梨政憲

我袖は波の下草したにのみたゝいたつらにくちやはてなむ

寄瀧戀を　法印寛海

こひすとは人にもいはておとなしの瀧つ白波くたけてそ思ふ

忍戀を

吾戀はいはての山の下紅葉上には色にいてぬなりけり

寄獸戀を　法印成厳

秋ふけて深山にふかくいる鹿の人にしられぬ戀もする哉

當寺鎭守宮十五首歌合の時忍戀を　千代まろ法名隆成

身をしれは時雨にそまぬ松かえの色にいてぬも哀れとそ見る

阿闍梨則譽

かみな月しくるゝころの空よりもしのふ涙のはるゝ間そなき

寄時雨戀といふ心を　法印隆雅

かみな月袖は時雨にかこたれて涙つゝまぬころもありけり

戀の歌とて　前大僧正成惠

いかにせんなみたしくれて思ひそむ心の色を人やしらまし

覺敎法師

おさへてもかひやなからん袖さへに戀の涙の色になりぬる

權僧正寛伊

いはれとも色にしらるゝ吾戀はたえぬけしきと人や見るらん

覺照法師

しのへともさすかに人もしりぬらん物を思はぬ身の姿かは

阿闍梨賴眞

しのふには思まされは中〳〵につかみ(つゝみ歟)かれてや人にしられん

竹一まろ

あちきなく今はかくとやしらせまし忍へはいとゝ戀そ苦しき

法印寛海

憂人のためと思ひて忍はすは身をはわすれていひいてなまし

歌合に　法橋慶賢

さすかまた忍ふ日數のほとふれは思ひよはりて名は立ぬへし

題不知　厳源法師

忍ひかぬる吾身をおきてはかなくももるゝ涙をかこち社すれ

權律師寛惠

おさへかね袖の涙と諸共にもれぬるものは浮名なりけり

題戀を

［　　　　　］人の心のかはりもやせん

うきならなるもらさしものを忍へともたえぬ涙のなき世へけり

題不知　阿闍梨寛賓

〔欠首〕

安撰和歌集卷第十四

戀歌四

逢戀の心を　法印寛海

かはらしと共にちきりを結ひても打とけぬるは夜はの下ひも

契りしはいつはりならんまことゝも逢見る今そ思ひあはする

前僧正光譽

月前逢戀を　法印成厳

思ひきやとはてふけぬと嘆ちてもうかりし月を共に見んとは

月前忍逢戀といふ心を　法印隆雅

人め忍ふあふせなれともくもれとは思はれもせす秋の夜の月

千喜久まろ(法名成盛)

あふ夜さへ忍ふ中とてあちきなく涙に月をやつしてそみる

みちとほりけるに人のかとにわらはのたちて侍けれはいかにやといへは聞ぬ顔にてうちに入にけるにあひ知れる人のもとなりけれは人を倖はして尋ねけれともなきよしをこたへけるに　法印親瑜

むら雲のひまに行月のかけなれや見えてもまたかくれぬる

かやうにいひいれて侍けれは。このわらはやかていてあひにける。

歌合し侍ける時逢戀を　前大僧正成惠

うつゝとは心まよひにわきかねて逢みる夜半も夢かとそ思ふ

題不知　實法まろ

よしさらは現といひてなくさまんあふとみえつる思ひねの夢

法印隆雅

自からあふと見えつる其夢のおとろかぬ身となりもはてはや

阿闍梨頼眞

よな〳〵は我思ひねに見る夢のさむるそ人のわかれなりける

權僧正寛伊

おとろかす鳥のなくねは逢と見る夢にも人の別とそなる

法印成嚴

待わひてふけぬとかこつ鳥の音のわかるゝ時もつらきあか月

前僧正光譽

曉の八こゑのとりもいにしへのうき別よりなきやそめけん

明方は月にもしろし別れ路に鳥の音のみと何かこふらん

月前別戀といふ事を　法印寛海

わかれ行袖の涙の露ちりて月たに影をとゝめさりけり

月をかたみと人のいひける　かゝまろ

おのつからのちにしるへきかたみさへ別につらき有明の月

人のもとより夜ふかくかへりてつかはし侍ける　彌若まろ

かへるさの月はなみたの影さへて心のやみにまよひぬる哉

返し　權少僧都仲寛

おき別れむなしき床にひとりゐてつれもなく〳〵月をみる哉

嵯峨なるところへ人のおくりにまかりて後に遣はし侍る　權律師幸範

わけてこし嵯峨野の原の露よりも猶袖ぬらす我涙哉

返し　かなまろ

もろ共にわけしさか野にとまりゐて露よりふかき涙とをしれ

ものいひけれとかへりともせぬ人のもとへつかはし侍ける　寛尋法師

今は早露の命もきえよとや言の葉にたにかけぬきみ哉

人のとはすなりて侍けるに　春王まろ

つれなさの袖の涙の露をのみかたみにおきてとはぬ君哉

戀の歌とて　法印能意

袖にのこる涙の露のかたみをも猶とめしとや秋風のふく

法印寛海

限りなく身にそしみけるうき人の心にすさむ秋の夕風

權僧正寛伊

かすならぬ身を秋風のいつよりか人の心に吹はしめけむ

前大僧正成惠

わすらるゝ我は涙の袖の月人はくもらぬ影そみるらん

前僧正光譽

うき人の面影やもしとまるらん月さへみれはなみたなりけり

月前戀を　法印隆雅

おのつからなくさめとてやひとりねの枕にやとる秋の夜の月

戀しさの心のほかはおもふとなく〳〵みつる夜半の月影

心あるさまなる人の心つよかりけるに月の夜いひ

てつかはしける　法印親瑜
うき人の心は月のかけなれやありとはみえてとられさるらん
題しらす　千喜久まろ法名成雅
うき人も見るらんものをこれのみやおなし心の夜半の月影
僧正良伊
われはかり同しそらそとなかめても心かよはぬ月そかなしき
金壽まろ
とほさかる人に雲井をへたつれと猶身をさらぬ袖の月影
權僧正寛伊
身にそふもうしとのみこそ嘆ちけれつらきかたみの有明の月
惠印法師
わかれ路にかこちしまゝのなかめにて今も涙の有明の月
阿闍梨頼眞
思ひ出る其面影やおのつからつれなき人のかたみなるらん
阿闍梨寛嚴
忘られぬ面影はかり身にそへてつれなき人はうとく成つゝ
前僧正光譽
うきふしはなれにし時のつらさにてよそになる身の形見之皃
せめてさらはうき例にも思ひてよ忍はれぬへき我身ならねは
前大僧正成惠
其まゝに絶けるものを後にこそまた恨みめと何思ひけん

つらくなるまゝにはせめてかはれはと人の心をなをたのむ哉
戀しともうらめしやとも思はれてとにもかくにもぬるゝ袖哉
なきもするまたもえもする夏蟬の螢もよそのものとやはみる
涙にももゆる思のたえせれは水の上にもほたる有けり
阿闍梨教眞
物思ふ類なるへき夏虫も夜はかりこそもゆるとも見れ
阿闍梨公瑜
あはれとも人やみるらん終夜もゆる螢に身をもなさはや
法印寛海
よそにてもあはれなるへき我戀をなとかは君かつれなかる覽
物思ふ身にこそあらめ人めにもあまるはかりの我涙哉
法印成嚴
いつとなく袖に涙の雨そふるはれぬ思の身となりしより
うたかひし我心のみまことにてまことゝいひし人そかはれる
うきふしと中々なりてよしなきは情をかけし人のいつはり
春鶴まろ
うれしとも何思ひけんちきりしは唯ときのまのなさけ成けり
法印隆雅
僞を何かなけきしたのむなといひしまことは猶うかりけり
眞増法師
忍ふこそ中々戀のたのみなれあらはれはもし思ひしろやと

安撰和歌集巻第十五

戀歌五

歌合し侍し時遇不逢戀を　法印隆雅
うつゝともわきかたかりし俤をまたみぬ夢となしやはてなん　前大僧正成惠
中／＼にあひ見しよの夢ならはうつゝをたのむ我身ならまし　法印寛海

題不知
おとろかす便なけれは今ははやみしよの夢になしそ果ぬる　前大僧正光譽

契變戀を
契しは夢になしぬるうき人をうつゝなしとやうらみやらまし　千喜久まろ法名成雅

戀の歌とて
うかりしにまた思ふそといふもうしかはる心の程もしられて　法印隆雅

忘戀を
契しにかはるつらさをうらみすは吾も忘るゝ名をやたゝまし　法眼成源

當寺鎮守宮五十番歌合に
またいつと契る迄こそかたく共忘るやとたにせめてとはゝや　麻尼憧まろ

契變戀の心を
さのみにも契りしをはわすれしをうたてや人のとはす成ぬる　法印成厳

戀の歌とて
ちきりしをまことゝ深く思ひしは身のほとしらぬ心なりけり　權少僧都勝玄
かはりはつる人の心を恨むるは身のほとをさへわすれける哉　千喜久まろ法名成雅
いつはりの心ならひにわするなと我にも人はちきりおきける　阿闍梨隆譽
かれてより人はしりけん偽りを今そ我身はおもひあはする　春光まろ
何となくなさけにいひし言の葉はたのめとまては人は思はし　玉満まろ
ことの葉の情も身にはありけりとその偽りそ今は戀しき　法印成厳

夕戀を
音信のありても物のかなしきは思ひたえよとかける玉章　春夜叉まろ
たのめしをまつとはなくてかなしきは思たえたる夕暮の空　權少僧都實舜

當寺鎮守宮十五首歌合に絶戀を
とはてのみ月日たちゆく戀ころも袖はしかぬる涙なりけり　僧正良伊

寄水戀といふ心を
たのみなき人の心のわすれ水かはるへしとはくみてしりにき　法印寛海

戀の歌の中に
うき人の影をたに見すあふとはさてもかくてや山の井のみつ　法印成厳
たえはつるうきなをそたつあふとは今はなくさの濱の白波

權僧正寛伊

我戀は荒磯波のうつせ貝思ひくたけて身をそ捨ぬる

法印隆雅

つらしともさのみはいかゝいはみ潟恨むる袖に波はかくとも

阿闍梨賴眞

いかにせん我袖にのみ波こえてかはる契りの末の松山

久戀を　春王まろ

吾袖は波こす磯のいはれ松いくたひぬれてとしのへぬらん

絕久戀　前僧正光譽

のきうゑし松と契りし中絕えてこたかきまても人そつれなき

歌合に

年月は猶さりともとたのみつる命も今は絕はてぬへし

題不知　權僧正兼憲

今迄にいけるもつらし存命へてあれはそ人のかはるをもみる

法印隆雅

忘られは戀しぬへしといひしこそ我いつはりと今はなりぬれ

彌壽まろ

命こそうき人ゆゑにおしまるれ同しよにあるたのみはかりに

かゝまろ

同し世のかひもなけれは今迄にいきてありとは人にきかれし

增王まろ

いきて猶人のつらさをなけゝとや惜からぬ身のよに殘るらん

靜海法師

よしさらは我身のとかになしはてん人はうらみん便たになし

當寺鎭守宮十五首歌合に絕戀を　若一まろ

いまはゝやきそのかけはしふみたえて戀渡るへき便たになし

權僧都有譽

神にかけてかはらしとちかひける人のたえはてに

けれはいひつかはし侍ける（わ歌）

末たゆる身をはうらみし神たにもいたしもはてぬ久米の岩橋

これかれ歌合し侍しとき　愛代まろ法名興雅

吹風の便たになしうき人にはなれにしまのあまの捨舟

戀のうたとて　春慈まろ

あたなりや跡なき波の沖津風行へはいつちあまの捨舟

阿闍梨賴眞

いかにせん行へもしらて身にそしむ八重の鹽路の沖津秋風

實印法師

露も波も吾身にしれはあはれなり野島のあまの袖の秋風

伊平卿家歌合に絕戀　權僧正寛伊

空たにもうらみしものをまれにみし庭さへ今は野への秋風

戀の歌の中に　法印親瑜

吹風にうらみしほとの便たにかれてあとなき岡のくす原

愛代まろ法名興雅

思ひわひうらみは末もかれ〳〵によはろは野へのくすの下風　法印寛海

秋ふかき岡のまくすの打みたれたろ心（か歟）より風さはくらん　権少僧都道寛

毎年馴恨戀といへろ心を

年毎に秋風かよふま葛原なれてうらみのなほまさろ哉　法印隆雅

祈恨戀といふ心を

我祈ろ神なひ山の葛かつら長きうらみと秋風そ吹く　僧正良伊

寄草戀を

うき人のうらみぬ草のたもとたに秋風吹けは露そこほろゝ　前大僧正成惠

寄虫戀

言の葉の及はぬほとの恨みにやものをもいはて虫の鳴らん

歌合に寄筆戀を

うらみわひかきあつむろともしほ草筆も及はぬ我思哉　權大僧都慶親

老後猥戀といふ心を

老の波袖にかけつゝから衣かへす〳〵も我そうらむな　阿闍梨頼瑜

切恨戀を

うらめしといはれもはてぬとの葉の末はさなから涙なりけり　阿闍梨頼還

戀の歌とて

ことはりと思ひなからもかなしきは數ならぬ身の恨なりけり　前僧正光譽

數ならぬ身の物思ふはてなれは深きうらみとなりにける哉

恨戀を

うきとのむくひもあらは後のよに我つれなきを人やうらみん　法印成厳

安撰和歌集巻第十六

雑歌上

初春の心を

のとかなろけしきにしろし吾君の國おさまれろ千代の初春　權僧正兼惠

春の歌の中に

かすますは春ともいはしひさきおふろ片山かけの雪の深さを　權僧正寛伊

雪ふかき吉野の奥にすむ人は花さくころや春をしろらん　前僧正光譽

鶯を

をさまれろみ代のとかなろ春なれは殘らすいつろ谷の鶯　前大僧正成惠

閑中鶯といふ心を

春かすみたちまふ人もなきやとに心ありても鶯そなく　權大僧都慶親

行路霞を

へたゝれろみちのあさあけはろ〳〵と霞をきはに行末の山　法印隆雅

歌合の時古宅梅を

なかめつゝすきこしかたはいく春そ年をふろやの軒の梅かえ

古寺梅を

春毎に年ふろ寺の軒の梅をらて佛のたむけとそなろ　愛王まろ（法名頼遍）

待花　　阿闍梨光信

いのちあれは今年も今になからへて花まつ比に又なりにけり

寄花述懷といへる心を　　權大僧都光海

たくひつる老木も花はさきにけり吾身はかりそ春のかひなき

題不知　　前大僧正成惠

みる度にむかしの春そ忍はるゝ誰かうゑけんしかの花園

ならのみかとの御うた

ふるさとゝなりにしならの都にも色はかはらす花は咲けり

此歌は平城天皇の御歌となん。此大同の天子は弘法大師の御附法のよし。或物に見えて侍るゆゑに此集に入て侍る。結緣灌頂をうけたまへるといふ說あり。

那智にこもりて侍ける時に　勅請によりてまかりいてゝ侍けるに小野曼荼羅寺の花をみて　　權僧正範俊

おとろへぬすかたとそ見る住なれし我古寺の花のかほはせ

行路花を　　權少僧都仲寛

おのつからやつるゝものと成やせん往きにたをる道のへの花

人の家の庭に花のありけるを一枝こひけれともぬしのをしみ侍けるに　　圓賓法師

おしめともつひには風のさそふよになさけにたをれ花の一枝

かやうにいひいれて侍けれはぬしゆるしにける。

みちとほり侍けるに花を見て　　法印成嚴

立よりていさ一枝はたをらなん花をかさには老かくるやと

題不知　　法印親瑜

あはれなり花も吾身ももろともに老木の櫻いつまてかみん

花の歌とて　　前大僧正成惠

世中をいとはすとても同しくはみやまのおくの花をこそ見め

法印成嚴

花ゆゑにとしもいりぬ吉野山　つかはわれとよをはすつへき

隱遁ののちすみ侍けるところの花をみて　　權律師隆嚴

世中をのかれてこゝに住なから花をはえこそいとはさりけり

心の外にと侍りてみやこのほかにこもりゐて侍し時庭の櫻の風にちるをみて　　僧正良伊

かくれかにすまふとならは吾宿の花をは風にしらせすもかな

當寺鎭守宮十五首歌合に　　權少僧都淳惠

よをいとふ吾ともならは山櫻花もあらしの風にのかれよ

歌合の時見花を　　前僧正光譽

のかれとうきよの外となるものは花みる時の心なりけり

花のうたとて　　阿闍梨賴眞

よの中にうきはなくさむ花見てもまたなけかるゝ春の山風

法印隆雅

花にわれ命にかへは見る人の数ならぬ身もあはれとやせん
　はなはしめるをはてにてなかめをかけてときの歌
　よめと人のいひけれはよめる　　僧正聖寶
花の中めにあくやとてわけゆけは心そともに散りぬへらなる
　題不知　　僧正良伊
春きてもとはれぬやとの櫻花心つからやあたにちるらん
　花のころまうてき侍ける人のちりての後にとはす
　なりにけれはつかはし侍し　　愛代まろ（法名興雅）
花ゆゑにとはれしやとは山櫻ちるこそ人の別なりけれ
　花のさかりにとたのめてちるまてまうてこぬ人の
　もとへつかはし侍ける　　前僧正光譽
散るまてに花をもとはぬ人に猶庭をさかりとつけやゝらまし
　人々歌合し侍りし時庭落花を　　眞增法師
吹まよふ高峯の風にさそはれてよそらの花ちる山影の庭
　同し心を　　前大僧正道寶（良恕附法）
雪とちる花は庭にも殘りけり惜しむ心そまつはけぬへき
　章にて侍けるとき暮春の心を　　法印隆雅
花そめの袖の色さへかはりけり暮行はるをしたふ涙に
　題不知　　權僧正寛伊
なほさりにをしまぬものをおいらくはとしやかきり春の別も
　郭公
われのみそ初音聞つるほとゝきす人にさきたつ老のねさめに
　おもふを侍けるころよるほとゝきすのなくをきゝ
　て　　僧正良伊
郭公かたらひあかせなへてよのうきには音をも忍ふものかは
　待賢門院かくれさせ給て後法金剛院にて郭公のな
　きけるに　　紫金臺寺御室（守覺法親王）
故里に今日こさりせはほとゝきす誰とむかしをこひて鳴まし
　ある所にひさしくこもりゐて後に勸修寺にかへり
　て　　前大僧正道寶（良恕附法）
立歸りあつめし窓にきてみれはむかしわすれすとふ螢哉
　螢の歌とて　　法印成嚴
渟ちかくむすひしいほはあれはてゝあつめぬまとにとふ螢哉
　初秋の心を　　法印親瑜
おく露も涙もさらにとゝまらすこけの袂の秋の初風
　廬山雨夜草庵中といふことを人々よみ侍りけるに
名にふりし草の庵の雨の夜や我身の秋のこゝろなりけん
　六波羅蜜寺のほとりにいとけなかりし時すみわた
　り侍しにすますなりて年をへてのち元弘の頃の世
　のさはきに其あたり荒はてぬときこえ侍しかは秋
　のころ人々あまたいさなひてまかりて見侍しにす
　みなれしやともなく庭に櫻なとのあまたありしも

なくてみしにもあらす侍しに　愛代まろ（法名昭雅）
夢なれやむかしの春の花のやと野原の露に秋風そ吹く
山家秋といふ心を　前大僧正成恵
人はたゝさひしとのみやなかむらんあはれにたへぬ秋の山里
はしめて山里にすみ侍ける人のもとへつかはしけ
る　権僧正寛伊
すみなれぬみ山の奥の月をみていかはかりかは袖ぬらすらん
閑居月を　法印成厳
すつる身のほかにはよもと思ひしに月もすみける山の奥哉
歌合に八月十五夜　御々仁まろ（法名隆範）
み山たに名にしおふよはくまなきにいかに都の月はすむらん
法印隆雅
思はすに今年の秋のなかはまてなからへてまた月をみんとは
題不知　法印成厳
身もふりぬなれにし友もなくなりぬ月そ昔にかはらさりける
有髪僧都のわらは名をは松代といひけるに時の人
々ほめけるおとしふみの中に松代をかくしてよみ
侍ける　権律師幸範
このころはまつよの月のかけのみそ昔忘れぬかたみなりけり
題不知　権僧正寛伊
たらちめのいさめしとのかすかすを月にこよひは思ひ出つゝ

後三條院かくれさせ給て侍けるころ月をみて
山のはに入ぬとおもひし月影もまたいてぬるはいつく我君　大御室（性信 仁和寺法）
童にて侍けるとき出家のころちかくなりて人々な
こりおしみけるに題をさくりて歌よみ侍けるに月
を　僧正良伊
墨染の色にたもとはなりぬともやとりかはるな秋の夜の月
月の歌とて　権僧正寛伊
身のうさの涙も今はかこたしよぬれてそやとる袖の月影
千喜久まろ（法名成雅）
月をみる人数にたにもよもいらしわれは涙にかけやつすなり
加々まろ
身のうさをなけくのみかはなかむへき月も涙に影くもるなり
権僧正寛伊
あはれなり物思ふ身となりしより曇らぬ月の影みたにみす
人々歌合し侍しに　愛代まろ（法名昇遍）
うき身とて月は光もよもわかし我涙にそ影くもるらん
摩尼幢まろ〔そ歌〕
身のほとのうきもかたらし聞人も涙に月をやつしもてする
題不知　権僧正寛伊
身のうさをさてもやしはしなくさむと幾夜になりぬ月を詠て

當寺鎮守宮五十番歌合に　法印隆雅
月を見るなくさみならて何をかは身のおもひてと人に語らん
蝕の御いのりつとめ侍ける時月はいとおもしろく
て蝕するをはなかりけるに
思ふことかくこそかなへ月影は曇らて法のしるしありけり
題不知　前僧正光譽
涙にもかけは曇らす身のうさをわすられてみる秋の夜の月
承空上人
世のうさをのかるゝ身には涙にもやつれぬ月の影をこそみれ
法印成厳
いつよりかうきよの中を遁いてゝ涙のほかの月をみるへき
權律師賢厳
いとゝ猶あはれもふかし世をすつる心ありてそ月は見るへき
前大僧正道意
いつまてかたへてすむへき世をうしと思はぬ月も山に社いれ
阿闍梨頼眞
惜まれぬうきみたにこそ世にはすめいかなる月の山に入らん
大峯にいたりて侍けるとき月の入を見て
前僧正光譽
今よりはいつくの山をかこたまし峯にてもいる月をみる哉
西山なるところ〳〵もみちみにまかりて

權少僧都成淳
名にしおふ秋のかたとてもみち葉も猶色ふかし西山の里
もみちを折て侍けるにすみそめの袖には似すと人
のいひけるに　巳講定尹
すみそめの袖に紅葉を手をる身はうき世を秋の色そみゆらん
人のもとへもみちみにまかりて侍りけるに袖のう
へにもみちのちりたりけるをもみちのにしきゝた
ると人のいひけるに　睿運まろ
故里へかくてかへらんちりける紅葉のにしき吾はきたれは
ともに月をなかめける人のほかへまかりにけれは
九月晦日つかはしける　彌鶴まろ
よな〳〵の月をなかむる友のみか秋にさへまた別れぬる哉
歌合の時九月盡を　權少僧都有譽
めくりこん後の秋ともたのまれはけふをかきりにぬるゝ袖哉
曉時雨を　法印寛海
身をなけく老のねさめの曉は涙もともに打時雨れつゝ
森時雨　權僧正寛伊
よをなけく涙もふりぬ我身はやおいその森にしくれする頃
千鳥　前僧正光譽
家の風ふかれは和歌の浦波もたゝぬなけきになく千鳥哉
初雪の時はゆきけちといひてとし〳〵もてなすを

をなん昔よりしつけて侍けるにある年これかれあ
またよひあつめ侍てみきなとすゝめもてなしける
に人々むかしよりのとなんたえすなといひければ
かたはらなる障子にかきつけ侍ける　權律師幸範

けたむとは庭の初雪思へとも今もむかしのあとはつけゝり

題不知　阿闍梨賴眞

身をてらす影となりしともしひのためにあつむる窓の白雪

前大僧正道寶（良輔附法）

川おとを中にへたてゝいもせ山あなたこなたにつもる白雪

長松まろ

冬さしもわかてやみまし時しらすふしの高峯につもる白雪

法印隆雅

あはれなりとはれぬまゝの年月も身に積りぬる雪のふるさと

權僧正兼惠

いたつらにつもれる年を數ふれは雪よりも猶身こそふりぬれ

心にひまなき事侍けるころ年の暮に人のもとへつ
かはしける　權大僧都光海

うき數のつもれる雪に年暮て今は六十の春をまつかな

歳暮を　法印親瑜

おもひやれのこり少なき老か身にくれゆく年の心細さを

法印成嚴

年暮て心ほそさやまさらまし命をうらむ老の身ならは

年の暮によめる　延命まろ

徒にまたこの年もくれにけり身の老ひたらんはてそ床しき

東寺々務の事年あけて御さたあるへしなと仰下さ
れけるころ人々題をさくりて歌よみけるに歳暮を
前大僧正成惠

行年もさのみをしまし君か代の春にあふへき身そと思へは

安撰和歌集巻第十七

雜歌中

歌合し侍ける時山を　阿闍梨賴眞

おほつかな幾代のちりの積りてか雲ゐるほとの山となるらん

音羽の瀧をよめる　法印成嚴

おちたきつ瀧のひゝきをきく人や音羽の山と名つけそめけん

よしのゝ瀧を御覽してよませ給［ひ歟］ける
寛平法王（寛實附法）の御歌

宮の瀧むへも名におひて聞えけり落る白泡玉とひゝけは

海邊を　法印隆雅

磯山の松より風のふき落てやかても波の音となりぬる

海邊松　紫金臺寺御室（光寶親附法）

風わたるいらこかさきのそなれ松しつえは波の花さきにけり

色かへぬ松のしつえに咲とみる波の花こそときはなりけれ　　権僧正寛伊

しほのさす浦の松原はる〲とかすかにみゆる波の浮草　　権律師良厳

えそわかぬ煙かきりかもしほやく浦よりおくの松の一むら　　権少僧都有誉

歌合に　　阿闍梨政恵

難波かたしほのひるまを見渡せはみきはに遠きあしの群立

海邊を　　阿闍梨頼眞

あさりするかたをいつくと定めぬは風をたよりの天の釣舟　　法印隆雅

我思ふかたにそかよふ波風の心なるへき天の釣舟　　愛代まろ

歌合の侍ける時海邊煙といふ心を

いつかたにかよふ舟路の末ならん雲につゝける沖の白浪　　前大僧正成恵

もしほやくあまのいそやのかす見せてところ〲に立煙哉　　権少僧都淳恵

遠村烟

わかかたの籬もとほくなかむらん遠にみゆるさとの一むら　　僧正良伊

おなし心を

はるかなる竹の一むらほのみえて人すみけりと立煙かな　　法印成厳

あまたゝつけむりを里のしるへにて竹おひめくるをちの山本　　法印寛海

窓竹を

たよりとてやかてかきほと成にけりわさとはうゑぬ窓の呉竹　　前権僧正良瑜

籬竹

くれぬとて鳥やねくらをしめつらん籬の竹のえたゝわむなり　　よみ人しらす

山家夜といふこゝろを

誰をこそまつとしもなき山里の夜なれはとてさゝぬ槇の戸　　法橋慶賢

人々歌合し侍けるに

えたはかきもとはつくと（ら歟）ぬ柱にて松をたよりのしはのかり庵　　彌壽まろ

題不知

またすまふ人なき山の奥のいほたれをへたての庭の松かき　　法印成厳

おのつからあるにまれなるいへゐこそ片山影のしるへ之けれ

山もとのこの下くらきいへゐにはありての後もよを殘しけり

山ふかみむすひしいほはあれはてゝ庭の石橋こけむしにけり　　法印隆雅

柴の戸にかよふ嵐の道やいつこあとなき庭の苔の石橋　　律師榮俊

山里の柴のあみとの立明けは峯のあらしのこゝろなりけり

我さきに世をのかれける人やめ（す歟）る此山影の苔の細道

杉山といふ所にこもりゐて侍けるころ人々に遣[illegible]

の歌十五首よませけるついてに　前大僧正成恵
杉山の杉をしるしにたつねこん人はまことの道にまよふな
歌合のとき山家を
山里にとひくる人のかるへきあらましはかりせぬとはなし
山里にすみ侍ける人のもとへまかりて我もともに
なとあらまし侍てよめる　権律師信尊
かへさにはこの山道に栞せんあらましのまゝまたもこそくれ
屏風のゑに山より人のつま木をもちてかへるけし
きをかきたる所をよみ侍し　平喜久まろ[法名成雅]
日もくれぬこの山ちかき里人をつま木の道のかへさにそしる
同し屏風のゑにふかき山に庵をむすひて人のある
にまた人のいほりよりいてゝかのいほりにある人
をあやしけに見たるところを　愛代まろ[法名隆雅]
我は世のうきにいりぬる山の奥にまたすむ人の心とはゝや
法印隆雅
淋しさを人やはなけくさひしさに我はなくさむ山の奥哉
題不知　阿闍梨光憲
いつとなくすまひなれたる山人は都にいてゝさひしきやしる
権律師宣縁
すみなるゝわか身ならすは山里にたえてきくへき松の風かは
これかれ歌合し侍けるに山家風を　阿闍梨政恵
かくれかとたつね入りにし山里はよくも嵐の音そさひしき
題しらす　春鶴まろ
あらましはかくてといひし山里にすむとしなれは流石淋しき
法印隆雅
すまはやとかれて思ひしあらましの末とほりぬる山の奥哉
権僧正寛伊
うきをにのかれよとてや世の中にまたしらぬ山の奥はあるらん
阿闍梨運尊
あらましのまとなりせは白雲のへたつる山の奥もみてまし
前大僧正成恵
もとよりの昔あらましの山すみを何のうきにか袖の露けき
阿闍梨親眞
住うくはまたいつかたに身をすてんあらましとほす奥山の庵
権僧正範憲
山の奥何たつぬらん世をなけく我こゝろをそすつへかりけり
法印成厳
山里をかくれかとしもいひけるは世のうきをにのかるれはそ
前大僧正成恵
山里も猶うき世なり思ひとる心の内のすみかたつねよ
権律師覚源
山里にすめは心をすてねともおのつからこそとはさかりけれ

世のうさをすつるとはなき山里の靜かなるこそ住よかりけれ

阿闍梨嚴朝

閑かなるあはれしらすは山里のとはれぬをやうらみならまし

閑居の心を　阿闍梨聖嚴

とはれれは庭は綠にむすこけをときはにもみる宿となりぬる

古宅の松といふこゝろを　阿闍梨覺杲

こけのむす軒はあれぬとみし宿の松さへおひて年そへにける

故郷松を　前權僧正良瑜

故里の庭にうゑにし小松こそいまはこたかき物となりぬれ

題不知　讀人不知

故里になれにしともゝなくなりぬ誰とむかしのをかたらなん

阿闍梨兼濟

かきり置故里人の戀しきにむかしにかよへおもひね（[illegible]）の夢

懷舊夢といへる心を　阿闍梨顯眞

思ひねの夢みるほとはむかしにてさむれは今に成そ悲しき

夢を　春命まろ

はかなき夢とはいへとよな〱もつれには思ふをそ見えける

權大僧都實顯

何となくうつゝより猶中々に見しよの夢はたのまるゝ哉

千壽久まろ 法名風雅

よき夢をみるほとはかり慰みてさむるうつゝはうきよなりけり

世の中のうき事をおもひ侍て　法印成嚴

うしとみるはやこの頃の過てゆける（衍歟）昔の夢と思ひなすへく

心のほかにあやまちたる事侍てたのみたる人にこゝろよからぬことになり侍しにさま〱おこたり侍て　阿千代まろ

うつゝとも思定めぬ世の中にすきにしをの夢になれかし

かやうにいひつかはして侍しに　としなゝつのほとにはいとあはれなりとて　たのみて侍ける人やかて思ひなほり侍し

題不知　前大僧正成憲

まとろみて現とみつる夢はさめぬ夢そと思ふ世をいかにせん

前權僧正良瑜

つく〱と思つゝくる世中はたゝまとろまぬ夢とこそみれ

前權律師宗意

うつゝをもうつゝといかて定むへき夢みる時も夢としられは

阿闍梨榮賢

いかにせんはかなきものと現をもおとろけはまた長き夜の夢

人のわつらひ侍けるをおとろきおほゆるよしとふらひて侍ける後やかて身まかりにけれはそのなけきしける人のもとへつかはしける　法印隆雅

驚けはやかても人のなくなりぬこれさへ夢にゝたるかなしき

返し　權律師幸觀
なき人は夢と思てなくさむなとひてちなとかおとろかすらん

人をおくり侍ける念佛の許を聞て〔マヽ〕　法印寛海
人をおくる人の聲こそ聞えけれたれなくなりて誰なけくらん

成履法印身まかりにける時　前僧正光譽
現にはまたあふましき人なれは夢にもせめてみはやとそ思ふ

前大僧正成源なくなりて侍けるを夢に見てよめる　前大僧正道意〔光譽附出〕
なき人の夢に見えつるはかなさは驚かてこそあるへかりけれ

題不知　法印成厳
うたゝねの夢はほとなくさめにけり長き眠のかゝらましかは

前大僧正道寳〔良寳附出〕
まよひこし夜々の夢路の苦しさは長きねむりのさめぬ〻けり

阿闍梨圓譽
五十あまりわかよふけぬと思ふにも猶驚かぬ夢そはかなき

曉過讃を　よみ人しらす
あけはまた夢とやならん曉の我あらましはうつゝなりとも

法印隆雅
おのかねにさきたつ老のね覺とも思はて鳥やおとろかすらん

あかつきのゆふつけ鳥の昔よりいかにや聲になきはしめけん

覺救法師
あかつきのねさめさひしくなく鳥の涙は老のたもとにそある

嚴源法師
いつれをもあはれとそきく鳥のねに聲をあらそふ曉のかね

阿闍梨頼眞
老か身のねさめの床にさひしきはとほき野寺のあかつきの鐘

わかゝりける時よりつとめのためとてあかつきことにおきゐ侍けるにいつも夢のほとにねさめせられけるに思ひつゝけ侍ける　法印成厳
いとなみし曉おきにならひきてねさめに今は時をしる哉

安撰和歌集巻第十八

雑歌下

大僧正おほせくたされて侍ける時代々の君につかへたてまつりぬる事を思ひつゝけ侍て　前大僧正成惠
老の坂くるしく君につかへきてみねまてのほるくらゐ山哉

題不知　法印成厳
かそへしる人あるならは足引の山の松ともとしくらへせん

前大僧正光譽
老か身の思ひいてともなりぬるは心にしのふむかしなりけり

思出のなくとしのはんいにしへは吾身の老をなけきやはせし　法印隆雅

前大僧正成惠杉山に侍ける時人々に述懐の歌十首よませけるに

ありへはと昔はなほもたのみしを老ぬる後のなくさみそなき　法印親瑜

おのか身のいとけなかりし時よりも猶おろかなる老の今かな　權大僧都光海

題不知

たらちねを思ひいつれはならひにもすきて戀しき昔なりけり　阿闍梨寛杲

忍てもかひやなからんとても早まためくりくる昔ならねは　藥壽まろ

古しへの戀しからすは存命へてあるやうれしき吾身ならまし　法印寛海

年月はゆきこそめくれあやにくに忍ふむかしのかへりこぬ哉　權律師隆殿

なつかし削れともわれいひぬへし往古すみし身そと思へは　阿闍梨顯眞

昔をもきかふも思ひいつるには近き遠きも心にはなし　前權僧正㝡瑜

なからへは忍ふるへしと思ふにもいまよりやかて今そ戀しき　法印親瑜

はかなくもいとはし今のあはれこそ忍ふ昔も思ひいてなれ

前大僧正成惠杉山にて述懐の歌十首よませ侍けるに　彌若まろ

かくて身の老となるまてなからへは命にかゆる思ひてもかな　僧正㝡伊

ありとても今いくほとそ老か身を捨ても後の世をたすけはや　權少僧都乘惠

終にさてよをいとはすはうきことを思もしらぬ身とやいはれん

當寺鎭守宮五十番歌合に　權律師幸範

うきよとてなけきなからもすこしきつ何を便に身をは捨まし

題不知　僧正㝡伊

かく計ありてよしなき身なれとも捨るとなれはかなはさり鳧　阿闍梨政惠

すてかれて身はよにあれとうきことにとまらぬものは涙なりけり　千喜久まろ（法名良雅）

捨かぬる心ひとつのかはられはいつくもおなしうき世なりけり　權僧正寛伊

身をすてぬ此ころとてもうき身には世の人かすに入は思はし　阿闍梨寛杲

かくはかりよに住わひてすてぬれはそむく數にも人は思はし　阿闍梨緣靜

我とそむく人の數にや成なまし世に捨らるゝ身にしあれとも
嘆きこそ思へは今はいけかれ世に捨られて世をそすてぬる
　人のすゝめて淨蓮僧正述懐歌五首よみ侍しなかに　愛代まろ法名願雅
すてぬる人の爲こそ浮世なれのかるゝ身には住よかりけり
　この僧都にかはりて
よなすてゝすみにそめける衣をは年月吾は思ひきにけり
　杉山にこもりゐて侍ける時　沙彌性嚴
　前大僧正成恩杉山にて述懐の歌十二首よませける
　に　前大僧正光譽
何とか世にある人にかはるらん衣の色をすみにそめすは
かりのよの爲にと罪もおそれねは身を思ふとて身をも思はす
　かゝまろ
世をなけく我涙にそ見えぬへき心のうちのすみそめの袖
　法印隆雅
なけくへきをはりしらぬ心こそうきよの中にすみよかりけれ
　題不知　權僧正寛伊
はかなくも何とうきよを思侘ひて安かりぬへき身を嘆くらん
　權少僧都勝玄
嘆かしときのみもいかゝ思ふへきなへて浮世の憂もならひそ
　權少僧都仲寛
とに角に嘆けはとてもかひもなし身のはしあしは有に任せて
　述懐の歌よみける中に　千富久まろ法名成雅
うきことゝうれしきとゝかはれとも同し心や思ひしるらん
　題不知　虎夜叉まろ
人もまた嘆きなからやすまふらん吾身はかりの浮世ならねは
　法印成賢
よしかゝる世の習そと思はすは猶いかはかり身をなけかまし
　前大僧正成恩
うつり行月日につるゝ世の中をすくしかたしと何なけくらん
　法眼成禪
憂身ともむくひにこそはむまるらめ前の世しらて何嘆くらん
　法印隆雅
後のよをしらぬ吾身は六の道いかなるかたにまよひゆかまし
ありはつる習なりせはいかゝせんしはしの程と思ふうきよを
　權僧正寛伊
行末に猶うかるへきためとてやすつれとなかき命なるらん
　權僧正兼惠
待はとのあらはや吾身それまてとなくさむ程の頼みにもせん
たちかへり思へはつらき吾身かななけく故こそ浮世なりけれ
　述懐の歌あまたよみ侍ける中に　前大僧正成恩
何事もあるにまかせてもとめねは求めぬにえぬ苦しみもなし
人とになけく浮世もなけかれす數ならぬ身をたのしみにして

題不知　能圓法師
世中の人のなさけのあるならは数ならぬ身にしられこそすれ
法印成厳
をはりにあらぬをゝもおそるゝは世の人数になき身なりけり
當寺鎮守宮五十番歌合に　權少僧都淳憲
数ならぬ身にはかなはぬあらましや浮世の中のならひなる覧
述懐を　法印寛海
あらましはよき方にして慰まんとてもうき世の定めなければ
前大僧正杉山にて述懐の歌十二首よませけるに　權律師幸範
よしあしのあらましゝてもかひもなしかれて定めぬ行末のを
當寺鎮守宮五十番歌合に　法橋慶賢
数ならぬ吾身もいかゝかなしきは後まて残るうきなゝりけり
新後撰集かきうつし侍てその双紙の奥にかきつけ
侍ける　僧正寛伊
人なみにかき置わかのもしほ草後まて誰かあはれともみん。
ふるき人のかきて侍けるものを見て　權僧正寛伊
いにしへの深き浅きもしほ草かき置筆のあとにこそしれ
述懐の歌の中に　千喜久まろ法名成雅
も鹽草をのはかれぬわかの浦や藻のすかたをいかてしらまし
後中書王より代々歌のみちにたつさはる事なれは
をにもてあそふへきよしを人のいひ侍けるにおろ
かなる身には家をやはすをもありぬへしよしなく
なといひ侍て
家の風吹つたふへき身ならねは思もよらし和歌の浦浪　法印成厳
題不知
うきをはいくしほ風も身にしみて思ひつもりの沖つ白浪　前大僧正成恵
涙川あさき心のほと見えてうきせもおほき世にもすむかな
よみおける歌をかきあつめて侍て實教卿のもとへ
つかはしけるときつゝみかみにかきつけ侍し　愛代まろ法名覺雅
おろかなる心ひとつの思かはさそうたかたもはかなかるらん
此集えらひ侍るへきよし門主のいさめあるにより
てはゝかりなからおもひたち侍りて序なとおもひ
つゝけふるきいまの人の歌ともかきあつめて此集
のなかゝきを實教卿のもとへつかはして見せあは
せ侍しに歌ともなをあまたえらひのそきて返し侍し
時わかのうちにましるもくずをかきすてゝ玉はか
りをそひろひあつむると侍しかへしに
和歌浦にひろはん玉のすかたをも人のみかけん後にこそしれ
此集おもひのをくなるへきよしのいのり心にかけ

侍しころおもひつゝけ侍る　　法印隆雅

おのつから心をよせる玉津島ひかりをうつせ和歌の浦波

すみのえの松にこたへて千代までも吹もつたへよ和歌の浦風

安撰和歌集第十九

釋教歌上

法性の室戸ときけと我住めは有爲の波風たゝぬ日そなき

此歌は弘法大師土佐のむろ戸といふ所にてよませ給ひける。

しらすしてのみもやせまし旅人の高野の奥の足引の水

此歌は弘法大師高野山にひとつの谷を點して。もろもろの毒虫のたくひを兒しこめ給り。この谷の水を服する人かならす害あるゆゑに。大師よませ給る御歌となん。

わたつ海のこき行船のあとみれは曩(莫戰)英三曼多弱(件戰)叫鑁(解戰)解

此歌おなしく弘法大師の御歌といへり。

阿耨多羅三藐三菩提の佛達吾たつそまに冥加あらせ給へ

此歌は傳教大師比叡山中堂を建立し給ける時。杣山にいり給てよませ給ける御歌なり。此大師は弘法大師の御附法のよし。或物に見えて侍る故に此集に入はへり。結縁灌頂をうけ給りとなん。

かくはかり達磨をしれる君なれは但他竭多までに成のほり見

此歌は高岳無品親王(眞如)。御受法のため弘法大師の御もとへまゐり給て侍けるに。大師折ふし御行法のほとなりけれは。親王ひそかに其瑜伽の壇場を見給ふに。大師誕埵のとくして道場のうち光明赫奕たり。親王おほきにおとろきて禮拜恭敬し給て。たちさり給てのち。親王法を大師に傳て。歌をよみて大師をほめたてまつり給ひける御歌なり。

いふならて捺落の底におりぬれは刹利も眺舍も隔てやはする

此歌は彼高岳の親王大師をほめ給ろさきの御歌の御返しに。弘法大師よませ給ける御歌となんいへり。此二首のうた。大師の御行狀集の一説によりて。此集に書のせ侍り。

金剛頂經を　　權律師實嚴

上もなき佛のとける法なれはまされるをしへさらになきなり

大日經住心品を　　法印成嚴

いつくにもあるとはなくてさとるこそ法の心のすかたえけれ

菩提心爲因　　阿闍梨賴眞

にごりにもそまぬはちすは法をしろ心の種におふるなりけり

百六十心

おしなへてひとつみのりの佛そとしな〳〵かはる心をそしる

十縁生の心をよみ侍ける夢　前大僧正成惠

なきものと夢をはかなく思ひしはうつゝをしらぬ心なりけり

影

あると見てとれはまたなきをはりの鏡の影は身をもはなれす

響

山彦のこたへさりせはさは鹿のひとりや妻をこひてなかまし

菩提心論日々漸加至十五日圓滿無碍（碍歟）の心を　權律師實嚴

もとよりのすかたなれとも日にそへて光をそます望月の月

父母所生身即證大覺位

おろかなるうきよの中にうまるゝと思ふ此身は佛なりけり

法華經序品の心を

わしの山なり（マヽ）をてらす月影もわきてあつまの奥をさすなり

五百弟子品を　前大僧正道玉（道昌歟）（貝法附法）

したにすむもとの心をしらぬかな野山の清水みくさゐぬれは

以無價寶珠繫著内衣裏　法印隆雅

うちかへし思へは袖の涙こそやかて衣のうらの玉なれ

寶塔品を　阿闍梨頼眞

おのつから花のとほそをひらきてそ春もときはの物と知ぬる

壽量品方便現涅槃而實不滅度を　愛代まろ（法名興盛）

いりぬとてなしともいはしゆきめくる空はいつくも同し月影

きえやすきいのちと何か思ひけんかきりなきそと法にとくこ　法印寛海

法師品寂寞無人聲讀誦此經典の心を

山深き柴のいほりのしつけさにのりをとなへてすむこゝろ哉

普門品　權少僧都兼惠

いりかたきみ法の道となけく間にあまねき門と聞そうれしき

弘誓源（深歟）如海　權少僧正覺伊

おのつから深き誓をわたつ海のちひろの底にたとへてそしる

心念不空過　法印成嚴

おしなへて苦しき海にひく網のすくふちかひに何かもるへき

心經空即是色の心を　前權律師宗意

色しなきものとはいかて思ひけんみとりそ空の姿なりける

文殊菩薩を　權律師實嚴

數しらぬよろつの法をはらみては三世の佛のはゝとなりけり

緣覺乘を（も歟）　法印成嚴

春秋の花もとみちも散をみて思ひしりぬる法のとはり

十戒の歌を人々によませ侍りしついてに不殺生戒の心を　法印隆雅

梓弓やをもはなたてしかの聲か、よときけはたもつなりけり

不偸盗戒を　權少僧都有譽

梅の花色をぬすめる雪にたに心はまとふものとしらすや

千喜久まろ法名成雅

おのつからあたなる花の一枝もあるしゆるさて手折やはする

不邪婬戒　阿闍梨成恵

をみなへしおのかすむ野におほけれと吾妻こふる秋のさを鹿

不妄語戒　權律師幸範

よしなしやたゝいつはりのことのはゝまことの道のさはりとそけり

不飲酒戒　愛代まろ法名堅雅

あたにのみ惜にまよふ夢の夜の猶さめかたくゑひなすそめそ

不說他過戒　權少僧都淳憲

身にかへる報ひもかなし身の爲に人のとかをも人にかたらし

不慳貪戒　かゝまろ

さかりなる花の姿もあたなれは人のためには身をも惜まし

不誹謗三寶戒　法印隆雅

かくはかり法にまつしき我身もておろかにいはしみつの寶を

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の心を

おしなへて光あまねくすむ月もきよき水にて(そ歟)影やとすなる

佛身法身猶如虚空應物現形如水中月といふ心を

前大僧正道寶良淳附正

水の面に光をわけてやとるなり同しみそらの秋の夜の月

如秋八月霧微細淸淨光といへる心を　前僧正光譽

へたてなし秋の半の月のかけ霧こそ淸き光なりけれ

光明眞言を

いつ色にてらす光はあきらけし心のやみのはれさらめやは

華藏世界を　前大僧正成恵

まよひしもさとりも同し國そとけ胸のはちすや開きてそしる

即身成佛を　法印成嚴

おろかなる身をあらためぬ形こそやかて佛にすかたなりけれ

獨一法身

拂ふへき雲もなければおのつから月ひとりこそ空にすみけれ

五智の歌よみ侍ける時大圓鏡智を

まとかなる鏡のかけのあまねさにかくるゝなきみ法をそみる

平等性智　權僧正兼恵

あすか川ふち瀨もともにおしなへて同しみかさの水の面影

妙觀察知　法印寛海

よしあしもあやまらてとく御法こそ迷ひさとりをしる心なれ

成(所歟)行作智

思とけはよもの草木のうこくまて風ひとしなの姿なりけり

法界躰性智　法印成嚴

おしなへてあまねき空の下なれはいつれの里か月はみさらん

安撰和歌集卷第二十

釋敎歌下

阿字觀の心をよめる　　阿闍梨賴眞

をちこちの十のさかひの道もみな足にまかせて行にそ有ける

月輪觀の心を　　法印寛海

おほ空の月の光を見るほとに心のうちにうつりぬる哉

人の法門を月にたとへていひ侍しに　　千軍久まろ 法名成雅

あきらけき月のひかりにたとへてそ迷はぬ道を人にしらする

題不知　　法印成嚴

長きよのやみにまよはぬことはりはみのりの月の光なりけり

前僧正光譽

まよふへき吾のちのよのやみさへに心はれぬる月の影哉

權僧正兼惠

いとふへき空も霞もなかりけり心の月はこゝろとそすむ

法務寛信 附法光譽

いりぬとも思はさらなん月かけのわしの高峯にとをく照せは

佛舍利を禮拜したてまつり侍て　　大僧都嚴覺

此玉に光はなかくとめおきぬいてゝいりにし夜半の月影

聖教の中にかきつけ侍ける　　權律師實嚴

月の輪も心のうちにあらはれぬさとりひらくるむねの蓮に

眞言宗は諸宗の最頂なることを　　法印成嚴

山高みのほると思ふみねよにひかりをくたす月の影かな

諸宗最頂の眞言法をつたへ侍りてことに金輪聖皇をいのりたてまつることを思ひて　　阿闍梨賴眞

ひとすちに君をそいのる上もなきまことの道の法をつたへて

題不知　　前大僧正道意 附法光譽

法のみちかゝれとてこそつたへしか祈るかひあれみよの行末

法印英宣

をしへ置法のまゝなることはりのほかにさとりはなしと誠きけ

前大僧正成惠童にて侍ける時より不動尊に歸したてまつり侍けるにいとけなしといへともそのうつはものなりとて寛海法印十九布字の法をさつけて侍けるにある時この法印やすみて此少童に腰をうたせけるにすこしまとろみて侍けるに不動明王の腰をうち給ければおとろきてみるに此少童なり又この法印まとろむやうにしければまさに明王腰をうち給けりたひ／＼かやうに侍ければ法印ふしきのおもひをなして此少童にことのよしをたつねけるに十九布字法を腰うちなから暗誦して侍りつるとこたへければ法印このふしきのやうを少童にかたりてさま／＼わひし侍けりしかるに愛代らいとけなかりし時より此明王にふかく歸したてまつりければ彼成惠大僧正の例にまかせて門主法印十九布字法をさつけて侍しに愛代不動尊に現するよし門

主ある夜夢にみ侍て彼祖師の佳例にかなひて法を
うくるしるしをあらはしぬるよしさま〳〵隨喜し
侍しつひてに　法印隆雅
法うくるしるしを今もあらはすはふるき跡をや人のつたへん
返し　愛代まろ（法名良雅）
心にし法のしるしをあらはさん深きあとをもつたへさらめや
法燈をかゝけてたえさる事を思ひつゝけ侍て　前大僧正成惠
つたへこし法の灯かゝけすはまとひやせまし小野の古道
白河院御時ことに密宗御歸依の御心さしも深くまし〳〵けるに匡房卿なといふ賢者才人ともをめされて種々の御さたをへられて小野權僧正範俊は曼茶羅寺仁海僧正の正統なるによりて太元法の大事與立劒輪なといふ秘密口傳をもそこをきはめたるゆゑに此法の阿闍梨としてこれをつとむへきよしをおほせくたされ侍けるに範俊そのとしの眞言院御修法をつとめけるゆへに太元法を良雅阿闍梨にさつけ侍てこの兩個の大法を師弟ならひてつとめける事その例まれにそ侍ける又權僧正寬伊は彼小野權少僧正（義範）範俊の嫡流なる故に太元法與立劒輪なとの奥藏をきはめて侍て此法の阿闍梨をも數代相續の重職に居して太元法をも年ひさしくおこなひ侍けるに又眞言院の秘法をもつとむへきよしおほせくたされ侍けれは成惠大僧正の法印にて侍けるとき太元法の秘事口傳をのこるところなくさつけ侍て師匠の寬伊僧正は眞言院法をおこなひ弟子の成惠法印は太元法をつとめ侍て今又師弟ならひてこのふたつの秘法をつとめける事まことにありかたくおほえ侍けれはおもひつゝけ侍ける
たくひなきむかしの小野の跡うけて今もかはらぬ道をふる哉
宗の大事うけつたへ侍ける時師のもとへつかはし侍ける　法印寬海
まよひなき人にたつねて分ゆけは猶奥ふかし小野の古道
返し　法印成嚴
傳へきて今まてたえぬ小野の道たつぬる人はふみもまよはし
安祥寺前權律師宗意に門流大事とものこるところなくさつけ侍りて　大僧都嚴覺
をしけき小野の草葉の品々を露もゝらさすつたへおく哉
前大僧正成惠に宗の大事のこりなくさつけあとの事なと申おくとて　權僧正寬伊
たのむそよみ法の駒をすゝめてもあとにまよふな小野の古道
門流の大事そこをきはめて成嚴法印にさつけ侍て

阿闍梨頼眞

昔よりのりのなかれのたえせねはうくる人こそそこは知けれ

高山に水ありといふとによそへて高祖の御法流の嫡傳をうけぬることをおもひ侍て　權律師實嚴

上もなき高野の山の法の水深きそこ〔きゝ歟〕をは吾のみそしる

眞言教相たつねきゝて詞はさらしにかはらて心はいとふかきよし申て侍ける人の返事に　前大僧正道寶（良瑜附法）

ふかしとも思はてそ法の水そのみなもとはくみもつくさし

僧正仁海

雨の御いのり勸賞おそくおこなはれけるに

龜山のなよにとはゝや世の中に古き流はたゆへきかもし

内裏にはしめてまゐり侍りて御いのり申侍ける時おもひつゝけゝる　前大僧正成惠

いにしへの高野の峯のあとうけて空〔曾歴〕井になるゝ袖とこそなれ

灌頂の秘密教にあひぬる事をおもひ侍て

おろかなる心なりともなけかしよまた上もなき法にあふ身は

眞言門もなほ教門にて侍るゆゑに教外別傳の禪法にはおよひかたきにやと人のたつねけるに教外の禪法もたゝ心の一法をうるところなるゆゑに六日法身の普門萬德の内におひてわつかに一つをひらきうるところなれば眞言の無量の心識をいつる事はあるへからすといひて　法印成嚴

敎あるはかと思へと數しらぬ心のうちははなれさりけり

息は本來の覺體なるよし師のおしへ侍けるに　阿闍梨頼眞

何とてかまよひそめけん我心もとよりしてのさとりなりせは

返し

吾心こゝろのまゝにしらぬこそまよひそめける初なりけれ

六道輪廻のとを思ひ侍て　權少僧都有譽

いかにせん心ひとつのまよひにて六の道にもゆきめくりけり

出家し侍て　前僧正光譽

おろかなるうきよの家を出てゝこそまことの道に吾はいりぬれ

題不知

數しらぬ夢のうきよにまよひきてさむるうつゝに心すむなり

法印寛海

おろかにもうきよの末と思ひけりもとの都も此身ならすや

人のさとりのゝちはよしあしともにつみなるましきよしをいひけるに　權僧正寛伊

さとりてはつみもなきそと思ふこそやかてまよひの心えけり

千手觀音のちかひを思ひ侍て　前權律師宗意

かれはつる枝にも花のさくなれは此身ほとけと成もこそすれ

有譽僧都童にて侍ける時愛染王をもちたてまつり

侍て此尊をうたによめといひけるに　法印隆雅

くれなゐの涙に身をもそめぬれは憐みふかき色は見ゆらん

返し　權少僧都有譽

たのもしと思そみぬる心さへこのくれなゐの色にみゆらん

高野の御廟室のまへに藤の花のさきたるをみ給て　高野御室（覺法法親王）

藤の花吾まつ雲の色なれは心にかけてけふもなかめつ

紫（雲歟）金臺寺御室觀音を紫空にのせたてまつり給てこ

ゝろをうたによむへきよし耒僧のもとにおほせつ

かはし給けるにむらさきの空（雲歟）のかゝりゐる山里に心

の月やへたてなるらんとよみたてまつりけるに御

返しに　紫金臺寺御室（覺性法親王）

へたてなき心の月はむらさきの空（雲歟）とゝもにそにしへゆきける

彌陀のちかひはいかなるにやと人のたつね侍ける

に　阿闍梨賴眞

つみのなくつみのある身も法の舟ともにそ西の岸につきける

釋教の心を　紫金臺寺御室（光性法親王）

高瀨舟くるしき海のくらきにものりしる人はまよはさりけり

阿闍梨賴眞

まとある吾心よりしるのりを人のたつねはいかゝこたへん

權律師實嚴

はかなしとまよふ心をいとひては何をのりとか外にもとめん

心にてこゝろの如くさとるこそ法にて法をうるところなれ

教外別傳の心を

つたふへき所のなきを傳ふるやたしへ自法の敎なるらん

觀念の床にておもひつゝけ侍ける

我心たつれてみれはきはもなしきはなき法の姿なりとて

眞言法は法身の如來よりこのかた我身にいたるま

て嫡々相承し侍て二十代血脉さらにたゆることなけ

れはゆくすへも法流のひさしくつたはるへきこと

なおもひ侍て

われまてにはたちになりぬ行末は萬代ふとも法はたえせし

此安撰集事。且隨先師之貴命。且依數寄之懇志。自十五歳至三箇年。或尋神明權者之詠吟。或集古今貴賤之和歌。撰千首終一部。竝形古偏所住吉玉津島之明神。法雖今重投眞言歌菩薩之功德。而與雅幸幸遇今上之善政。忝依預當門之微信。內々經　奏聞。密々備　叡覽畢。剰被下（和歟）叡慈之　詔書。頗可准勅撰之儀式者歟。當世之美談。末代之觀摸。面目無比。抃悦有餘。仍染短筆聊勒旨趣矣。

安撰集進上時中入（應安二六十三）

いつそや申入候さうしけさんに入候。あまり見くるしき物に

て候へは。ゑいらんの外はゆめ〱人にみせさせおはし候ましく候。餘略之。

御返事 三位局奉書

又御さうし御らんせられし(候歟)ぬる。たゝけんこのたんしやくのたくひなとを。かきおかれて候物(とも歟)をおほしめして候へは。まとしくおもしろき物にて候ける。御めひ(い歟)わくてこそ候へ。御さかしらなと候へ〻候への事にても候はす。如法〱しゆせうの物にて候ける。御らんせられ候て返しつかはされ候へく候。餘略之。

進上後中入候 應安二 六 十七

さて〱けさんに入候しさうしのよ。なほ〱おそれはゝかりそんし候へとも。また申入候しやうに。この物のきほとそんし候てけさんに入候。すこしもゑいらん候はゝ。ちよくせんにて候はんすれは。世の末までのきほ。これにすき候はしと存候て。さて申入候。御らんはかりわたらせおはしまし候へと。御申入候へと申させ給へ。あなかしこ〱。この物の事こまかに御らんせられ候につけて。しゆせうにふしきなる事ともにて候。よろつちとすゝしく候はんおり。こまかにおほせられ候へく候。餘略之。

安撰集被返下時申入 應安二 十一 廿二

さて〱まゐらせおき候しさうし。このほとに返しくたされ

ろへきよしおほせ下され候へは。よろこひそんし候。餘略之。

御返事 三位局奉書

さて〱御さうしたしかに返しつかはされ候。日かすへ候ぬろ。いかに心もとなくおもひまゐらせられ候。御らんすれともうちつきの御まきれにて候つる。おなしくは又よく〱御らんせられ候てとおほしめし候つる。それまてへたてなく申され候へは。返々ふしきにおほしめし候。かゝることは時々候けに候へとも。いりたちてかやうにさた候。けにゆゝしくもふしきにおほしめされ候。餘略之。

勅書 同時

さても二帖返しつかはされ候。よく〱御らんせられ候つるほとに。ひさしくめしおかれ候ぬ。おもひよられ候ぬる先師の心さし。ふてをとられ候めるそのしたひ。かたならひやさしくもおもしろくも御らんせられ候。序のことはなともと候て。つゝなるやうに候はぬはかりにても候はす。ふかき秘密のこゝろにかきいれられ候ぬる。めつらしくもありかたくおほしめされ候。まとのわかのみちのふかきことはり。すへて〱これにすき候ましく候。なほ〱かんしおほしめされ候。名もあ字一かたならぬそのよせふかく候。かくて師跡にとゝめおかれ候へく候と申とて候也。餘略之。

安撰集表紙御製二首勅筆

空のうへにきこえあけつる和歌の浦のなみ〳〵ならぬ名をや殘さん

ひろひおくとはの玉のかす〳〵につたふるのりのひかりをそ見る

安撰集被返下御返事申入曆安二十一廿一

安撰集事　叡覽殊恐存候へとも。れいの父祖事へたてなき御心さしゆゑ。はゝかりなから進上仕候ぬるに。數日めしおかれ候て。委細の御さたにもあつかり候へは。ためしなくこそ存候へ。かやうに奏聞におよひ候て。さま〳〵御沙汰をへられ候ぬれは。此集すてに天下のきこえもらぬと。なほ〳〵申つくしかたくかたしけなく存候。心中さなから御おしはかりをたのみたてまつり候。剩へ二首の御製をくたされ候て。遙に萬代の美談をのこし候はん事。此道の面目これにすき候はしと。よろつめてたくのみおほえさせおはしましてこそ候へ。

こゝのへの雲のうへまてふきあけのわかの浦風よにやきこえん

あつめおくとはの玉も法とみる君のてらせは光をそます

あまりにおかしきやうに存候へとも。御返事申入候てはおそれふかく存候上。なほもへたてあるやうに候ほとに。よくよく御心えわたらせおはしまし候て。いかほとも御申入候へと申させ給へ。あなかしこ〳〵。

任前院佳例。重備新院叡覽。當門面目此事也。

安撰集進上時永德二六十三

なによりもこのしふまつ〳〵おもしろくもやさしう。いたくかゝるためし候はしとおほしめし候。うるはしくしよの心によろつみえて候やうに候し。御すきはゝましく候。御心さしのいたりためしなく候。餘略之。御しうしんこそ返々ためしなくやさしくおほしめし候へ。よく〳〵御覽せられ候て。さしつかはされ候へく候。餘略之。

勅筆
安撰集被返下時永德二九廿九

あんせんしう昨日かへしつかはされ候し。猶如法とかきなとこまかにのと〳〵と御らんせられたく候うへ。これほともんせきしうしんふかく。先師のそいをうけて志のおもむくところ。道のすしもかきり候へは〔な脱〕。御すきのいたりよに〳〵やさしくおほしめし候ほとにて。うたもなとやへうしなとをもとゝのへられ候ほぬなときて御さた候しなから。昨日御つかひにつけてと申され候しほとに。よろつこまかにおほせられ候まても候はす候つる。御心にかゝりて候。おほかたこのしうのと。たゝわたくしのこゝろさしはかりにて。代々の御法のなかれをのみたゝされ候はかり。御らんせられゆきつるに。さう

部候やらん。實敎卿にさうたうの所。ことにくしせうにもなるへく候て。いよくしゆせうにおほしめし候。らくらかへりこは。むかしよりかんのうとも申すへく候事にて候しやう。りやうせられ候へは。人のいゑのしうにもおとるましく候。又は御所方の時鎭守のかむ候事。なへては神佛のうたなえはばなれる事にて候。やかてゆめの中に返歌をたむけられ候事は。くわんけんのいたりはしり候はす。ためしもすくなくこそとおぼしめし候。かたくめでたく候。御うだの事もせんしやにいそきおほせられ候へきてうと申とて候。あなかしこく。

此安撰集雙紙上下二帖。爲當寺鎭守宮法樂。奉納御殿内畢。爲後記之。

金剛佛子興雅花押

此雙紙菊鶴まろ懇望賜之。

享保十九甲寅年。遭高祖五百遠忌。登鼎峯拜祖廟。偶得此一册子於寶性院藏中。便興雅僧正眞蹟也。閲之。則自祖大師以降當流諸師之詠吟也。非獨詠四序景色。長從歡樂。閑居雅懷。弄花翫趣。望月淸咏。護國精誠。祈王祝壽。荷宗篤情。附法嘉謀。露言溢句。實法門庭訓密家模範也。況歷叡覽。賜宸翰御製二首。法威之重乃如此也。將來把此法流者。謄此册子安聖敎函。要須察先哲護法。爲後昆龜鑑。溫古知新。豈可忽哉。

昔享保年寅四月寫之　　安流末資實諟誌

此册子中

安撰集卷第十四。八紙。　戀歌四。五十三首。

同　卷第十五。八紙。　戀歌五。五十二首。

同　卷第十六。十六紙。　雜歌上。八十六首。

同　卷第十七。十三紙。　雜歌中。七十八首。

同　卷第十八。十紙。　雜歌下。六十三首。

同　卷第十九。九紙。　釋敎上。四十九首。

同　卷第二十。十二紙。　釋敎下。四十八首。

已上七十六紙。四百二十九首。

同　卷第十四之前。六紙。　戀歌。三十九首。

此三十九首未詳何卷歌。恐第十三卷擧、戀歌都可有予五六。此集總二十卷。則自餘十卷應是四季歌。可惜不見其全本也。

第二十卷尾記。六紙。　御製。二首。興雅返歌。二首。

部合紙八十八枚。歌四百七十二首。

右本は大和とちにしたる小帖にて。歌一首を二行に書たるものなり。それゆゑ紙の數もちかひたり。又此帖のはしめに上の句たらぬ一首有。下の句たらぬもあり。みなとちめのところなれは。此あはひにていかはかりちりうせた

ろもしりかたし。

以眞教律師眞跡拜寫之了。　　　智　證

寶曆九庚辰五月。以高野山功德。聚院主空慧阿闍梨之本轉謄了。　　　義　剛

安撰和歌集のせんしや安祥寺の興雅僧正。みつから筆をそめられし本。高野の寶性院に侍〔傳脫〕はりぬ。中にもその上帖をはいつの比にかうしなひけるとなん。下帖の内も二まきあまりはかけてまたからす。光國是を見まほしく年ころ心かけしに。阿波の義剛あさり近ころうつしとりしより。去年の秋もちきたりてみせ侍けれは。そのまゝかりおきて是を拜し是を吟してよろこひぬ。ちかきころより御監のさいこうをおもひたちて事しけゝれと。ひろよるのうち。すこしのいとまをにかきうつし侍りぬ。高野の古き本はかたかなにてや侍る。實詮といひし人もかた假名にかきうつしぬ。然るに光圀ちこゑ〔し脫〕んほちにもよませんか爲には。常のかなもしよかりなんとおもひよりてかきうつしける。なかはにては本のまゝにうつしおかは。いとしゆしやうにあるへきものをと〳ゆるといへとも。いとますくなくして書あらたむるともかなはす。はた卷の末につけたる。そうらんのときの御ふみはかりを。本のまゝにかた假名にて書つけゝる。扨またところ〳〵筆のあやまり文字のあまりたらぬもありて。をはのこゝろきこえかぬるこゝ〔こゝ衍〕ろも見え侍る。そのうへ〔を脫〕はしのを文字。おくのお文字。或はひ文字。い文字。え文字。へ文字なとのいりちかひたるやうに見え侍るところもあれとも。むかしはさのみかゝはらぬともありけるにやはかりかたけれは。おほくは本のまゝにてうつしおきぬ。さりなから書あやまりにきはまりたる所々は。ひそかにあらため侍りぬ。おなしくは眞筆の本にててらしあはせみはやとおもふのみ。

つたへこしみのりにそへてわかの浦あつめし玉の數そ殘れる

よゝをへて雲の上まてふきあぐる御法の家の風は絕せし

寶曆十一年二月十八日　　　權僧正光國

寬政の八年の今よりは十年はかりのむかし。善通寺は寬充僧正のもとにありけるをうつし。浪華までもちかへりける。紙屋利兵衛といふはらあしきをとこ。よそひしてまゐらせんといつはり。うはひとりてかへさす。つひにものせられたり。量はうたの事は萬葉集古今集のしらへよりのちのはたえて心をとゝめされと。こは眞言の大德た

ちのちからをのへしものときこゆれは。心にく丶てわすれされは。としこのわたりにきたりかりえて。いつくしまのかへさ。田むらのぬしのしほみのやに。あつさ丶くるとと丶まれるうち。あつけさのたえかたきにうつ丶ともおほえす。しひてふた丶ひうつしぬ。た丶釋致のうたにこ丶ろのとるへきをしたふはかりなりけり。

寛政の八年といふとしのふみつきのつゐたちのひしるす

海量（九隊）

とのはのいまたしく。ことにあやまれるもいか丶せん。かなのたかひたるはを丶くあらためつ。大かたの人のまなはすしてかなさへしらす。うたよみかほいとかたはらいたきをならすや。

續群書類從卷第三百七十二

和歌部七

菊葉和歌集

大和歌は天地開はしまれるより以降。豐蘆原の國の風として昔のおのなかき代につたはり。みつかきの久しき跡にとゝまれり。凡歌の道くにをおさめ。民をやはらくるなかたちなれは。代々のかしこき御門是をのみもてあそひ給ふゆへに。勅撰は筑波山の陰よりもしけく。集る歌は濱の眞砂の數よりもおほし。かるかゆへに上道を好時は下是を學ふによりて。高さもいやしきも。色にふけりなさけをしる。春の朝花を見ては夕の風にちらんをおもひ。秋の夜月にむかひては。曉の雲にかくれんとをうらむ。しかのみならす郭公をきゝ雪をみるまても。折節のなさけはみな歌の種とそなれる。或はまた相坂の山にいたりて別をおしみ。或は富士の烟たえぬおもひに身をこかし。あるは吳竹のうきふしゝけき世をうらみ。或は末の露もとの雫をみても身を驚き。あるは鶴龜によそへて君をいはふにいたるまで。萬の言の葉に思ひをのへすといふとなし。かゝれはむかしより道をこのむ人は　わたくしにも集を撰てあつめなける歌。松の葉の散うせすして正木のかつらのたえぬ跡に傳れり。抑今此歌をあつむる事。いそのかみふるき跡を學ひて。式島の道をなちへるにもあらす。わつかに三十文字あまりをつらぬれと。いまた六の姿のおもむきをたにわきまへさる。ましてなにのあやめをかしるへきなれは。歌の姿はかりかたくして。雪間の草のみしかき言葉に思ひみたれ。浪ちのあしのしけきふし／＼をわけかねて。春のあしまのかへす／＼おもひとまりぬれと。秋の磯のうちやむ事をえすして。猶此集をえらひ集て。なつけて菊葉和歌集といふ。爰に四方の海しつかに風の音枝をならさす。いにしへのひしりの御代にもたちおよ

ふへき時なるに。勅撰のさたなくしてとし久しくなりぬ。しかれとも難波津のむかしに立かへる代にも成侍らは。撰集の沙汰も有ぬへし。そのときかの集に望のあらん人は。よみすてし和哥の浦わのもしは草。かきあつめんもいとまなみ。伊勢の海のなきさにしつむもくつにも玉やましると。此集のうちをひろひ出して。末の代の集に入しめんために。今のそしりをかへりみす。後のあさけりをわすれてあつめぬる事。かつは住よし玉津島のみそなはんも恐あるに。さなきともかゝる埋木の人しれぬ身のいたつらことをも。ひとつはかきおく筆の跡にあはれはかけさらめやも。

菊葉和歌集巻第一

春歌上

ふる年に春立ける日よめる　入道前左大臣

白雪のまたふる年に梓弓をしてもはるの立にける哉

従三位政子

かきくらし天霧雪の古年にそれともみえぬ春は來にけり

明德元年百首歌奉りける時　三善直衡

鶯の初音きかすは年の内に春きにけりといかてしらまし

暁立春を　今出川二條公直左大臣

朝戸明は春とそいはん古年も此暁そ名殘なりける

讀人不知

天の戸を押明方のかすめるは空にや春の立はしめけん

元日立春の心を　前右大臣

九重に袖をつらねて諸人の春と共にや立はしむらん

六十番歌合に初春をよませ給ひける　崇光院御製

紫の袖をつらねし傍の霞も幾重けふの初春

百首の歌の中に早春霞を　従三位政子

をしなへて春立色はみえてけり霞にもれぬ遠近のやま

入道前左大臣

春といへは天照月日霞籠てのとけき色のよもに滿ぬる

關路早春　源經定

やかてはや關の杉村かすむらしけふより春にあふ坂の山

前右大臣

相坂の山をや春の越ぬらんかすみそめたる關の杉むら

應永元年の名所百首歌に　三善爲德

けさよりは岩まの氷とけ初て音羽川にそ春はきにける

従三位政子

岩間よりしのひて涙の音羽川氷の下に春やきぬらん

題しらす　よみ人不知

つらゝゐし池のましみつ打とけてけさ立波に春はきにけり

六十番歌合に　御製

谷の戸も春に明行時そとやさすか道ある雪の村消

早春雪を　前右大臣

猶さえて霞もやらす春きぬといふ計なる雪のうら哉

題不知　今出川二條

鶯のなくれは春の色なからまた冬ふかき庭の雪哉

三十番歌講し侍るとき雪中鶯を　従三位政子

空さむみ春ともわかぬ雪の中にをのれ時しる鶯の聲

春の歌の中に　重有朝臣（庭田）

太山なる雪の古巣の鶯はまた打とけぬ音をや鳴らん

前右大臣

春きても雪の中なる鶯は古巣戀しきれをや鳴らん

題不知　よみ人しらす

鶯のなかすはいかて山深き里のならひに春をしらまし

經良朝臣（田向經政經雅）

谷の戸は明やられとも鶯の聲をはこめぬ朝かすみ哉

百首の歌奉りける時殘雪　三善爲徳

春立と名のみそけり深山には猶消かての松の白雪

従三位政子

春やまた太山は寒き松の葉に氷りて殘る去年の白雪

重有朝臣

都には消行比も山陰は冬みしまゝの松の白雪

春の色に外山は薄くかすめともまた谷陰は松の白雪　讀人不知

松の雪の梢より消けるをみてよめる　三善直衡

日影さす梢計は先消て下枝に殘る松の白雪

應永四年百首歌奉りける中に　三善爲徳

霞たつ野へのけしきは春なから猶消やらぬ雪の村々

題不知　源經定

春日野やまた雪消ぬ木の間よりほのかに匂ふ梅の下風

雪の梅にふりかゝりたるをみてよめる　入道前左大臣室

降つもる雪の隙よりほのみえて下紅に匂ふ梅かえ

若菜をよめる　三善直衡

いさやけふ若菜摘てん明日はまた春日の野邊に雪もこそふれ

明德二年百首の歌に　従三位政子

わかなつむ春の野守の袖の上にはらひもあへぬ淡雪そふる

前右大臣

野守たに摘へき比はよも知らし雪降うつむ下の若菜は

田若菜を　入道前左大臣

みさひゐる刈田の面の薄氷くたきてゑくの若菜をそ摘

百首歌の中に　寳富朝臣母

消やらぬ野澤の雪間ふみわけて氷の下のわかなをそ摘

權大納言公行
消殘る澤邊の雪に袖ぬれて衣手寒く若菜をそ摘
三善直衡
袖ぬらす雪消の水は氷るとも澤の根芹をけふや摘まし
從三位政子
春の歌の中に
春日野の雪の下なる若草は結ほゝれてや萠んとすらん
前右大臣
草漸青と云事を
霜枯しおとろの色をそのまゝに村々青きのへの若草
重有朝臣
いつのまに青葉の色に萠ぬらん霜枯はてし野邊の春草
題をさくりて歌よみけるついてに春駒嘶といふ事
を
入道前左大臣
萠出る春の若草すさめてや立野の駒の友いはゆらし
從三位政子
應永四年名所百首歌に
高砂の松も一しほ色やそふ霞む尾上の春のけしきに
三善爲德
百首歌奉りける中に霞を
山高み霞こめたる明ほのはまほにもみえぬ峯の松原
前右大臣
山霞を
立こむる霞幾重に成ぬらん常より遠き山の色哉
實富朝臣苑亭
題しらす
朝日影にほへる山はほのかにてすそ野はふかく立霞哉
よみ人しらす
朝日影匂へるやまの薄かすみそれしも春の情とそみる
三善爲德
霞中瀧といふ事を
いつくとも山たに見えぬ霞にも立もらさるゝ瀧の音哉
源　經定
同し心を
霞より立もらさるゝ浪の音に今そ音羽の瀧もかひある
入道前左大臣
明德元年百首に海邊霞を
海原や鹽路はるかにかすますは春の心をいかてしるへき
從三位政子
海原や霞を分てこく舟のよるへもしらぬ浦の明ほの
前右大臣
なこの海や浪には春の色なきに霞にしるき浦の遠かた
重有朝臣
百首の中に
滿汐にかくれぬ浦の松もみな梢をこめて立霞哉
今出川二條
霞滿村といふ事を
見渡せは松の村立浪の上霞にもれぬ浦の朝明
實富朝臣
百首の中に海上霞
夕鹽の滿干も更にしられしな霞わたれる遠の海原
前右大臣
霞隔梅といふ事を
咲色は霞へたてゝみえれとも風に知るゝ遠の梅か枝
よみ人しらす

さそひくる風のしるへに花そ知る霞かくれの遠の梅かゝ
　　　　　　　　　　従三位政子
心あらは梅咲山の夕霞花も匂も立なへたてそ
　百首の中に野梅を　　　　入道前左大臣
いつくより野への春風さそふらん木の下しらぬ梅かゝそふく
　春の歌の中に　　　　三善爲德
そことなく吹くる風の匂へるはいつくも梅や盛成らん
　題しらす　　　　前右大臣
盛なる野への梅かゝとめくれは花のあるしと鶯そ啼
　六十番歌合に　　　　前參議公敦（三條文明十一右大臣）
朝な／＼きゐる軒端の梅か枝を宿と定めて鶯そ啼
　鶯の梅の枝になきけるをみてよめる　　従三位政子
鶯のきゐる軒端の梅の花をのか羽風にちる匂ひ哉
　軒梅を　　　　崇光院三位
色香には心とめしと思ふ／＼軒端の梅に袖かけてけり
　　　　　　　　三善爲德
なのつからおらても袖に匂ふ哉軒端の梅の花の盛は
　　　　　　　　入道前左大臣
軒近き梅のにほひをさそひきて袂になるゝ庭の春風
　梅移袖といふことを　　　　よみ人しらす
心こそ花にうつらめ袖までも匂ひにそむる梅の下風

　同しこゝろを　　　　藤原友倚
おる袖にふかくも移る梅か香を散ては花の形見とやせん
　明德四年の春伏見殿にまいりて久しく侍ける比あ
　る所に梅のおもしろく咲たりけるを御覽せらるゝ
　御ともにまいりてあそひ侍しことを次の年の春去年
　のときわすれかたきよしうけ給るとて梅か枝につ
　けて　　　　御製
袖ふれし去年の匂ひをわすれすは思ひも出よ梅の下風
　御返し　　　　従三位政子
わすれすよ去年みし梅の色も香も心にとまる花の下影
　題しらす　　　　源經定
梅の花よそに匂はゝしるへせよ風の傳にも人のとふまて
　百首の歌奉りける中に　　　　三善爲德
軒近き梢に風やかよふらし袂も同し梅か香そする
　隣に梅の咲たりけるをみてよめる　　前右大臣
なかめやる情のみかは垣こしに匂を送る梅の下風
　題をさくりて歌つかうまつりける時隣家梅を
　　　　　　　　重有朝臣
かきほよりそなたの梅やちりくらし咲ぬ軒端にかほる春風
　故郷の梅を讀る　　　　よみ人不知
難波津のむかしをかけて匂ふ之荒ぬる里に咲や此花

梅の花むかしなからに匂へともみし世にそ似ぬ古郷の春　従三位政子

誰か來て袖にもふれん古郷の軒端の梅は咲匂へとも　前右大臣

春の歌の中に

さそひ來て袂に移す梅か香に情そふかき春の夕風　源經定

梅薫夜風と云ことを

寢れの夢にも梅を忘るなと枕にさそふ庭の春風　従三位政子

五十首歌奉りけるに月前梅を

いとゝしく色そふ梅の情かな花の木の間に在明の月　重有朝臣

花にうつる梅の梢の月影はかすむもふかき情とそみる　よみ人しらす

應永五年百首歌に

霞む夜の月にはそれとみえれとも香をしるへにて手折梅か枝　權大納言公行（後今出川應永十八左大臣）

梅欲散と云ことを

うつろはんと花はするとも心してしはしさそふな梅の春風　三善爲德

今はゝやうつろひぬとや春風もさそはぬ梅の散んとすらん　源經定

溪落梅を

水上の春の色しそしられけるなかれて匂ふ谷川の梅　前右大臣

梅浮水と云ことを

ちりかゝる梅の下水匂はすは浪にや花のまかひはてまし　従三位政子

五十番歌合に

にほはすは浪かとのみそ思ふへき梅散かゝる谷の下水　三善爲德

百首歌の中に

谷川のその水上に梅やちる咲木末も花の白波　入道前左大臣

岸柳をよめる

うちなひく末に岸打浪かけて柳の髪をあらふ春風　前右大臣

水邊古柳を

浪の上に緑の糸をくりはへて幾代か經ぬる岸の青柳　従三位政子

嘉慶二年の百首歌に

河きしの柳の陰は浪にうきてなひかぬ時もなひくとそみる　入道前左大臣

名所百首歌たてまつりける時

吹音ものとけかりけり青柳の葛木山の春の夕風　三善爲德

春の歌の中に

青柳の緑になひく春風に音こそなけれ色はみえつゝ　重有朝臣

春くれは緑の糸を染かけて風にかたよる玉の緒柳　よみ人しらす

夕附日庭の梢に影みえて緑色こき青柳の糸　前右大臣

春雨の雲の返しの風過て露ぬきちらす青柳の糸　實富朝臣母

題しらす　従三位政子
春雨の宿のなかめのさひしきを花より先に問ふ人もかな
伏見殿にて六十番歌合に春雨　前大納言重資（庭田）
つく／＼と軒の糸水よるかけてやまぬなかめの春の一比　宰相入道了禅
そむけたる壁の灯影ふけて心もしめる春雨のやと
春の歌の中に　覺澄法師
春雨の降とはなしに山の端も霞にこめてみえぬ比かな
夕春雨を　従三位政子
かすみつる山さへ雲に立消て靜にくるゝ春雨の空
題しらす　入道前左大臣
春日影うらゝにさして百千鳥さへつる聲ものとけかりけり
百首の中に雲端歸鴈を　實富朝臣母
朝朗かすめる空の雲間よりたえ／＼みえて歸る鴈かね
歸鴈幽と云事を　よみ人不知
とをさかる雲井に聲はほのかにて霞の底に鴈そ消行
應永百首の歌に深夜歸鴈を　前右大臣
ふかき夜をしのひて鴈や歸るらん霞の底に聲の籠れる
同し心を　藤原友尙
ふかき夜に何を急きて天の戸の明るもまたす鴈歸るらん
明徳三年百首に　權大納言公行
越路まて思ふも遠しはる／＼と霞を分て歸る鴈金
春の歌の中に　入道前左大臣室
こしちには都に勝る花や咲くる春毎に歸る鴈金
歸鴈不駐といふ事を　前右大臣
都をはよそよりきてもみるへきに花にとまらす歸る鴈金
歸鴈の歌の中に　よみ人しらす
をのかすむ越ちの春はいかなれは都の花に鴈歸るらん
實富朝臣母
有明の月もおほろのふかき夜に雲路まとはてかへる鴈金
重有朝臣
幾行と數こそみえねほの／＼と朧月夜に歸る鴈金
前右大臣
花のみか月もかすめるあかつきのあたら夜こめて歸る鴈金
百首の歌に春曙のこゝろを
有明は霞の底にほのかにて花にかほれる春の曙
入道前左大臣
明行は花の梢に光さす有明の月もしらみぬる哉
都春曙と云事を　従三位政子
なかめにはたくひやあらぬ花かほる都の春のあけほのゝ空
題不知　實富朝臣母
吉野山よしや恨し朝霞花なきほとは立こむるとも

源經定
吉野山いつれか花の色ならんひとつに匂ふ峰の白雪
三善爲德
ほの〳〵と霞の隙に山櫻それかと計みゆろ白雪
待花の心を　前右大臣
咲やらぬ梢にゆるく音するゝ花の紐とけ春の山風
百首の歌に雨中待花といふ事を　從三位政子
さひしさを待にかへても慰ぬ花の紐とく雨と思へは
同し心を　三善爲德
待佗ろ花のひもとく雨ならはよしや猶ふれ春の日くらし
伏見殿にて五十首歌講せられける時に花綻雨と云
事を　宰相入道了禪
けさの雨にほころひにけり曉の風につれなき花の袂は
花漸開と云事を　前右大臣
打つゝき木のめ春雨降ぬれはつれなき花もやゝ咲にけり
題不知　よみ人しらす
春やとき花や日數をいそくらしことしはまたて早咲にけり
花の歌の中に　實富朝臣
誰宿に初花櫻咲にけりまたてや人の盛みろらん

菊葉和歌集卷第二

春歌下

明德二年の百首に初花を　從三位政子
昨日まて霞てみえし山の端にけさよりかゝろ花の白雲
花の歌の中に　實富朝臣母
立こむろ峯の霞の絶まよりほのかにみゆろ山櫻哉
源經定
櫻咲春の山邊の夕霞たなひく色そ花にかほれろ
よみ人しらず
山櫻霞の隙ににほはすはなへての雲とみてやはてまし
康應百首に　前右大臣
夕日影さすや高根の山櫻かすめとしろき花の色哉
應永二年の百首に暮山花を　從三位政子
櫻咲外山はしはし暮やらて入日を殘す花の色哉
三善爲德
夕日さす外山の櫻今は猶たくひもあらぬ色に見ゆる
よみ人不知
櫻咲外山の雲は夕日にて松ある嶺の色そ暮行
伏見殿にて五十首歌講せられけるに山花を　崇光院二條
吉野山高根の櫻盛にて花と雲との色そわかれぬ
百首の中に　權大納言公行

吉野山峯の櫻の咲しより風上つゝく花の白雲
實富朝臣母
なしなへて雲とや人のなかむらん吉野の山の花の盛は
花色似雲といふ事をよませ給ひける　崇光院御製
花なれや夕ゐる雲にまかひつゝ日影の跡に匂ふ松原
題不知　入道前左大臣
咲みたれかほる櫻の松にすきて緑の色そ猶はへも有
百首歌の中に　前右大臣
花とみて分入山を詠れはまたき梢にかゝる白雲
尋花の心を　權大納言公行
太山邊は尋かねけり櫻花ひはらかくれに咲をしられは
三善爲德
山ふかみ尋暮さん櫻花木の下蔭を宿とするとも
入道前左大臣
尋ける道をとはしと枝折して吉野の奥の花を見る哉
山路尋花といふ事を　前右大臣
歸るへきかたはいつくそ尋入花にそまとふ春の太山路
名所百首歌に三輪山　源經定
三輪の山しるしの杉もこの比は花のかをに猶や尋ん
從三位政子
比比は花のかさしをかけてけり三輪の檜原に匂ふ春風

花の歌の中に　讀人しらず
なしなへて花の盛とみゆる哉行かふ人の櫻かさせは
前右大臣
いつくにも移ふ花はなかりけりなへて櫻の盛なる比
題をさくりて歌よみけるついてに櫻花盛開といふ
ことを
つほみける片枝の櫻皆咲てけふこそ花の盛なりけれ
題不知　實富朝臣
木々毎に盛過さすなかむとて春の心そ花に隙なき
花見にまかりてよめる　三善直衡
あくかるゝ心はかりにけふも又身をは花にやまかせても見ん
三善爲德
永しとはいかて思はん春の日もなかめにあかぬ花の色哉
伏見殿にて花歌五十首よませ給し中に尋花を
從三位政子
尋來てけふも暮しぬいさゝらは今夜は花の陰にやとらん
花の歌の中に　前右大臣
みても猶あかぬ心にまかせなは花の下のみ宿りならまし
權大納言公行
暮ぬとてあかぬ櫻に歸れとも心はとまる花のかけ哉
野花留人と云事を　三善爲德

かくて只野へに今宵は宿りせん見て過かたき花の夕はへ

同し心を　従三位政子

歸るさは暮とも野へに立よらん行過ぬへき花の陰かは

伏見殿にて五十首歌講せられける時折花

入道前左大臣

人もまた家土産にとや手折らん我のみならすかさす花哉

題不知　三善直衡

言の葉も及はぬ程の花なれは折てやかくと人に語らん

花の枝をつかはすとて　従三位政子

せめてこのおる枝なりとなかめてよ尋て四方の花はみすとも

返し　前右大臣

匂ふらん四方の櫻の盛をも今そおりしる君の情に

人の許より花の枝を送りたりける返事に

權大納言公行

なへてよの梢より猶色そそふ君か情の花と思へは

春の比伏見殿に久しく侍しをを思ひ出て次の年の

花の比申送る　従三位政子

わすれすよ去年の彌生の花の色に馴し伏見の頃日の春

かへし　従二位榮子

さそなけに思ひ出らんともにみし去年の彌生の花の曙

百首の歌に故郷夕花をよめる　實富朝臣母

心あらん人にみせはや青丹好南良の都の花の夕はへ

重有朝臣

故里もみしや昔の春はかり面かはりせぬ花の夕はへ

應永五年の百首に朝見花と云事を　従三位政子

秋はてゝ有しにかはる古里も花はみし世の春の夕暮

三善爲德

朝朗霞にかをる花の色を夕はへのみと何思ひけん

花の歌の中に　入道前左大臣

入日影花のとふさにうつろひて薄紅にかをる夕映

夕花を　従二位榮子

雲にいたみ風にうれふる散かたの花の哀は晩鐘の空

讀人しらす

又やみん入日かけろふ遠山の霞にかをる花の夕映

源經定

明日もこんけふは見殘す花の色を夜半にちらすな春の山風

題不知　重有朝臣

春霞心しあらはへたつなよ我なかめなる峯の櫻を

五十番歌合に松隔花　従三位政子

さのみやは隔はつへき嶺の松木の間の花の風の過なは

同し心を　三善爲德

いとふへき風こそ今はまたれけれ松のあなたの花やみゆると

深山櫻を　源經定
梢こそ太山かくれの花ならめ散をはみせよ嶺の春風
百首歌の中に遠望山花　前右大臣
見渡せは外山に花や咲ぬらん風にみたれぬ雲の一村
題不知　よみ人しらす
曙やいつれを花の色そともわかれぬ嶺に匂ふ白雲　經有朝臣
伏見山松あるかたは夜を分て（こめ歟）花よりしらむ曙の色
花の歌の中に　從三位政子
もろ影は木の間ほのかに霞めとも月にいとはぬ花の白雲　よみ人しらす
咲匂ふ花の雲間をもりかれて梢にかすむ在明の月
伏見殿にて六十番歌合に花間月　從三位資蔭（田向祖）
月はまして霞める影に移りあふ花の上たに打こもりつゝ　源經定
もろ影はさはらぬ花の雲なれとけさ木間に霞月哉　重有朝臣
あらしふく花の雲間をもろ影やゝかて梢に月そはれ行
花の歌の中に　前右大臣
みても又猶みまほしきなかめ哉花のかほりの月の有明
題しらす　今出川二條
咲匂ふ花の盛はふりつみし梢の雪をみる心地して　よみ人しらす
櫻ちる春の山邊を分くれは思はぬ雪に道まとふ之
百首の中に　從三位政子
櫻花ちりくる嶺の春風に麓の里は雪そふりしく　三善爲德
吉野山峯の梢のちりしきて麓か埋む花の白雪
名所百首の歌に　前右大臣
春風よちらさてしはし手向山花の盛を神にまかせて　讀人不知
ぬさとちる花の錦を手向山さそふ嵐も神のまに〳〵　從三位政子
散行はいつくの神に手向山しらすも花の風にまかせて　權大納言公行
春ことに神に手向の山さくら散りてそかゝる木々のゆふして　三善爲德
梢にも木綿四手かけて見ゆる哉手向の山の花の盛は　前右大臣
明德二年の百首の歌に
神杉によその櫻をさそひきて春のしるしを見する山風
關路花を　從三位政子
あふ坂や杉の下道ちる花に雪をそこゆる關の旅人

題不知　　　　　　　　　　　　　讀人しらす
思ひきやうつの山こえちる花に蔦の下道雪わけんとは
重有朝臣
山風にかたも定めすちる花はいつくの里に雪とふるらん
湖上落花を　　　　　　　　　　　前右大臣
鳰のうみや比良の山風吹なへに梢もしらぬ花そ散くる
同し心を　　　　　　　　　　　　従三位政子
さそひきてつりする蜑の袖迄も花の雪ちるしかの浦風
河邊花をよめる　　　　　　　　　實富朝臣母
吉野川こほらぬ水にかきくれてふれとも消ぬ花の白雪
よみ人しらす
吉野川嶺の櫻の影みえてちらぬに浮ふ花の白波
池に花のちりたるをみてよめる　　入道前左大臣
底清き池の鏡の水の上にくもらてなかす花の白波
御餝おろさせての比人々に花の歌あまためされけるついてに花散水といふことをよませ給ひける
崇光院御製
散かゝる花のかたみの埋水有しにかはる影もはつかし
花をよめる　　　　　　　　　　　三善直衡
なかめてもあかぬ櫻の花盛ちるをおしまぬ人はあらしな
花の歌の中に　　　　　　　　　　従三位政子
春風よ心してふけ櫻花ちるはうきよの習なりとも
前右大臣
さらてたにもろき習そよきてふけちるへき比の花の下風
題しらす　　　　　　　　　　　　よみ人不知
ちるをは風の心にまかせすは何をか花の恨ならまし
重有朝臣
きのふより移ふとみし櫻花あらしのまゝにけふは散つゝ
花を折て人の許へやるとて　　　　前右大臣
みぬ人の為にそ手折明日よりはうつろひぬへき花と思へは
都の花をおりて伏見なる人の許へ申つかはしける
従三位政子
此えたに宮古の春も思ひやれさして伏見の花はみるとも
題不知　　　　　　　　　　　　　崇光院三位
霞すは何を春とか思ひ分ん木の本しろき雪の村消
花随風と云ことを　　　　　　　　前右大臣
いとへとも折から風も哀なる木のもとしらぬ花を誘へは
同し心を　　　　　　　　　　　　三善為德
花よりも風の心そわきてうきをのかまに〳〵誘ふと思へは
花半落と云事を　　　　　　　　　入道前左大臣
思ひあへぬけさの嵐にさそはれて花の梢も半ちりぬる
同しこゝろを　　　　　　　　　　従三位政子

山さくらいかに嵐のさそひてかちるほと花の又殘るらん

花の歌の中に　三善爲徳

咲そめし梢はかりは先ちりてしつえに殘る花の白雪

權大納言公行

ちりまかふ花の木陰に立寄れは袖をぬらさぬ雪そかゝれる

題不知　よみ人しらす

雪かとてちりくる花をはらはしよ袖につゝみて形見とゝせん

應永五年の百首に花似雪と云事を　實富朝臣

空よりはふるとも更にみえれとも梢につもる花の白雪

三善爲徳

あらしふく木のもとゝにちる花を村々積る雪かとそみる

從三位政子

木のもとにさそふ嵐の寒からは猶ちる花や雪にまかはん

源經定

梢にてみしよりも猶山風に散かふ花そ雪にまかへる

花のちるをみてよめる　前右大臣

ちるしもそ情はまさる櫻花庭も梢も雪となかめて

庭に花のちりしけるを風の吹たてけるをみてよめる　從三位政子

庭にたにちりしく花を殘さしと又吹立てさそふ春風

花の歌の中に　重有朝臣

庭しろく木の下風はかたよりて村々つもる花の薄雪

前右大臣

根にかへる名殘をみせて木の下にちる花をさへ誘ふ春風

よみ人不知

更にまた散しく花を吹たてゝ梢にかへす庭の春風

三十首歌講せられけるに庭落花を　御製

春ふかき苔の緑に染られて庭に色ある花のうす雪

百首歌奉りける中に曉庭落花　三善爲徳

在明の影ほのかなる庭の面に光をそへて花そ散しく

前右大臣

影うすき在明したふ庭の面に名殘を添て花そ散くる

實富朝臣

わすれめや嵐に花は散しきて在明殘る庭の面影

從三位政子

庭しろく散しく花の雪の上にかすまて移る在明の月

題不知　讀人不知

散花の忘かたみによしやみん梢にはるゝ在明の月

百首歌の中に春月を　實富朝臣

なかむれは木の間ほのかに影みえて霞に殘る春の夜の月

六十番歌合に春夕月を　崇光院御製

夕くもり霞にわかぬ山の端にまたれぬ月そ下にほのめく

百首歌の中に　三善直衡

待出るかひこそなけれ春の夜の朧にみゆる月の光は

春の夜の月をみてよめる　今出川二條

春の夜は朧なりしも中々に哀そひける月の影哉

春曉月を　從三位政子

朧なる影しも殊に春の夜の深き哀は在明の月

よみ人しらす

秋よりもふかき情は春そみんおほろの月の有明の空

前右大臣

ほの〳〵と霞の底に影消て殘るもうすき在明の月

應永四年名所百首に鹽竈浦　從三位政子

朧夜の月にたくもの烟たにかすみなそへそ鹽かまの浦

濱春月を　前右大臣

みつの濱松は一しほかすめとも眞砂にしろき春の夜の月

河上春月を　重有朝臣

なかれゆく河瀨の水は清けれと月にかすめる浪の上哉

實富朝臣母

吉野川花のしからみせきとめて浪になかれぬ春の夜の月

題をさくりて人々歌よみけるに山躑躅

よみ人しらす

山川の色なき浪も色そある岩ねのつゝし影をうつして

應永五年の百首に　從三位政子

みし花は青葉の山の岩つゝしあらぬ情の色もめつらし

苗代をよめる　三善爲德

今ははやたれまきぬとやしめはへて水せき入るゝをたの苗代

源經定

苗代に宇治の川水せき入てふしみのをたを返すこのころ

題しらす　今出川二條

たえすなく蛙の聲は苗代にまかする水や嬉しかるらん

六十番歌合に　經有朝臣庭田

花の跡の青葉にくらき池水に春物ふかく啼蛙哉

三十首歌講せられける中に池欵冬を　經良朝臣

咲おもる影やうつりて水底も同し盛の池の山吹

岸欵冬　よみ人不知

吉野川花になかれし浪は又あらぬ色なる岸の山吹

名所欵冬といふ事を　前右大臣

あかすとやなのか物から里人の手折て歸る井手の山吹

權大納言公行母

花盛とふともいかて答ふへき口なし色の井手の山吹

重有朝臣

里人におるとかたるな口なしの名におふ花の井手の山吹

百首の歌の中に　源經定

ぬれつゝも折てこそみめ袖の上に田籠の浦藤浪はかくとも
前右大臣
田子の浦や浪こそ春は殘りけれ底さへ匂ふ藤の盛は
池藤を同しくよめる
汀なる松のしつえの藤波を浪もてあらふ池の春風
藤花隨風と云事を　從三位政子
梢まて浪はこゆれと松の葉は露たにぬれぬ藤の下風
百首の歌に藤埋松と云ことを
さく藤に松のうれはは埋もれて花より下に嵐をそきく
同し心を　三善爲徳
下枝まて咲てかゝれる藤波に松はそれともみえわかぬ哉
春の歌の中に　入道前左大臣室
紫の雲とやみえん彌生の霞に匂ふ藤の盛は
彌生の末つかたよめる　權大納言公行母
おしめとも彌生も末に成りにけり永き月日を花に暮して
伏見殿にて三十首講せられ侍る中に殘花を　從二位榮子
心ありて暮行春をしたひかほに咲をくれぬる遲櫻哉
名所百首の中に　從三位政子
行春を忍ふの山の奧まても今は嵐の花や散らん
前右大臣

散花の名殘もいはて忍山心の奧を誰にかたらん
よみ人不知
はなちりし跡を忍ふの山のはにかたみかほなる峯の白雲
題しらす　實富朝臣
散花の名殘を思ふ比しもそ面影うかふ嶺の白雲
暮山花を　入道前左大臣
彌生山やよひの末の櫻花と春との名殘悲しも
題しらす　三善爲徳
吹風に散かふ花の浪こえて末の松山春そ暮行
暮春の歌に　重有朝臣
花にのみなかめし山の薄かすみそをたに殘れ春は暮とも
三十首歌めされけるついてに　御製
花もちり鳥さへ歸る夕山や霞計に殘る春哉
伏見殿にて三月盡に人々に歌めされける中に暮春
春鶯を　從三位政子
をのかれにとまる習ひはなけれともなけや鶯春の名殘を
入道前左大臣
鶯の聲は老つゝ花散て名殘悲しき春の暮哉
春の歌の中に　讀人不知
春はよしくれはてぬとも花鳥の色香はとまる習ひともかな
題しらす　御製

行春にノもなはましをけふも猶澤田の雁そ歸りをくるゝ　入道前左大臣

江暮春を

難波江や浪まの霞立消て春の別の色そ近つく　前右大臣

船中暮春を

春くるゝ色をもわかぬ舟路にも浪の花こそ傍にたて　從二位榮子

彌生の末に在明をみてよめる

かすめたゝ彌生の末の在明よそをたに春の忘形見に　よみ人しらす

暮春月を

山の端にかすみて薄き有明の殘る計に春そすくなき　前右大臣

暮て行く春もほのかに在明の霞る影も名殘こけり　三善直衡

暮春の心をよめる

何方に暮ゆく春の別ともしらぬ名殘を何したふらん　從三位政子

應永五年の百首に殘春少と云事を

いかにせん春の日數をかそふれは今はの暮は明日の入相　宰相入道了禪

三月盡雨を

さもあれ空かきくらし降雨にさはらてけふや春のくるらん　前右大臣

同し心を

降雨に木々の梢も枝たれて暮行春をしたひかほなる　三善爲德

三月盡のこゝろを

けふにはや春も名殘のくれは鳥つやなくつくる日數なりけり

菊葉和歌集卷第三

夏歌

題不知　よみ人しらす

けふまては春と思はん空は猶霞る空に夏をまかへて　前右大臣

應永元年百首に更衣を

今日といへは習ひ成共唐衣かへしやしはし春の形見に　入道前左大臣

禁中更衣を

雲の上の朝政つとむとて明れはかふる夏衣哉　權大納言公行

いつしかに涼しくみえてけさよりは白かされきる雲の上人　從三位政子

四月一日人々歌よみけるついてに

花にそめし心はいつか移りなんうすき袂にけさはかふ共　三善爲德

人なみに袂はうすくなしぬれと心にはまた春も忘れす　前右大臣

ぬきかへてけさはひとへの衣手の薄きも春を隔ぬる哉　よみ人しらす

卯月のはしめ遲櫻の咲たりけるをみてよめる

傍は春みし花にかはられと青葉かちなる遲櫻哉　入道前左大臣

百首の歌の中に

飽さりし春の別の悲しさに面影うかふ遲櫻哉

權大納言公行
夏かけて待もさかりの遲櫻春の名殘に心してさけ
三善爲德
過て行く春のけしきも夏山に名殘を殘すなそ櫻哉
殘花在何といふことを　從三位政子
けふはまたふかき山邊を尋みん春におくれて花や殘ると
題をさぐりて歌つかうまつりけるに聞新樹を　源　經定
みし花を忍ひの岡の夏木立青葉の外は俤もなし
詠仁不知
夏もはやいまきの岡の青木立中々黄る色も珍らし
名所百首の歌に　權大納言公行
夏ふかくしけりにけりな和泉なるしのたの森の千枝の下蔭
嶺卯花を　前右大臣
しけりあふ外面の山の木の間より雲か月かと嶺の卯の花
同し心を　三善爲德
春過て猶消やらぬ白雪とよそにそまかふ嶺の卯の花
百首歌に里卯花　從三位政子
日影にも消こそやられ玉川の里寒からぬ雪の卯の花
六十番歌合に　詠人不知
朝附日影さすかたの垣ねにも猶こそつもれ雪の卯の花

嘉曆百首に　入道前左大臣
曇なく月にみかける玉川の里白妙にさける卯花
三善爲德
夕月夜入ても影は殘りけり卯の花咲るやとのかきほに
前右大臣
夕月夜さすかとみれは卯花の垣根つゝきに咲る之けり
夏歌の中に　三善直衡
卯花の垣根つゝきに白妙の衣手かけてほすかとそみる
卯花隣路といふことを　重有朝臣
咲あまる垣根の外の道迄もさなから埋む雪の卯花
同し心を　實富朝臣母
卯花の咲る垣根は散はてゝ道こそ雪のなかめなりけれ
賀茂祭の日よめる　從三位政子
神まつるそのかみよりの諸かつら幾代の年をかけてきぬらん
三善直衡
いつよりかそのかみ山の諸葉草けふのみあれに影はそめけん
採葵と云事を　權大納言公行
釣簾迄もけふのみあれの諸葉草かさゝてもるゝ宿はあらしな
夏歌の中に　三善爲德
またれつゝをのか時そと時鳥年にかはらぬ初音なれとも
源　經定

郭公心も空に待そとはしらて初音やつれなかるらん
明徳二年百首に待郭公　前右大臣
待人の心つくせと時鳥をのか五月もつれなかるらん
五十番歌合に　從三位政子
我にこそつれなくとても時鳥この夕暮になかて過めや
百首の中に　讀人不知
またすとも今夜の空はなきつへしつれなの聲や山時鳥
入道前左大臣
よひ〳〵に待かれ山の時鳥いつ中空に鳴わたるへき
題不知　重有朝臣
時鳥まつ夕暮と又過ぬさりとも月の明方の空
郭公歌あまたよみ侍る中に　從三位政子
つれなさも折にこそよれ時鳥なけや雲間の在明の空
待し宵の空は物かは郭公村雨なから有明の月
源經定
時鳥きなかぬ迄も待れけり雲間の月の村雨の空
曉聞郭公と云事を　前右大臣
在明の雲間を過る時鳥今そつれなき初音をはきく
よみ人不知
聞はやと待つるかひも在明の雲間に名のる山郭公
應永百首の歌奉りけるに　藤原友尙

時鳥待えて空を詠れは聲も雲間に在明の月
從三位政子
なけや猶聲なおしみそ時鳥ほのかになのる在明の空
雨中郭公　重有朝臣
五月雨の雲間の月のほのかにも山郭公初音鳴なり
百首歌奉りけるに杜郭公を　三善直衡
ほのかなる聲を糺の杜に猶さたかにもなけ山時鳥
前右大臣
夕月夜ほのかになのる時鳥たれにしのたの杜の初音そ
從三位政子
郭公たれにしのたの杜過てよそに初音をなかんとすらん
郭公のなくを聞てよめる や脱歟　權大納言公行
初音なく山時鳥まてしはし今聞ぬと人にかたらん
百首の中に　入道前左大臣
待といふあまたの人に聞せはや我身におしき山時鳥
里郭公　前右大臣
また聞ぬ里のためとやおしむらん一聲過る山郭公
源經定
待里になとやきなかぬ時鳥よそにふりぬる初音なれとも
伏見殿にて六十番歌合に　よみ人しらす
待さとに先をとつれよ時鳥都もをのか栖ならねは

百首の歌に谷郭公を　前右大臣
谷の戸を今出そむる時鳥みやこもおなし初音成らん
三善爲德
都には今や出らん谷の戸に先名乘つる郭公哉
興全法師
應永百首歌奉りける時
山ふかくしけれる谷の時鳥鳴音計にしられぬる哉
三善直衡
岡郭公を
五月闇をのか比とや時鳥いまきの岡に初音なくゝ
題をさくりて人々歌よみける時海郭公を　前右大臣
郭公磯山出てなのるゝ釣する蜑も初音聞とや
人傳郭公といふ事を　從三位政子
人はゝや聞ぬといふに時鳥我身におしむ初音をそしる
讀人不知
時鳥なのると人の告なくは後の一聲きかて過なん
應永五年の百首に　權大納言公行
聲しきる五月のよひの時鳥をのか時とは誰か告けん
重有朝臣
この比は人にまたれし時鳥をのか五月の夕闇の空
五月晦日の夜人々歌よみけるついてに原郭公とい
ふことをよめる　實富朝臣母
なけや／＼山田の原の時鳥五月の空も今宵計そ
曉郭公を　前右大臣
曉の雲井に過る時鳥たゝ一聲にやかてあけぬる
入道前左大臣
あかつきの老のねさめを聞かほに山時鳥音信てゆく
百首の中に　從三位政子
時鳥待らん人に聞せはや我ねさめにはおしき初音を
三善爲德
ねさめして人も聞らん時鳥思もあへぬ曉の聲
康應百首に　實富朝臣母
時鳥待宵更て曉のねさめの床に初音をそきく
郭公類と云事を　前右大臣
人每にねさめの初音もらさしと類になのる時鳥哉
同し心を　從三位政子
聞のこす人はあらしな時鳥聲のかきりを今なのるなり
よみ人不知
一聲はさたかならすと思ふまにかされてなのる時鳥哉
題不知　實富朝臣母
待わひてまとろむ程の時鳥たゝ一聲は夢かうつゝか
源經定
時鳥夢かうつゝか待宵の枕にちかき忍ひねの聲

聞郭公　　三善爲德
何方と聞て定めぬ時鳥只一聲の過る雲路を
軒菖蒲を　　讀人不知
をしなへて五月のけふの菖蒲草ふかぬ軒ははあらしとそ思ふ
従三位政子
五月雨にあやめの末葉露おちて雫もかほる軒の玉水
百首の中に沼菖蒲を　　入道前左大臣
けふ過は岩かき沼のあやめくさ只徒にかるや有なん
三善爲德
水ふかみ茂れる沼のあやめくさ引てふ人の袖やぬるらん
古池菖蒲を　　よみ人しらす
水草ゐてふりぬる池の菖蒲草苅人なみに風そかをれる
前右大臣
五月雨にいかほの沼のいかはかりあやめの末に浪もこゆらん
採早苗　　重有朝臣
早苗とる田子のもすそに水こえて植やかぬらん五月雨の比
伏見殿にて六十番歌合に　　行俊朝臣
湊田におりたつ田子のみしまつ(へ脱)にもすそは濡てとる早苗哉
岡邊早苗を　　入道前左大臣
名にしおはゝ水は絶しな早苗とるなきさの岡の近き田つらに
夏の歌の中に　　よみ人不知
水たゝむ千町の早苗とりくらす田子のもすそに月そいさよふ
六十番歌合に　　前大納言重資
緑清き澤田のさなへ水白く涼しさつゝく宇治の川浪
伏見殿にまいり侍おりふし五月雨のいとふりて眺
望も殊におもしろくみえけれは思ひつゝけゝる
従三位政子
五月雨に伏見の田面水みちて浪もひとつにつゝく宇治川
渓五月雨を　　入道前左大
岩くらき細谷川とおもひしに水かさそ増る五月雨の比
名所百首の中に　　前右大臣
五月雨に淀の渡のまこもくさかる人なみに朽やしぬらん
五月雨に駒もすさめすまこも草美豆の御牧の浪にくちぬる
よみ人不知
徒に美豆の御牧のまこも草からて浪こす五月雨の比
五月雨久しと云ことを　　従三位政子
さみたれの晴ぬ日數も久堅の天のかく山雲ふかき比
今出川二條
いつとても晴ぬなかめの五月雨は珍しからぬ日數をそふる
源経定
けふも又軒の糸水よるかけて明日もやふらん五月雨の空
應永五年百首歌奉りけるに五月雨晴　　三善爲德

昨日まで雲ふかゝりし五月雨のけさより晴る日影をそ見る

同し心を　従三位政子

折しもあれ五月雨はるゝ雲まよりやかても出る有明の月　雅有朝臣

杜五月雨を

五月雨に杜の下葉も朽ぬへし木の間を傳ふ露の雫に　三善爲徳

下草も猶しけるらし五月雨の信太の杜の千枝の雫に

百首の歌に岡五月雨を　前右大臣

しけりあふ葛の下葉も朽ぬへし五月雨つゝく水莖の岡

題不知　入道前右大臣

青木立しけれる杜に樗咲うす紫の色はまかはす

百首歌の中に枕盧橘を　權大納言公行

枕まて風のしるへはなけれともをのかまに／＼かほる立花　前右大臣

夢路まて薫りにけりなさめて後同し匂ひの軒の橘

題不知　従三位政子

夢覺る折にもあれな橘の匂ふ枕に在明の月

故郷橘を　よみ人不知

袖ふれし人はなけれと橘はむかしをかけて匂ふ故里

同し心を　三善爲徳

故里はあれのみゆけと橘の匂ひ計そ昔なりける

夏月をよめる　源經定

みるうちも窓より西にかたふきて軒は明行短夜の月

題をさくりて人々歌よみけるついてに浦夏月　今出川二條

涙の上にてる月影の涼しさに夏は浦にそすむへかりける

應永百首に　三善爲徳

また宵とおもふ間もはや短夜はやかて吹飯の浦の月影

従三位政子

みしか夜はやかて吹飯の浦なみにかたふく月そ沖に成行

夏月のこゝろを　よみ人しらす

見るほともなくて傾く有明の月に恨る短夜の空

照射を　前右大臣

健夫か待ほとやなき短夜の火串明ぬる東雲の空

樹陰照射を同しくよめる

しけりあふ木陰のともし明方に殘るや鹿のよらぬ成らん

百首の歌奉りけるに處々照射を　三善直衞

小倉山峯にも尾にも小鹿待ともしの松そあまたみえける

康應百首の歌に　實富朝臣母

ますらをかほくしの影の消つるは葉山に鹿のよるかとそみる

深更鵜川　入道前左大臣

月入て更行やみに大井川のほる鵜舟のかゝり火の影

百首の歌に鵜船廻島と云事を　従三位政子
島影をめくるとみえて鵜飼舟しはしかゝりの涙かくれ行
明德百首歌たてまつりけるに　三善爲德
鵜かひ舟夜すからくたすかゝり火の影は幾瀬の涙を行らん
前右大臣
魚のよる淵かとみえて鵜飼舟しはしたゝよふ篝火の影
五十番歌合に泊水鷄を　従三位政子
涙枕うきねの夢よまた覺ぬ苫屋の軒をたゝく水鷄に
三善爲德
舟とむる涙の枕にかよふ之海士の磯やをたゝく水鷄は
曉水鷄をよめる　三善直衡
夏のよの明るもやすき天の戸をまたてくゐなの猶たゝく哉
入道前左大臣
槇の戸をたゝく水鷄は入もせて有明の月の影そさし入
夏草をよめる　従三位政子
見わたせは野もせの草のしけみにも獨かくれぬさゆり花哉
よみ人しらす
花の色の紅ふかき撫子にあたしの草の露そうつろふ
興全法師
夏草のふかきかた野を分くれは秋ならねとも袖そ露けき
夏の歌の中に　前右大臣
過かてに遠方人やなかむらん賤か垣ほの夕顔の花
野螢を　従三位政子
草ふかみしけろ夏のゝ夕暮におのれかくれす飛螢哉
三善爲德
いかはかりすたく心のくろす野に思ひ亂れて螢とふらん
百首の歌に　源　經定
草村のしけろ中にも夏虫の萌る思ひはかくれさりけり
田邊螢を　前右大臣
風わたる稲葉にすかる白露のきえぬと見れは螢なりけり
六十番歌合に江螢　藤原永量
難波江やいつれかこそのしのひともよそにはみえぬ螢なり鳧
經有朝臣
漁火をたかぬ先にと難波江や蘆間を分て飛螢かな
百首の中に　權大納言公行
難波江や蘆吹はらふ鹽風に影もみたれて飛螢哉
三善直衡
くらき夜も我身を影と難波江や蘆間に萌て飛螢哉
應永四年名所百首に　従三位政子
難波江や芦火はきゆる浦風にひとりもえても飛螢哉
月前螢を　よみ人不知
月影にをのか光をけたれてや萌るともなく飛螢哉

百首歌奉りけるに澗底螢火　三善爲德
月影は及はぬ谷の下水にをのか光をかはす夏虫
雨中螢　源　經定
夏虫の燃る思ひは降雨もけたぬ光に猶そしらるゝ
同し心を　實富朝臣
降くらす澤邊の雨にぬれてたに猶消やらぬ夏虫の影
夕立をよめる　從三位政子
夕立の山めくりするほとみえて峯より峯にかゝる村雲
百首歌奉りける中に　三善直衛
吹送る風そ涼しき夕立の雲ゐる峯に鳴神の音
遠夕立を　よみ人不知
鳴神は都の空にひゝけとも山より遠にめくる夕立
百首の歌に旅夕立　源　經定
越きつる跡の山路は雲晴て我ゆく先にめくる夕立
同し心をよめる　入道前左大臣
武藏野は立よる陰もなかりけり夕立きほふ行先の雨
名所百首の中に　前右大臣
過てたに千枝にもりくる露しけし信太の杜の夕立の跡
湊夕立を　實富朝臣
こきとめて夕立過す陰もなし由良の湊の蜑の釣舟
同し心を　三善爲德
有馬山峯の村雲先たてゝゐなの湊にきほふ夕立
題不知　從三位政子
有馬山峯よりくもる夕立に風先さはくゐなの笹原
名所百首夏の歌に　前右大臣
大江山しはしはこゝに夕すゝみ末はいくのゝ道遠くとも
重有朝臣
行末に秋もやかよふ大江山こえていくのゝ風そ涼しき
從三位政子
佐用姫の袂を松浦の山風にひれふる袖の先やすゝしき
水邊納涼　入道前左大臣
足引の山下風の涼しさに岩れの淸水てに結ふ哉
よみ人不知
すゝしさに岩もる水を結手のあかて立うき山の陰哉
權大納言公行
山人も岩れの水の涼しさにやすらふほとや夏忘らん
實富朝臣
落瀧津松の下ゆく谷川のあたり計そ夏としもなき
伏見殿にて納涼をよめる　從三位政子
聞もみる涼しさ深き伏見山峯の松風遠の川浪
應永百首に　前右大臣
すゝむとて日も夕蔭に成にけりしはし岩井の水のあたりは

よみ人不知
涼むとて岩れの清水結ふ手に早月移る山の夕暮
麓納涼　源經定
かくてよしゝはしはこゝに涼みてん麓の木陰日は暮るとも　重有朝臣
いさこゝにしはしすゞまん山風や麓の松を拂ふ木陰に　三善爲德
應永五年百首歌奉りけるに
麓なる松を山風吹からに木の下さらぬ夕すゞみ哉　入道前左大臣
夏の歌の中に
日をさえてしける木陰の氷室山入より涼し槇の下風　前右大臣
晩夏の心をよめる　三善直衡
暑き日は高根の松にかけろひて麓の眞柴風そすゞしき
立寄は風そ涼しき唐衣日も夕くれの杜の下蔭
百首歌の中に杜夏祓を　權大納言公行
御祓する今夜は秋の隣そと音にたゞすの森の下陰
夏祓の歌に　從三位政子
御祓する麻の葉末に凉かけて秋に先たつ露そ亂るゝ　入道前左大臣
みそきする麻の立枝のしらゆふに川風すゞし秋や近付
嘉曆二年の百首に　前右大臣

御祓する川瀬に風のすゞしきは水にや秋の先かよふらん　三善直衡
五十番歌合に
ゆく水に麻の葉流す御祓川年の半や今宵成らん　三善爲德
吹からにねやまて風のさそひきて枕ににほふ軒の立花

菊葉和歌集巻第四

秋歌上

立秋の心を　前右大臣
秋來ぬとおもふからにや今朝よりは心にもしむ風の音哉
應永四年の百首に　從三位政子
心には思ひもわかぬ秋の色を朝けの風の音に告之
早秋の心をよめる　權大納言公行母
秋來ぬときく計にて吹風もまた身にしまぬ昨今哉　賓富朝臣母
分てその色に出てはみえれともけさ吹風の音そ秋なる　よみ人不知
めにみえぬ秋の氣色を吹風の音に出てもしらせける哉
題不知　源經定
音にきゝてめにみぬ風のしらるゝは松より告る嵐なりけり　從三位政子

時わかぬ松とは何か思ひけん嵐そ告る秋のけしきも　權大納言公行

百首の中に初秋の心を

初秋はまた木も草も色みえす風の音にそしるへかりける　前右大臣

風のみか一葉も散て物ごとに哀身にしむ秋は來にけり　重有朝臣

夕暮の雲のけしきも風の音も身にしむ色の秋は來にけり　従三位政子

三十首歌講侍る中に初秋月

夕月夜ほのかなる影にたにあはれをそへて秋は來にけり　崇光院三位

六十番歌合に

夕附夜すゝしき影にほのめきてけふ星合を空に告之　三善爲德

待七夕と云事を

秋立といふよりやかて七夕のさそな契を待わたる覽　權大納言公行母

七夕に題をさくりて歌よみけるに七夕霧

秋立は心も空に成ぬらし七夕つめに逢瀨待とて　前右大臣

めくり來て今夜逢瀨の契をは立な隔そ天の川霧　入道前左大臣

百首の中に

河八十瀨の涙もしつかにて妻むかへ舟さしわたすらし　従三位政子

七夕はなかき契の例なれと逢瀨は秋の一夜なりけり　前右大臣

乞巧奠の心をよめる

百敷や今夜手向の薫物に匂ひや増る天の羽衣　よみ人しらす

七夕夜深と云事を

今よりやあかぬ別をおもふらんまた夜はふかき星合の空　贇富朝臣母

百首の中に閏月七夕といふ事を

七夕のとしに一夜と契らすは後の文月もあはまし物を　前右大臣

荻をよめる

分てなと荻には風の契るらんそよとしらるゝ風の音哉　今出川二條

秋風の吹たひごとにしられけり軒はの荻のそよと答へて　權大納言公行

百首の中に

吹過る風をも猶やしたふらん跡まてしはしそよく荻原　崇光院冷泉

六十番歌合に

庭遠き松よりあまる秋風をとしもわくゝ軒の下荻　宰相入道了禪

夕荻を

秋にふく荻の葉風も分てなと夕の聲に愁そふ覽　従三位政子

秋風の荻に音する夕暮は物を思はぬ袖もぬれけり　三善直衡

荻似人來といふことをつかうまつりける

待人の今來にけりと荻のはをそよぶく風におやまたれづゝ

百首の歌に幽居荻　前右大臣

心すむ花のあたりは音なきにことゝふ物は荻の上風

江邊曉荻といふ事を同しくよめる

いつもふく浦風と聞曉に入江の荻そ秋と答ふる

同し心を　三善直衡

曉は入江の荻の上風をうき物そとも誰かきくらん

六十番歌合に秋聽と云事を　綞有朝臣

秋風は更行月に音やみて露にも荻のそよくをそ聞

題しらす　讀人不知

長夜もさのみや夢を覺すへき荻ふく風の驚かさすは

實宮輔臣母

閨近き軒はの荻の風の音に幾夜の夢を覺しきぬらん

源經定

聞かしたゝあはれもをにふかき夜のねさめをゝふ荻の上風

獨聞荻風と云事を　前右大臣

まとろめは又驚しそよくゑひとりね覺の荻の上風

同し心を　從三位政子

さのみなとぬるゝ袂そ哀さはひとりにかきる荻の風かは

題不知　よみ人しらす

置あまる袂の露もとはりや荻ふく風に秋の夕暮

野秋夕を　重有朝臣

秋またゝいつこはあれと哀さは鹿なく野への夕暮の空

同し心を　三善爲德

大方の秋のけしきのさひしさも猶たくひなき野への夕暮

百首の歌の中に野萩を　前右大臣

秋來ては幾日もあらぬ宮城野やいつしか茂き萩の下露

從三位政子

おすも來て又宮城野の露わけん小萩か花の秋の夕され

よみ人しらす

宮城野や分る袂にちる露の亂れてそむる萩か花摺

明德百首の歌に　權大納言公行

宮城野やさらす錦のけさはなほ露に色そふ萩か花摺

前右大臣

宮城野の本あらのこ萩露しけみ秋風立ぬ玉そ亂るゝ

萩露をよめる　よみ人しらす

かくてみんおらはけぬへし宮城野や花に色ある萩の上の露

三善爲德

秋風に吹な亂しそおらすとも枝なからみん萩の夕露

三善直衡

金風のふかはけぬへき白露の玉ぬきかくる野への色萩

秋の歌の中に　今出川二條

吹風に小萩かうへははらへとも下葉の露は猶殘りけり
伏見殿にて六十番歌合に（寸歟）　大納言重資
かくて見んあさ紫の萩か花ぬれつもよしや露そ移ふ
題不知　從二位榮子
降はるゝ夜のまの雨の朝しめり露も色ある庭の萩原
三善爲德
花の色にうつろひけりな秋萩の古枝に置る露の白玉
萩映水と云事を　前右大臣
眞萩咲花の錦をたてぬきに浪のあやをる庭の遣水
從三位政子
咲おほふ汀の萩の影見えて花そ流るゝ野路の玉川
名所百首の歌に　源經定
小萩ちる野島か崎の秋風に浪さへ花の色に立つゝ
三善爲德
風わたる野島かさきに浪かけて小萩か末　結ふ白露
秋の歌の中に　入道前左大臣
秋ふかき小萩か花は散過て下葉にしけく結ふ白露
五十番歌合に古砌薄を　從三位政子
古郷の砌になひく花薄こぬ人まねく袖かとそ見る
薄似袖と云事を　よみ人不知
とゝまらぬ人や恨むる花薄まねく袖より露そこほるゝ

實富朝臣
我をのみまねく袖かと分いれは袂の尾花風わたるゑ
女郎花をよめる　重有朝臣
心をや野分にかはす女郎花なひくもしろく露そこほるゝ
入道前左大臣
思ふかたの風になひく女郎花うこく心のしろくも有哉
前右大臣
忍ひねのなみたやあまる女郎花野分の風に露そこほるゝ
實富朝臣母
秋の野に我しめゆひし女郎花いかなる風に又なひく覽
百首歌奉りける中に　三善爲德
女郎花誰を待てか夕暮の露にそほちて野へに立らん
權大納言公行
夕されは人めもなしに女郎花うき名はたつと今や折へん
前右大臣
分るのゝ道の行ての女郎花花の名たてによきて過めや
蘭をよめる　實富朝臣母
風かよふ秋の野原の蘭はかま誰ぬきかけし匂なるらん
題をさくりて歌よみけるに蘭香薫枕といふ事を
入道前左大臣
闇の中にたかぬき捨しふち袴我手枕に匂きぬらん

題しらす　よみ人不知
立籠る霧の籬はみえれとも匂ひにしるき藤袴哉
露如秋と云事を　前右大臣
百草の花のゝ露の夕まくれ涙みたるゝ秋かとそみる
露をよめる　従三位政子
置あへすさこそ草葉に亂るらめ秋風過るのへの夕露
見わたせは草葉にすかる露もなし野もせに過る秋の夕風　入道前左大臣
百首歌の中に槿花を
置露の亂れぬ程を命にて日影待まのあさかほの花　前右大臣
ひらけてはかつしほれ行朝かほも露ひぬかたそしはし殘れる
六十番歌合に草花を　従二位榮子
露結ふ千種の花のうへに猶月も色そふ影かとそみる
月前草花　源經定
色〳〵の千種の花にうつろひて錦をさらす庭の月影
名所百首の歌に　従三位政子
高砂の野への千種の花のうへに色なる露を吹嵐哉
前右大臣
鈴むしの鳴れもことに高圓の野への千種に月そ更ぬる
題しらす　よみ人不知
秋の野の千草の花に鳴むしは聲にも色のそふかとそ聞

六十番歌合に　經良朝臣
結ひあへす露ちる草に鳴虫の聲吹みたす野への秋風
題しらす　前參議公敦
聞あかす虫の根はたえぬ夜に猶あはれそふ鹿の聲哉
重有朝臣
鹿の音も虫の根も物ことに秋のあはれは野への夕暮
應永五年名所百首の歌に　従三位政子
泊瀬山檜原にみえぬ秋の色を尾上の鹿そ鳴てしらする
百首の歌に　權大納言公行
薄霧の立田の山の夕暮に鹿の音おろす嶺の松風
入道前左大臣
小倉山夕霧ふかく立ぬれと妻こふ鹿の聲そもりくる
従三位政子
夕されは嶺に妻こふ鹿の音を麓の里に送る山風
應永百首歌奉りけるに鹿隠霧　三善爲德
立こめて山邊もみえぬ夕暮の霧より傳ふ棹鹿の聲
同し心を　源經定
秋霧のふかき山邊に鳴鹿はをのか立所を聲にしれとや
外山鹿を　前右大臣
棹鹿の外山の嶺を過なりと嵐の傳に音信て行
よみ人不知

鹿の音の里近ちかく聞ゆるや外山おろしの誘ふ成らん

百首歌の中に海邊鹿を　入道前左大臣

鹽風に小鹿の聲の傳ひ來て波間に近き淡路島山

三善爲徳

淡路島おろす嵐や送るらん浪路はるかにかよふ鹿の音

題しらす　前右大臣

聞もさびし麓の里にね覺して鹿のね送る嶺の秋風

三十首歌講せられける時月前鹿　從三位政子

いとゝしく袂に露そこぼれける有明の月に棹鹿の聲

よみ人不知

聞わびぬ今夜は月にねぬものをねさめせよとや鹿の鳴らん

六十番歌合に曉鹿　經有朝臣

くろゝより野に鳴く鹿も明方は月入山に聲歸るなり

田家鹿を　三善爲徳

小山田の月待庵の夕されに先をとつるゝ小男鹿の聲

百首歌よみけるに田上雁を　權大納言公行

ほの〳〵と田面うすきる夕暮に姿はみえぬ初雁の聲

伏見殿にて六十番歌合に　範定朝臣

聞送る雁かねとをく鳴過て田面うすきる秋の夕くれ

應永百首の歌に　從三位政子

御田屋守哀とやきく雁金の稻葉の上に音信て行く

六十番歌合に　從三位資陰

御田屋守枕の上に聞ゆる稻葉の雲をわたるかりかね

雲端雁　前右大臣

聲はかり聞つる鴈も横雲のわかるゝ方に數そ見え行

題しらす　よみ人不知

なかむれは村雨過る雲間よりしはれて渡る雁の一行

月前雁　從三位政子

打時雨更行月の秋風に翅や寒き衣かりかね

源經定

秋風や今夜の月に寒からし更行空に衣かりかね

題しらす　三善爲徳

打なびく田の面にかよふ秋風の身にやしむらん衣鴈金

前右大臣

末とをみ千町の田の面はる〳〵と聲をほにあげて雁渡るゝ

秋田をよめる　よみ人不知

みるまゝに門田の稻葉穗に出てなびく方より秋風そ吹く

六十番歌合に　宰相入道了禪

とふ人も稻葉の音に聞侘ぬ獨もる庵の秋の夕風

題しらす　三善爲徳

さびしとも誰かは聞ん蘆そよく生田の池の秋の夕風

名所百首歌に　從三位政子

都にも音はかはらぬ秋風にあはれそ增る白川の關
權大納言公行
都にもかはらさりけり陸奥も秋の哀を白川の關
古渡秋霧
前右大臣
明やらぬ川瀨の浪は霧籠て淀のわたりに舟よはふ之
題不知
入道前左大臣
山の端に夕日の影は消はてゝ霧よりをちにひゝく入相
讀人不知
立こむる山へは霧にみえねとも音はへたてぬ峯の松風
關駒迎をよめる
前右大臣
逢坂の山のかひより立出て關路をこゆる望月の駒
相坂や是そむかしの例に關路を出る望月の駒
從三位政子
會坂や關の古道跡とめてむかしかはらす霧原の駒
八月十五夜三首歌講侍けるに
源經定
かそへねと秋の半は今夜そと空にしられてすめる月哉
前右大臣
むかしより名におひけるも斷と今夜の月に思ひしらるゝ
月迎秋明といふ事を
重有朝臣
四の時かはらぬ月の影も猶更に色そふ秋の空哉
月の歌の中に
三善直衡

いつもみる月の夜比のわきてなと秋はなかめの澄增るらん
入道前左大臣
秋ことに影はかはらぬ月なれとあかぬ心そいや增ゆく
月のおもしろけれは思ひつゝけゝる
三善爲德
かく計さやけき月もなかめすは只尋常と思ひこそせめ
題不知
三善直衡
曇なく野にも山にも月すめは秋にのかるゝ宿はあらしな
入道前左大臣
をしなへて同し心になかむらん千里にすめる秋のよの月

菊葉和歌集卷第五

秋歌下

百首歌たてまつりける中に
三善直衡
山の端にいさよふ影のほの見えてしはし待るゝ夕暮の月
前右大臣
山高み出へき月のほとみえてあたりの嶺に雲そほのめく
伏見殿にて六十番歌合に
經有朝臣
浮雲をはらふほとこそまたれつれ風より出る夕暮の月
月の歌の中に
讀人不知
山の端にいさよふ雲をはらふより嵐を出る嶺の月影
山月明と云事を
從三位政子

松はらふ嵐に嶺の雲消て殘るくまなき山のはの月

五十番歌合に同し心を　三善爲德

風渡る嶺のつゝきに雲消て山過さやかにすめる月影

題不知　源經定

隔はてぬ尾上の霧の上にみえて山の端白く月そいさよふ

入道前左大臣

くるゝより麓は霧に立こめて山のは白く出る月影

前右大臣

山本の里をは霧の埋めともさはらす遠きのへの月影

百首歌よみける　權大納言公行

心あらは嶺の村雲吹晴て月影みせよ山おろしの風

月前秋風を　三善直衡

月影のいさよふほとに白雲の夕ゐる嶺をはらふ秋風

名所百首の歌に　從三位政子

浮雲をさしも伊吹の山風よはらひし月に又かゝるらん

前右大臣

秋風のたえす伊吹の山のはに雲もかゝらて月そいさよふ

月の歌の中に　重有朝臣

山のはに雲はまよはぬ月影もしはしやすらふ嶺の松風

題不知　源經定

浮雲を月にはらひて山風は尾上の松に音殘るらん

よみ人不知

浮雲をはらひ盡してさやかなる月にのみふく秋の山風

前右大臣

秋風はあたりの雲をはらへとも月のくまなる嶺の松原

權大納言公行

心して月のあたりの夜半の雲殘らすはらへ秋の山風

九月十三夜人々歌よみけるついてに

松殿大納言入道女

名にしおふ二夜の月も今夜こそよはりしろき光也けれ

前右大臣

ねてあかす人もあらしな名にしおふ月の名殘をおしと思ひて

よみ人不知

今夜とて月に及はぬ雲霧も空に殘さぬ山颪のかせ

題不知　入道前左大臣

雲はらひ月をさやかに吹なして荻の末葉を渡る秋風

源經定

心して松を秋風はらふ夜は梢くもらぬ月を見る哉

松間月を　前右大臣

吹しほる嵐に松の梢はれて常より月の影そもりくる

從三位政子

〔歌闕〕

重有朝臣
ほのかにも太山の松の木のまより嵐を出る月そすくなき
應永五年百首奉りけるに　三善爲德
松原をもりくる月もほのかなり雲ま計と何思ひけん
森間月を　從三位政子
紅葉せぬときはの山の木の間より月こそ秋の色に出ぬれ
題しらす　讀人不知
杉たてる三輪の〔山本脱歟〕奈てみれは木のまの月に秋風そふく
應永元年九月十三日日吉社にて舞童有けるに琵琶
の所作のため罷こえて侍るついてに通夜しける折
節明月の夜にて侍るとを思ひつゝけてよめる　前右大臣
忘めや七の社に影すみて小ひえにかゝる月のこよひを
世の中さはかしきを侍けるとき坂本にかくれこも
りて侍とき社頭にまいりて月の面白かりけれは思
ひつゝけゝる　入道前左大臣
神さひて小比枝の杉の木くらきに鳰の海より月そさし入
住吉社法樂の歌に社頭月を
かたそきの軒端の松をもりかれて濱白砂に月そいさよふ
百首の歌に江月　從三位政子
立ならふ松より外はくまもなし影住のえの秋のよの月

今出川二條
すみのえや松吹風によせ歸る浪にたゝよふ月の影哉
百首歌よみけるに　實富朝臣母
難波かた入江の芦に風過て葉分の月をあらふ白波
權大納言公行
なには江や芦間を分てさす月の浮立波に影そいさよふ
三善爲德
速波潟入江の浪にすむ月の芦邉はるかに影かはすゑ
題不知　よみ人しらす
難波潟浪には秋の色なきに浦はの月の影にしる哉
應永四年の名所百首に　從三位政子
ことはりの秋の空なる月なれと分て明石の浦にすむゑ
源經定
明石かた名におふ浦の秋の空をはりしろくすめる月哉
浦月を　權大納言公行
明石潟その名もしろく月影の異浦よりもすみ渡る哉
入道前左大臣
名にしおふ明石の浦の月なれはさはる影なき浪の上哉
從三位政子
明石潟磯への松やくまならんさはるかたなき浪の上の月
題不知　前右大臣

さやか成月には馴れし蜑人ももしほの烟いつもへたてゝ
よみ人不知
須磨の蜑は心とくもる月そみる焼やもしほのなひく煙に
三善爲德
すまの浦やあまの焼藻の煙にもくもり（ら歟）てみゆる秋の夜の月
從三位政子
百首の歌に
すまのあまのもしほの煙心あらは立な隔そ秋の夜の月
源經定
あま人も心やすまの浦風の更行月にもしほ汲なり
三善爲德
題不知
なかめつゝ浦はの月のよもすからさそな心もすまの里人
權大納言公行
思ひ出る我さへ恋し秋の月ひとりなかめしすまの浦人
從三位政子
明德百首の歌に
秋の夜もさすか吹飯の浦風にとをさかり行浪の月影
三善爲德
見わたせは浪間を分て和泉なる吹飯の浦にすめる月影
讀人不知
題不知
和田の原沖には山もなき物を浪にも月のなと待るらん
從三位政子
山のみと思ひし月も和田の原沖の浪より出にける哉

三首歌講しけるとき月前遠望　前右大臣
雲の浪けふりの波もおさまりて隈もみえぬ澗の月影
三善直衡
和田の原八十島かけて見渡せは浪路はてなき秋の夜の月
從三位政子
見渡せは松のしつえに鹽みちて浪間の月の浮島か原
入道前左大臣
淡路島霧にこめつる浪の上も月の入さにあらはれにけり
前右大臣
題不知
あはち島月落かゝる浪の上の俤とめよ須磨の關守
よみ人不知
關月を
月みてそ心もとまる須磨の關秋の哀はさもあらはあれ
入道前左大臣
月そもる須磨の關屋の板庇まはらにあらす秋の浦風
從三位政子
まはら成風破の關屋の板庇さなから月の影そもりくる
前右大臣
百首の中に關路惜月といふことを
淸見潟明るもおしき關の戸にとゝめもあへぬ有明の月
重有朝臣
同し心を
淸見潟關の戸こゆる有明の月をはえこそとゝめさりけれ
興全法師

わすれめやこゝろをとむる清見潟關守月の在明の空
題をさくりて歌よみけるに湖上翫月と云ことを
入道前左大臣
浦人も鳴てる月にあくかれて釣せぬ舟そ浪にたゝよふ
船中月を　實富朝臣
なかむとて浦ち遥に漕行は船にともなふ浪の月かけ
題しらす　前右大臣
浪は氷眞砂は霜とさやかにて冬にそまかふ浦の月影
河上月をよめる
出るより河瀬に月の影みちて氷をしける浪の上哉
三善爲徳
落瀧つ岩にくたくる浪の上に光をちらす秋のよの月
月照瀧水といへることを　三善直衡
岩はしる瀧の白波よそめには月にさらせる布かとそみる
應永四年名所百首の歌に　從三位政子
橋姫の片敷袖も夜ゝ寒き月に更行宇治の河風
三善爲徳
朝日山おろす嵐に霧晴て宇治の川瀬の月そさやけき
題しらす　よみ人不知
見わたせは田面うすきる遠方に月そいさよふ宇治の川波
伏見殿にて六十番歌合に　經良朝臣

河近き田面の末に影みえて月も稻葉の雲を出ぬる
藤原永量
伏見山松（先歟）さしのほる月影を稻葉の雲の末よりそみる
名所百首の歌に　權大納言公行
秋風に姨捨山の雲はれて月すみわたる更科の里
康應百首の歌に　前右大臣
津國の生田の池はみさひゐてとふ人なみに月やすむらん
源經定
人とはぬ秋は生田の池水にすむらん月の影やさひしき
古寺月を（闕イ）　よみ人不知
人くまぬ阿伽井の水に水草ゐて月たにすまぬしかの古寺
百首歌に深山月を　從三位政子
ほのかにも木間もりくる影ならていつかさやかに深山への月
六十番歌合に秋視といふことをよませ給ひける
崇光院御製
大方の秋を時にて物ことにあはれの際を太山への月
題不知　御製
庭の松はらふあらしに雪消て月は軒はの山を出けり
六十番歌合に　藤原永量
月に澄嶺の庵は松晴て嵐の聲も麓にそきく
山家月を　よみ人不知

山高みおろす嵐の松わけて麓の庵に月そさし入

題不知　入道前左大臣

山の端にかたふくかたの麓よりいや遠さかる月をみる哉

名所百首の歌奉りけるに　三善為徳

あらしふく伊駒の嶽の雲消て外山の里にすめる月影

重有朝臣

雲まよふ伊駒の嶺の村時雨外山の月にかゝらすも哉

秋の歌の中に　従三位政子

秋風に夜寒の時雨降過て村雲傳ひ月そ出ぬる

伏見殿にて五十首歌講せられけるに　經有朝臣

みるか内にかくれあらはれ行月よしらす雲をもしたひ顔なる

野月をよめる　讀人不知

時雨ゆく交野の草に置露をみかきて出る村雲の月

秋の歌の中に　實富朝臣

よもすから月をふしみの稲莚かたしく袖そ露にしほるゝ

月前鴫を　三善直衡

小山田の菴もる月の明方に聞もさひしき鴫の羽かき

百首歌の中に　前右大臣

淺茅生のをのゝ草葉も霜枯て月冷しく鶉なく之

秋の歌の中に　入道前左大臣

秋ふかき枕の上の蛬きかしや更に物おもふころ

應永百首の歌に虫近枕　従三位政子

聞侘ぬ枕の下の蛬我もあはれに音をや鳴まし

夜虫をよめる　よみ人不知

聞からによその袂も濡てけり人待虫の夜すからの聲

百首歌に籬下聞虫　前右大臣

蛬よはるか聲も絶々に籬かもとの草に鳴なり

康應百首歌奉りけるに野擣衣を　三善直衡

外山ふく嵐を寒み秋もはや末のゝ里に衣うつなり

擣衣聲幽といふを　今出川二條

かすかなる音もあはれに聞そなすいつくの里の碪成らん

題不知　入道前左大臣

とをく近く同し碪のかはれるは風に傳へる音にそ有ける

百首歌よみけるに田家擣衣　權大納言公行

田の面吹風を便に音信て庵の軒端に碪をそ聞

よみ人不知

秋もはや稲葉の風のさむしとや田つらの庵に衣打らん

名所擣衣と云事を　従三位政子

川風も更行秋や寒からし〔マヽ〕すら衣を宇治の里人

題をさくりて歌つかうまつりけるに海邊擣衣を　三善直衡

うら風も夜寒之とや磯の屋に浪のよる〳〵衣打らん

六十番歌合に　崇光院二條

里々の夜寒の碪聞ふけてぬるとも［　　］の袖の月影

擣衣寒と云事を　從三位政子

松風は夜寒の碪たくへきてねられぬ床に音ひゝくゑ

源經重

なれのみか我も夜寒にねぬものを夢とひかほに打碪哉

聞擣衣　權大納言公行

きくからにねぬよの友と成にけり千里にひゝく碪なれとも

今出川二條

また宵に打と聞つる砧（聽イ）なれや叉曉も同し音なる

六十番歌合に秋砧と云事をよめる　經良朝臣

小夜衣露をかけてや打増る聞えぬ迄に音しめるゑ

同し心をよませ給ける　崇光院御製

我さへも愁をくたく長月や夜寒の砧音に打聲

秋の歌の中に　重有朝臣

ほの〳〵と霧の籬の白菊は色し（こ歟）そみえね匂ふ秋風

家に重陽宴し侍けるに菊匂久といふ事を　入道前左大臣

此宿に千代を契（カイ）りて長月の久しく匂ふ夜の白菊

同し心を　從三位政千

うつろはてかへりそ匂ふ宿の菊君か老せぬ千代のかさしに

河邊菊を　源經定

山川の菊の下行涙の上にまたうつろはぬ花そうつろふ

三善爲德

谷川に汀の菊の影うけて匂ひやすゝし水の白波

伏見殿の前栽に菊を作られて侍るをえたを折て給はるとて　御製

うへ立てさこそ匂ひもまさり草山路の種はみるかひやなき

御返し　從三位政子

千代を經ん山路の菊の色香をはなへての花にたくふへしやは

題不知　よみ人しらす

匂ひより君の情は増りくさ我ため手折花とおもへは

露はらふ山路の菊に風過てあたりの松に花の香そする

名所百首の歌に　重有朝臣

秋の色に麓の霧や立田山また木の葉のうつろはぬ比

山里にある人のもとへ九月の比申遣しける　よみ人不知

都にはまたき梢の色そなき山へはいかに時雨そめけん

題不知　前右大臣

立田姫そめはしめてや見わたせは野山もなへて色かはるらん

入道前左大臣

秋の雨ふりみふらすみ日數へて四方の梢は色付にけり

百首歌奉りけるに岡紅葉　三善爲德
初時雨降にし日より水莖の岡の梢も色付にけり
名所百首の歌に　前右大臣
時雨ふる神なひ山の榊葉の色わかれゆく秋の此比
よみ人不知
榊葉はつれなき色に三室山あらぬ梢は紅葉なれとも
應永四年名所百首に　從三位政子
紅葉せぬ常盤の森の夕時雨そめぬ梢はふるかひもなし
題不知　三善爲德
風なくは秋をもしらし椎柴の常盤の杜は色もかはらす
前右大臣
つれもなき常盤の森に袖みせて下枝にかゝる蔦そうつろふ
蔦懸松と云を　源經定
蔦かゝる松は汀の色かへてをのか葉ならぬ紅葉をそみる
三善爲德
蔦かゝる松は時雨にぬれなからそれはつれなき色にみえつゝ
題不知　實富朝臣母
巻向の檜原の山の村時雨わきて紅葉をいかて染らん
應永百首の歌に山紅葉　從三位政子
松の色そひとりましらぬ秋山の梢はなへて千入なれとも
秋の歌の中に　よみ人しらす
時雨つゝなへて染行梢にもひとりつれなき松の色哉
峯紅葉を　重有朝臣
麓なる松は時雨につれなくて嶺の梢は紅葉しにけり
三善爲德
うすくこく色千入にもつくはれの梢をしなへ時雨ふる比
題不知　入道前左大臣
やよしくれふれとそ思ふ紅葉はの今一入も色やまさると
今出川二條
きのふよりけふは紅葉の色そこきいかに時雨の今夜そめけん
百首の歌の中に庭紅葉を　前右大臣
時雨るともおほえぬ庭の紅葉ははよな〳〵露のそむる成らん
六十番歌合に　良恵法師
けさみれは夜のまに露や染つらん時雨もまたぬ薄紅葉哉
岡紅葉を　源經定
露霜に色に出けりさしも名は忍ひの岡の紅葉なれとも
三善爲德
名にも似す忍ひの岡の紅葉はも時雨にあへす色に出けり
伏見の紅葉を思ひやりて申送り侍ける　從三位政子
思ひやる心は空に時雨るれとそむらん色はみぬそ悲しき
返し　從二位榮子

諸共になかめぬ山の紅葉はは染盡しぬる色もかひなし

紅葉道といふ事を　重有朝臣

押並て四方の梢を紅に染殘さしとふる時雨かな

同し心を　三善爲德

なしなへて同し時雨や渡るらん染も殘さぬよもの紅葉は

百首の歌に　入道前左大臣

嶺つゝき紅葉の色の薄くこく錦をさらす秋の山哉

従三位政子

染盡す秋の太山の紅葉ゝにひとりもかはる松の色哉

應永四年名所の歌に

色ふかくさらせる嶺の紅葉ゝに秋は小倉の名をそかへぬる

伏見殿にて六十番歌合に　行俊朝臣

時雨行かたは小倉の山の端に入日を殘す下紅葉かな

秋の歌の中に　前右大臣

へたてつる尾上の霧は立消て入日色こき嶺の紅葉は

六十番歌合に　宰相入道了禪

隔はてぬ夕紅の色すきて紅葉にかゝる嶺の薄霧

三條入道前内大臣嵯峨野の紅葉見にまかりけるとてさそひけれはともなひて一日二日とまりてあそひ侍りて歸りけるに紅葉の枝を送るとて

三條入道前内大臣

なへて世の時雨にそむる紅葉はを秋のさかとは誰かいひけん

かへし　入道前左大臣室

なへて世の秋のさかなる紅葉はも君か爲にや盛久しき

従三位政子みやこの紅葉を折て伏見なる人の許へ

此枝に宮古の梢思ひやれさこそ紅葉はなかめたる

ともと申送りて侍る返事を女房にかはりて御返し

御製

手折見する情もふかき紅葉はをいかゝなへての色にくらへん

前右大臣紅葉を一枝送りたる返事に　従三位政子

一枝のふかき紅葉の色も猶手折なさけにそふ心地して

題しらす　前右大臣

いかにして一木のうちをうすくこく同し時雨の染分ぬらん

紅葉誰家と云ことをつかうまつりける　興全法師

しりしらす我も立寄木のもとの紅葉そ秋の宿と成ける

名所百首の歌に　よみ人しらす

木のもとによその紅葉のちりくるは常盤の森に秋をしれとや

紅葉寫水といへることを　源經定

立田川時雨にそめぬ涙をたに千入にみする岸のもみちは

従三位政子

千入なる紅葉をうつす立田川水にも秋の色はありけり

大井川にて紅葉を見てよめる　三善爲德

大井川岸の梢のうつろひてちらても浪にうかふ紅葉は
百首歌に谷紅葉を　權大納言公行
谷川のきしの下行浪の上にうきてなかれぬ紅葉をそ見る
五十番歌合に瀧紅葉　從三位政子
紅葉はの移ふ瀧の白糸は浪に錦を織かとそみる
同し心を　三善爲德
紅葉はの影をうつして今は又色にそめぬる瀧の白糸
瀏庭紅葉を　前右大臣
谷ふかみはらふ嵐やよはからしちらて盛にみゆる紅葉は
紅葉のやう／＼かつちりて盛も過ける比山のもみ
ちを一枝おりて送るとて　實富朝臣
太山まて尋て手折紅葉はは君に情のふかきとをしれ
かへし　從三位政子
尋けん太山もゆかし紅葉はのふかきなさけを見るに付ても
山路秋行と云事を　重有朝臣
紅葉はのちりかくしぬる山ちたに道もまとはて秋はくれけり
名所百首の中に　前右大臣
暮てゆく秋はいつくにとまるらん阿武隈川のせゝの紅葉は
從三位政子
紅葉ちるあふくま川の柵に暮行秋の色そとまれる
暮秋菊をよめる　入道前左大臣
うつろはて久しく匂へ庭の菊秋はくるとも花の形見に
名所百首歌奉りけるに　三善爲德
武藏野や花みし草はうら枯て秋のゆかりの色も殘らす
暮秋鹿を　入道前（左歟）大臣
妻故に秋のわかれや汝も思ふしき／＼なきつ棹鹿の聲
百首歌に暮秋虫　實富朝臣
秋も今は暮行野への蛬絶々よはる聲そ悲しき
權大納言公行母
秋もはやけふ計とや蛬あるかなきかに鳴よはりつゝ
毎人惜秋といふ事を（秋衆）　今出川二條
諸人の心のうちも我如や袖の名殘や悲しかるらん
百首の歌に獨惜暮秋　實富朝臣母
我のみや暮行秋をしたふらんとはゝや人も同し心か
九月盡の心を　三善直衡
とまるへき習ひもあらはおしまぬかけふに盡ぬる秋の名殘を
九月盡に人々題をさくりて歌よみけるついてに九
月盡紅葉を　入道前左大臣
長月の日數はけふにくるゝとも紅葉を殘せ秋のかたみに
題しらす　前右大臣
秋にはや今夜計の夕露は曉よりや霜と成らん
百首歌奉りけるに　三善爲德

秋もはや日數はけふに長月の限り今はの夕暮の空　從三位政子

なかしとも今そ思はぬ暮はてゝ今夜計の秋の名殘を

九月晦の夜秋の別をおしみてよめる　前右大臣

おしめとも夜を長月も深過て秋の別のかれそ聞ゆる

菊葉和歌集卷第六

冬歌

初冬の心をよめる　從三位政子

四のときたかへぬ空とみる計間なく時雨て冬は來にけり

神無月一日の明方に時雨の一とをりしけるをきゝてよめる　實富朝臣母

冬來ぬと思ひもあへぬ東雲にやかて時雨るゝ横雲の空

題不知　權大納言公行

空の色は冬來にけりとみえなから袖（秋歟）のけしきそ四方に殘れる

五十番歌合に初冬落葉　三善爲德

打時雨木の葉も散て物ことにけしきにしるき冬は來にけり

詠人不知

時雨をは秋よりなれつ冬の色は木の葉散にそおとろかれぬる

百首の歌に時雨を　前右大臣

浮雲のたゝよふまゝに晴くもり時雨かち成冬の空哉

伏見殿にて六十番歌合に　藤原永量

過にけり外山の松のかた時雨出る日影を雲にうつして

時雨廻山と云事を　實富朝臣母

なかむれは風にまかせて行雲の山めくりする村時雨哉

題不知　三善爲德

時雨行そなたの山をなかむれは村雲かゝる嶺の松原

權大納言公行

村時雨過行嶺は先晴て尾上に殘る山本のくも

冬の歌の中に　從三位政子

嵐吹外山の里の村時雨木の葉の音に聞まかふなり

田家時雨を　前右大臣

秋はてゝなれし稻葉も音なきにかはりて過る村時雨哉

百首歌奉りけるに夜時雨を　三善爲德

終夜ねさめをとふ村しくれ月も幾度晴くもるらん

源經定

晴くもり時雨るゝ夜はの月みれは心盡しの此日の空

落葉の歌に　從三位政子

月は晴て雲も嵐のふくる夜に殘る時雨を木のはにそきく

よみ人不知

月はさえてくもらぬ空に時雨るゝや嵐にたくふ木のは成らん

重有朝臣

吹まよふ嵐にたくふ木葉こそ袖をぬらさぬ時雨成けれ
冬の歌の中に　入道前左大臣室
木のもとはいつく成らん山風のさそふまに〳〵ちる紅葉哉
三善直衡
いつくとも方をさためす吹まよふ嵐のまゝに散紅葉哉
權大納言公行
龍田山そめしも近き紅葉はを今又誘ふ木枯のかせ
山家落葉を　入道前左大臣
吹あるゝ軒端の山の木枯に窓の内迄ちる紅葉哉
五十番歌合に　從三位政子
木のは散宿はいつしか道絶ぬ冬より外にとふ人もかな
百首の歌に橋落葉を　前右大臣
あらしふく嶺の紅葉は散敷て麓の橋に秋そのこれる
つもれとも分る跡なき梯の紅葉吹たてわたる山風
三善爲德
山高み嶺の木枯吹しきて落葉もふかき谷の梯
明德百首に　入道前左大臣
吹はらふ峯のあらしのさそひきて麓にふかく散紅葉哉
瀧落葉を　實富朝臣
紅に紅葉なかるゝ瀧の瀬は泪も時雨のそむるとやみん
權大納言公行

水上の紅葉や風になかれけん紅ふかき瀧のしら浪
百首の歌に谷落葉　三善爲德
紅葉はのなかれてとまる谷水は錦を洗ふ浪かとそみる
落葉深と云事を　源　經定
いかはかり散積りてか吹わくる嵐の下も木の葉成らん
百首の歌に霜を　從三位政子
散積る庭の木葉の色までも猶そめあかて置る霜哉
入道前左大臣
夜の霜ふかくなけとも朝日さすかたより消て草そぬれ行
名所百首歌奉りける時　三善爲德
吹なくる音もあらちの山風に霜枯はつる野邊の淺茅生
寒草幾と言ことをよめる
淺茅原露のやとりを置かへてそれともみえぬ霜の下折
同し心を　よみ人不知
抑なへて霜枯わたる冬野にもしはしそ殘る杜の下草
寒草霜を　入道前左大臣
淺茅原枯ゆくまゝに色さひて霜のは深さのへの遠かた
權大納言公行
冬されの野邊の草葉は枯はてゝ霜より外にと色もなし
應永三年の百首に　從三位政子
野への色は霜枯はてゝみし秋の俤もなき比そさひしき

題不知　　貫富朝臣母
秋の色は佛もなきなかめ哉霜枯わたる野邊の冬草　　入道前左大臣
冬枯の野邊の草葉は朽果て尾花に殘る秋の面影
冬の歌の中に　　前右大臣
枯たてる尾花ならてはそれとしもみえこそわかれ霜の下草
江寒芦を　　重有朝臣
うら風や入江の芦に寒からし下葉をこゆる浪そ氷れる　　從三位政子
難波えや氷れる波に閉られて芦の枯はに風すさむなり　　前右大臣
難波江や浪まに氷る芦のはにそよく嵐も音そすくなき　　入道前左大臣
鹽風にさやくも寒く聞侘ぬ玉江にかゝるあしの一むら
應永百首歌奉りけるに　　三善爲德
みしま江や枯ふす芦の霜の上に宿れる月の影そ寒けき
湖上冬月を　　從三位政子
鳰てるや月落かゝる浪の上に氷をしける影の寒けさ
同し心を　　前右大臣
志賀の浦や氷る汀もこほらぬもひとつにみかく浪の月かけ
五十番歌合に寒夜月を　　源經定
さえ侘てねぬ夜の床に月みれは袖にも霜の置心ちして
同し心を　　三善爲德
置わたす庭の眞砂の霜の上にしもを重ぬる夜半の月影
百首の歌に　　貫富朝臣
さえわたる月の光を詠れは同し色にも結ふ霜哉
冬曉の心を　　前右大臣
ねやの上に霜や置らん曉の鐘より後そわきて寒けき　　三善直衡
夢さむる霜夜の床にひゝき來て音まてさゆる曉の鐘
百首の歌よみけるに夜千鳥を　　貫富朝臣母
よもすから心を須磨の浦千鳥うら淋しくも鳴渡る哉　　大納言公行
磯近き浦邊の宿に小夜千鳥ねさめをとふ聲そ友なる　　前右大臣
小夜千鳥聲も隙なく行かへり同し磯邊の浪に鳴之
明德百首歌奉りける時　　三善爲德
風さむみ磯邊の浪のあるゝ夜は岩まかくれになく千鳥哉
百首の歌に　　入道前左大臣
浪あらき磯山おろす松風に友よふ千鳥聲もきこえす　　從三位政子
浦風のあら磯浪のよる／＼は友なし千鳥月になく之

浦風も更ゆく月に引塩の跡なき浪に鳴千鳥哉　よみ人不知
夜や寒き浦はの月に住の江の浪の立ぬに千鳥なくゝ　源經定
應永四年名所百首の歌に
塁のえやかよふ千鳥もさはくらし浦吹風のあられ松原　從三位政子
湖上千鳥を
しかの浦や昔の跡やこたふらん同し浪ちになく千鳥哉　前右大臣
いにしへの跡をや思ふ鳰の海に夕なみ千鳥恨てそなく　權大納言公行
鳰照や有明の月のかたふくを恨て渡る小夜千鳥哉　重有朝臣
寒夜水鳥
夜もすから霜拂ふ間に蘆鴨の浮れの床やかつ氷るらん　三善直衡
同しえに羽をかはせる鴛鳥も霜ふかき夜はねをのみそなく　實富朝臣母
嘉慶百首に池水鳥
池水の鴛のうきねや氷るらし浪は音なき羽かきするゝ　從三位政子
題しらす
明日香川淵にかたよる水鳥はやかて瀬にもや床をかゆらん　よみ人不知
水鳥の上毛に浪や氷るらん羽かひにしはしかゝる白玉　前右大臣
氷初結といふことをよめる
閉初る山下水の薄氷庭にはかよふ浪のしらいと　源經定
山川のみきはの氷とちそめてむすほゝれ行浪のしらいと　藤原友倚
山川のせゝの白糸くりためて氷に結ふ冬は來にけり　從三位政子
名所百首の歌に
清瀧の水のしらいと冬くれは氷の下に音そこほれる　權大納言公行
音羽川などにもたてすこの比はつゝらに結ふ瀬々の白糸　よみ人不知
百首の中に
山川の岩こす波も音やみぬ氷のゐせき幾重成らん　前右大臣
網代をよめる
この比は川かせ寒み浪こえてつらゝそかゝる宇治の網代木　重有朝臣
更行は宇治の川浪音さえて網代に月の影そかゝれる　實富朝臣母
なかれきて紅葉やよとむ月影に錦をかくる宇治のあしろ木　前右大臣
應永四年の百首に霰を
槙の屋に降や霰の音せぬは木葉や上に散つもるらん　從三位政子

入道前左大臣
槇の屋に聞馴しよりかやか軒しのひ〱にふる霰哉
屋上聞霰　よみ人不知
ねやの上をはらふ嵐ときく程にやかて霰の音に成ぬる
前右大臣
まとたゝく嵐にたくふ玉霰槇の板屋に夢そ驚く
冬の歌の中に　重有朝臣
まとたゝくあらしに馴て冬の夜の霰ふるをもきゝまかふ之
百首歌奉りけるに　三善爲德
打さやく風たにあるに音そへて霰ふる之軒の呉竹
野霰を　從三位政子
冬されの枯のゝ草にふる霰玉はちれとも音の聞えぬ
百首の歌に篠上霰　入道前左大臣
足引の山下風よ吹よはれしのゝ小篠に霰ちるほと
よみ人不知
しなか鳥ゐなのさゝ原風過てたまりもあへすふる霰哉
狩庭霰をよめる　三善爲德
眞柴ふくかたのゝ原の夕風に霰玉ちる狩人の袖
權大納言公行
霰ふる交野の小野の夕狩に手馴ぬ鷹をすへそ煩ふ
百首の歌の中に　入道前左大臣
箸鷹の四毛ふりする嵐よりやかて横切玉あられ哉
前右大臣
狩人の身よりの袖も白妙に交野の御野そ雪にくれ行
よみ人不知
いさゝらは猶かり行ん鳥立するかたのゝ原は雪ふかくとも
實富朝臣母
今日もまた狩くらす哉雪ふかき交のゝ雉子の跡を尋て
應永五年百首の歌に鷹狩暮と云事を　從三位政子
箸鷹の狩はの小野の暮ぬるは殘る雉子の命之けり
三善爲德
はし鷹の空取鳥の落草もみえぬ計に狩暮しつゝ
鷹狩歸路といふ事を　前右大臣
けふもまた野原しの原狩暮て歸る道こそ月に成ぬれ
至德二年百首に　入道前左大臣
はし鷹のつかれの聲をきゝしりて鳥立の草をめかれぬる哉
百首歌奉りけるに　興全法師
箸鷹の空取草を分くれて鳥立みえれは歸る狩人
三善爲德
けふもはや交野の原に狩くれて眞柴折敷宿やからまし
百首の中に　前右大臣
狩人の袖打はらふ程もなし雪かきくらす野邊の歸るさ

源經定

箸鷹のとはふ羽風になのつから雪はらはるゝ狩人の袖

名所百首よみけるに　權大納言公行

狩人の安達の原のしらま弓末もたはゝに降ろ(れ異本)雪哉　三善爲德

應永四年の百首に

なのつからひかぬ眞弓もたはむ迄安達の原にふれる白雪　從三位政子

紅葉せし安達の眞弓引かへてあらぬ色にもつもる雪哉　前右大臣

題不知

里近き山には薄く積りけりかさなる山の雪の村々

嶺樹深雪と云とを　入道前左大臣

きのふまて緑の色の嶺の松けさ白妙に雪はふりつゝ

初雪のふりける日伏見殿を思ひやりて申をくり侍し　從三位政子

山陰はさこそふるらめ都たにかきくらしぬるけさの白雪

返し　從二位榮子

軒の松刈田の雪もなしなへて情をしらす思ひこそやれ

都こそけさはゆかしき吳竹の伏見の雪はなかめなければ

庭の松田の面の雪の情をもともにみはやと君そ悲しき

雪の朝よめる　前右大臣

とはれぬは恨なれとも庭の雪跡付ぬこそ情之けれ

五十番歌合に庭初雪を(て欤)　三善爲德

よしや人庭の初雪ふみ分はけさはなとひそ跡のおしさに

同しこゝろを　從三位政子

心あれや我いとふへき跡ゆへに人こそとはれ庭の初雪

題不知　よみ人不知

朝附日影さすかたの庭の面はかのこまたらにふれる雪哉　前右大臣

降しらむ雪の絕まにあらはれて朝日にみかく雪の遠山

雪似雲といふとを　入道前左大臣

白雲のかゝるとそ見ろほのぼのと明行山の雪のむらむら

曙に雪のふりつもりたる梢とものおもしろくみえければよめる　三善爲德

明わたる四方の梢の白雪は春にしられぬ花とこそみれ

題不知　よみ人不知

ちり過る梢の花の心ちして青葉にましろ松のうす雪

雪の朝つかはしける　從三位政子

花にまかふ梢の雪のうすきしも中々ふかき情とやみる

かへし　三善爲德

情をも今そ知ぬる薄雪を花ともみなす人のなければ

萩に雪のふりかゝりけるをみてよめる　入道前左大臣

荻かうれ古枝に花を咲かへてたはゝにつもるけさの白雪
題不知　前右大臣
夜のほとに積りにけりなげさみれば草木をしなへ降れる白雪
よみ人不知
起いてゝみぬ夜の雪の積るとは松の嵐のまばるにそしる
冬の歌の中に　實富朝臣母
ふり積る雪の玉水傳ひ來て氷にけりな軒の呉竹
竹雪映月と云事を
降積る外面の竹の雪の上に光さしそふ夜半の月影
應永五年の百首に雪埋竹といへる事を　從三位政子
ふり埋む軒の呉竹末ふして雪に晴たるまとの内かな
前右大臣
降つもる程も閨まて知られけり雪折ひゝく窓の呉竹
名所百首歌奉りけるに　三善爲德
夜のまより浦ふく風の音やみてげさ雪白し住のえの松
海邊松雪を　實富朝臣母
浦風も心して吹け住吉の松の上はに雪つもるほと
前右大臣
うら風の吹ける程そしらればる松には薄き濱の白雪
六十番歌合に松雪　崇光院冷泉

松のはにつもり／＼ては又嵐ともに落る白雪
同し心を　賢惠法師
はらひつゝ梢の嵐しつまれはあとより積る松の白雪
題不知　前右大臣
降しらむ雲の絶まのさひしきに又雪ちらす松の下風
故郷の雪をつかうまつりける　三善爲德
俤は花にそまかふさゝ浪やしかの都の雪のあけほの
同し心を　源經定
跡付る人しなければ古郷は心のまゝにつもる雪かな
庭雪厭人と云事を　實富朝臣
情しる人は中々まもとはし跡付かたき庭の白雪
從三位政子
情しらはけさは問そ庭の雪跡をは誰も惜む習そ
題不知　前右大臣
跡付てとふへき人のとはぬこそ雪の朝の情なりけれ
伏見殿へまいりて侍おりふし雪のふりて刈田のけ
しき面白くみえければよみて後に奉りける　入道前左大臣
稻葉にも猶まさりけりはるゝゝと刈田の面に降れる白雪
御返し　御製
ことのはのふかき情に色そゝふ刈田の雪は詠捌しを

百首歌奉りけるに海邊雪　藤原友尙

たしてるやみきはの松に降雪を梢の波のこすかとそみる　三善爲德

寄かへる（けるイ）濵とやよそにまかふらん雪になるほの松の梢は　從三位政子

應永四年の名所百首に

埋れて松ともみえぬ濵の上に一村雪の浮島のはら　前右大臣

百首歌詠けるに

富士のねも今そ時しる浮島の松もひとつに雪の白妙　實富朝臣母

題不知

大井川くたす筏の薄雪にみやすも（こ歟）淺きほとそしらるゝ　三善爲德

百首歌奉りける中に

尾上には中々猶やつもるらん松風おろす峯のしら雪　從三位政子

明德三年の名所百首に

峯の松はらふあらしの荒乳山木末の雪やつもりかれなん　よみ人不知

杉雪をよめる

尋へき印の杉もみえぬ迄雪ふりうつむ三輪の山本　入道前左大臣

降雪に綠の色は埋めともなのか姿の杉のむら立　前右大臣

名所歌に

梓弓小鹽の山の松のゆき神代も同し色はかはらし　重有朝臣

神まつる小鹽の山の松かえにしらゆふかけて雪も降らし　よみ人不知

題不知

なかむれは雪にくもれる鏡山霞し花の面影そたつ　前右大臣

さゆる夜の雪の光の鏡山都の月そ傍にたつ　實富朝臣母

關雪を

月のみとおもひしかとも東路の風破の關屋に雪もゝりけり

曙に雪のいとつもりたる上に在明の影の氷りたる

けしきたくひなく面白みえけれは思ひつゝけゝる　入道前左大臣

終夜降つむ雪の雲はれて有明の月の影そ氷れる　入道前左大臣

神樂をよめる

岩戸明し神代の業を傳へ來て今に絕せぬ本末の聲　從三位政子

あけにけん天の岩戸のそのかみも思ひやらるゝ朝倉の聲　實富朝臣

朝倉の聲すみのほる明かたは庭火の影もほのかなりけり　三善爲德

應永百首歌奉けるに

星うたふ聲は雲井に猶すみて庭火ほのかに明る東雲　前右大臣

歲暮雪を

白雪のふかく積れる野山にも道まとはてや年の暮ゆく

名所百首の歌に　従三位政子
歸りこん春迄松の雪のみや冬は稻葉の嶺に殘らん
歳暮の梅をよめる　よみ人不知
年くるゝ春の隣の垣ねより雪を分ても匂ふ梅かゝ
百首歌よみける中に歳暮を　入道前左大臣
夢の如くしもくれて老の波又立こえん春そ近つく
百首の歌よみける中に　前右大臣
野も山もみな白妙にふる雪の光にくるゝ程そしられぬ
炭竈をよめる　三善爲徳
大かたの雪けの雲に猶そへて煙もくもるをのゝ炭竈
百首歌の中に遠炭竈　源經定
さとまてはきてみぬをのゝ炭竈をなびく煙の末よりそしる
豊明節會に雪のふりければよめる　入道前左大臣
太雪ふる豊明のをみ衣つもればゝらふ山あゐのそて
永徳二年大嘗會に五節所にて雪のふりける日人の
もとへ申つかはしける　詠人不知
みせはやな豊の明の小忌衣同じ色なる袖の初雪
豊明節會の心をよめる　前右大臣
みとのりうけて傳ふる我袖にまかけすみゆる山藍の袖
五節の舞姫を同しくよめる
月影にをとめの姿あらはれて五たびかへす袖もかくれす
　重有朝臣
とにかくに今年もいまは吳竹の一夜ふたよに春そ近つく

菊葉和歌集卷第七

賀歌

題不知　三善直衡
和歌の浦の濱のまさごの數々は幾代をふともよみはつくさし
　三善爲徳
末とをくさかへゆくへき我君のよはひも共につきしとそ思ふ
五十番歌合に　従三位政子
我君によはひをゆつれ姫小松いまよりふへき千代のゆくすゑ
寄松祝を　興全法師
色かへぬ常盤の松の若緑□□ふ數に君そさかへむ
　惠重法師
ゆくすゑをなをや契らむ君と我あひをひ松の千代のみとりえ
　三善直衡
千とせへむ君かためしと松にさす緑のかすは常盤かき葉に
百首の歌よみける中に寄椿祝　實富朝臣母
かけそへていく代かはへむ玉椿とき葉の色も君か千とせも
題しらす　今出川二條
としをへていはふ心のあらましにたかはぬ君か御代の春かな

伏見殿にて花五十首講せられたる中に山花を　入道前左大臣

さきにほふ箱屋の山の花さかりいく萬代の春をかもへむ

左近大將にて侍比南殿の櫻を植進とて思ひつゝけ侍ける　前右大臣

移しうへておもふも遠し九重のみきりの花の千代のゆくすゑ

家に藤のおもしろくさき侍ける時人々歌よみ侍つゐてに　入道前左大臣室

年をへて君そみるへきやとの藤けふをはしめに千代の春まて

季富朝臣

三笠山わきて光そさしそへむ藤さかへゆくやとの軒端に

題しらす　よみ人しらす

おさまれる御代ものとかに吹なして木々におとなき春の夕風

五十番歌合に寄國祝を　從三位政子

時しあれはいつくの國もおさまりて民の心のやすき御代かな

おなし心を　權大納言公行

あし原のみたれぬ御代の時なれは風ものとけき中津國かな

祝の歌に　讀人不知

すへらきのかしこき君の代々たへすおさめし久し蘆原の國

應永二年正月七日白馬節會に右大臣左大將にて悦申し侍ける時心のうちにおもひつゝけゝる　前右大臣

うれしさはむかしもかくや我袖に左も右もあまるよろこひ

題しらす　權大納言公行

位山ふみそめしより道やすくさかゆくすゑそかきりしられぬ

大臣になり侍て後月をみてよめる　入道前左大臣

三笠山峯をはこえて影なひく月をそいまは袖にやとせる

八月十五夜月前祝言をよめる　源經定

萬代の秋をかされて今夜よりさらになれけむ望月の影

從三位政子

契をかむ月もわするな千とせともなを限なき行末のあき

重陽宴に岡菊を　松殿大納言入道女

秋をへて君かよはひのなか岡に老せぬ菊の色そ久しき

名所百首歌たてまつりける中に　三善爲德

君かへん千代をかけても大淀の三津の濱松色はかわらし

重有朝臣

千とせともかきらぬ三津の濱松にいく十廻の花かさくらん

祝の歌よみ侍中に　入道前左大臣

すみよしの濱松か枝の若緑十廻までの花そみるへき

三善直衡

千とせとも限はあらし末葉まてさかふる君におひなひの松

權大納言公行母

時わかぬ松のこすゑのふか緑かきりもあらし千代のゆくすゑ

百首の歌の中に　前右大臣

四の時をなし色なる松か枝のいつも常葉に君そさかへん

名所百首の歌に　三善爲徳

杉の葉も色はかはらて君か代にゆくすゑとをく相坂の關

伏見殿にて五十首の歌講せられ侍しに山家松をよめる　入道前左大臣

たくひなきこの山さとの姫こ松花さく世まて君そみるへき

里竹をよませ給ける　崇光院御製

いくとせのかはらぬ色にとしもへぬなれて伏見の里の呉竹

題しらす　季富朝臣

おひ廻竹のみとりは常葉にて垣れにこむる千代の色かな

權大納言公行母

君かすむ窓の呉竹代々をへてさかへんすゑそ限しられぬ

前右大臣

おもふこと君のまに〳〵さかへなん竹の園生の千代のゆくすゑ

四絃の道の久しくつたはれる事を思ひつゝけてよめる　入道前左大臣

我家も七代になりぬ四の絃のなを行すゑも限あらしな

寄道祝を　源經定

立かへりなをそさかへん敷島の道ある御代のやまとゝの葉

從三位政子百日の歌をとしとによみ侍けるをおなしくよむとて　前右大臣

いくかへり百の日數もおくりきぬやまとと葉は君のまに〳〵

百首歌たてまつりける時祝言　三善直衡

たのもしな君か恵をいやましにうけて千とせの影とこそすめ

題しらす　從三位政子

君か代はあかぬ心にまかせなん松は千年をかきりとそきく

菊葉和歌集卷第八

旅部

題しらす　前右大臣

春かすみ立わかれゆく旅人は雁と共にや秋歸こむ

離別の心を　三善爲德

かりそめの道ゆきふりの友にさえ別はおしき物にそ有ける

讀人不知

限あらは又歸こんとおもふたにひなの別はかなしき物を

貫富朝臣

かりそめとおもひなせとも旅衣たちわかれゆくな殘かなしも

世の中おもひのほかのことありて伏見殿をあけられける時な殘おしみにまゐりて罷歸て申送侍し

從三位政子

思ひやれいまを限となかめすてゝ出し伏見の里のな殘を

又もこむとおもふ伏見のな殘たに歸別はかなしき物を

かへし　從二位榮子

いつもすむうき身たにふり伏見山な殘はましてさそ思らん

餞別の心を　前右大臣

歸こん時こそきたは逢坂やあつまにいそく人の別路

逢坂の關にて旅人のおほくこえゆくをみてよめる　三善爲德

みやこにて見しもみさるも旅人の行相坂の關路こゆなり

旅の歌の中に　源經定

うかりつるあつまの旅やかたらまし宮この友に逢坂の關

季富朝臣

逢坂や杉の下道はの〳〵とまた夜をこめていそく旅ひと

百首の歌に　從三位政子

みやこ出し日かすもさらに白川の關まてきぬる旅をしそ思

題しらす　實富朝臣母

東路や淸見か關の月かけに心やとまる夜半の旅ひと

名所百首の歌に　重有朝臣

岩かねの枕もつらしよしさらは月に越なんさ夜の中山

實富朝臣

いかにせん月より外の友もなしひとりこえゆくさ夜の中山

五十首歌講せられ侍中に　御製

わけすくる山より山の旅衣なれゆく袖を月もわするな

羇中の歌に　讀人不知

いくへたてみやこのかたは遠けれと心は通ふ旅の空かな

前右大臣

日かすをはへたてきぬれと故鄕に心そ通ひなのなか道

旅行の心を　覺證法師

けふもはやいく山川をこえ過て宮こを跡に遠さかりぬる

從三位政子

ふるさとを雲と山とに歸みておもはぬ旅に道まとふなり

名所百首歌たてまつりけるに　三善爲德

さとはなし行はくらしつ旅人の歸山路にやとやからまし

羇旅の歌に　三善直衡

とまるへきやとのしるしやこれならむ心細くもたつ煙かな

よみ人不知

ゆき暮てやとなき野への旅人はいつれの草に枕結はん

百首の歌の中に　重有朝臣

けふはまたいつくの野にか行暮て草の枕に物を思はむ

羇中衣をよめる　三善爲德

けふはまたいかなる里に旅衣日もゆふくれのやとを問まし

おなし心を　從三位政子

旅衣わけくらす野の露にまつ我より先に月そやとかる

秋旅といふ事を　三善直衡

野へわくる秋のゆふへの旅衣たもとそいとゝ露にしほるゝ

三善爲德

旅衣そほちにけらし分みたす露をたもとに宮城野の原

旅の歌の中に　前右大臣

夜をこめてたつ旅ころもしほれけり露分わふる野路の細道

實富朝臣

けふも又あさたつ旅の習とてしるもしらぬもつれてこそゆけ

題しらす　よみ人しらす

おもひやれふるさと人よゆきくれて野へにやとかる草の枕を

權大納言公行

行暮てあはれに物のかなしきは草の枕の野へのかりふし

百首歌たてまつりける時　三善爲德

ゆくすゑの又もかゝやとおもふにもいとゝ物うき草枕かな

題しらす　従三位政子

かりねする野への草葉の枕たに契あれはそ結おくらん

權大納言公行母

かりそめと思ひなせとも物うきはまたみぬ里の夜半のかり臥

野宿をつかうまつりける　三善爲德

山ちかき野へのいほりのかり枕いこそねられね松のあらしに

をなし心を　前右大臣

深ぬるかいこそねられねつく〳〵と鐘たにきかぬ野への假臥

嘉慶百首の歌に旅宿夜雨を　従三位政子

草枕露にしほるゝ袖をたになをぬらせ(と歟)ゝや夜すからの雨

季富朝臣

あすのみちおもふもつらし旅衣袖さえしめるふかき夜の雨

題しらす　三善重德

こえきつる跡の山路の篠枕うきふししけき旅の空かな

三善爲德

さとゝをみ山路をやとの篠枕一夜をたにもあかしかねつゝ

風破旅夢といふ事を　従三位政子

岩かれの苔の枕におとつれて結はぬ夢をとふあらしかな

羈中友　權大納言公行

ふるさとにみし夜の月を友としてかりの枕に草も結はす

源經定

旅の空ふるさと人はとはれとも友なふ物はなれし夜の月

三善爲德

旅枕みやこをしのふ夜もすから友なふ物は袖の月影

明德百首の歌に　前右大臣

月のみそ都の友となれてゆく昨日のとまりけふのかりふし

題しらす　入道前左大臣

旅衣袖にやとして宮こにもかはらぬ月の影をこそみれ

よみ人しらす

みやこにて見し影よりもあはれなり旅ねをとふ在明の月

重有朝臣

月みても猶なくさまぬ旅ねかなみやこになれし人しなければ

源經定

旅泊月を

あはれなりなれし都の月ならて浪のうきねを誰かとはまし

伏見殿にて五十首歌講せられし中に旅泊夢

從三位政子

夜な〳〵は浦ふく風を枕にて夢も浪まの月をみる哉

百首の歌に

入道前左大臣

いかりをろす浪のうきねの梶枕みはてぬ夢を結夜な〳〵

三善爲德

よせかくる浪の入江に船とめてころもねられぬ梶枕かな

權大納言公行

あはれけにうきは船路の泊かな浪のよる〳〵ころもねられす

實富朝臣母

またなれぬ浪のうきねの梶枕いく夜の夢をあかしきぬらん

應永六年の百首に

從三位政子

うら風も心してふけ梶枕浪のうきねの夢むすふほと

三善爲德

いく夜我ならはぬ床にうきねして浪の枕に物おもふらん

三善直衡

題しらす

風をまつはにての具（奥歟）の泊船波にいく夜かうきねするらん

前右大臣

旅泊雨を

とまやかたしつくもしのに降雨に浪のうきねの袖そぬれそふ

よみ人不知

船よする浪の枕よぬれそひぬとまもる雨の降にまかせて

從三位政子

題しらす

故郷へそらふく風の傳もかな浪の枕の夢はさむとも

入道前左大臣

風をいたみともつなとかぬ浦舟は梶をたえてや日次まつらん

明德百首に

源經定

ふるさとをしのふの浦に船とめてそなたの風の便まつかな

前右大臣

播磨かた浪高砂の風立て室のとまやに日數をそふる

旅の歌の中に

入道前左大臣

おもふかたの風もよしとて朝なきにいかりをあけて船出なり

海路日暮といふことを

覺證法師

こく船のすゑのとまりも白浪のしらぬ鹽瀬に日は暮にけり

おなし心を

前右大臣

をちこちは雲より外の色もなし船路くれゆく浪のうへかな

菊葉和歌集卷第九

戀一

題しらす　　從三位政子
見し人のわすれやらぬや是ならむいさまたしらぬ戀の心は
百首歌たてまつりける中にはしめの戀の心を　　三善爲徳
なにとなくみしその人の忘ぬや戀の心のはしめなるらん
おなし心を　　實富朝臣
ひとめ見しその面影を身にそへてうはの空なる戀もする哉
戀の歌の中に　　重有朝臣
はかなしやうはの空にも吹風のめにみぬ人を戀渡つゝ
三善直衡
いかなりし風のたよりに思ひそめてならはぬ戀に袖ぬらす覽
明徳三年百首に初尋緣戀　　前右大臣
おもふ方の風をたつねてさゝかにの絲かけわふる程そ悲しき
おなし心を　　從三位政子
尋ぬへきたよりもしらて思ひたつ心はなにをしるへなるらん
六十番歌合に　　從三位資陰
思ひそめは初山あひのあさくとも心の色はさすかみえめや
百首の歌に　　源經定
いかにしてしのふの山の忍ても心のおくを人にしられん

寄山戀を　　よみ人しらす
いさゝらは人の心のおくやみるとしのふの山に尋入なん
前右大臣
分入らむたつきもしらす忍山しのふ中には道たにもなし
伏見殿にて五十首歌講せられし中に　　範定朝臣
わけいらむすゑこそしられ忍山まよふを道のはしめにはして
名所百首の歌に　　季富朝臣
東路やかすみの浦のほのかにもおもふ心をいかてしられん
重有朝臣
しられしなかすみの浦にこく船の浪よりたちて通こゝろは
題をさくりて歌よみけるに寄鴈戀を　　前右大臣
いかにしてにほの下道したにのみかよふ心のありとしられん
題しらす　　讀人不知
いかにしておもふ心をしらせまし人にはさこそ忍はつとも
伏見殿にて人丸影の前にて三十首歌講せられし戀
の歌に　　從三位政子
思ふとはさすか色にもみゆらんをつれなや人のしらす顔なる
思不言戀を　　重有朝臣
しれかしな色に出てはいはすとも心にむすふこひの思ひを
よみ人しらす
思へともさすかかくとはいひかたみ苦しや心いかゝしらせん

前右大臣

人しれぬ思ひはさらにいひかたみ心をかはすその傳もかな

應永六年百首歌に　從三位政子

思ひかねうき名にかへていはゝやと千たひ心にむせふころ哉

忍切戀といふ事を　源經定

あちきなく憂名にかへてしらせはや忍果つへき心地こそせね

おなし心を　御製

色に出むなみたこそけに限ならぬ命をきわとしのふ思ひは

しのひたる人のもとへつかはしける　よみ人しらす

もらさしとしのふ思ひのくるしさを唯なをさりの心とやしる

六十番歌合に戀色といふ事をよませ給ける　崇光院御製

八千しほに染てもあかぬ袖の色をたゝなをさりの涙とやしる

宰相入道了禪

いくしほとたとへん色もなく涙袖に染いたずかりの思ひは

題しらす　讀人不知

つゝみあまる涙の色のくれなゐも朽ゆく袖を限とそみる

崇光院冷泉

紅にそむる涙の袖をたにせめて色にも出ぬとやみぬ

御製

いかにして人の袖をも染てしる千しほの涙色にいつへく

自他戀といふ事を　從三位政子

紅に人のなみたもなりにけり我のみ色にいつると思ふに

題しらす　崇光院三條

思ひあまる心の色のみゆるならは袖は千しほに染そまさらん

源經定

いかにせん色に出しとおもふ身ももろゝ涙に人のあやめは

藤原永量

もれいつる泪あやめてとふ人に思ひの色をなにとこたへん

百首の歌の中に　入道前左大臣室

かきくろゝ涙よしはし落とまれしけき人めにもれもこそすれ

相互忍戀を　權大納言公行

つゝめたゝをつるなみたを諸共に袖くつるとも人にしらせし

をなし心を　從三位政子

人もつゝみ我もしのひていつかさはおもふ心も共にみえまし

題しらす　よみ人しらす

もらしてんおもふもくるし中々につゝみはつへき涙ならねは

忍戀の心を　三善爲德

つゝむとも色にや出むしのふすりみたるゝはかりぬるゝ袂に

權大納言公行

おもへともいはてしのふのすり衣みたれて色に出ぬへきかな

題しらす　今出川二條

夏ころもひとへにうすきたもとそよ我忍れの涙もらすな

讀人不知

わか爲にうたてもつらき涙かなもれすはしのふ色もしられし

百首の歌の中に忍親昵戀といふことを　前右大臣

むさし野やゆかりの草の露かけてしほるゝ袖と人にしられし

實富朝臣母

武藏野のゆかりの草にをく露のきえ歸つゝ物をこそ思へ

從三位政子

しられしよ心にそめてむらさきの一もとゆへに物おもふとは

六十番歌合に忍戀を　崇光院御製

如何にせん下に思ひのふかみ草さても色には出ん物かは

百首の歌に　前右大臣

いかにせん心にこめて忍草時雨にあへす色に出なは

三善直衡

その葉をいけせの森のいはすとも袖の時雨に色やみえなん

寄松戀をよめる　三善爲徳

我中は時雨もそめぬ松か枝の色には出す下に戀めや

伏見殿にて五十首歌講せられし中に忍戀の心を

從三位政子

色に出ていつる思ひを岩代の松につれなき夕時雨かな

戀の歌の中に　よみ人しらす

かすならぬうき身は松の夕時雨おもひそむれと色そつれなき

名所百首の歌に　前右大臣

時雨にもつれなき色をよそにのみなき名たかしの濱の松か枝

惜名戀といふことを　重有朝臣

如何にせん逢にもかへぬうき名のみ世にはもろなる袖の涙を

をなし心を　源經定

せめてその逢にかへてもなくさまはうき名計は歎さらまし

題しらす　讀人不知

いかにせんとても立名を同しくは逢にかへつゝさても有はや

前右大臣

つれなくてあひみぬ物を白雲の風に跡なき名をのみそたつ

從三位政子

はかなしやそらゆく雲に吹風のあとなき戀にまよふ心は

六十番歌合に　崇光院三位

我戀をいかなる色とかたらまし跡なき空の雲と風とに

百首の歌の中に寄雲戀を　實富朝臣母

我戀は風にまかせてゆく雲の思ひけぬへき心地こそすれ

惠重法師

思ひそめまよふ心はうき雲のうはの空にも成ぬへきかな

よみ人しらす

あはれなり心もそらになりはてゝ身はうき雲と思ひ消なは

名所百首の歌に　従三位政子
はかなしや磯間の浦にやく鹽の煙もそらに思ひ消なは
三善爲德
もしはやくかすみの浦の夕煙うはのそらにや思ひ消なん
寄煙戀を　前右大臣
外にのみたつ名はたへす夕煙いつ我かたになひくへきかも
道闡法師
戀しさをなにとするかの富士の峯の煙たへせぬ我思ひかな
康應百首の歌に　權大納言公行
すまの蜑のたくもの煙隙はあれとくゆる心そはるゝまもなき
應永五年百首歌たてまつりける時　三善爲德
音にきく室の八島にくらへなは立やはおとる胸の煙も
戀の歌の中に　覺證法師
いかにせん心まよひのはてよりは胸のけふりの立もおやます
つれなかりける人のもとへつかはしける　讀人不知
なひかしなよそにはみえぬ下もえの煙はかりはくゆりわふ共
題しらす　實富朝臣母
中々に消はてなく埋火の下にこかるゝ我思ひかな
思不言戀を　權僧正圓尊
思へともいはて過るにいとゝなを胸もこかるゝ心地こそすれ
おなし心を　入道前左大臣
思ひわひうき身をしりていひ出ぬ我下もえの胸そくるしき
題しらす　權大納言公行母
うき人をみるたひことにせきかれてたへぬ思ひに身をこかす哉
伏見殿にて五十首講せられし中に見戀を　前右大臣
いく思ひ心にこめてすくせともいはてなれみる中そくるしき
題しらす　覺證法師
外なからみるめもいまはうかりけりかなはぬ人に心つくせは
今出川二條
よそなからみるをあふにてすくす哉終に契やなき身なるらん
百首の歌の中に聞戀を　重有朝臣
逢みての思ひはましていかならむこゑを聞たにまよふ心よ
從三位政子
こゑきゝしたゝさはかりをしるへにてまたみぬ人に物思ふ哉
季富朝臣
先の世の契もゆかしみぬ人のこゑきくからにさはく心は
伏見殿にて講せられし戀の歌に　前右大臣
契あれやきくから袖のしほるゝをとはゝや人もいかゝ思ふと
百首の歌の中に　入道前左大臣
玉たれのこすのへたてにいひかはすこゑは思ひの種と成なり

ちか〳〵に侍ける人のもとへつかはしける

よみ人しらす

あし垣のま近き中もかひそなきいかにとたにもとはぬ憂身は

題不知

前參議公敦

たつれてもうらみに又やかへらまし聲きくはかりちかの鹽竈

百首の歌の中に

從三位政子

しられしな深き思はありそ海のみるめにつけてぬるゝ袖とも

源經定

つれなさをみるめにつけてあまこゝろもなを鹽たるゝ袖の浦浪

三善爲德

いつまてか鹽たれてのみ袖の浦浪のたちゐに物おもふへき

題しらす

よみ人しらす

人しれぬ思ひをすまのうらみわひ袖にも鹽をたれぬまそなき

つれなかりける女の許へいひつかはしける

重有朝臣

思ひやれ鹽汲あまのころも手もぬるゝはかりにかくは朽せし

戀の歌の中に

從三位政子

くらへみは我もおとらし松島やおしまのあまのぬるゝ袂に

題しらす

よみ人しらす

思ひきや名にこそきゝし陸奥のころもの瀧を袖にみむとは

入道前左大臣

戀わひてなみたをなかす衣川せくにとまらぬ袖のしからみ

寄川戀を

源經定

心から逢瀬そよとむ涙川人めつゝみのせくにまかせて

三善爲德

名とり河浪の下なる埋木のよそにはみえすぬるゝ袖かな

名所百首の歌に

從三位政子

埋木のためしに我や名とり河人のうき瀬に思ひしつまは

六十番歌合に

從三位資陰

名とり河うき名はかりはあらはれて身は猶しつむ瀬々の埋木

題しらす

入道前左大臣

かくはかり思ひにしつむ埋木の朽ぬへきをも君はしらすや

興全法師

我戀は人にしられぬ埋木のふかき思ひに朽やはてなん

惠重法師

人しれぬなみたにぬるゝ戀衣さてもほさすは朽やはてなん

權大納言公行

なみたゆへくちける袖もあはれなりなにしに物を思ひ初けん

六十番歌合に

良惠法師

世のうきをなけくといひて墨染の袖は涙をつゝますもかな

百首の歌の中に顯戀を

入道前左大臣

つゝめともいもりのしるし隱なく顯れにける身をいかにせん

心にかけゝる人のとかたにまよふときゝていひつかはしける　讀人不知

色に出てまよふ心やもれにけん世にかくれなき契とそきく

等思多人戀といふことをよめる　三善直衡

いつれをもわかぬ契とおもふてふなさけの色はさこそ知らめ

おなし心を　前右大臣

いつかたとわきておもはぬ心から共にしらてや猶うらむらん

題しらす　三善爲德

日にそへて憂思ひのみ增るをも人はしらてやつれなかるらん

五十番歌合に逐日增戀といふことを　從三位政子

つれなさにまけぬ心や日にそへてうきにもまさる思ひなる覽

題をさくりて人々歌つかうまつりける時惜人名戀といふ事を　三善直衡

かくはかり我に心のつれなくはかことに人の名をもからはや

をなし心を　前右大臣

我にのみつらきか人の名を借ゝ心みにやる今朝の玉章

戀の歌の中に　よみ人しらす

つれなさもいまは恨の數ならてあはぬうき名の數をそする

歎無名戀といふことを　從三位政子

思ひきやつれなき外に逢ことのなき名をそへて歎へしとは

題しらす　前右大臣

命にもかへん逢瀨は市人のよそにたつ名はさもあらはあれ

百首の歌の中に尋戀を　入道前左大臣

君か有家たつぬ計の名はもれてあはすは露の身をいかにせむ

よみ人しらす

はかなしやなにをしるへに尋らんそこともしらぬ人の有家を

名所百首の歌に　從三位政子

あつま路や濱名の橋のよそなから思かけても戀渡かな

前右大臣

逢ことはいつともさらに白浪のきく(、聲)こそわたれ佐野の船橋

五十番歌合に遠戀を　源經定

思ひやる心はかりは海山もわけて逢ふと人はしらすや

入道前左大臣

海山をへたつる中は遠けれとかよふ心はさはらさりけり

題しらす　從三位政子

さはらめやかよふ心は山鳥の尾上へたつる契なりとも

三善爲德

なにとかく心ないたく筑波峯のをちに隔てあはぬ契を

寄山戀を　よみ人しらす

我こゝろうたてもさのみつくは山しけき思ひを哀とやみぬ

前右大臣

我のみや心をさのみ筑波山しけきは人のつらさなりけり

題しらす　権大納言公行
山人の薪木つきせぬ心地して猶こりすまの戀もする哉
三善直衡
逢まていのたのみをかけて錦木の千束の數を待そ久しき
入道前左大臣
陸奥のけふの細布たちきても胸あひかたき恨なりけり

菊葉和歌集卷第十

戀二

忍たる人のもとへはしめていひつかはしける　三善爲徳
春の野の雪の下なるわか草の色には出す物おもふかな
百首の歌の中に　入道前左大臣
人しれす我しめし野の初草のはつかに君を思そめつゝ
題しらす　三善重徳
春のたつ澤邊の水のうす氷とけてとへかし君か心も
聞聲忍戀といふことを　實富朝臣母
鶯のまたうちとけぬ忍音をきかすはものをおもはましやは
春戀といふことを　從三位政子
梅か枝にいさ袖ふれむしのふ身は誰うつり香と人もこそとへ
讀人不知
おほかたの契はさそなかはるとも梅さくやとを情にもとへ
題しらす　源經定
我戀はみやまかくれの埋木よ花はさけとも問人はなし
三善爲徳
我中は峯よりをちにさく花のありとはきけとみぬそかなしき
應永七年三月盡に題をさくりて人々歌よみけるつ
いてに寄春戀を　從三位政子
とへかしな花のさかりも過ぬへしつゝむ人めも折にこそよれ
寄花戀を　三善直衡
したへともな殘もとめすちる花にたくふはかりの我契かな
重有朝臣
ちる花は風のつらさと思ひなしぬ人の心はなにゝうつろふ
よみ人しらす
はるかせのふかぬはかりそ人心うつろふ色は花にかはらす
三善爲徳
春風に花をまかせてみるよりもうつろひやすき人心かな
題しらす　三善興衡
このまゝに終にかはらは春の日のなかくや人を恨みはつへき
實富朝臣
物おもふなみたにいとゝ春の夜の月もおほゐになを霞むかな
三善重徳

誰ゆへのなみたにいとゝかすむそとかこつかひなき袖の月影

百首の歌の中に　前右大臣

思ひそむる心のおくは岩躑躅いはて過なむ色にいつとも

家に三十首歌講しける時　入道前左大臣

むらさきの色に染ぬる藤浪の思ひかけても戀渡るかな

名所百首の歌に　従三位政子

契のみあさかの沼のあやめ草ひかぬ袖さへねをそかけぬる

三善直衡

人心あさかの沼の花かつみかつみるからに色そしらるゝ

題しらす　重有朝臣

色に出ぬ思ひの色のあらはれは身は夏虫ともえやわたらん

入道前左大臣

夏虫に我身をかへてうき人にもゆる思ひをしらせてしかな

讀人不知

人しれぬ思ひもいまはあらはれぬ身は空蟬のなくれはかりに

六十番歌合に　崇光院冷泉

聲たてゝなくうつ蟬もうらやましなけき餘れとしる人のなき

寄七夕戀をよめる　前右大臣

七夕のまれの逢瀬もうらめしや思ふ中には我を契らし

従三位政子

七夕のたえぬ契もうらやましまれの逢瀬はうらみなれとも

興全法師

七夕のたえぬ契のまゝならはせめてやまたん一夜なりとも

題しらす　三善為德

荻の葉に風はふけともまつ人の音信はなきゆふくれの空

權大納言公行

夕されは荻の上葉に吹風もまたるゝ人の問かとそきく

三善直衡

人こゝろはや秋かせの吹しより眞葛か原そ恨かちなる

六十番歌合に　範定朝臣

色に出てえこそ恨れ葛の葉のうつろふ人の秋はしれとも

百首の歌の中に　權大納言公行

いたつらに身は奥山の葛の葉ようらむるとたに人はしらしな

題しらす　前右大臣

妻こふる端山か峯になく鹿のしけきうらみに立まよふかな

三善為德

あはれにも妻こふ鹿のこゑきけは我身もさそと思ひこそしれ

秋の夕へいと物あはれに覺けれは人のもとへいひ
つかはしける　よみ人しらす

戀わひてひとのなかむる夕暮よいかはかりうき秋とかはしる

題しらす　源經定

なみたをはいかはかりとか人はしる物おもふ比の秋の夕ぐれ

重有朝臣

思へたゝ戀せぬ人の心たに秋の夕へはつらき習を

萩原殿にて九月盡に人々に歌めされけるに寄秋戀を　從三位政子

なかめわひぬさらてら秋はかなしきにまして物思ふ夕暮の空

題しらす　よみ人しらす

おほかたの秋のあはれの露そへてもの思ふ比の袖をみせはや

つゝみあまる袖の涙を人とはゝ秋のあはれの露とこたへん

九月盡に三十首歌講しける時寄秋戀　三善爲徳

思ひやれさらても秋は露けきにひとりぬる夜の袖の氣色を

月前戀を　前右大臣

中〳〵に月にはとはし長夜をおしとてあかす人もこそあれ

季富朝臣

夜よしとも誰にかつけん月きよみおなし心の人しなければ

松殿大納言入道女

月にとふなさけはかりかおのつから向程たにうさはかはらす

題しらす　入道前左大臣

夜さむなるやもめのねやのひまもとめ月人おとこ影そさし入

百首の歌に寄松虫戀を　前右大臣

いとゝしく涙そまさるふくる夜の月におりしも松虫のこゑ

權大納言公行

きくからに我身ひとりのたくひ哉うはの空にもまつむしの聲

入道前左大臣

わくらはに問情もやと夜な〳〵は人まつ虫の音をのみそなく

名所百首の歌に　從三位政子

人心うつろふ色も身にそしむ阿波手の杜そ秋の木からし

前右大臣

結をきし契のみにていく秋そ阿波手の杜の松の下露

重有朝臣

思ひかねいまやいはせの杜の秋下葉の露の色に出なは

題しらす　季富朝臣

涙のみしくるとすれと松か枝はもみちぬ色と人そつれなき

前右大臣

むら時雨またふらなくに下紅葉おもひ染とも人はしらしな

六十番歌合に　經有朝臣

くれなゐをなかす一葉にみかわ水わきて涙の露やそめけん

經良朝臣

露時雨そむる草木の色よりも涙はふかし袖のくれなゐ

題しらす　從二位榮子

いかにせん人の心の秋にあへは色かわりゆく露のとの葉

應永三年九月に山門大講堂供養せられける時上童に出侍けるにかいしやくしける法師のもとへかさ

しの菊を後につかはすとて　侍從季行（登名菊千代九）

たのましよ人の心は白菊のうつろひやすき物とみるにも

わするなよなれし契はかわるともかさしの菊の情はかりは

かへし　顯守法師

としふともかはらし物を白菊のうつろはてみむ秋と思へは

なにかそのなれし契もかはるへきかさしの菊のあらむ限は

題しらす　前右大臣

秋もはや末野の眞葛かれ〳〵にうらみたちぬる比そくるしき

從三位政子

人こゝろあさちか原の秋暮てかれ〳〵になる露のとの葉

今出川二條

思ひきやさしも契しとの葉の霜をもまたて枯はてんとは

冬戀の歌に　三善爲德

時雨をはなにいとひけんひとりねの涙にも又くもる月かけ

讀人不知

冬の夜はなをひとりねもつらかりき袖も枕もこほる涙に

名所百首の歌に　源經定

さそなうき我もつらさは思しろますたの池の鴛のひとりね

寄鴛戀を　今出川二條

我とく物やかなしき夜もすからつかはぬ鴛のうきねのみして

百首の歌の中に　從三位政子

こぬ夜半を思ひあかしの浦千鳥なく〳〵そみる有明の月

重有朝臣

逢にかへぬ名のみたかしの濱千鳥なく〳〵思かひやなからん

名所百首歌たてまつりける時　三善爲德

人こゝろよそになるみの浦千とり跡もなきさの涙になくなり

寄網代戀を　よみ人しらす

雪のうちに道はまとはす通しは宇治のわたりの契なりけり

寄鷹戀を　前右大臣

はし鷹の鳥立の草をよそに見てあはぬ恨をいかにかもせん

千首の歌の中に寄獸戀を　三善直衡

したへとも人の心はあら熊のなつかぬ中をなにしのふらん

季富朝臣

なれてたに人にはうときしなをのいなの中道袖しほれとも

題しらす　讀人不知

逢とは片野の眞柴露わけてしほるゝ袖をいかてほしなん

應永六年百首に羇中戀を　從三位政子

旅ころもひなのなか路にしほれしを又露そへて物思ふかな

重有朝臣

旅ころもわくる野山の露よりも戀路にまよふ袖そぬれそふ

題しらす　前大納言重資

逢坂の山は戀路とこえてしもなを關守の夜はとめしや

入道前左大臣
憂身にはその名もうとし相坂にしのひしのはす人はこゆれと

菊葉和歌集巻第十一

戀三

六十番歌合に寄雲戀を　宰相入道了禪
わひぬれはよそなからたに天雲の目にみるほとの契ともかな
題しらす　從三位政子
かたみかはそなたの空の峯の雲戀しきたひにうちなかめつゝ
權大納言公行
なかめわひぬつれなき人を待暮のそなたの空の雲もうらめし
讀人不知
いく夕かはるつらさをなけくらんむなしき空の雲にうれへて
百首の歌の中に　前右大臣
天雲の思ひはるへきかたもなし空ゆく風の便まつとて
題しらす　源經定
恨みはやさこそは忍ふ中ならめ風のつてにもとはぬつらさを
三十首歌講せられし中に聞戀を　御製
中々にたよりの風もあちきなしきゝてなくさむ行衛ならぬに
題しらす　季富朝臣
かはらすとつたへきゝてもなくさむは我思ふかたの風の音信
今出川二條
我おもふ人のかたより吹風は身にしむはかりなつかしきかな
百首の歌の中に　前右大臣
興津かせ松にこゝろをしほれとも涙やこゆらん音信のなき
題しらす　入道前左大臣室
戀しともえこそ岩ねの松よけにまつほとつらき人の心を
寄松戀を　從三位政子
もの思ふなかめのすゑの松もうしつれなき色とみるに付ても
三善直衡
人心なひかぬ中を松か枝のつれなき色にとしをふる哉
入道前左大臣
外にのみあふの松原かくはかりつれなき色をいつきてかみむ
題しらす　前右大臣
我戀は槙たつ山のむら時雨つれなくてのみ過ぬへきかな
祈戀をよめる　季富朝臣
いのれとも神はうけすや人心つれなき色を三輪の神杉
重有朝臣
祈てふしるしはなくてうき人のかわる氣色を三輪の神杉
六十番歌合に　讀人不知
三輪の山杉のしるしもなにかせん尋てきます人もなき身は
三十首歌の中に祈戀　宰相入道了禪

逢とを人はいなりのやますなを神に祈をかけて戀つゝ

百首歌たてまつりける中に　三善為継

人心とけもやすると夕たすきかけても神に身を祈かな

入道前左大臣

神にれくそのかひあれやうき人のつゝき心のなひくはかりに

依戀祈身といふことを　前右大臣

千早振神もあはれめとの葉をかはすはかりの身ともならはや

百首の歌の中に祈難逢戀　寶富朝臣母

なけきわひ逢世もしらぬ我戀は神のちかひを憑はかりそ

よみ人しらす

契をやよそにむすふの神ならむ祈我身は逢よしもなし

寶富朝臣

千はやふる神のちかひのいかなれは祈しるしもなき契りかな

重有朝臣

おしからぬ命にかへてあはゝやと祈る心を神もあはれめ

題しらす　よみ人しらす

おしからぬ命なれとも戀しぬと人にきかれん名こそ惜けれ

待不堪戀といふことを　従三位政子

逢までの哀もいまはなからへて人を待へき心地こそせれ

おなし心を　源　經定

戀しなん後の世をたにとへよ戀いきて待べき我身なられは

つれなかりける女の許へ申やりける　よみ人しらす

戀しなは哀ともきけつれなさになからへぬへき心地こそせれ

題しらす　重有朝臣

あはれなりつれなき君を戀わひて露の命の思ひ消なは

厭命戀といふことを　源　經定

いきて世に物をおもふもくるしきに消なはきえぬ露の玉の緒

よみ人しらす

うきにきえぬ露の命のつれなさはいきて世になを物思へとや

五十番歌合に　従三位政子

思ひわひきえねとかこつ命たにいとへはなとかつれなかる覧

題しらす　前右大臣

命をもおもはぬ物を心にもまかせねはとてなをうらむらん

互切戀といふ事を　經有朝臣

限あるいのちをたにも諸共にきえはきえねと猶契るかな

おなし心を　重有朝臣

もろ共に命をきわと契ても猶後の世をたのめをくかな

戀の歌の中に　よみ人しらす

こむ世まてたのめをくこそはかなけれ命のうちもしらぬ契を

應永六年百首の歌に契切戀　従三位政子

むまれあはゝこん世までもと思こそせめて契の深さなりけれ

六十番歌合に　前大納言重資

むまれあはんおなし蓮のうへにまてこの世にきえし露の契を

題不知　よみ人しらす

たのましな草葉にむすふ夕露の風まつほとのあたの契は　入道前左大臣

風をまつ草葉の露とわか契人のこゝろといつれあたなる　三善爲德

寄草戀を

たのますよたゝ一かたに道芝のなひきもはてぬ人の心を　三善直衡

題しらす

くやしくもなに憑けん人心あさちか原の露のちきりを　讀人不知

六十番歌合に

月草のうす花ころもうすけれとうつれはかはる色はみえけり　前右大臣

百首の歌の中に

月草のうつろひやすき花の色は人の心や種と成けん　源經定

月草の色ならなくにうき人の心の花もうつろひにけり　今出川二條

題しらす

花染にうつろひやすき人心かはらぬ松の色にならへよ　從三位政子

伏見殿にて三十首歌講せられし中に契變戀を

契つる人の心は花なれやゝかてうつろふ色そみえぬる　從二位榮子

題しらす

下紐はまたとけぬ身もうつもゆく（可疑）心の花の色はみゆるを　前參議公敦

いかにして移ろふかたの色もみむ我とはりの身をもしろやと　よみ人しらす

誰に又おもひうつれは我をいますろめかほなる人の氣色そ

寄鏡戀を　前右大臣

ちりもゐぬかゝみの影にむかふと我に心を露もへたつれ（存疑）　從三位政子

忍れのかゝらはくもれますかゝみ思ひの色のうつりもそする　季富朝臣

百首の歌の中に寄枕戀

しのひれのかゝる泪を人とはゝいかゝこたへんつけの小枕　前參議公敦

六十番歌合に

朽はてん袖を限のなみたかな人にはつけの枕ならねは　賢惠法師

枕たにしらぬ思ひのくろしきにかゝる涙をいかにせかまし　三善爲德

百首歌たてまつりける中に

下もえにおもふ心はしきたへの枕なりともいかてしらまし　よみ人しらす

しきたへの枕ならてはよもしらし袖よりあまる夜半の忍れ　入道前左大臣

忍經年戀といふことを

忍れに枕も袖も朽ぬへしかくて年ふる色をみせはや

題しらす　従三位政子

あちきなく夜はもらさむ忍れよ袖にとゝふ月はしるとも

八月十五夜三首歌讀ける時依月忍戀　重有朝臣

とへかしな人のみかたき月の夜を忍ふといふも折にこそよれ

おなし心を　前右大臣

とはゝやな月のかこともれなはとやすらふ程に夜こそ深ぬれ

題しらす　今出川二條

月みると人にはいひて夜もすから心のうちに物をこそ思へ

康應百首の歌に　従三位政子

この暮と契し人は問もこてたのめぬ月それやにさし入

三善為徳

ふけにけりつれなき人を松の戸にさし入月も影そかたふく

題しらす　賢恵法師

いたつらにむかひそふくろつく／＼と人はこぬ夜の面影の月

今出川二條

鶏をまつとはなしになかむれはふけゆく月の影もうらめし

名所百首の歌に　前右大臣

つれなさをいく夜かこたむ菅原やふしみの里の有明の月

従三位政子

夢にたにこぬ夜の床にきゝわひぬひとりふしみの里の松かせ

寄衣戀を　重有朝臣

君やもし夢にみゆるとさ夜衣まちよはる床にかへしてそぬる

六十番歌合に　經有朝臣

返てふしるしはなくてさ夜衣思はぬ夢にぬるゝ袖かな

戀の歌の中に　實富朝臣母

烏羽玉の夜半のころもをかへしてもみはてぬ夢は猶そ悲しき

題しらす　季富朝臣

夢にたに逢とやみるのうたゝねもむなしくさむる程そ悲しき

よみ人しらす

おほつかな忍ひかねつゝねぬる夜は我もや君か夢にみゆらん

寄夢戀を　前右大臣

うらやましいかなる人と君は又我みてし夜の夢結らん

重有朝臣

思ひねの心によはくせめてけに逢ともみえよ人の夢路に

入道前左大臣

おもひねの心のすゑや通らんはかなき夢にあふとみえつる

百首の歌の中に　季富朝臣

思ひねの夢路はやすく通けり逢とみえつるな殘かなしも

前右大臣

おもひねの夢の心地の其まゝにやかてうつゝの逢瀬ともかな

従三位政子

待よはりまとろむ程に逢夢をやかてうつゝになすよしもかな

應永六年百首に逢夢戀

うつゝならは猶いかはかり慕はれん夢に逢たになしきな殘を

六十番歌合に　御製

逢とみつる夢をさへ又おとろかすようきは別の鳥と思ふに

寄鳥戀を　前大納言重資

逢にかへし別はせめていかゝせんこぬ夜を告る鳥のねそうき

宰相入道了禪

別路につらからましの鳥の音を待よはる床にうらみてそぬる

崇光院三條

曉をちかしとつくる鳥のねよふけぬになしてなをも待夜を

經良朝臣

たのめてもむなしき夜半の鳥の音は別しきわに猶やまさらん

五十首歌講せられし中に待空戀を　崇光院御製（乃歟）

人めにはまたぬになせと終夜さてもいまはの鳥の音そよき

待戀の心を　權大納言公行母

待わひてふけぬる夜半の悲しきは身をや恨みん人やかこたん

今夜とたのめける人のこさりけれは後にいひつかはしける　讀人不知

憑めてもこぬ夜むなしく深しをはいかにまたれし思とかしる

寄鐘戀を　從三位政子

さりともと思ふ心もつきはてぬまつ夜ふけゆく鐘のひゝきに

六十番歌合に　從二位榮子

いつはりと思ひさためは待宵のふけゆく鐘もうらみさらまし

從三位資陰

時として心つきぬる鐘の音よ待しゆふくれいまのあかつき

前右大臣

題不知　覺證法師

きぬ／＼の面影もうしとはぬ夜もきかしやさらに曉のかれ

かれの音に待し心もつきはてゝ我手枕にあくるしのゝめ

從三位政子

あはれとも明ゆく鐘の聲すなり誰きぬ／＼にならんとすらん

重有朝臣

待明す今朝の思ひにくらふれはそのきぬ／＼のうさは物かは

題をさくりて人々歌つかうまつりける時戀燈といふとをよませ給ける　崇光院御製

影よはみはや明かたの燈火のさてもよはらぬ我思ひかな

百首歌たてまつりける時寄莚戀を　三善爲德

いつとなくたえぬ思ひをすか莚我かたしきてさてやはつへき

實富朝臣母

待わひて今夜もひとりすゝむしろかたしく袖は涙なりけり

寄糸戀を　前右大臣

たのめてもあひみるとは片糸のよる／＼袖のうへそしほるゝ

三善重德

夜な〳〵に思ひみたるゝ片糸のあはてはてなんとそかなしき

季富朝臣

逢をはいつともさらに白糸のみたれてものを思ころかな

前右大臣

戀わふる心のうちは片糸のくるしき物と人はしらすや

百首の歌の中に寄池戀

從三位政子

思ひのみますたの池のねぬ縄のくるしや人になに契けん

今出川二條

思ひあまりたちそよらるゝ池水に戀しき人の影やみゆると

題しらす

讀人不知

あさくのみ思ひしかとも山の井のふかき心は汲てこそしれ

寄海戀を

前右大臣

たのむるもいさとよさらに白浪の海よりふかき人の心は

季富朝臣

とにかくにうらみはたへすありそ海のそこもしられぬ人心哉

題しらす

入道前左大臣

人心あさかの浦はあさくとも玉もかる船おしてよせなん

六十番歌合に寄船戀

宰相入道了禪

あま小船奥をふかめてさす棹のおよはぬ戀に身はこかれつゝ

御製

沈めたゝよるへも涙のすて小船人のうき瀬になにかたゝよふ

百首の歌の中に

從三位政子

うき瀬にも沈みははてぬすて船の思ひこかるゝ身社つらけれ

三善爲德

逢をは涙にたゝよふすて船のいたつらにのみこかれゆくかな

菊葉和歌集卷第十二

戀四

題しらす

前右大臣

逢とは雲井はるかにゆく月のみなれてのみや戀渡へき

くものうへなる人をほのかにのそきて心にのみか

ゝりけるをひとのいかゝとゝひたりける返事に

從二位榮子

おもへたゝほのみし月の面影のうき身をさらぬ比の思ひを

女のもとへつかはしける

讀人不知

みせはやな戀ゆへ袖にやとかりて涙にくもる月の氣色を

寄月戀を

從三位政子

なみたせく袖にやとかる月影はもの思ふ我を問かとそみる

至德四年九月十三夜百首歌講侍し中に

松殿大納言入道女

あらすなる人の心のうき雲に月をへたつる我涙かな

題しらす

源經定

ものおもふ心やそらの雲となるつれには袖に雨そゝくなり

寄雨戀　　前右大臣

よしとてもいまそ身をしる人心かヿの雨はふらはふらなん

三善爲德

雨と降なみたに袖はくつるとも身をしる中は人なうらみし

季富朝臣

たまさかにたのむ日暮に降雨は人の心のさはりなりけり

六十番歌合に　　前大納言重資

なをさりの心のすゑもみゆはかりさはりの雨はいまやみぬ也

崇光院三位

心のみあらすなるこそあはれなれ雨にも人のさはりやはせし

題しらす　　今出川二條

たのめしに又さはるとのヿの葉は誰に契りて通なるらん

從門歸戀といふヿをよめる　　前右大臣

立歸心のうちをしらせはや槇の戸さゝてまたぬつらさよ

三善爲德

いかにせん人はすさめす槇の戸にやすらひかねて歸つらさを

賓富朝臣母

松の戸をさゝすは人の僞も思ひしらてや歸らさらまし

戀の歌の中に　　季富朝臣

たのむへき人の心とみぬほとはとにもかくにも思ひなりけり

不憑戀を　　三善重德

かはらしといふもいはぬも一かたに人の心はたのまれぬかな

前右大臣

僞に習きぬれはかならすのヿの葉も又たのまれぬかな

疑眞僞戀といふヿを　　權大納言公行

かさりいふヿ葉の色を一かたに僞まヿをなにとさためん

季富朝臣

一かたにいかゝさためてたのまし僞まヿをしらぬヿの葉

百首の歌の中に僞戀　　賓富朝臣母

かはらしと契し君かヿの葉はたゝ僞の情なりけり

從三位政子

僞のある世をいまそ思ひしるさしも契しヿの葉もゆめ

戀の歌の中に　　よみ人しらす

いつはりと思ひし物をさりともとたのみし我そ今はくやしき

前右大臣

僞になれてもまよふ心かな又こりすまにたのむつらさよ

かならすとふかくたのめける人の許へ申つかはし
ける　　三善直衡

僞とおもひなからもかくはかり契らはふかくたのみこそせめ

題しらす　　行俊朝臣

なをさりの僞なりと契をけよしヿの葉をわすれかたみに

契戀を　季富朝臣
けには又うらみもはては立歸心よはくも契はかなさ
前右大臣
契をくゆくすゑまでのその葉を心かためて露もわするな
途中契戀といふことを　重有朝臣
わするなといふもはかなし玉ほこの道ゆきふりのかりの契は
おなし心を　源經定
玉ほこの道過かてにこの暮とたのめし人の音信もせぬ
題しらす　よみ人しらす
あさき瀬をくたす筏にあられともまつ暮ことにさはりかちなる
戀の歌の中に　今出川二條
この暮のくものふるまひしるけれは今夜は人をまたしとそ思
題しらす　從三位政子
待もうしとはぬもつらしあはれたゝ物をおもはぬ夕暮もかな
晝戀といふことを　實富朝臣
いかなれはたのめぬけふの晝またにくらしかれては又歎つゝ
題しらす　今出川二條
思ひあまりつけの小櫛に占そとふ我まつ人はくるやこすやと
初逢戀をよめる　三善直衡
うきなからたえて待けん情にや今夜ならふる新枕かな
よみ人しらす
思ひそめし君か心の下紐もとけて今夜そ新枕する
三十番歌合に　三善爲德
ゆくすゑのなかき契はしられともまつかはしつる新枕かな
百首の歌に　前右大臣
外に見し心つくしは數ならてなれて色そふ新枕かな
伏見殿にて三月盡に人々に歌めされし中に初逢戀
を　從二位榮子
戀〳〵て新手枕の今夜たにうれしきにさえ袖はぬれけり
應永六年百首の歌に　從三位政子
戀〳〵しうさもわすれて新枕うれしき外はその葉もなし
五十番歌合に　源經定
むつこともえこそいはれね新枕あふうれしさの心まとひに
明德百首の歌に逢戀を　前右大臣
うらむへきそのふし〳〵も忘られて稀に逢夜はその葉もなし
季富朝臣
とけやらぬ人の心のつらさこそ逢にかへたる恨なりけれ
戀の歌の中に　入道前左大臣
かれてより思しとよ逢みてはたへてあるへき心地こそせれ
契後逢戀といふことを　宰相入道了禪
その葉のすゑしかはらす逢ぬるよたのむとはなき契なりしを
百首の歌の中に旅宿逢戀　從三位政子

わするなよ一夜かりねの草枕めぐりあふべきをはしられと
源経定
わするなよかりそめなれと篠枕この世ひとつの契ならすや
旅戀の歌に　實富朝臣母
かりそめの契なりとも草枕たひねの夢を人もわするな
よみ人しらす
わすれしよさらぬ旅ねはうけれとも逢みる夢の契はかりは
百首歌たてまつりける中に　藤原友衡
わすれめやかりの旅ねの一夜妻露のちきりのふかき情は
旅宿戀を　實富朝臣
夢なれや野への小篠にやとかりて一夜むすへる露の契は
前右大臣
又いつとたのめもおかぬ篠枕一夜かりねの夢そかなしき
逢戀の心を　入道前左大臣室
たまさかに逢夜もぬるゝ袂かな又のたのめをいつときかれは
伏見殿にて五十首歌講せられし中に　従三位政子
いまはとて鳥は鳴ともいそくなよ又の逢夜もたのまれぬ身に
別戀を　よみ人しらす
いまはとてわかるゝきはの心こそとはぬに過る思ひなりけれ
六十番歌合に　經有朝臣
我は又夢かとたとる鳥のこゑを人の方よりなと怨らん
範定朝臣
鳥のねをまた夜ふかしと聞なして思のとむるきぬ〳〵もかな
戀の歌の中に　權大納言公行母
うらめしくあはれにきくは曉の別をつくる鳥の八こゑよ
崇光院三位
引かへてあはれともきく鳥のねよいまはかたみの曉の空
三善直衡
待わひしそのゆふくれの鐘よりも逢夜あけゆく鳥の音そうき
三十首歌講せられし中に　御製
あやにくにまつ夜はふけし鐘の音の別になれはなと怨らん
題しらす　前右大臣
我中はみるめにましろすて小貝あはてのみこそ年をへたけれ
實富朝臣母
あまのかるもにすむ虫の我からや逢を浪に袖のぬるらん
名所百首の歌に　源経定
數ならてさてもなるみのうらみにも先浪かゝる袖をみせはや
季富朝臣
たまさかに逢瀬の浦のあま衣うらみもやらてぬるゝ袖かな
不逢戀の歌に　三善直衡
我戀は鹽たれ衣ぬきをうすみまとをにたにもあはぬつらさよ
六十番歌合に　行俊朝臣

涙川まくらは海となりしより塩たれころもほすひまもなし

題しらす　前右大臣

つれなさのうらみは淵とつもれとも逢瀬もしらぬ涙川かな

菊葉和歌集巻第十三

戀五

戀の歌の中に　今出川二條

いかなりし世々の契そかくはかりおもはぬ人をしたふ心は

片思を　入道前左大臣

先の世の契やうすきおもふ人の我を思はぬ心つくしは

題しらす　よみ人しらす

契けん世々のむくひもいかなれは心つくしに物おもふ身そ

源經定

今はたゝ我をおもはぬ人よりもつれなくしたふ身をや恨みん

實富朝臣

戀しとも人はおもはぬ物ゆへに我のみなとか袖のぬるらん

被厭戀といふことを　従二位榮子

したはれは猶いかはかり涙（泣歟）ならむ厭るゝたにあはれと思に

重有朝臣

いとはるゝうき身の程そ哀なる數ならはけにかゝらましやは

従三位政子

うき身とていとひなはてそかく計したふも世々の契ならすや

百首歌たてまつりける中に被厭賤戀　三善爲徳

いとはるゝ賤のおたまき今更にくり返しても身をそ恨むる

戀の歌の中の　讀人不知

思ひとけは人のつらきもことはりようき身は誰もいとふ習そ

題しらす　實富朝臣母

よしさらはうらみしいまは中々に我身のうさの思ひしられて

前右大臣

つらしとも恨しほとはなをもけに人の情のあるにそ有ける

伏見殿にて三十首歌講せられしに恨戀を　従三位政子

人しれぬ恨をせめてしらせはやさこそうき身は數ならすとも

三十番歌合に　源經定

數ならぬうき身のとかになしはてゝ人のつらさもえこそ恨れ

百首の中に　重有朝臣

數ならぬ身をこそ今はうらみつれうきも思へは人のとかゝは

題しらす　今出川二條

したふとや人のおもはむよしやたゝつもる恨も袖にくたさん

入道前左大臣室

とへかしのうらみも何かいひつらん心淺さのほとはしられて

契往年戀といふことを　三善爲徳

思ひそめそのとし月を送てもつゐにちぎらぬ身こそつらけれ
前右大臣
さりともとおもふ心を命にてとし月をふる中そかなしき
權大納言公行
契にしその兼ことを命にて待に我身の年もへにけり
題しらす　三善爲德
結をきし契のすゑのかはらすはさりとも人の外にやはなる
伏見殿にて五十首歌講せられしに契變戀を　入道前左大臣
たのめつる心よされはいつのまに思ひたえよの色をみすらん
月前變戀といふことを　よみ人しらす
たのめおきし契もむなしいつのまに月みるうちにかはる心そ
題しらす　前右大臣
たのめこし契はいかに在明のつれなくてのみすさむ物かは
松殿大納言入道女
月そとふ契し人は跡たへて影たにみえぬよもきふのやと
不會戀を　御製
面影もわするはかりにへたてきく又とみぬ夜の夢そあやなき
季富朝臣
おもかけは心にいつものこれとも逢と見し夜の夢は絶にき
題しらす　覺證法師
いまはゝやうつゝは思ひたへぬとも忘れし中に夢しるへせよ
不逢戀の歌に　讀人不知
はかなしやなに百夜とは契けんまろねかひなき榻のはし書
入道前左大臣
夜かれつゝ日數積れる閨のうちの塵もはらはぬ床のさひしさ
百首の歌の中に寄鳥戀　從三位政子
あふ夜をもしらぬうき身は鳥のねをきゝてうらむる曉もかな
六十番歌合に　崇光院二條
たかわかれつくるたよりの鳥の音そ逢夜もいまはしらぬ枕に
從三位賢陰
鳥のねもいまはかこたしひとりねは別もかなと思ひかへして
百首の歌の中に　季富朝臣
逢にこそ別もおもへ鳥のねをうらみし比を忍ふ曉
題しらす　前右大臣
立わかれ峯のよこ雲そのまゝにゆくゑもしらぬ戀もする哉
非心離戀といふことを　重有朝臣
風ふけは峯にたなひく横雲のおもはぬそらにたちはなれつゝ
題しらす　三善爲德
いまはゝや逢みむとも白雲の外にへたつる契かなしも
應永百首の歌に被忘戀　從三位政子
わするやとさらにも人を尋みんとふにつけてや思ひいつると

おなし心を　　　　　　　　　　　　前右大臣
年月はへたてきぬれとさらに又とはゝや人もわすれはつやと
題しらす　　　　　　　　　　　　源經定
たえはてし人の契のつらさをもいはぬにふかき恨とはしれ
　　　　　　　　　　　　　　　入道前左大臣室
絶はてゝいまはうらみもなき中になりと淚のすゝみいつらん
題しらす　　　　　　　　　　　　讀人不知
□今は命もたえれたゝ此世にあはむ身とはしらけと
名所百首歌に　　　　　　　　　　從二位政子
いまはたゝ思ひをたえれかけてこふる契かひなき佐野の船橋
　　　　　　　　　　　　　　　權大納言公行
□やせん袖のみぬれておなし世のたのみをかくる佐野の舟橋
　　　　　　　　　　　　　　　前右大臣
かけてたに契くちせぬ中ならは緖絕の橋の名をはいとはし
　　　　　　　　　　　　　　　實富朝臣母
□はいまはふみみし東路やおたへの橋の契なりせは
絕戀の歌に　　　　　　　　　　　入道前左大臣
□への橋はよそならす我中河にわたしけるかな
　　　　　　　　　　　　　　　權大納言公行
□たへの橋はきゝしかとわか中にさえわたしける哉

我中におたへの橋はかけゝるを陸奥のみとなに思ひけん　讀人不知
（闕字）
□永二年名所百首の歌に　　　　　從三位政子
逢事もいまは緖絕の橋柱うき名はかりやかけて殘らん
　　　　　　　　　　　　　　　三善爲德
逢事はおたへの橋の中絕てつらさをのみや思ひ渡らん
題しらす　　　　　　　　　　　　前右大臣
玉章の通しともいまははやかき絕にけり水莖の岡
　　　　　　　　　　　　　　　季富朝臣
契をきし人のこと葉やかれぬらんそなたの風の音そ絕ぬる
忘住所戀といふことを　　　　　　興全法師
別にしやとさへさらに忘はてゝいまは問へき便たになし
題しらす　　　　　　　　　　　　實富朝臣母
たえはてし契をこそはなけきしに行ゑもしらぬ身の思かな
互□絕戀を　　　　　　　　　　　前右大臣
□みし中の一ことをかことになして絕はてんとや

〔右菊葉和歌集卷第七以下舊本闕今依一本補之〕

續群書類從卷第三百七十三

和歌部八

飛月集

詠三首和歌

初鴈　　爲世

秋風に羽かせをそへてきにけらし夜さむやまさる衣かりかれ

山月

はれもせてたえ〲雲のかゝる夜は出こそやられ山のはの月

不逢戀

我か中はあふ事しらぬかたいとのさのみくるしく年をふる哉

左少將爲忠

こゝろより夜さむしれはや秋風に衣かりかれきつゝなくらん

秋風のはらふともなくはれにけり月さしいつる山のはの雲

をのつから思ひねにみる夢ならてつれなき人に逢よしもなし

右少將爲冬

鴈かれはいくつらなきて秋霧のはるゝ時なき空にきぬらん

雲かゝる尾の上の月のかけやらん松ふく風のはらはさりせは

きえねたゝあふたのみをもしらぬ世に何そは露の命なかきそ

法印隆淵

都にもきてはかひなきねをそなくおなし夜さむの衣かりかれ

影はまつふもとの里にあらはれて山の木の間に月そやすらふ

よしさらはありとなみえそ箒木のおふるふせやは道まよふ之

河合權禰宜鴨祐夏

秋かけて誰かかきすさむことのはを空につられて鴈のきぬ覽

のほるへきゆくすゑみえて神山や道ある御代は月そさやけき

戀しなて我もつれなき命こそせめてつらさのむつひなるらめ

比良木禰宜鴨祐光

明わたるとはたの面の秋風にいなはそよきて鴈はきにけり

夕暮の月待いつる山のはに雲な殘しそ四方の秋かせ

後のよの哭もしらすなれとたゝなからへてうき身を恨むらん

貴布禰祝鴨祐躬

いとはやもけさきにけらし初鴈のはつかに聲の空にきこゆる

吹はらふみれのあらしに雲晴て山もあらはにすめる月かな

つれなしと人を何とか恨らんなからへてうき身をはしらすて

前安房守鴨邦祐

小萩はら下葉の色ようつろひて秋風さむく鴈はきにけり

いかゝせむおなしたかれの雲なから月をもはらふ嵐なりせは

いつまてと心ひとつにたのむらんあふも命もしらぬかきりを

散位鴨祐守

秋風は吹ともちらて山のはの月のかつらの色そそひける

夜さむなるとこよはなれて旅衣誰にかりかれ空にきぬらん

いける日の報しあらは身をかへて我さへ人にまたやうからん

續詞三十首

浦霞　為世

日をふれとたこの浦わゝ霞にて春はたつともみえぬ涙かな

里梅　為世

ふる郷にのこりて人にとはるゝは軒はの梅と我となりけり

春月　為忠

春のくるならひ成とも夜はの月くもらぬ世には霞ますもかな

歸鴈　隆淵

さのみなとなきてすくらん歸鴈ひとやりならぬをのか越路に

待花　為冬

心なき宿の櫻の木すゑ哉まつとしゝらはさきもしてまし

落花　祐夏

いかにせむ心つからの色をたに見はてぬ花に春風そふく

款冬　祐光

さきしより春もくれぬとおもふにそしひてまたれぬ庭の山吹

聞郭公　為冬

よそにまつ人をはしらて時鳥我にのみやはことかたるらむ

五月雨　祐光

いかさまになかれそめてかさみたれに水増れとも音なしの瀧

納涼

外よりも涼しきなへに夕日さすもりの木かけに立そよりける

朝露　祐光

あさち原なを露しけしこのねぬるあさけの風のいかに吹らん

草花　祐夏

さきましるまかきの花の色〳〵に露はしあへぬ秋のむらさめ

夕虫　祐光

いつまてか身のかくれかと蛬くるゝ野はらの露に鳴らん

曉鹿　隆淵

曉はうき時とてやさをしかのなを聲たゝすれ〻はたつらん

見月　祐　躬

いつもみゝ光なれとも秋はなと身にしむ色の月〻ふらん

惜月　加　祐

𛀁方のみねをへたてゝあかつきの雲たに月をしたひかほなる

紅葉　爲　忠

はれくもりそむるともなき時雨にも山の木のはそ千入成ける

時雨　爲　世

晴くもりひまはなくともむら時雨老のなみたに降はまさらし

千鳥　爲　世

なるみかたしほのみちひに濱千鳥遠さかりつゝ聲そちかつく

庭雪　邦　祐

心あてになをわけかれつふる雪のうつみはてたる庭の通路

忍戀　爲　冬

かくれぬのしたにのみはふ蘆のねはねに流れても知人はなし

不逢戀　祐　夏

たのめをく契もしらぬ憂中にあらはあふよをいつとまつらん

待戀　爲　世

あちきなくいつ待えてかまたるらんこりぬ心の夕暮そうき

契戀　邦　祐

ことのはの末の松山すゑかけてこさしと波をいかゝたのまん

別戀　爲　忠

かくはかりつらきわかれのなくさめに行末かけて猶や契らん

絶戀　祐　躬

同し世にあるそとせめてしらせはや今は昔のうきり成とも

恨戀　隆　淵

身をしれは人をうらみぬことはりの有につけてもぬるゝ袖哉

山家　同

人とはて淋しきよりも世のうきめみえぬ山路そ住よかりける

旅行　祐　躬

草枕ゆくすゑ遠きむさし野におなしかりねのいくよへぬ覽

神祇　祐　夏

祈こしみたらし川のうたかたに神のうけゝるほとそ知らるゝ

八月廿九日會 月次第二度

頭人宗匠

題者宗匠

講師邦祐

三十首題者彌少將

讀師彌少將

懸物五十

詠三首和歌

料紙廿卷　蠟燭十挺　福井莚十枚　圓座十枚

月　　　　　　　　　　　　爲　世

秋風ははらふとすれとよそに猶月にかゝらて殘るむら雲

擣衣

音にのみおとろかされてさ夜衣うたぬ我さへねられさりけり

恨戀

野原なるくすの葉よりも秋風に人をは我そたえす恨むる

右兵衛督爲定

ふけ行はへたてもはてす村雲の跡なき空にすめる月影

いつくまて夜さむしれとか秋風に音たかくうつ衣なるらん

數ならぬ身のとかをさへ今更らに思ひしらせてうき心哉

法印隆淵

見度にさのみ涙はもろからし月よりそての露やをくらん

一かたに聞もさためす秋風に(の歟)吹をたよりに衣うつこゑ

くやしさを嘆きやそへんかこつとて猶遠さかる中となりなは

河合權祝祐夏

雲のなみおさまりぬらし和歌の浦の風も靜にすめる月哉

今よりの夜さむしれとや秋風の音にたてゝは衣うつらん

なをさりのうきたつひにや思ふらん餘りになれはいはぬ恨を

比良木祝鴨祐光

難波かたみちくろ潮のいやましにふくれは月の影そさやけき

たのめをく人をまつらし長月の有明の月に衣うつなり

貴布禰祝鴨祐躬

いかはかり猶も恨みん數ならぬうき身をうしと思ひしらすは

なかめても猶こそあかれ秋の夜の長してふ名や月に忘れん

夜もすからねられぬまゝのすさひとや音もたゆます衣うつ覽

何と又よそになしては恨むへきたゝ我からの人のつらさを

前安房守鴨邦祐

山の端も雲をもよそになしはてゝ殘るくまなくすめる月哉

いく夜かはむなしき床の秋風にこぬ人まつと衣うつらん

うき人のつらさにそへてこりもせぬ心をさへにまた恨みつゝ

散位鴨祐守

浦風に影もさたあす白浪のよするなきさの秋の夜の月

あまひこの音羽の山の秋風に聲うちそへてうつ衣かな

うきになをいつこをしのふ心にて恨みて後も戀しかるらん

續歌三十首

霞　　　　　　　　　　　　爲　世

春はまつたれきよとてかさは煙の霞の[illegible]にたつらん

若菜　　　　　　　　　　　爲　冬

打とけし氷のあとにもえいてゝ野さはの若菜春めきにけり

梅　　　　　　　　　　　　祐　夏

わきてたか袖に匂をやとすらんゆくゑ定めぬ梅の下風

歸鴈　　　　　　　　　　　祐　光

行さきはかすみへたてゝ雨雲のよそにもみえす歸るかりかね

櫻　爲定

立まよふおなし高根の白雲も木末にとまる花盛り哉

藤　隆淵

暮て行春のかたみか藤の花しおてはいかゝおりてかさゝん

欵冬　邦祐

いかなれは春の別を山吹のうしともいはぬ色にさくらん

卯花　祐守

神まつるたゝすの森のしら夕に手向をそへて咲る卯花

郭公　爲定

なへて世にまつとのみきく時鳥なかなく里やすくなかる覧

螢　爲世

よそはまたくれぬさきよりかけみえてくらき木陰に飛螢哉

七夕　爲冬

しほれこし涙のひまは今夜とて今そ衣をほしあひの空

荻　同

秋風はおきの上葉を過やらてまかきにのみそをとをたてける

萩　爲世

あたにみる露は殘りて故郷のふる江の萩の花そ散ぬる

月　祐夏

村雲は月のよそまてかつきえて風のみ空に殘る夜半哉

霧　祐光

おほゐ川おろす嵐の山風にふもとをめくる秋の朝霧

擣衣　隆淵

よそにきくねさめこそあれ里人の淋しからてや衣うつらん

菊　爲冬

うつりゆく草のまかきの秋の色に今はたさける白菊の花

時雨　隆淵

冬のくる空はかならす時雨るゝをなと定なき名にはふりけん

千鳥　爲世

和歌の浦にけふもかはらすあとゝめて昔をしたふ友千鳥哉

雪　祐躬

よもすから誘ふ嵐の音さえてあくるとゝもにつもる白雪

初戀　祐夏

思ふよりいつしか人のつらからはいかにせんとの後も頼まん

忍戀　邦祐

涙たにつらさを見せてかくはかりつゝむ袂になとあまるらん

不逢戀　爲冬

いたつらにさて戀しなは命にもまさりておしきうき名成けり

海朝戀　祐守

しのはすは人にとはましうつゝにも夢にもわかぬ今朝の別路

逢不遇戀　爲世

つらくとも其夜たにたゝ命にもあふにしかへは又はなけかし

片思　爲冬

とはかりも思ひしられは人しれぬ我心こそかひなかりけれ

恨戀　爲定

須磨の海士の鹽やき衣うらみてもなれは増らぬ身の契哉

曉　爲世

かす〳〵にこしかた遠くしのはるゝ老のねさめは昔なりけり

河　爲世

いまゝてに霜につかへて老か身もこゝの世たえぬ關の藤川

述懷　祐躬

和歌の浦やもに埋るゝ我からも名にあらはれぬねをや鳴らん

九月十一日會

頭人祐躬

題者宗匠

講師祐守

三十首題者兵衛督

讀師右兵衛督

懸物

杉原二十帖　生蓮十枚　杉櫃十合　棚二脚

湯桶三　手水桶三　大鍋一　鞍橋一

詠三首

朝時雨　爲世

さしのほる朝日はみえてうき雲の行かたはかりふる時雨哉

夕落葉

あれはつる軒の板間の夕風に木葉さへもろ代々のふるさと

顯戀

今はゝやうきな流して涙川せくと思ひし袖もかひなし

左少將爲忠

定なくしくるゝ比の山のはをいつる日影もはれくもりつゝ

冬きてはさらてもゝろきもみち葉をさそふもつらし庭の夕風

せきあへすおちまされはや我袖の涙とゝもに名は流るらん

右少將爲冬

出そむる影もしくれて山たかみ朝日にかゝるみねの浮雲

夕暮は淋しさそへて紅葉はもなをふるさとの木枯しの風

ほにいてゝ猶くるしきをしのすゝき忍ふはかりと思ひける哉

法印隆淵

朝日影くもりもはてす出にけり尾上の雲は猶時雨つゝ

庭の面に亂れてもろき木の葉哉雲のはたてに風や吹らん

涙たにをさふる袖にもる物をせくかたなくや名は流るらん

河合權祝鴨祐夏

あけぬとて峯わかれ行くうき雲のたゝよふ空に猶時雨つゝ

くるゝまは色こそみえれ吹風の音にしられてふる木のは哉

いかにしてたつ名はかりそ村鳥の行衛はさてもしらぬ契に

比良木祝鴨祐光

あさな／＼うき立雲の空にのみ行衛さためすふる時雨かな

散りつもる庭の木の葉に音たてゝ夕へ淋しく行あらし哉

もらさしといつまてし〔マヽ〕たにつゝみけん色に出ける袖の涙を

貴布禰祝鴨祐躬

神無月あさけの空の風はやみ時雨をさそふ音そはけしき

山の端に入日の影を殘しつゝ紅ゐふかくちる紅葉かな

忘れては又むかしにそたちかへるつゝみなれにし心ならひに

散位鴨祐守

山の端にたえ／＼かゝるよこ雲の明立空はうち時雨つゝ

影うつろ夕日の岡の木枯しに猶色そへてちる紅葉哉

せきとはる袖の涙の川波に立そふものはうき名成けり

前安房守鴨邦祐

神無月冬をむかへし朝より時雨の雨のふらぬ日はなし

木枯しの音はかりして夕つくよおほつかなくも散紅葉哉

けふりをもみせぬ思ひの下もえにいかて立けるうき名成らん

續歌三十首

早春　為世

たちそむる霞そやかて外山なる雪をうつみて春はきにけり

谷鶯　祐守

谷蔭の春やとくらし白雪のふる巣にいそく鶯の聲

梅風　為世

吹風に今もかはらて故郷の二木の梅そ香に匂ひける

春月　為忠

春の夜は花の木の間をもりかねていとゝかすめる月の影哉

歸鴈　祐躬

忘れてもしはしやすらへ春の鴈かへるならひの有よなりとも

山花　祐夏

さくら花盛なるらし吉野山とたえもみえてかゝる白雲

落花

心からうつろふ色をかことにてさのみや花に風の吹らん

待郭公　祐光

つれなさを猶やうらみん郭公年に待るゝ初音ならねは

盧橘　隆淵

うへてみるけふはむくらに成ぬとも誰かしのはん宿の橘

納涼　為世

いかに又吹くる風のすきて猶袖にとまらは涼しからまし

初秋　祐守

あけ方の枕すゝしく吹かへてれさめにつくる秋の初風

草花　邦祐

藤はかま花の下ひもとけにけり誰かぬきをきし形見成らん

野月　爲冬
よな〳〵は影をうつして野中なるし水そ月の形み成ける

浦月　祐夏
はしたてやよわたる月の影なから空にふけ行浦の松風

夕虫　隆淵
たへすとや鳴つゝ虫も恨むらん我身にかきる夕へならねは

紅葉　祐光
千入にもあまるはかりの時雨にも猶染あかぬ紅葉なりけり

時雨　邦祐
嵐ふくみねに夕ゐるうき雲のあともさためす夕時雨哉

冬月　爲忠
吹風のさえゆく空に雲はれてくまなくすめる冬の夜の月

松雪
しくれにはみとりかはらて白妙に雪そ積りて松をそめける

忍戀　爲冬
音にたにたてはそしらん人しれぬ心のたきはわきかへるとも

不逢戀　爲世
なからへてこの世にしはし片糸のあはすとも猶命おしまん

僞戀　邦祐
きのみなとおなしつらさにこりもせて又僞りの夕へまつらん

逢戀　祐光
後をまた契らさらましあふ事にけに身をかふる習ひ成せは

別戀　祐夏
又いつと契もなかは白露のおきわかれても後やたのまん

忘戀　祐守
いにしへにたちもかへらぬ契かな物わすれする人のつらさに

恨戀　祐躬
したひわひ人のつらさをなけく哉憂身はさそと思ひしれとも

窓竹　祐夏
いまもなを末そ榮へんよゝをへてうきふしゝらぬ窓の呉竹

海路　隆淵
行末をいそくによらぬ浪路かな風をしるへに出る舟人

神祇　祐躬
君か代をおなしときはに祈るかな我神山の松をためしに

正中二年十月廿五日會

頭人彌少將

題者宗匠

講師祐守

三十首題者彌少將

讀師左少將

懸物

引合廿帖　簡圓座十枚　菅圓座七枚　硯一

簾一間　小唐笠一本

詠三首和歌

寒草　爲世

霜むすふ草葉より猶かれ行くは我ふる郷の人めなりけり

山雪

今朝はまた四方にはふらて風さゆる外山はかりにつもる白雪

久戀

老か身はとしと枕のちりはかりつもりていまにあかぬ中哉

左少將爲忠

馴なれしまかきの風のをとつれも荻の葉なからかゝる比哉

名にしほふ山もときはの色ならてみな白妙に雪つもりけり

右少將爲冬

いたつらに人の心のつれなさをなけくはかりの年そへにける

松山につもれる雪はひさかたの空よりかへる波かとそみる

法印隆淵

かそへても忘れかたみとたのむかなうかりし中につもる年月

さらに又霜こそむすへかれてより人めはかれし庭のみちしは

一とせに二たひさかぬみよしのゝ花かとみゆる嶺の白雪

河合權祝鴨祐夏

年をへてつもるつらさをみなせ川みな我うきになる思ひ哉

冬來ても人めはかれぬ山なからかきほの草そ霜にすくなき

晴わたる雲まにみえて山のはの日影もさむくつもる白雪

なからへてあらはとまちし年月のたのみも今はうき契哉

比良木祝祐光

むさしのゝ草はみなからかれはてゝ露のゆかりと結ふ霜哉

高妙の松の木梢もうつもれて尾上にたかくつもる白雪

さのみなとつれなき中に年をへてあふにもかへぬ命なるらん

貴布禰祝鴨祐躬

たえ／＼になをかれはてぬ冬草の殘るみとりに結ふ霜かな

足引の山かきくもり風さえてけふもさなから雪はふりつゝ

なからへて同し世にふるかひそなきうき年月は身に積れとも

續歌三十首

立春　爲世

さえわたる今朝もあらしに谷川の波はこほりて春そ立ける

霞　爲定

松にのみまさる緑と思ひしを空まてたかく霞む春哉

鶯　爲定

あさな／＼鳴鶯の聲すなり今や春日ものとかなるらん

梅　爲冬

さのみやは吹にまかせて誘はれん風にしられぬ梅かゝもかな

歸鴈　爲世

玉章は有ともみえす霞をそつはさにかへる春のかりかね

春月　邦祐
時わかぬ涙も春をしれとてやかすみそふらん袖の月かけ

花
山の末のあけ行空にあらはれて立もわかれぬ花の白雲

郭公　祐躬
千早振みあれの空の時鳥誰に神世のとかたるらん

五月雨　爲世
はれもせす雲も日數も空にのみともにかさなる五月雨のころ

納涼　爲定
すゝしさはそれともわかす手にむすふ岩井の水にかよふ松風

早秋　爲冬
めにみえぬ物から人にしらるゝは秋くる風のたより成けり

露　爲世
ほしわふる涙に露をくらへはや尾花か袖と老のたもとゝ

萩
白露のやとり成けり夕暮のまかきになひく秋萩の花

鹿　隆淵
をみなへしおほかるのへになのか妻有とや秋の鹿はなくらん

虫　祐光
夕くれは野風をさむみ鳴虫の聲よはりゆく長月の空

月　爲世
故郷の軒端にしけき梢こそ秋みる月のくまとなりけり

擣衣　祐夏
白妙の月影なからから衣いく夜かされてあかすうつらん

時雨　爲世
さためなくしくるゝ比の空みれはたなひく雲のゆきゝなり鳧

千鳥　祐夏
さゆる夜は松風さむみよる浪もたかしの濱になく千鳥哉

雪　爲世
冬ふかき富士の高根の雪よりも我身に高くつもる年哉

忍戀　祐光
しほたるゝ海士の磯やの夕煙もらすないかにしたこかるとも

不逢戀　爲冬
今そしる人のうきにもなからへて物思へとの命なりとは

契戀　爲世
いかにせん我はかはらすたのむとも人の契のまとならすは

逢戀　爲定
あふことにかへんといひし命さへこよひにかきる身の契哉

別戀　祐躬
ふかき夜の鳥のそられに誘はれて猶殘りある袖の別路

絶戀　隆淵
との葉はかれはてしかとま葛原絶えぬうらみは有と知らすや

恨戀　　　　爲定
つらきにもうきにも絶へぬ心にて我身のほとはしろ方そなき

曉　　　　隆淵
さすか猶身のあらましや殘ろらん曉はかりうきそ忘ろゝ

旅　　　　爲世
旅衣けふは野原に宿とひぬ明日はいかなる山路くらさん

祝　　　　祐夏
和歌の浦やけふ立そむる月なみは行末かけてたゝしとそ思ふ

正中二年七月十二日一條第會（月次始也）
出題宗匠
三十首題者右兵衛督
讀師右兵衛督
講師祐光
頭役祐光
懸物
杉原廿帖　檀紙三十帖

續群書類從卷第三百七十四

和歌部九

二八要抄 自古今至續後拾遺

戀歌一

題しらす　柿下人丸

をとめ子か袖ふる(拾遺)山のみつかきのひさしき世より思そめてき

紀貫之

吉野川岩波高く行水のはやくそ人を思そめてし

中納言兼輔

みかの原わきてなかるゝ泉川いつみきとてか戀しかるらん

よみ人不知

ゆめにたにまたみぬ人の戀しきは空にしめゆふ心地こそすれ

戀歌とて　前中納言定家

限りなくまた見ぬ人の戀しきは昔やふかく契をきけん

題しらす　貫之

世の中はかくこそありけれ吹風のめに見ぬ人も戀しかりけり

人丸

雨雲の八重雲かくれなる神のをとにのみやは聞わたるへき

百首歌たてまつりける時戀歌とてたてまつりける　左京大夫顯輔

高砂の尾の上の松を吹風の音にのみやは聞わたるへき

はしめて人につかはしける　權中納言敦忠

雲井にて雲ゐに見えしかさゝきの橋を渡ると夢にみしかな

返し　よみ人しらす

夢なれは見ゆるなるらんかさゝきはこの世の人の渡る橋かは

たいしらす　なりひらの朝臣

こひしくはしたになを思へ紫のねすりの(衣色にいつなゆめ(古今))

かすかのゝ若紫のすりころもしのふのみたれ限りしられす
河原左大臣
みちのくの忍もちすり誰ゆへにみたれんと思ふ我ならなくに
光明峯寺入道前攝政家歌合に寄衣戀といふ事を
従二位家隆
いかにしてゆきてみたれん陸奥の忍しのふのころもへにけり
中將更衣につかはしける 延喜御製
紫の色に心はあられともふかくそ人を思ひそめつる
寄衣戀の心を 後京極攝政前太政大臣
我戀はやまとにはあらぬ唐藍のやしほの衣ふかく染てき
まさたゝ女にいひはしめける侍從に侍ける時
權中納言あつたゝ
身にしみて思ふ心のふかけれは今は色にも出ぬへき哉
女のもとにはしめてつかはしける 平公誠
忍ろも誰ゆへならぬ物なれは今はなにかは君にへたてん
下﨟に侍ける時本院侍從につかはしける
忠義公
色にいてゝ今そしらする人しれす思そめつるふかき心を
女につかはしける なりひらの朝臣
いへはえにいはれは胸にさはかれて心ひとつにさ(後撰)なけく比哉
いひかはしける女のもとより猶なりにいふにこそ

あめれといへりけれは 貫之
色ならはうつろはかりも染てまし思ふ心をみやはみせける(後撰)
崇徳院に百首歌たてまつりけるに 皇太后宮大夫俊成
戀しともいはゝおろかに成りぬへし心をみするとの葉もかな
題不知 よみ人しらす
忍れはくるしき物を人しれす思ふてふと誰にかたらん
百首歌中に戀の心をよめる 修理大夫顯季
我戀はからす羽にかくとの葉のうつさぬ程は知る人もなし
思なから色に出さりける女のもとにて鏡をかりて
そのうらにをしつけて侍ける 左近中將公衡
ますかゝみ心もうつる物ならはさりとも今はあはれとやみん
忍てみくしけとのゝ別當に相語ときゝて父の左大
臣のをはしけれは 權中納言あつたゝ
いかにしてかく思ふてふとをたに人傳ならて君にかたらん
女のもとにはしめてつかはしける 忠岑
ひともして思へはわひしいかにしておなし心に人をおしへん
小野宮大政大臣
人しれぬ思はとしもへにけれと我のみしるはかひなかりけり
百首歌中に忍戀を 式子内親王
わすれてはうちなけかるゝ夕哉われのみ知て過る月日を
題しらす 詠人しらす

我戀を人しるらめや敷妙の枕のみこそしらは知らめ

戀歌中に　正三位知家

しるやとて枕たにせぬよひ〳〵の心の外にもる涙かな

今出川院近衛

思ひねと人もこそしれむは玉の夢にも今宵みつとかたらし

題不知　小野小町

現にはさもこそあらぬ夢にさへ人めをもるとみるかかなしさ

郁芳門院の根合に戀の心をよめる　周防内侍

こひわひてなかむる空の浮雲や我下もえの煙なるらん

五十首歌たてまつりしに寄雲戀　皇太后宮大夫俊成

したもえに思消なん煙たにあとなき雲の果そ悲しき

題しらす　讀人不知

しもつけや室の八島に立煙思ありとも今こそはしれ

藤原實方朝臣

いかてかは思ひありともしらすへき室の八島の煙ならては

忍戀を　皇太后宮大夫俊成

いかにせん室の八島にやともかな戀の煙を空にまかへん

思かけたる女のもとに　朝賴朝臣

ふしのねをよそにそ聞し今はわか思にもゆる煙なりけり

返し　よみ人しらす

しるしなき思とそきく富士のねもかとはかりの煙なるらん

九月十三夜十首歌合寄煙忍戀　辨内侍

あちきなくなとしたもえと成にけん富士の煙も空にこそ立て

鷹司院帥

なにはなるあしのしのやの下むせひたてしや煙ゆく方もなし

題しらす　大中臣能宣朝臣

みかきもる衞士のたく火の夜はもえて晝は消つゝ物をこそ思へ

女はしめてつかはしける　實方朝臣

かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしな燃る思を

堀河院御時百首歌たてまつりけるに戀の心を　源俊賴朝臣

あさてほすあつま乙女のかや莚しきしのひてもすくす比哉

人のもとにつかはしける　源等朝臣

東路のさのゝ舟橋かけてのみ思渡を知る人のなき

あさちふのをのゝ篠原忍れとあまりてなとか人の戀しき

題しらす　人丸

いそのかみふるのわさ田のほには出す心の中に戀やわたらん

忍戀の心を　清輔朝臣

人しれす戀しき物は忍ふ山したはふくすの恨なりけり

和歌所の歌合におなし心を　藤原雅經

きえねたゝ忍ふの山の峯の雲かゝる心のあともなきまて

題しらす　右衞門督爲家

おく山の日影の露の玉かつら人こそしられねかけてこふれと
百首歌たてまつりける時戀歌とてたてまつりける　左京大夫顯輔
思へともいはての山に年をへて朽やはてなん谷の埋木
題不知　よみ人不知
いかにせんみかきか原につむ芹のねにのみなけと知人のなき
寛平御時后宮の歌合のうた　小野美材
我戀はみ山かくれの草なれやしけさまされとしる人のなき
洞院攝政家百首歌に忍戀　前中納言定家
上しける垣根かくれのをさゝ原しられぬ戀はうきふしもなし
題しらす　よみ人不知
うき草の上はしけれる淵なれやふかき心をしる人のなき
千首の歌よませ給ひけるに　後宇多院御製
此世にてうき名なかさしかけろふのいはかき淵に身は流とも
題しらす　よみ人しらす
吉野川いはきりとをしゆく水の音には立し戀はしぬとも
足曳の山した水の木かくれてたきつ心をせきそかれつる
人　丸
奥山のいはかきぬまのみこもりに戀や渡らんあふよしをなみ
寛平御時后宮の歌合の歌　友　則
河の瀬になひく玉もの水隱て人にしられぬ戀もする哉

和歌所の歌合に依忍増戀といふ事を　春宮權大夫公繼
しのはしよいしまつたひの谷河も瀬をせくにこそ水増りけれ
人のもとにつかはしける　右大臣
かくれぬにすむおし鳥の聲絶すなけとかひなき物にさりける
題しらす　高内侍
いかなれはしらぬにおふるうきぬなは苦しや心人しれすのみ
大輔かもとにつかはしける　朝忠朝臣
池水の言いつるとのかたけれはみこもりなから年そへにける
戀歌とてよめる　攝政左大臣
いはぬまてしたはふ蘆のねをしけみひまなき戀を人知らめや
題しらす　人　丸
みしまえの玉えの蘆をしめしよりをのかとそ思ふ未かられと
よみ人不知
あしわかの浦にきよする白浪のしらしな君は我思ふとも
堀河院御時百首歌たてまつりける時初戀の心をよ
める　俊頼朝臣
なにはえのもにうつもるゝ玉柏あらはれてたに人を戀はや
題しらす　清輔朝臣
なには人すくもたく火の下こかれ上そつれなき我身なりけ
千五百番歌合に　二條院讃岐
うちはへてくるしき物は人めのみ忍の浦ゝあまのたくなは

寄石戀といへる心をよめる
我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしられかはくまそなき
題よみ人しらす
我袖のぬるゝを人のとかめすはねをたにやすくなくへき物を
百首歌よみ侍ける時忍戀　入道前關白太政大臣
忍ふるに心のひまはなけれとも猶もろ物は涙なりけり
十首歌合に忍久戀　少將内侍
をさふへき袖はむかしに朽はてぬ我くろかみに涙もらすな
前大納言爲氏
いはて思ふ心ひとつのたのみより知られぬ中の命なりけれ
たいしらす　延久第三親王輔仁
いかにせん思を人にそめなから色に出しと忍ふこゝろを
忍草のもみちしたるにつけて女の許につかはしけ
る　花園左大臣
我戀も今は色にや出なまし軒の忍も紅葉しにけり
題しらす　よみ人不知
片糸もてぬきたる玉の緒をよはみ亂れやしけん人の知るへく
百首歌中に忍戀を　式子内親王
玉の緒よ絶なはたへねなからへは忍ふるとのよはりもそする
三首歌講せられし時おなし心を(未勘)　侍從行家
世にもらは我心をやうたかはん又しらせたる人しなけれは

後二條院位におはしましける時人にめされし百首
歌の中に惜名戀といふ事を　贈從三位爲子
もらぬまに戀しなはやと思ふこそ命にまさるうき名也けれ
戀歌中に　衣笠内大臣
我なからいかに心のなりぬらん人めもしらすぬるゝ袖かな
題不知　友則
したにのみこふれはくるし玉の緒の絶て亂ん人なとかめそ
我戀を忍かねては足引の山たち花のいろに出ぬへし
天暦御時歌合に　忠見
戀すてふ我名はまたき立にけり人知れすこそ思ひそめしか
兼盛
しのひれと(上勘)色に出にけり我戀は物や思ふと人の問ふまて
題不知　讀人不知
思ふには忍ふるをそまけにける色には出しと思ひしものを
業平朝臣
思ふには忍ふるをそまけにける逢にしかへはさもあらはあれ
依涙顯戀といふとを　爲道朝臣
いかにして涙とゝもにもりぬらん袖の中なるうき名ならぬに
題しらす　貞文
枕よりまた知る人もなき物を涙せきあへすもらしつる哉
家歌合に顯戀　富家入道前關白大政大臣

我戀の衣のうらの玉ならはあらはれぬるも嬉しからまし

正治二年百首歌に　式子内親王

さゝれ石の中の思のうちつけにもゆとも人に知られぬる哉

題よみ人しらす

志賀の蜑の釣にともせる漁火のほのかに妹をみるよしもかな

戀歌中に　權中納言俊忠

なこの海やとわたる舟の行ずりにほのみし人の忘られぬ哉

題しらす　友則

しきたへの枕の下に海はあれと人をみるめはおひすそ有ける

さかみ

みるめかる方やいつこそ棹さして我におしへよあまの釣舟

女につかはしける　業平朝臣

袖ぬれてあまの刈ほす綿津見のみるを逢にてやまんとやする

題しらす　坂上郎女

しほみてそ入ぬる（日（拾遺））いその草なれやみてすくなくこふておほれ（みらくすくなくこふらくの多き（仝上））

戀歌とてよめる　讃岐

みるめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへ浪の下に朽ぬる

見戀の心を　前中納言定家

うしつらしあさかの沼の草の名にかりにも深きえには結はて

つゝみの中納言のみやす所をみてつかはしける　小野宮大政大臣

あな戀しはつかに人を水の泡の消かへるとも知らせてしかな

返し

なかゝらしと思ふ心を水の泡によそふるからにたのまれぬ哉

題しらす　よみ人しらす

思へとも人めつゝみのたかければ河と見なからえこそ渡られ

おなし所にて見かはしなからみあはさりける女に

河とみてわたらぬ中に流るゝはいはて物思ふ涙なりけり

はつかに人をみてつかはしける

便にもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり

題不知

よそにのみみてややみなんかつらきやたかまの山の峯の白雲

平さたふむか家の歌合に　これのり

そのはらやふせやにおふる帚木のありとはみえてあはぬ君哉

文つかはせとも返事もせさりける女に　よみ人しらす

あやしくもいとふにはふる心哉いかにしてかは思やむへき

けさうし侍ける女のさらに返事もし侍らさりけれは　實方朝臣

我ためはたる井の清水ぬるけれと猶かきやらんさてそすむやと

返し　讀人不知

かきやらは濁りこそせめ浅き瀬の水屑は是かすませてもみん

たひ〳〵返事せぬ女に　謙徳公
水の上にうきたる鳥の跡もなくおはつかなさをなけきつる哉
返をせぬ女のもと人にはやるときゝて　道命法師
しほたるゝ我身のかたそつれなくてもゝ浦にこそ煙たつなれ

戀歌二

題しらす　兵部卿元良親王
大空にしめゆふよりもはかなきはつれなき人にこふるなりけり
よみ人不知
我戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれともゆくかたもなし
夕暮は雲のはてたに物を思ふあまつ空なる人こふる身は
大井川くたすいかたのみなれ棹みなれぬ人も戀しかりけり
あしかものさはく入江の白浪の知すや人をかくこひむとは
大伴黒主
白浪のさはく入江にこく舟のかちとりあへぬ戀もする哉
人麿
みなと入のあしわけ小舟さはりおほみ我思ふ人に逢ぬ比哉
攝政太政大臣家歌合に　寂蓮法師
ありとてもあはぬためしの名取河朽たにはてぬせゝの埋木
女のもとに遣ける　橘實利
つらしとも思ひそはてぬ涙河なかれて人をたのむ心に
返し　よみ人しらす
なかれてとたに（後撰な）憑らん涙川影みゆへくも思はへなくに
業平朝臣の家に侍ける女のもとによみてつかはし
ける　敏行朝臣
つれ〳〵のなかめにまさる涙川袖のみぬれて逢よしもなし
かの女にかはりて返しによめる　業平朝臣
あさみこそ袖はひつは（古今う）め涙川身さへ流るときかはたのまん
女の淵に身をなけよといひければ　源道濟
身をすてゝふかき淵にも入ぬへし底の心のしらまほしさに
男もちたる女をけさうしてある男つかはしける
ありとても幾世かはへん唐國の虎ふす野邊に身をもなけてん
心させる女の家のあたりにまかりていひ入ける　貫之
わひわたる我身は露をおなしくは君かあたりの草にきえなん
女のもとよりいとといたくな思わひそとたのめをこ
せて侍ければ　よみ人しらす
題しらす
なくさむるとの葉にたにかゝらすは今もけぬへき露の命を
つれもなき人をやれたく白露のおくとはなけきぬとは忍はん
なからへは人の心も見るへきに露の命そかなしかりける
坂上郎女
あはれてふとの葉もこそきこえくれまたて消なん露の悲しさ

命やは何そは露のあた物を逢にしかへはおしからなくに　友則

あはれとも君たにいはゝ戀わひてしなん命もおしからなくに　源經基

宇治前太政大臣家の卅講歌合に　堀川右大臣

逢ふまてとせめて命のおしけれは戀こそ人の命なりけれ

戀歌とて　貫之

逢見んと思ふこゝろを命にていける我身のたのもしけなき

題よみ人しらす

いかにしてしはし忘れん命たにあらは逢よのありもこそすれ

入道前攝政家の歌合に寄鳥戀　源家清

足曳の山鳥の尾のなからへてあらは逢ふ世をなく／＼そまつ

寛和二年内裏歌合によめる　藤原惟成

命あらはあふよもあらん世の中になとしぬはかり思ふ心そ

文永十年七月内裏七首歌たてまつりし時　藤原光俊朝臣

なからへて逢みんとは命とも思はぬ人や身にはかふらん

女のもとへつかはしける　大納言經信

逢とはいつともなくてあはれわか知らぬ命に年をふる哉

左兵衛督實能

命たにはかなからすは年ふとも逢みむとをまたましものを

寛平御時后宮歌合の歌　興風

しぬる命いきもやすると心みに玉の緒許あはんといはなん

贈左大臣長實家にて戀をよめる　左京大夫顯輔

今はさはあひみんまてはかたくとも命とならん言の葉もかな

題不知　大伴百代

戀しなん後はなにせんいける日の爲こそ人はみまくほしけれ

忠岑

戀わひてしぬてふ事はまたなきを世のためしにも成ぬへき哉

よみ人しらす

命をは逢にかふとか聞しかと我やためしに逢ぬしにせん

源信明たのむる事なくはしぬへしといへりけれは

中務

徒にたひ／＼しぬといふめれは逢には何をかへんとすらん

返し　信明朝臣

しぬ／＼ときく／＼たにも逢見れは命をいつの世にか殘さん

題不知　兼盛

人しれすあふをまつまに戀しなは何にかへたる命とかいはん

寂超法師

命をは逢にかふとかきゝしかと我やためしにあはぬしにせん

戀歌とて　典侍親子朝臣

逢とにたれかはかへんおしからて我たに今はすつる命を

長久二年弘徽殿女御家歌合し侍けるによめる
永成法師
戀しなん命はをのかすならてつれなき人のはてそゆかしき
たいしらす　俊惠法師
戀しなん命をたれにつけをきてつれなき人のはてを見せまし
前大納言隆房
戀しなはうかれんたまよ誓したに我思ふ人のつまにとゝまれ
深養父
戀しなはたか名はたゝし世中のつれなき物といひはなすとも
よみ人しらす
契なくその言の葉に身をかへて後の世々たに逢見てしかな
戀歌とて　藤原成通朝臣
後の世と契し人もなき物をしなはやとのみいふそはかなき
天暦御時歌合に　中納言朝忠
逢ことの絶てしなくは中〳〵に人をも身をもうらみさらまし
題不知　●　躬恒
我戀はゆくゑも知らすはてもなし逢を限と思ふはかりそ
よみ人しらす
かくこひんものとは我も思にき心のうちそさひしかりける
人こふる心は我にあられはや身のまとふたにしられさるらん
人につかはしける
歎けともかひなかりける世の中になにゝくやしく思ひそめん
戀歌人々よみけるによめる　俊頼朝臣
あさましやこは何事のさまそとよ戀せよとても生れさりけり
左京大夫顕輔家歌合し侍りけるによめる
藤原成通朝臣
よそなから哀といはんをよりも人傳ならていとへとそ思ふ
百首歌めされしついてに人傳戀　今上御製
人傳にいへともいとゝつれなきは我思ふ程やうらみさるらん
あた〳〵しくはあるましかりける女をいと忍ていはせ侍けるに世にちりてわつらはしきさまにきこえけれはいひたえて年月へて思あまりていひつかはしける
前大納言公任
ひとたひは思たえにし世の中をいかゝはすへき賤のをたまき
題しらす　よみ人しらす
東路のみちの果なる常陸帶のかことはかりもあはんとそ思ふ
思ふともこふともあはん物なれやゆふてもたゆく解くる下紐
よそにして戀れはくるし入ひもの同し心にいさ結ひけん
心かへする物にもか片戀はくるしきものと人にしらせん
片糸をこなたかなたによりかけて逢すは何を玉の緒にせん
ぬき亂る涙の玉もとまるやと玉の緒はかりあはんといはなん
平重時朝臣

逢までの人の心のかた糸に涙をかけてよるぞ悲しき

久安百首歌に　　清輔朝臣

かくばかり思ふ心はひまなきをいつこよりもる涙なるらん

戀歌に　　少侍従

思ひあまりみつのかしはにとふことのしつむにうくは涙なりけり

隆信朝臣

我ゆへの涙とこれをよそにみは哀なるへき袖の色かな

入道前關白太政大臣家歌合に　　道因法師

紅ゐに涙の色のなりゆくをいくしほさてと君にとはゝや

題不知　　貫之

白玉と見えし涙も年ふれはから紅にうつろひにけり

弘長百首たてまつりける時不遇戀　　前大納言爲家

誰ゆへに思ふとかしるはつせ女の手にまく玉のをのれ亂れて

國信卿家歌合に夜戀の心をよめる　　俊頼朝臣

夜とゝもに玉ちるとこのすか枕みせはや人に夜半の氣色を

戀歌とて　　俊惠法師

夜もすから物思ふ比はあけやらて閨のひまさへつれなかりけり

百首歌中に　　式子内親王

夢にてもみゆらん物をなけきつゝうちぬるよひの袖の氣色は

題しらす　　左近中將公衡

思ひねの我のみかよふ夢路にも逢見てかへる曉そなき

よみ人しらす

涙川櫻なかるゝうきねには夢もさたかにみえす有ける

戀の心をよめる　　左京大夫顯輔

戀わひてぬる夜積れは敷妙の枕さへこそうとく成けれ

顯季卿の家にて戀歌八〳〵よみけるによめる

逢とみてうつゝのかひはなけれともはかなき夢そ命なりけり

つれなかりける人の許におふよしの夢をみてつかはしける　　藤原公教

うたゝねに逢とみつるは現にてつらきをゆめと思はましかは

たいしらす　　よみ人しらす

夢の中にあひみん事を思つゝくらせるよひはねむ方もなし

戀しねとするわさならしむは玉の夜はすからに夢にみへつゝ

人につかはしける　　長谷雄朝臣

ふしてぬる夢路にたにもあはぬ身は猶あさましき現とそ思ふ

心さし侍ける女のつれなきに　　よみ人しらす

思ねの夜な〳〵夢に逢ことをたゝ片時のうつゝともかな

寛平御時后の宮の歌合の歌　　藤原敏行朝臣

戀わひてうちぬる中にゆきかよふ夢の心は現ならなん

すみのえの岸によるなみよるさへや夢の通路人めよくらん

戀歌中に　　小侍従

住吉の神にいのりし逢事のまつも久しく成にける哉

題しらす　人丸
いかならん神にぬさをも手向はか我思ふいもを夢にたにみん
正治百首歌たてまつりける時　前中納言定家
久方のあまてる神のゆふかつらかけて幾世を戀わたるらん
人をいひわひて遣ける　平定文
何事を今はたのまん千早振神もたすけぬ我身なりけり
返し
千早振神も耳こそなれにけめさま〳〵いのる年のへぬれは
題しらす
千早振賀茂の社の夕たすきひとひも君をかけぬ日はなし
戀せしとみたらし河にせし御禊神はうけすも成にけらしも
家に百首歌合し侍けるに祈戀といへる心を　攝政大政大臣
いくよわれ浪にしほれてきふね河袖に玉ちる物思ふらん
定家朝臣
年もへぬいのる契は初瀬山尾上の鐘のよその夕暮
權中納言俊忠家にて戀の歌十首よみ侍ける時祈不過戀といへる心を　源俊頼朝臣
うかりける人を初瀬の山おろしはけしかれとは祈らぬものを
十首歌中に祈戀といへる心をよめる　修理大夫顯季
嬉しくは後の心を神もきけひくしめなはの絶しとそ思ふ

祈不過戀といへる心を　贈従三位爲子
數ならぬ身そきの神もうくなとやつれなき人のまつ祈りけん
題不知　八代女王
御禊する奈良の小河の河風に祈そわたる下にたえしと
よみ人しらす
いつとてか我戀やまん千早振淺間の嶽の煙たゆとも
實行卿家歌合に戀心をよめる　俊頼朝臣
いつとなく戀にうかるゝ我身よりたつや淺間の煙なるらん
題不知　藤原忠行
君といへは見まれ見すまれ富士のねの珍しけなくもゆる我戀
深やふ
煙たつ思ひならねと人しれすわひては富士のねをのみそなく
攝政太政大臣家百首歌合に　従二位家隆
富士のねの煙も猶そたちのほる上なきものは思ひなりけり
女に遣ける　藤原惟成
風吹けは室の八島の夕煙心の空に立にける哉
道助法親王家の五十首歌に寄煙戀　前中納言定家
いかにせんあまのもしほ火たえすたつ煙によはる浦風もなし
中將に侍ける時歌合し侍けるに戀歌とてよめる
權中納言俊忠
我戀はあまのかるもに亂れつゝかはくまもなき浪のした草

題しらす　讀人不知

みちのくのちかの鹽竈ちかなからからきは人にあはぬ也けり

き竊て(後撰)物いひける人の大方はむつまじかりけれとち
かうはえあはすして

ま近くてつらきを見るはうけれ共うきは物かは戀しきよりは

寛平御時后宮の歌合の歌　藤原興風

君こふる涙のとこにみちぬれは身をつくしとそ我は成ぬる

堀川院艶書の歌に　大納言忠教

つらさには思たえなんと思へともかなはぬものは涙なりけり

返し　京極前關白家肥後

うけひかぬあまの小舟の綱手なはたゆとて何か苦しかるべき

公資にあひくして侍けるに中納言忍てをとつれけ
ろをひまなきさまをや見けんたえまかちにをとな
ひけれはよめる　相摸

逢とのなきよりかれてつらけれはさそあらましにぬるゝ袖哉

時々物申ける人に名のたつはしらぬかと人のつ
けゝれはよめる　三宮越後

なれて後つらからましにくらふれはなき名はとの數ならぬ哉

おほつふれに物のたまひつかはしけるをさらにき
ゝ入さりけれは遣はしける　貞元のみこ

おほかたはなそや我名のおしからん昔のつまと人に語らん

返し　おほつふれ

人はいさ我はなき名のおしけれは昔も今もしらすとをいはん

女の許につかはしける　藤原清正

つれもなき人にまけしとせし程に我もあたなは立そしにける

題不知　人丸

竹の葉におきゐる露の轉ひあひてぬるとはなしにたつ我名哉

兵部卿元良のみこ文つかはしける返事によみ侍け
る　修理

たかしとて何にかはせん呉竹の一夜ふた夜のあたのふしをは

題しらす　よみ人しらす

君に逢む其日をいつと松の木のたけの亂れて物をこそ思へ

種しあれは岩にも松はおひにけり戀をし戀はあはさらめやは

夕つく夜さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もする哉

戀草をちから車になゝくるまつみてこふらく我心から　廣河女王

女に遣ける　前大納言隆房

人しれぬうき身にしけき思草思へは君そたねはさきける

大江公資朝臣

しの薄上葉にすかくさゝかにのいかさまにせは人靡きなん

乍臥無實戀　藤原顯仲朝臣

結ひおく伏見の里の草枕とけてやみぬる旅にも有かな

水無瀬にてなにことも久戀といふ事をよみ侍しに
太上天皇
思ひつゝへにける年のかひやなきたゝあらましの夕暮の空
題しらす　よみ人しらす
夕されは山のはいつる月草のうつし心は君にそめてき
いて人はヿのみそよき月草のうつし心は色ヿにして
僞のなきよなりせはいかはかり人のヿの葉嬉しからまし
左近中將貞氏
うかりける人のヿの葉なけゝとてなと僞のある世なるらん
契戀を　素暹法師
僞りと思なからや契るらんしらはや人のしたの心を
忍契戀といふ事をよませ給うける　今上御製
まとかと又おしかへし問ふ程の人めのひまもなき契かな
内裏に百首歌奉りし時切戀　遊義門院權大納言
契しもあらぬ世にとはきかさりき戀しなてまつ命ともかな
題しらす　皇大后宮大夫俊成女
はかなしやたのめはこそは契けめやかて別もしらぬ命に

戀歌三

中將に侍ける時女につかはしける　清愼公
よひ〳〵に君を哀れと思ひつゝ人にはいはてねをのみそなく
返し　よみ人しらす
君たにも思ひ出けるよひ〳〵をまつはいかなる心地かはする
題しらす　人まろ
衣手に山おろし吹て寒き夜を君きまさすは獨かもねん
あし曳の山下風は吹れとも君かこぬ夜はかれてさひしも
足曳の山鳥の尾のしたりおのなか〳〵し世を獨かもねん
大津皇子
あし曳の山のしつくにいもまつと我たちぬれぬ山の雫に
中納言家持
我まつと君かぬれけんあし曳の山の雫にならまし物を
よみ人しらす
君やこん我やゆかんのやすらひに槇の板戸もさゝすねにけり
男のこむとてこさりけれは
山里のまきの板戸もさゝさりきたのめし人を待し宵より
たいしらす
君こすは閨へもいらしこむらさき我もとゆひに霜はおくとも
藤原光俊朝臣
君こすは衣て寒みむは玉の今宵も又やいねかてにせん
よみ人しらす
さむしろに衣かたしき今夜もや我を待らんうちのはし姫
又はうちのたまひめ。
題しらす　僧正遍昭

我宿は道もなきまてあれにけりつれなき人を待とせしまに
人　麿
まさしてふやその巷に夕けとふうらまさにせよ妹に逢ふへく
百首歌たてまつりし時待戀　法印定爲
今宵たにいかに夕けの占そとも問さためてや人を待たまし
題しらす　よみ人しらす
逢坂の關は夜こそもりまされくろゝをなとて我頼むらん
清原元輔
大井川ゐせきの水のわくらはにけふは頼めし暮にやはあらぬ
寄浦戀といへる心をよめる　三川内侍
待かねてさ夜もふけゐの浦風にたのめぬ波の音のみそする
建保六年内裏歌合戀歌　權中納言定家
こぬ人をまつほの浦の夕なきに燒やもしほの身もこかれつゝ
百首歌中に　式子内親王
いきてよもあすまて人はつらからし此夕暮をとはゝとへかし
建保三年内裏歌合に　信實朝臣
なほさりにひとたひ契る僞りもなかきうらみの夕暮の空
文保百首の歌たてまつりし時　右兵衞督爲定
なをさりに頼めをきける夕暮のくるしき迄は待れすもかな
延喜十七年八月宣旨によりてよみ侍ける　貫　之
こぬ人をしたに待ちつゝあし曳の月を哀れといはぬよそなき
たいしらす　人　丸
あし曳の山よりいつる月待と人にはいひて君をこそまて
二條院御時上のをのこども百首の歌たてまつりけ
る時忍戀の心をよめる　刑部卿範兼
月まつと人にはいひて詠ればなくさめかたき夕暮の空
水無瀨にて戀十五首歌合に夕戀といへる心を
攝政太政大臣
なにゆへと思もいれぬ夕たに待出しものを山のはの月
たいしらす　藤原秀能
いまこんとたのめし事を忘れすはこの夕暮の月や待らん
人のゆふかたまてこんと申けれはよめる　一宮紀伊
うらむなよ影みえかたき夕月夜朧けならぬ雲間まつ身そ
戀歌中に　鷹司院帥
待人のこぬにねぬ夜の月影は心にもあらて詠められけり
題しらす　權大納言家良
なからへて又やはみむと待よひを心もしらすふくる月哉
千五百番歌合に　讃　岐
更にけり誰やたのめし夜半ならん月をのみこそ待へかりけれ
中關白少將に侍ける時はらからなる人に物いひわ

たり侍けりたのめてこさりけるつとめて女にかは
りてよめる　赤染衛門
やすらはてねなまし物をさ夜ふけてかたふく迄の月をみし哉
戀の歌とてよめる　藤原定家朝臣
かへるさの物とや人の詠らん待夜なからの有明の月
たいしらす　よみ人しらす
月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなん侘つゝもねん
大伴方見
いその上ふるとも雨にさはらめや逢んと妹にいひてし物を
女藏人左近
ふらぬ夜の心をしらておほ空の雨をつらしと思ひける哉
藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女を
あひしりて文つかはせりける詞に今まうてく〔へん歟〕雨の
ふりけるをなんみわつらひ侍といへりけるをきゝ
てかの女にかはりてよめりける　業平朝臣
かす〳〵に思おもはすとひかたみ身をしる雨は降そまされる
あひしりて侍ける人の許に返事きかむとてつかは
しける　元良のみこ
くや〳〵とまつ夕暮と今はとて歸あしたといつれまされる
返し　藤原のかつみ
夕暮はまつにもかゝる白露のをくるあしたや消歸るらん

題しらす　小侍從
まつ宵にふけゆく鐘の聲きけはあかぬ別の鳥はものかは
人まろ
賴めつゝこぬよあまたに成ぬれはまたしと思ふそ待に增れる
百首歌奉りし時待戀　藤原爲藤朝臣
更ぬれはせめてたのみのなきまゝに今宵もあすの暮そ待るゝ
たのめてあはぬ戀の心をよめる　源顯國朝臣
逢みんと賴むれはこそくれはとりあやしやいかゝ立歸るへき
法住寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心を
皇太后大夫俊成
思ひきやしきの羽かきかきつめて百夜も同しまろねせんとは
題しらす　讀人不知
曉のしきのはねかきもゝはかき君かこぬよは我そ數かく
貫之
もゝはかきはねかくしきもわかことく朝わひしき數は增らし
入道攝政まかりたりけるに門をおそくあけゝれは
たちわつらひぬといひ入て侍けれは　右近大將道綱女
嘆きつゝ獨ぬるよのあくるまはいかに久しき物とかはしる
人の許にしは〳〵まかりけれと逢かたく侍けれは
物に書つけゝる　業平朝臣
暮ぬとてねてゆくへくもあらなくにたとる〳〵も歸る勝れり

あひしりて侍ける人をひさしうとはすしてまかり
たりけれは門より返しつかはしける　忠岑

住吉の松にたちよる白浪の歸るなりにやれはなかるらん

大輔かもとにまうてきたりけるに侍らさりけれは
歸て又の朝つかはしける　朝忠

いたつらに立歸にし白浪の名殘りに袖のひる時もなし

返し　大輔

なにゝかは袖の濡るらん白浪の名殘ありともみえぬ心を

罷てまかりけれと逢さりけれは　道風朝臣

なにはかたみつとはなしに蘆のねの夜の短くてあくる侘しさ

題しらす　よみ人しらす

徒らに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ

東の五條わたりに人をしりおきてまかりかよひけ
り忍たる所なりけれは門よりしもえいらてかきの
くつれよりかよひけるをたひかさなりけれはある
しきゝつけてかのみちに夜ことに人をふせてまもら
せれはいきけれともみあはてのみ歸てよみてやり
ける　業平朝臣

人知らぬ我通路の關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝむ

また少將に侍ける時うれへまちの前をまかりわた
りけるに明日香采女なかめ出して侍けるに逢ける

人しれぬ人待かほにみゆめるは誰かたのめたる今夜なるらん　小野宮太政大臣

返し　明日香采女

池水の底にあらてはねぬなはのくる人もなし待人もなし

うれへまちにて右近のつかさの曹司にまかりいつ
る人を待けるにゆき過なから立よらす侍けれは

三笠山きてもとまらぬ道の邊につらき行ての影そつれなき

たのめたりける夜みえさりける男の後にまうてき
たりけるにあはさりけれはいひわひてつらきとを
もしらせぬるかなといはせたりけれはよめる　清少納言

よしさらはつらさは我にならひけり頼めてこぬは誰か敎へし

業平朝臣紀のありつねか女にすみけるをうらむる
ことありてしはしの間ひるはきてゆふさりは歸のみ
しけれはよみてつかはしける

あま雲のよそにも人の成ゆくかさすかにめにはみゆる物から　なりひらの朝臣

返し

ゆきかへり空にのみしてふるとは我ゐる山の風はやみなり　よみ人しらす

題不知

ゆふされは道たと〳〵し月まちて歸れ我せこそのまにもみん

俊忠卿家にて戀十首人〳〵よみけるに雖來不留戀

といへる事をよめる　　俊頼朝臣
思草葉末に結ふ白露のたま〳〵きてはてにもたまらす
題不知　　よみ人しらす
あら玉の年のみとせを待わひてたゝ今宵より新枕すれ
忍たる人とふたりして　　伊勢
夢にても人に語るなしるといへは手枕ならぬ枕たにせす
たいしらす　　よみ人しらす
むは玉のやみの現はさたかなる夢にいくらもまさらさりけり
さ夜ふけてあまの戸渡る月影にあかすも人を逢みつる哉
前大納言隆房
たまさかに我待えたる月なれは朧けならぬ有明の影
弘長元年百首歌たてまつりける時初遇戀
衣笠内大臣
月草のはなたの帯は解そめぬかへらぬ色を誰にとはまし
始てあふこひの心を　　俊頼朝臣
あしのやのしつはた帯の片結ひ心やすくもうちとくる哉
堀川院に百首歌奉ける時初遇戀
みしま江の入江におふるしらすけの知らぬ人をも逢みつる哉
攝政右大臣の時歌合に旅宿逢戀といへる心をよめ
る　　皇嘉門院別當
なにはえの蘆のかりねの一夜ゆへ身を盡してや戀わたるへき

題不知　　顯昭法師
つらきをもうきをも夢になしはてゝ逢瀬はかりを現ともかな
よみ人しらす
こひ〳〵て稀に今夜そあふさかの夕つけ鳥はなかすもあら南
逢つさと手枕かはしれたる夜は鳥のねなくなあけはあくとも
小町かあれ
ひとりぬる時はまたるゝ鳥のねもまれに逢夜は侘しかりけり
戀歌とて　　藤原爲道朝臣
いそくとて曉またぬ別路はなかはそ鳥のねにもかこたん
女の許にまかりて物申ける程に鳥の鳴けれはよめ
る　　業平朝臣
いかてかは鳥の鳴らん人知れす思ふ心はまた夜ふかきに
題不知　　寵
東空の別を惜しみ我そまつ鳥より先に鳴はしめつる
關白左大臣家の百首歌に　　中宮少將
をのかれにつらき別のありとたに思もしらて鳥や鳴らん
後朝戀心を　　土御門内大臣
衣〳〵になるとはきかぬ鳥たにもあけゆく程そ聲も惜まぬ
八條院高倉
逢ことを又はまつ夜もなき物を哀もしらぬ鳥の聲哉
戀歌よみ侍ける中に　　權大納言家良

うかりける誰か逢とのならひより夕つけ鳥のねに別れけん
藤原光俊朝臣
あふさかは人の別の道なれは夕つけ鳥のなかぬ夜もなし、
家に百首歌よませ侍けるに　　關白左大臣
名にしおはぬ夕つけ鳥の鳴そめてあくる別の聲もすゝめし　うら(新勅撰)
源有長朝臣
かへるさをのれうらみぬ鳥の音も鳴てそつくる明方の空
入道前攝政家の歌合に寄鳥戀　　洞院攝政左大臣
鐘のをとは猶深きよのやすらひに又おとろかす鳥の音もうし
題しらす　　よみ人しらす
あけぬとて千鳥しはなく白妙の君か手枕いまたあかなくに
貫　之
いかてわれ人にもとはん曉のあかぬ別やなにゝにたりと
洞院攝政家百首歌に後朝戀　　前中納言定家
はしめよい逢は別ときゝなからあか月しらて人を戀ける
弘長元年百首の歌たてまつりける時曉別戀
從二位行家
しぬはかりおしき別のあか月や命にかへしむくひ成らん
人の許より歸きてつかはしける　　貫　之
曉のなからましかは白露のをきて侘しき別せましや
返　　よみ人しらす
をきてゆく人の心をしらつゆの我こそまつは思きえぬれ
たいしらす　　忠　岑
有明のつれなくみえし別よりあか月はかりうき物はなし
後朝戀心を　　參議爲氏
衣〳〵のわかれしなくはうきものといはてそみまし有明の月
題しらす　　西行法師
面影の忘るゝましき別かな名殘を人の月にとゝめて
戀歌中に　　藤原信實朝臣
きぬ〳〵の袂にわけし月影は誰か涙にかやとりはつらん
後朝の心を　　尙侍家中納言
夜寒なるあはれ有明の月影にいかにせんかとおきわかるらん
惟任朝臣にかはりてよめる　　永源法師
夜をこめてかへる空こそなかりつれうら山しきは有明の月
實範朝臣の女の許にかよひそめて朝につかはしけ
る　　源賴綱朝臣
古の人さへ今朝はつらきかなあくとてなとかかへりそめけん
女のもとよりくらきに歸りて遣ける　　順
あけくれの空にそ我はまよひぬる思ふ心のゆかぬまに〳〵
題しらす　　大江千里
けさはしもおきけん方もしらさりつ思出るそきえてかなしき
藤原國經朝臣

あけぬとて今はの心つくからになといひしらぬ思ひそふらん

大納言朝光下﨟に侍ける時女の許に忍てまかりて

曉に歸らしといひければ　女藏人左近

いはこしの夜の契もたえぬへしあくるわひしきかつら木の神（は（拾遺））

たいしらす　よみ人しらす

かつら木や我やくめちのはしつくり明行ほとは物をこそ思へ

人のもとにまかりて朝に遣ける

待くらす日はすかのねに思ほえて逢夜しもなと玉の緒ならん

人にあひての朝によみて遣ける　業平朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにも成增る哉

業平朝臣伊世の國にまかりたりける時齋宮なりける人にいとみそかにあひて又の朝人やるすへなくて思おりけるあひたに女の許よりおこせたりける

よみ人しらす

君やこし我や行けんおもほえす夢か現かねてかさめてか

返し　業平朝臣

かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつゝとは今宵さためよ

後朝戀のこゝろをよめる　從二位行家

つらかりし心ならひに逢みても猶夢かとそうたかはれける

人のもとより歸てつかはしける　中納言定頼

心にもあらぬ旅ねのまとろみにほのみし夢を人に語るな

中納言國信はしめて物申て後つかはしける　前齋院新肥後

あつまやのあさ木の柱我なからいつふしなれて戀しかるらん

ある宮原に侍ける人の忍て宮を出ておやしき所にて物申て又の日つかはしける　春宮大夫公實

思ひいつやありしその夜の吳竹はあさましかりしふし所哉

人のもとにまかりそめて朝に遣ける　藤原義孝

君か爲おしからさりし命さへなかくもかなと思ひぬる哉

廉義公

きのふまて逢ふにかへんと思しをけふは命のおしくもある哉

元輔かむこに成て朝に　實方朝臣

時のまも心は空になる物をいかてすくしゝ昔なるらん

女に逢て又の日つかはしける　祭主輔親

程もなくこふる心は何なれやしらてたにこそ年はへにしか

人のもとより歸りてつかはしける　是則

逢みてはなくさむやとそ思しに名殘しもこそ戀ひしかりけれ

藤原道信朝臣

あけぬれはくるゝ物とはしりなから猶うらめしき朝ほらけ（大院本）哉

人のもとよりあか月かへりて　閑院左臣

いつのまに戀しかるらん唐衣ぬれにし袖のひるまはかりに

位の御時忍てまうのほり侍ける人に朝まつりとの

程まきれさせ給とありてくれにける夕つかたつか
はしける　　院御製
けさとはぬつらさに物は思ひしれ我もさこそはうらみ侘しか
たいしらす　　人丸
あされかみ我はけつらしうつくしき人の手枕ふれてし物を
百首歌奉りける時戀の心をよめる　　待賢門院堀川
なかゝらん心はしらす黒かみの亂てけさは物をこそ思へ
女のもとにまかりそめて朝に　　藤原隆基
あかすして枕の上に別れにし夢路を又も尋てしかな
大中臣能宣朝臣
逢ことを待し月日の程よりもけふの暮こそ久しかりけれ
みくしけ殿にはしめて逢てつかはしける
藤原敦忠朝臣
けふそへにくれさらめやと思へともたえぬは人の心なりけり
題しらす　　よみ人しらす
いつしかと暮を待間の大空はくもるさへこそ嬉しかりけれ
中關白かよひそめ侍けるころ　　儀同三司母
わすれしの行末まてはかたけれはけふを限りの命ともかな

戀歌四

春宮と申ける時こないしのかみのもとにはしめて
つかはしける　　後朱雀院御製
ほのかにもしらせてしかな春霞かすみの中に思ふ心を
題しらす　　好忠
かたおかの雪まにねさす若草のほのかに見てし人そ戀しき
春日の(古今)[祭に]まかれりける時に物見に出たりける
女のもとに家をたつねてつかわせりける　　忠峯
春日のゝ雪間をわけておひ出る草のはつかにみえし君はも
たいしらす　　よみ人しらす
春されはもすの草くきみえすとも我はみやらむ君かあたりを
五條の后の宮の西の對にすみける人にほいにはあ
らて物いひわたりけるをむ月の十日あまりになん
外へかくれにけるあり所はきゝけれとえ物もいわ
て又のとしの春むめの花さかりに月のおもしろか
りける夜こそをこひてかの西の對にいきて月のか
たふくまてあはらなるいたしきにふせりてよめる
業平朝臣
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身一つはもとの身にして
たいしらす　　前内大臣家
思かれ見しやいかにと春の夜のはかなき夢をおとろかす哉
源宗于朝臣
逢すして今宵あけなは春の日のなかくや人をつらしと思はん

人　麿

足曳の山櫻戸をあけおきて我待君を誰かとゝむる

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける　貫　之

山櫻霞のまよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ

やまとに侍ける人につかはしける

みえぬまは吉野の山の櫻花人傳にのみきゝわたる哉

女をうらみていひつかはしける　業平朝臣

吹風にたそ（徐古）の櫻にちらすともあなたのみかた人の心は

やよひのついたちより忍に人に物いひて後に雨のそほふりけるによみてつかはしける

おきもせすねもせて夜をあかしては春の物とて詠めくらしつ

題しらす　よみ人しらす

み吉野の大川野邊の藤の花なみに思はゝ我こひめやは

思ひ出る常盤の山のいはつゝしいはねはこそあれ戀しき物を

戀歌よみ侍けるに　皇太后宮大夫俊成

みしめひき卯月のいみをさすひより心にかゝるあふひ草哉

題しらす　よみ人しらす

誰か里に夜かれをしてか郭公たゝこゝにしもねたる聲哉

いひわけて二とせはかりをともせす成にける男の五月はかりにまうてきて年比ひさしくありつるなといひてまかりにけるに

わすられてとしふる里の郭公なにゝ一聲鳴てゆくらん

たいしらす

郭公鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ戀もする哉

陽明門院皇后宮と申ける時ひさしう内にまいらせ給はさりければ五月五日内よりたてまつらせ給ける　後朱雀院御製

あやめ草かけしたもとのねをたえて更に戀路にまとふ比哉

くす玉を女につかはすとておとこにかはりて　三條院女藏人左近

ぬまとに袖をぬれけるあやめ草心に似たるねをもとむとて

右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車の下簾より女のかほのほのかにみえければよむて　業平朝臣

つかはしける

みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠暮さん

返し　よみ人しらす

しるしらぬ何かあやなくわきていはん思のみ社知るへ之けれ

題しらす

わすれなん我をうらむな郭公人の秋にはあはんともせす

たゝくとて宿の妻戸をあけたれは人も梢の水鷄成けり

夜ふけてつまとをたゝき侍けるにあけ侍らさりけ

れは朝につかはしける　法成寺入道前攝政
終夜水鶏よりけになく〳〵そ槇の戸口にたゝきわひつる
返　紫式部
たゝならしとはかりたゝく水鶏故明なはいかに悔しからまし
水無瀬戀十五首歌合に夏戀を　攝政太政大臣
草深き夏野わけ行さほ鹿の音をこそたてれ露そこほるゝ
題しらす　人丸
夏草の露分け衣きもせぬになと我袖のかはく時なき
躬恒
かれはてむ後をはしらて夏草の深くも人のおもほゆる哉
よみ人しらす
夏草のしけみにおふるまろこすけまろかまつれよ幾夜へぬ覧
野も山もしけりあひぬる夏なれと人のつらさはその葉もなし
あな戀し今もみてしか山かつのかきほに咲るやまとなてしこ
天暦御時ひろはたのみやす所ひさしうまいらさり　御製
けれは御ふみ遣けるに
山かつのかきほにおふるなてしこに思よそへぬ時のまそなき
女のもとよりなてしこを折てつかはしたりけるに
右近大將朝光
たれにかは思よそへて折つらん定めてもれぬとこなつの花
題しらす　坂上郎女
夏の野のしけみに咲るひめゆりの知られぬ戀はくるしかり見
よみ人しらす
夏虫の身を徒らになすこともひとつ思によりてなりけり
寛平御時后宮の歌合のうた　友則
夕されは螢よりけにもゆれとも光みれはや人のつれなき
攝政太政大臣家に歌合侍けるに夏戀のこゝろ
寂蓮法師
思あれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物を問人はなし
よみ人しらす
題しらす
あけたては蟬のおもは[り(古今)]へ鳴くらし夜は螢のもえこそわたれ
物いひける女に蟬のからをつゝみてつかはしける
源重光朝臣
これを見よ人もとかめぬ戀すとてねをなく虫のなれる氣色を
中納言さたよりか許につかはしける　大和宣旨
戀しさを忍ひもあへぬ空蟬のうつし心もなくなりにけり
七月七日に二條院の御かたにたてまつらせ給ける
後冷泉院御製
逢とは七夕つめにかしつれと渡らまほしきかさゝきの橋
題不知　靜觀法師
忍ふれはくるしかりけりしのすゝき秋の盛りに成やしなまし
またとしわかゝりける女につかはしける

葉をわかみほにこそ出れ花薄したの心にむすみさらめや　源仲正（後撰）
いと忍てかたらふ人のおろかなるさまに見えけれ
は　よみ人しらす
花薄ほにいつるともなき物をまたき吹ぬる秋の風哉
平のかねきかやうくかれかたに成にければつか
はしける　中務
秋風の吹につけても問はぬ哉荻の葉ならは音はしてまし
題不知　友則
秋風は身を分けてしも吹なくに人の心を空になすらん　前太政大臣
ゆふされはあまつ空なる秋風にゆくへもしらぬ人に戀つゝ　素性法師
秋風の身に寒ければつれもなき人をそたのむくるゝ夜毎に
三百六十首中に　好忠
わかせこかきまさぬ宵の秋風は來ぬ人よりもうらめしき哉
建仁元年三月歌合に遇不逢戀　丹後
わすれしのもとの葉いかに成ぬらんたのめし暮は秋風そ吹く
題しらす　よみ人しらす
秋風のふきと吹ぬる武藏野はなへて草葉の色變りけり
女のかりまかりたりけるにこよひは歸れと申けれ
は歸にける後一夜はいかゝ思しなと申たりければ
いひつかはしける　藤原正家朝臣
秋風に吹かへされてくすの葉のいかにうらみし物とかはしる
たいしらす　土御門院御製
涙ちる袖に玉まくくすの葉に秋風吹とゝはゝ答へよ
小町
秋風にあふたのみこそ悲しけれ我身むなしく成ぬと思へは
よみ人しらす
夕されはいとゝひかたき我袖に秋の露さへおきそはりつゝ
桂のみこにすみはしめける問にかのみこあひおも
はぬ氣色なりければ　貞數親王
人しれす思ふ心の我袖は秋の草葉にをとらぬかな
戀の心を　從二位家隆
紅のあさ葉ののらの露の上に我しく袖そ人なとかめそ
題しらす　正三位知家
うつろはむ物とや人に契をきし後せの山の秋の夕露
千五百番歌合の歌　定家朝臣
きえわひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの松の白露
經房卿家歌合に久戀を　二條院讃岐
跡たへてあさちか末に成にけりたのめし宿の庭の白露
題不知　藤原仲平朝臣

花薄我こそしたに思ひしかほに出て人に結はれにけり
よみ人しらす
秋の野の尾花にましり咲花の色にやこひむあふよしをなみ
道の邊の尾花か下の思ひ草今更何の物か思はん
右衛門督通具
とへかしな尾花か下の思ひ草しほるゝ野邊の露はいかにと
中宮内侍
うつろふは下葉はかりとみし程にやかて秋にも成にける哉
赤　人
戀しくはかたみにせんと我宿に植し秋萩今盛なり
露をきたる萩にさして女につかはしける
道　濟
庭の面の萩の上にて知りぬらん物思ふ人のよはのたもとは
建保二年内大臣家百首歌に名所戀　前大納言定家
形見こそあたのおほ野の萩の露うつろふ色はいふかひもなし
題しらす　雲林院のみこ
吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の
女のもとより歸てつかはしける　業平朝臣
我ならて下ひもとくな朝顔のゆふかけまたぬ花には有とも
題しらす　貫　之
秋の野に亂れて咲ける花の色の千草に物を思ふ比哉

なりひら朝臣
秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはてこし夜そひち増ける
よみ人しらす
いつとても戀しからすはあられとも秋の夕はあやしかりけり
露たにもなからましかは秋の夜に誰とおきゐて人を待まし
彼忘戀のこゝろを　皇太后宮大夫俊成女
露はらふねさめは秋のむかしにて見はてぬ夢に殘る面影
忍たる人のもとにつかはしける　贈太政大臣
しつはたに思ひ亂れて秋の夜のあくるもしらす歎きつる哉
題しらす　みつね
なかしとも思そはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれは
小　町
秋の夜も名のみなりけり逢といへは事そともなく明ぬる物を
基　俊
床ちかしあなかま夜半の蛬夢にも人のみへもこそすれ
人をいひわつらひてゝ人に逢侍りて後いかゝあり
けんはしめの人に思かへりて程へにけれは文はや
らすしてあふきに高砂のかた書たるにつけてつか
はしける　源庶明朝臣
さを鹿の妻なき戀を高砂の尾上のこまつきゝも入なん
返　讀人しらす

さを鹿の聲たかさこにきゝてしは妻なき時のねにこそ有けれ

題しらす

我もしか鳴てそ人に戀られし今こそよそに聲をのみきけ

人を忍にあひしりて逢かたくありけれはその家の
あたりをまかりありきけるに鴈のなくを聞てよみ
てつかはしける　黒主

思出て戀しき時は初鴈の鳴て渡ると人はしらすや

心さしありける女につかはしける　橘公頼朝臣

雨雲になきゆく鴈のをとにのみ聞渡りつゝ逢よしもなし

題しらす　讀人しらす

朝な〳〵たつ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり

寛治百首の歌たてまつりける時寄月戀　前大納言爲氏

山のはにふけて出たる月影のしつかにたにもいかてしらせん

たいしらす　伊世

逢にあひて物思ふころの我袖にやとる月さへぬるゝかほなる

さらしなやをはすて山の有明の月すも物を思ふ比かな

月あかゝりける夜女のもとに遣ける　源信明朝臣

戀しさはおなし心にあらすとも今宵の月を君みさらめや

返し　中務

さやかにも見るへき月をわれはたゝ涙にくもる折そおほかる

題しらす　侍従具定母

なれ〳〵て秋にあふきをゝく露の色もうらめしねやの月影

讀人しらす

月夜よし世よしと人に告やらはこてふに似たり待すしも非す

人丸

なか月の有明の月のありつゝも君しいまさは我こひめやは

素性法師

今こむといひし計りに長月の有明の月を待出る哉

藤原惟成

しはしまてまた夜はふかしなか月の有明の月は人まとふ也

藤原敦家朝臣

おもかけはなを有明の月草にぬれてうつろふ袖の朝露

少辨

かはかりもいかならん世の雲間にか又はみるへき有明の月

躬恒

ひとりして物を思へは秋の田の稲葉もそよといふ人のなき

よみ人しらす

秋の田のほの上てらす稲妻のひかりの間にも我や忘るゝ

植ていにし秋田かるまてみえこねはけさ初鴈のねこそ鳴ぬる

そせいほうし

長月のその初鴈の便りにも思ふ心はきこえこぬかも

をとにのみきくの白露夜は置きてひるは思にあへすけぬへし

寛平御時后宮のうた合のうた　友則

我宿の菊のかきれにをく霜のきえ返てそ戀しかりける

洞院攝政家百首歌中に　前中納言定家

色かはるみのゝ中山秋こえて又とをさかるあふさかの關

たいしらす　素性法師

秋風に山の木の葉のうつろへは人の心もいかゝとそ思ふ

左大將に侍りける時家々百首歌合し侍けるに忍戀の心を　攝政太政大臣

もらすなよ雲ゐる峯の初時雨木の葉も下に色かはるとも

題不知　小町

今はとて我身時雨にふりぬれはことの葉さへにうつろひにけり

返　小野のさたき

人を思ふ心木葉にあらはこそ風のまに〳〵散りも亂れめ

百首歌中に　前内大臣家

時雨する雲路の星のかす〳〵に隱れあらはれこひぬまそなき

百首歌たてまつりける時の戀の歌　入道前太政大臣

逢までと草をふゆ野のふみからしゆきゝの道の果を知らはや

物思ひける比ものへまかりける道に火のもえけるをみてよめる　伊勢

冬かれの野邊と我身を思せはもえても春を待まし物を

題不知　よみ人しらす

霜かれに成にし野邊と知られはやはかなく人のかりにきつ覽

左大將朝光ひさしうをとつれ侍らて旅なる所に行あひて枕のなかりけれは草をむすひてしたるに　馬内侍

あふとは誰や限りの旅ならん草の枕も霜かれにけり

ひさしくまいらさりける人に　延喜御歌

霜さやく野邊の草葉にあられともなとか人めのあれまさる覽

御返し　よみ人しらす

淺茅おふる野へや有らん山かつのかきほの草は今もかはらす

攝政太政大臣家百首歌合に　定家朝臣

忘れすはなれし袖もやこほるらんねぬ夜の床の霜のさむしろ

水無瀬戀十五首歌合に冬戀

とこの霜枕のこほりきえわひぬ結ひもおかぬ人の契に

百首歌たてまつりけり戀歌　如願法師

山河のいしまの水の薄氷我のみしたにむせふころ哉

題しらす　貫之

よとゝもに流れてそ行涙川冬もこほらぬみなは成けり

よみ人しらす

君こふる涙のこほる冬の夜は心とけたるゐやはねらるゝ

建暦二年廿首の歌たてまつりける戀のうた

正三位家隆

池にすむおしあけかたの空の月袖の氷になく／＼そみる

人のたのめてこす侍けれはつとめてつかはしける

和泉式部

おきなからあかしつる霰友ねせぬかもの上けの霜ならなくに

みつね

題しらす

冬の池にすむにほ鳥のつれもなく底に通ふと人に知らすな

よみ人しらす

數ならぬ身をうち川の網代木におほくの日をもすくしつる哉

源等朝臣

かけるふにみしはかりにや濱千鳥行衛も知らぬ跡をとゝむる

たのめたる夜ところをみえや／＼と侍りけるに前なる竹の葉にあられのふりけれはきゝてよめる

和泉式部

竹の葉に霰ふるなりさら／＼にひとりはぬへき心地こそせね

たいしらす

馬内侍

さゝの葉に霰ふる夜の寒きにもひとりはねなん物とやは思ふ

參議雅經

まさきちる山の霰の玉かつらかけし心や色に出らん

よみ人しらす

奥山のすかのね白きふる雪のけぬとかいはん戀のしけきに

左大將朝光五節舞姫たてまつりけるかしつきなみてつかはしける

前大納言公任

あまつ空とよのあかりに見し人の猶面影のしゐて戀しき

五節の所にて閑院の大君につかはしける

師尹朝臣

ときはなる日影のかつらけふしこそ心の色に深く見えけれ

藤原義孝

人知れぬ心ひとつに嘆きつゝつけのをくしそさす空もなき

謙德公藏人少將に侍ける時臨時祭舞人にて雪のいたくふり侍りけれは物みける車の前にうちよりてこれはちひてと申けれは

よみ人しらす

なにしてかうちもはらはん君こふと涙に袖はくちにし物を

戀歌五

ふしの山のかたをつくらせ給て藤壺の御方へつかはす

天暦御製

世の人のおよはぬ物は富士のねの雲井にたかき思ひ成けり

たいしらす

よみ人しらす

我戀のあらはにみゆる物ならは都のふしといはれなましを

戀をのみ常にするかの山なれは富士のねにのみ泣ぬ日はなし

永承四年內裏歌合によめる

相模

いつとなく心空なる我戀や富士の高根にかゝるしら雪

題しらす　　よみ人しらす

足曳のかつら木山にゐる雲のたちてもいても物をこそ思へ

高砂の峰の白雲かゝりける人の心をたのみける哉

六帖題歌中に　　前大納言爲家

高砂の山の山鳥おのへなる初尾のたなをなかくこふらん

題しらす　　在原元方

音羽山音にきゝつゝ逢坂の關のこなたに年をふる哉

よみ人知らす

山しなの音羽の山の音にたに人の知るへくわかこひめかも

この歌ある人近江のうねめのとなん申す。

女につかはしける　　贈太政大臣し（後撰）

ひたふるにいとひはてぬる物ならは吉野の山に行衞せらせし

返し　　伊　世

我宿とたのむ吉野は君しあらは同しかさしをさしこそはせめ

仲平朝臣あひしりて侍けるをかれ方に成りにけれ、

はちゝかやまとの守に侍ける許へまかるとてよみ

てつかはしける　　伊　勢

三輪の山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあらしと思へは

からくして逢て侍ける人につゝむ事ありて逢かた

く侍けれは　　源宗于朝臣

東路のさやの中山なかなかに逢みて後そ侘しかりける

題しらす　　友　則

東路のさやの中山なかなかになにしか人を思そめけん

みちの國にまかりて女につかはしける　　業平朝臣

忍山しのひて通ふ道もかな人の心の奥もみるへく

文永七年九月續内裏三首歌に契戀は（新後撰）　　前大納言爲氏

世々かけて浪こさしとも契るともいさや心の末のまつ山

題不知　　伊　世

思ひ出やみのゝを山のひとつ松契しことはいつも忘れす

大織冠

玉くしけ三室と山のさねかつらさねすは遂にありと見ましや

女に遣ける　　三條右大臣

名にしおはゝ逢坂山のさねかつら人に知られてくるよしも哉

からうしてあへりける女につゝむ事ありて叉えあ

はす侍けれは遣ける　　藤原兼輔朝臣か（後撰）

逢坂の木の下露にぬれしより我衣手は今もかはらす

題不知　　よみ人しらす

逢坂の關に流るゝ岩淸水いはて心に思こそすれ

上の句のことも所の名をさくりて歌たてまつりけ

るに逢坂の關の戀をよませ給へる　　御　製

逢坂の名をもたのまし戀すれは關の淸水に袖もぬれけり

題しらす　よみ人しらす
逢坂の夕つけ鳥もわかことく人や戀しきねのみ鳴らん
中納言源昇朝臣の近江介に侍ける時よみてやれり　閑院
ける
逢坂の夕つけ鳥にあらはこそ君かゆきかなく〱もみめ
前關白家歌合に寄鳥戀といへる心をよみ侍ける
典侍因子
よそにのみ夕つけ鳥のねをそ鳴く其名もしらぬ關のゆきゝに
女に遣ける　これまさの朝臣
人知れぬ身はいそけとも年をへてなとこえかたき逢坂の關
返し　好古朝臣女
東路に行かふ人にあらぬ身はいつかはこえむ逢坂の關
女に遣ける　兵部卿元良親王
あさくこそ人はみるともせき河のたゆる心はあらしとそ思ふ
かへし　平中興女
せき河の岩間をくゝる水をあさみたえぬへくのみ見ゆる心を
題不知　讀人不知
吉野川水の心は早くとも瀧の音にはたてしとそ思ふ
つり殿のみこにつかはしける　陽成院御製
つくはねの峯より落るみなの川戀やつもりて淵と成けん
たいしらす　武　峯

陸奥にありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり
御春有助
あやなくてまたきなき名の立田川渡らてやまむ物ならなくに
忍てすみ侍ける人の許よりかゝる氣色人にみすな
といへりけれは　在原元方
龍田川たちなは君か名をおしみいはせの杜のいはしとそ思ふ
題しらす　讀人しらす
こはた川こはたかいひし言葉そなき名すゝかん瀧つ瀬もなし
逢とは玉の緒はかり名のたつは吉野の川の瀧つ瀬のこと
流れてはいもせの山の中に落る吉野の川のよしや世の中
名所戀といふ事を　從二位行家
流てもうきせなみせそ吉野なるいもせの山の中川の水
戀歌中に　從二位宣子
いかにせんうき中川の水を淺みたえかちなる心細さを
堀川院御時百首の歌たてまつりける時戀の心をよ
み侍ける　大納言公實
思ひあまり人に問はや水無瀬川むすはぬ水に袖はぬるやと
題しらす　兼輔朝臣
よそにのみきかまし物を音羽川渡となしにみなれそめけん
讀人不知
あすか川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてん人は忘れし

いひわつらひてやみにけるを又思いてゝとふらひ侍ければいとさためなき心かなといひてあすか河の心をいひつかはして侍ければ
あすか川心の中に流るれは底のしからみいつかよとまん
題不知　　貫　之
まこもかる淀の澤水雨ふれは常よりことにまさる我戀
よみ人しらす
山城のゐての玉水手にくみてたのみしかひもなく成にけり
寄水戀の心を　　前左大臣
うかりける心をくまて山城のゐての玉水なにたのみけん
寶治百首たてまつりけるに寄水戀　　前大納言爲氏
影をたにいかてかみまし契こそうたてあさかの山の井の水
契隱戀といふ事を　　藤原爲世朝臣
今は又あかすたのめし影もみすそことも知らぬ山の井の水
題しらす　　人　丸
なには人蘆火たくやはすゝたれと己か妻こそとこめつらなれ
和泉式部
津の國のこやとも人をいふへきにひまこそなけれ芦の八重葺
百首（こ戀）歌人々にすゝめ侍けるに戀歌　　光俊朝臣
津の國のたやのあしふき野分してひまこそあれと人に告はや
題不知　　よみ人しらす

津の國の難波わたりにつくるなるこやといは南行て見るへく
伊　世
難波潟みしかき芦のふしのまもあはて此世をすくしてよとや
をのれを思へたてたる心ありといへる女の返事に
兼輔朝臣
難波潟かりつむ芦のあしつゝの一夜も君を我やへたつる
題不知　　よみ人しらす
君か名も我名もたてし難波なるみつ共いふな逢きともいはし
三のみこ
津國のなにはたゝまく惜みこそすくもたく火の下にこかるれ
人　丸
住吉の岸にむかへる淡路島哀と君をいはぬ日そなき
よみ人しらす
住吉の岸の白濱より〳〵はあまのよそめにみるそ悲しき
女のあはす侍けるに
白波のよる〳〵岸にたちよりてねもみし物を住吉の松
題しらす
久しくも成にける哉住の江の松はくるしき物にそ有ける
年へていひわたりける女に　　源俊朝臣
ひさしくも戀わたるかな住の江の岸に年ふる松ならなくに
題しらす　　よみ人しらす

逢とを松にて年のへぬる哉身は住の江におひぬ物ゆへ
伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかれつる
心みしかきやうにきこゆる人なりといひけれは
伊勢の海にはへてもあまるたくなはの長き心は我そまされる
西四條の前齋宮またみこに物し給ひし時心さしあ
りて思ひ侍けるあひたに齋宮に定まりけれはその
あくる朝にさかきの枝にさしてさしをかせける　敦忠朝臣
伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今はなにてふかひかあるへき
心にもあらてひさしうとはさりける人の許につか
はしける　源英明朝臣
伊勢の海蜑のまてかたいとまなみ存らへにける身をそ恨むる
女のもとにきぬをぬきをきてとりにつかはすとて
こされまの朝臣
すゝか山伊世をの蜑のぬれ衣しほたれたりと人もこそみれ
題しらす　讀人しらす
須磨の海士の鹽やき衣梭をあらみま遠にあれや君かきまさぬ
同し所に宮つかへして常に見ならしける女に遣け
る　みつれ
伊世の海に鹽やく海士のふし衣なるとはすれとあらぬ君哉
海邊戀といふことをよめる　藤原定家朝臣
おほとまに水をはらひしかや舟の早くも人に逢みてしかな
よみ人しらす
人知れす思ふ心はおほ島のなるとはなしになけく比哉
たいしらす　戒仙法師
あな戀し行てやみましみちのくに今もありてふ浦のはつしま
建保二年内大臣家に百首の歌よみ侍けるに名所戀
といふこゝろを　權中納言定家
くるゝ夜は衞士のたく火をそれとみよ室の八島も都ならねは
題しらす　平祐峯
胸は富士袖は清見か關なれや煙も浪もたゝぬ日そなき
小町
みるめかる蜑のゆきゝのみなと路に名殘の關も我末なくに
よみ人しらす
みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に戀やわたらん
高階成順石山にこもりてひさしうをとし侍らさり
けれはよめる　伊勢大甫
みるめこそ近江の海のかたからめ吹たにかよへ志賀の浦風
たいしらす　少弁
我戀はますたの池のうきぬなはくるしくてのみ年をふる哉
よみ人しらす
忘らるゝ身を宇治橋の中たえて人もかよはぬ年そへにける

戀せんとなれる三川の八橋のくもてに物を思ふ比哉
女に遣ける　源頼光朝臣
中〱にいひもはなたて信濃なる木曾路の橋の懸たるやなそ
志ありていひつかはしけるかつれなかりけれはいひを
ひわつらひてやみけるを思たしてしきりにいひを
くりける返事に心ならぬさまなりといへりけれは
よみ人しらす
かつら木やくめ路の橋にあらはこそ思ふ心を中空にせめ
女に遣ける　藤原實方朝臣
いかにせんくめ路の橋の中空にわたしもはてぬ身とや成なん
前中納言匡房
かつら木のよるの契はかたくとも文たに見せよくめのいは橋
公任卿家にてもみちあまのはしたて戀と三の題を
人々によませけるにをそくまかりてみなかく程な
りにけれは三の題をひとつによめる歌
藤原範永朝臣
戀わたる人にみせはや松の葉の下紅葉する天の橋立
寄橋戀を　土御門院御製
夢ならて又やかよはん白露のをき別にしまゝのつきはし
建保二年内大臣家百首歌に名所戀　前大納言定家
白玉のをたえの橋の名もつらしくたけておつる袖の涙に

題しらす　人丸
無名のみたつの市とはさはけ共いさまた人をうるよしもなし
大伴百代
おもはぬを思ふといはゝ大野なる三笠の杜の神そ知らん
菅原大臣の家に侍ける女にかよひ侍ける男中たえ
て又とひ侍けれは　よみ人しらす
すかはらや伏見の里のあれしより通ひし人の跡もたえにき
業平朝臣むさしの國いるまの郡みよしのゝ里とい
ふ所にすみ侍ける女にかよひけるをこの女の父は
あらぬ人にといひけれと母なんたゝこの人にこそ
と思てよみてつかはしける
み吉野のたのむの鴈もひたふるに君か方にそよると鳴なる
返し　業平朝臣
我方によるとなきぬるみよし野の頼むの鴈をいつかわすれん
題しらす　人丸
み狩するかりはのをのゝならしはのなれは増らて戀そ増れる
いはしろの野中にたてる結ひ松心もとけすむかし思へは
亭子院にたてまつりける　監命婦
哀れてふ人もやあると武藏野の草とにたにこそ成へかりけれ
題しらす　九條右大臣
武藏野の野中をわけて摘そめし若紫の色はかきりか

戀歌六

たいしらす　　權中納言敦忠
あひみての後の心にくらふれは昔は物を思はさりけり
　　業平朝臣
逢みては心ひとつをかはしまの水の流てたゝしとそ思ふ　之（續後撰）
後宇多院に十首歌たてまつりける時逢増戀　　權中納言公雄
いもせ山中なる川の薄氷とけてそいとゝ袖はぬれける
題しらす　　源重之
つくは山葉山しけ山しけゝれと思ひ入にはさはらさりけり
　　よみ人しらす
逢らみす嘆きもそめすありし時思ふ事こそ身になかりしか
逢後顯戀といふ事を　　權中納言公宗母
夢とたに思さためぬ逢をを現になして誰もらしけん
たいしらす　　伊勢
知るといへは枕たにせてねしものを塵ならぬ名の空に立らん
　　よみ人しらす
かたきしの松のうきれと忍ひしもされはよ終にあらはれに鳧
風吹は浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへらなり
名取川せゝの埋木あらはれはいかにせんとか逢見そめけん
池にすむ名ををし鳥の水を淺み隱るとすれとあらはれにけり

伊勢の蜑の朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしも哉
　女に遣ける　　西宮左大臣
うつゝにて夢はかりなる逢をを現はかりの夢になさはや
　周防内侍したしく成て後ゆめ〳〵このこともらすなと申ければよめる　　源信宗朝臣
逢ぬまはまとろむをのあらはこそ夢にもみきと人に語らめ
　清少納言人には知らせてたえぬ中にて侍けるにひさしうをとつれさりけれはよし〳〵かくてなといひ侍けり女さしよりて忘にけりなといひて侍けれは　　藤原實方朝臣
忘れすよ又忘れすよかはらやのしたたゝく煙したむせひつゝ
　たいしらす　　藤原長能
我心かはらんものかかはらやのしたゝく煙わきかへりつゝ
　忍て物おもひける比色にやしるかりけんうちとけたる人なとかかくむつかしけにはといひけれは心の中にかくなんおもひ侍ける　　相摸
ちろともにいつかとくへき逢をのかた結ひなる夜半の下紐
　つれにまうてきつゝ物なといふ人の今はなまうてこそ人もうたていふなりなといひ出して侍りければ　　よみ人しらす
きてかへる名をのみそたつ唐衣したゆふ紐の心とけれは

忍てかよひける女の許よりさっそくをくりて侍けるにすれるかり衣侍けるに　もとよしのみこ

逢ことは遠山すりのかり衣きてはかひなきねをのみそなく

いと忍たる女にあひかたらひて後人めにつゝみて又あひかたく侍ければ　是忠親王

逢とのかた糸そとは知りなから玉の緒はかりなにゝよりけん

年ひさしくかよはし侍ける人につかはしける

つらゆき

玉の緒の絶てみしかき命もて年月なかき戀もする哉

忍てかたりける女のをやきゝていさめければ

參議篁

數ならはかゝらましやは世の中にいと悲しきは賤のをたまき

おやのある女に忍てかよひけるを男もしはしは心に知らせしといひければ　よみ人しらす

なき名そと人にはいひてありぬへし心のとはゝいかゝ答へむ

女に遣ける　藤原義孝

いつまての命も知らぬ世の中につらき歎きのやますもある哉

心ならぬ事や侍けん語いる女の許にまかりて枕に書つけ侍ける　右大臣

我心こゝろにもあらてつらからは夜かれん床の方みともみよ

あけくれの空をともになかめける女又あふまてのかたみにせんと申ける後につかはしける　右近中將忠良

忘れぬや忍ふやいかに逢ぬまのかたみときゝしあけくれの空

中關白女の許より曉に歸て内にもいらてとにゐなから歸侍ければよめる　高内侍

曉の露は枕に置けるを草葉の上となに思ひけん

時々みえける男のゐる所のさうしに鳥のかたを書つけて侍ければあたりにおしつけ侍ける　本院侍從

繪にかける鳥とも人をみてしかなおなし所をつれに問ふへく

題しらす　よみ人しらす

こぬもうくくるも苦しき靑つゝらいかなる方に思定めん

たゝこのたひはかりとおもふ人に遣しける　和泉式部

逢とは更にもいわす命さへ唯このたひや限なるらん

人を恨て更に物いはしと誓て後につかはしける　淸少納言

われなから我心をも知らすして又逢みしと誓ひける哉

好古朝臣にさらにあはしとちかとをして又の朝つかはしける　藏内侍

ちかひても猶思ふにはまけぬへし誰か爲おしき命ならねは

左大將朝光ちかきふみを書て返事におこせよとせめければ遣ける　馬内侍
千早振賀茂の社の神もきけ君わすれすは我も忘れし
公賴卿の女に忍てすみ侍にわつらふ事ありてしぬへしと侍ければつかはしける　朝忠朝臣
諸共にいさといはすはしての山越ともこさむ物ならなくに
橘のきよきか忍にあひしれりける女の許よりをこせたりける　よみ人しらす
思ふとちひとり／＼か戀しなは誰によそへて藤衣きん
女につかはしける　皇太后宮大夫俊成
よしさらは後の世とたに賴めなけつらさに絶ぬ身ともそ社なれ（新古）
返事　藤原定家朝臣母
賴めおかんたゝさはかりを契にてうき世の中を夢になしてよ
題不知　右大臣
はかなくもこん世をかねて契かな再ひ同し身ともならしを
六帖題にて人々歌よみ侍けるにあいおもふといふ事を　藤原光俊朝臣
いかゝせんしなはともにと思ふ身のおなし限りの命ならすは
たいしらす　よみ人しらす
いしまゆく水の白浪立返りかくこそはみめあかすもある哉
　貫之
色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもはへなくに
　女藏人左近
人心こす（う新古今）花そめのかり衣さてたにあらて色やかはらん
戀歌中に　和泉式部
皆人をおなし心になしはてゝ思ふおもはぬなからましかは
題不知　みつね
我かとくわれを思はん人もかなさてもやうきと世を試みん
片思の心を　入道前關白太政大臣
我はかりつらきを忍ふ人やあると今世にあらは思ひあはせん
　皇太后宮大夫俊成
うき身をは我たに厭ふいとへたゝそをたに同し心と思はん
題不知　殷富門院大輔
何かいとふよもなからへしさのみやはうきに絶たる命成へき
　相摸
流れ出んうき名にしはし淀むかなもとめぬ程に淵はあれとも
　人丸
かき曇り雨ふる川のうたかたのうたて程なき世とは（新古(後撰)）知らすや
人に遣ける　兼覽王
雨やまぬ軒の玉水數しらす戀しき事のまさる比哉
後京極攝政家歌合に寄戀　大藏卿有家
雲となり雨となるてふ中空の夢にもみえよ夜ならすとも

たいしらす　よみ人しらす
夢かとも思ふへけれとれやはせしなにそ心に忘れかたきは
よゐ〳〵に枕さためん方しらすいかにねし夜か夢に見えけん
人　丸
うつゝには逢をかたし玉の緒の夜は絶せす夢にみえなん
小　町
いとせめて戀しき時はむは玉の夜の衣をかへしてそきる
思ひつゝぬれはや人のみえつらん夢としりせは覺さらましを
うたゝねに戀しき人をみてしより夢てふものは賴みそめてき
女御徽子女子
ある女の業平朝臣を所さためすありきすと思てよみてつ
かはしける　よみ人しらす
大ぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえこそ賴まさりけれ
返し　業平朝臣
大ぬさと名にこそたてれ流ても終によるせはありといふ物を
題不知　よみ人しらす
いつことも所さためぬ白雲のかゝらぬ山そあらしとそ思ふ
須磨の海士の鹽やく煙り風をいたみ思はぬ方に棚引にけり
かたらひ侍ける女のを人に物いふときゝてつかは
しける　藤原實方朝臣
浦風になひきにけりな里の海士のたくもの煙心よはさり　に（後拾遺）
心ならす中たえにける女につかはしける　大宮入道内大臣
とうらの煙のよそに年ふれと猶　そはてぬ〔ね歟〕海士のもしほ火
戀歌の中に　順德院御製
ひとすちにうきになしても賴まれすかわるにやすき人の心を
初跡後思戀といふ心をよめる　二條院讃岐
今更に戀しといふもたのまれすこれも心のかはると思へは
百首の歌たてまつりし時　皇太后大夫俊成
逢ことはかたのゝ里のさゝのいほしのに露ちる夜半の床哉
建保六年内裏歌合戀歌　權中納言定家
逢とはしのふの衣哀なとまれなる色に亂れそめけん
題しらす　よみ人しらす
衣たに中にありしはうとかりき逢ぬ夜をさへへたてつる哉
人　丸
杉板もてふける板間のあはさらはいかにせんとか我ね初けん
思ふなと人はいへとも逢をいつと知りてかわか戀さらん
ひさしくあはさりける女につかはしける　源信明朝臣
思きや逢みぬをいつまてとかそふはかりになさん物とは
六帖題にて歌よみ侍けるに日ころへたてたりとい

ふ事を　前大納言爲兼
みか月のわれて逢みし面影のありあけまてに成にける哉
家に百首歌よみ侍ける時逢不遇戀　洞院攝政左大臣
心こそ契りしまゝにかはるともおなし空なる月やみるらん
逢にける女の又あはさりけれは　よみ人しらす
しらさりし時たに戀し逢さかをなと今更に我まとふらん
嘉元百首歌たてまつりし時逢不遇戀　法印定爲
こえなれし跡ともみえす立歸つらき後せの山の嶺の雲
建仁元年三月歌合に遇不逢戀　寂蓮法師
恨みわひまたし今はの身なれとも思なれにし夕暮の空　皇太后宮大夫俊成
はつせ川またみんとこそ契しか思ふもつらし二本の杉
弘長元年百首に遇不逢戀　中務卿親王
さはた川ゐてなる鷹のかりそめにあさしや契一夜はかりは　從二位行家
思ひ川逢せのいかにかはりてか又は涙の淵となるらん
久安百首の歌(新古)奉りける戀歌　待賢門院堀川
夢のとも見しは人に[も]語らぬにいかにちかへてあはぬなる覽
和歌所歌合に遇不逢戀の心を　皇太后宮大夫俊成女
夢かとよ見し面影も契しも忘れすなからうつゝならねは
洞院攝政家百首歌に遇不逢戀　前大納言爲家
忘れぬよ夢かといひしかれとをなと其まゝに頼まさりけりけん(新拾遺)
百首歌よませ侍ける時逢不遇戀の心をよめる　攝政前右大臣
なからへてかはる心をみるよりは逢に命をかへてましかは
十首歌合に逢不遇戀　太宰權帥爲經
つれなくそいきてつらさを歎ける逢にかへてし命ならすや
戀歌中に　宜秋門院丹後
よそなからつれなかりしは中々に憂身の程もしられやはせし
物いひ侍ける女の後につれなく侍て更にあはす侍けれは　一條攝政
哀れともいふへき人はおもほえて身のいたつらに成ぬへき哉

戀歌七

たいしらす　伊勢
さもこそは逢みんとのかたからめ忘れすとたにいふ人のなき　謙德公
悲しさもあはれもたくひ多かるを人にふるさぬとのはもかな　忠峯
思ふてふとをそれたくふる(古今)しける君にのみ社いふへかりけれ
心かはりたる人にもとにつかはしける　周防内侍
契しにあはぬつらさも逢事のなきにはえこそうらみさりけれ

こゝちれいならす侍ける人の許につかはしける
和泉式部
あらさらむ此よの外の思ひ出にいま一たひのあふこともかな
ひさしくまうてこさりける人のをとつれたりける
返事に遣ける（不知）
少式部内侍
思出て誰おか人の尋ましうきにたえたる命ならすは
題しらす
道円法師
おもひわひさても命はあるものをうきに絶ぬは涙成けり
ふみつかはしける女のいかなる事かありけん今更
に返事をせさりけれはいひつかはしける
源雅光
紅ゐに涙の色もなりにけりかはるは人の心なりけり
心の中に思ふ事やありけん
伊勢
みし夢の思ひ出らるゝよひことにいはぬをしるは涙成けり
女のもとにつかはしける
藤原惟成
人しれすおつる涙のつもりつゝかひかくはかり成にける哉
題しらす
よみ人しらす
行水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふ成けり
天暦御時承香殿のまへをわたらせ給てこと御かたに
わたらせ給ひけれは
斎宮女御
かつみつゝ影はなれ行水の面にかく数ならぬ身をいかにせん

入道摂政久しくまうてこさりける比ちかき侍け（新古今）
るゆするつきの水いれなから侍けるに
右近大将道綱母
たえぬるか影たにみえは問へきを形見の道はみえさりにけり
中納言さたよりか許につかはしける
大和宣旨
はる〳〵と野中にみゆるわすれ水絶ま〳〵をなけく比哉
心かはりて侍ける女に人にかはりて
清原元輔
契きなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさしとは
題しらす
よみ人しらす
いつしかとわか松山の今はとてこゆなる浪にぬるゝ袖哉
女に遣ける
信明朝臣
うしと思ふ心のこゆる松山はたのめしかひもなく成にけり
戀歌中に
皇太后宮大夫俊成
浪こさはうらみんとこそ契りしかいかゝなり行末の松山
題しらす
よみ人しらす
すきたてるやとをそ人は尋ける心の末はかひなかりけり
下もみちするをはしらて松の木の上のみとりを頼みける哉
源宗于朝臣
つれもなく成ゆく人のとの葉そ秋よりさきの紅葉成ける
光明峯寺入道前摂政家秋十首歌合に寄帯戀
後鳥羽院下野

石川やあはに契や結ひをきし花たの帶のうつりやすさは
題不知　よみ人しらす
ねぬなはの苦しかる覧人よりも我そますたのいけるかひなき
和泉式部
かるもかき臥猪の床のゐを安みさこそねさらめかゝらすも哉
かれ／＼になるおとこのおほつかなくなとゝいひたるによめる　大貳三位
有馬山ゐなのさゝ原風吹けはいてそよ人を忘れやはする
内にまいりてひさしうをとせぬ男に　女
もゝしきはをのゝえくたす山なれや入にし人の音信もせぬ
題しらす　よみ人しらす
雲ゐにて人を戀しと思ふ哉我はあしへのたつならねとも
あしへより雲ゐをさして行鴈のいつ遠さかる我身かなしな
みつね
雲ゐより遠山鳥の鳴てゆく聲ほのかなる戀もする哉
人
たらちねの親のこふこの繭籠りいふせくも有か妹に逢すして
よみ人しらす
たらちねの親のいさめしうたゝねは物思ふ時の業にそ有ける
うきめのみおひて亂るゝ浦なれはかりにのみ社蜑はよるらめ
光孝天皇御製
涙のみうきいつる海士の釣さほの長き夜すから戀つゝそふる
男の氣色やう／＼つらけにみえければ　小町
心からうきたる舟にのりそめて一日もなみにぬれぬ日そなき
題しらす　よみ人しらす
ほりえこくたなゝし小舟こき返し同し人にや戀わたりなん
こといてきて後に京極の御息所につかはしける　もとよしのみこ
わひぬれは今はた同しなにはなる身を盡しても逢んとそ思ふ
題しらす　よみ人しらす
浪まより見ゆる小島のはまひさき久しくなりぬ君に逢すて
みなせ川ありて行水なくはこそつゐに我身を絶ぬと思はめ
躬恒
吉野川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れし
よみ人しらす
瀧つせの中にもよとはありてふをなと我戀の淵瀬ともなき
忠岑
風ふけはみねにわかるゝ白雲の絶えてつれなき君か〔こゝろか（古今）〕
千五百番歌合に　家隆朝臣
思ひいてよたかかねとの末ならん昨日の雲の跡の山風
題不知　よみ人しらす

夕されは人なきとこを打はらひなけかん爲となれる我身か

から衣ひも夕暮になる時はかへす〳〵そ人は戀しき　人　丸

ゆふされは書きまさんと待し夜の名殘そ今もいねかてにする

大江公資にわすられてよめる　さかみ

夕くれはまたれし物を今はたゝゆくらんかたを思ひこそやれ

題しらす　藻壁門院少將

待なれし夕の空もかはれたゝ人の心のあらすなる世に

百首歌めされける時　後京極攝政太政大臣

涙せく袖に思ひやあまるらん詠むる空も色かはるまて

建仁二年九月十三夜水無瀨殿戀十五首歌合に暮戀

といふ事を　前中納言定家

詠めつゝまたはと思ふ雲の色をたか夕くれと君たのむらん

後京極攝政家歌合に寄木戀(の)心を　正三位家隆

思ひかれ詠むれはまたゆふひます〔さ(新勅撰)〕のきはの岡の松もうらめし

戀歌中に　大納言國經

風さむみ心にもあらぬうたゝねはいとゝ人こそ戀しかりけれ

九月十三夜十首歌合に寄月慨戀　太上天皇

こぬ人によそへて待し夕より月てふ物はうらみそめてき

たいしらす　藤原家隆朝臣

忘るなよ今は心のかはるともなれしその夜の月の面影

百首歌中に　太上天皇

わすらるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月はいてけり

惟明親王家十五首歌中に戀の心を　前中納言定家

おほかたはわすれはつとも忘るなよ有明の月のありし一と

たえにける人に　女藏人左近

とさらにうらむともなき此比のねさめ許を知らせてしかな

後一條關白ひさしくをとつれさりける比つかはし

ける　典侍親子朝臣

とへかしな哀れ夜なかき此比のねさめはいかに物や思ふと

忠盛朝臣かれ〳〵になりていかゝ思ひけん久しく

おとせぬを浦めしくやなといひて侍けれは　前中納言敎盛母

ならはねは人のとはぬもつらからす悔しきに社袖はぬれけれ

題しらす　藤原家隆

くれにもと契て誰か歸るらん思ひ絶たるあけほのゝ空

中納言平惟仲ひさしくありて消息して侍ける返事

にかゝせける　高階成連女

夢とのみ思ひなりにし世の中をなに今更に驚かすらん

源頼綱朝臣父のもとにみのゝ守に侍ける時かの國

の女をよひて又をとし侍らさりけれは女のよめる

よみ人しらす

あさましやみしは夢かと問ふほとに驚かすにも成にける哉
かりそめなる所に侍ける女に心かはりにける男の
こゝにてはち〔ひ(後撰)〕むなき所なれは心さし有なからなむ
たちよらんと〔ぬ(同上)〕いへりけれは所をかへて侍けるにみ
えさりけれは　女
宿かへてまつにもみえすなりぬれはつらき所のおほくも有哉
題しらす　よみ人しらす
いそのかみふるの社の夕たすきかけてのみやは戀んと思ひし
人　丸
千早振神のいかきもこえぬへし今は我みのおしけくもなし
業平朝臣伊世へ下侍ける時齋宮に侍ける女房の許
より　よみ人しらす
千早振神のいかきもこえぬへし大宮人のみまくほしさに
返　業平朝臣
戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに
伊勢齋宮わたりよりのほりて侍ける人に忍ひてか
よひけることをおほやけにもきこしめしてまもり
めなとつけさせ給ひて忍にもかよはす成にけれは
よみて侍ける　左京大夫道雅
逢坂は東路とこそきゝしかと心盡しの名にこそ有けれ
榊葉にゆふしてかけし其神におしかへしてもにたるけふ哉

今はたゝ思ひ絶なんとはかりを人傳ならていふよしもかな
又おなし所にむすひつけさせ侍ける
陸奥のをたえの橋やこれならんふみゝふますみ心まとはす
題しらす　さかみ
危しとみゆるとたに〔え(後拾遺)〕のまろ木橋まろなとかゝる物思ふらん
人　丸
とにかくに物は思はぬひたゝくみうつすみなはの唯一すしに
花園左大臣につかはしける　待賢門院加賀
かれてより思ひしとそふしゝはのこるはかりなる嘆せんとは
題しらす　右近中將忠良
是はみな思ひしよそなれしより哀れ〔なとり(千載)〕なけ木をいかにせんとは
鳥羽院御時藏人所に侍ける時女にかはりてよめる
藤原成親
枯はつるをさゝかふしを數ふれはすくなかりける世々の數哉
かたらひける人のかれ／＼になりてうらめしかり
けれはつかはしける　白河女御越後
待しよのふけしを何になけきけん思ひ絶てもすこしけるみを
たいしらす　和泉式部
いかにしていかに此よにありへはか暫しも物を思はさるへき
中　宮御
をのつから思出やとたのむ哉つらき心のはてはみしかと

戀歌中に　前内大臣基

戀しなん後までとこそ頼めしか同し世にたにかゝりける身を

はかなくも思ひなくさむ心哉おなし世にふる契はかりに　左近大將公相

題しらす　よみ人しらす

戀しきに命をかふる物ならはしにはやすくそ有へかりける　深養父

戀しとはたかなつけゝんとならんしぬとそ唯に云へかりける　民部卿成範

かゝりけるなけきは何のむくひそと知る人あらは問まし物を　和泉式部

我いかてつれなく成て心見んつらき人こそ忘れかたけれ

堀川右大臣のもとに遣ける　大貳三位

戀しさのうきにまきるゝ物ならは又再ひと君をみましや

たいしらす　よみ人しらす

忘れなんと思ふ心のつくからにありしよりけに待そ戀しき　藤原元眞

世のうきも人のつらきも忍ふるに戀しきにこそ思ひわひぬれ

百首歌たてまつりける時戀歌とてよめる　待賢門院堀川

うき人を忍ふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらん

題しらす　よみ人しらす

我なからさもゝとかしき心哉思はぬ人はなにか戀しき

今迄に忘れぬ人は世にもあらしをのかさま〳〵年のへぬれは　從三位範宗

はるかなる程は雲井の月か（日(新勅撰)）のみ思はぬ中にゆきめくりつゝ　西行法師

とへかしななさけは人の身の爲をうき我とても心やはなき　よみ人しらす

戀すれは我身はかけと成にけりさりとて人にそはぬものゆへ

みても又またもみまくのほしけれはなるゝを人は厭ふへらえ

あかてこそ思はん中は別れなめそをたに後の忘れ形身に　兼藝法師

もろこしも夢にみしかは近かりき思はぬ中そはるけかりける

女につかはしける　よみ人しらす

うしと思ふ物から人の戀しきはいつこを忍ふ涙なるらん

男のわすれ侍にけれは　伊勢

わひはつる時さへものゝかなしきはいつこを忍ふ心なるらん

左大臣につかはしける　中務

ありしたにうかりし物をあかすとていつこを忍ふ涙なるらん

戀歌八

題しらす　小野小町

色みえてうつろふものは世の中の人の心の花にさりける
よみ人しらす
花筐めならふ色のあまたあれは忘られぬらん數ならぬ身は
女のもとにつかはしける
かれはつる花の心はつらからて時過きにける身をそ恨むる
返し
あたにこそ君はみるらめ君にみなうつろひにたる花の心を
女に遣ける
人こふる心はかりはそれなから我はわれにもあらぬ成けり
題しらす
わかことく物思ふ人は世にしへも（拾遺ひ）今ゆく末もあらしとそ思ふ
圓位法師
物おもへとかゝらぬ人もある物を哀れなりける身の契哉
大納言國經朝臣の家に侍ける女に平定文いと忍ひて語侍てゆく末まて契侍ける比この女にはかに贈太政大臣にむかへられて渡にけれは文をたにもかよはす方なく成にけれはかの女の子の四五はかりなるか本院の西對にあそひありきけるをよひよせて母にみせたてまつれとてかひなにかきつけ侍ける
さたふむ
むかしせし我かれとのかなしきはいかに契し名殘なるならん
返し
よみ人しらす
うつゝにてたれ契けんさためなき夢路にまとふ我は我かは
題しらす
こまち
我身こそあらぬかとまて（のみ古今）たとらるれ問へき人に忘られしより
よみ人しらす
なかゝらぬ命のほとに忘るゝはいかにみしかき心なるらん
わするゝかいさゝは我も忘れなん人にしたかふ心とならは
清愼公少將に侍ける時つかはしける
式部卿敦慶親王家大和
戀しさの外に心のあらはこそ人のわするゝ身をもうらみめ
人につかはしける
さかみ
いかにして忘るゝをならひけん問は〔ぬ〕人につ〔き〕問て知らまし
中納言通俊たえ侍にけれはいひつかはしける
よみ人しらす
さりとては誰かはいはん今はたゝ人を忘るゝ事を思ふよ
返事
またしらぬをはいかゝ教ふへき人を忘るゝみにしあらねは
百首歌よみ侍けるに
殷富門院大輔
よしさらは忘るとならはひたふるに逢見きとたに思出なよ
右のおほいまうち君すます成にけれはかの昔おこせたりける文ともをとりあつめてかへすとてよみ

ておくりける　　典侍藤原國香朝臣
たのめこしとの葉今はかへしてん我身ふるれは置所なし
返　　近院右のおほいまうち君
今はとてかへすとの葉ひろひおきて已か物から形見とやせん
百首のうたたてまつりし時忘戀　　遊義門院權大納言
との葉にそへても今は返さはや忘らるゝみに殘る面影
題しらす　　右近
忘らるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくもある哉
被忘戀を　　中納言
ちかひてし命にかへて忘るゝはうき我からにみをや捨らん
絶戀の心を　　土御門院少宰相
我なから知らてそ過し忘られて猶おなし世にあはん物とは
題しらす　　西行法師
今そしる思いてよと契しは忘れんとてのなさけ也けり
被忘戀の心を　　太上天皇
袖の露もあはぬ色にそ消えかへるうつれはかはる歎せしまに
人に忘られて侍ける時　　よみ人しらす
數ならぬ身をうき草と成ならんつれなき人によるへしられし
題しらす
思はんと我をたのめしとの葉は忘草とそ今はなるらし
寛平御時屛風歌かゝせ給ける時よみて書ける　　そせいほうし
忘草なにをかたねと思しはつれなき人の心なりけり
忘るゝ草のたねをたにといひける人の返事に　　業平朝臣
忘草うふとたにきく物ならは思ひけりとは知りもしなまし
後涼殿の局よりわすれ草をしのふ草とやいふとて
女のいたして侍けれはよめる
忘草おふる野邊とはみるらめとこはしのふ之後もたのまん
契ゝと侍けるをわすれたる女につかはしける　　前大納言忠良
なにとかや忍ふにはあらて古里の軒端にしける草の名そうき
男のありける女をしのふに物いふ人侍けりひまな
きさまをみてかれ〳〵に成にけれは女のいひつか
はしける　　よみ人しらす
我宿の軒のしのふにことよせてやかてもしける忘草哉
たいしらす
こふれとも逢ふよのなきは忘草夢路にさへや思ひしける覧
くにもちかをとせさりけれはつかはしける　　本院右京
ともかくもいふとの葉のみえぬ哉いつらは露のかゝり所そ
題不知　　女御徽子女王

忘草おふとしきけはすみの江の松もかひなくおもほゆる哉

おとこのひさしくをとつれさりけれは　　よみ人しらす

いにしへの心はなくや成ぬらんたのめし事の絶て事ふる

返

いにしへも今も心のなけれはそうきをも知らて年をのみふる　　人　丸

題不知

こひしなは戀もしれとや玉ほこの道ゆき人にもつてもなき　　よみ人しらす

今更に問へき人もおもほえすやへむくらして門させりては

さほしかのつめたにひちぬ山川のあさましきまてとはぬ君哉　　和泉式部

うき世をも又誰にかはなくさめん思ひしらすもとはぬ君哉　　みあれの宣旨

おほ空に戀しき人もやとらなん詠むるをたにかたみと思はん　　酒井人眞

おほ空は戀しき人のかたみかな物思ふことに詠めらるらん　　よみ人しらす

かたみこそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらまし物を　　藤原興風

恨みてもなきてもいはん方そなき鏡に見ゆる影ならすして

入道前攝政家戀十首歌合に同し心を　　後堀川院民部卿典侍

とゝめおきてさらぬ鏡のかけてたに涙隔てゝみやは見えける

題しらす　　左京大夫道雅

涙やは又もあふへきつまならんなくより外のなくさめそなき

盛少将

かきりそと思ふにつけぬ涙哉おさふや袖もくちぬ許に

百首歌たてまつりける時戀歌とてよめる　　左京大夫顯輔

年ふれは哀れに絶ぬ涙哉戀しき人のかゝらましかは

あつよしのみこの家にやまとゝいふ人につかはし
ける　　左大臣

今更に思出しと忍ふるを戀しさにこそ忘れわひぬれ

題しらす　　貫　之

いにしへに猶立歸る心哉戀しき事に物忘れせて

もとのめに歸すむときゝて男のもとにつかはしけ
る　　よみ人しらす

我ためはいとゝあさゝや成ぬらんら(後撰)野中の清水深さ増れは

あひすみける人心にもあはて別れにけるか年月を
へても逢みんと書て侍ける文をみ出してつかはし
ける

いにしへの野中の清水みるたひにさしくむものは涙成けり

ふるく物いひける人に　清原元輔

草かくれ□（かニ拾遺）れにしへはぬるくとも結ひし袖は今もかはかす

中納言さたよりか許につかはしける　公円法師母

あしのれのうき身の程と知りぬれは恨みぬ袖も浪はかけゝり

題しらす　小町

みるめなき我身をうらとしられはや枯なて蜑の足たゆくゝる

典侍藤原なをいの朝臣

海士のかる藻にすむ虫の我からとれを社なかめ世をは恨みし

小野宮のおほいもうち君につかはしける　閑院大君

君をなを恨みつる哉海士のかる藻にすむ虫の名を忘れつゝ

よみ人しらす

戀わひぬ海士のかるもに宿るてふ我からみかも恨みつる哉

わたつ海の我みこす涙たち歸海士のすむてふうらみつる哉

小町

海士のすむ里のしるへにあはなくに恨みんとのみ人のいふ覽

伊勢

わたつ海とあれにし床を今更にはらはゝ袖やあはとうきなん

題しらす　よみ人しらす

ありそ海の濱の眞砂とたのめしは忘るゝ事の數にそ有ける

つらけれと人にはいはすいはみかた恨みそ深き心ひとつに

おほよとの松はつらくもあらなくに恨みてのみも歸る浪哉

さかみ

やくとのみ枕の上にしほたれて煙絶えせぬとこの浦哉

右近

問ふとや松に命はこゆるきのいそに出てや今はうらみん

人をうらみてつかはしける　藤原惟規

池にすむ名をおし鳥のとりかへす物にもかなや人を恨みし

題しらす　よみ人しらす

いつかたに行隱れなん世の中に身のあれはこそ人もつらけれ

行舟のあとなき涙にましらなは誰かは水のあはとたにみん

うきなから人をはみしも忘れねはかつ恨みつゝ猶そ戀しき

恨ての後さへ人のつらからはいかにいひてかねをもなかまし

數ならぬ身は心たになからなん思ひしらすは恨みさるへく

和泉式部

うらむへき心はかりはあるものをなきになしてもとはぬ君哉

右大將道綱ひさしうおとせてなとうらみぬそとい

ひ侍けれは女にかはりて　赤染衛門

恨むとも今はみえしと思ふこそせめてつらさのあまり成けれ

永承六年内裏歌合に　さかみ

恨みわひほさぬ袖たにある物を戀に朽なん名こそ惜しけれ

恨戀の心を　式乾門院御匣
過にける昔も今のつらさにてうき思ひ出にぬるゝ袖哉
歌合し侍ける時戀歌とてよめる　俊恵法師
思ひかね猶戀路にそ歸ぬるうらみは末もとをらさりけり
題不知　西行法師
身をしれは人のとかとは思はねと恨みかほにもぬるゝ袖哉
深やふ
嬉しくは忘るゝこともありなましつと（ら歟）きそなかきかたみ成ける
道信朝臣
嬉しきはいか計かは思ふらんうきは身にしむ心地こそすれ
朝頼朝臣の年比消息かよはしける女のもとよりよ
になし今は思ひわすれねとはかり申てひさしく成
にけれはこと女にいひつきてせうそこもせすなり
にけれは　本院左近
忘れぬといひしに叶ふ君なれと問はぬはつらき物にさりける
女を恨みて更にまうてこしとちかひて後つかはし
ける　藤原實方朝臣
なにせんに命をかけて誓ひけんいかはやと思ふ折も有けり
題しらす　伊勢
人知れす絶なましかはわひつゝもなきなそとたにいはまし物を
天徳四年内裏歌合によめる　藤原元眞
君こふと且は消つゝふる程をかくてもいけるみとやみるらん
神無月の比北白川にまかりて人々十首歌講侍し時
恨後絶戀　權中納言爲藤
うらみすはくやしからまし言葉も又もかよはぬ中の契に
戀の歌中に　高松院右衛門佐
逢事の絶は命もたえなんと思しかともあられけるみを
文永二年九月十三夜歌合に絶戀　從二位行家
たのめしは人のむかしに成はてゝ我身に殘る夕暮の空
題しらす　よみ人しらす
玉かつら今はたゆとや吹風の音にも人のきこえさるらん
つえ（ら後撰）かりけるおとこに
たえはつる物とはみつゝさゝかにの糸を頼める心ほそさよ
返し
うちわたしなかき心は八橋のくもてに思ふ事は絶せし
寄河戀といふ事を　中務卿親王
ちりをたに拂はぬとこの山川のいさやいつより思ひ絶けん
洞院攝政家百首歌に恨戀　從二位家隆
とこは海枕は山と成ぬへし涙もちりもつもる恨みは
題しらす　和泉式部
塵のゐる物と枕はなりにけりなにの爲にか打もはらはん
九條大政大臣中將に侍ける時たえ侍て後まくらの

松かきたるをみて　中納言定頼女

心には忍ふと思ふ敷砂の枕にてこそ松は見えけれ

題しらす　よみ人しらす

手枕のすきまの風もさむかりきみはならはしの物と成ける

攝政右大臣家の歌合に戀の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

あふことはみにかへてとも待へきを世々を隔てん程そかなしき

題しらす　中宮

まよふへき後のうきみを思ふにもつらき契は此世のみかは

今出川院近衛

後の世のつらきむくひを思ふにも人のためまてうき我身哉

藻壁門院少將

面影をうきみにそへて戀しなは後の世までのつらさをやみん

女につかはしける　能宣朝臣

いかて〳〵戀る心をなくさめて後の世までの物を思はし

右件之本者尹大納言師賢卿眞筆以令書寫畢。

續群書類從卷第三百七十五

和歌部十

中古六歌仙

俊頼

歳中立春

歌苑抄　かすそふとなけくもしらす年の中にいそき立ぬる春霞哉

霞

詞花集後葉集　なみたてる松のしつえをくもてにて霞わたれる天の橋立

詞花集　春霞かすめるかたや津國のほのみしまへのわたりなるらん

歌苑抄　いつしかと來の松山霞めるは浪と共にや春も越ゆらん

烟かと室のやしまをみしほとにやかても空の霞ぬる哉

櫻

金葉集　山櫻さきそめしより久方の雲井に見ゆる瀧の白糸

風靜花香

同　梢には吹ともみえて櫻花かをるそ風のしるしなりける

大貳長實白河の花みにさそはれけれはまかりてよめる

詞花集　白川の春の梢を見渡せはまつこそ花のたえまなりけれ

餘花

櫻たにちり殘らはといひしかと花見てしもそ春は戀しき

落花

詞花集後葉集　みにかへて惜しむにとまる花ならはけふや我身の限ならまし

水上落花

貝玉集　風吹けは散ぬる花も水の面にうつれる枝に又咲にけり

歸雁

春くれはたのむの雁も今はとて歸る雲路に思立ぬ

卯花

詞花集　雪の色をぬすみて咲る卯花はさへてや人にうたかはるらん

遠見卯花

卯花のよそめなりけり遠近にいつかはなみのゐせきこゑける

郭公

金葉集 まちかれて尋さりせは時鳥誰とか山のかひになかまし

五月雨

哥苑抄 五月雨はふるからおのゝ忘水おしひたすらのぬまみとそみる

雨後野草

金葉集 此里は夕立しけり淺茅生に露のすからぬ草のまもなし

雪隔遠望

後葉集 哥苑抄 とをちには夕立すらし久方のあまのかく山雲かくれゆく

水風晩涼

金葉集 風吹けは蓮のうはゝに玉すゑて涼しくなりぬひくらしの聲

晩風如秋

ゆふされは玉まくくすのうら風をはかへる秋と思ひける哉

野風

續詞花 しほみては野島か崎のさゆりはに波こす風の吹ぬ日そなき

對水待月

同 山の端をたまえのみつにうつしもて月をも波の下にまつ哉

七夕

金葉集 歸るさはあさせもあらし天の川あかぬなみたに水まさりつゝ

薄

鶉なくまのゝ入江の濱風に尾花波よる秋の夕暮

野亭聞鹿

後葉集 さをしかの鳴音は野邊に聞ゆれと涙はとこのものにそ有ける

田家待月

哥苑抄 はやくいてゝ門田にやとれ秋の月はのほる露の數や見ゆると

月

續詞花 こからしの雲吹はらふ高根よりさえても月の澄のほる哉

きの國のふきあけの濱にてる月はさはく眞砂の數を見よとや

金葉集 山の端に雲の衣をぬきすてゝひとりも月の立のほる哉

あくかるゝ心のそらにかよはすはたれとか月の西へゆかまし

水上月

拾遺古今 わきかへる岩間の水にすむ月は波にくたけぬつらゝなりけり

月毎秋友

哥苑抄 思ひくまなくても年をへぬる哉ものいひかはせ秋の夜の月

閑見月

金葉集 澄のほる心や空をはらふらん雲のちりゐぬ秋の夜の月

擣衣

續詞花 松風の音たに秋はさひしきに衣うつなり玉川の里

擣衣驚眠

衣うつきぬたの音に夢さめてことそともなくぬるゝ袖哉

紅葉

金葉集 立田川しからみかけて神なひのみ室の山の紅葉をそみる

障子の繪にあれたる山さとにもみちひまなくちりたるところをよめる

續詞花 ふる里は散る紅葉に埋もれて軒の忍ふに秋風そふく

雨後落葉

詞花集後葉集 なこりなく時雨の空は晴れぬれとまたふるものは木葉なけり

田家

秋の田に紅葉散ける山里をこともおろかに思ひける哉

田上にはへりける頃八月はかりに風のけしきなとつれよりも身にしみてよめる

草の葉に風音つれてよとゝもに涙すゝむる秋の空哉

野風

ゆふされは萩女郎花なひかしてやさしの野邊の風のけしさや

かせのはけしさにやのいたくなるをよめる

槇の戸をみ山おろしにたゝかれてとふにつけてもぬるゝ袖哉

秋野

さま〳〵に心そとまるみやきのゝ花のいろ〳〵虫のこゑ〳〵

ふしみにてよめる

なにとなくものそかなしきすかはらやふしみの里の秋の夕暮

九月盡

あけぬとも猶秋風はおとつれて野邊のけしきも面かはりすな

雪

金葉集 衣手のさえゆくまゝにしもとゆふかつらき山に雪はふりつゝ

拾遺古今詞花後葉集 雪ふれは谷のかけはしうつもれて梢に冬は山ちなりけり

戀

金葉集 あさましやこは何事の樣そとよこひせよとそも生れさりけり

數ならて世に住のえのみをつくしいつを待ともなき身なけり

今そしる人こふるみのかなしきは涙に袖のくつるなりけり

夜戀

同 よとゝもに玉ちるとこのすか枕見せはや人に夜半の氣色を

經年戀

拾遺古今員玉集 君こふとなるみの浦の濱ひさきしをれてのみも年を經る哉

來不留戀

金葉集 思ひ草葉末に結ふ白露のたま〳〵きては手にもとまらす

おもはんとちきりける人のひさしくおとつれせさりけれは

拾遺古今 思はんとたのめしをの忘れなはとはれぬ身をも恨さらまし

述懷

金葉集 世中はうきみにそへる影なれや思ひすつれとはなれさりけり

世中はうきつの浦につらゝゐて菅のむら鳥あくかれぬへし

下臈にこゑられてよみける

同 せきもあへぬ涙の川ははやけれとみのうき草は流れさりけり

住吉にて

（同）いくかへり花さきぬらん住吉のまつも神代のものとこそきけ

山家の障子の繪に住吉のかたかきたるところをよめる

（新古今）住の江に神さひにける松なれは浪もしつえにゆふかけてみゆ

松陰浮水

石はしる瀧のそとものそなれ松かけをならへて幾世經ぬらん

旅

となか島みなの濱やに旅寢して夜半の千鳥にめをさましつる

霧中曉鳳

いとゝしく旅寢の床の露けきにしきの羽れかき涙そふ之

關

いとゝしく都戀しき夕されに波の關守すまの浦風

鹽釜

經信卿にくしてつくしにはへりけるころひこのかみもりふさたちのよきありみせんなといひてほとへにけれはいかになとたつねられてわすれたるよしを申けれは

（詞花集後拾遺集）すまのうらにやく鹽釜の煙こそはるにしられぬ霞なりけれ

哀傷

（金葉集）なき影にうけゝるたちも有ものをさやつかのまに忘果てける

霞

（歌苑抄）朝霞ふかく見ゆるや煙立つ室の八島のわたりなるらん

晚霞

ゆふしほにゆらのとわたるあま小舟霞の底にこきそ入ぬる

海邊霞

しほかまのうらかなしくもみゆる哉霞にすけるあまの釣舟

梅

（歌苑抄今撰集）あしかきの隙ゆかしくも見ゆる哉たかすむ宿の梅のたちえそ

櫻

かさしおるみわの檜原の木間よりひれふる花や神のやおとめ

みなつめはおいきの花そあはれなる今幾とせか春にあふへき

春駒

（歌苑抄）みこもりにあしの若葉やもえぬらむたまえの沼をあさる春駒

暮春

（後葉集）おほかたも春のくるゝはおしきおと花なき宿の人にとはゝや

郭公

ほとゝきす心のまゝにたつぬとて鳥の音もせぬ山に來にけり

幾年もきかしと思へはほとゝきすまつにつけても老そ悲しき

郭公聲幽

（歌苑抄）かさこしをゆふこえゆけはほとゝきす麓の雲の底になくなる

五月雨

今撰集
たこの浦のもしほもやかぬ五月雨に絶ぬはふしの煙なりけり

夏月

歌苑抄
なにとにすゝしく物をおもはまし岩間にやとる月見さりせは

草藏山路

とやまには草はわけたるかたもなし柴かる賤の音はかりして

初秋

今撰集
山里にはのむらくさうらかれて蟬のなくれも秋めきにけり

七夕

歌苑抄
けふはかりあまの川風心せよ紅葉のはしのとたえもそする

今撰撰
思ひやる心もすゝし彦星のつまゝつ宵のあまの川風

草花

歌苑抄
あきの野はこほれぬ露にしろき哉花見る人も又こさりけり

今撰集
うすきりのまかきの花のあさしめり秋は夕と誰かいひけん

おきころよのなかはかなかりけるにはなをみてよめる

拾遺古今
まかきなる花につけても思ふ哉今幾とせの秋か見るへき

霧

歌苑抄
きりのまにあかしのせとに入にけり浦の松風おとにしるしも

山家霧

同
あきかせにあれのみまさる山里は霧のまかきそ靈なりける

月

拾遺古今
鹽釜のうらふく風にきりはれて八十島かけてすめる月哉

歌苑抄
夜もすからわれを誘ひて月影の果は行へも知らて入ぬる

久方のあめのおしてやこれならむあきのしるしとみゆる月影

世の中のなさけも今はうせにけりこよひの月に人のたつねぬ

なにとなく心すみてやいてつらん月に棹さすよさの浦人

伊勢の海のおうのうらなし墓はれてなりも成すも見ゆる月影

さよふかく月にあけたるまきのとに人の心のうちそ見えける

歌花抄今撰集
ふけにける我よのほとそ哀なるかたふく月は又もいてなん

海上見月

月影のかたふくかたや西ならん行衛もしらぬ波の上哉

菊綻禁庭 但此句可考

八重菊のさける所のなにしおはゝ今一重をはそへて見てまし

野風

秋の野の花吹みたる夕風にたもとよりさへ露そこほるゝ

雨中九月盡

今撰集
大空も秋の別をおしむらしけふのけしきは打しくれつゝ

林間寒月

歌苑抄今撰集
冬かれのもりの草葉の霜の上におちたる月の影の寒けさ

戀

拾遺古今
こひしさのたくひも波に袖ぬれてひろひわひぬる忘貝哉

同
なか〳〵に思ひ絶なんと思ふこそ戀しきよりも苦しかりけれ

新苑抄
泪河うき਍の鳥となりぬれと人にはえこそ見なれさりけれ

同
かれの音に空やあけぬとおとろけはたゝ獨寢の枕なりけり

我戀をなか〳〵人は忍けりなさけはよそのものにそありける

入しれすくるしきものは忍ふ山下はう葛のうらみなりけり

此世にはわすれかたみにつみもちて形のつとなるしのふ草哉

人のむすめにもの申わたりけるにおやかくとるしらておもひたつをありときゝてわりなくおほへけれは

[illegible]
[illegible]にこふ山の井のいかなる人にすまんとすらん

つれなきをはなのはるになりてそのほとときれりけれはまち〳〵てそのひになりてよさりはいかにといひやりたりけるにいゑに人もなしとてつかひむなしくかへりたりけれは

逢事をたのむの鴈のいかなれは思かへりてくもかくるらん

二條院御さうそうのよゝめる

ありしよにゐしのたく火は消にしをこはまた何の煙なるらん

花園左大臣北方みまかりにけるころはゝのおもひにてはへるなそのわたりの[illegible]とへりけれはよめる

拾遺古今
世の中はみしもきゝしもはかなくてむなしき空の霞なりけり

としころの妻におくれたる人のもとへつかはしけ

る

いもせかはかへらぬ水の別路はきゝわたるにも袖そぬれける

中務權大輔雅重朝臣萬葉集をかりたりけるほとにはかにみまかりにけれはかのあとに實つれつかはしたるにかへさむとてせうそこかきくしておきたりけるをかくなんあるとてつかはしたりけれはいひおくりける

今撰集
濱千鳥はかなき跡をふみおきて身はいつ方の雲に消けん

大和國の人丸かはかにたつれゆきてよめる

世を經てもあふへかりける契こそ苔の下にも朽せさりけれ

述懷

うきなから今はとなれはおしき身を心のまゝにいとひつる哉

四位申けるをゆるされさりけれはおとうとゝもにはィ四位にて侍にいまゝてゆるされぬよしなと申文にかきてたてまつる

同
やへ〳〵の人たにのほる位山老ぬる身にはくるしかりけり

新院くらゐにおはしましけるとき臨時祭の四位陪從にめされたりけるに弘徽殿のほそとのにたちよりて先帝の中宮の女房をたつれいたしてひあふきのつまをおりてかきつけてとらせける

新苑抄
昔みし雲のかけはしかはられと我身一つのとたへなりけり

むかしこひしくおほえけるとき三條内大臣中將と
きこひけるときつかはしける

新續古今集　なからへはまたこの比や忍はれんうしとみし世そ今は戀しき

沙彌觀西となあるふみをもてきたるをみれは藤原
のすけもとかてにてありあやしみてつかひにとへ
はかしらおろしたるよしいふによみてつかはしけ
る

拾遺古今　昔にもあらぬなくさの濱千鳥あとはかりこそかはらさりけれ

住吉　家名所中

拾遺古今　住吉のはまゝつかえの夕煙はれぬ思は神そ知るらん

若浦　同

同　はるはるといつちゆくらん若の浦の波路にきゆるあまの釣船

基俊

鶯

東宮大夫うせられてまたのとしの春まへにうせら（ふ歟）
れたりける紅梅をみてよめる

よをこめてなく鶯の聲きけはうれしくたけをうゑてける哉

金葉集　むかしみしあるし顔にて梅か枝の花たに我に物かたりせよ

山寒花遲

後葉集　みよしのは山井のつらゝ結へはや花の下ひもおそくとくらん

櫻

いへつとにさのみなおりそ櫻花山のおもはむこともやさしく

花作春友

たのめともいてや櫻の花心誘ふ風あらは散もこそすれ

郭公

同　から衣たつたの山のほとゝきすうらめつらしき今朝のはつ聲

雨中郭公

一聲のきかまほしさにほとゝきす思はぬ山に旅れをそする

蚊遣火

さしてゆくかさとり山の郭公こよひはこゝにあまやとりせよ

さらぬたに夏はふせやのすみうきにかひの煙の所せき哉

對水待月

金葉集　夏の夜の月まつほとのてすさひに岩もる淸水いくむすひしつ

鹿

後葉集　宮城野のはきや男鹿のつまならん花咲きしより聲のいろなる

嵯峨にまかりて鹿のなくをきゝてよめる

同　男鹿なくこの山里の嵯峨なれはかなしかりけり秋の夕暮

女郎花

後葉集　あたしのゝ心もしらぬ秋風にあはれかたよる女郎花哉

閑庭露繁

庭の面にしけるよもきにことよせて心のまゝにおける露哉

季仲の帥なかされてのち九月十三夜にむかしのこ

とをおもひいてゝいひつかはしける
續詞花哥苑抄 みるたひに昔のことのおほゆれはまたそのまゝに月も詠す

月前旅情

詞花 あたら世を伊勢の濱をき折しきていも戀しらにみつる月哉

虫 寄戀

哥苑抄 ゆか近しあなかまよはのきり／＼す夢にも人にあひも社すれ

時雨

同 霜さへてかれゆくをのゝおかへなる檜のひろはに時雨降なり

戀

拾遺古今續詞花後葉集 ふえ竹のあなあさましの世の中やありしやふしの限なるらん
續詞花集 あさちふに今朝おく露の寒けさにかれにし人のなそ戀しき

別

金葉集 あさきりのたちわかれぬる君によりはれぬ思にまとひぬる哉

雨中旅宿

五月雨にあまのとまやにたひれしてあはれつゆけき草枕哉

竪義の請のそみける僧の申文のおくにかきつけけ
る
春の日のひかりをしらて雪ふかき谷の松こそ年おひにけれ

雨後山水

續詞花哥苑抄 吉野河そらやむらさめふりぬらし岩間にたきつ音とよむ也

遠望漁舟

續詞花 さゝ波やひらの山風はやからし波間にきゆるあまの釣舟

つきころわつらふことありて攝津國のかたへまか
りて湯あみけれとなを心よからてのほりけるみ
ちに松あまたたてるところをすきけるにこゝはい
つくそととふにみかけの松となん申といふをきゝ
て
よにあらはまたかへりこん津國のみかけの松よ面かはりすな

竹

としおひのまかきのうちの吳竹も秋はよなかくなりやしぬ覧

苔

奥山の岩根かうへの苔むしろ立ぬる雲のあとたにもなし

九月晦ころわつらふ事ありけるに久しくおとせぬ
ひとのもとにつかはしける
續詞花 あきはつる枯野の虫の聲たえはありやなしやと人のとへかし

俊恵

立春

山さとはたなゐの氷解ゆくに春きにけりとくみてしる哉
哥苑抄 春といへは霞にけりなきのふまて波間にみえし淡路島山
つきよめは心のうちに立春をいかて霞の空にしるらん

海路霞

今撰集 波こしにみつゝ漕ゆくあはのしまこまつかうれは霞へたてつ

遠村霞

此里もさこそみゆらめきさかたやあまの苫屋も霞こめつゝ

關路霞

なにとこはおとはの山の夕霞人めはかりのせきかたむらん

尋山花

よしさらはしろへにもせんけふはかり花もてむかへ春の山風

春駒

詞花後葉集

まこも草つのくみわたる澤へにはつなかぬ駒もはなれさり鳧

藤花

續詞花今撰集

梢よりこえておちくる藤波のゐせきはまつのしつえなりけり

三月盡

さきたてゝ惜みし花をやりしより歸らんものと春はしりにき

郭公

古しへをしのひねなれやほとゝきす花橘のえたにしもなく

五月雨

夫木抄

五月雨にみかさまされはこやのいけのあしの末葉に蛙なくえ

五月雨はゐなのさゝはらおしなへて岸ひたすらのこやの池水

蟬

同

夏山のそらひゝくまて鳴蟬は木の葉もゆるく心地こそすれ

納涼

ひさきおふるかた山かけのかくろへて吹けるものを秋の夕風

七夕

同

天の川みつかけくさの夕露にけふさへあやな袖なぬらしそ

七夕のわかるゝけさの秋にや秋の白露おきはしむらん

草花

荻の葉に風うちそよく夕暮は音せぬよりもさひしかりけり

月

同

久方の天の川邊に雲消てなきたる夜半の月をみる哉

おのか爲あくるにもあらぬ天の戸に急きないりそ秋の夜の月

かきこしのくも吹拂ふ峯にてそ月をはひるのものとしりぬる

同

みそら行月をは軒にやとし置ていつち心のあくかれぬらん

金葉

ちとりなくゐなのみなとにかけさへて波間にやとる有明の月

かくこそは誰もみるらめと思へとも語らもほしき夜半の月哉

なかむれはいとゝ物こそ悲しけれ月はうき世の外ときゝしに

此世にてむそちはなれぬ秋の月してのの山路も面かはりすな

海邊月

鴫ゐるなにはほりえに月さえてこやのあしかき影もかくれす

湖邊月

夫木抄

なにはかた潮干にあさるあしたつも月かたふけは聲の恨むる

月照荒屋

荒まさる宿は心もとまらねはもりくる月にすみかはりなん

故郷月

閑窓化今撰集
故郷はいたゐのしみつみくさゐて月さへすますなりにける哉

恨身見月

月みれはみのうきとのおほゆれは曇るは晴るゝ心地こそすれ

虫聲近床

きり〳〵す枕かはしてねにけるもこの曉そ聞はしめつる

紅葉

鶉なくすそのゝこはきうらかれて峯のまさきそ色付にける

ふかく淺き紅葉は流るあすか川淵瀬は色にあらはれにけり

落葉

しなか鳥ゐなのゝ端山吹風におろすもみちやこやのやへふき

吾妻抄
立田山梢まはらになるまゝにふかくもしかのそよくなる哉

雨中落葉

木の葉をは閨の板間にとゝめ置て獨もりくる初時雨哉

野風

別けんのへならねともあさちはら秋吹風は悲しかりけり

深夜時雨

同
月をこそあはれと宵に詠めつれくもる時雨も心すみけり

さ夜ふけてうちおとつるゝたひ毎にわか袖さへそ村時雨する

旅宿時雨 体育歌會

もしほくさしきつの浦のね覺には時雨にのみや袖はぬれける

雪

春近み櫻か枝に降雪は花のためしをかれて見よとや

いてゝみよ板間風ふきさえ〳〵てひきこそしらめ雪や降ぬる

同
谷ふかみ降つむ雪に夜やさむきひとつに見ゆるいもとせの山

同
みよしのゝ山かきくもり雪降れは麓の里はうち時雨つゝ

朝風の寒けきなへにすかはらやふしみのたゐにはたれ雪降る

橋本寒蘆

やつはしのとたへをみれは霜枯の蘆の葉のみそくもて成ける

千鳥

同
鹽風によさの浦まつおとさえて千鳥とわたるあけぬものよは

水鳥

難波潟あしのうら波よせくちしふしはかしたにたしさはくる

冬歌とて

同
岩の上におつる玉水おとたへて山陰寒みたるひしにけり

戀

同
さためなき露の命をもちかほにあふにかへんと待かはかなき

同
いたつらにしはるゝ袖を朝露にかくる袂と思はましかは

閑窓花今撰集
おもひかねなをこひちにそ歸りぬる恨は末もとをらさりけり

閑窓花
わきも子をかたまつよひの秋風は荻の上葉をよきてふかなん

別

拾遺古今
かりそめの別とけふを思ふらん今やまことの旅にもあるらん

旅

かへりみし都の山もへだてきぬたゝ白雲にむかふはかりそ

悦可衆心

春毎になけきし物をのりのにはちるはうれしき花もありけり

海上眺望

さてもよをふるかとみるそあはれなる霞にまかふ興津島守

無常

とりへ山こよひも煙たつめりといひてなかめし人もいつらは

登蓮

霞

歌苑抄　霞立春のみそらと思はすはけふも雪けの雲とみてまし

櫻

同　櫻花ちりなん後の面影にあさゐの雲のたゝむとすらん

落花随風

同　櫻咲なからの山に風吹けは空にもみゆる志賀の浦波

曉郭公

曉のしるしと思はんほとゝきすなれもや空を鳴渡らなん

納涼

夏ふかみひはらのそまのいはせ川むすふ手毎に秋そこもれる

水邊晩風

なにはかたあしの葉末に風ふきてほたるなみよる夕まくれ哉

夏夜月

同　月影も秋のみそらの心地してよるこそ夏のたえまなりけれ

草花

同　その色と思ひもわかす花といへは秋の野ことにちる心哉

朝過野徑

すきかてにおほゆるものは白露のたまぬる朝のまのゝ萩原

月照落葉

はゝそはら雨と木の葉のふるまゝにもりのみまさる月の影哉

月前懐舊

拾遺古今續詞花　諸共に見し人いかゝ成にけん月はむかしにかはらさりけり

旅宿月

續詞花　ふる里を思ひやりつゝなかむれは心ひとつにくもる月影

刑部卿忠盛みまかりてのちなかつきのはつかころ

にかのあたりの人のもとへ申つかはしける

今撰集　秋風の身にしむ夜半のねさめにはいかゝととひし人そ戀しき

母のもとにて山寺にこもりゐたりける人をとふ

ふとて

なけくらんすかたはみれとみをつめはいかゝ露けき秋の夕暮

九月盡

あすよりや小田の鳴子もひきかへて時雨の音にならんとす覽

深夜時雨

さよふかくしくれてわたる音きけは思ひもわかす物そ悲しき

旅宿雪

同 よそにこそかひのしられは聞　しか幾代に成ぬ雪のしたふし

戀

今撰集 えたかはす契はこりぬ後の世もかゝる歎の身ともこそなれ

君もうしあはすは我も忘れなてつれなき人そふたりなりける

海邊旅宿

續詞花今撰集 みさこゐるいそのまつかれ枕にてしを風さむみあかしつる哉

雨實不滅度

詞花集 世の中の人の心のうき雲に空かくれするありあけの月

海路晩冷

あはち島しほのとゝゐをまつほとにすゝしく成ぬせとの夕風

海上眺望

おなのよりおまへの沖をみわたせは浪間にきゆるあまの釣舟

無常

むかしみし人はさなから薄氷おもひしとけはあちきなのよや

あけゆけははすゑにのほる白露の風まつほとや我身なるらむ

山海空而也

今撰集 さりともとやへの潮路にいりしかとそこにも老の波はより見

堀河局

早春

後葉集 ゆきふかみいはのかけみち跡たゆる吉野の里も春はきにけり

落花

ちる花をいかゝみるらむまつにのみうらなれにたる住吉の神

七夕

くさむらに朝おく露は棚機にあきのかしたる玉にそありける

鹿

拾遺古今 さらぬたに夕へさひしき山里のきりのまかきにお鹿なくなり

露

續詞花 はかなさを我身の上によそふれはたもとにかゝる秋の夕露

月

つきゝよき千草の花のいろはえて光をそふるつゆの白玉

後葉集 すむかひもなき世の中の思ひいてはうき雲かけぬ山のはの月

うき世にも月に心はなくさむをつひにいかなる闇にまとはん

萩

金葉集 露しけきのへにならひてきり〳〵す我手枕のしたに啼なり

紅葉

後葉集 たつた姫もろこしまてもかよへはや秋の木末のから錦なる

落葉

神無月木の葉もしもにふりはてゝ峯のあらしの音そさひしき

海邊落葉

こゝろあらは蜑もいかにか思ふらんもみち散しくまつか浦島

九月盡

かれ〳〵のあさちにむすふ夕露をかたみにおきて秋の暮ぬる

水鳥

金葉集 なか〳〵に霜のうはきみ重ねてやをしの羽衣さえまさるらん

戀

拾遺古今 たてなからかすのみ栽る錦木のともにわか名もくちぬへき哉

つれなさをいかに忍びてすくしけん暮まつほともたえぬ心に

同詞花 蜘蛛のいかさまにかはゝらむへきかき絶ぬるも人のとかゝは

後葉集 うき人をしのふへしとは思ひきやわか心さへなとかはるらん

寄月戀

詞花集 あた人はしくるゝ夜半の月なれやすむとてえ社濕まさりけれ

旅

同詞花拾遺 みちすから心もそこに詠めやるみやこの山の雲かくれぬる

拾遺古今 はかなくもこれを旅れと思ふ哉いつくもかりの宿とこそきけ

かりやにすゝきをしきてとまれるにこゝろくるし
くてねもいられさりけれは

露の身の暮へに宿りてよもすからよもきか上におきあかす哉

くまのよりけかうしけるにものゝけおこりてたい
しなるに月いとあかゝりけれは

ふる里にゐくりもゆかて月影の旅の空にや雲かくれなん

かけひの水のおとをきゝて

よもすからおとらぬそての雫哉かけひの水の音をきゝつゝ

莚

秋ふかみ袖さむしろにそてしきておしの鐘やに幾世ねぬらむ

〔右中古六歌仙以各家集校合〕

秀歌大略

壬生忠岑

春立といふはかりにやみよし野の山も霞みてけさはみゆらん

光孝天皇

君か爲春の野にいて若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

讀人不知

梅か枝に鳴てうつらふ鶯の羽根白妙にあは雪そふる

人丸

梅の花みれともみえす久方のあまきる雪のなへてふれゝは

貫之

人はいさ心もしらす古里は花そむかしの香ににほひける

同

梅の花さきにけらしな足曳の山のかひより見ゆる白雲

山邊赤人

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふも暮しつ

源俊頼朝臣
山櫻咲初しより久方の雲井に見ゆる瀧の白糸
後鳥羽院
櫻花遠山鳥のしだり尾のなか〳〵し日もあかぬいろ哉
西行法師
おしなへて花の盛になりにけり山のは毎にかゝる白雲
素性法師
いさけふは春の山邊にまじりなん暮なはなけの花の陰かは
讀人不知
櫻かり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花のかけにかくれん
小野小町
花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるなかめせしまに
俊成卿
又やみんかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちる春の曙
紀友則
久方の光のとけき春の日に靜心なく花のちるらん
後京極攝政大政大臣
あすよりは志賀の花そのまれにたに誰にか問はん春の故里
持統天皇
春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかく山
相模
見渡せは浪のしからみかけてけり卯の花咲る玉川の里
俊成卿
五月雨はたくものけぶり打しめりしほたれまさる須磨の浦人
西行法師
道のへに清水流るゝ柳かけしはしとてこそ立とまりつれ
清輔朝臣
おのつから涼しくもあるか夏衣日も夕暮の雨の名殘に
俊成卿
いつとてもおしくやはあらぬ年月をみそきにすつる夏の暮哉
安貴王
秋立ていくそ(か(拾遺))もあらねとこのねぬる朝けの風は袂涼しき
惠慶法師
八重葎しけれる宿のさびしきに人こそみえね秋はきにけり
寂然法師
秋はきぬ年も半に過ぬとや荻吹風のおとろかすらん
西行法師
あはれいかに草葉の露のこほるらん秋風立ぬ宮城野の原
大江千里
月みれはちゞに物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねと
後京極攝政
故里のもとあらの小萩咲しより夜な〳〵庭の月そうつろふ

源俊頼
あすもこん野ちの玉川萩こへて色なる浪に月やとりけり

家隆
詠めつゝ思ふも淋し久方の月の都のあけかたの空

後鳥羽院
秋の露や袂にいたく結らん長夜あかすやとる月哉

讀人しらす
鳴わたるかりの涙や落つらんもの思ふ宿の萩の上露

同
萩か花散らん小野の露霜にぬれてをきませ夜は更とも

天智天皇
秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

文屋朝康
白露に風の吹しく秋の野は貫きとめぬ玉そちりぬる

藤原清輔朝臣
立田姫かさしの玉のをゝよはみみたれにけりとみゆる白露

西行法師
白雲をつはさにかけて行鴈の門田の面の友したふなる

讀人しらす
秋風に誘はれ渡るかりかれは物思ふ人の宿をよくらん

式子内親王
千度うつ碪の音に夢さめて物思ふ袖の露そくたくる

大貳三位
はるかなるもろこしまても行ものは秋のねさめの心なりけり〔據金葉補〕

大納言〔經信〕
夕されは門田の稲葉をとつれて芦のまろやに秋風そ吹

寂蓮法師
淋しさは其色としもなかりけり槇立山の秋の夕暮

文屋康秀
吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

人丸
さほしかの妻とふ山の岡へなる早田はからし霜はおくとも

讀人しらす
奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲きく時そ秋は悲しき

菅家
秋風の吹上に立る白菊は花かあらぬかなみのよするか

凡河内躬恒
心あてに折らはやをらん初霜のをきまとはせる白菊の花

貫之
白露も時雨もいたく守山は下葉のこらすいろ付にけり

人丸
立田川もみちなかるゝ神なひの三室の山に時雨ふるらし

読人しらす

秋はきぬ紅葉は宿にふり敷ぬ道ふみわけてとふ人はなし

在原業平

千早振神代もきかす立田川からくれなゐに水くゝるとは

春道列樹

山川に風のかけするしからみは流れもあへぬ紅葉なりけり

源信時明イ

ほの〳〵とあり明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風

後鳥羽院

深みとりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

西行法師

秋しのやとやまの里や時雨らん生駒のたけに雲のかゝれる

清輔朝臣

冬かれのもりの朽葉の霜の上に落たる露の影のさやけさ

同

君こすは獨やねなんさゝの葉のみ山もそよにさやく霜夜を

後京極攝政大政大臣

かたしきの袖の氷もむすほゝれとけてねぬ夜の夢そみしかき

人丸

やたのゝにあさち色つくあらち山嶺の淡雪さむくそあるらし

読人しらす

古里は吉野の山し近けれはひと日もみ雪ふらぬ日はなし

同

今よりはつきてふらなん我宿の薄おしなみふれる白雪

坂上是則

朝ほらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪

後京極

石上ふるのゝ小篠霜をへて一夜はかりにのこる年かな

源信

君か代はつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまん限りは

僧正遍昭

末の露もとの雫や世の中のをくれさきたつためし成らん

同

皆人は花の衣に成りぬなり苔の袂よかわきたにせよ

和泉式部

諸ともに苔の下には朽すして埋れぬ名を見るそ悲しき

藤原道信朝臣

かきりあれはけふぬき捨る藤衣はてなきものは涙なりけり

後鳥羽院

思出るをりたく柴の夕けむりむせふも嬉しわすれかたみは

同

なき人のかたみの袖やしほるらん夕の雨に色はみへねと

中納言行平
立別れいなはの山の嶺に生ふる松としきかは今歸りこん
貫之
白雪の八重に重なる遠にても思はん人にこゝろへたつな
行平
わくらはに問人あらは須磨の浦にも鹽たれつゝわふと答へよ
菅家
此度はぬさもとりあへす手向山紅葉のにしき神のまに〳〵
俊成
難波人芦火たくやに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝ哉
同
立歸りまたもきてみん松島や小島のとまや波にあらすな
家隆朝臣
明はまたこゆへき山の嶺なれや空行月の末の白雲
俊頼朝臣
難波江のもにうつもるゝ玉かしはあらはれてたに人を戀はや
讀人しらす
東路のさのゝ舟橋かけてのみ思ひわたるをしる人のなき
參議篁
あさちふの小野の篠原忍ふれとあまりてなとか人の戀しき
俊成
いかにせん室の八島に宿もかな戀のけむりを空にまかへん
讀人しらす
夕暮は雲のはたてにものそ思ふあまつ空なる人を戀とて
伊勢
難波かたみしかき蘆のふしの間もあはて此世を過してよとや
俊成
うかりける人を初瀬の山おろしはけしかれとは祈らぬものを
崇德院
瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはんとそ思ふ
伊勢
思川絶すなかるゝ水の泡のうたかた人にあはて消めや
人丸（上(拾遺)）
なき名のみたつの市とはさはけ共いさ又人とうるとしもなし
讀人しらす
片糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉の緒にせん
俊頼
思ひ草葉末に結ふ白露のたま〳〵きてはてにもとられす
俊成
思ひきや榻のはしかきかきつめて百夜も同しまろれせんとは
壬生忠岑
有明のつれなくみえし別れよりあかつきはかりうき物はなし

名取川瀬々の埋木あらはれはいかにせんとかあひみ初けん　讀人しらす

今こんといひしはかりに長月の有明の月をまち出るかな　素性法師

逢ことは遠山鳥のかり衣きてはかひなき音をのみそなく　元良親王

足曳の山鳥の尾のしたり尾の長々しよをひとりかもねん　人　丸

侘ぬれは今はたおなし難波なる身を盡してもあはんとそ思ふ　元良親王

我戀は庭の村萩うら枯て人をも身をも秋の夕暮　前大僧正慈圓

袖の露もあらぬ色にそ消かへる移れはかはる歎せしまに　後鳥羽院

思いつるときはの山の岩つゝしいはれはこそあれ戀しき物を　讀人しらす

契りきな形見に袖をしほりつゝ末の松山浪こさしとは　元　輔

歎けとて月やはものを思はするかこちかほる我涙哉　西行法師

自讃歌序

天のしたのとかにて。浪のこゑしつかなりし御代は。いまは百とせあまりにや成ぬらん。よろつのとをすてたまはす。はかなきふしまてもきこしめしける中にも。やまとうたはかの梨つほの心さしをこひ。柿のもとのすかたをおほしめしける御めくみのすゑにや。よにさふらふ人々は。かしこきもいやしきも富士のねのたかきいきほひをまなひ。わたつうみのふかき心をのみしたひけれは。このみち中ころよりもなをいにしへさまにおよふとに侍りけり。しかあるに人のこゝろのせきしなけれはにや。をの〳〵みつからの歌とのみ思ひて。そのさましらぬもおほかりけるを。かしこきをろかなるをしらしめ。後のよにもうらみあらしとて。身つからよめる歌のなかに。よろしきを十首たてまつらしめ給ひて。心〳〵をみたまひけるに。まとに山人の薪をおへ（さきイ）るをのかれたれとも。絵にかけるすかたのまめならす。露をあさむく心のみおほかりけるに。御みつからの御うたをも。此御つゐてに見せしら（ナシイ）せめ給ひけるそ。御恵のふかさもすゑのよのまもりとまて見えける。その中に櫻さくとを山とりのなかめふりはしめて。都もいまは夜寒のことはにうつりきて。神路山の月かけまても。人のきゝにかなはしめ。神のこゝろもなたむらん物をとうちなかむるおり〳〵は。袖のうへかはくまそなき。そのほかのわたくしさまには。神代

の月かけきよく。北の藤波春にあふ色はいとゝめつらかなる。男山あふくみね〻り出る月影。袖にくちにし秋の霜。いつれもまことに情あるを。むかし思ふ草の庵に。しのゝはくさの露かゝるすかた。いひしらすたくひ及かたきに。朝日影にほへる花もなつかしく。岩かれの床にあらしを片敷ちんは。けに忍ひかたき心ちし侍るに。このゝわたりの霞のうち。日も夕暮のみれのあらしは。よゝにまきれぬ哀さも。みちしろみよのかひありて。いかに御あはれひもふかゝりけん。さてもなを夕しくれぬれてやひとりのなかめのすさもおかしきに。月のかつらに木からしのかせいかならむとゆかしきのみならす。たかまの櫻のにほひ。槇のはに霧立のほる夕暮の色もあはれなるに。鹽みちくらし難波江の雨かけまても。思ひのこさぬこゝちするを。ふしの煙の空にきえてなときくおりは。まことに手にしたかへるさま也けり。此ほかはいつれも時の花に心をうつして。ふかきことゝのみおもへとも。さゝれ石のとにかくにさためかたきをのみそおほかる。その中によろしきふしあるをえり出させ給ひて。時代不同の歌合にいれさせ給ひける。しかあるをみつからのえらひ思ひけるには。天地はるかにたかひければにや。いと心ゆかすと思ひける人の夢に。柿本のまうちきみ。このあつめられたる歌をうちすむして。いとこゝろよくものしたまふとみてよりそ。うたかひはとけにけるとなむ。まことに君も臣も身をあはせたりけるとは。むは玉の夢にてもおもひあはせたり。即和歌のうらなみたちしはしめを思ふにも。下てる姫はあなたまはやみとなかめ。そさのおのみことはいつも八重かきときこえしよりして。よの中にいきとしいけるもの。まことなる心さしをことのはにいひあらはせは。ひとあつく世すなほにして。みたりかはしからぬ道ありけり。このほかにも雲霧へたてたるいにしへさまのことは。人ことに手のうちのかゝみのとくにのみ成ぬれは。ちかきよころ。松のはなまれにあひ見るめつらしさも。心にしみぬるあまりに。そのすかたをうつして。ふかき窓のうちのもてあそひとして。よそのあさけりをわすれ侍りぬるにこそ。

後鳥羽院

櫻さく遠山鳥のしたり尾のなかなかし日もあかぬ色かな

露　袖にもの思ふ比はさそなおく必秋のならひならねと

思ひ出るおりたく柴の夕けふりむせふもうれし忘れかたみに

なき人のかたみの雲や時雨らん夕の雨にいろはみえねと

見るまゝに山風あらく時雨るめり都も今や夜寒なるらん

我ひはまきの下葉にもる時雨ぬるゝも袖の色にいてめや

袖の露もあらぬ色にそ消かへる移れはかはるなけきせしまに

なかめはや神路の山に雲消て夕への空にいてん月影

大空にちきる思ひのとしもへぬ月日もうけよ行末の空
みつかきや我代のはしめ契おきしその言の葉を神やうけゝん
式子内親王
山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪の玉水
なかめわひぬ秋よりほかの宿もかな野にも山にも月や澄らん
なかめつるけふは昔に成ぬとも軒端の梅よ我を忘るな
きりの葉もふみわけかたく成てけり必す人を待となけれと
君まつとねやへもいらぬ槇の戸にいたくなふけそ山の端の月
夢にてもみゆらん物をなけきつゝうちぬる宵の袖のけしきは
玉の緒よ絶なはたえねなからへは忍ふることのよわりもそする
わすれてはうちなけかるゝ夕哉我のみしりて過る月日を
いきてよもあすまて人はつらからし此夕暮をとはゝとへかし
それなからむかしにもあらぬ秋風にいとゝ眺を賤のをたまき
後京極攝政大政大臣（中御門攝政ともいふ）
みよしのは山も霞て白雪のふりにし里に春は來にけり（のこれるイ）
天の戸をおしあけ方の雲間より神代の月の影そさやけき
雲はみなはらひ終たる秋風を松にのこして月をみる哉
我涙もとめて袖にやとれ月さりとて人の影はみえねと
いつもきく物とや人の思ふらん來ぬ夕暮の松風の聲
忘しと契て出し面影はみゆらんものを古郷の月
いはさりき今こんまての空の雲月日へたてゝ物思へとは
めくりあはん限はいつとしらねとも月なへたてそよその浮雲
人すまぬ不破の關屋の板ひさしあれにし後はたゝ秋の風
春日山みやこの南しかそ思ふ北の藤波春にあへとは
慈圓和尚（鎮イ）
いつまてか涙くもらて月はみし秋待えても秋そ戀しき
木の葉ちる宿にかたしく袖の色をありともしらてゆく嵐哉
野邊の露は色もなくてやこほれつる袖より過る荻の上風
霜さゆる山田のくろの村薄かる人なしにのこる比哉
岡のへの里のあるしを尋ぬれは人はこたへす山おろしの風
思ふことなとゝふ人のなかるらんあふけは空に月そさやけき
おしなへて日吉のかけはくもらぬに涙あやしき昨日けふ哉
世の間のはれゆく空にふる霜の我身ひとつそおき所なき
山里に契りし庵やあれぬらんまたれんとたに思はさりしを
我たのむ七の社の夕たすきかけても六の道にかへすな
後久我内大臣（權大納言通光ともいふ歟）
みしまえや霜もまたひぬあしの葉につのくむほとの春風そ吹
むさしのや行けとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹らん
明ぬとて野へより山に入鹿のあとふき送る荻の下風
明ほのや川瀬の波のたかせ船くたすか人の袖の秋霧
嶺こえて雲につはさやしほるらん月にほすてふ初雁の聲
さらに又暮をたのめと明にけり月はつれなき秋の夜の空

詠わひぬ（イ天）それとはなしに物そ思ふ雲のはたての夕くれの空
かきりあれは忍の山のふもとにもおちはか上に（のイ）露そ色つく
淺茅生や袖に朽にし秋の霜わすれぬ夢をとふあらし哉
なほてらせ代々にかはらぬ男山あふく峰よりいつる月かけ

右衛門督通具（堀大納言通具トモ　二位尼ノ兄歟）

梅の花誰か袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとはゝや
あはれ又いかにしのはん袖の露野原の風に秋はきにけり
影やとす露のよすかの秋くれて月そすみけるたのゝ篠原
野邊におく露の名殘も忍はれすあたなる秋の忘れかたみに
霜むすふ袖のかたしきうちとけてねぬよの月の影そさやけき
冬の夜のねさめならひし槇の屋の時雨の上にあられふるなり
霜こほる袖にも影は殘りけり露よりなれし有明の月
木の葉ちる時雨やまかふ我袖にもろき涙のいろと見る迄
今こんと契りし事は夢（涙イ）なから見し夜ににたる有明の月
せきかへし猶もる袖の滴哉忍ふもよそのこゝろならぬに

俊成卿

むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほとゝきす
忘しよわするなとたにいひてまし雲井の月の心ありせは
しめおきていまはと思ふ秋山のよもきかもとに松虫のなく
いかにして袖の光のやとるらん雲井の月はへたてこし身を
嵐ふく峯のもみちの日にそへてもろく成行我涙哉
仙人の折袖にほふ菊の露うちはらふにも千代は經ぬへし
難波人あし火たくやに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝ哉
稀にくる夜半もかなしき松風をたえすや苔の下にきくらん
ちらすなよしのゝ葉草のかりにても露かゝるへき袖の上かは
立かへり又もきてみん松島やをしまのとまや波にあらすな

俊成卿女

梅の花あかぬ色香も昔にておなしかたみの春の夜の月
面影のかすめる月そやとりける春やむかしの袖のなみたに
あたにちる露の枕にふしわひて鶉なくなり床の山風
いにしへの秋の空迄すみた川月に事とふ袖の露哉
なしむとて涙に月も心からなれぬる（イ）袖に秋をうらみて
色かはる露をは袖にをき（みえすイ）まよひうらふれて行野邊の秋哉
霜かれはそこともしらす草の原誰にとはまし秋の名殘を
ふりにけり時雨は袖に秋かけていひし計りを待とせしまに
下もえに思ひきえなんけふりたにあとなき雲のはてそ悲しき
夢かとよ見し面影も契りしも忘すなからうつゝならねは

女房宮内卿

かきくらしなほふる里の雪の内に跡こそ見えね春は來にけり
花さそふひらの山風吹にけり漕ゆく船のあと見ゆるまて
かたえさすおふの浦梨子初秋になりもならすも風そ身にしむ
心あるをしまのあまのたもと哉月やとれとはぬれぬものから

月をなほまつらんものか村雨のはれ行雲の末の里人
霜をまつ籬の菊のよひの間におきまかふ色や山の端の月
立田川あらしや峰によわるらんわたらぬ水もにしきたえけり
からにしき秋のかたみや立田山散あへぬ枝にあらし吹なり
まとろまてなかめよとてのすさひ哉あさのさ衣月にうつ聲
聞やいかにうはの空なる風たにも松に音するならひありとは

定家卿

春の夜の夢のうきはしとたえして嶺にわかるゝ横雲の空
駒とめて袖うちはらふ陰もなしさのゝわたりの雪の夕暮
松か根をいそへの波のうつたへにあらはれぬへき袖の上哉
年もへぬ祈契は初瀬山尾（なかむイ）の上に鐘のよその夕暮
歸るさの物とや人の思ふらんまつ夜なからのありあけの月
あちきなくつらき嵐の聲もうしなと夕暮に待ならひけん
消侘ぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露
たまゆらの露も涙もとゝまらすなき人戀る宿の秋風
いつくにかこよひは宿をかり衣日も夕暮の峰のあらしに
袖にふけさそな旅ねの夢もみし思ふかたよりかよふうら風

有家朝臣

朝日影にほへる山の櫻花つれなく消ぬ雪かとそ見る
來ぬ秋のいつ暮はてゝ薄氷むすふはかりの山の井の水
大淀の月にうらみて歸る波松はつらくもあらしふく夜に
行年を小島のあまのぬれ衣かさねて袖に波やかくらん
旅衣かへす夢ちはむなしくて月をそみつる有明の空
岩かねの床にあらしをかたしきてひとりやねなんさよの中山
花をのみをしみなれたるみ吉野の梢におつる有明の月
物思はてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋のたもとを
我なからおもふか物をとはかりに袖にしくるゝ庭の松風
春雨のあまねき御代を契（たのむイ）る微霜に枯れ行草葉もらすな

家隆朝臣

櫻花夢かうつゝか白雲のたえてつれなき嶺の春風
いかにせんこぬよあまたの郭公またしとすれは村雨の空
昨日たにとはんと思ひしつの國のいく田の杜に秋はきにけり
なかめつゝ思ふもさひし久方の月の都のあけ方の空
下もみちかつちる山の夕時雨ぬれてやしかのひとり鳴らん
思ひ入身は深草の秋の露たのめし末や木からしの風
思出よたかゝねことの末ならん昨日の雲のあとの山風
あけは又こゆへき山の嶺なれや空ゆく月の末の白雲
和歌の浦や奥津しほあひに浮出るあはれ我身の寄邊しらせよ
其の山とちきらぬ月も秋風もすゝむる袖に露そこほるゝ

雅經朝臣

白雲のたえまになひく青柳のかつらき山に春風そふく
たつねきて花にくらせる木の間より待としもなき山の端の月

たえてやは思ひありともいかゝせんむくらの宿の秋の夕暮
はらひかれさこそは露のしけからめ宿るか月の袖のせはきに
うつり行雲に嵐の聲すなりちるか正木のかつらきの山
秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木からしの風
いたつらに立やあさ間の夕煙さと問かぬるをちこちの山
なれ〱て見しは名殘の春そともなと白川の花の下陰
君か代にあへるはかりの道はあれと身をはたのます行末の空
草枕むすひさためむかたしらすならはぬ野への夢の通路

具親

時しもあれたのむの雁の別さへ花ちる頃のみよしのゝ里
難波潟かすまぬ波も霞みけりうつるもくもるおほろ月夜に
しきたへの枕の上に過ぬなり露をたつぬる秋のはつかせ
月の秋は名のみそ夜半の藻鹽草かくかきたえて見る夢もなし
はれくもるかけを都にさき立てゝしくるとつくる山の端の月
今は又ちらてもまかふ時雨哉ひとりふりゆく庭のまつ風
とほさかる雲井の雁の名殘さへ霞めはつらき難波江の月
又もかくうきて世にふるためし有やたゝよふ雲のあとの村雨
なかめよとおもはてしもや歸るらん月待うらのあまの釣舟
木からしよいかに待みんみわの山つれなき杉の雪をれの聲

寂蓮法師

今はとてたのむのかりもうち侘ぬおほろ月夜の曙の空
かつらきやたかまの櫻咲にけり立田の奥にかゝる白雲
物思ふ袖より露やならひけん秋風ふけはたへぬものとは
むら雨の露もまたひぬ槇の葉に霧立のほる秋の夕暮
さひしさは其色としもなかりけり槇立山の秋の夕暮
思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物を問ふ人になし
老の波こえける身こそあはれなれ今年もいまは末の松山
うらみ侘またし今はの身なれとも思ひなれにし夕暮の空
里はあれてむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そ吹
散にけりあはれうらみの誰なれは花のあとゝふ春のやまかせイ
月の行山にこゝろをおくりいれて闇なる跡の身をいかにせん

藤原季能

夕附夜しほみちくらしなには江のあしの若葉をこゆる白波
あしひきの山路の苔の露の上にねさめ夜ふかき月をみる哉
山里の風すさましき夕暮に木の葉みたれて物そ悲しき
草枕夕への空を人とはゝなきても告けよ初かりの聲
下紅葉うつろひ行は玉ほこのみちの山風さむく吹らし
もしほやく海士のいそ屋の夕煙たつ名もくるし思ひたえなて
袖の上に誰ゆゑ月はやとるそとよそになしても人のとへかし
今こんと契しことをわすれすはこの夕暮の月やまつらん
露をたに今は形見のふち衣あたにも袖をふくあらしかな
月すめは四方の浮雲そらに消てみ山かくれに行あらし哉

西行法師

吉野山さくらか枝に雪散て花おそけなる年にもある哉
吉野山やかて出しと思ふ身を花散なはと人やまつらん
詠むとて花にもいたくなれぬれはちる別れこそ悲しかりけれ
あはれいかに草葉の露のこほるらん秋風立ぬみやきのゝ原
月見はと契て出し故郷の人もや今夜袖ぬらすらん
きり／＼す夜寒に秋の成まゝによわるか聲の遠さかり行
津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風わたるなり
年闌て又こゆへしと思ひきや命なりけりさ夜の中山
風になひく富士の煙の空に消て行衛も知らぬ我か思哉
山里にうきよいとはん友もかなくやしく過し昔かたらん

〔右自讃歌以二本校合舊本序闕今據一本補之〕

新百人一首

百人一首和歌とて。大津の宮の往古。かりほの露のふるとよりはしめて。承久の百鋪の軒忍ふのこと葉にいたるまて。とをく世の中につたはれるは。京極中納言みつからの山さとの障子にをされたるを。今の世までのもてあそひとせるならし。しかあるを此頃柳の糸のより／＼に。其外歌仙の歌とも。更に色となる紙ともにかき出しまし／＼たるを。見たてまつるへきよし仰事侍し。御筆のいきほひすみつき。此世のものともみへす。めなれぬさまなと。心言葉も及かたく。是そちとせの寶に侍へきと。をろかなる心のうちにも難有思ひ奉りて。さるはえらひいたされたるをもむきも。けにたくひなくめてたき御事に侍れは。ひろく末の世にも傳へまほしくて。御中かきを申いたしてまかてたりし。これも又石の文箱壁の中にもおさめをき侍へければ。たやすくひらき見るへきにしあらされは。さらにかたのやうにうつしをきて。これを明暮の枕とにすへしと也。

小倉山時雨ふりにし古へのあとにもこゆる言の葉そこれ

文明十五年神無月下四日ともしひのもとにて筆を染をはりぬ。　沙　門在判

文武天皇
龍田川紅葉みたれてなかるめり渡らは錦中やたへなん

聖武天皇
いもにこひ和歌の松原見渡せは汐の干潟にたつなき渡る

大織冠
玉くしけ三室外山のされかつらさねすはつひに有て見ましや

式部卿宇合
山城のいはたの小野のはゝそ原見つゝや君か山路越ゆらん

源當純

谷風にとくる氷のひまことにうち出る浪やはるの初花
藤原菅根朝臣

秋風に雲を帆にあけてくる船は天の戸渡る鴈にぞ有ける
亭子院

立歸り千鳥鳴なり濱ゆふの心へたてゝ思ふものかは
忠義公

身のうさを思ひ知ぬるものならはつらき心を何か恨みん
清愼公

池水にくにさかえけるまきもくのたまきの風は今も殘れる
忠仁公

年ふれは齡は老ぬしかはあれと花をしみれは物思ひもなし
中納言長谷雄

我爲はみるかひもなし忘草忘する計の戀しあられは
大伴池主

神無月時雨にあえる紅葉はの吹はちりなん風のまに〳〵
八代女王

みそきするならの小川の河風に祈そわたるしたに絶しと
大納言旅人

いさやこらかしゐのかたに白妙の袖さへぬれて若菜摘てん
僧津（都カ）玄賓

山田もるそほつの身こそ悲しけれ秋はてぬれはとふ人もなし
源信明朝臣

ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風
藤原忠國

我ならぬ草葉も物を思ひけり袖より外にをけるしら露
増基法師

神無月時雨計を身にそえてしらぬ山路にいるぞ悲しき
藏内侍

ちかひても猶思ふにはまけにけりたか爲をしき命ならねは
源順

老にけりなきさの松の深緑しつめるかけをよそにやは見る
平祐舉

むれはふし袖は清見の關なれや煙も浪もたゝぬ日そなき
安貴王

秋立て幾日もあられとこのねぬる朝けの風は袂凉しき
藤原爲頼朝臣

おほつかないつこなるらん虫の音を尋は草の露やみたれむ
具平親王

世にふるに物思ふとしもなけれとも月に幾度なかめしつらん
藤原仲文

有明の月の光を待ほとにわかよのいたく更けにける哉
橘忠幹

忘るなよ程は雲井に成ぬとも空行月のめくりあふまて

山田法師

吉野山紅葉の庵りいかならん餘所の嵐の音そはけしき

安法法師

世をそむく山の南の松かせに苔の衣や夜さむなるらん

藤原惟成

しはしまてまた夜はふかし長月の在明の月は入まとふなり

〔遺賦〕谷滋爲政朝臣

郭公なく五月雨に植し田をかりかれ寒み秋そ暮ぬる

三條院女藏人左近

大井川そま山風の寒けきに岩うつなみを雪かとそ見る

沙彌滿誓

世の中を何にたとへん朝ぼらけこきゆく船のあとの白浪

藤原長能

あられふる交野のみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなければ

堀川右大臣

櫻花あかぬあまりに思ふ哉ちらすは人やをしまさらまし

大納言公實

思ひあまりいかてもらさん奥山の岩かきこむる谷の下水

馬内侍

今よひ君いかなる里の月を見て都に誰を思ひ出らん

藤原元眞

涙川身もうく計流るれと消ぬは人の思ひなりけり

花山院

秋の夜の月に心をあくかれて雲井に物をおもふころ哉

源道濟

思ひかね別し野邊を來て見れは淺ちか原に秋風そ吹

土御門内大臣

朝毎に汀の氷ふみわけて君につかふる道そかしこき

太宰大貳高遠

逢坂の關の岩の戸ふみならし山立出るきりはらの駒

源賴實

木の葉ちる宿は聞わくかたそなき時雨する夜も時雨せぬよも

橘爲仲朝臣

あやなくも曇らぬ宵をいとふ哉しのふの里の秋の夜の月

修理大夫顯季

時雨つゝかつちる山のもみち葉はいかに吹夜の嵐なるらん

白川院

庭の面は月もらぬまて成にけり梢に夏(瓦イ)の影しけりつゝ

神祇伯顯仲

鴫のゐるふちえの浦のおきつすに夜船いさよふ月のさやけさ

後九條前内大臣

嵐吹ゆつきかたけに雲消てひはらの上に月渡る見ゆ　三條入道左大臣

いそかれぬ年の暮こそ哀なれ昔は余所にきゝし春かは　法性寺入道前關白家堀川

契をきし人も木末の木の間よりたのめぬ月の影そもりくる　瞻西上人

いほりさすならの木蔭にもる月の曇とみれは時雨ふるなり　僧都淸胤

君すまはとはましものを津の國の生田の森の秋の初風　登蓮法師

歸りてんほとをや人に契らまし忍はれぬへき我身なりせは　從三位頼政

さゝ浪やまのゝ濱邊に駒止めて平野高根の花を見る哉　左近中將公衡

かりくらし交野の眞柴おりしきて淀の川瀨の月を見る哉　大炊御門右大臣

我戀はちきのかたそきかたくのみゆきあはて年の積ぬる哉　太宰大貳重家

後の代を歎く涙といひなしてしほりやせまし墨染の袖　寂然法師

秋はきぬ年も半にすきぬとや荻吹く風のおとろかすらん

月まつと人にはいひてなかむれはなくさめかたき夕暮の空　刑部卿範兼

忘らるゝうき名はいまも立にけり心のうちは思ひわけても　大江維順女

しゐ柴の露けき袖は七夕のかさぬにつけて哀とやみん　後德大寺左大臣母

山ふかき草の庵の雨の夜におとせてふるは涙なりけり　前大納言忠良

石川やせみの小川の淸けれは月も流をたつねてそすむ　鴨長明

春日野のしたもへ渡る草の上につれなく見ゆる春の淡雪　中納言國信

武藏野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹らん　後久我前太政大臣

袖の上に誰ゆへ月はやとるそとよそになしても人のとへかし　藤原秀能

春の雨のあまねき御代を賴ろゝ霜に枯行草葉もらすな　大藏卿有家

影淸きよもきか原の秋の月霜をてらさはすてすもあらなん　大納言通具

八條院高倉

うき世をは出る日毎にいとへともいつかは月の入かたをみん
前右大將頼朝

みちのくのいわて忍ふはふそしらぬ書盡してよ壺の石ふみ
勝命法師

雨降は小田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて
皇太后宮大夫俊成女

夢かとよ見し俤も契りしも忘れすなからうつゝならねは
小侍從

しきみ摘山路の露に濡れにけりあかつきおきの墨染の袖
後鳥羽院宮内卿

きくやいかにうはの空成風たにもまつにおとする習ひ有とは
中宮大夫師忠

山里のいなはの風に寢覺して夜深く鹿の聲をきく哉
藤原資宗朝臣

紅葉浮水

いかたしよまて事とはん水上はいかはかり吹峰のあらしそ
法橋行遍

あやしくそかへさは月の曇しにむかし語に夜や更ぬらん
正三位知家

あさち山色かはりゆく秋風にかれなて鹿の妻をこふらん
惠子内親王

昔人はそむきはてぬる世中にふるのやしろの身をいかにせん

宜秋門院丹後

山里は世のうきよりも住侘ぬことの外なるみねのあらしに
從三位行能

かきならす言の葉をたにしつむなよ身こそかくても山川の水
源季景

同しくはあれないにしへ思出のなけれはとても忍はすもなし
天台座主澄覺

秋の葉に有けるものを花ゆへに春もうかりし風のやとりは
光明峯寺入道前攝政

神代より道ある國につかへける契りもたえぬ關のふし川
常盤井入道前太政大臣

うらかるゝ芦の末葉に風過て入江を渡る秋のむら雨
中務卿宗尊親王

いつよりか秋の紅葉のくれなゐに涙の色のならひ染けん
土御門院

秋の色をおくりむかへて雲の上になれにし月も物忘れすな
後嵯峨院

有明の空に別しいもかしまかたみの浦に月そのこれる
伏見院

忘すよみはしの花の木の間より霞てふけし雲の上の月
花園院

あしはらやみだれし國の風をかへて民の草葉も今なびくなり

【右新百人一首以扶桑拾葉集校合】

續群書類從卷第三百七十六

和歌部十一

爲相卿千首

春二百首

立春

神垣の松にもけふや春たつといふをの葉のはしめなるらん

百敷の内のとかにて今朝よりや大宮人も春をしるらん

いつくより霞初ける空そともまた見えわかて春はきにけり

霞つゝ今朝立かへる春の日の光にもるゝ山やなからん

雪消ぬみ山の松にしらせはやけふそ都に春は立くる

あけ渡る空をまたてや鳴鳥の聲の内より春はたつらん

さは類ひ老せぬ年も立かへり今朝より人や春にあふらん

今朝ははや霞の色に春たちて雲もへたてぬ葛城のやま

關の戸もさす世ならねは逢坂をやすくや春の越てきぬらん

春たつといふをおなしやきゝ濱の水なくたくはしあなるらむ

早春

なへて世は霞にけりな春きぬと四方にもたれかつけ渡りけん

いく程もへたてぬ雪のふる年に又さへかへる春のはつかせ

花とたに思ひもあへぬ雪の内に霞むやこのめはるの曙

殘れともさすかに雪はあさま山煙をこえて霞や立つらむ

いつしかと昨日の雪を思ひいつる常盤の山も今朝そかすめる

子日

君を祝ふ子日の松のとの葉は千世もかはらぬためしにそ引

二葉より幾世かけてか春日山たのむ子日の松を引まし

春といへは杣山人も子日して宮木のひまに松や引らむ

霞

乙女子かかすみの衣亂るらし袖ふる山の春のはつかせ

高砂や松の葉すさふ風の音もおのへへたてゝ立かすみ哉

宮古より遠に見れは山もなし霞そ四方のへたて成ける
たちぬか（は歟）ぬ霞の色のすり衣いくへかきぬるはるの山姫
ま柴とる遠山かつの袖の色も霞わたれる嶺のかけはし
里よりも春やと山の嶺の雪消あへぬまに霞そめぬる
野邊近き人の家ゐも立こめて春は霞や深きなるらむ
春にのみいまもあふみの宮木守たえにし跡や猶霞らん
朝なきの波の千里の長閑にて霞をたつるしかの浦かせ
わたの原波もみとりに立かへり八十島かけて霞む春かな
海士人の鹽やく里はみえわかて霞より立つ夕けふりかな
田子の浦にめなれて見つる富士のねの雪も霞や立へたつらん
春ふかき霞の下の立田川瀬々行く水も濁るとやみむ
朝みとり霞むもあかぬ色なれや花咲ぬよの四方の梢に
いつよりか花の衣にそめなさん霞の袖の春の一しほ

鶯

こ（つ歟）へたへは松にも雪のあとつけて春を告くるうくひすの聲
軒端なるふる木の梅も春くれは花のかすとや鶯のなく
鶯のやとりは花にかきらしを夜をへてとまれ窓の呉竹
花ならぬ竹のねくらの夜をも今朝（本ノマヽ）はくやしと鶯やなく
我袖も匂ひ（な歟）やとまし花の香をつはさにしめてきぬる鶯
一かたに心もとめし花の色にさそはれやすきはるの鶯
うつりゆくをのか心の花ゆへやと（ち歟）よりさためぬ鶯の聲
吹梅の枝行かゝる山かつの垣ねつゝきにうくひすそ鳴く
いつかたそ梢も見えぬ春の野に霞のうちの鶯のこゑ
ふる巣とてあらしなはてそ時しあらは又歸るへき谷の鶯

若菜

またきより雪間の若菜尋ては春の野守もおとろきやせん
たかためか氷ふみわけ心さしふかき深田のねせり摘らむ
分きつる跡を雪間にふみなしてそれとはかりの若菜をそ摘
里人の袂をみれは朝みとりおなし色なる若菜をそつむ
年ふれは我身も霜をいたゝきて雪の下なる若菜をそ摘

殘雪

春さえてふりそふ程も見えわかすこそのまゝなる嶺の白雪
なを殘る霞の下のみねの雪日影さしてそあらはれにけり
春の池の氷の上に降りしきて波の花にも雪間をそまつ

餘寒

春やとき氷やをそくとけぬらんまた音たてぬたにの鶯
雨をまつ空そとみくるくもる日は猶春寒き雪け成けり
さほ姫のたもとも猶や寒からしうすき霞のころも春風

梅

降つみし雪の内より咲きそめて霞に深き梅か香そする
咲梅の梢はそことみえわかて霞そ匂ふよものはるかせ
風につれ霞にしむる梅か香のいかてか袖にあまりきぬらん

吹すくろ風の跡にそ梅の花なか〳〵袖に香をはしめけろ
身にしむろむくらの宿の梅かゝに思ひありとも〔ら脱歟〕しさらめや〔は脱歟〕
色もかもしろ身成せは梅の花猶いか許おくかれなまし
かくはかり我身色なき袖までもちさて移す梅かゝそする
袖にふれ風にもたくふ梅か香のつきせぬ程な木かけにそしろ
花さかてましろ草木の心あらはあかすや梅のかけ〔を歟〕したふらん
春風のさそふ軒はの梅かゝはあろしなからもえ　そとゝめれ
咲梅の色かにおけろ難波人おられぬ浪に袖はぬらさし
猶そさく道行人のおり殘す垣ねの梅のたちえはかりに
〔忌歟〕しれては又あくかろゝ心かなむかしかけらぬ梅のいろ香に
紅の色こき梅はあやにくにまたれて後そ咲初めにけろ
ちりぬへき梅の匂ひをやかて又櫻にうつす春風もかな

柳

春風に心とけてやなひくらん霜を結ひし青柳の糸
をりあへぬ春のにしきのたてぬきを先染かへろ青柳の糸
春といへはみとりの玉をつられつゝ露にそなひく青柳のいと
露なから染かけぬらしさほ姫の手玉もゆらの青柳の糸
かた糸をよろのわさとや葛城の神もなつさふ春の青柳

若草

野邊みれは若菜にあらぬ若草のつまゝほし〳〵春のならひか
いつまてか身もわか草の名にめてゝ心春なろ野へに出けん

早蕨

春寒き山のすそ野のした蕨おろほともなき末のみしかさ
山人の袖のやつれもかへりみすをところを分ておろ蕨かな

春月

立こむろかひやなからん春霞かたふく月の影をとめすは
さのみなと春寒からぬ月たにも霞の衣かされきぬらん
やとしてもおなし霞の色なれは我袖よきよ春のよの月
もとの身も月も昔の友なからとしにつれてや霞そふらん
春は猶空にや月のきよからしかすむにたにもあまる光は

春雨

花さけといはぬはかりの空なれや梢かすみて春雨のふる
雲晴て霞や猶も深みとり槇の葉しめる雨のなこりに
心ありて閏ふりまさる板まよりいたくもらぬ夜はの春雨
めくみある春をたのみの世にふれとおなし詠の軒の玉水

春駒

限りなくあれていはゆる春駒もおのかたちのを出ろとはみす

歸鴈

思はすや都の花に立別うき名をとめてかへそかりかれ
古郷の花みんためといひなさはしたひもすてし春のかりかれ
ふろ郷は忍ふならひのをはりを知らてそしたふ春のかりかれ
春毎に都をすてゝ行鴈はとこ世の花やときはなろらん

關こえて夜ふかく歸かりかれを夕つけ鳥も鳴てと〻めよ
おそく〱誰か待らん玉章も一つらならすかへるかりかれ
面影もはるかになりぬ鴈かれのきこゆる空や猶かすむらむ
古郷に歸る心の嬉しくは何をうしとか鴈のなくらむ
いさ〻らは勅そといひて雲の上に春行鴈をしはしと〻めん

遊絲

なにしなく心にか〻る詠めかな暮ぬ日影のなかき糸ゆふ

花

おも影にたちゐまたる〻山櫻これも花みる日數ならすや
待程の心にしむる色香をはさきての後や花に返さん
さきさかすまた白雲にまかふみをま〻の花に誰かつけまし
吹風にあつらへつけて知らせはや雲と花とにまかふ心を
雲たにもよそにやかはる吉野山さなから花の面影にして
かすさきて雲のしたなる山櫻あらはにみする春風もかな
山ふかくえも分いらぬ花の色をかくさくみせよ嶺のうき雲
しるしらす今そ行かふいやしきもよきも盛の花をたつれて
春はた〻花の所を宿とせよ賴むよしの〻奥ならすとも
一枝もゆる〻（し歟）やすると心見に木のもとちかく花をみる哉
人もまたかく〻こそ花にくらすらめ木の下ふしは我に限らし
はかなしや春の心のつく〱と人めも知らす花にむかひて
いかにして春の心はなくさむと花なき里の人にとは〻や

花に猶光をそへていつる日も櫻に匂ふ春のあけほの
あかす見て今夜はかりと宿れともあすさへしらぬ花の陰かな
花の影二（一歟）夜二よと思ふ身を散るまてみよといふ人もかな
明さはや月さへ入てさたかにも見ぬ物ゆへの花の下ふし
あちきなく猶こそなれめ花ゆへに憂あた人の名には立とも
宿とにうへをく人もまれなれは花の都と云かひそなき
さくらさく花の下草ふみ分て人めもかれぬ春の山さと
とふ人のさのみしけらは山里にうへをく花やくやしからまし
初せ山花さきてこそまきもくの檜原も春の錦とはなれ
峯高き櫻か下に松見えて花やあらしの上に咲らん
雲よ先か（ちり脱歟）ひくもれ咲く花にこむといふなる風を隔て〻
ふるさとに春のきて行錦こそ都の花の散に見えけれ
逢坂の山さくら戸はさしもせよ關路の花に風やこえむと
春とにさのみ心をしめなくは花やわか身の浮世なる覽
櫻さく比しに（さ歟）山に入人はちりての後のうき世ならまし
花にのみあくかる〻身のむくひにや散れは心を又つくすらん
したひえぬ花のうきにもこりぬ身の心をちらす春風もかな
散をこそいたくもわふれ山路とて人のすさめぬ花しなければ
したふとてちらてしとまる花もなしよしや春風袖に吹こせ
風そうき花のとかとは思はれと散るに恨の色やみゆらん
雪とふる花にもせめてうつもれぬ山は嵐の名をやかこたん

花ちれはうき世なからの山風にむかしかけたる雲たにもなし
吹風はとたえにけらしかつら木の神も渡さぬ花のうき橋
山高み風の渡せる程なれやうきたる花の雲のかけはし
里の海士の春の恨も色に出て花の涙ふくいその山かせ
風ふけは吉野の川のお〻（せ歟）ひろみ汀にあまる花のしら浪
散花のうきに付てもとは〻やな風のおくるか春のさそふか
花は雪（雪歟）泪は霞とおちそひて袖に恨みの春風そ吹く
身にしめて思へはこそはうき物をかこひもはてし花の下風
櫻色のよるの衣を返してもうつろふ花のゆめはとまらし
櫻かりぬるへき袖のさもあらて嵐に花の雪そふりくる
櫻ちる梢にましるときは木をまたきに花の青葉とそみる
花は夢風はうつ〻の恨のみ殘る梢のあけくれのそら
さそひ行花をはとめてしはした〻春吹返す山風もかな
身もくるしさのみはしゐて慕はしと思ふは花を思ふ我とは
あのみゆるみ山櫻の殘れるはよきて吹ける風のこ〻ろか
さそひえぬ花はいつくに殘るそと浮春風に尋てやみん

桃花

も〻咲てやよひのけふも紅の花に色そふ三日月のかけ

梨花

いつれたか花ともわかむ浪の上に片枝を浸すおふのうらなし

雉

若葉さすましはの色もをめきて片の〻雉子聲長閑なり

雲雀

夕日さす霞のうへに聲はして雲井はるかに鳴く雲雀哉
野邊の草霞のうちをすみかにて梢によらぬゆふ雲雀かな

野邊

あくかる〻心につれて思ひたつ野邊の霞やともと成らん

苗代

苗代の水せきそむる程なれやむら〱みゆるを田のますらを
末遠くせきいる〻水もますらおそ（か）ひまこそなけれ春の苗代
苗代の種まくかたも顯はれて田のもあまたにしめはへてけり

蛙

澤水にきけはいつれもうたかたの哀れみちある蛙なくなり
行水のさそふを友となれも憂うきたる草に鳴蛙かな

菫

時しあれは澤田のえくをつみすて〻野邊の菫に又うつるなり
花みつ〻歸る名殘の道野へに猶あかなくの菫摘なり
山深くしきみはつまて我みなと野邊にすみれの花をわくらん

躑躅

軒近き垣ねのつ〻し是も又窓の光と見えさらめやは
おく山の岩ねのつ〻しおる人もまれなる色に出て咲なり

杜若

池水にましろはなそとあしのはのま近く咲ける杜若かな
ますらをかきぬならすとも杜若あかぬ色をや袖にうつさん

款冬

山吹の色をそたのむ春の色もうすく成行草のまかきに
山ふきの花の八えかきしめをかは春をこめたる宿とたにみん
山吹の花の下行遣水に面影うたふいてのかはなみ
都人けふもあかたの井とにきて折をまつまとさける川吹
口なしの名にのみ立て山吹はあらはれやすき花の色かな
山吹の花のしたひもいつとけて猶人しれぬ色に咲らむ
河風も井手の山吹ふきちらてさそはぬ水になとちらすらん
身たしれは誰とへとしもいはぬ色にきくを友なる庭の山吹
行春もよるはこえしと山吹の花の籬に猶やしたはん
時しあれはしらゆふ花も色みえて神なひ川に咲る山吹

藤

今はとて暮行春も過かてにかへり見よとや咲ける藤浪
咲藤は一もと見ゆる花かつらはふ木あまたの松にかけつゝ
春はさく藤江のうらの浪こえて鷗や花のありかすにせん
春も猶名殘ありとやみよし野の大川野へにさけるゝ藤浪
住よしの峯あらはなる松かれをかへしてかゝれ春の藤浪
紫の色こき藤の花咲て夕浪にほふたこのうらかせ
咲藤の花より外はたつ浪もなきさの岡の松しつかなり
うつろはぬ松の心の花ゆへや契久しくかゝる藤なみ
年をへて咲そふ藤の花にしもかくれぬ松は猶そ木高き
ことの葉の花咲藤のかけもかな有しにまさる程はなくとも

暮春

散花のうきをかこちしあとに又風のをくらぬ春も行めり
あら玉のとしはいまたはるかにて春の日數のくるゝ程なき
一年を皆春なからとはかりのあらましたにもいふかひそなき
遠さかる霞の關を又こえて春やあつまに立かへるらん
浦近き波はさそはて行春もひとりや越ゆるすゑの松山
花をこそ嵐もさそへ春はたゝ心とのみやくれて行らむ
暮て行春の日數を野邊に出て分まよふとも猶や慕はむ

三月盡

今夜ゆく春をゝくらむ月たにも影みぬ空のあ（わ歟）たる時なき
山の端よあすまてかすめ行春に立をくれたる名殘ともみん
けふかへる春は都をいてぬとも東路かけて猶やしたはん
いかゝせんとしは春もくはゝらていとゝ心にあかぬ一夜を
春の行關路の鳥よきてしはしなかぬ限を猶もとゝめん

夏百首

首夏

夏衣けふ白妙にほし初て雲もかすまぬ天のかくやま

更衣

けふも猶心のうちの花まは〔マヽ〕うつらてきぬる夏ころもかな

たか袖の花の色香もけさ（染イ）はゝやうすき衣に立やかふらむ

餘花

夏やとき一木の花やをそ櫻あかぬ色香はいつれともなし

新樹

あくまても見さりし花は散過てまたぬ青葉の何茂るらん

卯花

夏草もまた茂からぬかきねとや心のまゝにさける卯の花

とはれともいや此里としらなみの玉川かけて咲ける卯の花

卯の花のかきねは今そあらはるゝ夜の間はかりの雪の明ほの

木末まておよはぬ庭の卯の花は櫻にたにもまかはさりけり

さても猶明るそはやき卯の花の光をよるの月にまかへて

葵

二葉よりおひそふ松の下草はその神山のあふひ成けり

郭公

み山いつる時はいつとも知られともやかてきたるゝ郭公かな

時鳥ちきりやうすき夏衣返す夢にもこゑのきこえぬ

我ための初音はよもと思ふより人つてたのむ時鳥かな

人傳をきゝふるしてや時鳥めつらしけなき初音ならまし

待わふる身のあらましの數そへてなと時鳥つれなかるらん

明やすき夜のまにたにもふして思ひおきて待るゝ時鳥哉

はれやらぬ月もさこそは村雨の空にまたるゝ時鳥かな

いく聲もあかぬ思ひの時鳥待夜のかすをきくになさはや

時鳥こむ夜たのむかさたかにも鳴れなけれはいかゝとそ思ふ

郭公み山の里に詫すみて心のまゝに初音きくらむ

老はてゝ聞かぬとハふもうれたきに山時鳥やゝ近くなけ（なきて飛歟）

猶も世にしのふる比や時鳥いたらぬ里をわくらん

年毎にまたてはきかぬ時鳥心つくしもおのかならひか

雲井にてあひかたらひし時鳥忘れはてすは今もとゝへ

かたらはて山にかへるな時鳥我も都のうちに住身そ

にとゝきす雲のかよひち近ければ天津乙女　空にきくらん

時鳥ちゝに隔（え）つるしのひ音をしのたの森に猶やとはまし

聞こゆる山時鳥なれも又ゆふつけ鳥の音をやまつらむ

つれなきも限ありとや時鳥軒の松風こゑあはすらん

いくとせに幾聲聞て過ぬともしらぬ雲井の時鳥かな

聲をかるならひもあらは時鳥我なみたをやそへて返さん

海士のすむ里近くなく時鳥恨もはてぬ初音をやきく

時鳥なく一聲の名殘たにしはしもえやはありあけの空

時鳥やとる木梢はみえわかて空にのみなく聲そ聞ゆる

いまはとて遠さかるとも時鳥又こん年を契りをかなん

早苗

とりそむる今のさなへにしられけり先刈ほさん秋のわさ田は

朝戸出のあさのさ衣ぬれてほすひまもなしとや早苗取らん

さなへとる田のものしつか年浪もめ(お歟)すそふ水の影にみゆらん

菖蒲

池水の松かけ近きあやめ草ねさしかはせる程やみゆらん

かる人もひくても同しあやめ草末はになかきねをやくらさん

おなしくはよとのきと人五月待あやめの草に駒なつなきそ

盧橘

いやましに花こそ匂へたち花の枝に霜をく年はふれとも

夏衣うすき袂の匂ひたにふかくそうつる軒の立花

年をへてとをさかり行昔より猶やかはらす匂ふたち花

いにしへをしのふのみたれ限なく軒はふりてゝ匂ふ橘

僞もあらしと思ふたち花のむかしこかたるとの葉もかな

樗

あふちさく此一もとをもよきてふけ花には風をいとふ習ひそ

五月雨

さのみなと月みぬ夜半のつもるをも知らて降そふ五月雨の空

風吹とはれまはなくていとゝしくと山の雲や五月雨のころ

五月雨にみきはまさりてしかの雨の濱松か枝も沖にみゆらし

玉と見しあたのゝ露も瀧の上にくたけておつる五月雨の比

五月雨に難波ほり江のみほつくしなかく〳〵涙の上やくちまし

いく夜かは月のかつらの下露もともにおちくる五月雨の空

五月雨に日をへてにこるみなせ川見なれぬ浪やありて行らん

ねやもりてふす程もなき短夜をあかしかねたる五月雨の比

水鷄

槙の戸をたゝく水鷄にきゝなれてまとに人のとふもしられし

夏夜

ふゝけても見ろほとそなき灯の光もしらむみしか夜のそら

夏月

明過てのちは光も久堅の空にほとなき夜半の月かけ

暮ぬまに山のはいつろ月影や短夜なからよを殘すらむ

有明のかけをたもとにしたひても薄くそ見えむ蟬の羽衣

おかすみてねぬ夜のかすはつもれともさも明やすき月の影哉

月は又ほとなき夜をは恨すや猶有明の空に殘りて

瞿麥

打はらふ我とこなつの花の露ぬるよの間にや猶しほるらん

しけりおひて花まつ草の下露に紅くゝろやまとなてしこ

夏草

結ふとて人なとかめそもゝ草のしけみは花も紐とかぬまに

こむ秋をしのふか原の夏草も露こそあまれ花はなくして

しけりあふ今より露はおきの葉に秋風いそく程やみゆらん

秋の色いそく心の下染は露たにしらし庭のなつくさ

秋の色もまたあらはれぬ思ひ草いつかお花か袖ふれてみむ

照射

ともしする人のおもひに立鹿も心のやみにまとふとそみる

鵜川

大井川うつる嵐の山みえて青葉をわくるかゝり火の影

螢

よる〳〵の衞士のたく火にまかふらし雲の上まて通ふ螢は

有明の月よりさきに影きえて夜の間ほとなく飛螢かな

螢とふ草のまかきのさゆり花いつれを窓の光とかみん

なにはかた蘆のいさり火かすそへてあしのはかくれとふ螢哉

身をてらす光とならはとふ螢こけの袖にもつゝみてや見ん

秋ちかきひかりも露のあた物にかはらぬ影ととふ螢かな

飛ほたる秋はきぬるもよな〳〵になれてあつむる窓を忘るな

何ゆへのおもひありとはしられとも蓬の宿にとふ螢かな

とふ螢何を思ひのけふりとも見えぬ物ゆへもへわたるらん

松かけの水はさなから秋なるにいかて螢の夏をしるらむ

蚊遣火

海士のすむ磯のとまやの蚊遣火はよるも鹽やく煙とやみん

夕顏

しつのおか垣ねにしめをゆふ貌の花やよそまて咲あまるらん

蓮

池水におりゐる鳥も蓮葉の上に心をかけさらめやは

氷室

雲の上に千世のためしをそなへきて絶ぬひむろも我君の爲

夕立

風の香はうつもれやらて夕立の雲にとちたる嶺の松はら

嶺の雲草木の露もさたまらす風につれたる夕立の空

けふの日もはや夕立の空晴て月待山は雲もさはらす

軒近きこすのまかけて玉水の風によこきる夕立のあめ

夕立のすくる山路になる神も雲の衣やぬれてほすらん

蟬

秋近き梢の蟬も心あらはけにこの葉のたゝりやはなき

深みとりを〔二戀〕のれそめてやきなくらむ松にかけたる蟬の羽衣

鳴聲もいつしほなれて聞ゆらんなきさの森の蟬のはころも

納涼

松かけの風を心にまかせなはいは井の水もさのみ結はし

かくはかり涼しき松の木のもとを秋まつ人にいかてしらせん

呉竹のよのまはいまたなかゝらて秋ある風のをとそ涼しき

六月祓

みそき川流れもあへぬ大幣や秋をかけたる瀬々のしからみ

秋二百首

立秋

朝またき軒はの荻を吹風のこゑもほに出て秋は來にけり

須磨の浦もいつしかかはる風をいたみ關やく煙秋や立らん
昨日みしてそめの糸を引かへてしつか袖にも秋や來ぬらむ
たかみそき夕なみかけしみたらしの河瀬も今朝は秋の立らん
袖はまた昨日のまゝのうす衣かされもあへす秋は來にけり

初秋

年ふれは我はつ秋の風の音も昔にこえて身にそしみぬる
うしとしも思はぬなから身にはしむはまた初秋の袖の夕かせ
廻りあふ年はふれともかひそなきうき世を秋と思ひしられは
秋きぬと又三日月の影まてもはやくかたふく齡をそ知る
あま人もそよとおとろくこゝ島の磯吹こする秋のはつ風

棚機

なにゆへか秋とはかけし年へても契ふるさぬ星あひの空
天川をひ風はやく船出してあすの歸さはいそかさらなん
あまの川渡れとにしき中絶ぬ紅葉の橋は幾世かけまし
色もなきからの七葉のとのはゝ吹もつたへしあまの川風
七夕に七十ちかくかすいとはとしのをなかき手向とそなる
けふ過は又ひとりねの七夕に我かたしきの袖やかさまし
まれに逢ふ中をうき木の浮沈みかへりやかぬる天の川浪

露

花にきえ青葉にちりし白露も秋そ千種の色に出ける
ときは木の葉にをく露はもりかねて下草とても秋をしらめや
草も木も心哀れや秋は猶なみたに似たる露の置らん
あたになく物とはみへす秋の露そむろ草木の限なければ
色まさる千草の花の朝露にしはしは風もまたてこそ見め
心より結ふは秋の涙とも露ともわかて袖そしほるゝ
霜をきしよもきのかけも今はなしそなたにむすへ袖の白露
露そめてはらひもすてし袖の上にをけは衣の玉とみえたり
玉にぬくならひもあらは秋草の花の露をは誰かはらはん
をき所なきにはあらぬ露たにも袖をゆるさぬ秋の夕くれ
むら雨のあとの玉水おちそひて軒はの草そ露しとろなる
をけはとて音にもたてぬ草の露（か脫歟）空よりふる風のむすふか
吹まかふ風の心もさためなきまゝにや露の恨なるらむ
雨にゝにまさるときゝし宮城野の露をは袖にいかてはらはん
よしや袖老てはいとゝ露の身をあた（なる脫歟）物と思ひなすよに

秋夕

詠めしと思ひすつれとうき物は雲のはたての秋の夕くれ
年つもるみはとはりの秋の露袖にひまある夕暮もなし

荻

をのつから草のまかきと成にけり末はかすそふ庭の荻原
憂物とたれかいひけん夕まくれ荻の葉すさふ秋の初かせ
淋しさを友とする身のならはしにいとふともなき荻の上風
夢と見えうつゝとなりて夜もすから音こそたえね荻の上風

夜半にきく風の行衛をけさは又亂れてみする露の下荻

萩

ま萩はら野守ありとはみえねとも心ある人やおりてすくらん
風をいたみ野邊のま萩の花もなししはし成とも袖やおほはん
露をたにをかしと思ふ秋萩の花になこえそ野路の玉川
萩か花ちるらんをのは遠くともいさみにゆかん霜置ぬまに
分ゆけはあらぬ袖かと色かえて身さへおとろく萩か花すり

女郎花

いさゝらはおりて歸らむ女郎花宿らはこそは名にも立へき
我すめはひとりはたゝぬ女郎花宿あれぬとて人なてふれそ
咲ましる千種の中の女郎花はなの錦をきると社みれ

薄

袖の色も錦とみえて秋の野のお花にましる花やさくらむ
花薄ほにいつるほともみえてけり高くかけたるまのゝ浦波
枕とも袖ともなるかたひ人の入野のすゝき一夜やとらは

苅萱

花さかぬ野邊の苅かやそれも猶みて過かたき露そ亂るゝ
咲ましる千草に花をかるかやもしはし色ある露や置らん
秋をへておとろにましる苅萱も亂れなき世は風そ知るらん

蘭

藤はかま夕風たちてむらさきの色に心や猶くたくらむ
立かへり又もきてみは蘭我身そやかてゆしとなるへき

槿

あやなくもおらて過うきやすらひに萎れぬへしや今朝の槿

虫

我かとも行てとふへき身ならねはよそにのみきく松虫の聲
袖に吹さよの秋風身にしみて時しもあれや虫のこゑ／＼
きり／＼すいたくなくとも我袖の涙にまさる露はをかしを
秋更て後もかたらへ我となくつれなくのこる庭の松むし
夕ま暮名に立こむるきり／＼すをのか涙もはれすとや鳴く
秋はきのにしきに色はまさらしを機をる虫よ誰かためにかも
色かはるをのゝ淺茅の初霜に猶かれのこる虫の聲かな
秋草の花のまがきをしめしよりやとかる虫の聲そ隙なき
まくす原霜の下葉の風さむみたえぬ恨と虫やなくらん
初霜のをけは涙もこほるかとかれ行虫の聲にとはゝや

初鴈

宮古人したひし春を忘れすや年もかはらて鴈のきぬらん
別路にそへし心もそのまゝにつれてや來ぬる秋のはつかり
嶺たかくたか玉つさをかけはしに雲井の鴈の鳴渡るらん
まつとせし心もはれて鴈のくる峯の朝霧秋風そふく
朝またき日影やいそく露霜にぬれてほしあへぬ衣かりかれ
なきてくる鴈の涙もまたぬみに聲きく夜半の袖そ露けき

玉札に書あましたるをのはな誰にかつくる初鴈のこゑ
初鴈もなきてそきぬる昔いま思ひつらぬる夜半のね覺に

鹿

雨そゝく夕の山を出そめてすその〻露におしかなくなり
霧ふかき山のあなたの妻戀に道まかひぬと鹿や鳴らん
おしかなく泪も猶やもろかつらはゝそかつちる秋の山風
さゝ分るおしかの泪ふかき夜にあさの袖をも誰かかさまし
おとろかす心もなくてすむ人やみ山の鹿も友となるらん
もる人も心ありてやゆるすらん小田近く鳴さおしかの聲
明ぬとて入へき山やたとるらん霧のうちなるさを鹿の聲
露にふし霧におきぬる妻戀にあはていく夜の小鹿鳴らん
秋をうしとさのみなきそ夜の鹿月も泪にくもりやはせぬ
秋の田の妻とふ鹿も立わかれいなはの霧にぬれて鳴らし

鶉

露なからましはかつちる風立てふもとの野邊に鶉鳴なり
霜をかぬならのひろはの下ふしや床寒からて鶉鳴らん
朝霧もゆふへの霧も深草の野邊とうしとや鶉なくらん

鴫

秋寒き澤邊のしきのふしわひて又いつくにか鳴て立らん
聞わふる鳴のはねかきかきりあれは長き夜とても月そ明行
明るまて友まつ鳴のはねかきはこぬ夜のかすつ猶つもるらん

秋田

小山田の露のめくみも秋にあひてかりしほ近き程はみえけり
明わたる門田のいなはゝる〳〵とよる置つゆを日影にそみる

霧

霧こめて夜とや猶もいははしの明かたくもちき葛城のやま
夜をこむるふもとの霧はそのまゝに立ものほらて山そ明行
遠かたの山はさなからきえはてゝ軒はもくもる秋の朝霧
おきつ風かたほはかりをあらはして霧の内なるよさの浦船
里人のむかへる山もさたかにはえこそみなせの秋の川霧

駒迎

逢坂のまつ程もなくあはつ野の露分のほる望月の駒

月

いく秋か雲井の月の都人くもらぬ影をあふきみるらん
名に立て雲の浪なき空の海に最中の秋の月そ知らるゝ
暮ぬれと外山の雲を出やらて猶いさよひの月そまたるゝ
月にうきあさまのけふり立待を遠近人もさそ恨むらん
一むらの雲のゐまちの月影を嶺こす風にまかせてそみん
よひのまもまたふけ過ぬ月影を誰ふし待となには立けん
ときはなるみとりの空のかくろまて松のはつかに出る月影
山のはも猶あかなくに朝日かけ匂ふまてみる有明のつき
みよし野の花にいとひし山風を雲間の月に待て社みれ

雲かくす名にはたつとも伊駒山月みるかたの影なへたてそ
よしやたゝおは捨山に照月もみやこにまさる光やはある
さらしなもまたみぬ里の面影をさそひて出よ秋のよの月
山ありて入かとみれは武藏野の中はにあへる秋のよの月
月影はこほりて落る下露や秋をあらはす木からしの杜
月やとす袖のしつくをそのまゝにほさてそ結ふ山の井の水
月ゆへにやすらふ述の川瀬をつなてたえぬと人やみるらん
旅人も月手心（に歟）のすみた川わたりいそかぬ夜こそふけぬれ
最上川瀬のほる舟の夜をへてもいなにはあらぬ月の影かな
はつ霜のに□のたかはし秋かけて下ゆく水も月〔そ脱歟〕ほれる
あけぬ夜は猶もひさきをもる月のきよき川原に秋風そ吹
猶そすむ月に吹あけのはま風もまことを秋の霜にまかへて
名にたてる浪よの月や清見潟もくつにましる影もくもらて
浪遠くまたれて月もいつて船はや吹よせよみをの浦かせ
すむ月の氷やゝすくゝたくらむあち（村脱歟）さはくすさの入江は
海士人も我すむ方の月みてや燒すさひたる夜半のいさり火
月のもるひまあれとしも思はてや名に立こやの芦のやへふき
暮ぬともたつの市人立とまれ夜わたる月の影をたのまて
石はしる瀧なくとても水にすむ月のかつらは誰かおしまし
とく出ておそくかたふく月をみは山のは遠き野へを尋れん
雲はらふ山のあなたの秋風もいてゝくまなき月にこそしれ

月をみる空に心のありなしは雲と風との行衛にそしる
心をは月のあたりにやとしをきて袖にも落る影を社みれ
あかすみる月はかきりもなき空に我身を捨て行心かな
みかきたてぬ心はあたにちりの身の袖にや月も宿りかぬらん
かくてしもあかすそみつる長き夜にあまりて殘る有明の月
あしまこく入江の船の跡はかり浪にさはらぬ月の影かな
またるゝもをけりなりや東路の道のはてよりいつる月影
をなし野の露のやとりも色かへて千草の月の影そうつろふ
山越えているをやしたにかり人の弓はり月に心ひかれて
あかすみるかたふく月のゆく末にしたふも知らす鳥や鳴らん
光をは花と散してもみちする月のかつらも時もさためぬ
友とみて待出る月の影たにも猶さはりある松の下庵
秋の月此世はかりと思ふなよ行末までのかけとたのまん
あつむへき雪を待まの夜半の月へたてなはてそ窓の呉竹
世の中の人の心のくまをこそ空ゆく月もうしとみるらめ
あれぬともよしや古鄕秋をへて人こそすまれ月はすむらん
ぬれてほす袂に似たる空なれや村雨そゝく夜半の月かけ
晴くもり嬉しき空もうき影もさていく秋か月になれけん
今こそは遠さかりぬれいつまてか雲井の月に身をくらしけん
すてやらて我世ふけぬるつれなさをさそひかれてや月も入覽

擣衣

秋さむき空のはたてに風初て物思ふ比は衣うつなり
長き夜の夕つけ鳥はつれなくてね覺せよとや衣うつ聲
秋とても紅葉の錦きぬ人はときはの里に衣うつらん
すまの海士の秋の夜寒を誰とへはいふもこたへて衣うつらん
長き夜をうなかみかたのあま衣浪やいつれとうたぬまもなし
やつるへき色をも知らて秋草の花すり衣誰かゝつらん
嵐ふくみ山の里に誰すみてたえ〳〵雲の衣うつらん
秋ふかき遠山かつの袖の露はしたにあへぬ衣うつらし
いつまてか隠か衣をうちたけてぬる夜もなしとおき明すらん
よそにのみ音をは聞て身になるゝ苔の衣はうつとしもなし

秋夜

八聲よりいく聲あまる鳥鳴て夜を長月のをとも知らん

秋雨

木々の色もいまやと思ふ村雨は人の思を先や染らん
秋のよの思ひやなそと人とひしこたへすとても村雨の空

野分

秋草におはなか袖はおほふともあらき野分をふせきやはせん

葛

山かつの垣ほのへたにまかひしてうつろはぬまのま葛成けり
たにゝはふたよりそなくは葛かつらしはしもたへん山颪かは
ひろはれぬ玉まく葛にとゝへは露とこたへぬ秋風そふく

菊

露のまもあたにやはみん百草の花は名殘の秋のしら菊
うすくこくうつろふ菊の一もとに色の千種を殘してそ見る
白菊をかめにさしてはいとゝしく幾万代の秋をかはへん
霜かため都にいてゝ山人も山路の菊の種やうへけん
うつるなよ秋なき時の垣ねまて今より契る庭のしら菊

紅葉

昨日けふ時雨るゝ雲のうす紅葉心をさそふ四方の色かな
さらてたに山もと遠きはゝそ原きてみよとしもいはぬ色哉
道のへのかきほのつたのはつ紅葉まつめにかゝる秋の色哉
ときは木もひまよりみゆるはし紅葉立枝はかりや色に出らん
初瀬山ひはらの時雨もりかねて木の下紅葉いかゝ染らん
またきより憂名にたちてさそふなよ千しほまつまの木枯の森
木々の色を夜さへみよとてや月はいつれかつらの紅葉成らん
秋はまたみ山櫻も紅葉して雲にまかはぬ色やみゆらん
立田姫染ていくかの露霜に錦おりはへ衣ほすらん
わきて木の立田の梢色ふかしいつくの山も時雨するころ
よそにみむ紅葉なよきて嵐山霧吹はらへ秋のあけほの
霧立て山はをくらの夕ま暮入日のかけは秋のもみちか
神もけに紅葉にあかぬ程そとや手向の山は猶しくるらん
紅の梢にうつる心もてみとりのこけの袖やふれまし

里よりもみ山はふかき紅葉かととはゝ時雨のいかゝこたへん
染はてぬ木々のしつえや殘るらん色こき山も猶時雨めり
露のぬきみたるゝ山のから錦霜のたてをはいそかすもかな
みし春の花にも老をかくされはよしや紅葉の枝もかさゝし
奥山のまさきのかつらむすほゝれ色つきかれて霜やをくらん
秋の色もうつりはてぬる紅葉哉あかぬ梢の詠めせしまに

暮秋

秋も暮日もくれかたのうす霧に名殘の露そ袖にあまれる
草も木も嵐にもろき夕露のとまらぬ秋を何したふらん
長月の名殘は空に有明のつれなくみえてかへる秋かな
よしや秋暮るなさのみしたひなは身をさへうしと思もそをく
行秋の色をは知らぬ常盤木も嵐吹そふ音やかはるらん

九月盡

暮て行秋津のをのゝ淺茅も〔[illegible]〕こよひの露の置やわかれん
あすや猶冬木をわきて尋みん秋にをくるゝ色や殘ると
行秋の殘る一夜の長月もかきりありける鳥の聲かな

冬百首

初冬

風やあらぬ雲やかはれる神無月昨日にもにぬ今朝の空哉
秋風は昨日の露に吹過て袖に霜をく冬は來にけり
けさのまはまた里なれぬ冬のきてと山はかりやかつ時雨らん
長き夜は秋にかはらていとはやも日影ほとなき神無月哉
今朝ははや秋をしのふの露たにもみえぬ軒はに冬やきぬらん

時雨

かつらきやふもとの里の夕風に雲よりしたもいま時雨らし
みやま木にうつる日影の紅を秋になしてや又時雨らん
ふり過て後も軒はの松風にしはし音あるむら時雨哉
のかれえぬ世にのみふりて村時雨山めくりせぬ我そつれなき
袖にうき夜寒の嵐なにと又時雨をたにもさそひきぬらん
閨にもる影もしつくもさためなく有明の月に時雨ふるなり
まきのやにたえ／＼音のきこゆるは風さたまらぬ時雨成けり
月の行そなたの里のうき雲は誰かうらみある時雨成らん
れ覺うき我袖のみの時〔雨脱歟〕かと思へはよそもかきくもりけり
過やすき時雨の跡の冬草はをく露たにもみる程そなき

落葉

紅葉散あとは青葉に又みえて殘り果たる嶺の常盤木
みねふかき梢はそこともみえわかて雲間の風にちる紅葉哉
ちりちらすみえこそわかれ奥山の岩ねにかゝる蔦のもみち葉
風渡る立枝やはやく散ぬらんみし色もなきはしのもみち葉
枝かはす松に積れるもみち葉は風もなか／＼はらひかぬらし
露霜のそめをくれたる木の葉をも嵐の風や殘さゝる覽
山影の鳥のねくらもあらはにて夕風寒く木の葉ちるなり

山かつのかきねの冬木風立て軒の葉こしに紅葉散なり
うすくこく散る紅葉はな吹しきて風に色ある庭の冬草
もみちはの色こき名のみ龍田山さてもかひなき嵐ふくなり

霜

袖のうへに置かすはしらしふる年も空にはみえぬ今朝の初霜
さえあかす風に木葉を吹たてゝ空に亂るゝ霜をみる哉
隙もなく嵐にさやく篠のはもこほれる霜ははらひかぬらし
間の上によるなく霜のふかさをも日影に落る響にそしる
いまも猶いねかてなれやま萩原下葉のこらす霜の降ころ

寒草

をく霜をはらふとみれはをのつからなひきてかるゝ風の下荻
日露にみしあさかほの花かつらかけても霜の色をまたぬや
冬かれのつらき思ひもみえてけりお花かもとの霜の下草
まのとうらや入江のお花浪こえて霜纖れとも冬枯にけり
駿のをお草のまかきとたのみつる隔てもみえす冬かれにけり

寒蘆

よそにたに今はそれともみしま江の芦の枯葉や殘らさるらん
風さむみかれてこほれるみきひえは芦の枯葉も光増りけり
冬かれの後や中〳〵難波人ほさてとやすく芦火たくらん

氷

降る雪の花のかゝみやくもるらん氷にとつる庭の池水
たえすくむ板井の水も霙ぬれはいつの人まに氷とつらん
雪ふかき山の影さへ山の井にうつる氷やあさくみゆらん
大井川汀はるかに氷ゐていかたの道やせはくみゆらん
よし野川うちいてん浪の初花も猶待とおに氷る比かな

冬月

木葉吹嵐とゝもにさそはれて深山さやかに出る月かけ
いかはかり月のかつらに置く霜も猶ふかき夜とさえ増るらん
降り初る雪かと見れは山のはに光さえたる月そいてぬる
雲こほる山は雪けの夕風にむすほゝれてや月も出らん
夜もすから寒わひぬとや月もせ日影を待て有明の空

千鳥

いく瀬もひかたのさ夜千鳥いつへの草の跡たるらん
さよ千鳥なのか網のかたしきにふきすさ浦士の袖のうら波
なくそいまに見ふ千鳥しほくらへの浦士の藻鹽火
空にのみ聲はさわきて夕潮の入江る磯に千鳥なくなり
慣てもこぬよの友はおほよとの松をつらしとなく千鳥哉

水鳥

名にたてる鴨の河原の水鳥はつかひはなれぬあふせなるらし
池水に友ねのをしの立やらて夜寒かたらふ聲そきこゆる

網代

河上に山かせ吹は網代木にまたぬ落葉やかりてせくらん

ひをならてよるを待らん橋姫も心やおなし宇治の網代木

霰

露よりももろくはみれと篠のはに消るはをそき玉霰かな
かれのこるお花か袖のせはけれはつゝみもあへぬ玉霰散
貝ひろふいせほの海士の袖の上に玉をそへてや霰ふるらん
袖の上にきよき霰か霙か叉衣にかゝる玉とあさむく
霜はきえ雪けはいまたみえぬまに空かきくもり霰降るなり

雪

霜とのみまかふはかりのうす雪は降れとも人の跡もまたれす
風さゆる雲間はかりにふり初て空にや雪も友を待らん
くち殘る紅葉のふるは吹ませて風に色ある雪そちりくる
うつもれぬ月のかつらに風寒て光をかはすみれの白ゆき
いかはかり積るとたにもしら雪のふゝきにくもる嶺の遠かた
ふみ分てとふ人あれな我宿もつもるはおなし庭のしら雪
つもれとも音せぬ雪に音たてゝ月影におつる軒の玉水
さ夜ふけて閨もる月のくもるかと思ふは雪のうつむ成けり
朝あらしの吹まく雲をもいかれてしはしや雪もとゝこほる覽
風寒て空にかたふく月影のいてつる山は雪のありあけ
雲きそふ嶺の末をいつくそと問へは外山の嶺のしら雪
都にてまつみえ初るはつ雪はひらの高根のよそめ成けり
今朝はまた關のこなたの跡もなし雪を戸さしの相坂の山
かつらきや高根の雲のはれやらてよそにも雪の深さをそしる
降初しほとは淺茅の冬かれもみえしやたのゝ雪そつもれる
つもれ猶雪をも花とみよし野の春待ほとのなくさめにせん
富士のねの雪も煙もいつよりか神たにけたぬならひ成らん
ふしのねに雪間ありとはみゆ物をいつくより立煙なるらん
つもるともわきてはみえし降り初し時をも知らぬ富士の白雪
降る雪に年ふる松の下おれやつゐに朽木の杣とならまし
朝日影さすや籬邊の篠のはに積る雪間の露もみえけり
木の下の露は氷てふる雪にみかさやおもき宮城のゝはら
ありて行流れもほそし水無川（詞脱歟）みきは氷て雪のつもれる
かひかねを根こえ山越ゆく雲も雪にはれたる明ほのゝ空
もしほくむ道もとたえて降る雪のつもるや須磨の恨成らん

神樂

かしこしなゆふしてかけし榊葉をうたふ神樂の色もかはらて

佛名

三世かけてとなふる御名もよそならす身を離たる佛なけれは

早梅

春はまたをそく立枝に咲てけり思ひの外の梅のはつ花

歲暮

つかへつゝ行としなみも明たゝは春にそこえん關のふち川
積り行日數はいつもかはらぬにこの比いかて年のくるらむ

おとろかぬ老の習ひに年暮てやすくや春にあはむとすらん
かくしつゝ暮行年の来つゐに我思ふ君の千代をまたなん
君かためあすの春をも待あへすけふよりいはふ年の暮哉
今よりや年はいくとせ暮ぬとも老せぬためし君に初めん
友とみる窓の呉竹軒の松かはらぬ色も年そくれゆく
降雪は山と見えたるまかきにもよるとて年のこえさらめやは
仙人もかそまはあへしおのゝえのくち行年のくるゝ日かけを
猶へきあすの外山の面影を雪けにみせて暮る年かは

戀二百首

初戀

戀といへは苦しきみちのやちまたに思ひたてとは誰数へけん
落そむる涙の瀧の水上をほかに尋ぬ袖とこそなれ
いかゝせんよそにしられぬ初音より身か鶯の泪もろさを
大かたの世のうき時の泪にはあらぬたもとよなにゝぬる覽
うきて行心つからの舟出してこかれはつへき身をいかゝせん
人戀るならひはよそに聞しかと我身のものと思ひやはせし
もえ出てきた初夢のほとなきにさのみは露の結はすもかな
戀衣たちぬふ業もしらさりし身になれよとは誰かいひけん
おもひたつよるの心のかよひなは人もならはぬ夢やみゆらん
染あへぬ袖の泪の初しほはさすかに人もおもひとかめし

忍戀

忍山しのひはてすは我そまつあさき心のおくもしられむ
泪川人のうきせのまさりせは絶てもかけし袖のしからみ
しはしこそ心つよくはつゝむとも年月へてや思ひよはらむ
人しれぬ契りや遂に顯れんなき名をたにもいひたつるよに
雲かくれ空行鴈のなく／＼もつたへそかぬる露の玉つさ
わか憂に人の名をさへもらさしとつゝむ泪そやるかたもなき
しらすなよ歎きそたえぬ山ひこのこたへするまて人はとふ共
人しれぬ涙そ添てみるもうししのふか露の亂れやすさを
あやにくにつゝめは落そ我泪せかてやしはし身をこゝろみん
紅の色にやいてん泪川いまこそ袖の下くゝるとも
色に出て吹なつたへそ松の風軒の時雨は音にたつとも
あた波をたてしとはかり思ひ川いつを逢ふせの限ともなし
よしさらは色にやいてん世中に戀する人もなき習ひかは
とはゝやないかなる人か泪をも心のまゝにせきとゝむらん
たのますよくちなし染の袖とてもいかて泪のもれぬ物かは

不逢戀

あふ事のやすかりぬへき身なりせは中々人や遠さかりなん
そのまゝにあくれはとてもなけかれす夜の契りの頼なき身は
おひみすはなに中々に玉の緒のいともくるしき身を残すらん
いひかはすとのはたにもかはらすは逢を限の頼みとやせん
つれもなき人の心の限をは知らぬ程こそ恨わひしき

身のほとを思ひしれとてぬれなくは何をか頼む契ともみん
憂身ゆへあはぬつらさの限をは思ひしれとも知るかひそなき
かくはかり身をもはなれぬ面影や誰かへたて行契なるらん
逢事もよしやいそかし下ひものとけて憂身の程を知られは
かれてより契はあさのかた糸をあふへき中と何たのみけん
憂泪雨とふる夜も契らねはさはるかとたにえこそとはれね
あくかるゝ我玉緒のよる〳〵は行衛もしらぬ身の思ひかな
憂事のむくひは戀にかきらしをなと身をせむる人のつらさを
逢みては猶したふへき身の程をしれとや人のつれなかるらん
しらせはや又ともいはて命をは逢一夜にもかへつへき身を

見戀

誰ゆへと思ひなさてや人もみんむかへはおつる袖のなみたを
かくとしれ誰しら雲のたえ間よりほのみし花の色にめ〔みイ〕つとは
かひなしや飽まて花をみても猶しつえ計もおらぬなけきは
一方に心をうつす花かたみめならぬ人もめをや立らん
折々のめかれはすともくろとあくとたへぬ人まに逢よしも哉

聞戀

身にしめてきかすは何かつらからん憂人傳の荻の上かせ
契あらはいつをまつ風いたつらにかきなす琴の音はかりして
あたなりやあたちの原の風の音に聞をましはゝまかふ心を
大かたの浮世かたりに聞なせと忘ぬ物を人のことの葉
みるめかるたよりあやかてしるへせよ聞すてかたき磯の松風

祈戀

戀にうき心をたにもすゝきなはみそきこすとも加茂の河浪
したふ身をいとはゝ人もみそきせし我も戀〔云歟〕せはやめんとそ思
我たのむ御杖をしらは三輪の山とふらひきませ戀もふむやと
初瀬川逢せをまたぬみそきせん戀にしつめる身をやすくふと
逢事を祈らは神もゆるすやとたのむ心そいやはかなる

契戀

偽のある世と知るもかひそなきたゝひたすらにたのむ契は
うたかひて猶こそまさめさりともと身をは頼まぬ契なれとも
忘れしといふことの葉のうつろはゝ思初めてしかひやなからん
たのむるを猶もいかにと疑ふや心つからのつらさなるらん
あすしらぬ身ともしらてや行末をまてとは人の頼めおくらん
玉章に露の契を猶こめてわするなとのみおとろかす哉
露のまにうけし契の淺茅原あたにそたのむ人のことの葉
頼めてしその夜とならはふけぬまに驚かしてや待と知らせん
忘れしといひしに身をもなくさまて何をうたかふ心なるらん
かはるなよ我玉の緒の一すちになかき世かけてたのむ契を

待戀

とふ方の又あり〔も歟〕てや我のみと契りし中に猶またるらん
待ふくろかたをはなきてとはぬまに懸て別を思ふはかなさ

明やすき一夜をたにも待ふけてとはゝ別のほとやなからん
ふけ過てとはゝ中々うかるへき契をあすの夜とやたのまん
偽としるみなりせは今宵たゝまたてや人を待てうらみん
いつはりをかさぬる中の綠衣今宵も又や袖のかたしき
いく度か待夜ふけてはおきもせすねもせぬ床の塵はらふらん
かねの音のきこゆる空を詠めても待夜ふけぬと誰につけまし
おとろかすたよりもなくて深る夜にこぬ人さそへ軒の松風
まきの戸をまことにたゝく人の來て閨へ入まも待そ久しき

遇戀

あはゝまつうかりしよをいふへきに心そまかふ夜半の手枕
つれなさの憂をかこたは今宵さへあはぬ數にや數へなさまし
むつとも過し恨もいひませて逢ふ嬉しさにうきをそへつゝ
こしかたのうさをはいかて行末をたのむ計の夜半のむつと
逢とみし夢にならひて今宵さへうつゝともなき新まくら哉

別戀（之歟）

したひこぬ涙の露のあたし身をすてゝは人のなといそく覽
面影をうきなくさめに殘すそと聞はやせめて村雲の空
あかすみる新手枕の面影もたち別行身をいかゝせん
明行はあらはれぬへき別路を送らてとまる身こそつらけれ
あけぬとておき出ぬへき槇の戸を（も脱歟）猶さしこめてしたひ侘つゝ
なくさめに又よといひて歸るをこたへすひまもなき泪哉

かきくらししたふ泪の雨にしもさはらて人のなと歸るらん
待わひし宵のまはかり憂物はなしと思ふにきぬ〱の空
引とむる人のたもとも我袖もわかぬ泪にしたひ侘つゝ
まてしはしとはかりいひて明行もしらぬ別に程そへにける

顯戀

袖せはき泪のちりのまかひにも身を忘れてや色に出けん
たかうきにいひなすひまもなき物は我泪より立名なりけり
こかくれに結ひし露の玉札を誰をのはにちらしそめけむ
つゝみこし名はあらはれぬかくてこそ中々絕ぬ世々を契らめ
偽の世のならはしにいひたつる我うき名をは人なとかめそ

曉戀

思ひねの夢の契のさめ行を別になして鳥や鳴らむ
年をへてつれなき人も思ひしれ思ひある身のつらきね覺を
浮人の面影なから有明をやとす袖さへほすひまそなき
獨ねの曉おきの袖の露戀せぬ身にもつらからぬかは
明ゆかはわするゝひまもありぬへしね覺や戀の限なるらん

朝戀

もろともにねての朝けの霜たには暮まつ程はきえかへる身と
君やこし我やとたにもたとられす夢の契の明ほのゝ空
一夜こそさはりありとも此暮をたのむる今朝の音つれもかな
手枕もふれぬ契のあたれかみ獨亂れて物そ嬉しき

獨れのよるの涙にくちふれはなくとしもなき袖の朝露

夕戀

へたて行しるへもつらき詠哉雲のはたてのよその夕くれ

夕ま暮物や思ふと人とはゝ月まちかれてわふとこたへん

いたつらに聞こそわふれまてとしも頼めぬ暮の入合の鐘

我身より立とやみえん夕煙なかめわびぬる下の思ひに

さりともと頼をかけてゆふけ問ふうらにも又や恨そへまし

夜戀

夢にたに逢とはみえぬ契哉思ひねならぬ夜半はなけれと

待ふくる夜半の思ひも燈火も殘る限は身をこかしつゝ

きかしたゝ詠めもやらし鐘の聲月にも人をまつ夜更なは

夢みまつよるの衣もかへされすさなからくつる袖の涙に

かこつそよたのめぬ夜半の槇の戸をたゝくはかりの軒の松風

遠戀

戀侘てさかひはるかに思ふこそ坂こえぬ身も苦しかりけれ

またしたゝ雁の使のとつても身を秋風につけてとひこは

近戀

えそとはぬたゝ一重なるあし垣も心の通ふひまを知られは

いかゝせん軒端ならふる中にしもあひやとりする契なき身を

尋戀

遐めつる宿かとゝへはさもあらてあらぬ道をや人のゆふへし

迷ひつるしるしをたとる杉の門いつかさたかに三輪の山もと

いかにしてかこちもやらん此まゝに尋あふへき契ならすは

旅戀

おもひをく人に心は立かへりゆきもやられぬたひの道かな

久かたの古郷人も戀しきに猶思ある野邊のかりふし

ことゝへよいなはの山の松の風へたつる中にかへりあふまて

忘れしと思をくらは草枕なとかあひみる夢もなからん

面影のわするゝひまもなみ枕吹なへたてそおきつしほ風

僞戀

かならすといひしは夢かうつゝともわかて明行ひとりねの床

たのめつゝむなしき空の横雲をよその別とみるそ悲しき

何をかはせめて我身の僞になしてつらきを思ひしらせん

僞もうき中にこそある物を世のならひとは誰かいひけん

さのみしも何かうらみん僞のある世の中をしらぬ我かは

誓戀

ちかはすは何に頼みをかくらくの初せの檜原なひきたにせん

あさからぬ契も今はみたらしのかはらしといふ人の誓ひに

厭戀

しろらめやいとふ心の苦しきも此世なからのむくひなりとは

心にもまかせぬうさやこれならん厭ふにつけて慕はるゝとは

人心あれ行駒もすさめすはよしかれはてよ森の下くさ

増戀

面影にむかふ思のますかゝみくもろ泪もへたつゝはなし

知らさりきかりそめ成しあたとの葉に置く露も色そへんとは

誰ゆへにかすむとまてはみし月のくもり果ぬる泪なるらん

變戀

たかいひしをのはとてか露のまに又うつり行色をみすらむ

歎そようき瀬にかはる水無瀬川しらて契りし心あさゝを

憂に又かへるそつらきまくす原かれても秋の色はみしかと

隱戀

袖をたにそれとはまかせよ空蝉のは山陰に心まよふ身を

なひくとはよしみえすとも女郎花あかぬ姿を霧なへたてそ

稀戀

待ともたえて過にし年月を何につけてか思ひはてけん

忘れしといひし契を僞になさぬはかりの年もへにけり

ほしあへにあらぬ契も泪川としのわたりを猶たのめとや

獨ねの我しきたへの床ふりてつもれる塵を又やはらはん

逢みてしその年月の遠けれは新手枕といひやなさまし

遇不會戀

形見とて人はのこさぬうつり香を我身にとめて待かひもなし

契あれはしはしはかりの夜かれかと思ひし程そ身をも恨し

來まてといひしはかりを恨しははかなかりける身の契かな

袖ふれしお花か露の契たに何ゆへ又もあはつ野のはら

くやしくも又あひみんと頼みけるうき身の程も知らぬ契に

幾度もおとろかしてや心みん忘れしとこそ契りをきしを

おはさりしそのまゝならは玉の緒のたえて二たひ物は思はし

かはらしとなくさめをきしことの葉は猶なからへて物思へとや

ありし夜の夢の契をしるへにて又とやみると憑はかなさ

ほともなく人こそ變れかはらしと契りし我はもとの身にして

久戀

よそにきく世語ならは永らへて慕ふ我身をうしとやはみぬ

慕ふみも人の心のつれなさも同しつらさに年そへにける

逢[illegible]け涙と霜とにかはるまてむかふ鏡のかけそふり行く

しらせはや思ひ初てもみつかきの見つとは人にいはぬ久しき

契りてしその言の葉もふりはてゝ泪の色の殘るつれなさ

忘戀

とてもかく遠さかりなは身の程のうきをも友に思ひはてれは

身をはとふ人のためにも忘草種（脫字歟）とそみちを我に教へよ

忘れしといひてわするゝ契こそいつはりのかすをそへけれ

契りしをまとに人も忘れなは何につけてかおとろかさまし

今更におもひはつとも何かせん立歸へきちきりならすは

恨戀

よもしらしよさのふけゐの恨み侘ひ一方ならす袖ぬらすとは

いはぬより袖にき〔さき歟〕きたつ涙こそ心にあまる恨なりけれ
露の身の恨はこれを限そとしらせてたにも思ひきえはや
一かたに怨むとはかり思ふなよ我身のとかもくゆる泪を
海士のすむ関は千さとにあまるとも我恨にや〔ホンマヽ〕をかはさらまし
いかゝせん難波の海士のぬれ衣袖のひかたもしらぬ恨を
玉章に書つくしてもあまりある恨のかすをいかて知らせん
とのはを残すとすれとまくす原たまらぬ露に秋風そふく
とはりと思ふはかりに恨てもしらす我身のとかにやある覧
かへりみよ葛のうら葉のうらとけて思ふあまりの露の茂さを
さのみなと憂をも知らすかこつそとかへりて身をや人の恨を
厭ふこそことはりなれと思ひしる身にも泪はとまらさりけり
身をこかすもしほの煙もえ侘てたえぬ恨や空にみゆらし
かこちやる人もうしとや歎らん我なみたには色かはるとも
憂人の袖にもくもれわか涙たえぬ恨の夜半の月かけ

絶戀

かけもみぬ〔玉響〕此まゝさてや山城の井手の里人むすひたえなむ
かこたしにしたはしとたにいひやりて絶ぬる中を驚かさはや
それとみしかたみの水はみ草ゐて結はぬ霜や袖のぬるらん
夢にたにつらき気色のみえつるはいとゝ現に遠さかれとや
夢にてもみゆとしきかはせめて猶殘る契のあるになしてん
戀ゆへの泪ならねは袖をたにほさてやせめてかたみともみん
憂人にかくとはしられ書たえて後もつれなくあられける身を
きえやらてめくりもあはゝ水の淡のうたかた人を猶や慕はん
よそにても暫しはみえし雨雲の跡をいつくとゝふかたもなし
身をうらの風の便もしら波のあはにそまかふ海士の捨舟
人心さためなきをは還にて絶はてぬとも又やとはまし
きぬ〳〵にかこちし鳥の跡たにも通ひ絶ぬるねこそなかるれ
関もりの隙をもとめし跡もなしたゝ我のみの夢のかよひ路
待にきゝしたふにつけて厭ひしも今はよそなる鐘の聲かな
なからへてありと計は知らせはや憂につけても思ひ出やと

雜二百首

天象

くもりなく世を照すへき光にやあまつ社も空をしめけん
雲の上は猶いやましにてちしきてかはらぬ〔ホンマヽ〕日の御影かな
万代の秋をかされて契りをは空行月も君かひかりも
君かためほしの位も數々におなし雲ゐをてらすとそみる
晴くもり時にしたかふ雨にこそ民のねかひも空にみつらめ
波風のおさまる世には天川そのみな上もやすくさはめん
雲はらふ風の染をく色なれやきよくみえたる空の緑は
霰ふる天津乙女か袖さえてひろはぬ玉や風にちるらん
風寒て雲たにみえぬ大空は何に結ひて霜のみつらん
はらへとも消せぬ雪をいたゝきて空にしられぬ身そ降にける

地儀

幾千代そ天のみほこのしほよりいや（脱字歟）かたまれる大和島根は
わたの原四方をかけたる波の上ものとかなる世そ浦安の國
いまそ又大内山とあふきみんむかしにかへる花のみやこを
誰か今出わけ衣きよ瀧やさらせる糸をたてぬきにして
ふしみ山松吹おろす音なからふもとのいなは風渡るなり
年をへて猶あふ坂の旅人もたえすや關のこなたかなたに
橋姫の誰まつ袖にかよふらん夕へさびしき宇治の川風
霧隔てたれ程としもみつくきの岡のやかたはあれやはてけん
大井川山影となきみな上をくたすいかたや暮ていつらん
春秋の跡につけても小山田のかりの庵た（は歟）てむすひかふらん

名所

なしほ山御幸ふりにしいにしへも忘ぬ神や君をまつらん
舟とむる大江の岸も絡はゝいこまの山はいつくともなし
誰かけにたえても須磨の浦風に波こす海士のとまやはかりけ
難波人うえすかりほす芦の葉やなたの鹽やの鹽に成らん
松に聞よさのうら風音ふけて月も夜渡るあまの橋立
一木はもよそにはみえす枝茂く情さかゆる志賀のうら松
いまはたゝかきもあつめしいたつらに我身生田の森のとの葉
宮木引みをの杣人とよむなり萬代よはふ聲ときくまて
清見かた關もる人も船人も臨みつほとやみえまかふ覧
浦風に雲さへ遠くなるみかたしほせはるかにすめる月哉
心ありて月によこなる雲なくはさやかにみせよさやの中山
秋草の花に分入武藏野も末まてゆかは霜やむすはん
宮木のは一もとならぬ木のしたに露をよきたる道やなからん
都にはかよはぬ鳥の隅田川名にしのひてもかひやなからむ
あふ人のあらはとゝはんうつの山蔦のかれ葉の跡はあれとも
都よりいくかをへてか富士のねのよそめ計もそれと詠めむ
つもりけゝ月日のほとも白川の關とおとろく秋風そふく
都思ふ心のおくもそのはにえやはかきやるつほのいしふみ
なひ風に煙なしくる鹽竈の浦こく船はさたかにもなし
古郷を忍ふの里のたひ衣一夜の袖ゝ露こみたるゝ

山家

後は又いかにせよとて山里にすむよりやかて淋しかるらむ
そのまゝに御法の道を求めすは住ともゝ山のかひやなからん
軒の松そともゝ檜原淋しさもときは成ける風の音かな
春は花秋は紅葉のあらしそと思ひなくさむ山の奥かな
とふ人のあれは心のさはく身に誰をかまたん山影のいほ
山風のたゝくはかりの柴の戸はあけ暮人を待としもなし
古寺のかねの聲さへ遠けれはたよりうれしき山の奥かな
庵ちかく結ふもきよき山の井のあかぬ住かに年はへぬへし
住人のもとゝありける山里を只我のみとおもひつるかな

こゝも又人の家ゐのかすそはゝ猶山ふかくすみやかへまし
つま木とる道もたとらて今はゝや住なれにける山の奥哉
山里は垣ねのましは色つきておりノ＼鹿の聲そ聞ゆる
秋はけにかゝらぬ里も淋しきにうす霧立て山風そ吹く
住人も心よはくはみえなまし夕暮ことのあきの山かせ
さそふ人あらは心やうかれなん山かせすこき秋の夕くれ
風わたる軒はの山につたひきて猶淋しさもましら鳴也
庵とて何かむすはん木々のもと岩ねの上にすむ身成せは
何かうき變化をすてゝうき事もきこえぬ山のおくの山里
山ふかき松の木かけに住なれて心もちらす年もへぬへし
いつよりの友と成てかくるとあくとめかれぬ松の影に住らん

田家

小山田の墻生のこやのこもすたれこれも幾秋かけて住らん
秋の田のかりそめなから年ふれはわらやの軒も苔むしてけり
もりあかす門出のいなは今はとてなるこの綱も引たゆむ也
をのつから門田のよそに鳴鹿の聲きく時やなるこ引らん
庵むすふ田面の稻葉かりてこそかすあらはなれあせのほそ庵（實歟）
秋ふかき山田のなしれかり過てまとをにみゆる賤か庵哉
水氣さへともにおちほをひろひても殘るかりたの庵そ淋しき
もろ人も杉のはふける庵こそふるのわさ田のしるし成けり（れ歟）
もりすては小田の庵もあれぬへし猶住なれよ秋過ぬとも

小山田のあしのまろやの夕煙立空までもみるそさひしき

草

氷とくいさゝを川にいつしかとすゝくれせりも淸くみえつる
寒かへる霜にさはらぬさわらひは下にやかれて春を知るらん
里人の友と成てやさほ姫も霞の袖にすみれつむらん
ほに出ぬしるしはかりは荻の葉の風は夏なき聲のきこゆる
けふ過は心もひかしあやめ草よとの里人ひきうつるとを
幾秋を古枝のまま萩かくてしもかはらぬ色に花のさくらん
女郎花下葉をかけておく露は誰ゆへつゝむなみた成らん
秋風にあへす折ふす花（比歟）すゝきたかかた數の袖とかはみん
つれなさもしはしつみえんあさかほの花にやとるか有明の月
濵風の吹上にみするもしほ草これもや菊の香に匂ふ覽

木

さく梅の色はたくひもありなましいつ（マヽ）れの花かかくは匂はむ
たをやめのかさしの露の玉柳みたれはてぬ春風そ吹く
吹わけよ遠山かけてさく花も八重たつ雲のおくの春風
しけりあふ遠山もとの木間より何そとみえて櫻咲くなり
との葉もむかしの風にかへるやと賴むかひなき軒の立花
染さりし程は立枝もみえわかて今あらはるゝはしのもみち葉
露時雨まなく染れははゝそ原さすかにうすき色もそひけり
村雨の音にもたてゝ秋ふかくならのはかしは色つきにけり

花ならぬかさしは色もなき物を誰おりそめしひはら成らん
霜雪のつもるを冬の花とみて松にもしばし風やいとはん

鳥

松か枝にきゐるもしろし十かへりの花に鳴へき鶯のこゑ
さひしさにたえすや友をよふこ鳥花さかぬまの春の山影
春草の露につはさをほしかれてあかる雲雀や日影待らん
郭公こなたかなたの人傳はきゝふるしても猶そまたるゝ
いかにうきむくひありてかしまつ鳥もゆる篝につれて行らん
いかなれは空飛鴈の羽かせにもちらさて結ふ露の玉つさ
鳴のたつ行衛をみれは友もなしさこそさはへも淋しかるらめ
打むれて行衛はあまたな千鳥を浦とてもさひしからめや
はや近くなれぬる鳥の聲をたに暁ことに待ぬ夜もなし
和歌の浦ゝつるの毛衣われにかせ霜にもくちぬ袖とたのまん

獸

身にしめて國とはしるや春日のゝ木のした懸さをしかの聲
幾年か程ふる山のかひありておのかよはひもましら鳴らむ
うす霧の立野の秋の百草におきふす駒も花にめつらし
月みてもおしと思ふ夜を徒になとかふすゐの原はしらん［マヽ］夜獸
山かつの宿もるいぬの聲にたにのとかなる世は人もとかめす

雜物

春秋のさかひもしらぬ苔衣おなし色とて年もへにけり

老は猶ますみの鏡みるたひにいつ過とのみおとろかれつゝ
誰かにはつけの枕のふるき世をみる夢とても人ししられは［本ノ］
海士人のよをうみわたるしわさともしらてやまかふ沖の釣船
山風になひく柚木も引かへて筏となれは波にうくなり
年月のめくるそはやき小車のかけもはなれぬ世につかふとて
暮ゝ開明ておとろくかねの聲かくてもさめぬ夢の世そうき
賤のめかたえぬてひきのいとなみも積れは年のをとや成らん
秋も猶あたにはをかし照月にたとへていひしれやの弓を
かくはかりおさまる代にはあつさ弓引手を人と忘はつらし

旅

都より遠さかり行山路にはおなし宿とふ友たにもなし
露にたにやれてしほるゝ旅衣まして船路の波の行すゑ
里の名をとはてはえこそ過つられそなたに旅の慰にして
とまるへき里をいつくとしらぬまは急く中にもいそかれぬ哉
野邊の露山路のをとろさま／＼に袖やはからぬ旅衣かな
草枕ふしうき夜半の明方を嬉しくつくる鳥の聲哉
暮かゝる日のくま川の瀬をはやみ駒もとゝめすいそく旅人
くれは又よしや渡らしさらてたにあやうかるへき嶺のかけ橋
むれてくる霧のあなたの旅人をよきよとよはふ山のかけ橋
宿とはんとまりちかつく里なれやもりのあなたに煙立みゆ
やとるへき伏屋をさしていそけとも猶その原のみちそ暮行

時しもあれ花さく秋の野邊に來て結ふもおしき草枕かな
風さや、露さへ散て枕にもむすひかれたるまのゝかや原
旅人のさきたつ舟をよするまも待にわたりの日こそ暮ぬれ
身ひとつにいそくとすれは渡守友まつ舟を出しかれつゝ
松かれを枕とたのむ浦つたひなみと風とにあかしくらしつ
古郷にをよはぬ夢の關守や波のうゝれのとまのうら風
關こえて都にかへゑ夢路さへやすむまもなきあしからの山
夜をこめて何かいそかん有明の月に友なふ山路ならすは
いそけとも駒をならふる程もなしたゝ一すちの山の下道

述懷

君を祈る心はかりは人よりもわきてと思ふ身こそふりぬれ
敷島の道に入たつ身成ぜはさすかに世々の跡もまかはし
身はかくてふりはてぬとも君も世に行末遐道したえすは
梓弓引人なみの數にたにいりてつかへし身とはしらすや
君のため命をたにもすつへきにつかふる道に身をは惜まし
君にのみなれゆく道の惠あらは惜からぬ身も惜まれぬへし
君ならて哀をかけん人もあらし波にたゝよふわかの浦舟
年のをのなかけれはこそ片糸を彼方此方にかけてつかふれ
暫しとも人のとむへき身ならぬを何にさはりて捨ぬうき世そ
世にふるをくろしと何か思ふへき思ひすつれはやすき此身を

懷舊

憂にこそ代々をもしのへいにしへを忘るはかりの思出もかな
年月をあまりにふれは夢にさへ歸りかれたる身のむかし哉
いはゝ又かきりもあらしかすくに思ひつゝくる代々の昔を
神も又さこそ昔をしのふらめいまもたゝしき道はあれとも
なへて今ふるきにかへる御世なから身の昔こそ猶へたてけれ
へたて行年にそへても忘れはて猶忍はるゝ身の昔かな
獨我昔をしのふ涙をは何をおもふと人のみるらん
さのみなと過にし方を忍ふらん我身ひとつの昔ならぬに
過行は近きにとてもかへらぬに何かは忍ふいにしへの夢
まなひてもをよはぬ道をいにしへにかけてそ忍ふ和歌の浦波

夢

おきふしのかはるはかりに夢といひ現となして幾世過けん
やかてさめ遲くおとろく夢の中此世のほとにかはりやはする
まよひある闇のうつゝの空よりも夢路さやけき月をこそみめ
六十年あまり過こし方の夢とみついつ驚かん我身とはしる
おとろかぬ我身をなきて夢の世といふも中々をろかならすや
さめぬまの心まよひはいかならん昨日の夢もけふの現も
古も夢路まさしきためしあれはたゝはかなしと思ひ捨めや

眺望

浪のうへの遠の山本にみえわかて朝日にいつるあけのそほ船
淡路島こきくる舟は住吉の松吹風やむかはさるらん

たこの浦に打出るより富士のねの雪と浪とはへたてさりけり

神祇

いすゝ川なかれ久しき水垣の内外をかけて世を守らまし
やはた山のほるも高きいはたゝみ千世をかされて君を祈らん
幾千世も都に近き(ホノマヽ)神山は君に心をへたてさるらし
枝しけき吉野の松のとのはやたてし使の初めなりけり
幾代とかいなりの山もよはふらん松の梢は風もならさて
春の日とあかむる山のかひあらは光にもれぬ身をてらさはや
大原やをしほの山の神垣に千世のかけある松はいく木そ
いにしへのよし田の里の杖も今君にちかつく神やゆくらん
住吉の松も我身も年をへてあふくかひある道をしらせは
君まもる七の社のみしめ縄八千世をかけて猶そいのらん
きゝわたる鋲川上を白川の神の園生とみるそかしこき
霜をへて結ひし神のそのはくちせぬ竹の千代も限らし
八千年を過ての後そ老松のいとゝ名たかき程もしられん
千々のかすはや二度の手向草一よの松もかけさらめやは
和歌の浦に跡をたれます玉津島道に光をそへさらめやは

尺敎

久方のをしへの外につたへけん御法の道もしる人そしる
何をかは佛とあかめ身となさんさとりの外に二なければ
あひかたき人の身まではめくりきぬ今は上なき道を求む
いかにして法のちからの殘る世に我身を捨て人をたすけむ
我人を宗(本ノ)はへる心より佛をさへや外にたつれむ

祝

すむといひにころといひて天地をさためし神の末そ久しき
あまつ空照日の光月の影くもらぬ御代はいつく萬代
松に咲花の都は十かへりを千たひかされん程もかはらし
千代といひ萬代ときく鶴龜も君のよはひにをよひやはせん
君まもる神をは命もいとゝしくかしこみてこそ世を治めけれ
四の海なみおさまれる此國を人のくにゝもためしにや引
あつめてもつきせし物と住吉の神のしめゆふ松のことの葉
末とをく今も仰のくたれるは神わさしけき世のまつりこと
山深みかけの朽木のはしまても絕たるをつく御代そかしこき
神とあかめ佛といふて(も歟)おなしよにみえみ見えすみ君守らし
君か代を幾世かへしと行末にとふへき人も限やはある
あらはれし出雲八雲のそのかみに猶立こえて道(川歟)そさかへむ
かしこしな君ゆへ神の心さしふかく染たるあその玉かき
いにしへに又吹かへす御世なりやその家々の風をつたへて
かはらしな都の山をはしめにていつくもよはふ萬代の聲

右一冊北畠羽林可令一覽旨示給畢。此千首無所持間。暫時可借給歟之由申處。明朝可返旨也。則午刻笛(筆歟)を始。夜半以

前終功。則令獨校畢。珍重無極者也。
元和第六暦仲春下三日　　左近中將雅胤
同廿六日於御番所并校畢。
正保二年閏五月廿三日加一校之。

這本雅胤卿自筆之本。亞槐雅章卿所持之家本申請。命小童
遂書寫。一覽之後加奥書者也。
寛文五暦初秋五日　　源永言判

續群書類從卷第三百七十七

和歌部十二

雅縁卿千首

〔右菅本闕〕

續群書類從卷第三百七十八

和歌部十三

耕雲千首

春二百首

立春朝

霞さへきのふをこそと立そめておくる朝に春そきにける

立春天

立かへる春の道にはせきやなき天の岩戸の明て霞める

立春日

日の光早やこそかすめやとわかす（やふしイ）春は今朝より立にけらしも

立春風

けふははや風ものとかに吹かへて霞まぬさきの春そしらるゝ

立春霞

今朝はまつ春のみと思ふ山の端にをのれもたてる薄霞哉

立春雲

あけそむる空より春の色みえて霞立そふ峯の横雲

立春雪

尋ればやいつくか春の道ならん今朝も跡なき庭の白雪

立春氷

風わたるみきはの氷うちとけて池の心も春をしるらし

立春水

いとはやも春と岩間に音たてゝ氷なかるゝ山川の水

都立春

をさまれる國の都のあさ霞人のこゝろも春や立らん

早春山

いましはや雪けの雲もまきもくの山里ゆるく霞春哉

早春關

音羽山おとにきゝこし春のきて關のこなたそはや霞むなる

早春河
春風にうち出る浪の立田河いつしか花の色そ見え行く
早春湖
すはの海や氷を渡る春風にまつたえそむる浪の通路
早春浦
春をあさみまたさえやまぬ汐風にうすき霞の袖の浦波
野子日三首
しろしらすおなし野原にうちむれて子日になるゝ春の里人
子日松
初春の初子の松のあさみとり引手に千世の色そこもれる
子日祝
ひさしかれよはひを君に春日野の今日の子の日の松のおひ末
山霞
面影もよそには見えぬかゝみ山やまかきくもり霞む春哉
峯霞
名もしるく霞にけりな春の色のあをれか峯のあけほのゝ空
野霞
いなみ野やさらてゝ遠き山本を隔てはてたる春霞哉
關霞
あふさかや霞はかりをへたてにて關の戸さゝぬ御代の春哉
徑霞
山人の友よひかはす聲すなり夕暮かすむ岨のかけ道
橋霞
うちわたすせたの長橋はる〴〵と末はと絶えて立霞哉
江霞
霜かれの冬そ中々みしまえの芦の葉なから霞む春哉
瀧霞
たえ〴〵に瀬々の白糸あらはれて霞そ薄き布引の瀧
河霞
つくはねの峯の梢は見えわかて霞におつるみなの川水
海霞
住吉のおまへのおきをこく船のまほにも見えすたつ霞哉
湖霞
春はそふおのかみとりも見えわかす霞にたてるからさきの松
濱霞
いはしろのはま松かえも霞む日にむすほゝれたる浪の音哉
島霞
難波江をこき出る舟は跡もなし霞のおきの島かくれして
渡霞
興津風はけしきかたはかつはれてゆらの戸渡る朝霞哉
里霞
みちのくのしのふの里の朝ほらけ霞みたれて春風そ吹

舊巣鶯
谷寒み雪の古巣を出やらて春のよそなる鶯の聲
初鶯
梅か枝に去年のやとりをたつぬなりいまた旅なる鶯の聲
雪中鶯
鶯の聲の色こそうつもれね木つたふ梅は雪そかゝれる
曉鶯
ともし火の殘れるまとは明やらて竹のうちなる鶯の聲
朝鶯
今朝のあさけ鶯なきて我宿のそともの木のめ春風そ吹
夕鶯
歸るへき時こやさそふ鶯のねくらの梅の春の夕風
里鶯
春にあふ里はむめつの花の香にさそはれわたる鶯の聲
山家鶯
おのかねに春をはしりつおなしくは都にさそへ谷の鶯
竹鶯
いつしかとねくらにしめて竹のよも我よも春と鶯のなく
寢覺鶯
あかつきの鳥の音きかぬ山里に寢覺もよほす谷の鶯
野若菜五首
きえそむる雪間はかりをふみ分て若菜にかはる野邊の通路
原若菜
出る日のあしたの原も霞むなりけふや里人若菜つまゝし
澤若菜
里遠き野澤の水のふかせりは人こそつまれ年はつめとも
水邊若菜
若なつむ野澤の氷とけそめて朝日にいつる四方の諸人
田若菜
里人も春の心やつくはねのすそはの田井に若菜つむなり
岡殘雪
春のくる道とそみゆる水くきの岡のやかたの雪のむら消
草殘雪
むら〳〵にきえ行雪のふる草ににゐ草ましる春日野の原
木殘雪
春さむみ梢の雪のきえやらて枝にこもれる御吉野の花
餘寒月三首
かすむへき月のかつらのおりしらて猶さえやまぬ夜半の春風
餘寒風
白雪のきえぬかきりは嵐吹谷の下かけ春としもなし
餘寒水
日影さす軒端に風はさゆれとも春とはかりの雪の玉水

梅雪

梅かえは花もさなからうつもれて雪より匂ふ軒の春風

梅風

玉たれのひまもる月はほのかにて梅か香寒き春の夕風

夜梅

月夜にもかすめはみえぬ梅かえをありとしらせて匂ふ春風

故郷梅

すみすてし宿の軒端の梅の花哀いく世も（とイ）誰なかむらん

里梅

此里のかきねつゝきの梅か香にあくかれそめて旅ねしぬへし

庭梅

梅か香にそむる心の色をさへさそひやはせん庭の春風

隣梅

色香をもしらぬ軒はに咲梅はあやなく花の名をやうつさん

隣家梅

なかゝきのひまより匂ふ梅か枝の花の心やわれをへたてぬ

梅移水

にほひをは散ての後やうつさまし梅咲宿の庭の池水

梅薫枕

手枕の袖には梅のかをしめて見るとしもなきうたゝねの夢

梅香

梅の花匂ひを袖にうつしもてさそふ嵐にしらせすもかな

折梅

色も香もしらぬものから諸人の折るかはあやな野邊の梅か枝

若木梅

御園生の梅の若木も咲ぬめり千歳の春を君に契て

紅梅

紅のこそめの梅の花盛かこそ哀といかゝ思はん

梅散

ちれはこそ今はうらむれ梅花にほひしまては風やいとひし

柳露 五首

おく露もまたほしあへぬ朝明に春風よはき庭の青柳

池柳

くちのこる池のつゝみのふし柳かた枝の春は涙にそめつゝ

岸柳

かけうつす川瀬の水のあされかみあらふと見ゆる岸の青柳

門柳

我門の五もと柳いつまてもかはらぬ影になひけとそ思ふ

河柳

みとりそふ川そひ柳うちなひきさはちかすめる春の夕暮

路若草

かけろふのをのゝふるみちたえ〳〵に雪また春ともゆる若草

岡早蕨

春とてやもゆるわらひの折ふしもしらてすくへき岡の家ゐに

樵路早蕨

山人の家つとゝてやたをるらんつま木の路にもゆるさ蕨

山春月

春そなをなくさめかぬる山のはに霞てかゝるおは捨の月

閑春月

さほ姫の空に霞のせきすへて面影こもる春の月哉

江春月

なにはかた霞む入江の春の月みつとはいかて人にかたらん

春曉月

よひのまの霞は空に立きえて明かたさゆる春の月かけ

春月幽

すみわひてよに光なき我身こそかすめる月のたくひ成けれ

朝春雨

くもるとは思ひもわかぬ朝明の空よりやかて春雨そふる

夕春雨

ふるとしも空には見えす若草の露にしらるゝ夕暮の雨

谷春雨

さらぬたに霞もふかき谷の戸にくもりふたかり春雨そふる

野春雨

春雨の色はみとりにあらなくに野邊の草葉をいかて染らん

庵春雨

我庵はまつへき花のなきまゝにさひしさつらき春雨の頃

春駒

おしなへて緑にかへる春の野に草はむ駒や先まさるらん

岡雉

夕日さすむかひの岡に鳴雉の聲より暮るゝ山陰の庵

野雲雀

夕ひはり霞かくれに聲はして日影のとけきあはつのゝ原

路雲雀

みれちかく成にけるかな春日野の薄の路をあかる雲雀は

歸鴈知春十首

今はとて又立歸る春のかり春の色にや物忘れせぬ

曉歸鴈

是もまたうしとそ思ふ有明の月に別て歸る鴈かね

夕歸鴈

深山へや夕の雲に音をそへてをのれも歸る春の鴈かね

夜歸鴈

夢ならて秋よりさきはあひもみし立歸る夜の衣かりかね

歸鴈遠雲

白雲の道ゆきふりの春雨につはさしほれて歸る鴈かね

峯歸鴈

かへるさの越路のみれの八重霞いかてたとらて鴈の行らん

海歸鴈

和田の原霞もいく重立浪のあとなきかたに歸る鴈かれ

歸鴈似字

行鴈の雲路やふかくかすむらんやかてかきけつ水茎のあと

歸鴈幽

それかとはさすかにみえてあま雲のよそに成行春の鴈金

遠歸鴈

そへてやる心いく重の山越てわかるゝかりを猶したふらん

春山五首

春といへはまたく心をしるへにて花に先たつしかの山越

春野

み吉野や玉松か枝の朝みとり花より外に春は見えけり

春關

わきて又春くるかたと東路の關も霞の名にや立らん

春河

同しくは春をとゝめよさくら川花にかけたる瀨々のしからみ

春海

霞ますは春ともしらしわたつ海のかさしの花の時しわかれは

野遊

のとかなるあさちか原の春の日につはなぬくらし四方の諸人

遊絲

風ふけはみとりの空にみたるなり庭の柳の春の糸ゆふ

待花五十首

まつ程の心を花にしられれは我爲いそく一樹たになし

栽花

おなしくは風のさそはぬ種もかなうへてときはに花を詠めん

尋花

尋いろ花の匂ひをさそひきて風そ山路のしほりとはなる

初花

今日櫻咲初めぬらし吉野山みしこともあらぬ雲の色哉

見花

をのつからそむる心も色みえは花もや我をあはれと思はん

翫花

色にそみ匂ひにうつる我心春はさなから花になりつゝ

折花

見ぬ人の爲めとてならは(をイ)山櫻あらぬ(かイ)心を花もたのまし

交花

今いくか春の山邊にましりても花の色にはあかすそあらまし

曉花

花はゝや風にのこらぬ山のはに有明の月の色そつれなき

朝花

今朝はなを染る心やふかゝらん昨日にまさる花のいろ哉

夕花

夜のほとにさそふ嵐のあるやとて夕へはいとゝ花を見る哉

夜花

せめてたゝ花の盛のほとはかりかすまてゝらせ春の夜の月

山花

あらし山千本の櫻たれしあれは吉野の春の色に咲なり

峯花

月のこる峯の木末はあけやらて風にわかるゝ花の横雲

谷花

さそひくる花はいつくの花ならん谷には春もよその春風

岡花

咲花にならひの岡の松か枝も又十めくり（かへりイ）の春やまつらん

杜花

あらし吹木末は春もなくなりてをのれ花さく森の下草

野花

思ひ出よかた野の春のかり衣きつゝなれにし花の下ふし

關花

關守やまつうへなきしあふさかの花にそとまる春の旅人

瀧花

櫻花おちてもたきつ白波のとなせにまさる春の山風

禁中花

雲の上に立そふ雲も九重の御はしの花は今盛りかも

社頭花

神もさそなしほの山のみつかきの久しくみせよ花の盛を

古寺花

はつせ山尾上の花はちりはてゝ嵐に殘る入相の鐘

故郷花

古里の八本の櫻思ひ出よわかみし春はむかしなりけり

里花

あくかるゝ心は春のならひかと花なき里の人にとはゝや

山家花

み吉野の山のかひとそ詠めつるわれとはうへぬ庭の櫻を

庭花

いにしへの春の盛はうつれとも名のみふりぬる宿の花哉

閑居花

み吉野や花みんとてのかくれ家は山のあなたを問までもなし

花雲

いつはりもなかれと思ふ世中になとか櫻の雲とみゆらん

花雪

ちらぬまにたれかはとひし庭の面によし跡たえよ花の白雪

花枝
猶たのめあまれき春のめくみとてまかれる枝も花は咲めり
花梢
白雲は[illegible]はかりのよそめにて木の下ふかき花の雪かな
花根
うつろはて嵐にたくふ櫻花心ならすやれにかへるらん
花本
咲花の一もとゆへに我宿を雲かゝるとやよそに見るらん
花挿頭
あかなくになほもかさゝん櫻花身になつらへる色ならすとも
花手向
神のます森の木末にかけてけり春の手向る花のしらゆふ
花麻
たむけ山あたなる花のおほぬさと名にのみたてゝ春風そ吹
花袂
さほ姫のおほふ霞の袂さへ櫻にそむるおはつせの山
花衣
たゝそめよ野邊の櫻のかり衣春風たゝは花ものこらし
花鏡
池水のかゝみにみゆるかけまてもうつれはかはる花の色哉
花錦
咲花のにしきのぬきの薄霞さそふ嵐にまつみたれつゝ
花匂
白雲にまかひやはせん山櫻花に匂ひのなき世なりせは
花色
み吉野に入てそみつる山櫻浮世の外の花の色をも
花使
咲花のたよりにつけてとはるれは春はうき身の程もしられす
花主
入すまぬみ山の奥に咲花をわれそあるしと春風のふく
花面影
おのつから風のさそはぬ面影もしはしそのころ花の木の本
花形見
花よ今（はイ）わするゝひまもあらし面かたみそつらき峯の白雲
惜花
身にかへて我のみ花をとゝむとも花は我身をおしみしもせし
落花
櫻花ゆくゑもしらす風の上にありか定めぬちりのまかひに
殘花
咲殘る花こそあやな頼まれねちらぬためしの春しなければ
三月三日
百敷やけふのやよひの三日月に影をならふる夜半の灯

桃花
いにしへの春な忘れそ咲もゝの花の下陰みちはなくとも
梨花
櫻あさのおふのうらなし咲ぬめりかたえの花に春を殘して
山田苗代三首
たれかして山田にたてるますらをの苗代水は心きよしな
路苗代
しつのをかあせの細道水こえて苗代小田に春雨そふる
河邊苗代
遠近の苗代小田に引しめのたえすまかする春の川みつ
夕蛙
庭の池の蛙のとこやあれぬらんひしのうき葉にさはく夕風
田蛙
遠近の春の小山田水みちて夕への蛙聲そいとなき
野菫三首
かへるへき家路わすれてもろ人の野邊にや春は菫つむらん
庭菫
昔たれこゝにすみれの花はかり春をのこせる故郷の庭
摘菫
里人のつむやすみれの花形見めならふ色やよそになすらん
松下躑躅
かすみ立おのへの松の下陰に火よりもあかく咲つゝし哉
躑躅紅
岩かれにさけるつゝしの紅をふり出てゝそむる夕暮の雨
池杜若
夏までもちらすは池の杜若春のへたてを又やうらみん
澤杜若
春ふかみ野澤にしけるあしの葉におのれへたゝる杜若哉
欵冬露十二首
ゆく春の別をうしといはれとも露やはをりぬ山吹の花（おかイ）
夕欵冬
ぬしやたれ夕日にさらす欵冬の花色衣色そことなる
路欵冬
折人をうしともいはて道のへのかきねつゝきにさける山吹
池欵冬
かけうつす池のこゝろのうこくまもいれはしらぬ山吹の花（底までもイ）
河欵冬
日にみかき風にみかける玉河のきしの山吹露そこほるゝ
島欵冬
たち花の小島に匂ふ欵冬は誰かいにしへの袖の名殘そ
岸欵冬
吉野河きしの山吹匂はすは花より後の春ものこらし

里款冬

おく露もひかりをそへて玉河の里のしろへにさける山吹

庭款冬

さきぬともいはねはこそあれ春とにとはれし物を庭の山吹

籬款冬

さきてこそ思ひもいつれ山吹のもとの籬はあとゝしもなし

夕藤 七首

松にさくおのへの藤の色なれや夕日にかゝるむらさきの雲

岡藤

ときわかすさきてをかゝれ夕月夜さすや岡への松の藤波

池藤

古里の池の藤なみ立かへり見るへき春をかけてまつ哉

江藤

住の江や我みし春はむかしにて心にかゝる松の藤なみ

浦藤

浮身には花のおもてやふせの海の汀の藤をいかゝかさゝん

岸藤

住吉のきしの松かえふりぬれと春を忘れすさける藤波

松藤

いにしへに猶さきまされ君か代を松にかゝれる北の藤なみ

春欲暮

花ちりて後の日かすは程そなき春をも風のさそふ成けり

暮春月

花ちりし山の尾上の春の色を霞てのこす有明の月

暮春雲

ゆく春の道をもかくせ散はてし花のかたみの峯の白雲

暮(よイ)春霞

春の色はいまいくかあらはくれはとりあへ(やイ)なし霞立も残らて

暮春鐘

花鳥の名残そ猶もつき果ぬ春ははつせの今日の入相

留春不留

したへともさすかにかへぬ命とやつれなく春の暮て行らん

惜三月盡

身にかへてなにしかけふを惜むらん我為にこし春ならなくに

三月盡夕

ゆく春の道ともきかす夕日影かたふく方をなになかむらん

三月盡夜

をしみこし日数は夢のうちなから闇のうつゝに春そわかるゝ

閏三月盡

頼みこしあとの彌生もかひそなきくるれはをしき今日の別に

夏百首

首夏

庭の池にかつしけり行あしつゝの一夜に夏を隔てける哉

朝更衣

なれゆくもあたなる花の浮世とや染し衣を今朝はかふらん

更衣惜春

春をしたふ心はかりをかへやらて猶袖ぬらす夏衣哉

餘花

吉野山青葉にましるおそ櫻夏と春との色はみえけり

新樹

よしさらは青葉にかゝれ峯の雲春におくるゝ花かとも見ん

路卯花五首

卯花のさけるあたりやゆふやみの道は常にも迷はさらなん

籬卯花

卯花のさけゝ籬にかけとめて空にしられぬ夏の夜の月

田家卯花

山近き門田にさける卯花をめつらしけなき雲かとそみる

卯花似月

いとゝなを月かとそ見る久方のなかなる里にさける卯花

卯花似雪

夏もまたかきれはかりは消さりし雪そとみせて咲ける卯花

葵

今はたゝよそにみあれのあふひ草猶そのかみをかけて戀つゝ

待郭公

啼もせす待もよはらて時鳥心くらへに日数をそふる

尋郭公

尋入山のかひなき時鳥けちかき音をや猶つゝむらん

人傳郭公

郭公我につれなきはつ聲を鳴つとかたる人さへそうき

始聞郭公

ふくるまてまたすは猶や時鳥なかぬになしてあすもうらみん

時鳥未遍

忍ひ音の里わく比や郭公人にまたるゝはしめなるらん

月前郭公

ほとゝきすなかぬこのまの月影に心つくしの限りをそしる

雲外時鳥

一聲は雲のいつくときゝわかて心うかるゝほとゝきす哉

雨中郭公

郭公なく夜の雨のふるこゑに去年の涙や猶のこるらん

曉郭公

つれなくてやまぬはかりそ時鳥名殘あり明の空の一聲

曙郭公

一聲に明ぬとつけて横雲の外に過ゆく時鳥哉

朝郭公

待のかすや[illegible]しき鳴時鳥かなかたの里やしられん

夕時鳥

なかすとしいかとうらみん郭公まてと暮し夕へならねは

夜時鳥

夕やみの月はつれなき山のはを光いてそむる郭公哉

山時鳥

さらにまた待とつけはや一聲を鳴ていなはの山ほとゝきす

社時鳥

思ひやるときはの杜の時鳥またれは里にもかたらなん

岡時鳥

忘れすはならしの岡の時鳥なを故里のとかたらなん

野郭公

春日山いてゝかたらへ郭公とふひの野守いまやきくらん

原時鳥

なには人まち経ぬらん郭公きてもとはなんみつの松原

関時鳥

逢坂をなきて過ゆく郭公せきもろ人やいさめさりけん

浦郭公

いたつらにまつ夜かされて住吉の恨なれたる郭公かな

渡郭公

なれも又宿やなからん郭公さのゝわたりを鳴てすくなり

夢中時鳥

思ひねの夢のたゝちの郭公これを初音といかゝたのまん

寝覚時鳥

ねさめしてまつとしらてや時鳥しのふ初音をもらし初けん

[illegible]郭公

めつらしき人にかたらし郭公今一聲を忍ひ音になけ

郭公稀

きゝつやとかたりあはするふひの間の空にまきるゝ時鳥哉

田家早苗

しつのめか持田のさなへ植し上は我あるへしと兼てしるしも

依早苗

五月雨の晴間をけふとみたやもりいそく早苗は取あへぬまて

早苗多

みしふつきなほとりやまぬ早苗哉田子のさ衣日数重れて

池菖蒲三首

なのつからひく人あらは池水に生ふる菖蒲のねにはなかしな

沼菖蒲

時しあれは君に引れてかくれぬにおふる菖蒲の残らさるらん

刈菖蒲

五月雨に池の水かさやますらをかゝれる菖蒲のわきて短き

廬橘薫風

袖のかもかほらすにほへ家の風吹つたへたる軒のたちはな

雨中盧橘

軒ちかき花橘に露おちてあはれいく世のふる里の雨

隣盧橘

かほるかによそへてしのふいにしへのひとかたならぬ軒の橘

樗

われも又昨日の木とて身をすては君にあふちの花にきかしを

夜五月雨　十首

五月雨の空ゆく月も此ころは雲のあなたにはれま待らし

山五月雨

つくは山はやまの露の五月雨に淵となりゆくみなの川水

杣五月雨

さみたれは浅瀬もみえぬ杣河の浪にまかせてくたす筏士

橋五月雨

五月雨に[illegible]こそみゆれ（これイ）谷川の浪はおよはぬきそのかけ橋

江五月雨

木末まて浪こそかゝれ住吉の松のほそえの五月雨のころ

瀧五月雨

吉野山雲をへ深き五月雨にたきつ河内の水まさるなり

河五月雨

五月雨は水まさるらしもかみ河しはしはかりも晴ぬ空哉

湖五月雨

さみたれに立そふ雲のみをかさきまなかの浦は浪のまもなし

浦五月雨

たこの浦や日数かさなる五月雨にたえぬまもなき雲の浪哉

古宅五月雨

茂りあふ忍ふの露の五月雨にいとゝふるやの軒やくちなん

夜水鶏

あはれにそ水鶏はたゝく槇の戸のさしもとはれぬ宿の寝覚に

夏夜

また宵と思へはやかて曉のとりあへすあくる夏の空哉

雲間夏月

夏の夜は空にたゝよふむら雲のとたえまつまにあくる月哉（影イ）

水上夏月

手に結ふいは井の水に影とめて月もや夏を忘はつらん

樹陰夏月

茂りあふ庭の梢を吹わけて風にほのめく夏の夜の月

夏月涼

うたゝ寝の袖のかたしき夢たえてふくるか月の影そ涼しき

夏月易明

中空にかけそ明ゆく入かたの山の端しらぬ夏の夜の月

瞿麦露

しはしたゝはらはてやみん白露のおける朝のとこなつの花
庭瞿麥
たらちねのむかしは我もなてしこの庭のをしへそ露も忘れぬ
夏草露
夕立の名残も露に秋かけてなひくも涼し庭のさゆりは
社夏草
茂りあふ木末も今は夏深しさそなおひその森の下草
野夏草
はらはれは露さへしけし旅人のゆきゝに遠き野邊の夏草
徑夏草
いにしへの道にまかせは夏草のをしけくともなにかまよはん
庭夏草
分なれぬ人はいかてかとひもこんわれたにまよふ庭の夏草
夏山
夏なれはきゝの木末をもりかれて月こそさはれ葉山茂山
夏野
鳴聲もまたほにいてぬさほしかの入野のすゝきしけき比哉
照射
うつせみのは山か奥にともしゝて忍ひ〳〵に鹿やまつらん
鵜河
しるやいかに鵜舟のたなはうちはへて苦かるへき鹽の浮瀬を

夜螢十首
窓ちかくすたく螢の影なくはやみにふるよや淋しからまし
橋螢
さ夜ふけぬわかまつ人はとひもこて螢とひかふまへの棚橋
水上螢
たえすなを思ひにもえてきふれ河玉ちるはかりとふ螢哉
池螢
とふ螢もえこそやまれ池水のふかき思はけつかたやなき
江螢
秋やくる露やまかふとみしまえのあしの葉分に飛螢哉
澤螢
うきふしのなくはもゆへき思ひかは澤邊の芦のよはの螢も
浦螢
いさり火の影かとみえて里のあまのこき出る船の螢飛なり
草螢
はかなくもしのふにすかる螢哉さても思のかくれやはする
螢似露
おのつから涙の露とみえやせん物思ふ袖につゝむ螢は
螢似玉
年へてもかはらぬ物は白玉と見ゆる螢の思ひ成けり
蚊遣火

月みしとたつる煙か心なきしつかふせやの夜半の蚊遣火

墻夕顔

心あてに寄かともみん夕かほのさけるかきれの花の白露

池蓮

池水の五の濁いとはすは胸のはちすもいかてひらかん

氷室

春風にとけぬひ室のつれなさは夏まて冬の色をみせつゝ

夕立風

風わたるきゝの下陰露おちて名残もすゝしし夕立の空

夕立雲

夕立のすくる方よりかつはれて風にたまらぬ空の浮雲

山夕立

うき雲のなひくにしるし足引の山たちはなれ過る夕立

河夕立

風はやみ雲は晴ゆく夕立のなこりに濁る山河の水

夕立易過

あつまやの程なく過る夕立に猶おとのこす軒の玉水

杜蟬

かたをかの森の下陰露おちて夕立おくるひくらしの聲

樹陰蟬

夕日さすならのひろ葉に風過て木陰涼しき蟬のもろ聲

松下泉

なつかしといはは井の清水むすひても猶秋風を松の下陰

夕納涼

吹わたる風に夕日の影もりてすゝしくなひく窓の呉竹

樹陰納涼

山風も身にしむまてはふかれとも秋をおほゆる松の陰哉

納涼忘夏

夕されは浦風涼し住吉のきしなる草に夏を忘れて

六月祓

すきゝつる夏の日數のはや瀬河みそきにつけて驚かれつゝ

秋二百首

立秋朝五首

いつしかと草葉に餘る朝露のおきいてゝ見れは秋そきにける

立秋天

天つ空さひしき雲をさき立てゝ物思ひそふる秋はきぬめり

立秋日

せみのはの梢にうすき夕日影さすかに秋とけふはみえつゝ

立秋風

いとはやも立そふけさのあはれ哉思ひしもよ秋の初風

立秋露

身をわけてくるとはきかぬ秋なれとまつ我袖そ露けかりける

初秋曉
曉のね覺の床に露そおく枕も今や秋をしるらん
初秋夕
わきてこのにしこそ秋の初めとや夕日の色のまつかはるらん
初秋夜
いまよりのね覺よいかに秋風はくるゝ夜毎に吹まさりつゝ
初秋雲
このねぬる夜のまに秋や立ぬらん昨日はかゝる雲の色かは
初秋衣
秋きてもまたぬきかへぬ薄衣日の夕暮は風そ身にしむ
待七夕
七夕に心をかして天の河けふのあふせは我そまたるゝ
七夕雲
あはぬまに恨もはてはた七夕の雲の衣をけふは重ねん
七夕霧
神代よりゝにてゝおきし恨みさへけふこそはれめ天の河霧
七夕橋
あまの川わたせる橋の紅葉はにたえぬ涙の色やみすらん
七夕衣
七夕のつまこひ衣かへしてやあはぬたえまは夢を待らん
七夕船
ひこほしの天の河舟よせぬまは思ひこかれて妻やまつらん
七夕後朝
たのめても袖やぬるらん今朝わかれ又もあふせの天の川浪
曉露五首
月のもるねやのいたまに露みえて寢覺夜深きよもぎふの宿
朝露
朝日影いてゝきゆる吹風ははらひのこせる草の上の露
夕露
露おかぬ袖たにほさぬ夕暮に四方の草木の秋をしる哉
夜露
てらさねはそれともみえす秋の夜の月こそ露の光りなりけれ
野露
まはきはら葉末かたより吹風に亂れてなひくみやきのゝ露
原露
風ならて又うちはらふ人もあらし野原の露に置まさるらん
径露
おのつから人のゆきゝの道はかり露おきぬ野辺の浅茅生
故里露
昔たにおれにしものを故里のまかきものらと露や置らん
萩露
露のま（身イ）を草のかりほにやとし置て風まつ程を賴むはかなさ

庭露
めかれせぬ庭の千草の秋の露いつの人まに置まさるらん
草露
白露を萩のま袖にうけためて妻とふ鹿の涙にやかる
浅茅露
おきもあへす風にみたるゝ白玉のをのゝあさちの秋の夕露
苔露
身を秋のはてをはさこそ契りおけ山路のおくの苔の下露
袖露
秋とたに思ひもわかぬ夕暮の袖をもとめておける露かな
枕露
獨りねの涙そおちて結ふらん枕は露のやとりならしを
夕萩五首
袖にのみ露をはとめて夕暮の心くたくる萩の風哉
夜萩
物思ふとねられぬ宿の萩の葉に此ころいたく秋風そ吹
江萩
おきの葉をあしのしけみに吹ませて入江にそよく秋の浦風
庭萩
故里やみぬ世の秋のあはれまて風にしらるゝ庭の萩原
簷萩
あひにあひて軒端の萩もそよくなりおきふしわふる秋風の比
野萩路萩五首
村雨の露ふゝはらふ濱風におのれみたるゝまのゝ糸萩
行路萩
わけゆけはかつちる露の玉ほこに道もさりあへすさける秋萩
崎萩
秋萩はいかて咲らんさを鹿の鳴ともきかぬいそのすさきに
庭萩
庭の面によふなく虫のおろはたを萩のにしきに今朝は見る哉
女郎花靡風三首
白露のかさしの玉の女郎花みたれてなひく野邊の夕風
野女郎花
女郎花はなの心はあたしのにいとゝなひけと秋風そ吹く
徑女郎花
たまほこのゆくてになひく女郎花誰か秋風に露こほるらん
岡薄
わたつ海のなきさの岡の花薄およはぬ浪も立まよひつゝ
原薄
かたしきの袖とそみゆる月さゆる野原の風になひく尾花は
徑薄
わけなれし庭のかよひちしけりあひて尾花に殘る人の袖哉

苅萱亂風
冒の葉にいつか我名をかるかやのみたれはつへき家の風かは
岡苅萱
秋もなほ露おくをはかた岡の風にみたれてなひく苅かや
庭苅萱
あき風のそよともすれはおく露もともに亂るゝ庭の苅かや
蘭薫風
いさきよき風をの　してから人のかたみに匂ふふちはかま哉
蘭露
むつましき色とも見ゆる蘭たかぬきおきし露のかたみそ
野蘭
ぬしやたれ夢にも見せよ蘭野原の風のにほふ枕に
籬槿
むすひおく契もさそな槿の花の籬の秋の白露
曉虫
松虫の聲する野邊をかとにて露にやとかる有明の月
夕虫
露すかろかきれの草を宿りにて夕日かくれに松虫のなく
夜虫
さよふけぬとふへき人もよもきふに猶つれなくや松虫の聲
野虫
なきたむろ涙のほとも白露のしけき野原の虫の聲〳〵
原虫
秋の夜は野路のさゝ原うさふしのあれはそ虫の音にも鳴らん
径虫
分すくろ跡よりやかて鳴立て野原の虫の聲そたえせぬ
菴虫
かりねする草のいほりの夜もすから所もさらぬ虫の聲哉
庭虫
故里やとはれぬ庭のあさちふにかれなて誰を松虫の聲
閨虫
むくらはふねやの板まは明やらて虫の音よはる秋のしのゝめ
聞虫
虫の聲きけはかなした秋の夜のなかき思ひのたくひと思へは
曉初鴈
うつゝとも思ひそわかぬほのかなる夢の空の初鴈の聲
夕初鴈
ふる里の秋の色まて床しきは雲にかり鳴夕暮のそら
夜初鴈
歸るさを花にうらみしかりかれはみやこの月に今そ鳴なる
雲間初鴈
夕日さす絶まはかりはほのみえて雲にまきるゝかりの一つら

山初雁
秋霧の八重山こえてくるかりははれぬ思ひに音をや鳴らん
嶺初雁
みね高き越路の山にならふらし空にのみなく初雁の聲
遠初雁
限りなくとほく越路の旅なれや都におそき秋の初雁
近初雁
もりあかす田の面の夜半に聞ゆなりいなほに落る初雁の聲
初聞雁
秋さむき梢のせみはなきたえて初雁かねそ雲にきこゆる
初雁幽
遠さかるはてては聲さへ初雁のゆくかた見えぬ秋の夕暮
朝鹿
朝あけのとほたの面は霧こめてをしか鳴なり秋の山里
夕鹿
こひせしと神にやちかふ春日野に夕かけてのみ鹿の鳴なる
夜鹿
なよ竹のなかき夜すから鳴鹿はおくへくあらぬ妻や戀らん
山鹿
さをしかの妻まつ山の秋風にあふたのみなき音をや鳴らん
谷鹿
谷の戸は霧立わたり明やらて軒はに近きさを鹿の聲
岡鹿
夏まては忍ひの岡のさを鹿も音にあらはれて妻や戀らん
野鹿
いかなれは花のゝすゝき秋はかりほにいてゝ鹿の妻や戀らん
原鹿
みちのくのまのゝかやはら鹿そなくなひかぬ妻を面影にして
海邊鹿
すみよしのえなつを渡る鹿のねやとほ里をのゝ松の秋風
田鹿
もる人のまとろむ程は秋の田をむれわけにして鹿そ鳴なる
野鶉
から衣すそのゝまかきかつしきて日も夕風に鶉なくなり
江鶉
秋さむきまのゝ濱風ふくろよに入江の鶉恨てそなく
里鶉
ふけゆけはいとゝ深草夜寒にて里の鶉の聲しきるなり
曉鴫
ときしもあれ曉の空に立鴫は我思ふとの數やかくらん
澤鴫
秋といへは澤邊の声のうきふしも猶かすかなる鴫の羽かき

田鴫

もりあかす門田の面にたつ鴫は寝ぬ夜の数やよそにしるらん

秋田風

秋風はたえすふけとも小山田のいなはの雲そ晴るゝ間もなき

秋田露

是もまた神のめくみか住吉の岸の上田における白露

秋田雨

詠つゝ秋の心のみたるゝは軒のしのふの露のたまみつ

山霧

横雲のわかるゝ峯はみえそめて霧の上なる明ほのゝ山

野霧

たえ〳〵に花の千草はあらはれて夕霧なひく武蔵のゝ原

関霧

鳥のねは明ぬとつくる関の戸を霧立こむるあふさかの山

河霧

わたるへき河せもいまやみえわかす霧吹はらへとこの山風

浦霧

時のまに又はれのきつ浦風のふきあけにたてる秋の夕霧

駒迎

ひきかへて関の戸さゝぬ君か代にいつあふさかの望月の駒

八月十五夜

かそへれは今夜そしるき水の面に光を添へてすめる月影

夕月

日の影にあらそひかれてくれぬまは出てもおそき空の月哉

夜月

はては又風もしつまる月の夜に心ときゆるそらの浮雲

暁月

憂身世に猶有明のすみわひてつれなしとこそ月も見るらめ

山月

月のすむ水わけ山は雲晴て神さひまさる峯の松風

嶺月

暮ぬまのあらしに雲はつくはねの峯より出る秋の月影

谷月

谷かけは出るも影のおそけれはやかてふけゆく秋の夜の月

杣月

よるさへこみをのそま入いとまなみ月すむ比は宮木引なり

関月

なへてすむ関のやかたの月影もいもと寝ぬ夜そ哀そひける

杜月

おほあらきの森の木かけのしけゝれは月にしられぬ下草の露

野月

むさし野は尾花か末をかきりにて出るも入るも月そはるけき

原月
影やとすあさかの原もうらかれて色ともになる有明の月
關月
久かたの岩戸の關は名のみして深ゆく月の影もとまらす
徑月
道のへや入のわけたる跡みえて露なき草は月もやとらす
橋月
かつらきの夜の契りもいかならんくめちの橋の中空の月
水邊月
村雨のすきゆく空は雲晴れて月すみまさる淀の澤水
池月
浪の花のくもらぬ月をうつしもてそこまてすめる廣澤の池
澤月
あきしらぬ山あれたの澤の忘れ水思ひ出てや月は澄らん
沼月
住吉のあさゝはぬまのうきれ水月こそすまれ草かくれつゝ
江月
かけなはる難波入江のみをつくしふけ行月のしるしをそ見る
瀧月
秋の夜は空行月の清瀧やとれる影そ淵瀬ともなき
河月
ふち河のおなし流に影とめてすめる心を月にくらへん
湊月
更ゆけは松風さむししなかとりゐなのみなとの秋の夜の月
湖月
しかの浦やさゝ浪とほく霧晴れて海ふく風にすめる月影
浦月
袖のなみかゝるところの秋なれは月をそやとす須磨の浦人
濱月
秋風に松原遠く霧はれて月をたちまつみつの濱人
磯月
よる浪も月影なからこゆるきの磯への松に浦風そ吹く
汀月
しかの海や霧のあなたに成ぬらんみるめなきさの秋の夜の月
崎月
さゝ波のよるとも見えす月さえて氷にたてるからさきの松
島月
雲のなみけふりの浪やへたつらんよもさか島の秋の月影
潟月
なるみかたしほひやとほく成ぬらん浪に影みぬ秋の夜の月
泊月
浪あらき磯のうきれのかち枕月見すとてもねられやはする

渡月
白玉の夜の光をみかくなりゆらの戸渡る秋の月影

田月
おく露にひかりを分て小山田のほの上照す秋の夜の月

都月
月はなほ都もおなし影ながらその夜にもあらぬ宿の秋哉

禁中月
身をてらす影こそなけれ雲の上になれぬる秋は月も知らん

社頭月
今もなほおなし光のへたてぬは神代の月のいつもやへかき

古寺月
吉野山たかれの月や更ぬらん空になりゆくわしのをのかれ

故郷月
里はあれて秋のゝらなる淺ちふにたえてつれなき月やすむ覧

村月
ふけぬるかとかむる犬のこゑはかり月に殘れる里の一むら

里月
山もとや里はそれとも見えわかて月に夜深き鳥の初聲

山家月
山里はかけひの水のたえ／＼にやとれる月も心ほそしや

庵月
秋はきの刈ほの軒をもる月も露おく袖に影うつすなり

庭月
ふけゆけはかきれかくれもあらはれて庭に滿たる秋の月影

井月
あすか井の影みし秋はむかしにてみま草かくれ月もやゝらす

閨月
ほのかなるねやの板間をあけぬとておき出てみれは只月の影

隣月
中かきのそなたの秋はみえれとも空なる月は影もへたてす

閑居月
月はよもみ山にまさる影もあらしすます心やかへて見るらん

船月
今も猶心にのりてわすれぬは夜にこき出しすみの江の月

惜月
秋ふけぬ野山のあらし身にしみて名殘おほかる月の比哉

夜擣衣
をかのへの松の秋風ふくるよに聲打そふるしつかき衣

里擣衣
衣うつ音そひまなきあしの屋のしつはた帶の長き夜すから

聞擣衣
夜もすからきけは涙のをちこちにいそく擣衣の音の淋しさ

遠擣衣

住人のありともしらぬおく山の嵐のつてに擣衣をそきく

近擣衣

夢結ふひまこそなけれあしかきのま近き宿に衣うつ聲

秋夜長

物思はてまとろむ秋の夜半ならは幾度はかり夢も見てまし

野分

野分して花は殘らぬ秋はきに又おく露も色かはりつゝ

葛風

よしさらは風にしらるなま葛原吹ぬたえまは恨やはする

徑葛

道のへや玉まく露に分ぬれて我もうらむる葛の浦風（秋イ）

墻葛

心なきしつか垣根の葛かつらいかて恨のたえせさるらん

野草欲枯

野邊はみなかれんとすれや朝な〳〵霜置そへて色とれる草

栽菊五首

うへおきて後の秋ともたのまぬは我も旅なる宿の白菊

菊露

おく露もあはれやかくる庭の菊この花まてと結ふ契に

山菊

名にしおふ山路の菊の花の露千とせの秋を契おくらん

谷菊

谷川の流をくみてしらるゝは老せぬ菊の花の下水

水邊菊

大井川みきはの菊の咲比は秋なき波も秋そ見えける

尋紅葉廿六首

紅葉はにそむる心をしるへにて時雨ぬ山も猶やたつねん

初紅葉

おく露に下葉はかりは色つきて時雨をいそく神なひの杜

蔦紅葉

しくれはつゐに紅葉ぬ高砂の松に秋あるつたの色哉

柞紅葉

うすくこくおのれうつらふ柞哉時雨はわかぬ秋のちしほに

櫨紅葉

時雨ゆくかたのゝみのゝはし紅葉日をへてまさる秋の色哉

山紅葉

たか秋の袖のしくれそ立田姫山の裙の色かはるまて

峯紅葉

かつら木やふもとの雲の夕時雨染も及はぬ峯の紅葉は

谷紅葉

露時雨もらしと思ふ谷陰も秋にはあへぬきゝの色哉

關紅葉
色にいてなにと時雨のそめつらん忍ひの關の秋の梢を
杜紅葉
露しくれ森はみかさの名のみしてさしも色こき木々の紅葉は
行路紅葉
玉ほこの道ゆきふりの夕しくれぬるともおらん木々の紅葉は
瀧紅葉
秋も猶山はあらしやはらふらんとなせに瀧つおつる紅葉は
河紅葉
立田川水のみかさはまさられと時雨に深き木々の色哉
岸紅葉
岸たかき岡のむかひの紅葉はゝかけはかりこそ浪もおるらめ
古寺紅葉
山ふかみけふも時雨て古寺に軒端の紅葉色そそひゆく
遠村紅葉
たかやとの方をわきて染つらん時雨そめたる遠の山本
里紅葉
わきてなほもみちも色や深草の里をはかれす時雨ふるなり
墻紅葉
垣ほなるまさきのかつら色つきぬとひくる人を今やつなかん
庭紅葉
そむれとも心は色やなからんよそにかはらぬ庭の紅葉は
簷紅葉
おきの葉のたよりもつらき嵐かな軒端の梢色かはるころ
松間紅葉
秋山のもみちにましる松か枝は木のまはかりそ色かはりける
竹間紅葉
枝かはす庭の紅葉の色にこそまかきの竹は秋をしるらめ
紅葉増雨
紅葉はなそあすはしらし秋山の時雨は色のふかき物とも
紅葉映日
たえ／＼に時雨る雲のひまみえて夕日にもるゝ山の紅葉は
紅葉移水
ちらぬまもかけを移して山川の瀬をそそむる木々の紅
紅葉如錦
たつた姫おるや紅葉のからにしきたゝまくおしき秋の山風
暮秋風
吹風になほも恨みはまくす原暮行秋やしはしかへると
暮秋雲
けふたにもさのみ時雨るな天津空雲のこなたに秋をのこして
暮秋露
形見さへあたなる露のたまさかにあひて別るゝ秋そはかなき

暮秋雨

さらぬたに秋としもなきけふの空時雨て冬をなにいそくらん

暮秋霜

虫の音のかれそめしより置そめて秋も末のゝあさちふの霜

九月盡夕三首

夕暮をつらき物そと詠めおきて今日にかきれろ秋の色哉

九月盡夜

秋よたゝ物思ふをの限りともけふの今宵の別にそしろ

九月盡曉

あかつきの空にや秋のつきぬらん時雨にきほふかれの聲々

冬百首

初冬曉

木の葉ちる風に應るかれの音に冬とはしるし曉の空

初冬朝

きのふとて時雨やはせぬ冬きぬと思ふにかはる今朝の空哉

初時雨

冬もきぬ今たにそめよ初しくれ秋にはもれし山の梢を

山時雨

夕日さす高嶺の空ははれなから山もとめくる村時雨哉

嶺時雨

立まよふ雲のたえまにほのみえて時雨をいそく（いつるイ）峯の月影

谷時雨

谷ふかみ月たにさゝぬしはの戸をゆきゝにたゝく村時雨哉

杜時雨

冬きぬといはせの杜の初時雨木の葉にそへてふらぬ日もなし

關時雨

月よりも猶もりまさる時雨哉不破の關屋の軒の板まに

野時雨

みやきのや木の下風にかつはれて露にまさらぬ夕時雨哉

河時雨

立よるも袖こそぬるれ夕時雨古川野邊の杉の下露

里時雨

みよしのゝ山風さむく冬のきてまなく時雨の故里の空

閨時雨

さ夜ふかき閨のいたまをもろ月の影さたまらすふる時雨哉

曉落葉

散まかふ木の葉に空のくもられは時雨て殘る有明の月

朝落葉

ちりまよふ紅葉を空に吹たてゝ朝日しくるゝ峯のこからし

夕落葉

木葉ちり物淋しかろ夕暮を我とひかほに山風のふく

落葉隨風

さそふへき梢はいまもなけれはや落葉を風の又はらふらん

落葉混雨

時雨には音はかりこそまかふらめ木の葉は袖のぬるゝ物かは

山落葉

吹はらふ峯の木葉はおちこちのたつきもみえぬ山おろしの風

谷落葉

梢をは風にわかれし紅葉はを又さそひゆく谷川の水

路落葉

木の葉ちるをのゝ通路跡もなし雪よりさきはとふ人やなき

橋落葉

さそひをく四方のこの葉にうつもれて嵐にたゆる谷川（谷の渡イ）の橋

庭落葉

ちりはてゝ後まてつらきあらしかな庭の木葉を又さそひつゝ

野霜

夕霜のふるからをのゝもとかしはもとみし秋の色ものこらす

田霜

かれる田にむすふ朝霜秋をおきて時こそ有けれ花と見えつゝ

庭霜

しほれはや霜のふる葉のあさちふにかれぬ嵐も音そ寒けき

草霜

霜さゆる野原のあさち秋風になひきしよりも色かはりつゝ

篠霜

葉かへせぬ色ともみえす月さえて有明の霜のなたの篠原

谷寒草

きえやらぬ幾夜の霜をかさぬらん日影及はぬ谷のかけ草

岡寒草

霜となるおかへの露の玉かつらはふ木も寒き夕嵐哉

野寒草

きくつはら露はのこらぬ冬かれにあられ玉まく野邊の夕風

原寒草

冬かれやあさけの霜も白妙の袖に色なきまのゝ萩原

庭寒草

白妙の袖かとそみる冬枯の庭の尾花における朝霜

池寒蘆

庭の池のみきはになひくしほれあしの葉末にかゝる薄氷哉

江寒蘆

なにはかた霜にかれたつあし鴨のさはく入江にさゆる浦風

湊寒蘆

冬かれの湊のあしのおひかせにさはらて出るあまの釣舟

谷氷

ゆきなやむいはまつたひをたよりにて氷そめたる谷川の水

瀧氷

み吉野やこほりてたゆる瀧の糸の夜はすからにさゆる山風

湖氷

さゝ波やうみ吹風のさゆる夜はこほりてとまるあまの捨舟

田氷

きゝなれし山田のひたも音たえてあせもる水そ又氷りゆく

懸樋氷

たえ〳〵にかけひをつたふ山水のよとむとみれはかつ氷つゝ

冬寒月

吹まゝに雲も木の葉もはれのきて嵐にさゆる冬の夜の月

冬月冴

さえこほるしも夜の月の有明は秋みしまゝの影ものこらす

曉千鳥

なるみかた有明の月の入鹽に浦浪遠く鳴千鳥哉

夜千鳥

かたしきの袖の湊のさよ千鳥夢の枕に聲さはくなりし

河千鳥

おのれのみかよひもたえす泉川渡をとほみ鳴千鳥哉

浦千鳥

夜もすから千鳥鳴なり難波かた鹽ひのありそありかよひつゝ

濱千鳥

ふきあけや夕浪あらき鹽風にみきはの千鳥あとそみたるゝ

池水鳥

をし鳥のならひの池や氷るらんふくるにつけて聲しきるなり

川水鳥

風をいたみみきはにさはく水鳥のとこの山川氷とつらし

夜網代

さゆる夜も氷はやらすはやきせにひをも浪よる宇治の網代木

網代寒

あしろ木にいさよふ浪も氷るらん日をへてさゆる宇治の川風

竹霰

おのつから霰の音のたゆむまも嵐にそよく窓の呉竹

篠霰

日影さす野邊の小篠に降あられ消ても露の玉と見えつゝ

柏霰

しくれをは木末にきゝしかしはきの落葉そよきて降霰哉

屋上霰

しつかすむわらやの軒のいたひさし夜半の霰の音そ少き

寢覺霰

獨ねの夢は跡なくさめはてゝ霰の音そ猶殘りける

初雪

降そむる今朝たに人のとひこれは憂身そいとゝ雪にしらるゝ

山雪

おのつから時雨しまてそ常盤山名もうつもれてふれる雪哉

嶺雪

かつらきやいかにたかまの峯ならん雲より上につもる白雪

谷雪

光なき谷の白雪消ぬか上に幾重まてとか降かさ（さゝろイ）ぬらん

杣雪

いたつらにみほの杣人跡たえてひかぬみや木に雪つもりけり

杜雪

なきなをもたゝすの森にふる雪を誰よそ目にか花とみつらん

野雪

秋わけし袖ともえやはみやきの野のふる枝の萩の雪の花すり

關雪

降るほとは人のゆきゝの跡たえて雪そ關もるあふ坂の山

河雪

あすか川氷にとつる浪の上に淵瀬も見えすつもる雪哉

湖雪

降雪そなきさにかりにつもりける氷やはてぬしかの浦波

浦雪

ふみわけて玉もからなんふる雪もけふはあさかの浦のあま人

濱雪

礒さきや浪より外に跡そなき人やこぬみの濱の白雪

島雪

降つもる雪の島もりこの比はかよふ栄踏もたえやしぬらん

田雪

さらぬたに秋より後は跡たえし山田の庵の雪の朝明

都雪

立歸り君しみやこの雪ならはふりにし道は絶もはてしな

禁中雪

九重やとよのあかりのさゆる夜は雪にそすれるをみの衣手

社頭雪

ふりつもる雪の朝あけの玉かきも色見えわかぬ住吉の宮

古寺雪

降雪にひはらまきはらうつもれて猶奥ふかきしかの山寺

故郷雪

なをもかくきえぬはかりを白雪の古里人や我をまつらん

里雪

降雪に芦屋の里もうつもれぬ我すむ方の道や絶なん

閑居雪

冬草のかれにし人めそのまゝに猶跡たゆる庭の雪哉

松雪

高砂の尾上の嵐さえ暮れて松のすかたにつもる白雪

竹雪

呉竹の葉わけの風も音たえて夜深き窓に積る白雪

杉雪

友ときくみやまのあらし音もなし軒端の杉に雪積る比

檜雪

をはつ瀬や檜にましろひはらまて花さきつゝく雪の朝明

狩場風

いかにして一夜もやとをかりくるゝかたのゝみのは嵐吹なり

夕鷹狩

はしたかの末野の日影くれ行と鳥立をとめてあさる狩人

野鷹狩

とかりする末野の原は雪ふかしきゝすの跡をいかて尋ねん

炭竈煙

ますらをかすみやく比そ煙たつをのゝ山里にきはひにけり

遠炭竈

降雪をわけてそとはん炭竈の煙にしるしをのゝ山里

爐火

わすれては春かとそ思ふおもふとちまとひせる夜の埋火の本

神樂

月のいるあまの岩戸の明かたに神代おほゆる本末の聲

佛名

年毎にとなふるものたえはこそ三世の佛の御名は忘れめ

年中早梅

いとゝ又はなともわかす白雪のまたふる年にさける梅か枝

年欲暮

なをさりに過し月日の名殘にて思へはをしき年の暮哉

夜歳暮

をしめともとまらぬ年は呉竹の一夜はかりになりにける哉

山歳暮

とゝめあへす暮行年をおしは山まつとしもなき春そ近つく

路歳暮

諸人のこなたかなたにいそくけふ道もさりあへす年や行らん

河歳暮

としなみも流れてけふに初瀬川いかによとまぬ月日成らん

歳暮松

年暮れて雪の下なる松か枝もみとりそふへき春やまつらん

山家歳暮

柴のとやさすかにつもる月日とていそかぬ春を又やむかへん

閑居歳暮

閑かなる身にはわかれぬ年の暮さりとて老とならぬ物かは

老後歳暮

かそへさして春にもあはし行年のつもれは老の數まさるなり

惜歳暮

なしましなうき身に積る年波も又立歸るならひ成せは

戀二百首

寄天戀

なかめやるそなたの色に立雲もはれぬ心の行衛とそなる

寄日戀

見せはやなさこそは人の秋の日の影となるまてよはる我身を

寄月戀

こぬ人の面影なからふけぬなり我やゆかむのいさよひの月

寄星戀

七夕の秋の契よそれはなをたえぬはかりもたのみなるらん

寄風戀

なけくそよ心この葉とちりはてゝいひしなからも嵐ふく比

寄雲戀

君か名のたつにとかなき契りかは身を白雲のかゝる戀せし

寄煙戀

いのれとも神たにけたぬ思ひこそふしの煙のたくひ成けれ

寄霞戀

つねにさてへたつる中に戀しなはかすまん空を哀ともみよ

寄霧戀

立出ん空もしられぬ夕霧に心へたてゝ袖ぬらせとや

寄露戀

偽のとの葉はかりかれやらてはかなの露のかゝりところや

寄雨戀

思ふより空にうきたつ心こそ涙の雨の雲となるらめ

寄霜戀

との葉は人の秋よりかれそめて契もいとゝあさちふの霜

寄霰戀

閨のうへにふるや霰のたま〳〵もとはれんよはや夢は結はん

寄雪戀

憂人の我をふるせる白雪のさてたにおちてきえれとや思ふ

寄稻妻戀

今は又影たに見えぬいなつまのうつりやすきは心なりけり

寄曉戀

思ひ出る袖にしほりし月影も又有明のよその別に

寄朝戀

白露のおきわかれにし朝よりけふまてほさぬ袖を見せはや

寄戀

くれはとも頼めぬなみの音信は、ほのひろまも袖ぬらせとや

寄夕戀

人はなほたゝ大方になかむらんうき身にかきる秋の夕を

寄夜戀

君かこぬつらさしらるゝさ夜すから風も秋とて吹にこそよけ

寄山戀
雲とならはそなたにかゝれあし引のやまいにかきる戀の煙も
寄峯戀
今よりはいかゝいふきの峯に生るさしも恨みし驗たになし
寄谷戀
草かくれ人にしられぬ谷水のとゝこほるまに通ひたえにき
寄岡戀
よしさらはなき名そとたにいはしろの岡の草根のかりの契は
寄杣戀
心たに引と思はゝなけかしなくち木のそま木朽はてぬとも
寄杜戀
つゐにかく君にあはての森の露消すは有とてもかひやなからん
寄野戀
あたなりと誰かいはたの野邊の露かゝる心はしらぬ我身を
寄原戀
かひなしやつれなき色を契りにて猶おなし世にいきの松原
寄關戀
いまは又ゆるさぬ關と成にけりこえしは夢か逢坂の山
寄徑戀
通ひこし徑には跡もなき物を戀ちはかりのなとかたえせぬ
寄橋戀
其まゝにたえてかよはぬ人の心あさみは袖そひつかはの橋
寄浦戀
わりなしやうきめかりてもこりすまに猶立替る浪のこゝろは
寄濱戀
つれなさしいかてうらみん年をへて猶よそにのみきくの松原 淺松イ
寄磯戀
面影も見えてすくなく成にけりいりぬる磯のまつとせしまに
寄汀戀
かひなしよかけても人は白浪のよするなきさとはては成つゝ
寄崎戀
つれなさもわれからさきと知にしを又まつとの何ましるらん
寄島戀
おもかけも我に殘すないもか島よしやかたみの恨はてなき
寄潟戀
石見かた深き心をしらせはやきてたに浪のあはれかくやと
寄泊戀
年月は我もこかれつ泊り舟今たによせよ浪の便りに
寄渡戀
ほのかにもいつまてみえし影ならんよそになるとの舟の追風
寄岸戀
今は又たれにか人は住吉の岸によるなみよるもとまらす

寄水戀
山水の岩間ほしくてとしもへぬ心をくみて人のとへかし
寄池戀
よしさらはいひたにはなて鴨をたのむの池の水からそうき
寄沼戀
いかさまにいはかき沼のわすれ水思ひ出へき契なちぬを
寄江戀
難波なる芦の一夜のかりねより亂れそめぬる江にこそ有けれ
寄瀧戀
せけはこそせくにつけても人はしれ袖に涙の瀧なくもかな
寄河戀
祈るともあふせはあらしきふね川神のいさめし物思ふ身は
寄淵戀
ふかゝらぬ我中川の契ゆへねたくも袖の淵となる哉
寄瀬戀
涙川せかてもふちとなる袖にあふせなき身の恨をはしれ
寄湊戀
いかにせんみなとのしほの引はへてからき恨にさはく心を
寄海戀
白浪の立よるはかりありそ海のふかくそ君に心かけてし
寄石戀
をとふも氷のかしはの沈む身にけに逢瀬とは頼みかたさよ
寄沙戀
浪のよるはまのまさこの數々に心くたけてぬるゝ袖かな
寄巖戀
うき人をなにゝたとへんつれもなき巖も松は猶ねさすなり
寄田戀
思ふをさてや山田のかりにたにほに出すへき露の間もなし
寄都戀
我身いかにならの都の跡たえてふりぬる戀はとふ人もなし
寄禁中戀
百敷や大宮人は戀そめてかよふ心もいとまなきまて
寄社頭戀
いさゝらはちゝの社を引かけてたのむ計に人を恨みん
寄寺戀
月のころ雲の林の明かたもその面影をわすれやはせし
寄里戀
いつくにかわかつまとりの里はあると問はや扨も週逢ふかに
寄庵戀
忘れめやかりほのさゝのふし所さてたにありし夜半の契を
寄門戀
思ひありとみゆらん物を露ふかき葎の門をきてもとへかし

寄戸恋

たのめれと月はさし入松の戸を君か爲にと明る夜もかな

寄墻恋

いかにせん我身を秋の薄かきかりそめなから隔てはてなは

寄籬恋

かよひこし庭もまかきもあれにけり人の心や秋ののちなる

寄庭恋

いまはてたか通路となりぬらん我わけなれし庭の淺茅生

寄井恋

あさしともむすひて後やしられまし我袖ぬらす山の井の水

寄屋恋

津國のこやといひてもいかならんよその人目を忍ひたく身は

寄柱恋

なれきつるたひこそなけれ眞木柱立もとまらぬ人のつらさよ（にイ）

寄簷恋

うしつらし我やは人のふるさとに軒の板間の叉もあはすて

寄窓恋

ふくるまてまつ夜の窓の雨の音是そかきりと袖ぬらしつゝ

寄床恋

おのつからたのむ契もたえはてゝねられぬ床にのこる面影

寄閨恋

月かけと人にはいひてとゝめはやあくるわひしき閨の板間を

寄隣恋

是もまたつらきへたてと成りにけり心にゝたるやとの中垣

寄簾恋

玉すたれひまもとめてもかひそなきかけはなれたる人の心は

寄初草恋

はつ草のはつかに見えしなり〱もいつの雲間の契なりけん

寄忍草恋

いかにせん軒端の草のしのふにも餘るはかりの露のみたれを

寄忘草恋

わすれゆく人の心のたねなれは軒端の草をまつや恨みん

寄思草恋

草の名のしけき思も有ものをかゝる小花かもとの契よ

寄月草恋

むすひおきし契も今はつき草の露しらさりき移るへしとは

寄下草恋

しけるともしられぬ中におく露はさそなうき田の森の下草

寄葵恋

今さらに思なかけそあふひ草よそのかさしとなりにし物を

寄菖蒲恋

今はとて我をは軒のあやめ草いかなるえにか心引らん

寄蘭戀
其まゝに逢瀬をよそのまこも草かりそめふしになに亂れけん
寄菅戀
なからへてつらき心をいはこ菅れたくそ人にみたれ初にし
寄葛戀
うき人のおさにはあへぬうらみ哉神のいかきの葛の下風
寄萱戀
今こそあれ誰か秋風もならはれはおきふしわふるまのゝ萱原
寄淺茅戀
契さへ末野のあさち霜かれぬ人の心を秋と見しまに
寄蓬戀
蓬生のもとより人のつらからはかれはてぬとて今は恨みし
寄芝戀
わけなれし我道芝の露のみや涙の袖に猶のこるらん
寄苔戀
おのつから思ひもいては思ひやれとはれぬ庭の苔のみたれを
寄蘋戀
池水のふかくそ思ふうき草のうき身なりとも今はねさせよ
寄藻草戀
思ふにはよらぬ玉ものみたれかなと浦にのみなひき果つゝ
寄沼繩戀
れぬなはのくるしとたにも思ひやれ戀はますたの池の心を
寄海松戀
里の蜑のうらみやせめて慰まんみるをあふそと思ひなされは
寄松戀
戀しなん我身そいとゝそなれ松枝なかはさん契ならねは
寄椿戀
あふ事のかた山つはきつらくともなくさむ程の言の葉も哉
寄榊戀
神かきの三室の榊さしもやはいのりし中のつれなかるへき
寄杉戀
いのれともつゐにつれなき契哉なにかはしるしみわの神杉
寄檜戀
其まゝにはつせの檜原つれなきはいとゝ嘆の數まされとや
寄槇戀
なき名のみたつをたまきの朽はてゝ谷の心のゆかすも有哉
寄椎戀
椎柴のしはしそ猶もたのまれしこゝろともこらぬ人の言の葉
寄桂戀
面影を月のかつらにたくへしも目に見るまての契なりけり
寄樹戀
いとゝ又なけかんためと楢の葉のなれてし物は色かはるらん

寄柏戀

かしは木のもりても人にしられねは袖の時雨も降かひそなき

寄桐戀

みせはやな秋にあきそふ風の音に桐の葉なからもろき涙を

寄柞戀

ことの葉をちらしなはてそはゝそ山心の秋は嵐立つとも

寄槇戀

ことの葉の移ろふはしの色みてそみかきか原の秋もしらるゝ

寄楸戀

身たうみの沖のこしまの濱楸しほるとたにも知る人のなき

寄常盤木戀

なひきては秋をもしらし常盤木のつれなき色を猶や頼まん

寄杣木戀

又ひとの引としらせん數ならぬみをのそま木と思ふあやなさ

寄宿木戀

やとりきのねもせぬ人を戀かねて同ししけみに猶やまよはん

寄鹽木戀

うかりける里のしるへにこかれても猶こりすまの鹽のも鹽木

寄朽木戀

しられしなみ山かくれに年をへて我身朽木の朽てやみぬと

寄埋木戀

限あらはいかなる瀬にかあらはれんあふくま川の底の埋木

寄鶯戀

あらたまる人の心も見えぬ哉身をうくひすの音にはなけとも

寄雉戀

はしたかの末野の原に立雉もあふにつけてそ身をはかふなる

寄郭公戀

なれのみそ秋にはあはぬ時鳥たえす鳴音は我もかはらす

寄水鷄戀

ふけぬとて思ひたえたる槇の戸をたゝく水鷄そ人たのめなる

寄鴈戀

其まゝに人のちきりは初鴈の鳴てわたるもかひやなからん

寄鶉戀

忍ひてもすくへき床のよかれかはうつらと鳴て人にきかれん

寄鴫戀

たつしきにあつらへつけてとはぬよの涙の數を人に知らせん

寄鵙戀

たのめおくもすの草くきかれぬまもつらき契の程は見えけり

寄鳩戀

ふりはつる身をこそなけゝ雨はれて雲よふ鳩の聲をきくにも

寄千鳥戀

ことうらに又ふみかよふ濱千鳥わかみのかたは跡やたえなん

寄鳰恋
にほとりの下の通路たえはつな上は氷のうちとけすとも
寄鴛恋
いひ出んたよりもしらて池水にすむをし鳥のなく/\そふる
寄鴨恋
つらゝゐる入江にさはく芦鴨のぬる夜なけれはれこそ絶せれ
寄鴎恋
しられしなたえすしのひしまつとり立居に浪の心かくとも
寄鷺恋
行末のあふ瀬を又は白鷺のたちゐなかるゝ中川の水
寄鵲恋
たえ/\に通ふにつけてくやしきはこれいまさりし鵲の橋
寄鷹恋
あふまてをまつとりかはん箸鷹のかり初ならは又かこつとも
寄山鳥恋
面影もへたてやせまし山鳥のはつ尾のかゝみうつりはてなは
寄鶏恋
したひわひ我もねになく別路にゆふつけ鳥をなにかこつらん
寄鶴恋
音になかぬひま社なけれあしたつのありそに通ふ跡絶しより
寄熊恋
信濃なるすかのあら野に住熊の音にはさけとなれぬ君哉
寄虎恋
恋わひぬいまは命やもろこしの虎ふす野邊にすてぬ身なれと
寄馬恋
今は又かよひしこまの跡たえてなけきそまさる前のたなはし
寄猪恋
かひなしな伏ゐのかるもかくとたに知れぬ程の下のみたれは
寄鹿恋
いもにこひいのねられぬにあし引の山風さむみ鹿ゝ鳴なり
寄蝶恋
今はとてうつろふ花にゐる蝶のあくかれまさる我そはかなき
寄蛙恋
いひいてぬ池の心はしられねは鳴て蛙の音をやきかせん
寄蛍恋
限あれは澤の螢の思ひたにもゆとはすれと音にやたてける
寄蛬恋
ひとりねの枕の下のきり/\すなれも秋とて鳴ぬ夜はなし
寄松虫恋
とはるへき物ともしらぬ身の秋に昔なからの松むしの聲
寄鈴虫恋
あはれまた人のふるさぬ鈴虫も秋しうけれはれにそなくなる

寄織促戀

音にそなくはたおる虫の片糸のこなたかなたに思ひ亂れて

寄蛛戀

絶ぬとてまたすしもあらす蜘蛛のいとふにはゆる心なりせは

寄簾戀

つくはれのにゐくけ簾の引はへて心にこむる戀そくるしき

寄我殻戀

うきらさそもに住虫としる物を あみや人のいひしなるへき

寄玉戀

わか涙衣の玉とみえやせんかけてもしらぬ人をこふとて

寄鏡戀

別路にいそくつらさをます鏡われてあふへき心とはみす

寄匣戀

人もうし我身もつらし玉くしけふたゝひにのみ歎くくるしさ

寄櫛戀

別路にそへしなくしのさしもなと猶そのかみを忘さりけん

寄鬘戀

一筋によしたえはてね玉かつらかけてしいへは猶そ苦しき

寄本結戀

末まては結もこめぬもとゆひのうちとけしさへ今はくやしき

寄袴戀

枕たにしのへはしらしよひ〳〵の涙もらすなかたしきの袖

寄席戀

よしさらは床のさむしろ朽果よかたしく袖も幾やはする

寄衾戀

かされては又や心のかはらましひとりふすまそ恨はてたる

寄裳戀

わさもこかあかもの裾の引はへてみし面影の忘られもせぬ

寄衣戀

終にかくほさてやくちむ川やしろわれはあふせも涙のぬれ衣

寄紐戀

うちとけぬ人の心のしたひもはあふ夜も猶そくるしかりける

寄帶戀

今はゝや三重にゆふへきつれの帶のなからふとても哀いつ迄

寄書戀

理の庭の通路あともなし見し玉つさもかきたゆる世に

寄繪戀

さらぬたにまと少なきあた人を繪にかきてしも形見とやみん

寄硯戀

思ひ餘りむかふ硯の水とたにいはすはいとゝ袖やぬれなん

寄筆戀

書たえて後にやしらん猶さりのすさみに契る筆の跡と。

寄笛恋

しはしたゝれてもゆかなん笛竹の一よにさへや遠さかるへき

寄箏恋

たのめこしその一ことを契にてなほ松風は吹もたゆます

寄弓恋

すゑまての契もいさやしらま弓なひくにつけて物を思ふよ

寄箭恋

心いる我かはあやなものゝふのやとたに今はいひもいてしな

寄扇恋

名はかりを頼むあふきのかたみ哉絵にかく月の影はかすめと

寄蓑恋

たえすふる涙の雨もみすはかりみの白衣きてもとへかし

寄笠恋

いさゝらはみ笠といひて心みん雨はかりにはさしもさはらし

寄糸恋

山かつのしつのしけ糸筋よはみとすれはたゆる中そくるしき

寄錦恋

見せはやなうきは我身のからにしき心の色をおりみたしても

寄挿頭恋

色に出ていはれは誰かわきもこかかさしの花にそむる心も

寄手向恋

つれなしと人をはいはしたむけする神たにうけぬ中の契に

寄祓麻恋

人は猶心もひかぬおほぬさのよるへを神にまかせてや見ん

寄木綿恋

つれなさも神そさすかにしらゆふのかゝる契を空にとはれ

寄四手恋

祈こししるしになして頼かな神のいかきになひくゆふして

寄注連恋

かけて頼むしるしをいつかみしめ縄神は結ふの名やは朽ぬる

寄車恋

我はかり心をやりてをくるまのめくりあふやと頼むはかなさ

寄舟恋

浪あらき湊をさしてこく舟の心はよれとはてそあやうき

寄楫恋

かちかくせ我中川の渡し守後の契もしらぬあふせに

寄帆恋

逢事はかたほにかけて行く舟の風のたよりを待もはかなし

寄碇恋

船人のおろすいかりのなはゝへて君に心をとむるくるしさ

寄苫恋

蜑のすむいそやの軒の苫をあらみま遠にしあれは恨てそふる

寄網戀

人めのみ忍ふか浦におくあみの心はかりは引かひもなし

寄泛戀

たのますよ釣する蜑のうけのをのくるとはすれと定なけれは

寄筏戀

はやせ川いほる筏のうき中はとにもかくにもさはりかちなり

寄篝戀

等閑にけたはけつへきかゝり火の烟よゝは（なにとイ）にくゆりわふらん

寄網戀

いつまても思ひの綱のなからへて君に心のよりなやむらん

寄網戀

われなからなかゝるましき恨哉くる夜またるゝ蜑のたくなは

寄瀧盞戀

かひなしやけに深からぬ緣あらは何と難波の身をつくしても

寄貝戀

今は又よそになるみのかたし貝我そしほるゝあふひまをなみ

寄斧戀

斧のえのをのつからとて（こそイ）問はすとも嘆きころ身を哀とはしれ

寄笭箵戀

花かたみめならふ誰も思ひしれあたなる色そ人のこゝろは

寄燈戀

かけよはるれつの灯こよひさへとはすは我もきえぬへき哉

寄鐘戀

思ひわひまたしと思ふ夕暮をさもあやにくに入相のかね

雜二百首

山榊

神路山たまくしの葉におく露のめくみをうくるやまと諸人

嶺椿（やちはの緑イ）

奥山の八ほの椿の八千とせの春秋まてとかけそさかふる

澗槇

たにかけや誰か世に種をまきもくのおなし緣を今もみすらん

嶺柴

ましはたくけふりそみゆる山かつの麓の庵は淋しかるらし

杣檜

そま山のひはらにましろ嗄のをも猶木とてこそ引はしむらん

杣柏

かしは木の落葉を霜のへたてにてしはしはかれぬ森の下草

岡椎

しゐの葉の音こそいとゝさひしけれ人はとひこぬ岡の庵に

深槲

たくひまて哀とそ思ふはま楸身を浦浪に我もしほれて

磯松

こゆるきの磯うちならしよる浪に松の木末も聲あはすなり

門杉

山里のしるしとそ思ふいたつちに入もとひこて杉たてるかと

窓竹

かくてよにうきふししけき我身なり友とはみすや窓の呉竹

籬草

故里ややつるゝ草のまかきよりはるかにつゝく野邊の夕露

庭苔

とふ人の跡なき庭の苔むしろしきしのはれぬ程も見ゆらん

簷忍草

故里は日をへて忍昔とて軒はの草もしけりそふらん

岸忘草

神の代はわすれそはてぬ住吉の岸なる草も名のみ茂りて

野篠

かるもかくいなのゝ小篠よにふるもみしかき心まつ迷ひつゝ

路芝

おのつから遠近人のわけぬまも風になひくみちの芝草

沼葦

かくれぬの汀の芦のうきふしはしけさまされと知人やなき

江菅

風さはく入江になひく白菅の葉末は浪の下になりつゝ

河藻

山川のはや瀬になひく流藻はれこめに水のさそふなりけり

名所山

春日野におとろの道はわけすきつ三笠の山よいつか越まし

名所峯

思ふ事（イ无）はおほしま峯に立雲のはれぬ心そ行かたもなき

名所岡

さかふへき君かみかけのしけ岡に行末契れ千代の松の木

名所杣

宮柱ふとしきたつとすへらきの御代にいつみの杣木引らん

名所杜

おく霜に殘る草葉もなかりけりいつくときはの杜の下草

名所野

つかへこし末のはらのゝもと柏もとより身をは君に忘れつ

名所原

富士のねは空もひとつに雲はれて有明の月の浮島か原

名所關

まなふとて心ひとつはつくしきぬ我名をとめよもしの關守

名所路

みゆきせしあとやにかはる古にはや立かへれ千代の古道

名所橋

名はかりそ猶もくちせぬはし柱昔なからの跡はみえねと

名所池

數ならて我身うきぬの池水はなほ世にすむも知人やなき

名所澤

時しらぬ高峯の雲はきゆれともこほらてひゝくふしのなる澤

名所沼

なれてみしあさゝは沼のわすれ水思ひそ出るすみはなれても

名所瀧

日にさらし月にさらして布引の瀧の白糸いく世へぬらん

名所河

さほ川の流は今もかはらぬをいかなる瀬よりしつみそめけん

名所湊

浪あらきいなのみなとの鹽風になのれもさはく磯の松か枝

名所海

まにしふく浪のちさとは雲晴てなにはにかゝる沖の友舟

名所湖

君に今あふみの海の浪風にわらはうらみもなにか殘さん

名所浦

いさり火のかけも闇になりにけり漕出る舟のとものうら浪

名所濱

よる方もなくさの濱におさりして我もうきめはかりし物なり みてをすきにし賦

名所磯

はるかなる繪島か磯による浪はそれとはみれと音そ聞えぬ

名所汀

人の心きよきなきさによる浪のかへらぬ珠はあらしとそ思ふ

名所崎

曙やかすめる浪の絶間よりほのみの崎のあまのつり舟

名所島

音に聞えそか千島の外まても君しなさめは浪もさはかし

名所潟

長閑なるうなかみかたのあさ風になつそ引らし蜑の乙女子

名所泊

まちこふる人やいつくにおほとものみつの泊をいそく友舟

名所渡

一かたによるへなき身の浮舟になにと鳴戸の浪のさはきそ

名所田

鴫のたつふしみの田ゐにかりれして我も思ひの數をそへつる

名所里

遠近のあさけのけふりほの〳〵と山きはかすむ鄙なひの里

名所市

思ひしれ我もしかまの市人よ名をうる事もやすからぬ世そ

歸山

君か代をまつにかゝりて藤代のみ坂をこえし春そ忘れぬ

羇中嶺

わけきつる山又山の嶺の雲さここそ都もへたてはつらめ

羇中野

とまるへきやとさへみえぬ夕霧に友よひかはす野邊の旅人

羇中原

草枕夕風寒き大和ちに誰か衣をかすか野の原

羇中關

ふけぬとも猶こえゆかんすゝか山關路の月のにしになるまて

羇中路

草枕おき出ていそく朝とにみし宮こちも遠さかりつゝ

羇中橋

み吉野の高峯の雲をめにかけてまつうち渡すもろこしの橋

羇中河

かりねするそかの河風さむしろにま菅かたしく夜半の淋しさ

羇中湊

浪あらき湊の舟のうき枕いかにぬる夜も夢は結はす

羇中海

船人の行きは風の心にていそくによらぬ浪の通路

羇中湖

しかの浦のおきの舟人心せよひら山おろし吹立ぬめり

羇中浦

浪の上にかよひなれたる浦人はこれか旅とも思はさるらん

羇中濱

ふる里をしくれていてし日數さへつもりにけりな雪の白濱

羇中磯

しほなれぬ磯のうきねのかち枕うちぬる程の浪のまもなし

羇中汀

うきねする渚によする浪の音は（に歟）都にかへる夢をたにみす

羇中島

故郷をはなれこしまによる浪よ立歸るへきしるへともなれ

羇中潟

こき出し唐船をまつらかたたよりも浪のよるへしらはや

羇中泊

むすはれぬ夢も我身のうらとまりうきね重る浪枕哉

羇中浪

行末になほ宿なくはいかゝせんさのゝわたりをいそく旅人

羇中里

古里に日數はかりをへたてにて往來にちかき夢の通路

山家春

とふ人のなほもまたれて山里の花にうき世を忘れかねつる

山家夏

吹風の秋よりさきもすゝしきはいつも夕への山陰の庵

山家秋

おきの葉にあらぬ軒端の松風も淋しさまさる秋の山里

山家冬

さひしさのましはの煙たつる夜は月さへうとき冬の山里

山家暁

かれの音のきこえぬ山の曉もれ覺もよほす軒の松風

山家朝

朝日影今そさしいる谷の戸のあくるとみては程もへぬれと

山家夕

山のはに夕日の影はのこれともまつ暮そむる松の下庵

山家夜

山里も夢てふものゝかはられはぬるからうちこそ浮世なりなれ

山家風

松風の音せぬ山のおくもかな淋しさしらてうき世いとはん

山家雲

目にちかきむかひの岡もみえわかて軒まてとつる夕暮の雲

山家煙

ましはたく煙も雲にまかはなん入すみけりとみえもこそすれ

山家雨

山里やれさめさひしき雨もよに音しつかなる軒の玉水

山家路

み吉野や我山ふみそとしへぬる憂世をいつる道はしられと

山家水

かくてさへ猶こそすまれ山水のあさしや心世をいとふかは

山家庵

世の中をいとふ心のなきしつもすむなる物を山陰の庵

山家草

山里や軒端にしける草の名にうき世をまつや忘れはてまし

山家苔

山ふかみ人にしらせぬ宿とてや庭をも苔のかくしはつらん

山家木

我庵の軒はゝ雲にうつもれぬ杉をたつれて人もこそとへ

山家鳥

雨そゝくしはのあみとは雲とちて軒端にちかき山鳩の聲

山家虫

捨はつる身のかくれかと思ふよりほかには誰を松虫の聲

田家春

賤の男か門田の春そあはれなるかへすかへすも秋をたのみて

田家夏

五月雨にあせの細道水こえて田中の庵はとふ人もなし

田家秋

風吹は山田の稲葉うちなひき庵もる袖にかゝる白露

田家冬

秋すくる山田の刈ほいたつらに人こそもられ月はもれとも

田家風

もる人のまとろむ程もおのつからひたに風吹く小山田の庵

田家雲

山本やたのもの庵はうつもれて雲になるこの音そ殘れる

田家煙

朝あけや遠山もとのうす煙ほのかに見ゆる小田の庵哉

田家雨

雨やまぬ庵の軒端の玉水に稲葉の露のかすやそふらん

田家鳥

あれまさる小田のかりいほ風すきて引ぬなるこに鳥や立らん

田家虫

いとゝなほれられんものか秋田ちろかりほのよもの虫の聲々

春夜夢

みすもあらすみつ共いはん春の夜はさめ行夢の定かならねは

夏夜夢

夏の夜のまたよひと思ふうたゝねに横雲なから夢そ分るゝ

秋夜夢

秋の夜のなかきならひはうつゝにて夢より後も明やらぬ哉

冬夜夢

かたしきの床のさむしろ袖さえて結ひもあへぬ冬の夜の夢

曉夢

獨ねの夢こそ殘れ有明の月さへおつる夜半の枕に

短夢

うたゝ寝の枕をわたる山風にやかてとたゆる夢の浮橋

夢驚

昨のまにみえつる夢のさめてこそよのはかなきを更に驚け

山眺望

いつくともさかひをいかゝみよしのや山より山のおくの白雲

野眺望

はるかなる野原の末は暮そめて煙にきゆる里の一むら

海眺望

はるゝ日の長井の浦の沖つすにたゆたふ舟はあさりすらしも

雨中懷舊

思出る寢覺の袖もしほるゝは窓うつ雨のよゝのふる〔て歟〕さと

深夜懷舊

いにしへを思ふ心もふかき夜に哀れをしるそ涙なりける

庵懷舊

身をかくすさゝの庵のふして思ひおきてそ忍ふよゝの昔を

閑居懷舊

つらからぬ昔の世をはいとはれと山の奥とて忘やはする

夢中懐旧

あはれにそなき面影もかよひける観かいさめしうたゝ寝の夢

寝覚懐旧

行末も思ひやらるゝ寝覚にはまして昔のしのはれそする

懐旧涙

思ひいてゝ心と袖をぬらす哉涙はしらぬむかしなれとも

独懐旧

世中のつらき時こそしのはるれうきみにかきる昔なりけり

老後懐旧

あはれてふ事をあまたにしのふ哉老てはつもる身の昔とて

懐旧非一

思ひいてと思ひおもはす数々にまつしのはるゝ身の昔哉

寄日述懐

徒に過る日影をなしますは何につけてかみをてらさまし

寄月述懐

何とかくうき世のやみにまよふらん心の月は光けなくに

寄星述懐

いかにせん雨夜の星の光なき我身にしあれは袖そ濡ける

寄風述懐

家の風猶吹とめよもろこしの言葉の花のもとのにほひを

寄雲述懐

風はやみたてやらぬ身の浮雲は君にたのみをかくる計そ

寄煙述懐

あはれ又ふしの煙のたく火にも我名をたかくたてゝましかは

寄煙述懐

はかなしやかへに生ふてふ草の露きえやらぬ身も哀いつまて

寄雨述懐

定めなきならひ計を頼む哉うき身世にふる袖の時雨は

寄霜述懐

いたつらにつもるみそちの袖の霜をき所なき身をは歎くまに

寄雪述懐

代々のあとゝ思ふ計にあつめきて我も年ふる窓の白雪

寄山述懐

足引の山のまに〳〵尋みんまとの道もありといふなり

寄関述懐

君か代にうきみなからも逢坂の関しまさしき名をやとゝめん

寄路述懐

心のみとにもかくにも迷ふ哉まなふる道はひとつならねは

寄橋述懐

つかへこしまゝのつき橋代々かけてたえせぬ跡そ露も忘るな

寄沼述懐

あらましの末はとほらて沼水のかくろへなから世にもすむ哉

寄江述懷

うきふしもけにかりそめそ津國の難波のあしのよしや世の中

寄河述懷

ふち川のみなかみしらの人もしれつかふる心我はにこらす

寄瀬述懷

君にわかふかき心はあすか川世のうきせとてかはりやはする

寄海述懷

いまは我世を海邊にやあくかれんみ山の奥も住わひぬとよ

寄浦述懷

和歌の浦に久たちきしり人なみにおらぬ藻屑をかき集めつる

伊勢

いすゝ川たえぬ流の君なれはすむへき御代を神にまかせん

石清水

わか人と思はすとても石清水すめる心を哀とは見よ

賀茂

なほたのめかもの社のみつかきの久しき世より君まもる也

松尾

すゑはまてめくみの露はおよふやと猶松のおの山を頼まん

平野

たのめたゝひらのゝ宮に立杉のなをき道をそ神もうくなる

稲荷

いのれとも神はいなりの山なれや我思ふ事の猶もかなはぬ

春日

天の下めくみにもるゝ人もあらし山はみかさの神のちかひに

布留

頼みこししるしはいつこ我身世にふるの神杉ふるとしもなく

大原野

おほ原や神の名さへもをしほ山まつにかひなき惠なりせは

住吉

たのもしな三の國までなひきしも四の社のちからならすや

日吉

くもりなき御代にあふみをたのむ哉日吉の影の又や照すと

梅宮

梅の宮神のめくみの春にあへは人の心のさそひとくらん

吉田

まもれ神吉田の宮にひくしめのしめの外なる我ならなくに

祇園

世のうきもみなつきぬとは白川の神のみまつり時こそ有けれ

北野

神も又あはれやかけんうちはへて頼みきたのゝ松のしめなは

貴布禰

世の爲にわれそ物思ふ貴布れ川身のうきせをは祈やはする
出雲
神かきのいつも八重垣遠けれとへたてもはてぬ數島の道
三輪
うきなからすくれは過つ三輪の山今行末は神を賴まん
玉津島
もしほ草なほかきつめん玉津島神しみかゝは光見ゆやと
熊野
み熊野や河瀨の波にぬれ〳〵す神に賴みをかけぬまはなし
如是相
はかなしや風まつ程の山の花しはしの色にそむる心は
如是性
うつされは色も姿もあらはれすかゝみにわきて影しなけれは
如是體
うけかへし世々の姿を思ふにはやかて此身もいとはしき哉
如是力
ふくからによもの草木の靡かすは風のちからの有もしられし
如是作
かれて我庭に櫻をうへおきて花のところと宿をなしつる
如是因
すみにごる心の水の末ならはこん世もけにそくみてしられん
如是縁
わたつ海やおなしなきさに寄舟も風のたよりのあれは成けり
如是果
山人のゆかとなりにし心もてうへなき道に入にそありける
如是報
うきもさそ世々の報とさとらすは又もや同し身をなけかまし
如是本末究竟等
春は花冬は雪とて詠むるもくるれはおなし一とせの空
大日
みな人の心のやみもはれやせん遍く照す三世の光に
阿彌陀
色にそむ心しやかて法ならはたのみをかけよむらさきの雲
釋迦
ちるとみしつるの林の花よなときえぬにほひを猶殘すらん
聖觀音
塵の世を同しくすゝけ法の水くみてしらるゝちかひ成けり
千手觀音
たえすゝむ粉川の水のなかれにそちかひの海の深さをもしる
馬頭觀音
さはり有世をしすくへは芦の葉のかりの姿をみする成けり
十一面觀音

たのめたゝ十種四くさにとく法もひとへに救世とはしらすや
　准胝觀音
たくひなき誓に今もあふひ草つみをかしける身とはなけかし
　如意輪觀音
ちかひ有て行かふ六の道ならは四(てイ)の苦のこりしもせし
　二乘
かひなしな人をわたさぬ法の舟うき世のきしを濟はなれても
　寄天祝
神代よりさためをおきし天地と久しかるへき君か日嗣は
　寄日祝
賴もしな天の岩戸を出し日も君か爲にそ世を照すなる
　寄月祝
久方のあめよりてらす月の神くもりなかれと世を守るらし
　寄星祝
くもりなき君か光をうけてこそつらなる星も世を照すらめ
　寄雨祝
雨露のめくみを四方にしきしまの道ある御代と民そさかゆく
　寄風祝
神風のふきとふきにし昔より民の草葉はなひきそめてき
　寄國祝
みたれしな君かめくみにあきつはの姿の國の民のこゝろは
　寄郡祝
四方の國よもの郡のみつきもの君にそなへよ萬代までに
　寄都祝
君か代のひらくる花の都人まちこし(にイ)春に今やあふらん
　寄道祝
古のひしりの御代のあとゝめて道ある君にあふか(へるイ)うれしき
　寄水祝
我君のたえぬ流れをみかは水くみてしらるゝ千代の影哉
　寄殿祝
うこきなき御代の爲とや足引の山の殿もときはなるらん
　寄苔祝
色かへぬ山のいはねの苔むしろたへのしき御代にちよや重ねん
　寄竹祝
九重に生そふ竹をこの君の千代のみかけにならへてやみん
　寄松祝
萬代とよはふる山の松か枝に十たひや花のさかんとすらん
　寄椿祝
我君のかけはかはらし玉椿おのかみとりはあらたまるとも
　寄榊祝
本つ枝の百世をかけてさかふらし神ちの山の峯のまさかき
　寄杉祝

君のみそ三輪の神杉幾千代もかはらぬ影のときはかきはに

寄鶴祝

君か住雲の上にそきこゆなる澤邊の鶴の萬代のこゑ

寄龜祝

千代ふへき君にあひぬるうれしさよ浮木の龜のたくひ成けり

（右耕雲千首以淺草文庫本圖書寮本幷千首部類校合畢）

續群書類從卷第三百七十九

和歌部十四

詠千首和歌

榮雅

春二百首

立春朝

けさみれは霞を分けて出る日もおなし道にや春のきぬらん

立春天

春の立雲のかよひちあらはれてみとりの空も霞そめつゝ

立春日

みれたかく出る朝日も新玉の春の光とけさやみゆらん

立春風

音たてぬ霞はかりを吹立て今朝よりかよふ春の初風

立春霞

明わたる空をゝそしと立春に待れてかすむ四方の山の端

立春雲

雪けそと見しはきのふの嶺の雲けさ立かへて春やきぬらん

立春雪

春にけふあらたまれともふるゆきは空にや冬の猶のこるらん

立春氷

春立つと風のつけすはけふも猶池の氷のひまやなからん

立春水

春立ちてけふ中空に霞む日の影さへ見ゆる山の井の水

立春都

雲の上霞の下ものとかにて花の都に春はきにけり

早春山

伊吹山けさは雪けの雲消て霞をおろす春の初風

早春關

關の戸も明ゆく春にあふ坂の鳥やことしの初音成らん

早春河

いとはやも霞むとはかりゝなせ川なにゝか春の色をふかめん

早春湖

雪きへてひらの高根の霞むより氷を出るしかの浦波

早春浦

あま人の衣のぬきのうす霞またたちなれぬ浦風そ吹

野子日

いく千代か君かよはひを野邊に出てたへぬ子日の松に契らん

子日松

行末も子日の松の根をふかみ引くにつきせぬ種はみゆらし

子日祝

敷島ややまとしまねの松かえを君か子の日のかすにつくさん

山霞

初瀬山霞の色もふかみとり春をはしるや峯の常盤木

嶺霞

春はいつこしの白根の朝くもり雪けかはらて霞そふらん

野霞

今いくかわけつくしてか武藏野の霞みはてたる限をもみん

關霞

きよみかた波にかされてたちこむる霞や關の戸さし成らん

徑霞

行末を立へたてゝもさはらぬは霞の下の野邊の通路

橋霞

風をたにわたしもはてすたちこめて霞にしつむ久米の岩橋

江霞

伊勢の海や霞も遠く流れえの荻のふるはに春風そふく

瀧霞

薄氷とくるをとはの春風にかすみを結ふ瀧の白糸

河霞

おほゐ川山もとくたるいかたしも霞の袖に浪やかゝらん

海霞

浪の上も春の色にや伊豆の海の沖つはるかに霞たつらむ

湖霞

長閑なる國津御神の浦風にさゝなみ遠く立霞哉

濱霞

春寒みなは吹上の濱風に思ふはかりやかすまさるらん

島霞

春かすみ八重の潮路やへたつらん沖の小島の波にきえぬる

渡霞

いとゝしく行衛もしらしゆらの戸のかすみをわたる春の舟人

里霞

霞立つふしみの里の朝ぼらけわか世をへてもあらすとやみん

舊巣鶯

住なるゝをのかふるすはさすかまた心とめてやいつる鶯

初鶯

里まではや出ぬれと鶯のさへつりなれぬ聲そ聞ゆる

雪中鶯

降雪のきゆるをまたていとはやもなく鶯の聲の寒けさ

曉鶯

夜をこめて人くとつくる鶯も空音やなくとうたかはれつゝ

朝鶯

我宿にをのかねくらや近からしあくれはきなく鶯の聲

夕鶯

とまるへき花の宿とふ程なれや夕暮かけてうくひすのなく

里鶯

花の香のさそふまゝにやうつるらん里わかすなく鶯の聲

山家鶯

なれのみや谷をもいてん柴の戸にふるすならふる春の鶯（鶯の聲イ）

竹鶯

春の色も見えぬまかきの呉竹に花まつほとゝ鶯そなく

寢覺鶯

曉の鳥よりもなを鶯の初音きくにそおとろかれぬる

野若菜

君か爲行末遠くしめし野にけふ出そめて若菜をそまつ

原若菜

さえかへる朝の原の雪のうちにひかけまちえて若菜摘なり

澤若菜

雪をふむ澤邊の田鶴の後よりや千代のしるへと若菜摘まし

水邊若菜

袖は雪もすそは水にたちぬれて澤邊のわかなけふも摘なり

田若菜

春の田をかへすとはみぬ賤の女ちやすきわさとや若菜摘らん

岡殘雪

若葉さす岡邊の眞葛今も猶きえせぬ雪や恨なるらん

草殘雪

のこれたゝ若菜にあらぬ春草は人もはらはぬ野邊の白雪

木殘雪

吹はらふ嵐も今はいとはれす花まつ木々にのこる白雪

餘寒月

せめてたゝ霞にくもれさえかへる雪けも同しおほろ月夜を

餘寒風

ひとしほのみとりは見えて松の風春としもなき音の寒けさ

餘寒氷

吹とくもむすふも同し春風のまたさえかへりこほる山河

梅雪

かつみゆる花をはよきて咲やらぬしつえに殘れ梅の白雪

梅風

おもふかたありてや風もさそふらん空さたまらぬ梅の匂を

夜梅

それとみぬ色をは夜の思にて猶あくかるゝ梅か香そする

故郷梅

とはゝやなたかすみすてし里ならむ咲もふるさぬ梅の匂を

里梅

咲匂ふ花をしみれはわきてしもとはぬ梅津の里そしらるゝ

庭梅

いくたひかよそと思はゝ華見んなれてもあかぬ庭の梅か枝

隣梅

玉たれのこすのまちかき梅か香は風のなくらぬ匂成けり

隣家梅

わかゝたにゆかきこへて咲梅はかたえ計のあるしとそなる

梅移水

うきてゆく浪や匂を誘ふらん色をはうつす梅のした水

梅薫枕

ねやふかく匂ひにけりな梅か香をまつとや風につけのを枕

梅香

さそひくる程はまたれて梅か香のとまれは袖にいとふ春風

折梅

あかなくに折れるかさしの梅の花老をかくすと人やみるらん

若木梅

まちとをに思ひし花も咲にけり我うへたてし梅の若木に

紅梅

紅の色にし咲かは梅の花匂ひもともにこそめならなん

落梅

さそふとも花こそ散らめ匂ひをは木末にのこせ梅のした風

柳露

いかにしてむすひとむらん青柳の糸にはちろき春の朝露

池柳

池水の誘ふとみゆるうき草につれてやなひく青柳の糸

門柳

年ふれと柳のまゆのみとりのみ老せぬ門を見てそなくさむ

岸柳

よと舟のつなてに糸を引そへて柳みたるゝ淀の河岸

河柳

はし姫の柳の衣のかたしきにあらくなかけそうちの河波

路若草

里人のよきける跡もあらはれぬみちのゆくての春の若草

岡早蕨

時しらぬ岡への松の下わらひいつとわかてやもえ出ぬらん

樵路早蕨

山人のおり侍したるさわらひはあすのみちをや穎めをきけん

山春月

くろゝより葉山の月はいてなから霞にくまを猶のこす哉

関春月

あふさかの関の杉むらもる月は霞ますとてもさたかならめや

江春月

春あさき入江のみさひすみやらて芦のふる葉に月そ霞める

春曙月

咲ぬやと花まつみねのよこ雲にもれ出て匂ふ有明の月

春月幽

老てうき袖には月もやとるなよいとゝ泪に霞もそする

朝春雨

朝またき霞の色にいつゝ目もくもりはゝてぬ春雨そふる

夕春雨

のきはまてふりくる雨も白雲の遠かた霞む春の夕暮

谷春雨

春さめにうるほふまては見へなから時をもしらし谷の埋木

野春雨

みとりなる草の若葉に露そおくなのみふる野の春雨の空

庵春雨

春ゝあふ雨の恵もしらしかしかりふく草の庵の軒端は

春駒

手になるゝ野かしの駒も春くれはたゝにはよらて引やかぬ覧

岡雉

夕日さす岡へのきゝすれにたてゝ姿も共にあらはれやせん

野雲雀

そらにのみありとはみえて春のゝを遠くはゆかぬ夕ひはり哉

路雲雀

さと人の行かふひろを道のへにしはしおりゐてなくひはり哉

帰雁知春

またきより春とはいはし白雪のきえぬこしちに雁のゆくらん

帰雁

かすむ夜の月にわかれて行雁はかすさへ見えぬ在明のそら

夜帰雁

かへるかりしたふ心もふかき夜の哀をしらてなといそくらん

帰雁連雲

ゆく雁のつはさにかゝるしら雲をかさして帰る花とたにみよ

嶺帰雁

鴈のゆくみれは朝日もむかはれは霞のうちや猶たとるらん

海歸鴈

誰か春にさそはれそめて越の海のあらき波わけ鴈は行らん

遠歸鴈

かす〱にむれてゆかすは春の鴈遠さかるをも其とみましや

歸鴈似字

歸る鴈をのかすかたも玉札にかく言の葉の數かとそみる

歸鴈幽

程もなくはるかになりぬ都をはかへりみもせて歸る鴈金

春山

たえてこそ住はてすとも吉野山花ゆへにたに尋さらめや

春野

野へみれはおなし草葉のみとりにてむら〱みゆる萩（荻歟）の燒原

春關

春は又關ふきこゆる風の音も長閑になりぬすまの浦波

春河

風わたるあとゝな見えそさくら川名に立つ花の波もこそあれ

春海

長閑なる春にしあへは世を海と思はぬあまや釣に出らん

野遊

なかき日も入野の櫻つほすみれあかぬ草（葉イ）木の花に暮しつ

遊絲

春のきる衣ぬふてふ業なれや霞のうちにあそふ糸ゆふ

待花

此頃は思ひし花も咲やらて猶あやにくにまたれつる哉

栽花

とはるへき人待顔に見えやせんうゑてなくさむ花の一木を

尋花

咲さかすまた白雲を花とのみ思なしてやけふもたつねん

初花

新玉の初花さくら又さきぬふりゆく身をも忘てやみん

見花

あかすみる花を我身のいのちにて物思ひなき春もへにけり

翫花

おるもおし歸るもつらし花の陰いかにしてかは猶みはやさん

折花

かくてしもほとなくちらは櫻花おりける枝やくやしからまし

交花

人めをは思ひもやらて咲花になをたちましる老の身そうき

曉花

木のまもる有明の月にならへたゝ花もつれなき色や殘ると

朝花

あけてなほのころとみつる横雲は日かけへたつる櫻なりけり

夕花

見てかへる人の心はいかなれや月まつほとの花のゆふかけ

夜花

すきやすき花のさかりの程たにもかすまてみせよ春の夜の月

山花

春はたゝ身を山人になしはてゝいくかも花のかけにやすまん

嶺花

峯たかくさかすはいかて山櫻よそまてあかぬ色をみるへき

谷花

山人のゆきゝはかりのかさしとや谷陰深く花は咲らん

岡花

風かよふ岡邊の松の陰にしもあやなく花の咲ましろらん

社花

さくら咲みかきの杜の枝ことに花のしらゆふかけぬまもなし

野花

いつよりか雪とふるのゝ花のかけわけゆく風の跡を恨みん

關花

見てすくる人しなけれは相坂の花やまとの春の關守

瀧花

吉野山櫻をさそふ瀧つせの岩にくたくる花の白浪

禁中花

いく春もみはしの櫻色まされ雲井の花は風も及はし

社頭花

いかはかり神もうくらん今年より君かたむけの花のちもとを

古寺花

なをそみむとよらの寺の花盛りひかけは山の西になるとも

故郷花

尋きておる人たにもまれなれはやつれぬ花のしかのふる里

里花

けふはまつ吉野の里の花にきてあすや山路の奥を尋ねん

山家花

憂世をはのかるゝ人も山里の花にや風をいとひきぬらん

庭花

あるしこそ數ならすとも庭の面の花はいかにと人のとへかし

閑居花

花のちる後をまつへき人めたにたのめぬ花に春風そ吹

花雲

散まよふ外山の花のうき雲はともにあたなる春風そ吹

花雪

しつえよりかつちる花の白雪にまたれぬ風の跡をみる哉

花梢

たかねまてかさなる花の梢こそ雲より上の雲とみえけれ

花枝

心ある人にやひともゆるすらんたをるはおしき花の片枝を

花下

春ごとにかはらぬ花の木のもとはいくさと人のやどり成らん

花根

つれもなきとしは我身に花は根にかへる恨の春ぞ積れる

花挿頭

かはらしな大宮人も里人もあかぬ心の花のかざしは

花手向

さくら咲ころこそとはめ棹姫もたむくる花のありやなしやは

花麻

暮て行春のかさしと見るもうしちりかふ花のぬさの追風

花袂

春の色にそめもなされぬ苔衣匂ふを花の袂にやせん

花衣

さくら色にそむる袂をそのまゝにかさねてぬるゝ花の下ふし

花鏡

さくもなたくもらしものを池水にちるさへ清き花の鏡は

花錦

あき人とひとや思はん身におはぬ花の錦を袖にふれなは

花匂

花はなをちらて匂を散すこそもほしの風のこゝろなりけれ

花色

おろかなる心ひとつに染をかは我ゆへ花の色ややつれん

花便

とひとはれゆくもかへるも春はたゝ花こそ人の便なりけれ

花主

いさゝらはみ山櫻を移しうゑて我身も花のぬしといはれん

花面影

したひわひうきにつけても忘れめや散にし花の跡の面影

花形見

かたみそとみるもあたなる浮雲をいつより花にまかへ初けん

惜花

しらせはやたゝ大方にしたふぞといふにもたへぬ花の名殘を

落花

山風のはらふとみつる浮雲はちりかふみねの櫻なりけり

殘花

うつしける青葉を風のへたてにてたゝ一枝の花ぞ殘れる

三月三日

はやく過をそく來るもさま〳〵にあかぬ流の花のさかつき

桃花

世々かけてあかすや君もみちとせになるてふ桃の花に契らん

梨花

思ふことなるみもやすき山なしの花咲く御代の春をたのまん

山田苗代

一かたにあとをかさぬるを山田は苗代水も早くおつらん

路苗代

里人のゆきゝのみちやせはからし苗代水のこすにまかせて

河邊苗代

せきいるゝ苗代水も遠からしふる川野邊の春のあら小田

夕蛙

暮わたる霞の下の澤水に月まつとてや蛙なくらん

田蛙

花もちり春もくれぬ(るイ)と三吉野のふもとの小田に蛙なくらん

野菫

菫摘む野邊はいくかもあかなくに一夜ねんとは誰かいひけん

庭菫

かきねなる苔にまかひしすみれ草花咲てこそしるくみえけれ

摘菫

すみれ草すみにもそめぬ袖ふれてなといたつらに年を摘らん

松下躑躅

おなしくは松の下てる岩つゝしこすゑになとか及はさるらん

躑躅紅

紅のいろをときはの山ならは岩根のつゝしいつも見てまし

池杜若

むらさきのつはさもおなし杜若へたてそみゆる池のをし鳥

澤杜若

澤水のみくさに花はさかねとも春の色あるかきつはた哉

款冬露

をのゝえのくちなしそめの山吹も山路の露にぬれてほすらん

夕款冬

月をまつ庭のまかきのひとかたに夕日かたふく山吹の花

路款冬

折とるもおしとはいはぬ色なれや道の行手の山吹の花

池款冬

池水の玉もをゝきて山ふきの花にそあそふ春のにほ鳥

河款冬

よしの河岩もとさくら散しきてくちぬる色にまかふ山吹

島款冬

たちはなのこしまか崎のむかしともかたらぬ色に咲る山吹

岸款冬

いつくよりなかるゝ花の種ならんうへぬにさける岸の山吹

庭款冬

庭の面に春の草木をつくしても名たかくみゆる山吹の花

里款冬

袖の色もしるくそ見ゆる山吹の花の戸ほそをゐての里人

籬款冬

色もなき草のまかきと見えぬへし八重山吹の花も散なは

夕藤

暮かゝる葉山の松にさく藤の波や入日の影うつすらん

岡藤

花ちらす風に心を岡のへの松にはなとかかゝる藤なみ

池藤

風吹はともにみたれて咲藤の花も岩こす池のさゝなみ

江藤

松風のさはく入江にさく藤のなみにもうく（うつるイ）かあまの捨舟

浦藤

鹽くまぬたこの浦はのあま人も袖にやかゝる春の藤波

岸藤

住よしの松にかはらす相生の岸の藤波いく世かけゝん

松藤

子日せし松とゝもにやひかれけんおなし絮る春の藤波

春欲暮

さそひこん花の色香も今はなしなにそはありて袖の春風

暮春月

したひえぬやよひの末の有明は霞むとたにもしる程そなき

暮春雲

ちる花にまかひし峯の横雲や又ゆく春に立わかるらん

暮春霞

したふへき身をいとひてや行春のあとを霞に立へたつらん

暮春鐘

うしときく我も名残の鐘の音におとろかされて春や行らん

留春不駐

春にさへ又ふるさるゝ身は老て花よ鳥よとなにしたふらん

惜三月盡

したふへき方こそしられ行春もあやなきやみの一夜はかりに

三月盡夕

たか春のなこりもさこそけふ迄と霞はてたる夕暮の空

三月盡夜

かひなしやこよひ一夜の春をたにをくりもはてぬ夢の通路

閏三月盡

したふとて又くはゝれる春もかな後のやよひのけふの別に

夏百首

首夏

けさよりは春にかはれる花鳥を友と契りて夏やきぬらん

朝更衣

春秋をわけてつかふる宮人もけさはひとしき夏衣哉

更衣惜春

夏衣うす花そめの色をたにのこさぬ袖はきてもかひなし

餘花

木かくれになを咲花としらすなよ春を尋ぬる風もこそあれ

新樹

せめてなをしげる木陰にやとらはや青葉も花の跡ならぬかは

路卯花

卯花かまことの雪かこれも又夢とそたとるをのゝ山みち

籬卯花

あしかきのまちかくみても卯花の光は月に猶まかひつゝ

田家卯花

を山田にせきいるゝ水のにごらぬは咲卯花のかきねなりけり

卯花似月

久かたの中にもおひぬ卯花はなにゆへ月にまかひ初けん

卯花似雪

咲みちてなびきふしたる卯花やはらへと消ぬ雪の下おれ

葵

神わさのたえぬみあれに葵草いく世かけても色はかはらし

待郭公

たのめおくならひもあらは時鳥うきいつはりの數やかされん

尋郭公

花ゆへにいりにし山のほとゝきす是も吉野の奥や尋ねん

初郭公

めくりあひてきくそ程なき郭公いまの初音はこぞのふる聲

人傳子規

にとゝきすおなし都のうちにたに人をわきける程そしらるゝ

杜宇未遍

郭公またさとなれぬ聲よりも五月をこそはまつへかりけれ

月前時鳥

里わかぬ月につれてや郭公わかやとまても鳴てきぬらん

雲外郭公

まつとは月とゝもなるうき雲にさはらすきなく郭公哉

雨中子規

むら雨ををのか涙にかりそめの聲もほとなきほとゝきす哉

曉蜀公

時鳥たかしのゝめにわかれきて我ひとりれの覺とふらん

曙時鳥

いる月の名殘にかへてほとゝきすなくや外山の明ほのゝ空

朝郭公

待あかゝうらみもはれぬ朝くもりなをさりになく時鳥かな

夕霍公
暮もあへす早聞そめつほとゝきす今夜ゃ安くねてもありなん
夜時雨
待あかす心なかさら郭公しらてやきなくみしか夜のそら
山郭公
ほとゝきす今こそをのか五月山鳴音空なる名にも立らめ
杜子規
ほとゝきす世にふる聲のとしをへて我々老曽の杜になくなり
岡杜宇
さとわかすをとつれてたに郭公なにを忍ふの岡になくらん
野時鳥
忍ひねもかきり有とや郭公すかのあら野にあらはれて鳴く
原時鳥
深山いてゝたひにしあらは郭公一夜やとかれをのゝ篠原
關子規
杜宇よふかくなきて清見潟よこめもあへし波の關守
浦時鳥
きかはやと思ふかたより郭公なくねを誘ふ須磨の浦風
渡時鳥
郭公聞へき人の宿なくはさのゝわたりをよきて鳴なん
夢中杜宇
夢ならは覺さらましをとはかりに蕀ふかひなきほとゝきす哉
寝覺郭公
心ありてやと近くなく郭公老のねさめを誰かつけゝん
獨聞子規
ねてまかす人やうらみん郭公われのみきゝておとろかさすは
郭公幽
まかふへきなくねならねは郭公ほのかなるをも猶や頼まん
田家早苗
余所ならぬ賤か門田のあけたてはやかておりはへとる早苗哉
急早苗
きゝわかぬたこの諸聲さまゝゝに急くと見えて早苗とるなり
早苗多
をそくとくつきせぬ種はあらはれていつくの里も早苗とるゑ
池菖蒲
さしもこそなかき菖蒲にひきかへてねをたにとめぬ池の浮草
沼菖蒲
日影まつあさかのぬまの朝露をほすまもなくて菖蒲ひくなり
苅菖蒲
かのをかの草には手なるゝ賤のをもけふや淀野の菖蒲なるらん
盧橘薫風
匂はすはいかてしのはん立花の風やむかしの袖をしるらん

雨中盧橘

むかし思ふ袖はさらても露けきに雨にそ匂ふ軒の立花

簷盧橘

袖の香もわするはかりに老ぬとも思ひなすてそ軒の立花

樗

これもまたみて過かたき木陰哉あふちかつちる花の夕はへ

夜五月雨

あめをきくさ月の夢のみか夜になか〳〵しきは軒の糸水

山五月雨

さみたれにたえぬしつくのもろ山は染めぬ下葉や終に朽なん

杣五月雨

五月雨にほさて朽木の杣くたしいたつらならんためしにや引

橋五月雨

浪こえてわたりやかれん五月雨はいとゝ日数もふるの高橋

江五月雨

まのゝうらや入江の漣波こえておはなかみすろ五月雨の比

瀧五月雨

瀧の糸のたえぬといひしあとも又いつはりになる五月雨の比

河五月雨

晴やらぬ日かす積りてみなの川ふちとのみなる五月雨の比

湖五月雨

さゝなみや八十のみなとも水こえて浦〳〵かはる五月雨の比

浦五月雨

五月雨ははれまありとも海士人の鹽くむ袖をほさんものかは

故宅五月雨

五月雨のはるゝ日をのみ忍ふ草おふる軒端そいとゝあれゆく

夜水鷄

あけかたのゆふ付鳥やこたへまし槇の戸たゝく夜半の水鷄に

夏夜

おしとたに思ひそあへぬ夏の夜をねて明すへき程しなけれは

雲間夏月

あけやすき空をかくしてあかすみろ月にはよきよ夜半の浮雲

水上夏月

下くゝる水には秋をこめなからむすふ程なきよはの月哉

樹陰夏月

露はかり袖におちきて茂りあふ木陰は月のもろとしもなし

夏月涼

涼しさもいとゝまさこにすむ月は霜よりふかき雪とこそみれ

夏月易明

猶のころかけにそとはん夏の夜はあくるや早き月やおそきと

瞿麥露

塵ならぬ露をはよしやすへてみんさてしもあらぬ常夏の花

庭瞿麦
しけりあひて花なき草はうつめとも猶あらはるゝ常夏の花
夏草露
ほともなき夜のまにいかて結ひけん朝露ふかき庭の夏草
野夏草
草ふかき野守のかゝみよそなからみるともかけや猶茂るらん
杜夏草
かる人も分えぬはかりしけるらしさかり過たる杜の夏草
庭夏草
千種まてうつしうへなはいかならんさらてもしける庭の夏草
徑夏草
里人のかよひなれたる道もなをたとるはかりや猶しけるらん（しける夏草イ）
夏山
夏深き立田の山のむら雨にみとりの色はちしほなるらん
夏野
露しけき夏野のまくす風吹けはいまかへりこん秋そ覺ゆる
照射
終夜もゆるほくしはかり人のつみさへともに消やかぬらん
鵜河
うかひ舟夜河ほとなき在明の月にやきゆるかゝり火のかけ
夜螢
晴る夜の星の光をかはしてもをよはぬ空にとふほたる哉
橋螢
かつら木の神の思ひや岩橋のよる／＼もゆる螢なるらん
水上螢
夜とゝもにもゆる螢ややり水のやるかたもなき思ひなるらん
池螢
いけ水はあらくもよせぬ浪の上にをのれくたけてとふ螢哉
江螢
とふ螢入江の波のよるかけてあしかる舟のしるへとやなる
澤螢
飛螢もとのすみかや忘れ水いとゝ野さはの草ふかくして
浦螢
さ夜ふけて須磨のもしほ火たくそとも思はぬ方に飛螢哉
草螢
夏草のしけき下葉や朽ぬらん夜の螢のかすまさりせは
螢似露
風をいたみ草葉わけゆく螢こそ結ひかれたる露と見えけれ
螢似玉
伊勢の海や玉のかすとてひろふへき人もなきさに飛螢哉
蚊遣火
賤の女かたてゝ程なきかやり火の煙そのころ明ほのゝ空

垣夕皃

垣れより軒端をかけて山かつのかさしにあまる夕皃の花

池蓮

うき世には心をそめぬたとへまてみるにも清き池の蓮葉

氷室

わきてけふ（にイ）平野の杜のちかけれはうたの氷室は千代も絶せし

夕立風

外面なるならの廣葉もたえぬまて夕風あらし夕立のそら

夕立雲

鳴神のめにみぬをとも雨雲のよそに過行く夕立の空

山夕立

高砂や尾上にかゝる夕立の雲もとまらぬ松風そ吹く

河夕立

みなせ川かはかみくもる夕立に程なく波の音さはくなり

夕立早過

草も木もをきあへぬ露の消ぬまに照る日をやとす夕立の跡

杜蟬

風おちて鳴れも涼し蟬の羽のうすき名にたつ衣手の杜

樹陰蟬

しけりあふ木末はかりになく蟬はなれて日影を厭ふとそみる

松下水

松風か水の流かすゝしさはいつれともなき音の聞ゆる

夕納涼

思ふとちかけにむれゐる松風のたゝまくおしき夕涼哉

樹陰納涼

しみつせく柳のかけは夏ひきの糸もすゝしき風そよりくる

納涼忘夏

涼しさはなにをか夏と岩井くむ袖におちくる松の下風

六月祓

君か爲千代の秋待つとしとのけふのみそきは神もうくらし

秋二百首

立秋朝

あけぬとはかたえ涼しき天津風けさみにしめて秋は來にけり

立秋天

まつとを雲井はるかに思ひしもほとなくきぬる秋の空哉

立秋日

朝戸出の袖にむかへる日影まてさすかに秋の空そしらるゝ

立秋風

うちなひき四方の草木もけさよりや秋立風の宿り成らん

立秋露

いつしかと露おきそふる我宿は風にもつれぬ秋やきぬらん

初秋曉

秋きぬとをのか時しる鳥のねや風よりさきにおとろかすらん

初秋夕

いつの間に詠わひぬる暮ならんきのふけふこそ秋もきにけれ

初秋夜

秋のくろ霄の間はかり見えてけり月の桂も初紅葉して

初秋雲

なかむれは空ゆく雲もたゝならす又めくりあふ秋のしるしか

初秋衣

うつせみのはつ秋かけてうす衣かはらぬ袖の風そみにしむ

待七夕

いつはりのある中ならは七夕もまつに心をなほやつくさん

七夕雲

たなはたのひもとく雲の衣をはあまつ少女や空にかすらん

七夕霧

わたる瀬はたちかくすとも星合の名やはもりこぬ天の川霧

織女橋

たつた姫たなはたつめに手向てや紅葉の橋を空にかけゝん

織女衣

星合の秋さり衣おさをあらみなとかまとをに織はしめけん

牽牛女

中たえぬ契もまほの追風にやすくそ出むあまの川波(舟遊)

七夕後朝

あまの川あふせあけゆくけさや又われに鳴わたるかさゝきの橋

曉露

夢そとて結ふもおなしあた物をね覺の袖の露はいとはし

朝露

我袖にをきあかしつる夜半の露けさの草葉にくらへてやみん

夕露

月出はかけやとすへき袖の上にいくへもむすへ秋の夕つゆ

夜露

はらへともつきせぬ露は秋の夜の袖にいくたひ結ひかふらん

野露

木の下も草葉の上もいつくをか露のひまとはみやきのゝ原

徑露

朝また誰か分過しあとゝてか露しとろなる道のさゝはら

原露

我袖にいつならひてか古をしのふか原の露はみたるゝ

故鄕露

いく秋をたかふる里と成ぬらんふかさよもきの露もはらはて

庵露

名にたてゝ草の庵は秋ことに露をけとても結やはせし

庭露

袖をこそ我とらはらへ庭におく露をは風にまかせてやみん

草露

暮もあへす籬の草のうちしほれ夜をきそへん程そしらるゝ

浅茅露

つゆをたに光にみせよあさち原秋とてさける花しなけれに

苔露

我袖もおなしたくひの苔の露秋ふかくともよしやはらはし

袖露

秋をへて身にそふとしの数迄もほしあえぬ袖の露にみゆらし

枕露

いたつらにれぬ夜の枕ひましあれは心のまゝに露もをくらん

夕荻

誰かうへし荻の葉とてか秋風を夕暮ことにきゝはわふらん

夜荻

かつうらみかつはなくさみなかきよの友となりぬる荻の上風

江荻

住吉の松より風をうつしてやいりえの荻も音まさるらん

庭荻

折からかきく我ゆへか風の音のみにしみまさる庭の荻原

簷荻

月はまたのきもる程にふけぬよに袖とひわたる荻の上風

野萩

分ゆくも猶あかなくに立かへりこゝろひくまの野邊の秋萩

行路萩

眞萩原つゆ分ゆけはおのつから錦たちきる袖とこそなれ

河萩

まはきはらちりてなかれん花もおしゐせきとめよのちの玉川

崎萩

いさしはし舟とめてみんあまのすむ野島かさきに眞萩咲なり

庭萩

野邊ちかき家ゐなりせは棹鹿のあとをやまたん庭の萩原

女郎花靡風

女郎花あたなる風になひくともしめゆふ宿のぬしを忘るな

野女郎花

我ならてあふ人もなき野邊にきて名に立ぬへき女郎花哉

徑女郎花

よきてゆく道しなけれは女郎花わくるたもとを人やとかめん

岡薄

わきてけに露もあたにや岡の邊の尾花か袖はゆたかならぬに

原薄

たひ衣尾花にまかふ袖よりもすそのゝ原は猶そ露けき

徑薄

あふ人の袖かと見えて道のへの行衛をとへは尾花なりけり

苅萱亂風

さのみなとふすゐも宿をかるかやの跡まて風は吹みたすらん

岡苅萱

岨のなか岡邊の草をかるかやのまれに殘るもなほそみたるゝ

庭苅萱

さすかまたまかきを風のへたてにてみたれもはてぬ庭の苅萱

蘭薫風

移秋の名をかよはして藤はかま風にもあかぬ匂ひなりけり

蘭露

露にはやしほるゝ野邊の藤袴ぬしとなりても誰かきてみん

野蘭

秋深きすまの上のゝ藤はかましほなれてしも露やをくらん

籬蘭

おき出て見るを時なそ朝良はかきほの露をはらふまもなし

曉虫

なかきよもさすか曉は有明の月をや友と虫の鳴らん

夕虫

我心つくす限りかきり〳〵す鳴夕かけの秋のあはれは

夜虫

夢にたに誰をまつ虫いたつらにぬる夜もなしと音のみ鳴らん

野虫

風にちる野もせの露を命とてたのむはかりに虫や鳴らん

原虫

露深きをのゝ篠原をのれさへ涙そへてや虫の鳴らん

徑虫

つれもなき人松虫に思ひわひたかゝよひちに出て鳴らん

庵虫

露けさはなのかならひの宿りとや草の庵に虫の鳴らん

庭虫

軒はなる松の名にあふ虫の音は露のゝちにもあらはれてなけ

閨虫

夜を殘す枕ならへて閨のうちにかたらひあかすきり〳〵す哉

閨虫

しらせはや夜寒の秋の虫のねはよはるにつけて聞わふる身を

曉初鴈

したひけん故郷人のね覺まて思ひしらるゝ初鴈の聲

夕初鴈

都をはいまた旅とや迷ふらんやとゝふくれの初鴈の聲

夜初鴈

風さむみ誰に衣をかりかれのよふかくなきてつけ渡るらん

雲間初鴈

立わかれふるさと出しうき雲をつはさにかけて雁やきぬらん

山初雁

こしちにはいつしかゝはる嶺こえて都の山に雁やきぬらん

嶺初雁

峯こゆる初かりかねもはし鷹のとかへる山やよきてきぬらん

遠初雁

たかゝたに傳へんとてか都をはほるかにすくる雁の玉つさ

遅初雁

玉札をまちみんとしも契らぬに我宿近く雁はきにけり

初聞雁

鳴雁をしはしそたとる別にし春より後はきゝもならはて

初雁曙

曉の鳥の音ならて鳴こゑをなにそと聞は秋の初雁

朝鹿

里ちかき野にふす鹿の何ゆへか山路わすれてけさも鳴らん

夕鹿

秋の日の入あひの鐘を聞もあへす山より出て鹿そ鳴なる

夜鹿

さそなうき待みる夢の契りたに鳴やをしかの夜の妻こひ

山鹿

いつはりのある世を秋の山ふかみつまとふ鹿もさこそ鳴らめ

谷鹿

つまこひに鹿なく山の谷水やをのか涙の河となるらん

岡鹿

思ふをかきかはしてや水くきの岡邊の鹿は妻をこふらん

野鹿

下はきの露わけわふる程なれやくろすのをのゝ棹鹿の聲

原鹿

うき中のとを妻こひて鳴鹿やまたあふともゐなのふし原

海邊鹿

みなと田のなることゝもに引く網のめにも驚く鹿や鳴らん

田鹿

秋の田をかりての後はさのみよもおとろかさしとを鹿鳴なり

野鶉

ふしわひてうしともえやはいはれのゝ露ふく風に鶉鳴なり

江鶉

よせかへるまのゝ入江のうき波に鶉の床や定めかぬらん

里鶉

誰かなた秋の思ひも深草の里を鶉とともに住むらん

曉鴫

よな／＼のなみたの數をくらへはや我も覺は鴫のはねかき

澤鴫

澤水もむすはぬ物を鴫の立羽音はかりに袖のぬるらん

田鴫

露ふかきいなはをふきて立鴫はかり田の面や宿りなるらん

秋田風

ひかぬまのなるこにかよふ秋風や小田もる人をおとろかす覽

秋田露

かりそむる稲葉の雲はかつ晴れておくてに殘る秋の夕露

秋雨

ほしわふる我袖ふきよ秋の雨そむる草木のたくひならぬを

山霧

秋ふかき霧のうちなる小倉山くらきにつけて名こそしるけれ

野霧

秋の野に霧のまかきはみえなから草のとさしはいつく共なし

關霧

鳥の音そしるへなりける關の戸はあくるともみぬよはの秋霧

河霧

舟くたすこの里人もたとるらし曙暗き淀の川きり

浦霧

明わたるふきの浦松ほのみえて波と霧とやたち別るらん

駒迎

望月の影を都にまつみせて駒ひきのほるあふ坂の關

八月十五夜

こよひなを月にそめてんとても身の老とはなれる秋の中に

夕月

西にのみまちてこそみれ夕月や出けむかたはそなたならねと

夜月

いたつらにねぬ夜も月の爲なれはしはしもあたに詠やはせん

曉月

秋風にはらひつくして曉の雲にもあはぬ月をみる哉

山月

あけぬとて月は入ともあかなくになかめはすてし姨捨の山

嶺月

まつほとの遲きをかこつ高根にも出てなくさむ月の影かな

谷月

月そとふ谷の戸迄もすむ人の有やなしやと影をてらして

杣月

杣河の筏を月にくたしてや夜も宮木にこゝろ引らん

岡月

かたをかの木間の月の有明はあしたの原の露まてやみん

杜月

とふ人のなくは生田の秋ふけてひとりや月も杜の下草

野月

うきまよふ雲間の月やかけろふのをのゝ草葉に宿りかぬらん

原月

たれかまた今夜の月をみかの原都出けん草の枕に

關月

はつかなる隙をすきの關の戸にやすくや月もこえて行らん

徑月

さはるへき木影たになき道のへの月は我身やくまと成らん

橋月

すみわたる月にめてゝやおやうきも忘れて通ふ木曾のかけ橋

水邊月

名をきけはおほゐの淸水さもあらて氷るはかりに澄る月哉

池月

うつもるゝ池のみ草を吹風にたえ〳〵やとる月の影かな

澤月

螢をはうつまて露にこほれたゝ月影淸きふしのなる澤

沼月

人めなき岩かき沼を尋ねてもところをわかぬ月や澄らん

江月

蘆の葉にさはるとなれはあく迄もえそみしまえの夜半の月影

瀧月

よもすからこほりて音のたえせぬは吉野の瀧に澄る月影

河月

底まても月にさはらて名取川なにそはありてせゝの埋木

湊月

あかすみる月のみ舟のよる〳〵は袖のみなとも何かさはらん

湖月

秋もまた月のこほりにまかへつゝみわたりすらしすはの水海

浦月

漁せて月にひまある蜑ならはさよもふけゐのうらみやはなき

濱月

月にふくをとは高師の濱風もはらはぬ松に影やさはらん

磯月

鹽風の音ふきこしてさゝ島のいそうつ波に月そみたるゝ

汀月

あまのすむ汀のとまやあれまくも(なイ)おしまの(ねイ)月の影やもるらん

崎月

明ぬともいはてやみまし箱崎の松の木蔭に月をしたひて

島月

涙にとめ袖にもしたへ夜半の月かたふくかたのおきつ島守

潟月

あはちかた鹽ひをおくる浦風に月もはるかの沖に見えつゝ

泊月

月にこそあかぬ泊りとしられけれなを友舟の夜を契て

波月

ゆらの戸の行ゑもしらす漕舟は月にやいとゝかちをたえなん

田月

白露のおくての稲葉むら／＼にかり田の月や影をわくらん

都月

秋をへてなをのとかなる御代なれは月も都やすみよかるらん

禁中月

百舗や雲井の月をみるにこそちさとの外も思ひ忘るれ

社頭月

その神のかみ路の山を出しよりすむにかきりもみえぬ月影

古寺月

苔ふかき軒端の月も墨染の袖をやてらすみれの古寺

村月

ふけぬなりおり／＼人の音はして月しつかなるさとの一むら

故郷月

露なから月ももりくる影おちて軒はあれ行秋のふる里

里月

さらしなの月にみてなはよそよりも此里人や老となるらん

山家月

松影をたよりになしてすむ山は月みる秋そくやしかりける

庵月

露けさも人こそわふれ月はさそすみよき草の庵なるらん

庭月

いく夜かは草の庵にとゝめまし月にしめゆふならひなりせは

井月

影きよき月のもりくる山の井はむすふ雫も何かにこらん

関月

村雨のすきつる関の板間より雫とゝもに月そもりくる

隣月

中垣にひかりをわけてすむ月も我身のかたやおほろなるらん

閑居月

ことしけき人の詠めやかはるらん身はのとかなる宿の月影

舟月

月をみるさはりとならは沖津舟まほになかけそ風は吹とも

惜月

夜とゝもにあかぬ詠の有明やしたふにとまる月とみゆらん

夜擣衣

秋ふかき霜夜の鐘にたくひきぬあはれいつくそ衣うつ聲

里擣衣

夜を寒みはや暮かたの秋しのや外山の里も衣うつなり

聞擣衣

聞わけぬ世のうきわざを賤の女がひとりおきゐて衣うつ聲

遠擣衣

秋風もわれきけとてはきそはしを誰かことつても衣うつ聲

近擣衣

うらみはや衣うつなるあつまやのまやのあまりに近き響を

秋夜長

あかすみる月さへ入ていたつらになが夜をのこす窓の燈火

野分

花さける千草もちゝにみたるらしあらき野分のあとの夕露（秋風イ）

葛風

ひとかたに吹しくほとは葛の葉もかへりかれたる野への秋風

徑葛

わけゆけは袖にみたるゝ葛の葉や風よりさきの恨なるらん

墻葛

ひまみえて草のまかきのあれ行を殘る葛葉や猶かくすらん

野草欲枯

花すゝきいそかぬ袖の初霜にかつしほれゆく野への色哉

栽菊

うへてみる一もとゆへに庭の面の草はみなからにほふ白菊

菊露

幾千代の秋ともえやはしらきくにおけらん露の數をかそへて

山菊

君かため山路の菊をわけゆかは我もちとせの坂やこえなまし

谷菊

たれかまた菊の下行谷川のなかれを汲みて千代をまつらん

水邊菊

山河にたえせぬ浪の花なからいく秋かけてさける白菊

尋紅葉

ちしほとはきかぬさきよりおもかけに立田の梢今や尋れん

初紅葉

余所まては未た白露の下紅葉あすや殘らぬ色にしくれん

葛紅葉

木にもあらす草としもなき頃ほよりみゆるは葛の紅葉成けり

柞紅葉

ちしほなる梢にましる柞原うすきにつけて色そまかはぬ

槇紅葉

うすきりの立枝も色はほのかにて山本遠きはしの紅葉は

山紅葉

時雨にもをくれぬ物を小倉山こゝろをやりてそむる紅葉は

嶺紅葉

明わたる横雲なからうちしくれ嶺の紅葉も色そわかるゝ

谷紅葉

岡紅葉
谷かけに夜のにしきの有とたにしらぬ木末を誰かきてみん

杜紅葉
露しくれちたひも染んもみち葉をやしほの岡とたれ定めけん

行路紅葉
紅にそむる時雨にかしは木のもりの廣はも色つきにけり

瀧紅葉
けさみつる梢や又もしくれけんかへさは色の深きもみち葉

河紅葉
たきつせにさらせる布はいつの間にあらぬ紅葉の錦なるらん

岸紅葉
河風はさそへとちらぬもみち葉の影みる水も色まさりけり

古寺紅葉
散なはとみむろの山のもみち葉を立田の川のなみやまつらん

遠村紅葉
もみち葉を夕日とみてや初瀬山またきにひゝく入相の鐘

里紅葉
時雨つる雲のをちかた紅葉して人まちかほの里の一むら

垣紅葉
まさきちる庭のましはも色付ぬこゝろよいかにをのゝ里人

山かつのかたえ折かけかこひつるかきほの木々も色付にけり

庭紅葉
のきはなる紅葉をこしてみわたせは遠山松の下照すなり

簷紅葉
よそ迄もあらはれぬらし我宿の忍にはあらぬ軒のもみち葉

松間紅葉
奥山の松のしつえの朽葉さへ紅葉にましる色やまかはむ

竹間紅葉
染のこす枝こそまかへ呉竹のみとりにましる木々の紅葉は

紅葉増雨
うすくこく染る梢も定めなき時雨なからや色に出らん

紅葉映日
しくれさへなを下そめとなりにけり夕日の照す嶺のもみち葉

紅葉移水
露時雨おちてくも水の下紅葉うつるかけまてなをや染らん

紅葉如錦
故郷にきてかへるへき秋や猶紅葉のにしき色をそふらん

暮秋風
露もおち霧をもはらふ山風はめにさへ見えてかへる秋哉

暮秋雲
あすよりは秋をもよそにみねの雲いとゝ高間の山やしくれん

暮秋露

よしさらはいくへも袖にむすひなけ又こん秋の露の契を

暮秋雨

我のみやぬれてしたはん行秋はさはらぬ雨のつらき別を

暮秋霜

袖にたに猶せきとめよ秋の霜さこそ草葉はかれはてぬとも

九月盡夕

なをもけふ夕暮まてはたのむそよなかき一夜の秋を殘して

九日盡夜

ゆきてたに今夜一よは慕ひてん秋のとまりを知る身なりせは

九月盡曉

立田姫秋の別をしたふ夜の涙そへてや鳥も鳴らん

冬百首

初冬曉

行秋のわかれに殘る曉の雲を分てや冬もきぬらん

初冬朝

秋もなく霜そとみしをけさよりやゝかて草木の冬こもるらん

初時雨

ほしあへぬきのふの袖の露の間にやかて時雨る冬もきにけり

山時雨

秋の色もしらて過にしときは山いまをいつとて又時雨らん

嶺時雨

晴くもる時雨もよそに見えてけり風にたゝよふ峯の浮雲

谷時雨

山あひにおりゐる雲の上晴て谷かけのみや今しくるらん

杜時雨

秋まてそ尋ねて人もこからしのもりの朽葉は時雨のみして

關時雨

關守もとめぬにしはしやすらひて時雨を過す逢坂の山

野時雨

日影さへくるすの小野の村しくれ木の下まても猶いそく哉

河時雨

わたるへきさはりとならは澤田川しはし時雨る程やまたまし

里時雨

かきくもるなたの鹽瀬も風立ちてあしやの里は今時雨めり

閨時雨

閨のうちにひまもる月はさもあらてまたぬ時雨そ袖に落くる

曉落葉

秋の色をみしは夜の間の夢路にてねさめに落る木葉をそきく

朝落葉

夜半にふく木の葉の霜のけさとけて露と成とも色はかはらし

夕落葉

さひしさは秋にもまさる夕かな軒端しくれて木葉ちる比

落葉隨風

おしと思ふわか心にはしたかはて風のまゝにもちる木葉哉

落葉混雨

染をきし色をわすれぬ時雨こそちる木葉にも猶たくふらめ

山落葉

小倉山こえて過にし秋風のあともさためすちる木葉哉

谷落葉

ゆく水に沈まぬほとや谷風になを吹立る木葉なるらん

路落葉

風にこそとひてもゆかめもみち葉のふり隠したるをのゝ細道

橋落葉

松風もわたらぬ程の色なれや紅葉をしける天の橋立

庭落葉

枯のころ庭の尾花に散しくを袖にこきいるゝもみちとやみん

野霜

朝霜のふるのゝをさゝ分ゆけとひかけまつ間の袖はしほれす

田霜

いまもなほ霜のをくてと見えてけり山田のくろに殘る冬草

庭霜

ふみわけはこゝにもあとはみえぬへしとへかし人の庭の初霜

草霜

秋の色もいまはさなから月草のうつろひはてゝ霜結ふなり

篠霜

霜ふかき枯野にのこるをさゝはら青葉ありとも見えぬ比哉

谷寒草

心とや冬枯ぬらん谷かけは霜もをよはぬ柴の下草

岡寒草

常盤木のならひの岡の下草もなをひまもりて霜やをくらん

野寒草

春秋の色にうつりし人めさへ共にかれゆく野辺の冬草

原寒草

風さやく音も夜をへてよはるらし枯葉おちそふまのゝかや原

庭寒草

なをのこる尾花か袖はおほへとも霜こそうつめ庭の冬草

池寒芦

霜をかぬ池のみきはの浮草もあしのかれ葉にうつもれにけり

江寒芦

波かくる下葉は霜もをきやらて入江の芦そうらかれにける

湊寒芦

風さえてをく霜よりもみなと舟さはるやいたむ芦のむら立

谷氷

此まゝに春を待ちてやとけなまし日影もゝらぬ谷の氷は

瀧氷
石はしる吉野の瀧はよそよりも氷やかぬる水の白浪
湖氷
波の音を松に殘してからさきのみきはに氷るしかの浦浪
田氷
せき分ぬ水の心にまかせてやかり田の跡は氷とつらん
懸樋氷
すきかたきうき世の中はこれならん竹のかけひも氷とちけり
冬寒月
更過て袖にあらしのさゆる夜は月にもえこそさのみむかはれ
冬月冴
風わたる空は雪氣にさえ暮て雲の氷を出る月影
曉千鳥
浦寒きなみには月の影落てあけかたちかく鳴千鳥哉
夜千鳥
吹かへす夜の衣の浦風に妻とふ千鳥夢やまつらん
汀千鳥
うちわたす河せの波の夕千鳥聞すてかたきねをのみそ鳴
浦千鳥
もしほやくうら風さえてさよ千鳥たつや煙の波に鳴なり
濵千鳥
むれてゐる程もなきさの濵千鳥又立さはき波やこすらん
池水鳥
夜を寒み氷れる池の水鳥もうち出る波の花やまつらん
河水鳥
つかひえぬうきせなれはやなつみ川なつさひ兼て鴨の鳴らん
夜網代
世をわたるならひもうちの河風に幾夜かおなしあしろ守らん
網代寒
よをこめてあしろ尋る舟人もさほさしかれて波やこほれる
竹霰
吹風もともにあられの音なからまかきの竹は下おれもせし
篠霰
小さゝはら玉とみたれてかはらぬはおつる霰か露の氷るか
柏霰
ちり殘るしつえはかりの玉柏それもたまらすふる霰哉
屋上霰
露ならて霰さへもる槇の屋はあるゝ板間の程そしらるゝ
寢覺霰
槇の屋に音はあられのたま〳〵もゆるさぬ夢のうき寢覺哉
初雪
峯とほゝ積るとまてはみしかともけふそまことの庭の初雪

山雪

舟木とるその通路もたえぬへし雪の日をふる能登の島山

嶺雪

けふいくか雲をさそひて風こしの峰より雪の積そむらん

谷雪

谷かけの槇のかたえの雪折に人もわたさぬ橋やみゆらん

杣雪

杣木ひく聲にこたふる山彦もたえていくかのみ雪ふるらん

杜雪

下草もさすかに枯て時しらぬときはの杜は雪そ積れる

野雪

吹おろす音もあらちの山風にやたのゝ雪をいかて分まし

關雪

ふる雪の八重山ふかきあしからの關はもらて（くもらてイ）も誰かこゆへき

河雪

旅人のわたる袂にふる雪は一むらみゆるあやの川みつ

湖雪

雪もなをつきてこそふれまのゝ浦のをはなをしなみ氷る汀に

浦雪

白妙の袖師の浦のあま衣ほしあへぬ雪の波やかくらん

濱雪

もしほくむ跡のみゝえてとふ人もこぬみの濱の雪の朝あけ

島雪

鹽かまの浦風さえてけさみれは雪さへ波にうきしまの松

田雪

人はこて夜半にふす猪の跡はかり殘る門田の雪の明ほの

都雪

ゆたかなるとしをは空に白雪の都もふかく積りける哉

禁中雪

春近きみはしの櫻九重に積るも雪の花とこそみれ

社頭雪

住吉の松風さえてかたそきの行あひのまに雪そ積れる

古寺雪

ふる雪のつもれはいとゝ高野山うき世の道や隔はつらん

故郷雪

かよひちの殘るむかしの跡をさへ雪にやうつむしかの故里

里雪

雪ふれはこの里人の袖もまたしかまのかちの色やかはらん

閑居雪

思ひ出る人たにあれなまれにきて雪ふみ分ゝ跡はなくとも

松雪

兼てより風のやとりの松ならはさのみに雪はつもらさらまし

竹雪

下おれなさかぬききにやはらはまし雪にかたふく窓の呉竹

杉雪

淺からすふる川野邊の雪のうちに埋もたかし二本の杉

檜雪

心ありてこのまゝ人もかさせとやみわの檜原は雪におるらん

狩塲風

御狩野やつかれの鳥を追風に眞柴ふきしくをとの寒ける

夕鷹狩

はし鷹の草とるすゝの音なくはまよふはかりに狩くらしつゝ

野鷹狩

はしたかのとたちにあふを限にてゆくゑもしらぬ野への狩人

炭竈煙

山風もなを吹しきてふる雪にけふりそむてふをのゝ炭竈

遠炭竈

煙たつ大原山は遠けれと炭やくさとはしるくそ有ける

爐火

小野山の煙あらはにやく炭もほのかにむすふ閨の埋火

神樂

松風に吹あはせたる笛竹も聲すみわたる里神樂哉

佛名

となへおく佛のみなは過にしもいまもこん世も契りわするな

年内早梅

花の色はわきみぬ雪のふるとしにかつ咲梅のかこそしるけれ

歲欲暮

つれなやと年の思はんことはりも身につもろへき春そ近つく

夜歲暮

いたつらにぬるもねぬよも積きておしと思ふまに年そ暮ぬる

山歲暮

ゆくとしの數をますみの鏡山またや春日の影にむかはん

路歲暮

おしめとも暮ゆく年の通路をとへは我身そとまり成ける

河歲暮

したふとてとまるせもなしもかみ川この月はかり殘る年波

歲暮松

明はまた春をむかへん門の松ひまなくみゆる千代の影哉

山家歲暮

山里にならふ庵はなけれとも春のとなりそ近くなりゆく

閑居歲暮

草の庵松吹く風はさはけとものとかなりける年の暮哉

老後歲暮

のとかなる老の心は年のうちに我身はかりの春やきぬらん

惜歳暮

しゐてなを年の暮ゆく道しらは老の坂にも關やすへまし

戀二百首

寄天戀

ゆくゑなき思ひや空にみちぬらんまよふ心の果をしられは

寄日戀

この暮と頼めはいとゝあやにくに遲くいる日の影はうらめし

寄月戀

めくりあふたのみはかりの有明も更すきてこそ影はみえけれ

寄星戀

あふことを星のまきれの一夜とも頼みさたむる契りならはや

寄風戀

身を分て吹やいかにと尋ぬへきたよりたになきよその秋風

寄雲戀

つれもなき身を白雲の消やらてたえぬ中とはなに頼らん

寄煙戀

人しれぬ思ひの煙いかゝせんうきおもかけにつれて立なは

寄霞戀

へたつなよ霞める空のうたかひもさすかに晴れん中の思ひを

寄霧戀

まよふそよ身をたに秋の夕霧はたちよるへくも見えぬ契を（にイ）

寄露戀

契りなき身をあたものと白露のなにゝかへてか思ひ消なん

寄雨戀

晴やらて身を思ひしろ雨にたに人の契りのなとさはるらん

寄霜戀

をきあかす袖の朝霜消れたゝ夕をまたん契ならすと（はイ）

寄霰戀

身をくたく思ひの數の玉あられなみたそへてや音に立まし

寄雪戀

おなし世にふるを頼みの契たに猶白雪の消かへりつゝ

寄稻妻戀

きても猶ほとなかるへき契をやかれてみせたる宵の稻妻

寄曉戀

つれもなき有明の月を別路のつらき限に誰定めけん

寄朝戀

おもかけに枕ならへてまたやねん朝の床のあかぬ名殘を

寄晝戀

暮をさへ待えぬ身とや鳴海かたけさひく鹽の跡のひるまに

寄夕戀

うかりける契りは秋の夕まくれ我身ひとつにもの思へとや

寄夜戀

あふとみる夢の契りを待夜さへたか心とてねられさるらん

寄山戀

忘しといひし契りも朝つまやこぬみの山ゝ名こそつらけれ

寄峯戀

わかゝたにこしの白峯と賴ますは雲みんとたになとか契らぬ

寄谷戀

人しれぬ影になかれて我袖の涙にゝたる谷の下水

寄岡戀

いつまてとさすやをかへのまつとも限りしられぬ身の契哉

寄杣戀

つれなしやあはぬ歎きにこりもせてつらき限りをみほの杣山

寄杜戀

忍ひかれしのたの杣(杜歟)の露とをく泪や千枝になをあまるらん

寄野戀

わひつゝも誰にいはたのをのれのみ思ふにたえぬ露の下草

寄原戀

契りしもあたちの原の黑塚に思ふ心そこめてかひなき

寄關戀

我をこそなこそといはめ契あらは關のこなたに待と知らなん

寄徑戀

ふみまよふ戀のみちには誰をかも我思ふ方のしる人にせん

寄橋戀

かこたはや人まつ袖のならはしは我爲にさへうちのはし姬

寄水戀

あふせなき身はふる河の埋れ水賴めし末もさてや絕なん

寄池戀

つらさのみます田の池のいひ出は猶あた波やよそに立まし

寄沼戀

流れ出ぬ沼のいはかきいつこえて水の心の底をしらせん

寄江戀

思ひ出よひたの細江のひたすらに身を捨舟とくたしはてすは

寄瀧戀

せきあえぬ袖の涙をそれとみよ衣の瀧を人し尋れは

寄河戀

流れての世をも賴ますいつみ川いつみんとたにしらぬ契りは

寄淵戀

淺き瀨に立名やいつこ泪河ふかき思は淵となる身に

寄瀨戀

思ひせく泪もくるしはや川の瀨に立ほとの袖はしられと

寄湊戀

もの思ふみなとのを舟いて我をこかれわふとも人なとかめそ

寄海戀

うき中はいかになるをの沖津波しらすよよその立居隔てゝ

寄浦戀

よそにみて歸る藤枝のうらみわひ波をりかけて猶やしたはん

寄濱戀

いつまてか契もなみにしほれまし身はうと濱の疎くのみして

寄礒戀

逢はてぬ契をかけていたつらにつもるとしまか礒の白波

寄渚戀

逢ことはいつとなきさによる波のうらみて歸る身ともしらすや

寄崎戀

つゝみかれうち出むをもいかゝ崎契り定めぬ波の枕に

寄島戀

あた波のたつをゝしまの海士衣ほしあへぬ袖や終に朽まし

寄潟戀

しゐて猶まつともいかゝいはみかたさりとて波の思よらすは

寄泊戀

舟路にはよるのとまりもある物を思はぬ中そ猶こかれゆく

寄渡戀

契りしにあらすなるとの舟人よ又いつくにかよるへとふへき

寄岸戀

いつまてか袖になかるゝ河岸のをとせぬ波をかけて忍はん

寄石戀

うき人の戀にちからを合せなはちひきの石もやすくよりてん

寄巖戀

我戀の行衞よいかにをとめこかなつる岩ほもかきりこそあれ

寄砂戀

長濱のまさこなりとも我中のつらき數にやをよはさらまし

寄田戀

かりそめと思ひなはてそ秋の田のほに出て結ふ露の契りを

寄都戀

おりえてもまたみぬ花の都人ゆるすかさしをいつと頼まん

寄禁中戀

いかゝせん人もあやしとみかき守衞士のたく火の類なる身を

寄社頭戀

ゆふかつらなひかぬ中にふして思ひおきて幾夜かあけの玉垣

寄寺戀

いつはりと思ひなからの古寺にゆふへの鐘を猶やたのまん

寄里戀

いたつらに迷ひはつとも僞のつゝきのさとの名をはたのまん

寄庵戀

木のもとにかりの庵を結ふ身も契あれはそ人はとひくる

寄門戀

待夜をはいつとさしても杉の門唯いつはりのしるしはかりか

寄戸戀

まつとは思ひたえたる槇の戸に心うこかす風そとひくる

寄墻戀

あれよ唯よしやあしかき何かせんま近くとても人のとはすは

寄笆戀

かひなしや待にこぬよの入計りとはてまかきを山とのみ見て

寄庭戀

我のみとふみこそ分れこぬ人を待あらましの庭のよもきふ

寄井戀

山の井のあかぬ別もえそしらぬ結ふもあさき中の契は

寄屋戀

人しれぬまきの板屋は音もなし我袖はかりしくれふる比

寄柱戀

おもかけは猶たちなるゝ槇柱いかなるふしに遠さかりけん

寄簷戀

知せはやわかみ時雨の隙なさをしのやの軒のしのひ〳〵に

寄窓戀

あくるをもしらてやまなんかきくらす泪の雨の窓をうつこゑ

寄床戀

我またぬ人の秋のみくるよひの床は草葉の露そひまなき

寄閨戀

歎かしな人のこぬ夜のいつはりはわかならはしの閨の獨りね

寄隣戀

身を秋の草のまかきを隔にてなちかき中と見るかひもなし

寄簾戀

待としれ人はゆるさぬ玉たれのひまもとむへき風のたよりを

寄初草戀

むすふへき契りは露の言の葉もまたいひしらぬ野邊の初草

寄忍草戀

泪せく袖にも草の名をかりてしのふにすれる色なみたれそ

寄忘草戀

忘れくさたれとる道のしるへせよ心のなひく色はなくとも

寄思草戀

ふかゝらん色ともえやは思ひ草かりそめなりし露の契りに

寄下草戀

音立てぬおとろか下のかくれ家を風につたへん言の葉もなし

寄月草戀

たかかたに思ひうつりて月草の花ならぬ身を忘れはつらん

寄葵戀

うき契二葉にかけしためしをはめくりあふひの名にも頼めし

寄菖蒲戀

かくれぬにおふる菖蒲のあやしとも心ひかすは誰かとかめん

寄薦戀

つけすともいもしるらめやこも枕獨りかりれの露のふかさ

寄菅戀

さりともと岩もと小菅れをふかみ結ふかりれ（契イ）の末はみたれし

寄葛戀

風わたるみれの葛はのよそまてもあまる恨の色はみゆらし

寄萱戀

露ふかき野邊のをかやの下おれてうきに亂ると人にしられし

寄淺茅戀

露いまの契りもいさやあたにのみなひく淺茅の末をしられは

寄蓬戀

ことのはのかれぬはかりを蓬生の露の契と頼みはてめや

寄芝戀

分まよふ袖にも露はみちしはの風まつほとの名をはもらさし

寄苔戀

しきしのひ我もれぬ夜の苔むしろ誰を松風塵はらふらん

寄蘋戀

我れのみうへはつれなきうき草の下ゆく水に誰さそふらん

寄藻戀

河の瀬に靡く玉ものさのみやはうきみかくれに亂れはつへき

寄沼縄戀

我のみか人の爲にもいたつらにねぬなはたてし池のさゝ波

寄海松戀

底まてはかつかぬ蜑もうきみるの波によりくる便りやはなき

寄松戀

戀わふる我身も人も命たにあらはと松の千代をいのらん

寄椿戀

待人もこせの春野の玉椿つらしやさてもあかぬおもひは

寄榊戀

さかきはの便しなくは神垣のしめのほかにもいかゝ尋ねん

寄杉戀

ゆるしなき關の杉村すきかねてうきなにまよふ逢坂の山

寄檜戀

つれなしとみわの檜はらの木隱もゆるすかさしを猶や頼まん

寄槙戀

槙の葉にあらそひきつる我袖や遂にしくれの色にいつらん

寄椎戀

ためしあれは人の別もしたひてん峯の椎しは葉かへするまて

寄桂戀

神山のかつらの枝もなつかしな人にあふひをかけてたのまは

寄楢戀

終にうき音にやたてん檜の葉のなれぬ契の末の秋風

寄柏戀

もらさしと思ふなみたの玉柏露もちりなは人やとかめん

寄桐戀

誰ゆへかうき數そへて桐の葉もおつる泪の雨の夕くれ

寄柞戀

心をはわれのみそめてはゝそ原うすき契りの色やみゆらん

寄櫨戀

言の葉もうきにうつらふはし紅葉はしめて秋の色を見よとや

寄楸戀

いつまてかたえてありその濱楸なひくともなき色をのみ見て

寄常盤木戀

思ひわひいとゝ身のうき常盤木につれなき色の秋風そ吹く

寄杣木戀

我心ひくにまかせて入ぬとも和泉の杣木身にはなひかし

寄宿　戀

頼むへき色こそなけれやとり木のねもみぬ中のかりの契は

寄鹽木戀

人しれす　りぬ思ひをけつかたも誰にかとはんあまの藻鹽木

寄朽木戀

ありてうきかけの朽木もくちはてぬ心の花を誰にそむらん

寄埋木戀

あふをにかへて立なは名取川よしあらはれよせゝの埋木

寄鶯戀

契りなき身を鶯の泪さへ雨とふるすに音をのみそなく（い）

寄雉戀

哀とて誰かきゝすの妻こひにかはらぬ身をも人のとふへき

寄郭公戀

待人もおなしつらさの時鳥われのみそなく夜半の忍び音

寄水鷄戀

契られは明てもまたぬ槇の戸をたゝく水鷄そ人頼めなる

寄鴈戀

たよりあらは空に傳へようき中のむすほゝれ行鴈の玉章

寄鶉戀

まつ人のかりにもこすと鶉鳴床は我身の夜のたくひか

寄鴫戀

あはぬ夜の鴫のはねかきかきたえて泪の數も我のみそしる

寄鴨戀

かゝつそよ誰か言の葉の末そとてとふにあとなき鴨の草くき

寄千鳥戀

さそふ友あらはと我も音をそなく妻とふ千鳥同し心に

寄鳩戀

開わひぬ我ゟ人まつ程そかし友よふはとの夕暮の聲

寄鳰戀

泪河うきて我身の友とたに頼まぬにほの庭のかよひち

寄鴛戀

音にたてゝわふとも知らしあふよにかへぬうきなを鴛の獨寢

寄鴨戀

思へともあふせなつみの川よとに夜なくかもの聲もなします

寄鵆戀

みすやいかにたなは離れぬ島津鳥我さへ戀につなかるゝ身を

寄鷺戀

我袖のなみたは雨とふる川の鷺のみの毛もかくはしほれし

寄鵲戀

今宵さへ人もこすゑをこえゆかはまつそとつけよ梁の鵲

寄鷹戀

我手にはなけとなかれぬあしたかの叉たか繩に心よすらん

寄山鳥戀

とはれぬを强てまつちの山鳥も猶よりかぬる音にやたてまし

寄鷄戀

待おかすなみたの數そかきりなき鳥のやこゑは鳴盡せとも

寄鶴戀

しらせはや子を思ふ鶴も夜そなく人こふる身のたえぬ泪を

寄熊戀

戀に身をすつる便もあら熊の住てふ山にふみやまよはん

寄虎戀

おしましな野にふす虎の口のはにかゝる契もあふにかへなは

寄駒戀

逢瀬なきひのくま川はいたつらになにゝか駒のかけも禁はん

寄猪戀

とへかしな臥猪のかるもかくはかりあれゆく床に物思ふ身を

寄鹿戀

しらさりき人の秋にはあひなから逢ぬを鹿のねに立てんとは

寄蝶戀

あたにのみまよふ心の花なれや我もこてふの夢の契に

寄蛛戀

夜比へてくる年なくはさゝかにのいとゝ細みも影やはなれん

寄蛙戀

袖にせく涙を水としられはやすまてかはつのよそになく覽

寄螢戀

時わかぬ我思ひをはいかゝせん澤のほたるも夜そもえける

寄蛬戀

思ひある枕をよきよきり〳〵すわれなく聲と人もこそきけ

寄松虫戀

音にたて丶誰をまつ虫わひぬらん同し心の友ときくまて

寄鈴虫戀

ふりいて丶我もやなかん鈴虫の聲におほする思ひなりせは

寄織促戀

なみたせく袂くちなは我にかせはたおる虫のしのひ〳〵に

寄蘭戀

しらせはやこれを便にひき蘭の二こもりする中もある世に

寄我栖戀

今はた丶藻に住む虫のうきしつみ人をうらみぬ浦風そふく

寄玉戀

おろかなる袖の涙といひなさは玉と見えてもかひやなからん

寄鏡戀

みせはやな人のむかへる増鏡わかなきこふる影をうつして

寄匣戀

うき人のかたみに殘す玉くしけ我涙をやこめて返さん

寄櫛戀

いつまてとさしてもいはし逢ことのつけの小櫛の朽むかきりは

寄鬘戀

末かけていか丶頼まん玉かつらすちことになる契なりせは

寄元結戀

契ある初もとゆひと頼むより末の心もとけさらめやは

寄枕戀

思ひねの夢の契りはしろとてもなにか枕の世にもらすへき

寄席戀

共にねしかたみはかりの菅むしろしきて待夜と人やとかめん

寄衾戀

いか丶せん獨ふすまをかたしきてあかしかねたる夜の思を

寄衣戀

なはかりを頼む忍ふのすり衣なをそ涙は露とみたる丶

寄裳戀

忘れめやあかものすそを引わかれ又もきてみぬ妹かすかたを

寄紐戀

結ひおく契りもいさやいれひもの同し心にとけて見えすは

寄帯戀

めくりあふ限ありともうつろはん花田のおひの末は頼まし

寄書戀

よをおしむわかれにかへてけさは又あくるをいそく人の玉章

寄繪戀

おもひせくたきもあらはにみゆる迄おつる姿を何うつしけん

寄硯戀

まえかへり猶玉章にかきくれてなにと硯のみつのうたかた

寄筆戀

かきやらんかひこそなけれ筆の海をくみても人の思知らずは
寄笛戀
たつれはやなく音をそふる笛竹もふくこより風のたより有やと
寄箏戀
たえはてぬ契にかけてつれもなき玉のを箏の音にやたてまし
寄弓戀
をしてしもえそひきとめぬ梓弓かへる〔こ脱歟〕いそくこゝろつよさは
寄箭戀
なき名のみおつるかるやのかず〳〵は言盡すべき限ならぬを
寄扇戀
今宵こん人にあふきの風の音はしのひ〳〵のれやになくさむ
寄簑戀
かひなしやうき名はかりの隠簑きてもみをしる雨のはれすは
寄笠戀
つゝみえぬ涙は雨にまさるともたれかみかさの影にかくれん
寄糸戀
あふをなかきりとはかり白糸のふしある中は猶やみたれん
寄錦戀
思ふとちぬる夜なりせはから錦それもたつ名を猶や惜まん
寄挿頭戀
頼まれぬ色にめてゝもかひそなき人の心の花のかさしは

寄手向戀
紳はまもうけしとそ思ふ泪せくつゝりの袖をきりて手向けは
寄秡麻戀
あた人の引手あまたの大麻はよるせとみるも又やかはらん
宿木綿戀
ゆふかつらさていつまてか榊葉のなひかぬ色にかけて戀まし
寄四手戀
ゆふしてのなひかは人も靡くやとつれなき中を神にまかせん
寄注連戀
神も又うくるためしをひくしめのたえぬ契りにかけて祈らん
寄車戀
廻逢んためしともなれ小車のわきてはいはすしるへせし世を
寄舟戀
ふかきえにあらぬ契の末もうし芦間のを舟さはりつゝのみ
寄檝戀
あふをもあら磯波のうき舟はかちかくすへき頼みたになし
寄帆戀
あふをなかたほにかけて行舟は風の心もうたかはれつゝ
寄碇戀
身をうらのあまの小舟のいかり繩いかなるゆへか戀は沈まん
寄笘戀

波枕うきねもあかぬ契あらはあけゆく笘のひまやうらみん

寄網戀

人知らぬ袖のうらはに引あみのめにたまらぬは波か涙か

寄網戀

ゆくゑなき思ひの綱をよる／＼はたえぬ頼みにかけてまつ哉

寄縄戀

我戀のくるしき程にくらふれは長くもあらしあまのたくなは

寄泛戀

定なやあまのうけなはうきてのみ思ひよるへも知らぬ契は

寄筏戀

暮をまつ契りもいかゝ筏しのかれてしられぬせゝのさはりは

寄篝戀

涙川我身にきえぬかゝり火は人のうきせにもゆるなりけり

寄澪標戀

なにはえやなに中々の身をつくし頼むしるへもなくて朽なは

寄貝戀

あひ思ふ契なきさのうつせ貝むなしき波にうきしつめとや

寄斧戀

まよひいる戀の山路はをのゝえもとらて袖のみ朽やはてまし

寄笨箒戀

つゝむとも色にそいてん花かたみしけき人めにあまる思ひは

寄燈戀

もえわふる身は燈火の消るまをまたてや人のそむけはつらん

寄鐘戀

あちきなくうき世の外の鐘をさへ人まつ宵のしるへにそきく

雜二百首

山榊

神かきのめくみをそへて三笠山こたかくなりぬ蔭の榊葉

嶺椿

いく世とも白玉椿峯たかき影をは君にならへてそみん

澗槙

峯たかき巌路を行は谷陰の槙の梢をふもとにそみる

麓柴

山人もわかすむ庵のたよりとやふもとのま柴かり殘すらん

杣檜

杣ひとのおらぬかさしやこれならん宮木にもるゝ峯の檜原は

杜柏

里遠き杜のかしは木人はこて風のみならす音そきこゆる

岡椎

ゆふかくれかたをか野邊の椎柴は神山よりや種をまきけん

濱楸

あま人のかさしと頼む濱ひさき久しくたてれ浪はかくとも

磯松

いくちよと君かためしにひく鹽もさしての磯の松はしるらん

門杉

うらやましうきよをよそに杉の門老の身誘ふしるしともなれ

窓竹

軒の松かきねの草もそれなから友とは窓の竹をこそみれ

籬草

朝みとり垣根はかりにみし色の花の千草となりにける哉

庭苔

庭の面のまさこはかはる色もなし垣根はかりの苔ふかくして

簷忍草

おのつから草の庵となりぬへし軒のしのふのひましなければ

岸忘草

おろかなる身をわすれ草年をへて猶みち頼む住吉の岸

野篠

ゆけは袖とまればまくら露ちりていくか分けん野ちの篠原

路芝

しけりても末葉みしかき芝草はゆきゝの道にさはりしもせし

沼芦

折節のうつるもしらぬかくれぬにいかてか芦のほには出らん

江菅

行かへる入江の舟のあとはかり殘る眞菅や猶しけるらん

河藻

河なみの花も常盤に賴らし春秋しらぬせゝの玉藻は

名所山

いつかさて行てみるへきあらましも思ひたゝれぬ富士の煙か

名所嶺

萬代を君か爲にそまつときくいなはの山の峯もはるかに

名所岡

椎柴の梢もみえす片岡のむかひの峯は雲にかくれて

名所杣

梓弓なにおふ山の杣木こそいるよりやかてひくとみえけれ

名所杜

木すゑさへ老木となりて身の上にきくも浮田の杜の下草

名所野

春の日の名におふ野邊のひかりより秋も惠の露はかはらし

名所原

名にたかきみかきか原は秋風の吹しく露も玉とみゆるし

名所關

もらすともよしや逢坂都よりちかき關路は猶そのとけき

名所路

高島や夕風たちて旅人のかちのゝ道に袖かへるみゆ

名所橋
浪のうへを渡るはおなし名に立てと棹こそさゝれさのゝ舟橋

名所池
こほる夜や床寒からしあし鴨の波にやとりをかるの池水

名所澤
月殘るふしみの澤の明ほのに涙を誘ふ鳴もなくなり

名所沼
山の井に影みる月や尋ましあさかの沼は草ふかくして

名所瀧
たちぬはぬ水のあやさへ一村の雲間にみゆる布引の瀧

名所河
山おろしに煙の浪やこえぬらん渡るせくらきふしのしは川

名所海
色らなきあまの衣にかさぬらしかとりの海の沖津白波

名所湊
あま小舟いまやよすらし夕日さすかけのみなとは浪靜なり

名所湖
鹽くますみるめもからぬしかの浦になにかは蜑のすさみ成覽

名所浦
須磨の海士の夜の苫やに燈す火は鹽やくよりも風やいたまん

名所濱
大友のみつの濱松うちなひき誰まちこふる風のひゝきそ

名所磯
沖に出る舟路もさそと風吹は猶こゆるきの磯の白波

名所汀
君か世にひろふ渚の玉しあらは光そゝはん和歌の浦波

名所崎
追風に南の海は雲晴れてゆらのみさきを出る舟人

名所島
涙そなを心ありけるあまのすむ苫やもあれぬまつか浦島

名所潟
猶も世をうなかみ潟のおきつすに朽すや殘るあまの捨舟

名所泊
松風の音さへかよふからとまは心ひかるゝとまり成けり

名所渡
鹽風もはやくなるとの渡し守かちとるまなく舟出すらし

名所田
幾年をふるのわさ田と過しけん昨日のさなへ今日の稲葉に

名所里
うきともきかてとをちの里ならは行てや人の心やすめん

名所市
あき人のたつ日ならては駿河なるあへの市路に誰かあふへき

羇中山

ゆくさきも跡も木隂に分暮ぬいつくかなかはさやの中山

羇中嶺

暮かゝるみねの日影もまてしはしふもとの里にやとりとふ迄

羇中野

やとゝはんゆく末のみか過きつるあとたに遠き武藏野の原

羇中原

露をはさのみ日數もへたてぬに袖こそぬるれ野ちの篠原

羇中關

都出し花のたもとの旅衣雪をそはらふ白河の關

羇中路

とにかくに故里とほくなりにけり夜の夢路もけさの山路も

羇中橋

遠くともよきてそゆかん何故かあやうき道に木曾のかけ橋

羇中河

ゆく末の宿をはとはて隅田川すむなる鳥の名を忍ひつゝ

羇中湊

きのふきて露分きつる我袖のみなとの波にまたやしほれん

羇中海

風吹は高津の海の沖津波暮ぬささにやとまり定めん

羇中湖

舟出す程なしはしのやすらひにあかすそみつる辛崎の松

羇中浦

風あらきあまのとまやは有なからと浦まてもいそく旅哉

羇中濱

さむしろか草の枕かいつれともわかておりしくいせの濱荻

羇中磯

風あらき磯邊の波のうつゝとも夢とも分ぬ夜半のかりふし

羇中汀

舟もなくやともなきさに行くれぬ波を友にて立やあかさむ

羇中島

暮てかる宿をゝしまのあま人もけふ所せき波をよりくる

羇中潟

里遠し誰かは宿をかすゐかた霞ひはるかの夕暮の空

羇中渡

暮ぬまに渡すゑいそけこゝにしも宿をうるまの波ならすは

羇中泊

風にのみなをや舟路もまかせましこゝそ泊と人し告けすは

羇中里

けふは又暮はてすともいさゝらは里ある方によりてとまらん

山家春

山ふかみ朽木のかけの柴の戸は葎りたれてや春もきぬらん

山家夏
さのみかく深き山路の松の戸は水鶏もまれにきてたゝくなり
山家秋
さてもなほきくそわびしき山里は浮世の外の秋の夕風
山家冬
くま木こる人のあとたに山里は垣根のほかの雪にこそみれ
山家曉
鳥の音はよそのうき世に聞すてゝ鐘をのみまつ山下の庵
山家朝
山陰はあくるも遅き松の戸にさすや朝日の光をそまつ
山家夕
暮ぬとも柴のあみ戸はさゝしたゝ誰をかいとひ誰をへたてん
山家夜
まれにみるうき世の夢もさすかはや覚るそやすき峯の松風
山家風
身をかくす人をあるしとしられはや風のみやとる松の下庵
山家雲
袖の色も猶山ふかくすみ染のゆふへの雲に立やなれまし
山家煙
まはらなるしはの庵の風をいたみ猶たてかぬる夕煙哉
山家雨
さらてたに露けき山の村時雨草の庵はよきてふらなん
山家路
山里はあまたもみえぬ道なれはさすかに草もうつまさりけり
山家水
谷水を遠くくむにそ峯たかく結ふ庵はくやしかりける
山家庵
杉の庵に松の柱をたてしより風もいとはぬ程はみゆらん
山家草
山里に花さく草はうへもをかし心の色のうつりもぞする
山家苔
庵ふりて猶しきたへのとことはにいはね露けき苔莚哉
山家木
雨露も中〳〵もらぬ庵なれや松蔭しけき枝をかはして
山家鳥
谷陰にはつかにわたす芝橋をあはれとみすや嶺のかさゝき
山家虫
世をすてゝ人もこよとや山里に猶も友まつ虫のなくらん
田家春
ますらおか花に心をつくるてふ門田　遅　春のなはしろ
田家夏
種まきし門田のしめを引かへて千町に廣く早苗とるなり

田家秋

ほに出るころとみしより守初て田面の庵そしけく成ぬる

田家冬

かれる田は木葉はかりの風さえてまれに鳴子の音たにもなし

田家風

秋風のたゝく門田も明ゆけは日影さしそひをしねほすなり

田家雲

小山田は稲葉の雲の衣手をかたしく比や夜寒なるらん

田家煙

山田もる庵かすきみの夕けふりさひしくみえて秋風そふく

田家雨

秋過はまた守すてん小山田に露けくとてもよしや村雨

田家鳥

心ありていなおふせ鳥もき鳴なり門田かるへき程やしるらん

田家虫

守庵にたかて友なへきり〳〵す稲葉も秋の草ならぬかは

春夜夢

花をみる夢の枕の風の音にさむるやすかてちらす成らん

夏夜夢

明ぬまにみるも見るもみしかよの夢をは夢といふ程そなき

秋夜夢

秋の夜の明るかきりの夢ならはほもろこしまてもみてや歸らん

冬夜夢

何としもおほえぬ夢のむすほゝれとけてれぬ夜の霜の寒けさ

曉夢

結ふそようきよの夢のさめて後其曉にあはん契りを

短夢

きのふけふ過行とも遠き世も見るは程なきうたゝれの夢

夢驚

あたにみておとろくかひもなき物はまとにさめぬ夢路成けり

山眺望

みすもあらすみもせぬふしの山なれや雲に煙のたつ計にて

野眺望

行末をとへと白雲はる〳〵と山こそみえね武蔵野の原

海眺望

いこま山へたつる雲の波はれて吹やなにはの沖津鹽風

雨中懷舊

花の露紅葉の雫さま〳〵に過し世思ふ雨の夕暮

深夜懷舊

更ぬるか昔かはらぬ友とみる月さへ袖を遠さかりゆく

草庵懷舊

いにしへを友に忍ふの草の庵軒端ふりてそ猶しけりゆく

閑居懐舊
忘なんとしけかりしいにしへを思出るもうき世ならすや
夢中懐舊
過し世の夢さへ夢にかへりきて忍ふ心もうつゝならめや
寝覺懐舊
夢にたにかす〳〵みつる古はつきせぬ物を老のねさめは
懐舊涙
めのまへのうきをたにこそ捨へきに昔をかけて落る涙か
獨懐舊
我のみとまよふにつけて忍ふ哉たゝしかりつる道の昔を
老後懐舊
かへらすよ老木の松のふるき世を忍ふも遠き和歌の浦波
懐舊非一
かす〳〵に思ひわするゝ隙そなきわか古も人のむかしも
寄日述懐
春の日の光にもれぬ頼みをはあふく心にまかせてそみる
寄月述懐
我身世に住とはかりの月をみて入へき山もしらぬつれなさ
寄星述懐
君守るとしの星を仰きても千代とそいのる身をは祈らす
寄風述懐
吹たえぬ其名はかりの家の風世に聞えてもかひやなからん
寄雲述懐
あらましはかくてもいはし峯の雲へたつる山にすまぬ物ゆへ
寄煙述懐
うらみしな蜑のしほ焼けふりたに思ふ方にはたゝぬうきよを
寄露述懐
露の身とおもひはすてし今も猶おり〳〵なるゝ玉のみきりに
寄雨述懐
いたつらに有ふる身にやたくへましそての雫もよその時雨も
寄霜述懐
ふりはてゝ霜のしたなることのはゝかき集めても何にかはせん
寄霧述懐
霧はなを古木の梢をうつめともかくれもやらぬ老そつれなき
寄山述懐
何ゆへかそのかみたかき位山よゝをへたてゝくたりきぬらん
寄関述懐
君か代におふとはかりの老の後せきちかひある名を留めはや
寄道述懐
まよふとてとふへき人も今はなしよし敷島の道にまかせん
寄橋述懐
我身こそしたゆく水とくたりぬれ人は昔のまゝのつきはし

寄沼述懐

雨をまつ岩かき沼のむもれ水それもすむよにあはさらめやは

寄江述懐

よしあしといふにも絶ぬそのはゝ入江の涙にくたしはてゝよ

寄河述懐

うき世とはさすかに誰もおもひ河浅しや深しそれそかはらん

寄瀬述懐、

さは河の末かすゑなるうきせまてのこころみくさの哀ともみよ

寄海述懐

沖に出いそになれぬる名はかりは立てとしふる和歌のうら波

寄浦述懐

ことうらに心はよせす住よしの松にねかひをかくるしら波

伊勢

神路山うへなき峯をいつる日もいく千世さして君まもるらん

石清水

秋すきて霧はれゆけはいはし水君か千年そ汲てしらるゝ

賀茂

神山やとしにひとたひあふひ草かけて幾千代めくみそふらん

松尾

君か代にいま一しはの色そひぬちとせをかけて松の尾の山

平野

敷島の道はなにはの春よりそ青葉の花もさくやとはみし

稲荷

いなり山さかやく御代は長閑にて神も願やみつの玉垣

春日

かすか山こたかき峯の榊葉に猶そさかゆく影は見えける

三輪

たくひなきしるしを三輪の山本に杉こそ神の宮はしらなれ

布留

みしめなはかけてもしらし行末はさてもいく世かふるの神垣

大原野

神世より猶ひさしかれ大原やをしほの山の松のゆくすゑ

吉田

ことしまたさらに吉田の宮柱たてゝかいくよ君まもるらん

住吉

道まもる神とはしるし住吉の松を高のそのはにして

日吉

くもりなき山はひよしとあらはれて都をてらす名にそ立ける

梅宮

春をへてなにあふ梅の宮はしら立よるかけもいくちよかへん

祇園

わきて身に頼むかけある神の苑道をも世をも守れとそ思ふ

北野
霜か為うけよ北野の松陰にひとり手向る千代の言の葉
貴布禰
き寄河もにうつもろゝ言の葉を玉となすまて猶や祈らん
出雲
たのもしな道をひろめし神代より千代をこめたる出雲八雲垣
玉津島
年たかき波のしわにはまもるふともちあはれみかけよ玉津島姫
熊野
道を思ひきとりをいそき三熊野の神に二世を猶いのる設
如是相
ありとみる心はたれそ増鏡そこなる影もまさならぬを
如是性
風にはれ雲にかくすも何ならす光はもとの月のみそすむ
如是體
草も木も露のめくみをうけぬれは又春秋のすかたとそなる
如是力
敷島の道たかりせは天狗もなにのちからにうこきたにせん
如是作
仙人のひくとみしよりなほき木はつくろ心もやすくそ有らし
如是因
いかにしてたか世に願ふ種なれは岩にもやすく松はおひけん
如是縁
難波かた芦間も同しえにしあれはさはりはゝてす舟やよる覽
如是果
時しあれは雨に花さく木々も又つゐには露の身となりにけり
如是報
色ふかきみのりの花にあへる身もたゝなほさりの報ならめや
如是本末究竟等
根にかへり梢にさくも花はたゝおなし色香やかはらさるらん
地獄界
しつむへき後の浮世もかゝり火の移りてもゆる影としらすや
餓鬼界
いかにして身をやく業と成ぬらん手にくむ水も拾ふこのみも
畜生界
わたの原千尋の底にすむ龜もうき木にあへる頼やはなき
修羅界
身をすつるならひもつらし梓弓たけき心のひくにまかせて
人界
後は又悔しといはんかひもあらし此世にさとる身をし知すは
天界
花かつらいく世かけてもかひなしや天の羽衣つゐにしほれん

聲聞界
うへもなき言のはのみや聞えけんわしの高峯の松風の聲
縁覺界
風吹は花も紅葉ももろき世をさとる心や色にいてけん
菩薩界
身にかへて人をみちひくつなて舟類む鹽路は末もまよはし
佛界
かきりあらは我とさとりをみつの身の外に佛を何か尋ねん
寄天祝
いく世とも岩戸の關の明しより天津ひつきそ限りしられぬ
寄日祝
空たかくてる日をみても知られけり代々にこえたる君か光は
寄月祝
夜の空おさまる御代はのとかにてゆくも遲き月を見る哉
寄星祝
ことし又七の星をまつりてそ君かやちよの數は見えける
寄雨祝
民もさそゆたかにうけん春秋の時につけたる雨のめくみを
寄風祝
神代より吹傳へたる道なれはやまとことはの風もたえせし
寄國祝
吹風もわきて治る芦原の國の恵や世々にこゆらん
寄郡祝
ちとせへん鶴の郡のみつきものつきせぬ數を猶やはこはん
寄都祝
九重は花と月との都にていく春秋かひかりそふらん
寄道祝
むかしより聖のみよのまつりことたゝしき道は今もかはらす
寄水祝
君をのみいのる横川のあかの水汲て千とせの數はしるらん
寄巖祝
君かへんよゝに比へは乙女子かなつるいはほや早くつきまし
寄苔祝
山人の苔のむしろも君かへん代々の數にはしかしとそ思ふ
寄竹祝
久にへて猶この君の世とゝもに心をかはせ庭の呉竹
寄松祝
四方の山いつくの浦の松かえも君にあひおひの影やみゆらん
寄椿祝
君か代にあへるみきりの玉椿千たひや影のあらたまるへき
寄榊祝
あまてらす玉くしの葉のゆふかつら神風しろく世に靡くらし

寄杉祝

幾ちよか神のめくみも大ひえやをひえの杉のときはかきはに

寄鶴祝

和歌の浦にちとせをかけて友鶴のこゑ〳〵契る末のひさしさ

寄龜祝

萬代をたもつ藥も龜の上の山よりいまそ君につたへん

遵千題千首和歌者飛鳥井亞相詠草也。凡一帖六帖。幽齋以印本無一字差謬令繕寫畢。可爲證本乎。

元和五年己未孟春藤惺窩在ケイ

右飛鳥井（雅郷）榮千首以屋代弘賢本校合畢

〔右榮雅千首更以千首部類加校合了〕

以宮内省圖書寮本一校畢　芝　葛　盛

大正十二年八月二十日印刷
大正十二年八月廿五日發行
大正十四年六月十五日再版發行
昭和十七年十一月二十日六版發行（四〇〇）

不許複製

（文協會員番號 115016）

（出文協承認 ア 320118）

發行者　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會代表者　太田藤四郎

印刷者　東京市豐島區西巣鴨二丁目二五七四番地
丹羽誠次郎

印刷所　東京市豐島區西巣鴨二丁目二五七四番地
東東一八五五　忠義堂印刷所

發行所　東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七・電話大塚七一一八

（配給元　東京市神田區淡路町一ノ九　日本出版配給株式會社）

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03043 3544